現代日本文學全集



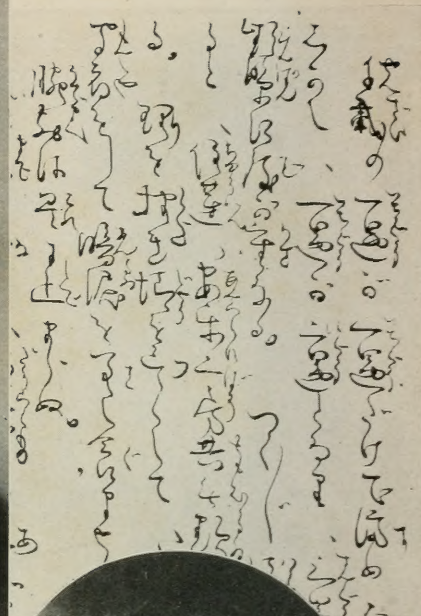
杉浦非水装幀

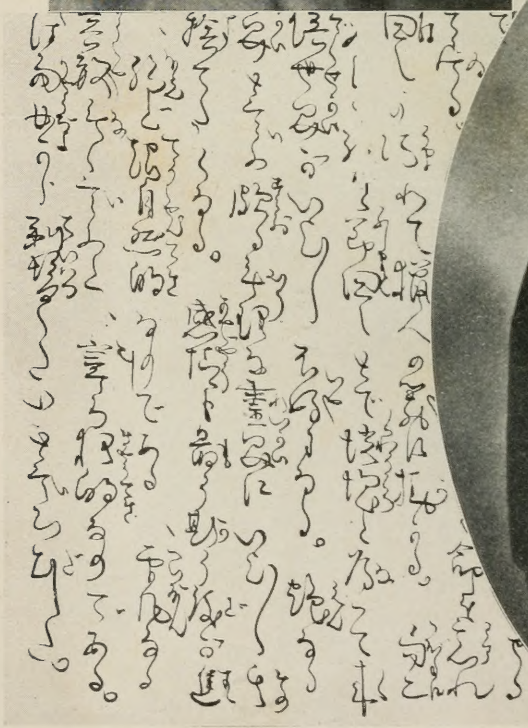
小杉天外集

山田美妙集

改造社版









小杉天外氏の近影(上)と山田美妙氏の遺影・筆蹟

「山田美妙集」目次

小杉天外集

石年らす河る女
はれしきとへん尾

三小

初すがた

我はわが嗜好を滿たさんとして詩を作らざるなり、況や評家の嗜好に投ぜんとしてをや、況や讀者の嗜好に投ぜんとしてをや。嗜好は杯上の美酒の如し、愛する者は喜んでこれに就かん、しかも愛せざる者は、其の香を聞いて先づその席を避けんことを思はずんばあらず、我は、美酒の好惡兩者の口舌に適することの、反つて彼の香なく味なき一椀の淡水にしかざるを思ふ、我はわが詩の寧ろ淡水たるに安んず、其の美酒の如くなるをば願はざるなり。

ひそかに思ふ、藝術の美の人を感ぜしむるや、宜しく自然の現象の人の官能に觸るゝが如くなるべし、普遍ならざる可からず、平等ならざる可からず。

我は、讀者のわが作に熱すること、癡女の養夫の事に悲嘆するが如きを欲せず、又わが作に冷なること、行人額上の黶子を望むが如くなるをも厭はず、我はたゞ讀者の空想をして、讀者の官能が猶ほ實世間の事に感ずるが如く感ぜしむるを以てわが作の能事足れりとなさんのみ。

これ初姿起稿の當時わが心頭に往來したるもの、卽ち錄して卷頭の辭となす。

庚子八月　　天外

第一

節は十月十三日、午後の四時と云ふ刻。

「行つて來らツしやいまし。」と云ふ男女四五人の威勢の好い聲に送られて、福草履を引掛けたまゝ、摺足の小股走りに春木座の茶屋巴屋を出て來た束髮の女客がある。

顏色の蒼白い、脊の高い、瘦ぎすな三十前後と云ふ年輩であるが、齡には釣合はぬ大柄な紋織御召の二枚小袖に、黑縮緬の長羽織をぞろりと着流し、黃金の指輪の二箇も輝る左手には、銀金具の縞珍の手提鞄を提げてゐる。

「おゝ寒いことよ。」と戸外へ出るや否や、束髮は態とらしく云つて、其の瘦せた肩を萎めた。

「へえ、二三日此方、滅切りお寒くなりやした。」と一歩前に立つた茶屋の若衆は、仕着せ布子の身體を、お愛想にぶる／＼と顫はせたが、落掛つた七三の端折をぐいと絞上げて、卒に氣の着いた樣に、「手前が持ちませう。」と一つお叩頭して、束髮の手提鞄を持たうとした。

際しも强い風がまた吹通うた、砂塵は黑煙の樣に街に漲つた。束髮ははたと步を止めて、「あらッ！」と仰山な聲を出して、若衆の手に抱縋つたが、ぱッと卷じり揚つた着物の下から、燃ゆる樣な緋縮緬の腰卷の露はれたのを隱さうとも爲ずに、はた／＼と木戸口に駈込んだ。

屋内は既う夜の樣である。入口には、茨城縣水害慈善演藝會と記した長い立看板を立ててある。風の吹込む毎に「ぼゝぼ、ぶぶゝゝゝ」と音を立てる上り口の瓦斯の焰の下には、胸に紅い徽章着けた羽織袴の、頭髮を綺麗に分けた男が、卓子を前に控へて、入場切符の受取役をして居る。

第二

束髮の女は、茶屋の男の導くまゝ假花道から場内に入つたが、其入ると同時に、崩るゝ樣

な拍手の音が起つたので、思はず立止つて愕然する場内を見廻すと、

「あら、玉枝樣玉枝樣。」と呼びながらむツくと起上つたのは、高土間の眞中程位に、其の夫らしい髭のある男と並んでゐた、二十三四の丸髷である。

「おや、國さん其處なの。」と束髪は莞爾して、左右の人の肩を押分けて、危險相に細い欄木を渡ると、背後から茶屋の若衆が、抱へる樣に手を擴げて、

「へえ、少々御免。」と威勢の好い聲で道を拂つて呉れた。

「おゝ怖かつたこと。」と束髪は、丸髷の出した手を力にとんと席に下りるや否や、あどけ無い調子で云つて、四邊をきよろ〳〵と見廻した。

「大層遲かつたですなア。」と髭のある男は後に引退つて、束髪の座蒲團を前に直した。

「然うでしたか、既う餘程過ぎて？」と束髪は遠慮も無く男の前に坐つて、「出ようと思つてる處へね、生憎長尻のお客來でね……。本當に厭になツ了つてよ。」

「おや、左樣でございましたか。」と丸髷は素早く茶を汲んで出しながら、「玉枝樣、今ね、大層面白うございましたよ。」

「然う？ 何？」と切りと四邊を見ながら云つた。

「或家の息子さんがね、餘り遊び過ぎましてね、船頭に成るツてお噺なんですよ……。おほゝゝ。」と想出し笑をした。

「落語家なの？ 私落語は嫌ひ！ だツて下らないもの。」と云ふ時、彼方此方でぱち〳〵と手を拍つ音がしたので、玉枝は初めて舞臺の方に面を向けた。

舞臺の後面は一圓に紅白のだんだら幕で圍ひ、下手には海老茶色の羅紗を被けた卓子を据ゑて、見事な草の生花を載せてある。床は舞臺の眞中に一段小高く設けられて、是には朱毛氈を敷詰め、左右には眞鍮の燭臺を列べてあるが、日覆から吹下す風で、燈火は切りと搖めき、蠟は熾に流るゝのである。

今しも高座に見はれたのは落語家であるが、玉枝は之には耳を傾けぬ樣子で、土間も棧敷も溢るゝばかりの客を見廻して、

まア、大した入りだことねえ！」と呟く如くに云つたが、自分から二間ばかり前の新高に、瘦せた胡麻鹽頭髪の紳士の、瞬きもせず自分を視詰めて居るのに氣が着くと、吃驚した樣に顏を背向けて、「國さん、大變な奴が來てるよ。」と低聲に力を入れて云つた。

「え、何です？」と落語に聽惚れて居た丸髷は玉枝の顏を覗いた。

「ほら、前の方を御覽よ……。否え、其方ぢやないよ、彼方だよ。」と玉枝は面を仰げずに云つた。

「何處でございます……。おや、斧岡さんが來てるぢやありませんか。」

「靜にお云ひよ、聞えると惡いぢやありませんか。」

「まア。貴女を見てましたよ、まア、ふゝゝふ。」と忍び笑をした。

「何と云ふ厭な奴だらうねえ。好色爺奴！」

「だツて貴女……。ほゝゝおほゝゝゝ。」

二人の聲が少し高くなツたので、忽ち「しイッ！」と背後から叱る者がある。お國はさツと赤面して、其の儘口を噤んで了つたが、玉枝は其の聲の出た方をじろりと睨めて、さて退屈相に顏を顰めて、

「本當に下らないねえ。何時まで彼樣なことを饒舌つてるだらう。」と云つて、塵やら莨の煙やらが、薄い靄の樣に漂うてる間に、花瓦斯の焰の青白き光を放つてる高い天井を仰見たが、急に背後に顏を向けて、

「小川樣、既う何ですか、其の……、何がもう

出たんですか‥‥。」

「誰ですか。」と男は髭を捻りながら耳を寄せた。

「彼の、そら‥‥。大變に別嬪だッて評判の‥、そら、柳橋の藝妓の娘だとか云ふ‥‥。」

「ぢやア、小しゆんの事でせう。」とお國は口を出して、「否え、未だ出はしませんよ。」

「然う。」と點頭いて、「それぢや何は、彼の‥‥縫之助は？」

「縫之助も未だでございますよ。先刻一人、男の義太夫が出ましたけれどね、聲が惡くッて、些とも面白かありませんでしたよ。」と云つて夫の顏を見て、「何と云ひましたッけねえ、彼でも名人の中だッてぢやありませんか。」

「うーん、綾瀬太夫か。」

「然うでしたッけか、何だか知らないけど、いゝ、いゝ、しやくしやな[illegible]な爺さん！」

「然う、それから何樣なのが出て？」

「其れからですか、其れからね、清樂の合奏も出ましたね、女兒の手踊、其れから手品、それから獨樂廻し、講釋‥‥。種々なのが出ましたよ。彼のちらしを持つて來りや宜うございましたッけねえ。」

「私もね、餘り急いだもんだからね、出しといて忘れて來たのよ。」

而ると欄隣に居る商人風の男が、

「爰にありますから御覽なさい。」と演藝番組のちらしを寄越した。

「何うも有難う。」と玉枝は目許に笑を含んで輕く點頭き、例の指輪の嵌つてる手で其れを受取つた。

「玉枝樣玉枝樣」とお國は袂を引いて、「また爺岡樣が此方を見てますよ。」

玉枝は鬱陶し相に皺を寄せて、

「ちよッ、何て云ふ圖々敷い奴だらうねえ。國さん、此方へ來てお呉れな、お前さんと交換らう。」

「可哀想に、お顏ばかしでも拜ませて遣れア宜いぢやありませんか。」とお國は笑ひながら云つて玉枝と席を換へた。

「もう眞平、壽命が縮まるよ。」と玉枝も笑ひながら、羽織の裾を拂つて腰を下したが、其機に見るともなしに面を上げると、丁度假花道の上に當る前緣に、十二三許りの華美なメリンスの羽織を着た小娘と並んで、顏の蒼白い、目鼻容の如何にも優しい、十六七の少年が眼に入つた。

「おや。」と凝と眼を据ゑて、「龍ちやんぢや無いか知ら‥‥？」

「何でございます？」とお國は訝し相に訊ねた。

「いゝえね、」と云つたが、矢張り二階ばかり視詰めて、また獨語の樣に、「何うも龍ちやんの樣だよ、あら、何うしても龍ちやんなんだよ‥‥。」

「玉枝樣、何がでございます？」と話し掛けても、耳にも入らぬ樣子なので、お國も玉枝の視線を迫つて二階を見上げると‥‥、前緣は中等席で、孰れも見惡からぬ服裝をした客ばかりの間に、雙子か何か知らず、柄も井の字絣の映えぬ布子を着て居るのと、如何にも柔和な、女の樣な顏容をして居るのとで、直ぐ玉枝の視てゐる其の十六七の少年が目に着いたが、必然其れとも定めかねて、「玉枝樣、誰でございます？」

「何うもね‥‥。私は數年見なかッたけれどねえ。」と初めてお國に面を向けて、「何うも婆やの家に居た龍ちやんて兒の樣なんだよ、彼の口許の可愛いところなんか、何うしても龍ちやんに違ひないんだもの。」

「婆やッて申しますと、今の婆やでございますか。」

「いゝえサ、前の‥‥、國さんの來ない前の婆やなんだよ。」と又も二階を見上げて、「あら、彼の笑ふ樣子なんか、何うしても龍ちやんなんだよ‥‥。」

と云ふ時…、滿場どツと笑ふ聲に和して、拍手の音が宛然大きな油鍋の中に水でも零した樣にぱち〳〵と起つた。舞臺では今藝人が引込んだところで、片しやぎりが續いて響渡つた。玉枝は何と思つたか、むツくと起上つて二階を視上げてゐたが、

「龍ちやん！　龍ちやんや！」と危んでる樣な語調で呼んで見た。

二階では其聲が達かぬと見えて、是も同伴らしい櫛卷の三十幾歳と思はるゝ婦人と、面白相に話をしてゐる。うづらや土間に居る客は、皆な眼を睜つて、黑縮緬の長羽織を流るゝ樣に着た、脊のすらりとした、市松の博多の帶に紅色の帶揚を締めた、齡より若裝の玉枝を、笑ひながら眺めてゐる。

「聞えないのか知ら。」と玉枝は體裁惡いと見えて、誰に云ふとも無く此う云つたが、耐へ切れぬ樣に又一段聲を揚げて、「龍ちやん！　彼の…婆やの家の龍ちやん！」

それでも彼方は平氣で居たが、同伴の小娘が氣が着いたと見えて、少年の袖を引いて何やら耳語くと、涼しい眼できよろ〳〵と見廻し、玉枝と顏を合はせると、驚いた樣に鳥渡叩頭して、忽ち其の顏を赤くした。

「龍ちやん、好く來たことねえ。」と此方は滿面に笑を含んで馴々敷く話しかけた。

「はア。」とまた點頭いた。

「お連があるの？　此處へお出でな。」

而ると彼方ではまた叩頭をして何やら云つたが、聲の低いのと他の騷々敷いのとで聽取れぬのである。

「お出でツてのにねえ、可けないの？」と首を傾げて、「宜いぢやないか、お出でよ、此樣なに廣いんだからサ、よ…。」

「坐つてお吳んなさい。」

背後から怒鳴る者がある。高座には今新たに落語家の登つたところである。

玉枝は流石に顏を赧らめて、急に腰を屈めたが、又も二階を見上げて、四邊を氣にする樣に、細いながらも力を籠めた聲で、

「よ、お出でよ、誰も遠慮する人ア居ないんだから、よ…。」

而ると、直き後隣に居る書生風の男が、

「シイツ！」

「喧しい、すべた奴！」と正面下の大入場から咬着く樣に怒鳴る者がある。

玉枝は漸く腰を下したが、それでも前船からは目を離さずに居る。

と、此の前船ばかり視上げて居る玉枝を、物珍らし相に雙眼鏡で望いて居る二人の若紳士がある。それは、玉枝とは土間を隔てて遙かに對合つてる西棧敷の四つ目で、二人の他に誰も居らぬのを見れば、殘の人數だけの切符料をも拂つて、此の一桝を買切つたのと鑑定さるゝ。

齡は何れも三十歳位で、一人は黑メルトンの兩前の背廣に同じズボンであるが、其のホワイト襯衣の胸が、天井の瓦斯の反射で、宛然鏡の樣にてか〳〵光つてる。一人は蚊絣の大島紬の小袖に同じ柄の羽織、帶は白縮緬を太く卷いて、之に時計の金鎖を絡ませてゐる。洋服の男よりは脊も高く色も白く、擧動も鷹揚であるが、ぎうと合はせた襦袢の襟の故か、にやけた樣にも見えるのである。

「如何だい？　一寸ア好からう。」と背廣は、雙眼鏡に眼を吸着けた樣にして居る大島紬を見上げて、嘲る樣に云つた。

「もう餘程の齡だね。」と雙眼鏡を離して、「二十五だなんて云ふな譃だ、扮裝が彼樣なだから若く見えるけれど、もう彼此れ…左樣さ、もう二十七八にはなるね、大丈夫二十七下ぢやないね。」

「さう、然うかも知れんよ。勿論彼の女の二十

五は有名な物だからなア。」と片方の眉を上げて笑を耐へる様な顔をして、ぷーと莨の煙を細く出し、「一五六年此方と云ふものは、何時も二十五で持切りだからね。」

「一五年此方？　五年此方二十五？　其れぢや君……。」と大きな眼を更に大きくしたが、「ははゝゝあッはゝゝゝゝ。」と思はず聲を出して笑つて、急に手巾で顔を隠して俯向きになツて、肩まで動かして笑つた。

背廣は灰を落した葉卷を口許まで持つて來ながら、其葉卷を喫はうともせず、大島紬を默つて眺めて居る眼を切りと瞬いて、軈て對手が顔を上げて「ア、苦しかツた」と云ふ風に涙を拭ふのを覗く様にして、

「でも一寸は惡く無からう。あれで、玉代三文掛るぢやなしさ。」と喫ひも為ない葉卷の頭を矢鱈と火鉢に擦りながら、「僕は然う思ふんだがね、如彼云ふ奴に限るね、面白い口説の有る奴ア。まア彼の眼を見給へ眼を、二十五が三十五でも、まんざら捨てたもんぢや無いぢやないか。」

「御執心な事たね、ぢや早速運動して見給へな。」

「運動？　吾輩が物に為ようて日にア、運動も何もあツたもんか、何だツてもう、三日男に會はなきや大病人になるツて代物なんだからね。」

「ぢや君は、其の大病になるのを待つてると云ふ譯なんだらう。笠田君も亦衰へたる哉だね。」と云つて鼻でくゝと笑つた。

笠田と云ふのは、其様な青い雜返しなんか耳にも入らないと云ふ風で、

「何うだい、僕が一つ執持たうぢやないか。齢は少々怪しいもんだが、如彼云ふな利益になるね、君等の様な、まだ修業期の人には。」

「修業期？　修業期は酷だね。」

「酷でも修業期だから仕方がないサ。久し振で縫之助が出るツてんで、泡ア食つて本郷まで駈けて來た處を以て見れア、修業期も修業期、まだ、漸く尋常一年と云ふ處だ。」

「僕は何も、泡ア食つた覺がないね。」と笑ひながら「勿論、今麥酒を飲んだことは飲んだが。」

「だからまア、修業期なんだから、如彼云ふ凄い奴に當つて研究して見たまへよ。」と笑を含んだ脣を尖らして葉卷を一つ吸ひ、「何しろ、十五にして色に志しツて代物なんだからね。」

「十五から？　然うか。」

「然うさ、小學校に通ふ時分からなんだツてからね。」と眼を睜つて仰山な顔を作へて見せ、「其れが今以て彼の風なんだからね。何うだい彼の扮装が、赤い物づくめかなんかで恐れるぢやないか。僕は然う思ふんだが、暗い處でお嬢様て云つたら必然娘のやうな假聲を遣ふに違ひないね、まア彼の眼色を見給へ、眼色、え、如何だい、接吻なら何時でも宜しいツて顔ぢやないか。」

「妙な顔も有つたもんだ、接吻なら何時でもツて顔は何様な顔だね？」

「即ち彼の顔さ。」と云つたが、急に驚いた風に、「おや、彼ア鬼岡ぢやないか。」

「鬼岡ツて誰だね。」

笠田は雙眼鏡を覗きながら、

「やア、鬼だ鬼だ。此ア不思議だ。慈善演藝會に鬼が來るツてな初めてだ。」と獨語の樣に云つた。

「何れが。」と頸を前に伸べて、「何處に居るね？」

「ホラ、彼の妖婦の前に、綺麗な十二三の娘が居るだらう、被布を着た。」

「ん、居る居る。彼の赤く肥つた、紋付の羽織着た男と並んで。」

「然うさ、其の直ぐ隣に、胡麻鹽頭髪の厭な奴が居るさ、痩こけた顔の、ホラ、今妖婦の方を見た、ホラ。」

「あ、彼か、彼の絣の羽織着てる。ふーん。」
「彼が君、斧岡ッて評判の高利貸なんだよ。」と笠田は切りと雙眼鏡を視詰めて「何う云ふ血の循環樣で、彼奴がまた此處へ來たもんだらう。」
と云つてる處へ、フロックコートの胸に花の徽章を附けた、顏の小さい、度の强い近眼鏡を懸けた男が此の桝へ入つて來て、
「おい〳〵、笠田君。」と肩を叩いて、「外見ないぢやないか。」
笠田は背後を振返つて、
「いよー是は。」
「其樣なに夢中になッて、何を見てるんだね、些と氣を着け給へな。」
「何うしたね近頃は？」と笠田は滿面に笑を含んで、「まア坐り給へ。」
「暫く會はなかッたね、菊川以來だね。」と臀をしきりと倚せて窮屈相に斜に坐つた。
「フロックコートかなんかで、今日は滿艦飾だね。」と嘲る樣な顏をして見上げ見下し、「小說を作く樣になッたんで、些たア工面が好いと見えるね。」
「其樣な君、人聞の惡い事云ひ給ふな。」と平氣で云つたが、笠田と同伴の大島紬を瞥と見て、「此の御方は？」
「此方か？ ん、僕が紹介爲よう。」と笠田は卷莨を灰に投し、、態とらしく眞面目な顏を作り、「此方は瀧山春雄君と云つてね、京濱銀行の庶務課へ出てゐる方なんだ……。」
而ると瀧山は素早く名刺を出して、
「僕は此う云ふ者ですから、何卒。」と丁寧に頭を下げた。
フロックコートはかくしに手を突込んだが、
「僕は名刺を忘れて來ましたが……。」
笠田は皆まで云はせず口を出した。
「瀧山君、此の紳士はね、館野秋城と云ふ……左樣さ。」笑ひながら考へて、「早く云や、天下の文豪です。」
「君は可かんよ、初めて會つた人の前で其樣なに嘲弄しちや。」と額に皺を寄せた。
「はア館野樣ですか、」と瀧山は眞面目な顏をして、「御高名は豫て承はッてました、何卒、此樣な俗物ですけれど、御交際を願ひます。」
「何卒宜しく。」とフロックコートは輕く會釋して、「はア、然うですか、貴方は京濱銀行へ出て居らッしやるんですか。」
「おい〳〵、まだ他に、色男ッて云ふ大事の內職があるんだよ。」と笠田は又も口を出した。
瀧山は思はずにやりと笑つたが、其の顏を微し赧くした。フロックコートは氣の毒相に、「お互に、此樣な口の惡い友達を有ッちや往生ですなア。」と笑ひながら瀧山に云つたが、「笠田君、君、少し愼み給へよ。」
「何だ、愼め？ ふーん。ぢや、君等の方から始めて廻して貰はう。」
「何を？」とフロックコートは、又かと云ふ樣に八を寄せた。
「其の愼みをさ。」と莨の煙をぷうと天井に吹上げて、「君が十八番の、例の安物買は愼み給へ、彼ア仕舞に鼻へ來ますッ。」
「十八番は酷いね。」とフロックコートは體裁惡相に四邊を見廻した。
笠田の聲が高かつたので、隣に居る切下髮の隱居風の女と、其從者と見える頰の赤い女とが、くゝゝゝと笑出した。
「時に、安物ッて云や、小しゆんとか云ふ奴よ。」と欄に身を凭せて仰向きになッてゐた笠田は、何か大事でも想出したものの如く前に乘出して、「如何したッてんだい此の人氣が？ まア先刻、僕等が來た時、彼の木戸口の騷と云ふものは無かつたねえ、職工だか何だか知らんが、怪しげな服裝の奴等が百人許り、鯨波を作つて押寄せるぢやないか、實に僕ア一驚を喫したね。」

一體何うしたッてんだね、彼ア。」

「彼かね、彼は、此まで小しゆんの通つてた工場のね、何とか云つたけよ。」とフロックコートは首を傾げたが、「確か春日とか云ふ様だッけ、其の男がね、小しゆんの景氣を付けて遣らうてんで、中等切符百枚ッて物を買込んでね、自分の職工に勢揃ひさせて繰込ませるッていふ一件だらう、而ると君、」と云ッたが、自分の聲の高いのに氣が着いたか卒に語調を更へて、「而るとね、縫之助の贔負連が其れを聞付けて、何でも小しゆんに景氣負しちや可けないッてもんで、此奴がまた、百人許りの大連を催し立てて、詰掛けると云ふ騒だらう……、勿論、縫之助は昨日出る筈だッたが、何うした都合でか、二人とも今日一緒に落合つたもんだからね、そこで彼様な、先刻の様な衝突が起つたんだアね、何うして、今に何方か高座に出て見給へ、まだまだ彼どころぢやない騒が發生るから。」

「ぢや何ですな、雙方妨害し合はうッてんですな。」と瀧山は訊ねた。

「無論さ。」と笠田はフロックコートに代つて云つた、「だから、君は餘程確りせんけりやならないんだ。」

―何故?」

―何故もないもんだ。」と一息に打消して、フロックコートは顧み、「おい、此君はね、縫之助黨の院内總理なんだよ。」

「其様な君、馬鹿な事を。」と瀧山は顏を赧くした。

「構ふもんか、何も其様なに祕密にする事は無いさ。」と笑ひながら、「其の襦袢の胴でも見せて、吃驚させて遣り給へ。」と云つて、今度は聲を低くしてフロックコートの方を向き、「おい、此君の着てる襦袢は、中々大したもんだぜ……。」

瀧山はますます赧くなッて、

「其様な、下らん事止し給へ。」

けれども笠田は平氣なもので、

―一疋の友禪で、縫之助と揃ひの襦袢を拵へるなんか如何だい、君の材料にア成らないかね。―

―然うさね。」とフロックコートは笑つた目で瀧山をじろりと見た。

好人物の瀧山も流石に怒つたと見えて、二人には面を背向けて、舞臺の方を覗いてゐる。そこで二人も暫し押默つて、同じく床の上に目を向けたが、今しも、何様な噺をしてるのか、扇子で字を書く眞似をしてゐる落語家のてかてか光る額を見ると、笠田はまた口を開いた。

「おい館野君、過日君の新聞に出てゐたのは、彼ア全くの事實なんかね――小しゆんの譚が。」

―何うも事實らしいねえ。彼雜報を書いたのは河瀨ッて男だがね、社主の話ぢや、果して柳橋の梅吉の娘とすれば、音聲でも容貌でも、いゝ、もッと美いだらうッて云ふがね、何ういふもんか。」と首を傾げる。

「もッと美い? 然うかい。」と唇を尖らして眼を圓くしたが、「でも、何だか怪しいね、だッて、其様な奴なら君、今迄誰も放棄つて置く筈がないぢやないか、其の容貌で、其の藝で、十九まで獨身で居るなんて、何だか此奴ア、前後矛盾してるねえ。」

―其點が卽ち、世間の廣い處さ。勿論、男と云ふ男が皆な君の様だッたら、天下に處女て物が無くなる勘定だからねえ。」

―何だと。」

―はゝゝゝ。」とフロックコートは瀧山と顏を見合はせて笑つた。

「適評適評!」と瀧山も笑出した。

―怪しからん事を云ふね。」と笠田も同じく笑顏を作つたが、「だが、もう樂屋へ來てるかね?」

「小しゆんか、未だ來ない様だがね。」と云つたが、鼻頭で笑ひながら、「何故? 來て居りや何う仕ようッてんだね?」

「おや、訝う笑ふね、」と云つて、急に高慢相に反身になり、「何う仕ようと、其處は僕の手腕にありさ。」

「ですが、世間で評判する樣に、實際其樣な美人でせうか。」と瀧山はフロツクコートを顧みて、「私の聞いた處ぢや、柳橋の梅吉の娘だと云ふんで、此樣な評判も立つた樣に思ひますが、然うぢやないんですか。」

「まア……。」とフロツクコートは首を傾げて、「其點は如何云ふもんですか。」

「何うせ、縫之助の樣な譯には參りませんとサ。」と笠田が口を出した。

「先生、館野先生。」と黑眞岡の紋付の羽織に小倉の袴を着けた、何家の食客でもあらうと云ふ二十歲位の男が入つて來た。

「何だ？」とフロツクコートは眼鏡掛けた顏をぐツと反した。

「此の方が、鳥渡お目に掛りたいツてますが。」と名刺を出した。

「私にか。」と仔細らしく顏を顰めた。

「否え、何方でも宜いツて申します。」

「ぢや僕へ持つて來た處が仕樣が無いぢやないか、う……ん。」と食客の顏を鼻で見る樣に仰向きになッて、「吉田君へ持つてお出で、吉田君へ。」

「ですけれど、只今吉田樣へ持つて參りましたら、先生へ願へと仰有いました。」

「吉田君が？　何うも仕樣がないね。」と鼓舌して、「此樣な事まで僕に押付けるなんか、實に失敬ぢやないか？」

「へえ。」

フロツクコートは見るとも無く名刺を眺めて暫く考へてゐたが、また額に皺を寄せて、

「ぢや、今行くから待たして置け。」と早口に投げる樣に云つた。

食客が出て行くと、また何かぶつ／＼云つたが、漸と思返したらしく二人へ挨拶を遺して階下へ降りて去つた。笠田は其の跡を身送つて、

「何うだい、彼の威張り樣が。」と鼻頭で嘲る樣に笑ひ、「小糠三合の癖に……。」と云つたが、はツと氣の着いたことあるらしく慌てて言を斷つて、微し赧くした顏を上げて瀧山を見上げ、「是は失敬した、はゝゝゝ。」

「なんだか耳が痛い樣だね。」と瀧山も態とらしく笑顏を作つた。

「だけれど、君とは違ふね、大違ひ。同じ小糠三合と云つても、一つ口にも云はれないさ、彼奴は生活の都合から自分で運動して養子になつたんだ、だけれど君は何ぢやないか、君は細君の戀婿ぢやないか、ふゝん、色男は違つたもんだ。」

「其樣な馬鹿なことを君……。」とは云つたが、莞爾とした。

「宜いさ、宜いさ、構ふもんか。はゝゝゝ、でも些たア體裁が惡いかね。」とまた笑つたが、「だけれど、今の、彼の館野の威張り樣が何うだい。此の間まで三面ばかし書いてた者が、急に先生も可笑いぢやないか、先生と云や、自分の事と思つてるだけが凄じい、はツはゝゝゝ。」

此の時、拍手の音と共に崩るゝ樣な喝采の聲が起つた。二人は談話を止めて舞臺を覗込んだ。床には、でく／＼肥つた五十近い三味線彈の女と列んで、顏色の白い、艷々する、口許の可愛い十八九とも見える娘が、見臺を下目に、少し俯向きになツて、餘り騷々敷いので聲は聞えぬが何やら語つてゐるのである。

「いよー、此は尤物だ。」と笠田は覺えず膝を進めた。

「此ぢやないか知ら。」と瀧山も彼方ばかり視詰めてゐる。

「此だ此だ、此に違ひない。」と笠田は手早く雙眼鏡で望きはじめた。

夜具でも着た樣に大きく、どツしりと構へた三味線彈のむくんだ顏と列んだ故か、花車な見

臺を前に、撫肩の姿すツきりとして、清く坐つた膝の上に兩手を行儀良く置き、睫毛も動かさず語つて居る語女の美しさは、實に目覺むるばかりである。

「しッ！」「しイッ！」「默れッ！」と制する聲は、滿場の騒しさを劈く樣に、土間からも起つたし二階からも聞えた。けれども、三味の音色も語る節も、聽衆の耳には未だ達かないのである。

三味線彈も語女も、服裝は同じ白襟に黑縮緬の三つ柏の紋付で、片方は鐵お納戸の厚板の帶、娘は金茶縞珍の帶に紅入友禪の背負上を締めてゐる。髮は雙方共に銀杏返しであるが、揉上げの長い語女の鬢の恰好は、宛然鬘でも被つた樣である。

「いよー男殺し！」と薄暗い二階の大入場から聲を掛けた者がある。

「小しゆんちやん大明神！」是は土間から起つた。

「馬鹿野郎！」と太い聲でそれを叱る者がある。

「蛙のお婆さん、確り頼むぜ。」是は三味線彈を冷評したのである。

漸と鎮まりかゝつた聽衆は、此の冷評で又どツと笑つた、が、其の笑聲の息んだ時は、不思議にも忽ち靜になツた。

「にくやこぼれてはら／＼と露かしづく
かしづくかつゆか：：

と音締に連れて、調子の冴えた、仇ツぽい聲が次第と場内に響渡つて來る。

語り物は清元の夕立である。節の心得ある者は節廻しの巧いのに驚き、節を聽く耳無き者も其の艶のある聲に聽惚れて、階上階下幾千の聽衆の心は、語女が小さき脣に動かされて、夢の如くに舞歩くのである。

「何うです、巧うがすな。」

瀧山と笠田と居る棧敷の背後に、何時の間にか二人の藝人が立つてゐる。此う云つたのは脊の低い、五つ紋の羽織を着た男で、話し掛けられたのは、通例に外れて大きな身體を、疲れた樣に其處の柱に摑まつてる、紋織御召の小袖を足の隱るゝ程に着た、前の者の師匠でもある如く見える男なので。

「巧いね。是ぢや、喜代壽の三糸でも決して拙か無いね。」と師匠らしいのが熱心に舞臺を視詰めて云つた。

「第一、容貌が綺麗ぢやありませんか。」

「然うよ。」と師匠は感心したやうに首を傾げて、「それに此の喉だからね…、此樣な、語呂の利く、喉は珍らしいよ。」

「全く巧いもんでげすな。」と云つて師匠を見上げて、「これぢや必然旦那にぶツかりますなア。」

此の時、東のうづらから若い男の聲で、「いよ檜物町？」と褒めるのが聞えた。

場内寂然として、咳き一つする者もない。窓から風が吹込むのか、瓦斯の焔の微に鳴るのが聞えた。

一十のとしからお小姓をつとめとほして
おそば役食はたちはこせどいろ戀は：：

と語り進んだ時、西のうづらから突然拍手の音が起つた、かと思ふと、滿場宛然失念して居た物を想出した如くに、其のぱち／＼の音が棧敷から平土間、平土間から大入場と擴がつて行き、丁度夏の通雨の樣に、仕舞は東二階の隅の方でぱツたり消えて、場内は一段と寂然となツた。

「よ！　淫賣の大將！」と二階の大入場から怒鳴つた者がある。

而ると、其の近邊から隙さず、

「默れ！　馬鹿野郎！」と叱る聲が出た。

「何が馬鹿野郎だ？　百姓奴！」

「默らんか。」とまた別の聲が加勢した。

「摑み出すぞ。」是も別の聲である。

「しい！」と制する聲が八方に起つた。

二階に居る巡査は、騒々敷い彼方を視詰めて起上らんとしたが、留場の男が宥めるので少し鎮まつたと見て、再椅子に腰を下した。高座では二階の騒など耳にも入らぬ如く、身動きもせずに語續けてゐる。背後を振上げて居た客も、其の人を醉はせる様な艶のある聲に引かれて、思はずもまた舞臺に面を向け、起ちかゝつた者は皆座に着いた。

「あとはいらへもながづとのあぶらかをりてなまめかし　合ほれた男に手をとられとびたつ‥‥

場内の靜かになるに連れて、聲も絲も次第に冴えて來る。

「引込め！　引込め！」また二階から怒鳴る者がある。

「此畜生、畳んぢまふぞ！」

「何だと、生意氣なツ。」と云ふ聲と共に、がちい、い、やりと土瓶か何か投付けた音がした。

續いて七八人の高く罵る聲がして、廊下を駈ける足音が雪崩の様に響渡つた。聽衆は皆起上つた。騒然たる間から、婦人や小児の泣聲も聞えた。

三味線彈は撥の手を止めて、只だ呆氣に奪られて居る。語女も此の時初めて顔を上げ、切長の涼しい眼で二階の彼方を見遣つたが、丁度假花道の上に當る前船に、舞臺の方ばかり視詰めて居る少年と遙に面を合はせて、片頰に靨を作へて、眼で何やら云ふやうである‥‥と、思ふ機に、床の簾がさら〳〵と巻下りて、其の姿は隠れて了つた。

第三

茶屋茶屋の店前は迎車に路を狭めて、袖に觸る可き輪の間を横に駈抜けた二人の若紳士、ばた〳〵と鶴屋の店に入ると、

「お歸りなさいまし。」と三四人の男女が慌しく上り口に出迎へた。

「さ、何卒お二階へ。」と帳場から禿げた頭の主人がお叩頭した。

「鳥渡小便に。」と獨語しながら、背廣を着た方は梯子ノ下を奥へと通つた。

一人の大島紬は女中の導くまゝ裏二階の六畳に上つたが、自分の家にでも來た様に落着拂つて、床の柱を背に、懐手をして火鉢の前にい、い、べたりと坐つた。

「大層お早うございますこと‥‥。まだ貴方、宜い處が些とも出ないツてぢやありません。」かと女中は火鉢の火を穿くりながら馴々敷く云つて、何故だか、「ほゝゝゝ。」と笑つた。

客は何事か考へて居るものの如く惘然した顔をして、

「然うか。」とばかり、何やら獨りで點頭いたが卒に思出した様に、「あッ、疾く勘定持つてお出で！」

「へえ、只今直に。」

「それから、鳥渡ね‥‥。」とまで云つて默つて了つた。

「何ぞ御用ですか。」と緣側まで出た女中は又其處に突膝をした。

「いゝや、何アに、彼の‥‥。」と云つたが、慌しく莨をぷか〳〵とふかして、もや〳〵と煙を出して、其の煙の中から、「ま、勘定持つてお出で。」

「畏まりました。」と女中は梯子の口まで行つたが、急に聲を張上げて、「旦那、瀧山の旦那、御腕車は如何でございます？」

「然うさな‥‥、私は歸したが、笠田は何うだか。」

「然うですか、ぢやお後で。」と云ふかと思へば、跫音がとん〳〵と梯子を降りて去つた。

瀧山は火鉢に顔を翳して、其の火を視詰めて凝然と何やら考へて居たが、

「何うも、今日はお構ひ申しませんで。」

と云ひながら入つて來た此家の主婦を見ると、喫驚した樣に面を上げて、其の機に指に插んでた紙巻莨を火の中に落した。

「まア、煙りますこと。」と櫛巻の頭髪に、頸に白い絹半巾を巻いた主婦は、徐に膝を摺寄せてぼや／＼と煙の立つ莨の始末に掛つた。

「あゝ寒いッ。」と入つて來た笠出は、障子をばたり閉めて、行きなり足で座蒲團を直しながら、「何うも馬鹿に寒いぢやないか。」と背廣の肩をぶる／＼と搖つた。

「左樣でございますよ、此の二三日は何うしたッてんでせう、豈夫、まだ此樣な時候ぢやありますまいけれど。」と主婦は客の前に茶を出しながら云つた。

「時に主婦、」と笠田は其の茶を一口啜つて、「今の、清元を語つた小しゆんて奴ね、彼ア、中々別嬪だねえ。」

「左樣な相でございますねえ、手前共は未だ見は爲ませんけど、皆樣がもう、大層な御評判でございます、それに、」と瀧山に面を向けて、「藝だッて、中々確りしてるッてぢやございませんか、ねえ旦那、然うなんですか。」

「然うさねえ。」と瀧山は首を捻つて、「僕は、其樣なに感心はしないねえ。」

「感心しない？」と詰る樣な語調で、「ふん、感心しない者がまた、何うして彼樣なに夢中になるんだらう。我が話仕掛けりやとんちんかんな返辭したり、急に歸ると云ふかと思や、折鞄も紙入も置いたまゝで立たうとしたり。全體彼ア何う云ふ譯なんだらう？」

瀧山は微に面を顰めたが、主婦を見てにやりと笑つたばかり、切りと莨の煙を出してゐる。

「左樣でございますかねえ。」と主婦は瀧山の肩を持つて、「ぢや矢張り、顏が綺麗なんで其樣なに評判するんですかねえ。」

「然うだらう。僕は彼よりも、彼の三味線の方が巧いと思ふねえ、實に好い心地だッた。彼樣な巧い三味線は聽いたことがないね。」

「へえ、三味線が？　左樣でございますか……、誰でしたッけねえ？」と云つたが、急に思出した樣に、「然う然う、喜代壽さんでしたねえ……。喜代壽さんなら貴方、其アもう、上手に違ひありませんとも、清元の大師匠なんですもの。」

「然うか、何しろ巧いもんだねえ。」

「ふん。」と笠田は鼻で笑つて、「主婦、瀧山樣は茶人だからね。」

爰へ女中は勘定書を持つて來た。瀧山は其れを擴げて見て、二圓二十錢と云ふ處へ五圓紙幣を出し、

「少し許りだが、釣は茶代に……。」

「まア此樣なに戴きましては、」と主婦は瞠つた眼でじろり瀧山を見たが、是迄に例の無い多くの茶代を、今日は何う云ふ譯であらうと訝りながら、「何うもなんにもお構ひ申しませんのにまア。」と其の紙幣を押戴いて、「毎度有難う存じます。」

「お腕車は如何致しませう？」と女中は瀧山の顏を覗上げて云つた。

「おや、お車夫はお歸しになりましたんですか。」と主婦は仰山相に云つて、顰めた顏を女中に向けて、「それぢやお前、伺ふまでもないぢやないかね、速く然う云つてお遣りよ。」

「ですけど、先刻も伺ひましたけども……。」と女中が不平らしい顏をすると、

「だから、伺ふまでもないッてのにねえ。旦那方がお邸にお歸りなるのに、お徒歩でお歸りがなるものかならないものか、些と考へて御覽よ。餘り氣が利かな過ぎるぢやないかね。」と困つた者だと云ふ樣な顏をした。

「何うも濟みませんでした。それでは、一人乘二臺でございますか。」

「當然だアね、速く云つてお遣り、成るたけ綺麗なのを寄越してお吳れッて。」

「おい〳〵、鳥渡待つて吳れ。」と瀧山は急に呼止めた。

「へえ。」と女中は立止つた。

「何ぞ御用でございますか。」と主婦は瀧山の顏を覗いた。

「何うしたんだ？」と、瀧山が考へてゐるので、笠田も訊ねた。

「君は何うだらう……。歸らなきゃなるまいね？」

「いゝや別に……。何故？」

「何うだい、何處か其邊で、飯を食はうぢやないか。」

「宜からう。」

「而して、何を呼んぢや何うだらう…、彼を。」

「彼ッて云ふと？」と云つても默つて居るので、笠田は笑ひながら瀧山の耳に口を寄せて、「縫之助だらう。」

瀧山は、其聲が面前に居る主婦の耳に入つたとでも思つたか、少し面を赧くしたが、

「いや、僕は彼の何に、三味線彈いた女に飯を食はさうと思ふんだが、何うだらう、可けまいか。」

「三味線彈いた？ ぢや喜代壽か。」と呆れた樣な顏をして、「止し給へよ、なんだ、彼樣なでくでく肥つたお婆さんなんか…。止し給へ、何うせ呼ぶなら、小しゆんでも呼び給へな。詰らないッ。」

「併し、僕は酷く感服したからね……。」

「旦那、それぢや二人ともお呼びなすッちゃ如何でございます？」と主婦は瀧山に膝を進めた。

「然うさなア。」と面を上げて、「併し、來るだらうか。」

「誰です？ 小しゆんですか。えーえッ、參りますとも、今藝人になッたばかしですもの、御贔屓の旦那が呼んで下さるッて聞からもんなら、もう飛んで參りまさアね。」

「然うか知ら、ぢや笠田、呼んで見ようか。」

「はゝゝゝ、到頭本音を吹いたね、僕も何うも可笑いと思つたよ、幾ら瀧山樣が骨董好だと云つて、布袋の樣な、彼樣な肥滿のお婆さんと一緒に、お飯食ひたいッて理窟は無いと思つたが、はゝゝゝ、矢張り辨天樣の方に氣があるんだ、はゝゝゝ。」

瀧山は切りと莨をふかしながら、

「君ぢやあるまいし、なア主婦、はゝゝゝ。」

「左樣でございますかねえ、おほゝゝゝ。」と主婦も愛想に笑つたが、「ぢや旦那、二人とも呼びに遣つて見ませうか。」

「あ、然うして貰はう。」

「僕なら、彼樣な婆アなんか拔にして貰ひたいんだが。」と笠田は笑ひながら。

「まア其樣な我儘云ひ給ふな、今夜一晩ばかし默つて附合つて吳れても可いぢやないか、ねえ主婦。」

「左樣でございますともねえ、おほゝゝゝ。」と笑つて、「それでは、直ぐ見せに遣はしませうねえ。」

主婦は階下へ降りて去つた。暫くして、女中が急須へ湯を注して再び座敷へ出ると、笠田ばかり切りと饒舌つてゐる處で、

「宜しい、ぢや必然だね。宜しい。」

「あゝ必然とも、其の御念には及びませんだ。」

「可いかい？ 其麗な綺麗な事を云つて、若し後日で、祕密運動してる形跡なんか發見仕ようもんなら、僕ア決して默しちや居らんぞ、殘らず彼女に報告して遣るぞ、可いんだね其れでも？ 宜しい。おい姉さん。」と笠田は女中に話を向けたが、眼は矢張り瀧山ばかり見て居る。

「何でございます？」と女中も笑ひながら二人の顏を見較べてゐる。

「まア其樣な瘠我慢は止しにして、今から白狀

してた方が何うだね、何も僕が、君と競爭仕ようと云ふぢやなし、別に祕す必要もないぢやないか。有るかね。はゝゝ、餘程僕が怖いと見えるね、是れで、僕は其樣な强敵か知ら？」と態とらしく首を捻つて、「何うだ姉さん、私は其樣なに見えるかなア？」

「何でございます？」と云つても、笠田も瀧山も默つて居るものだから、女中は、「おほゝゝ、何が其樣なに見えるのでございますよ、ほゝゝ、何を仰有るんだか、仰有る事が些とも分らないぢやありませんか、ほゝゝゝゝ。」

「然うだらう、分るまい。分らない筈だ。此の人はね、女の話となると、直ぐもう夢中になツてね、面前に居る人は誰だか、自分の身體は何處に居るんだか、からもう分らなくなる人なんだ……。」

「おほゝゝ、まア左樣でございますか、おほゝゝゝ。」

「なアに、其れア僕ぢや無い、瀧山さんが自分の事を云ツてるんだよ、噓なら御覽、彼の目色を……。ほら、何うだ？」

女中は瀧山を見上げたが、

「まさか其樣な……。おほゝゝゝ。」

「ねえ、然うだらう、餘程變つてるだらう……。」

爰へ主婦が莞爾しながら入つて來て、

「旦那、只今直ぐ參るさうでございますよ。」

「あ、然うか。」と瀧山は思はず莞爾したが、急に眞面目な顏をして、「種々手數を掛けて。」

「愈よ來るんだね、二人とも？ さア、ぢやア是からなんだ。」と笠田は膝を組直して、「えーと、外題は何と命けたもんかなア。小しゆん瀧山戀路の初旅かな、何だか面白相な二番目ぢやないか、はゝゝゝゝ。」

「おほゝゝゝ。」と主婦は笑つたが、「旦那、それでは參りましたら、直ぐ彼方へ行らツしやいますか。」

「然うさねえ、然うして貰はうか。」と瀧山は曖昧に云つた。

「ぢや疾くお腕車をね。」と主婦は女中に命じたが、「何方までございます？」

「然うさ、何處が宜からうな。」と瀧山は笠田に相談する樣に云つたが、「松源だらうね。」

「あ、宜からう。」と首肯いて、急に笑顏を作つて、「おい姉さん、其の腕車はな、合乘にしてお吳れ。可いか。此樣な寒い晩に一人乘らうもんなら、僕ア風邪引くからな。」

「ぢや、貴方は、お風邪召すと可けませんから、肥つた喜代壽さんと御一緒になさいまし。」と云つて主婦は、「おほゝゝゝ。」

「なアに、其れには及ばんよ、僕より此方が、」と陰で瀧山を指して、「大事の身體だからね、暖かい方は此方へ讓ると仕ようよ。」

「おほゝゝ。」と女中は賑かに笑つて彼方へ行つたが、直ぐまた駈戻つて來て、「主婦さん、參りましたよ。」

「おや然う。」と主婦は起上つた。

徐に梯子を登る足音がして、

「何卒此方へ。」と先に立つた女中の案内の聲がする。

「おい君。」と瀧山は小聲で笠田の袖を引き、「お互に摘發きツこなしだよ。」

「弱い事を云ふね、まア宜いよ。」

「でも、其樣な事するのは愚だよ……。」

主婦が障子をさらり開けると、此室の電氣がぱツと射して、額の厭にてかつく、むくんだ顏の喜代壽を前に、撫肩のすらりとした小しゆんが、體裁惡さうに少し俯向きになツて、靜に入つて來た。

小しゆんは高座に現はれたまゝの服裝であるが、喜代壽は縞御召の綿入に黑縮緬の羽織と着更へてゐる。

「何うも、今晩は有難うございます。」喜代壽は

腰を下して挨拶をした。

「……有難う。」小しゆんは喜代壽の後に付いて微な聲で云つた。

笠田は瞬もせずに正面から小しゆんを視てゐる。瀧山は切りと煙草を喫みながら、喜代壽の方にばかり顔を向ける様にしてゐる。主婦は二人に輕く會釋したが、喜代壽に、

「師匠さん、此方の旦那がね、」と目顔で瀧山を指して「大層師匠の三味線が巧いッてね……。」

「おや、左様でございますか、まことに有難いことで、」と喜代壽は笑顔で點頭き、「いゝえね、既う此様な齢になりましてはね、席へなんか出る厭ですけどもね、今度此うやッて、お俊ちやんが出ることになッたんでね、好い三味線が無いから、是非私に出て貰ひ度いッて云つた様な事情でね——お俊ちやんの阿母さんが、それですからまア、又皆様の御贔屓を願ふ様な事になりましたけれど、全くもう、私の様な齢になりましては駄目でございますよ。」

「然うですか、それでは小しゆんさんは今度初めて？　まア然うですか。」と主婦は感心した顔をして小しゆんを見遣り、「それでもまア、大層な評判ぢやありませんかねえ。」

「お俊ちやんですか、えーえ、藝の方ならもう、確り阿母さんが研き上げたんですからねえ。」と云つて小しゆんを見返り、「何だねえ小しゆんちやん、もッと此方へ入らッしやいなね、其様なに小さくなッてさ。」

「は、」と小しゆんは鳥渡點頭いた。

「ま、お師匠さん此方へ入らッしやいよ、お師匠さんが其處に居らしちや、出ようたッて出られないぢやありませんかね。」

「これは然うでしたねえ。此様な體軀の大きいのが道を塞いでちやアねえ、はッはッはゝゝ。」と笑ひながら喜代壽は半疊ばかり前に進んだ。

而ると、遮る物が無くなッたので、電燈の光線は小しゆんの身體一杯に射つた。小しゆんは目映相に膝を前めて、喜代壽の陰になる様に坐つた。

「小しゆんさん、もッと此方へ出ちや何うです？」と笠田は笑顔を見せて馴々敷く云つた。

小しゆんは顔を上げたが、客は二人とも此方を視て居るので、いゝさッと顔を赧くして、

「はア、有難う。」とばかりまた俯向いた。

「本當に、火鉢の傍にお出でなさいよ。」喜代壽も口を添へた。

「此處で澤山ですよ。」と願ふ様な語調である。

「大層固い人だねえ。」と笠田はまた笑つたが、瀧山の耳に口を寄せて、「何うだい、近優りッて顔だねえ。縫ちやんたア品格から違ふぢやないか。」

「ふーん。」と瀧山は鼻頭で笑つてゐる。

小しゆんは二人の耳語くのを額越に見遣つたが、其の序に、瀧山の顔の色の白い、鼻の高い、眼の大きい處から、少し厚いけれど、紅でも點した様な脣までを見たのである。

主婦も笠田の耳語くのを蔑視む様に眺めてゐたが、其様な事なんか少しも氣に懸けぬ様子で澄して煙草を喫んでゐる喜代壽に、

「お師匠さん、それでは今何方に掛つてるんです？」

「席ですか、いゝえ、未だ主婦さん、出ないのですよ。此の下から出る積でしたけれどもね、」と細い煙管をとん〳〵叩いて、「多分、來月の上からになりませうよ。」

「然うですか、來月からですか、へい、然うですか。」と主婦は瀧山と笠田の方許り眺めて居る。

「來月は何處へ掛るんだね？」と小しゆんを視詰めて居た笠田は口を出した、「是非聽きに行かう、何處です？」

「未だ何處ですか分りませんけど、出ましたなら何卒……。」と喜代壽の言央に、

「お腕車が參りました。」と女中が障子を開けた。
「あ、然う？」と云つたが、主婦は急須を女中に渡し、「湯を注してお出でな。」
「ぢや、もう出かけようぢやないか。」と笠田は手巾で鼻を拭ひながら瀧山を促し立てた。
「然う、」と云うたが、瀧山は落着いて居る。
「もう餘程……。」と笠田は時計を出して見て、
「もう七時だ、さ、出掛けよう。」と膝を立直した。
「あゝ。」と沸切らぬ返辭をしたが、瀧山は卒然に起上つた。
「おや、もうお出立でございますか。」と主婦も起上つた。
「いゝや鳥渡。」と瀧山は障子の外に出た。
「お小便ですか。」と主婦は梯子の口まで從いて來て、高い聲で、「階下へ入らッしやいますよ。」
「大層立派なお方ねえ。」と喜代壽は跡を見送つて、獨語のやうに小しゆんに云つた。
　而ると小しゆんは低聲で、
「然うですねえ。」
　主婦が座敷へ入つて來ると、
「主婦さん、何方のお方です？」と喜代壽は訊ねた。
「彼の旦那？　彼の旦那はね、瀧山さんてお方でお邸は飯田町……、確か、」と云つて笠田の顏を見て「銀行へ出て居らッしやいましたねえ。」
「然うさ。」と笠田は首背いて、「君は銀行の役員で、夜は色男なんだ、」
「はゝゝ。ほゝゝゝ。」
　と喜代壽と主婦は聲を立てて笑つた。小しゆんは俯向いてくす〱と笑つた。
「本當なんだ、」と笠田は態と眞面目の顏をし、
「細君がもう惚切つて居てね、夜になりや地震が搖つても家外へは出さないッて位なんだ……。」
「おや、もう奥さんがお有んなさるんですか。」と喜代壽は主婦に向直つた。
「あゝ、居らッしやいますとも、本當にお美しい、良い奥樣ですよ。」
「然うですか、私アまた、獨身で居らッしやる方とばかし思つてましたよ。何點か、御樣子に然う云ふ處があるぢやありませんか、ねえ主婦さん。」
　主婦の未だ口を開かぬに、笠田は、
「ぢや、僕は何う見えるね？」
「貴方ですか、左樣でございますねえ。」と喜代壽は二重瞼の眼を瞬つて、「貴方も奥樣がお有んなさいますねえ。」
「處が違つてる、是で僕は未だ獨身者なんだ。」
「左樣でございますか……。でも何だか、ねえ主婦さん。」
「然うですねえ。」と主婦は氣の無い返辭をしたが、「小しゆんさん、本當に、如彼云ふ旦那にお贔屓にして戴かないぢや可けませんよ、ねえ師匠さん。」
「然うですとも、藝人はもう、只だ御贔屓ばかしが力なんですからねえ。」
　と云ふ時、瀧山が入つて來た。
「何うだ、嚔が出アしなかつたか。」と笠田は瀧山を見上げて、「今、君の噂してた處なんだ。」
「然うか。」と瀧山は小しゆんを瞥と見て、また火鉢の前に坐つた。
「もう、行かうぢやないか。」
「行かう。」と云つたが、瀧山は立つ氣色がなく、また卷莨に火を點けて、「ぢや、來月から出るなら、今は餘り忙がしかないんだね。」
「手前でございますか、」と喜代壽は面を上げて、「えーえ、忙がしくないの段ぢやございません、只だもう、遊んでばかし居るのでございますよ。」
「然うか、其れぢや何うだらう、近い中に、何處か海の見える處へでも行つて、三味線を聽かして貰はうぢやないか。」

「是非何卒。」と喜代壽は輕く點頭いた。
「旦那、私は……」と小しゆんは少し額を傾げて小聲で云つた。
「お前も一緒にお出でな。」
「有りがたう。」と小しゆんはお叩頭した。
笠田は瀧山の背をとんと叩き、
「もは酷いねえ。ねえ小しゆんちやん。」
瀧山は何故か顏を赤くした、而して突然に、
「さ、出掛けよう。」と起上つた。
笠田も續いて起上つた。
「お立ちでございますよ。」主婦は階下へ聲を掛けた。
喜代壽と小しゆんとは、客の跡に從いて梯子を下りた。
「今日は有難う。」
「どうも今日はお粗末樣。」
「御機嫌克う。」
「若い衆さん氣を着けて上げてお呉れ。」
「左樣なら。」
と店頭には五六人の男女居並んで聲々に呼はツた。小しゆんと喜代壽とは合乘で、あとは一人乘である。三臺の腕車は、雜沓する中を威勢好く驅出した。際しも、劇場の内では藝人の代つたところと見えて、片しやぎりの音が、テ、ンカ、テン／＼／＼、テンド、、テンド、、デン、よーい、デン／＼／＼……。

第四

下谷で美味物屋と云へば、彼家かと、此邊で遊ぶ者の仲間では符牒で通る美代屋の門口で、今しも腕車から下りたのは、黑縮緬の五つ紋の羽織を着た、擧動の如何にも輕々しい、肩邊骨立つた脊の低い男である。

敷石に下駄の音忙しく入つて行つたので、上り口の障子が明いて、其處から顏を出した女中は、
「おや、お歸んなさい。」と笑聲で云つた。
「姉樣、遲くなりまして何うも相濟みません。」と敷臺に躍上り、「何樣なにか待つてましたらうなア、何とか仰有いアしませんでしたか。」
「いゝえ別に……。たゞ、餘り遲い樣だツて仰有つてましたよ。」
「然うでげすか、いや何うも。」と自分の額をぴいしやりと遣つて、威勢好く梯子をとん／＼と驅登り、唐紙を開けるや否や、「旦那、何うも遲くなりアして……。」

此の座敷は六疊で、中には床柱に凭ツかゝつた一人の客が、鼻頭に垂つてる電燈を對手に、淋し相にちびり／＼と飲んで居たが、
「おゝ文遊、大層遲かつたなア、何うした、ま此方へお出で。」と旦那は猪口を出した。

此の旦那と云ふのは、今夜春木座の慈善演藝會に來て、玉枝とお國とからは好色爺と呼ばれ、二階棧敷の笠田には高利貸と云はれた男である。五十近い年輩で、頬骨の立つた、瘠せた黃色い顏色で、息なく働いてる眼は一癖あり相にも思はれる。藍微塵の絲織に黃八丈の下着、羽織は蚊絣の米琉で、白縮緬の兵兒帶には金鎖を絡ませてゐる。
「何うも有難う。」と文遊は自分の膳の前に進んで猪口を押戴き、「實はな、彼から方々と驅歩きましたが、何うも貴方、一向に敵の行方が分らないぢやありませんか……。」
旦那は薄い眉毛を釣上げて、
「行方が分らない？ ぢや駄目なのか。」
「や、御心配なく、まア默つて聽いて戴きませう。」と飲干した猪口を下に置いて、「それからね、偶と途中でね、鶴屋の御客に呼ばれたツて事を聞きましたから、早速春木町へ驅着けますとね、今度ア貴方、松源に居るツてぢやありませんか、宜しい、心得た、ぢや松源だツてんで、また上野まで戻つて來ました……。」

「然うか、それぢや松源に居つたのか。」

「済みませんが、ま一つ頂戴致しませう。」と旦那に酌をして貰つて、「旦那、釋師の方なら、此處んとこは明晩の前講とやらかす處でげすな、ヘッヘッヘヽヽ。」

「まア其様な勿體付けんで、疾く話さんかな。」

「へ、只今申上げます。それから松源に駈着けますとね、」と口の端を拭つて「松源へ行つて見ますと、居りましたな――喜代壽と二人で…。」

「然うか、居つたか。」

「居りました、正に判然と居りました、へえ、居りましたがな、旦那、何うでせう、今日初めて高座へ出た者が貴方、お座敷が四つも五つも有るッて景氣ぢやありませんが、え――、驚きやしたなア…。到底然うは廻り切れないから、もう皆な斷つてるッて次第ぢやありませんか、え――、大したもんでげすなア、先アづ、彼れ位の人氣は、今日の藝人社會に只の一人だッてございませんなア…。」

「なんだ、ぢや斷られて來たのか。」

「なんです旦那、なんです貴方、斷られて來たかは情ないぢやありませんか、かは。」とかと云ふのに妙に力を入れて、「私もかつら文遊でさア、昔芙蓉號で雷名を轟かした、自由黨の斧岡先生のお使者に立つて…。」

客は苦い顔をして、

「其様な、昔の事なんか云ッちや可かんよ。」

「へえ、惡うがすか、へい。」と四邊をきよろ／＼と見廻して低聲になり、「ですけれども旦那、全く酷うがすな、此の文遊を其様な、頼甲斐のない者と思つてらッしやるな酷うがすな、今こそ此様な落語家風情はしてますけれど、是でも貴方、「諸君、満場の諸君！」てな事を遣つて、貴方の前座を勤めたこともあるぢやありませんか、小しゆんだらうが何だらうが、高が藝人ぢやありませんか、憚りながら一藝人の迎に立つて、手を空しくして歸る様な、其様な意氣地のない文遊ぢやありませんぜ、これでも。」

「然うか、ぢや來るんだな。」

「來る處ぢやありません、是が來なからうもんなら、旦那、文遊此れを遣つて、」と拳固で切腹の眞似をして、「申譯いたしまさア…。ですけども旦那、」と猪口を嘗めて、「私ア、手柄を鼻に掛けるぢやありませんがな、今夜ばかしは全く骨を折りましたぜ、何しろ貴方、前申上げました様な次第で、他の座敷は皆な斷つてる處でせう、それを貴方、「今直ぐ参りますから、旦那に宜しく申上げて下さい、」とまで云はせましたからなア、ねえ旦那、私の忠義だッて、餘り憎かアないぢやありませんか。」

「然うか、其れは御苦勞だッた。まア一つ進げよう。」と德利を把上げたが、空になッてるので、「何うしたんだらう、此の家は、不體裁ぢやないか。」

「何うも可けアせんなア、此う云ふ家おの無いのでげすがな。」と顔を顰めたが、際しも丁度德利を持つて入つて來た女中を見ると掌の裏返しに元氣の好い聲を出して、「よ、待つてやした、これだからもう、お絹姉さんに限りやすて。」

「あらまア、彼様な御様子の可い事を。ほゝゝほゝ。へえお酌う。」

「旦那何うでげせう、待てばお燗の便ありッてな…。お燗思へば電氣も暗い。可けませんか。お燗思へば亭主が辛い。ぢや何うでげせう、待つに絹とは氣に懸るなんか…。」

「おほゝゝゝ、大層出ますことねえ。」

「ま、鳥渡した處で此様なもんでげすからな、ヘッヘッヘヽヽ。」

斧岡は帶の間から時計を出して見て、

「大分手間取る様だな、何うしたらう？」

「旦那、大丈夫、御心配なしッ、」と手を振つて、「もう直ぐ参ります。幾ら早く來ようたッ

て、其處が貴方、女ぢやありませんか、もう少し居ろとか何とか云はれれア仕方ないぢやありませんか、ねえ姉さん、其樣なもんでげせう。」
「ほゝゝ、左樣でございますねえ。」
「然うさな、ぢや何か取つて置かうか。」
「へえ、是非何卒一つ。」
「あら、もう火を落しましたよ。」
「火を落しやしたか、可けアせんなア其奴ア。」
「併し何か出來るだらう、出來ないぢや困るがなア。」
「ぢやア、階下へ行つて訊いて參りませう、何でございますか。」
「然うさ。文遊。何が宜からう。」
「左樣でげすな。」と首を捻り、「お口取にてり、い、燒、などは何うでげせう？　女の兒ですからな、どうせ甘い物が宜うございませう。」
「宜からう、其れから何か、鍋の物を。」
「左樣でげすな。其れぢや姉さん、それからお茶碗ですよ。」
「ぢや、如何ですか聞いて參りませう。お口取いゝ、てり燒にお茶碗でございますね。」と女中は立上ると、
「姉さん、何卒ね、只だ訊いて見ようなんてでなく、一つ引受けて遣らして下さいな。火を落したんなら、拾やア可いぢやありませんか。」
「ほゝゝ、ぢや然う申して見ませう。」と女中は階下に下りて去つた。
　斧岡は文遊に猪口を屬して、
「何しろ遲いなア、何樣な客だい、其の松源の客ツてな、まさか色客ぢやあるまいな。」
「一色客？　旦那、其樣な貴方。」と首にまで力を入れて、「憚りながら、其樣な汚らしい物なんか有りやしませんよ、まだ貴方、今日高座に出たばかしぢやありませんか、手入らずの上等、蒸しだてのほや〳〵でさア。」
「でも、もう十九だと云ふぢやないか。」
「たとひ十九でも、彼の通り温和い娘で、普通の女の十六七しかありませんぜ。顏でも心でも。それにね旦那、彼の親達はね、なか〳〵一通りでない頑固者でげすからな……。」
「然うか、然う聞けアまア大丈夫だが……。全體、其親父と云ふのは、何を職業にしてる者なんだ？」
「親父ですか、阿父さんは貴方、畫工でさア、桐澤素雲と云つて、一時は貴方、東京でも五本指に數へられた畫工でさア、大したもんでしたぜ、根岸に居つた頃の贅澤なんか、新橋柳橋、下谷は申すに及ばず、芳町赤坂、も、何處へ行つたツて、畫工の桐澤さんを知らない藝妓が無いツて位でした、實に大したもんでした。」
「ふーん、然うか。」
「旦那、御存知ありませんか。もう彼の當時は貴方、展覽會でも博覽會でも、たゞもう、素雲の繪の噂はツかりでしたぜ、御存知ありませんかなア。」
「知らん。」と首を振つて、「併し、其樣な畫工が、何うして娘を藝人にしたんだ？」
「其れがね、まア……、贅澤の罰でげせうな。」
　文遊の語る所に據れば、今夜、春木座の慈善演藝會で清元を語つた小しゆんの本名は桐澤お俊と云ふもので、父は素雲と云ふ丸山派の畫工・母は二十年昔、柳橋で左褄を取つた梅吉と云ふ者の身の末である。家族は此の他に、小十五になるお菊と云ふ妹の四人で、今は、小石川久堅町の、とある長家住居に、昔時に較べては暮しと云はれぬ程の暮しをしてゐるのである。此處に引移つてからは、彼此十年にもなるが、其の前までは本鄕森川町に住んで、また其の森川町に來る前は上根岸に居つたのであるが、引越する毎に荷物は少なくなり、家は此の樣に狹くなツたのである、で、一時は畫工間で全盛を羨まれた程の素雲の、未だ老衰したと云

ふ齢でもないに――まだ貴方、漸と五十歳てんですからな――此くまで零落に及んだのには、種々事情のある事だらうが、主なる原因を尋ねれば、「素行修らぬと云ふ廉で去る美術學校の囑託教師を罷めさせられたのと、借財の嵩んだ結果、公賣處分になツたのと、惡い噂が新聞に出た爲め、次第に揮毫を賴む者が減じたのと、其の不評判から心がぐれ出して益す放蕩の度を高め、筆を執らずに日夜酒にばかり浸つて、世間を罵つて居ると云ふ有樣なので、其の果は只だ神經ばかり亢奮して、些細な事にも感激する樣になり、仕舞には、繪一枚仕上げるのも中々魂の續かぬ樣な身體になツたからである。さて、繪の描けなくなツた畫工の、氣位ばかり高くツて、酒ばかり飲みたがツて、金になる仕事と云つては何一つ仕ようともせず、身には洗晒しの木綿物を纏うてゐても、他から粗略な言でも掛けらるれば、己を誰だと思ふ、とい、ぷり〳〵怒つて對手にならぬと云ふ始末であるから、妻の苦勞は一通りでなし、近年リウマチスで自由の利かぬ身體を、手内職の傍ら近所の娘に清元の稽古、晝夜の別なく働いても、足らはぬ勝の身上、何ぅ遣繰しても先の詰るばかりなので、二人の娘を去る工場の女工としたのは、つい此の七月のことであるさうだ。同じ女工と云つても、男子部の樣な衣服が汚れるの、手が荒れるのと云ふ荒い仕事ではない、今の世は何でも實業の流行、申すも畏多けれど、奬勵の爲とあツては、やんごとなき御方々にも御試み遊ばさるゝと云ふのであるからと、勤め上手に勸められて、其の女工に爲たのであるが、爰に困つた事と云ふは、此の工場の監督役を勤むる春日と云ふ、金は有つても女には緣の薄い紳士が、數多の女工の中から此のお俊の容貌を見出して、是非妾に欲しいと人橋懸けて頻さく親達に申込んだのである。

「ですけれど、彼の娘に限つて、其樣な事ア耳にも入れるんぢやありませんや。」と文遊はまた酒で脣を濕して辯じ出した。

親達は元より其樣な談の對手になる人物では無い、お俊もまた耳にも留めないのである。けれども、其樣な者の居る處に大切の娘を女工に出して置いて、何樣な間違の起らうも知れぬと云ふので、前月から斷然其の工場を退かして了つたが、併し工場を退かして了ふと、差當つて困るは前の樣な苦しい身上の、親子四人の口を過して行くばかりも容易でない處から、根岸に居た頃とりまきに連歩いた男の、今は文遊と云ふ落語家となツた者が、お俊程の藝と容貌とがあれば、立派に眞打にもなれるから、寧藝人にしたならと、勸めらるゝに任して、終に柳派の藝人となツて、今夜の演藝會に出ることとなツたのである。

「ま、此う云つた樣な譯でげすから、譃なら旦那、鳥渡入らしッ、御覽なさい、其れア實に、氣の毒でなりませんから。」と文遊は話し了ると猪口を洗つて、「へえ、旦那一つ申上げませう。」

「成程然うか。」と斧岡は點頭いて、「其れぢや何うか成りさうなもんだなア、藝人なんかならんでもよ。」

「へえ、ですがな旦那、其處へ來ると、世の中ッてものは廣い樣で狹うがすな、彼の面で、彼の藝があッて、其れで貴方、高座へ出るまで、贔屓にして遣る人一人無いッてんですからなア、考へて見れア、情無うがすなア。」

「併し、文遊。」

「へえ。」

「己は・・・・。お前を信用してるからして、何事も包隱さずに云ふんだがな・・・・。」

「へえ。何うも有難いことで。」

「いや、然う固くなられちや話が出來んがな。」と云つて訝に笑顏を作つたが、「ま、一つ飲め。」

「へえ有難う。」と押戴き、「何でげす、其のお話は？　私も伺ふまでは氣に懸るぢやありませんか。」

「然う眞面目になられては困るがな、何うだらう、己だツて、只だ酌して貰ひ度いばかりで彼女を呼ぶんぢやないんだが、何うだ、お前一番盡力して、寸法付けちや吳れまいか。」

「へえ、寸法…？　宜うがすとも、付けませうとも。」

「然う、餘り早く請合はれても不安心だが、如何だ、其の代り、只だ骨を折らせないんだ、後幕の一枚も拵へて遣るんだが、何うだ、本當に盡力して見る氣は無いか。」

「後幕を下さいますか、旦那本當ですか。」と膝を前めて、「本當なら旦那、必然執持つて進げませう、えゝ、執持ちませうとも、生命がけで執持ちませう。」

「併し文遊、君ばかし其樣なに請合つた所が、肝心の本人が何うだか…。本人の氣が分らないぢや…。」

「本人でげすか。旦那、本人も何も貴方、藝人ぢやありませんか、藝人ぢや。」

「幾ら藝人でもさ。何うも今の談の樣子ぢや、容易に承知しさうもない樣だがなア。其れに親達が其樣なぢや…。」

「へえ、其れアもう容易な事ちやア…。」と首を捻つて見た。

「如何だ、君の腕ぢや難かしいか。」

「へえ、」と考へてゐたが急に強く點頭いて、「宜うがす、引受けませう、固藏だらうが變物だらうが構ひません、宜うがす、私ア立派に引受けあせう。」

「可いのか、確な的でもあるのか。」

「へえ、的はありませんが、宜うがす。何も彼も此の胸三寸に疊んでまさア、憚りながら。」と云つてとんと胸を叩いて、「ですけど旦那、是ばツかしア御褒美を戴くだけの物がありますなア。」

「遣るとも、確に遣るよ、酒の上だからツて、此樣な事を冗談に聞かれちや困るんだ、若し不安心と云ふなら…。」と旦那は笑つてる樣な眞面目の樣な、何方付かずの顏をしたが、「然うさな。ぢや此う仕よう、約束をした證據に、今運動費を遣らう。」

「いゝえ、旦那、然う云ふ譯ぢやありません、其樣な御心配を戴いちや恐入ります…。」

「いや然うぢやない、此れは…。」と文遊の見て居る前で、紙入から一圓紙幣を三枚だけ出して、「僅だが運動費だ、取つて置いて貰はう。」

「何うも是ア…。」と文遊は當惑の顏を作へたが、「ですが旦那、是はまア、其方へお納めなすツて戴きやせう、未だ商ひの出來ない前に、口錢を戴くツて法がないぢやありませんか、是れだけアお納めなすツて戴きませう。」

「何故な、宜いぢやないか、口錢ぢやない運動費だもの、まア、其樣な事を云はず取つてお置き、萬一、君の盡力が無駄骨折になツても、まさか運動費を返せた云やしない。だから默つて取つてお置き…。」

と云ふ時、門の前に腕車が止つて、藝妓にしては駒下駄の音徐に入つて來た者がある。爾ると忽ちといゝと女中が梯子を駈登つて來て、

「此方は、斧岡樣と仰有いアしませんですか。」

「よツ、此方此方。」と文遊は元氣好く云ツて、額で手をぽんと鳴して、「旦那、如何でげす、愈よ御來迎に及んだぢやありませんか。」

女中は敷居に突膝して、

「彼の、小しゆん樣て方が、鳥渡、文遊さんにお目に懸りたいんですツて。」

「私に？　宜しいツ。」と起上つたがまた坐つて、「ぢや旦那、濟みませんが此れア頂戴致しませう。」

「あゝ、宜いから疾くお仕舞ひ…。」

「何うも、有りがたうございます。」と文遊は前に出てある紙幣を懐中するや否や、忙し相に起上つたが、自分の足に躓いてよろ〳〵となッて柱に摑まり、「おッと來た。」

「おほゝゝ。」と女中は笑出した。

「何うも、色男は急がしうがすからな、ヘッヘッヘゝゝ。」と賑かに梯子を下りた。

　障子を開けると、今松源から來た小しゆんが、獨り敷石に立つてゐるので、

「いよー、小しゆんちやん！」と反身になッて、

「先刻からもう、大變なお待ちかね。」

　小しゆんは、文遊の醉つてる態が可笑いので思はず吹出さうとしたが、

「然うでしたか。」とばかり云つて、凝と耐へた。

「さア、ま疾くお上りなさい。」と文遊は小しゆんの手を引いて、「實に何うも、待つたの待たないのッて、何樣なに待つたか知れませんぜ。來るか來るかとお酒飲んで待てばッてんだ。」と云つたが、節を付けて鼻歌を唄ひ出した、「足がアふらづくウ、目が廻るウ……。」

「ま、文遊さん、待つて下さいよ。」と小しゆんは捉られた手を振離して、「私ね、此方で待つて居らしちや惡いと思つてね、鳥渡寄りましたけどもね、もう大變遲くもなりましたから、文遊さん、何卒、貴方から宜しくね……。」

「え、何です？」と吃驚した顏をして、「折角貴方、此處まで入らしッてからに、上らずに歸るッてんでげすか……。小しゆんちやん、貴方冗談ぢやありませんぜ……。」

「ですけども、大變更くなりましたから。」

「更いッて貴方、何時だと思召す？　まだ貴方、漸と十時ぢやありませんか、十時ぢや……。可けませんねえ、其樣なやんちやんを仰有ッては。」

「だッて、阿母さんが待つてますもの。」

「ぢや、私が送つて上げませう……私が、ねえ、可いでせう。」

「いゝえ、其樣な事ア入りませんけど……。何だか私ア、」と云つて當惑の顏をしたが、「それに、私一人ですから。」

「一人だから？　一人ぢや可けアせんか。」と呆れた顏をしたが、「えッへゝゝゝ、困りますなア。貴方も藝人ぢやありませんか、藝人が貴方、一人ではお座敷に出ないなんて、其樣な不都合な事ッてありますか。」

　と云つてる時、番の女中が文遊の背後から云つた。

「あの、お二階の旦那がね、文遊さんに、何うなさいましたッて、疾く彼方へ入らッしやいましッて……。」

「へえ、旦那が？　へ、只今直ぐ、」と云つてまた小しゆんの手を引張り、「ま小しゆんちやん、兎も角入らして下さい、後生ですから。」

「ですけども、本當に困るんですもの。」と小しゆんは引上げられたが矢張り躊躇してゐる。

「困るな貴方より私でさア、ま考へて御覽なさい、彼是三時間てもの繼いで置いて、今になッてから、遲くなッたんで、歸ッちまひました……。それぢや貴方、文遊の立瀬がないぢやありませんか、それこそ、旦那への申譯に腹でも切らなきやなりません……。」と云つたが急に語調を更へて、「腹ア切ッて、申譯。」と假聲を遣ふ。

「よ、音羽屋？」と女中は聲を掛けて、「おほゝゝ。」

「ねえ姉さん、其樣なもんでげせう、へゝゝへ。」と笑つたが、無理に小しゆんの手を引いて「ですから、私を助けると思つて何卒……。」

「それぢや文遊さん、本の鳥渡ですよ、宜ござんすか。」

「宜しい、心得やした。」

「本當ですよ、直ぐ歸して下さいよ、ねえ、宜ござんすか。」

「御心配無用？」と額の上で無用と云ふ手を振

つて、「只た一時間。」
「そんなに？」と梯子に片足掛けた小しゆんは立止つた。
「ぢや三十分ッ。えッ、まけとけ！」とぽんと手を鳴したが、背後を振返つて、「姉さん、先刻の物をお誂んしあす。」
「へえ、只今直ぐに。」
二階に上ると、襖を威勢好く明けて、
「旦那、何うも相済みませんッ。」と小しゆんの手を引いて座敷に入り、「何うでげす、此うした所が。惚れた男に手を提られ飛び立つほどの嬉しさは……。」と節を付けて語りながら其所に坐つた。
「遲くなりまして、試に相済みません。」と小しゆんは行儀正しく坐つた。
「おッと、貴方は此方へ、」と文遊は自分の膳を持つて席を下り、小しゆんを斧岡の傍に坐らせようとした。
けれども、小しゆんは點頭いたばかり、其所を動かない。ところへ女中が小しゆんの膳を持つて來た。文遊は行きなり其れを斧岡の傍に据ゑ、座蒲團の上を輕く叩きながら、
「此所へ入らッしやい此所へ、よ、小しゆんちやん、入らッしやいてばねえ。」
斧岡は始終笑顔を離さず小しゆんを見てゐたが、
「ふーん。」と微に笑つて、「此所へお出でな、怖いことは無からう、はゝゝゝ。」
「矢張り、體裁が惡いんでげすな、へッへゝゝへゝゝ。」
そこで小しゆんは詮方がないと云ふ風に起上つて、文遊と斧岡の間に坐つた。
「一杯進げよう。」と小しゆんが坐るや否や、旦那は寶石入の指輪の輝る、皺だらけな、あれた手で猪口を獻した。
「いゝえ、私は不調法でございますから。」と小しゆんは身を退いたが、徳利を把上げて酌を仕ようとする。
「可いぢやないか、一杯位は。」と斧岡は笑つた目に小しゆんを視詰めて、「餘り愛嬌が無いぢやないか。」
「折角下さるのに、小しゆんちやん、頂戴なさいな。」と傍から文遊が口を添へた。
「だッて、文遊さんも知つてるぢやありませんか。」と當惑相に猪口を受けた。
それに女中が酌をすると、小しゆんは杯洗に明けて斧岡に返杯。
斧岡は小しゆんの顔から目を離さずに居たが
「ねえ文遊。」
「へえ。」
「お前も知つてる通り、私は寄席なんかへ行くことがないから、些しも其樣な事は知らんのだが、何だッてぢやないか、小しゆんちやんは、今夜初めて出たッてぢやないか。」
「へえ、初めてでございます。」
「何うも、其れにしちや巧いもんだなア、第一、聲が無類だなア。」
「へえ、全くでげす、小しゆんちやんの樣な喉が、彼が本當の天然の美音てんでげせうなア。」
「あら、」と小しゆんは頬の邊を赤くして、「彼樣な御冗談ばッかし。」
「いや全く。旦那、彼の、十の年からお小姓を勤め通してお側役……、彼處が好いぢやありませんか。」と云つて、急に節を付けて、「おそばやく、はたちは越せど色戀は……、彼處が巧うがすな。たゞもう、ふら〳〵ッとなりやすな。」
其の「ふら〳〵」と云つたのが如何にも可笑く聞えたので、
「おほゝゝゝ、ほゝゝゝゝ。」と女中は轉げる樣に笑つて座敷を出て去つた。
「姉さん、お徳利を何卒。」と文遊は其跡を見送つて云つたが、「ですが旦那、何卒、小しゆんち

やんも御贔屓にして遣つて下さいましな。」
「どうぞ。」と小しゆんも頭を垂げた。
「あゝ可いとも。」と斧岡は横柄に首肯いて、「時々、文遊と遊びに來るが可い。」
「有難うございます。」と小しゆんはまた御辭儀をした。
「旦那、是非伺ひますぜ。」と云つて小しゆんの方に向き、「ねえ小しゆんちやん、今後ちよいちよい伺はうぢやありませんか。」
「はア何卒。」と笑ひながら、「何方で居らッしやるの？」
「お邸？ 旦那のお邸はね、直き此の湯島でね、小しゆんちやん知つてませう、ほら、天神様の前から眞直に行つて、二つ目の横町を曲ると、煉瓦の塀を廻した、立派なお邸があるぢやありませんか。」
「いゝえ、存じませんの、彼方へは、未だ參つたことが無いんですもの。」
「然うですか、ぢやお出になりません。まア一度入らして御覽じろ、本當に立派なお邸でげすぜ、先づ、宅は總煉瓦で、御門は冠木門。」と云つたが、斧岡の方に向直り、「旦那、彼の御門には、大して費りましたらうなア。」
「ふゝん。」と斧岡は鼻で輕く笑つたが、「なアに、其樣なに費りアしないが、彼でも、千圓ばかしも費つたかな。」
「千圓？」と文遊は頬を脹らして、「千圓でげすか……、成程、然うでせうなア、其位は費りましたらう。先づ、彼の金具ばかしだッて、中々大した物ですからなア、然うでげせう、千圓は費りましたらう……。」
「おい文遊。」
切りと首を捻つて感心してゐた文遊は眼を圓くして、
「へえ、何でげす？」
「何だか、此處ぢや甘くないなア、何うだ、何處へ行つて飲直さうぢやないか。」
「へえ、是からでげすか。」
「可いぢやないか、今からでも。可かんのか。」
「いゝえ、然うぢやありません、然う云ふ譯ぢやありません。私も藝人の端くれでさア、旦那のお供をしろッてなら、火の中でも水の中でも厭やしませんや、憚りながら。」
「それぢや出掛けよう。」
「へえ、お供しませうとも、ねえ小しゆんちやん。」と故意とらしく元氣よく云つた。
小しゆんは小聲になッて、
「文遊さん、先刻云つた樣な事情なのですから、私アこれで何卒……。」と席から後退りした。
「如何したんだ？」と斧岡は容易でない顏色をした。
「まことに濟みませんけど、」と小しゆんは斧岡を見たり文遊の方を見たりして、「文遊さんも知つてる通り、私ア、もう歸らないぢやなりませんから、憚りですけども、是で失禮いたしますから……。」
「何故な、未だ可いぢやないか。」と斧岡は手を出して引止めぬばかりに身を乘出し、「何うしたッてんだ、文遊、何故歸らなきやならんだ？」
「いゝえ、其の……。」と文遊は頭を撫上げて、「阿母さんが待つてる相でげすからな。」
「阿母さんが待ッてる？ 其樣な事なら、なにも急いで歸らにやならんこともあるまい、ぢやア何だ、」と顰めた顏を文遊に向けて、「お前鳥渡な。」
「へえ。」
「小しゆんちやんの家へ然う云つて來るが可い。私に止められて、此家に居るからッて、然う云つて來るが可い……。」
「あら、旦那本當でございますよ、本當に然うしちや居られないのですから……。」
「可いぢやないか。」小しゆんには有情く云つ

て、文遊には光る眼を見せ、「おい文遊、何を愚図愚図してるんだな。」
「へえ、ぢや行つて參りませう。」と文遊は立上らうとする
「ま文遊さん。」と小しゆんは慌てて其の袂を控へて、「其樣な事を爲すツても……、貴方だツて御存知ぢやありませんかね。」
「ですけれど、旦那が彼アまで仰有いますから……。」と文遊は起つでもなく坐るでもなく、只だきよろ〱してゐる。
「私ア、何うしても歸らなきやなりませんから。」と小しゆんは席を起つて、今しも德利を持つて入つて來た女中の傍に坐つた。
「あはゝゝゝ。」と斧岡は聲を揚げて笑ひ、「到頭逃げて了つたね、何うも、酷い嫌ひ樣だなア、はゝゝゝ。」
「然うぢやありませんけど、本當の事、もう歸らなきやなりませんから。」と小しゆんは微し顏を紅くして謝罪る樣に云つた。
「ぢや、もう何處へも行かんから、もう少時お居で、もう少時。」
「可いでせう、旦那が彼樣なに仰有るぢやありませんか、ね、もう久時居らツしやいよ。それぢや貴方、餘り愛嬌が無いぢやありませんか。」
「ですけども、もう大變更くなりましたもの。」と小しゆんは腰の落着かぬ樣子である。
「まア、酒杯進げよう、可いだらう、酒杯位取つても、はツはゝゝゝ。」と笑ひながら斧岡は猪口を干して、「まア其處ぢや困るなア、此處へお出でな。」
「此方へ入らツしやいな……。別に御席料を頂戴するぢやありませんから、ねえ姉さん、へツへゝゝゝ。」
「もう此處で澤山ですよ。」
小しゆんの動く樣子が無いので、
「はゝゝゝ、大層固い人だなア、ぢや此品を、其處へ遣るが可い。」と斧岡は顋で指圖して膳と座蒲團を運ばせたが、何事か文遊に目配せして、急に席を立つた。
「お手水でげすか。」と文遊は箸をがらり投げて旦那の跡に從いて梯子を下りた。
小しゆんは歸らうと思つてる處を二人に立たれたので、詮方なしに默つて坐つてゐた。けれども、如何したのか斧岡も文遊も中々歸つて來ないので、
「姉さん、何うしたんでせうねえ？」
女中も同じく無言で、電氣が映つて、肌理濃な、艶々する小しゆんの横顏を惚々と眺めてゐたが、
「然うですねえ。」とばかり、久く默つてゐたが、「私ア、何うも貴方にお目に掛つたことがございますよ。」
「おや、然うですか。」
「もう、小十年も前の事てすけれど、」と矢張り凝と小しゆんを視詰めて、「貴方あの、延喜久さんの賀の祝のおさらひに、蓬萊をお語りなさいましたらう。」
「えー、井生村樓ででせう。」
「は、然うですよ。お語んなさいましたらう。何うも私ア、必然然うだらうと思つたんですよ。まア、幼な顏は失せないツてますが、本當ですのねえ。」
「ぢや彼の時貴方もお語んなすツたんですか。」
「いゝえ、私なんか、彼樣なお晴の處で語れるもんですか。姉がね、お弟子だツたもんですから、彼の時ね、聽きに連れてツて貰つたんですの。彼の時にねえ、皆樣が貴方の評判してねえ、容貌が美いの、聲が意氣だのツてねえ、本當に、貴方の事で持切りなんですもの、何樣なに口惜しかツたか知れアしませんわ、おほゝゝゝゝ。」
此樣な事を云つてる所に、斧岡と文遊とが座敷に入つて來た。

「あーあ、大變に醉つた。」と云ひながら斧岡は座に着いたが、「小しゆんちやん、其の、お前の猪口を貰ひたいもんだなア。」

「はつ。」と小しゆんは冷たくなッてるのを杯洗に棄てて、「何うも濟みませんけど、私ア是でお暇致したいんですから……。」

「未だ可いぢやないか。」と斧岡は酌する小しゆんを睨と視詰めて云つた。

「小しゆん様、鳥渡何うか。」と文遊はぶいと起上つて縁側に出た。

「私？」と小しゆんは解せぬ顔をして、「何ですの？」

「ま、鳥渡入らして下さいな、鳥渡。」

「何？　何か御用ですか。」と厭々相に障子の外に出ると、

「先刻ね、喜代壽さんに會ひましたらね、」と高い聲で云つたが、「鳥渡此方へ、何卒。」

小しゆんは文遊に導かるゝまゝ、縁側一つ隔てて向うの、客の無い八疊の間に入つた。

「何ですの？」

「まア、鳥渡此處へお坐りなさい。」

「可笑いぢやありませんか。」と小しゆんは氣味惡さうに突膝をして、「お師匠さんが何か云ひましたツて？」

文遊は膝を前めて小聲になり、

「時に小しゆんちやん、貴方まア、彼の旦那を何と思召す？」

「何とッて？」

「何處か此う……、鳥渡、意氣な點があるぢやありませんか、厭味が無くッて、ねえ、何處か此う。」

「然うですねえ」と愈々解せぬ顔をして、「其れが何うしたんです？」

「何うしたんですぢや困りますがな、」と呆れたと云ふ様に身を反したがまた前に乘出して、「貴方は、彼の旦那を御存知ないから仕方がない、彼ア貴方、湯島の斧岡様て、お金の二三十萬から有る大盡ですぜ、不斷なら何うして、我々如き藝人なんか、側へも寄せアしませんや、藝人を呼ぼッてなら、團十郎だらうが菊五郎だらうが、身體を逆にして、座敷の中ア額で掃かせようッて方でさア……。」

小しゆんは只だ不思議なと云ふ顔をしてゐるのみである。文遊はます〳〵膝を前め、眞面目切つた顔をして、

「其様な事ア、何うでも宜うがすがな、實はな、」と言出しかねた風に言澁つて、「實は、彼の旦那がね、小しゆんちやんに是ッたけて云ふ一件でせう……」と手眞似をした。

小しゆんは顔を赧くしたが、眼を睜つて、文遊を視詰めた。

「全くでげす、」と獨りで首肯いて、「それでね、是非何うか世話したいから、手前に一つ骨を折ッて見ろッて仰有いましてね……。」

「何ですッて？」と小しゆんは嚴然となッた。

「いえさ、ま、もう少し聞いて下さい、もう少し、實はね……、私だッて小しゆんちやん、此様な事小しゆんちやんの前で云ふな厭でさア、厭ですとも、幾ら頼まれた事でも厭でさア……。是がさ、對人が貴方でなく、他の藝人を執持てとか云ふのなら、其れア貴方、何も億劫な事ア有りやしませんや。また、凡そ今日の藝人でさ、斧岡の旦那の聲が懸つて、頭を横に掉るなんて者ア、只だの一人だッてありませんからなア。だから、其様な事ならもう、お茶の子さい〳〵でさア。けれど、同じ藝人と云つても、小しゆんちやんばかしは口が澁ひまさア、此様な厭らしい事なんか、憚りながら耳にも入れるぢやありませんや、知つてまさア、私だッて——、今こそ落語家してますけれど、是で、新聞記者もした文遊でさア、小しゆんちやんは其様な人だか、でないか位は存じてまさア、判然と存じてまさア……。」と言葉

を切らずに、小しゅんの顔色を覗込んだ。
　小しゅんは口を噤んで、横目にじろ〳〵文遊を睨めてゐるのみである。
「それぢや、何故此樣な事を頼まれたかッて云ひませう、其點ですて、小しゅんちやん其點ですて。」と息を嚥んで、「是がね、他の客に頼まれたんなら、初ッから對手にしアしませんや、耳も假しアしませんや……、けれどもね、何しろ貴方、斧岡の旦那のお頼みぢやありませんか。」と云つて一段聲を低くして、「それにね、貴方は何も御存知ないが、彼の旦那は、幼少なお嬢樣一人あるッきり、奥樣は無しお妾は無し、親兄弟と云ふ厄介はなし……。」
「あゝもう文遊さん、」と小しゅんは情ない聲で文遊の口を止めて、「私アもう其樣な事聞きたかありませんから、何卒止して下さいな……。」
「ですからね、私はね、」と文遊は狼狽へて、「實は此樣な事を、貴方に云へた義理ぢやありません、本當なら、先づ阿母さんに相談でもして、其れから貴方の耳に入れるのが順當でさア、ですけれど私も……。」
「文遊さん、其れぢや貴方は　阿母さんに勸めて、私に淫賣させようと云ふんですか、」と云つたが其の聲は震へ、其の文遊を睨めた眼からは涙がはら〳〵と溢れた。
「へい、飛んでもない、何で私が其樣な、」と分疏しようとすると、
「もう私ア、其樣な事聞きたかありませんから、」と云ひ樣ぷいと起上つた。
「まア、小しゅん樣待つて下さい、」と同じく慌てて起上つた。
「私ア、もう歸るんですから、」と小しゅんは其まゝ梯子を下りようとした。
　文遊は駈寄つて小しゅんの袂を捕へて、
「小しゅん樣、貴女、然うお怒りなすッちや困るぢやありませんか、私だッて貴方、何も惡い意で此樣な事云やしません、一つは、貴方の利益にもなると思ふからぢやありませんか……。」
「ですから、もう宜うございます、私ア歸るのですから、何うか離して下さい。」と小しゅんは強ひて梯子を下りようとする。
「ぢや宜うがす、お歸りなさい。お歸りなッても宜うございますから、私にア大切の旦那ですから、旦那へ一言お禮を仰有つて下さい、ねえ、然ら私の顔を潰さなくとも可いぢやありませんか、ね、貴方だッて藝人ぢやありませんか、ね、小しゅんちやん、お願ひですから、鳥渡お禮を仰有つて下さい、ね。」
　小しゅんは無言で唐紙を開けた。文遊も其の後に付いて座敷に入つた。
「今晩は、種々有難うございます。」と小しゅんは丁寧に斧岡へ頭を下げた。
「何うしたんだ？」と、斧岡は恍けた顔色をして「もうお歸りなのか。」
「へ、旦那眞に濟みませんが、」と文遊は目で何か合圖をして、「小しゅんちやんは、少し頭痛がしますんで、是でお暇致したいッてますから、何卒。」
「然うか、其れア可かんなア。ぢや鳥渡お待ち、」と旦那は紙入から手早く紙幣を出して、大きいのを一枚紙に包み、「此れは少しだけれど。」
「いゝえ、もう此樣な物を戴きませんでも、」と小しゅんは起上つた。
「小しゅんちやん、其樣な事を仰有らずに、」と文遊も起上つて無理に渡さうとした。
「何うしたんだ、はゝゝゝ。」斧岡は高く笑つて、「大層固い人だなア。其樣な事を云はんで、取つてお呉れな。それから姉さん、其の肴を折にして遣つて呉れ。」
「へい、畏まりました。」とばた〳〵と駈けて去つた。
「いえ、もう何にも戴きませんでも、」と小しゅ

んは何處までも歸らうとする。

交遊も仕方なしに共に梯子を降りたが、祝儀と折とは、漸くのことで小しゆんに渡したのである。

第五

腕車の柳町通から左に曲つて、家根低き兩側の家々、何處に一つ軒ランプを出した所もない暗い狹い戸崎町に掛つた時、

「若い衆さん鳥渡、」と車夫を呼止めて、小しゆんは腕車を下りた。

一軒建ではあるが、二間間口の古ぼけた家で、手を掛けるだけ殘して閉めてる戸の隙間から、障子に寫つてる薄暗い燈火の影が見えるが、家の内は寂然として人音がない。

「今晩は、」と呼んでも返辭がないのでまた、「小母さん、今晩は……。小母さん。もうお寢なすッて？」

「はい、誰方？」と漸く寢惚けた年寄の聲がした。

「私ですよ。」と小しゆんが潛格子を明けると、其の途端に上り口の障子が開いて、厚い褞袍を被つた、髮のばさ〳〵してる、老婆が顏を出して、

「おや、お俊ちやん……」

「私もう、小母さんお寐ッたかと思つてよ。」と小しゆんは家へ上つて、四疊半の茶の間に入つたが、頻りと四邊を見廻して、「如何して、龍ちやんは未だ歸らないんですか。」

「はア、未だ歸りませんよ。」と欠伸をしながら火の消えかゝつてる火鉢の前に坐り、睡む相な眼を擦りながら、「まア、大相美いお召ですことねえ、何です、矢張り縮緬、まア、此う云ふ物を着ると、又一段容貌が上つて見えますよ。」

「厭だよ小母さんは、」と莞爾したが、初めて氣の着いた樣に其處へ坐らうとすると、

「可けません可けまん。」と慌しく小しゆんを止め、戸棚から仕立物か何か包んである澁紙を取出し、「私の家はね、お俊ちやんの家と違つて汚ないからね、直接に坐つた日にア大切のお召が代なしになりますから……。」と自分の敷いて居た座蒲團の上に澁紙を被けて小しゆんに勸めた。

「あら、可いんですのに、」と云つたが、勸められるまゝ腰を下し、手に提げて居た折を出して、「小母さん、是はお土産ですよ。」

「おや、まアお御折ですか。」

「龍ちやんと二人で食つて下さいな。」

「まア何樣なに美味いでせう、何家のお料理？」と珍らし相に手に取上げた。

「美代屋とか云ふお茶屋のですよ……。小母さん、私些とも箸を着けないのですから、何卒龍ちやんに遣つて下さいな。」

「美代屋のですか、まア、何樣なに美味いでせうねえ。」とほく〳〵悦んで折を開かうとしたが、「ですがお俊ちやん、私共は此樣なに入りませんからね、半分だけお家へ持つてッてお遣りなさいよ。」

「いゝえ、小母さん可いのよ、未だ他にも有るから、是ア小母さんと龍ちやんに上げるのよ。」

「本當ですか、皆な戴いても可いんですか。」

「可いんですとも、今晩ね、お座敷が二つあッてよ。」

「へえ、お座敷が、二つ？ へえ、今夜出たばかしだのにねえ。まア何と云ふ景氣だらうねえ、結構ぢやありませんか。」と深く感心した樣な語調で云つて、「先刻もね、魚屋の金公がね、今春木座へ行つて來たが、お俊ちやんの景氣は實にいゝ、いゝ、すばらしいもんだ、宛然劇場が鉢切れ相な騷ぎだッてからね、私アもう、何樣なに喜んでたか知れアしませんよ……。ですからもう、女の兒に限りますよねえ。ま、阿母さんは何樣なに悦んでませう、本當に羨ましいことねえ。」

「私もね、餘り騷がれるんでね、本當に膽を潰して了つたのよ。」
「然うでしたか…。ですけども、其のお座敷の客は、何程なお客でした、矢張りお俊ちゃんの知つてる方なんですか。」
「いゝえ、其れがね、些とも知らない人なの。」と小しゅんは、喜代壽と二人で鶴屋から呼ばれて、客と共に松源に行つた事と、文遊が使者に來て、美代屋の客にも出た事の大略を咄したが、自分の話と共に、不快な事も想出したので、其のまゝ默つて了つた。
「然う？　其樣な立派なお客？　まア、結構ですねえ、それぢやもう、お俊ちゃんは玉の輿に乘つたッてもんですねえ、」と力を入れて云つて、今更の樣に小しゅんを眺め、「然うだらうねえ、容貌は美し、聲は美し、これで贔屓が無かつた日にア、世の中が闇だからねえ。」
小しゅんは對手の云ふ事は耳にも入らぬらしく、久く凝然と俯向いてゐたが、際しも聞ゆる鐘の音に、
「おや、もう十一時か知ら？」と面を上げて、「何うしたらうねえ小母樣、龍ちゃんは？」
「本當に何處へ行つてるでせうねえ」
「もう十一時だもの、」と對手の顔を視て、「私、もう歸らうか知ら。」
「然うですねえ、阿母さんも待つてませうからねえ。」と小しゅんを見上げて、「何か、龍坊に用でもお有んなさるなら、明日の朝、此方から上げませうか。」
「いゝえ、別に用なんか有りやしないけど、」と片頰に笑を見せて、「小母さん、私昨日聞いたけれど、龍ちゃんは、此の月ッ限りで工場の方は廢すんですッて？」
「おや、もう其樣なお饒舌しましたか…。なアにね、未だ確然した事ぢやないんですけれどもね、過日また、大泉寺の和尚樣からお話があッたものですからね、其れでまア、今月限りで止したら如何だらうッてね。」
「だッて小母さん、お寺へ行く事なら、此前にもう止したッてぢやありませんか。」
「それがねお俊ちゃん、一遍は止さうとも思つたんですけどもね、彼の和尚樣からは、龍坊は只た一人の甥でせう、それに、お弟子ではあるしね、何卒、彼を養成てて、大泉寺の跡を繼がせたいッてんですからね、義理にも遣らない理由には行かないぢやありませんか。」
「だッて、小母さん詰らないわ、坊樣なんか。厭な事た。龍ちゃんが可哀想ぢやありませんか。」
「其れアお俊ちゃん、昔時の坊樣の事てさアね、今はもう貴方、頭を圓めて、風俗こそ違ふ樣なものの、些とも變つた事がないんですからねえ。それに、彼の御寺はね、大層資産の好いお寺なんですからね、彼寺の御住職に成りゃ、龍坊だッて此樣な幸運な事は無いんですからね…。」
と談話して居た時、遙か柳町の方から威勢好く駈けて來た腕車の音、ごとりと門口に止つて、おやと思ふ間もあらせず、戸を明けて入つて來たのは二人の下駄音である。
耳を澄まして居た老女は、
「誰だらう。」と呟きながら、脚の長い置洋燈を上り口の見える樣に置更へて、皺の寄つた額を最ど顰めて彼方を眺めた。
障子ががらり開くと、蒼白い顔の、脊の高い、吾妻外套を着た束髪の女が、
「婆や、何うも久く。」と馴々敷く聲掛けて上へ上つた。
「誰方でございます？」と此方はます／＼額を皺だらけにして、洋燈の笠の下から覗いてゐると…、
「わ、た、し。」と甘えた樣な語調で云つて、さらさらと裾の擦れる音が此方に近付くと、香水の馨がぷーんと鼻を衝く。

「あらッ！」と老女は吃驚したが、むツくと起上つて、「まア、玉枝様ぢやありませんか、まア何うも……。」

「おや、お客様なの？」と玉枝は小しゆんの後姿を見ると、敷居の上に立止つた。

玉枝の跡に従いて、體裁悪相に入つて來たのは、今夜春木座の前に居た、玉枝から龍ちやんと呼掛けられた其の少年である。

「おや、龍太郎も御一緒だツたんでございますか、」と婆やは少年を見るとまた驚いて、「まア、何うしてでございます？」

「なアに、何うしたんでも無くツてよ、私もね、今日春木座へ行つたのよ、然うするとね」と玉枝は小しゆんを訝し相に見遣りながら、火鉢の傍に進まうとすると、

「まア玉枝様、何卒此處に御居で遊ばして下さいましよ。」と手早く佛壇の前の物を片寄せて、客を其處に請じた。

「宜くツて、此處へ坐つても、」と玉枝は笑ひながら坐つて、「一眼だねえ、坊様にでもなツた様だわ、佛様の前になんか坐つて。」

老女は龍ちやんに言付けて、小しゆんの前にある火鉢を玉枝の前に運ばせ、自分は洋燈を持つて來て、さて年寄のくど／＼敷く、玉枝に御無沙汰のお詫を述べた。

談話の前後でも大概分つてるが、此のお鶴と云ふは、十年ばかり前まで玉枝の邸に奉公してゐた女である。其の頃は、玉枝の叔父、即ち長い間農商務省の或る局の長を勤め、従何位と云ふ位階まである、眞宮某と云ふが存生中であるのだ　其後、お鶴は事情有つて暇を貰ひ、亡兄の遺兒の龍太郎の世話を爲て遣らなければならぬ事になり、種々と困しい辛い境涯を經來つて、今は此の戸崎町に一戸を構へ、自分は傳通院前のある呉服屋の仕立物と、近所の女兒等に裁縫の稽古を爲て遣り、龍太郎は氷川田圃の工場の筆生に雇はれて、今日の様な生活をする迄にはなツたのである。また、眞宮の家は今は玉枝の弟に當る辯護士某の代であるが、玉枝は眞宮の總領娘な所から、少なからぬ父の遺産を配けて貰ひ、弟の家の近所に別戸を構へて寡婦暮しをしてゐるのだ。そこでお鶴婆やは、本來を云へば眞宮家にも玉枝の家にも、時々御機嫌伺ひに行く可き筈であるが、今奉公して居る者共と口が合はぬとか氣が合はぬとか、些細な事から足が遠くなツて、近頃では一年に二度の盆暮の御見舞を漸とする位になツてゐるのである。であるから、今夜玉枝に來られて、年寄の様でもない此様な狼狽方をし、また長々しい詫言をも陳べたのだ。

玉枝は、お鶴の言ふ事など耳にも懸けず、只管此方には背後向に坐つてる小しゆんと、龍太郎ばかりを眺めてゐたが、軈て婆やの言葉途切れると、縫珍の手提から紙幣一枚を包んで、

「婆や、是ア眞の僅少だけどね、お土産のお印！」

「まア玉枝様、貴方、此様な頂戴物致しましては……。」とお鶴がまたも饒舌り出さうとする様子なので、

「其様な、お禮なんぞ云はなくツても可いよ、默つて取つとお置きよツ。」と肝癪聲で云つて、「大事の龍ちやんを借りたんだからね、些多お禮を爲なきやならないんだけどもね、お禮はお禮で跡で爲てよ、おほゝゝゝ。」

「おほゝゝゝ、宜うございますとも。」とお鶴は其の包んだ物を押戴いて帯の間に挾みながら、「それでも、玉枝様、何うして龍にお逢ひ遊ばしたんでございます？」

「あら厭だよ、また彼様な事を云ふよ、だから春木座で逢つたツてぢやないかね。」

「おや、貴方も春木座へお出で遊ばしたんですか。」

「あゝ然うよ、行つたのよ。其れからね、龍ちやんが厭だツてのを無理に引張り出してね、二人でお飯食べに行つたの、而したらね、まア聽いてお呉れよ、憎らしいぢやないか、私見た樣なお婆さんの御馳走なんか、甘くないツて、逃げようとするんだもの、本當に困つちまツてよ、ねえ龍ちやん、」と笑つた眼で龍太郎の方を見遣り、「何うしたの、何故其樣な處に居るの？此方へお出でなね、此處へよ。」

龍太郎は微かに點頭いて、

「え、此處で可いんですから。」

「あら、婆や、彼の通りなんだもの、邪險で、ほゝゝゝ。」と笑つたが、覗く樣に首を傾げて、「龍ちやん、矢張り厭なの？側へ來るだけなら可いぢやないかね。」

「龍坊や、此方へお出でなね、彼樣なに仰有るんだから此處へお出でよ。」とお鶴は茶を汲んで出しながら、「此樣な番茶なんざお口に入りますまいけれど、何卒一つ。」

「あ、有難う、お茶は澤山だからね、お冷水一杯お呉れな。」と云つて、また態とらしく笑顏を作り、「後生だからね、龍ちやん、一杯持つて來てお呉れな。」

「貴方、お冷水なんぞ上つて可いんでございますか。」と心配相な顏をする。

「あゝ可いとも、龍ちやんのお酌でね、少し飮過ぎたもんだから、」と云つて、指輪の煌々する手でひたひたと顏を撫でて、「紅アくなツてるだらう、婆や。」

「いゝえ、些とも紅くなんぞなツてや致しませんよ、何時も、眞に好いお色艶で、」と云つて、背後に居る龍太郎に、「龍や、龍坊、お前急いでね、お冷水一杯釣つて來てお上げよ。」

「あら、今なら汲置の方が冷たくツてよ婆や。」

「いゝえ、使澗しの水でございますし、井戸なら直ぐでございますから、」とお鶴は龍太郎を見上げて、「何を愚圖愚圖してるんだよ、速く汲んでお出でツて云ふのにねえ。」

「あら、婆や强情だねえ、汲まなくツても可いツて云つたら……。其樣なに叱ツちや私が困るわね、使澗しだらうが何だらうが、龍ちやんが持つて來て呉れる水なら、中毒つて死んだツて構やしないわ。」

「ほゝゝ、如何な事にも、餘り御冗談が過ぎるぢやございませんかねえ。」

「ぢや叔母さん、汲まないでも可いのかい。」と龍太郎は體裁惡相に云つた。

「あゝ、可いとも龍ちやん、其處に有るの持つて來てお呉れ、お前に其樣な荒業爲せちや濟まないんだからね、何樣な水でも、龍ちやんに飮まして貰ひたいのよ。」

「ぢやれ、龍坊や、其の洋杯を綺麗に濯いでね、」と指圖しながら、お鶴は洋燈を持つて臺所と中仕切の障子の際まで立つた。

而ると、今迄火鉢も燈火も引上げられて、寒い所に獨り兀然として居た小しゆんの顏が、玉枝の方から判然と見える樣になつた。

「おや、」と玉枝は驚いた語調で云つて、思はず眼を睜つた。

「何でございます？」とお鶴は、自分の影で暗くなツてる玉枝の方を振返つた。

「婆や、其所に居る姉さんは何ぢやないか、今夜春木座で淸元語つた、何ぢやないか、彼の、小しゆん樣とか云ふ人ぢやないか。」

「お俊さんでございますか、え、然うでございますよ。」

「然うだらう、まア、お前さん、」と玉枝は小しゆんを覗く樣にして、「初めて。私はね、眞宮てもんですけどね、何卒お心安く。」

小しゆんは微に點頭いたが、玉枝には面を背向けて、

「はア、何卒。」と震聲で云つた。

「私ア、遊藝なんか疎いけどもね、何にしろ、小しゆん様は大變な人氣ぢやないかね……。」とお鶴に云ふのか小しゆんに云ふのか分らない言樣をしたが……。

婆やは洋燈を持つて、龍太郎は洋杯を盆に載せて玉枝の前に來た。

「私ア、實に驚いて了つてよ、藝人て者は、彼樣なに大騒ぎやられる者かと思つて、」と云ひながら、水を一口呑んで莞爾笑ひ、「おゝ美味いこと、龍ちやんに貰つたんだから、格別に美味い。」

龍太郎は衝と立つて叔母の背後に、小しゆんとも離れて、小さくなツて坐つた。

「ほゝゝ、左様でございますかねえ、龍坊位でお間に合ひますなら、お易い御用でございますことねえ、おほゝゝゝ。」

「結構よ、私アもう、悉り龍ちやんに惚込んぢまツたんだもの、」と洋杯を下に置いて、「可いだらう婆や、可けないかねえ。」

「えゝ、貴方結構でございますとも。おほゝゝ。」

「ぢや何うだらう、私をお嫁にして呉れまいかねえ……、ねえ龍ちやん、」と首を伸して、また、「龍ちやん、お前如何なの、矢張り厭? お嫁に爲てお呉れよ、可いだらう、ねえ。」

「僕ア、其様な事知りません。」と龍太郎は漸とのことで云つた。

「婆や、知らないだツてよ、おほゝゝゝ。」とお鶴と顔見合はせて笑つたが、「知らないなんかツて云つても、私が肯かないよ、男の癖に、其様なことを云ふツてが有るものかね、ねえ婆や、」と云つて小しゆんの方を見て、「ねえお前さん。おや、お前さんも、もツと此方へお出でなさいよ、其所ぢや寒いだらうから、ねえ小しゆん様。」

「はア。」と云つた切り小しゆんは其所を動かずに居て、時々額越しに玉枝の様子を視て居る。

「藝人の様でもない遠慮深いのねえ。」と呟く様に云つて凝然と小しゆんを視詰めて何か考へる様であつたが、急に眞面目切つた聲をして、「婆や。」

「はい。」

「此の姉さんは何なの? お前に裁縫でも致はつた人なの?」

「お俊さんですか、いゝえ。」

「それぢや何? 龍ちやんのお友達?」

「然うでございます、まア、友達でございますよ、それにね、」と小しゆんの方を見返り、「つい此間まで、龍の行く工場へ、矢張り通つてお居でなすツたものですからね……。」

「然う、工場へ行つたんだツて? ぢや女工なのねえ、」と笑つた眼で小しゆんを珍らし相に眺め、「でも、女工なんぞして、何うして彼樣な藝があるんだらう、感心ねえ、矢張り、性質器用な質なんだねえ……。幾歳?」

「お俊さんは、龍に一歳上でございますよ。」

「おや、十九? 私はまた、せいぜい十七にもなるかと思つてたよ、大層若く見えるのねえ、容貌の好い人は徳だねえ婆や。」

「まア、容貌と云へば、貴方様こそ、何時もお美しうございますねえ。」とお鶴は玉枝の顔を眺めて、「此の夏伺ひました時に、好い御縁談の口がお有んなすツた様でございますが、彼の方は如何なすツたのでございます?」

「縁談? 辭つちまツたのよ。」

「お辭りなさいましたツて、まア。」

「私でもう、縁談なんか眞平御免よ。此の頃もね、其様な事を言込んで來る人があるんでね、もうもう、煩くツて煩くツて、家に居るのも厭になツてよ。」

「おや、左様でございますか、今度は何方から?」

「湯島に居る華族でね、斧岡とか何とか云ふ人

なの。」と云つて、龍太郎の方を見ると笑を含んだ眼をして、「私、婆やの處へならお嫁に來たいんだけれど、龍ちやんは、お俊ちやんで無きや氣に入らないのねえ。」

「小母さん、私もう歸りますから。」と今まで默つて居た小しゆんが云つた。

「然うですか、もう遲くもなツたからねえ。」とお鶴は輕く點頭いた切りまた玉枝に向いて、「まア、華族樣からでございますか……。」

「華族だツて婆や、」と云つて、玉枝は小しゆんを見遣り、「ま、お前さん、未だ可いぢやないかね。」

「は、有難う。」とばかり小しゆんは起つて行つた。

玉枝は目を外さずに其跡を見送つてゐたが、

「ぢや失禮。私の家へも些と遊びに入らツしやいな。」

お鶴は、玉枝の言葉で氣が着いた樣に背後を振向き、

「お俊ちやん、阿母さんへも宜しくねえ。」と云つて、また玉枝の方に向直り、「華族樣なら貴方、結構ぢやございませんかねえ。」

「だツて婆や……。」と玉枝は此方を見返ると、お鶴の背後から頸を長くして小しゆんを見送つてゐた龍太郎は、慌てて俯向いた。

小しゆんは、玉枝にもお鶴にも返辭を爲ずに家外へ出た。腕車のけこみに腰を掛けて眠つてゐた車夫は、吃驚して起上り樣、片手を輪の動かぬ樣に抑へて小しゆんを見上げると、小しゆんは其所に突立つたまゝ乘らうともせずに居る。

「姉さん、如何か爲せえしたか。」

小しゆんは其れにも答へなく、久く默つてゐたが、決心つた樣に二歩三歩立戻つて、戸の内を覗込んで、

「あの、龍ちやん鳥渡！」

此う呼んだか呼ばぬに、ばた／＼駈けて來て、がらり障子を明けて、

「何？」

「あのね、」と格子に額を押着けて、何やら云はうとした時、

「何うしたの？」と是も駈けて來た玉枝が、龍太郎の背後に起つて、戸外を見下した。

小しゆんは其れ切りで默つて了つた。框に立つて居る男女も默つて居る。久くすると、

「龍ちやん、左樣ならよ。」と小しゆんは震聲で云つて、直ぐ樣腕車に乘つた。

「左樣なら。」と玉枝は高い聲で云つた。

腕車は威勢好く駈出した。

第六

「蔦ちやん、大層お精が出ることねえ。」

「あら、姉さん入らツしやい。」と蒼白い痩せた顏の小娘が、三味線を下に置いて、「阿母さん、阿母さん、お俊姉さんが入らツしてよ。」

此邊に彷徨く職工を主なる對手に、銘酒屋、射的店などごた／＼と軒を並べた柳町の裏通に、二階家の一軒建、卽席御料理琴風亭と、仔細らしき船板看板鳥渡目に着く小料理屋がある。つい此の暑い頃までは、顏を白く塗つた酌女の三四人も居て、毎夜の樣などんちやん／＼に、他から羨まれる程の繁昌を續けたのであるが、何うした事か、刑事巡査に踏込まれる樣な騷が二度も續いて、其の酌女どもも何處にか姿を隱し、二階の燈火の點かぬ夜の多い樣になり、營業主の名も、其所だけに紙を張られて、なほと云ふ女名前に更はるやうになり、此頃では、近日中廢業して、他に引越でもするものの如く噂を立てられる樣になツたのである。

さて此のお直と云ふが、お俊の妹に乳を飲ませた者の娘であるのと、また自分の娘のお蔦が、お俊の母から清元を教はつてると云ふ所から、雙方親身も及ばぬ程に親しく行通をしてゐ

るが、就中お俊は、彼の工場を退き、藝人になると極つてからと云ふものは、殆ど每日の樣に此所に遊びに來るのである。

水口の方で何か洗物でもして居たらしいお直は、今しも娘に呼立てられたので、手を拭きながら茶の間に入つて來ると、

「おやお出でなさい。今日は大變にお暖かですねえ。」

「然うですねえ、本當に暖かですねえ。」とお俊はお直と對合つて火鉢の此方に坐つた。

お直は娘に言付けて、お俊に更紗の座蒲團を薦めさせ、思出した樣に、

「然う／＼、お俊さん、一昨日の晩は何うも有難うござゐました、お蔭さまで大變面白うございましたよ。」と笑顔を作り、一昨日の晩、お俊から中等切符を貰つて、娘と龍太郎と三人連で春木座の演藝會を聽きに行つた禮を述べた。

お直は既う三十五六にも成らう、額の廣いのが少し目障りではあるが、顏色も白く目鼻形も尋常で、髮は大形の丸髷、今朝あたり結うたと見えて一絲も亂れず、白ッぽい子持縞の雙子に、繻子と襟の掛つた布子と、同じ樣な物の二三度も水を潜つたらしい袢天を被つて、笑顔を崩さずに應對してゐる樣子は、愛嬌を資本の客商賣とは云へ、何うしても十三歳の娘の親には見えぬのである。

お俊は、不斷着ではあるが近頃仕立てたばかりの瀧島の綿銘撰の綿入と、新秩父の矢絣の袢天、帶は黑繻子と朱い中形のメリンスの腹合せで、紅入友禪の前掛を締めてゐるが、襦袢の衿の紫地である故か、地質の白い顏が、今日は蒼味さへ帶びて、頗る血色が良くなく見える。

お直は、一昨日の夜の演藝會の噂を爲ながら、早くも茶を入れたが、元氣無く其の茶碗に手を掛けるお俊の顏を凝と見守り、

「お俊さん、何處か不快いんですか。」

「いゝえ別に、」と面を上げて、「何故？」

「だッて、何だか顏色が惡いぢやありませんか、本當に、何處も何ともないんですか。」

「然う、其樣なに厭な顏色なの？」と淋しく笑つて、傍に自分を視詰めて居るお蔦を見返ると、

「あゝ、本當に蒼くッてよ、嘘だと思ふなら鏡ごらんなさい。」と速くも母の背後の簞笥の上から髮結箱の前に起つてゐる硝子鏡を取ツて來た。

「なアに、蔦ちゃん鏡なんか宜くッてよ。」と云ひながら、鳥渡其の鏡を見て、またお蔦に返し、急に故意とらしく片頰に笑を見せ、「小母さん、あの、私今朝蔦ちゃんから聽いたんだけどね、一昨日の晩、夜更くなツてから、龍ちゃんが泊りに來ましたツて？」

「あ、來ましたよ。」と首肯きながら笑つて、「何でも、もう一時時分だッたでせうよ。私の處ぢや、もう皆な寐て、餘程經ッてからですよ、『小母さん小母さん』て戸を叩く者があるんでせう、私だッて、豈夫龍ちゃんが來ようた思はないもんですからね、誰方ですッて聽くけれども、只だ『私です』て云ふばかりでせう、而ると、是が目を覺してね、」と娘を笑ひながら見返り、「怖がッて、私に抱着いて離れないんですもの。」

「然う？」とお俊も笑ひながら首肯き、「それから明けて遣つたの？」

「ホゝ、其れから明けて見ますとね、龍ちゃんが立つてるぢやありませんか。」

「然う？ 一人なの？ 誰か追蒐けてでも來なくッて？」

「いゝえ、其樣な樣子はありませんけど、」と驚いた顏をして、「其れぢや、何かあッたのですか。」

「いゝえ、私も熟くア知らないんだけれど、」と頭を振つて、「龍ちゃん、何か云ひまして？」

「それがねお俊ちゃん、幾ら訊いても云はないんですよ。昨日の朝歸る時だッて然うなんです

よ、種々に訊いたけれども、『別に何にもないんです』ツて、此れんばかしも言はないんですよ、彼様な温和い兒ですからね、厭だツての、無理に訊くのも氣の毒ですからね、私は大方、締出しでも食つたんだらうと思つてましたが、」と語を切つてお俊を眺めて、「お俊さんには何か云つてまして？」
「いゝえ、私ア彼の日ツ切り會ひませんのよ。」
「おや、然うですか。」
「あゝ些とも……。此家へは來ましたらう。」
「いゝえ、私共へも彼時ツ限りですよ。」とお直は、解せない、可笑な事だと云ふ様な顔色をして、「如何したんでせう、豈夫、日外の話の様に、坊様になツたんでも無いでせうしね。」
「なアに、坊様なんか成る氣遣ありやしませんよ。」と苦笑したが、獨語の様に、「本當に可笑いよ、おほゝゝゝ。」
「如何したの？　何か可笑な事でもあるんですか。」
「餘り馬鹿らしくツて、話すのも厭だわ。」と笑つたが、「あの、一昨日の晩、龍ちやんは何でせう、小母さんに別れて、別に歸つたでせう。」
「えい、龍ちやんの叔母さんが奉公してたツて云ふ、彼の何とか云ふ、厭な後家さんに連れられて……。」
「あゝ、彼の後家さんよ、彼の後家さんがね、」と言出さうとしたが、何故だか急に語を切り、改まつた語調で、「お直さん、何様な風でした、彼の後家さんが、龍ちやんを連れて行く時の様子は？」
「彼の後家さんですか、何様なツてね、」とお直は眼を据ゑてお俊を見てゐたが、さて其の時の大略を語出した。
即ち、昨夜の演藝會で、二階の大入場に書生と職工との喧嘩が始まつた爲に、小しゆんが半途にして床を下りた後の事である。何時までも其の喧嘩が靜まらないので、高座では簾を巻上げたばかり、未だ誰も見はれない時、お直母子と龍太郎の居る前船へ、茶屋の若者が來て云ふには、手前方へ駿河臺の眞宮様がお出でになツて、鳥渡入らして下さる様にと仰有いましたと、氣の進まぬ龍太郎を無理に連出したので、お直は下足札を持つて一緒に階下に降りて行くと、今まで高土間から龍太郎の顔ばかり眺めて居た束髪の女が、直ぐ梯子の脇に立つて居て、人の見て居る前も構はず、龍太郎の手を曳いて洒蛙洒蛙と出て去つたと云ふのである。
　此の談話を默つて聽いて居たお俊は、この時頬の邊を赧くした顔を上げて、
「まア、厭な人ねえ。」と額に皺を寄せた。
「本當に、私も吃驚しちやツたんですよ、何だツて、服装を見れア華族の奥様も跣足ツて服装でせう、それで居てて、龍ちやんが行くと云ふと、相格を崩して了つて、其の態ツて見られたもんぢや無いんですよ、只だもう夢中に爲ツ了つてね、はツはツはゝゝ。」とお直は耐らな相に笑つて、「本當に、他で見て居る者が恥かしい位でしたよ、だからもう、可哀想に、龍ちやんは小さく爲つて了つてるんでせう……。其れア、餘程可笑かツたんですよ、はゝゝ、ほゝゝ。」
「然う？　其様なでしたの、ほゝゝゝ。」とお俊は口でばかり笑ひ、「厭な人だことねえ。」
　傍で母とお俊の顔を見廻しながら、同じ様に笑つて居たお蔦までが、
「本當に姉さん、厭な人よ、舞臺の方なんか些とも見ないでね、只だ龍ちやんばツかし見てるのよ、而してね、大きな聲でお饒舌爲るもんだからね、皆様に種々な事云つて叱られてよ、ねえ阿母さん。」
「あゝ、」とお直は點頭きまた笑顔を作つて、「お俊さん、而して、今の可笑い話ツてな如何した

んです、龍ちやんが、彼の後家さんに引懸けられでもしたんですか、然うなんですか。」

「否え、其樣な事は如何だか知らないけど、此の間の晩ね、私、彼の龍ちやんの家で、彼の後家さんに逢つたのよ。」

「おや、然うでしたか、彼の晩に？　まア、其れぢや龍ちやんの家に行つてたんですね、まア、何うも……。」

「いゝえ、然うぢやないのよ、私ね、深更くなツたけど、歸途に龍ちやんの家へ寄つたのよ……。」

とお俊は其の夜の事を語り出した。鶴屋から松源、松源から美代屋と客に呼ばれて廻つた事から、龍太郎の家に寄つて話して居る處へ、玉枝と龍太郎とが合乘で歸つて來た事、お鶴が玉枝に世辭を並べた事、お俊には更に構はなかツた事、厭がる龍太郎をして無理に玉枝の機嫌を取らせようとした事、玉枝がお俊と龍太郎の間に何か怪しな關係でも有るものゝ如くに邪推して、頻りと厭味を並べた事を落ち無くお直に說いて聽かせ、

「だから、私ア然う思ふのよ、龍ちやんだツて龍ちやんの叔母さんだツて、既う坊樣に爲るなんて事は止して了つたらうと。だツて、昨日は日曜なのに、私の家へもお直さん家へも、終日來ない處を見ると、彼の後家さんに引張られて、方々步廻つてたに違ひないんですもの……。」

「まア然うですか、ぢや既う、龍ちやんは何ですかねえ……。」と云つて急に語を切り、笑を含んだ眼にお俊と顏を見合はせて、「其れにしちや可笑いのねえ、私の家へ泊りに來るなんて、如何したツてんでせう？」

「如何したか知らないけど、昨日はもう然うに違ひないんですよ……。」

「何しろ、厭な奴ア彼の婆アだよ、無暗に慾ばかり突張ツてて。」

「叔母さんが彼ぢや、龍ちやんだツて如何も仕樣が無いんでせう、齡は少いんだし、彼樣な內氣な性だし、ねえ？」と相談でもする樣にお直の顏を覗いた。

「本當に憎いねえ、女の子を賣つて食ふツて事はあるけれど、彼の婆さんのは男の子で左團扇を極め込まうてんですからねえ、呆れツ了ふねえ。其樣な時アまた、お俊さんも默つてないで、何とか云つてお遣りなされア可いのにねえ。」

「何時？　一昨日の晩ですか。」

「あゝ。なんぼ奉公してた家の後家さんが來たツて、お俊さんに、急に其樣な不愛想を爲るなんて、餘りでさアね、それぢや、義理も人情も知らないツてもんでさア、私がお俊さんなら、其樣な時に默つてやしない。」

「だツて、仕樣がないわ。」

「燈火から火鉢まで取上げて了ふだらうし、談話したツて對手にも爲らなからうし、歸ると云つても見送りもしなからうし……、其れぢやアお俊さん、餘り不實でさアね、」とお直は力を入れて云ひながら、煙管で火鉢の端を音のする程に突き、「構ふ事ア無いから、龍ちやんを引張出して、吃驚させて遣れば可いんだ。」

「ほゝゝゝ。だツてお直さん、其樣なことが……。」

「私なら然うしまさアね。彼樣な、多淫後家なんかに負けてやしませんやね、何樣な財產家だか知らないけど、拵へる氣に爲れア、此方だツて、お金なんか幾らでも出來まさア、此の間だツて彼樣な、春木座が破返る樣な人氣ぢやありませんか、良い旦那でも取らうツてなら、其れこそ網の目から手の出る程ありまさア、負けませんとも、お金で張合ふツてなら……。彼樣な後家なんか何です……。」

「張合ふなんて、其樣な事は難かしいわ。」

「ですが如何でせう、」とお直はお俊の云ふこと

など耳にも入らぬ様子で、「其樣なにして、大きな紙幣かなんか、彼の皺だらけな婆アの額に投付けて遣つたら‥‥。可笑いでせうねえ、何と云ふでせう？」
「私ア、龍ちやんが何樣な人をお神さんに爲たからツて、別に何とも思やしないんだけれど、其れだツても、龍ちやんの叔母さんの仕樣が餘り酷いと思ふわ。」
「ですから、其樣な事して遣つたら何うでせう？　此度は、反對に彼の後家さんの方を邪魔物にしませうか、必然さう爲ますよ、彼の慾張のこつたから、おほゝゝゝ。」と氣味の好い樣に笑つて、「而して、龍ちやんの手を曳張つて、態ツと彼の後家さんの前を通つて見せたら如何でせう？　何樣なに好い氣味でせう、ほゝゝゝ、おほゝゝゝ。」
「だツて、龍ちやんは何うなんだか分らないもの。其樣なに、此方でばかし決めたツて仕樣が無いぢやありませんか。」
お直は漸と笑を止めて、
「え　仕樣がありませんて？」と訝し相にお俊を視て、「仕樣がありませんて、何が仕樣がないんです」？
「だツて‥‥。」とお俊は急に口籠つたが、見る見る額を耳の際まで眞赤にして、また、「だツて‥‥」とばかりで俯向になツた。
お直は眞面目切つた顏をして、じろりとお俊を横眼に視たが、
「冗談は其方除けにして、龍ちやんの叔母さんツて人ア、本當に好かない人ですねえ。」と急須に湯を注しながら云つて、西日の一杯に射してる背後の障子を振返り、「蔦や、お前、お稽古が濟んだのかい？」
娘のお蔦は、何時の間にか縁側に出て、何やら切りと口を動かして居たが、母に呼ばれたので吃驚して、
「ま‥‥が、」と解らぬ返辭をして、茶の間に入つて來た。
「何だツて？」と母は娘を見上げて、「あら、また口を動かしてるんだよ、ほゝゝゝゝ、此の娘はまア、何うしたツてんだらうねえ。」
「だツて、お俊姉さんの家で戴いたお菓子なんだもの。」とお蔦は口の端を拭きながら坐つた。
「でも、もう少し前にお飯食べたばかりぢやないかね、能くまア其樣なに入るんだ事ねえ‥‥。お前、それでお腹が裂けアしないかい？」
「お腹なんか裂けアしないわ。」
「裂けないツて？　おほゝゝゝ。」とお直は吹出した。
「おほゝゝゝ。」とお俊も同じく笑出した。

第七

いゝいゝべちやくちやと饒舌りながら七八人の女工が戸崎町の方から銀杏寺院の脇の坂を登つて來たが、麵包菓子、塩酒、卷煙草など賣る店の角で、中で元氣の無い小娘が一人立止つて、
色の蒼い、頰の脹れた、十三四と見える、中で元氣の無い小娘が一人立止つて、
「皆樣左樣なら。」
「おや、お菊さん左樣なら。」
「姉さんへ宜しく。」
「また明日の朝寄つてよ。」
「あゝ、寄つて頂戴な。」と云つて、毛絲の辨當袋を片手に持更へて、一人横町を曲つて行つた。
半町と行かぬに、右側に三軒建の長家がある。お菊と呼ばれた小娘は、此の長家の一番端で、標札に桐澤とある、綺麗に拭込んだ潛格子の家へ、履脱にした木の根の上に、見馴れぬ繻珍の鼻緒の縺つた雨刳の女下駄の在るのを訝りながら家へ入つた。
障子を明くれば此間は長四疊で、向うの隅には、近頃整頓けたと見える、繩で紮げた書籍

箱、角の破れた竹葛籠、抽匣の中から書類の食出してる用箪笥など壁に寄せて積重ね、之をば花筈の紙を張つた衝立で隱してある。また其上には、縮緬を張るに用ゐる木枠をば、左右の鴨居に棚の樣に渡して、寫生畫やら粉本畫やらの卷物を、幾十本となく天井に達くまでに詰込んである。それから其の天井には、羽箒と、大小數十本の刷毛がぶら〳〵下つてる。

「菊ちやん、お歸りかえ。」と隣の茶の間から母の聲がした。

「あゝ。」とばかりお菊は唐紙を明けた。

「おやお歸りなさい。」とお菊の顏を見るや否や言掛けたのは、母と長火鉢を境に對合つてる、姉の三味線を彈く喜代壽である。

「小母さん、お出でなさい。」とお菊はお辭儀をした。

「よくまア、お精が出ますことねえ。さアさ、此處へ入らツしてお取煖りなさい。」と喜代壽は座を半ば退いた。

「は、有難う。」とばかり火鉢の傍へは寄らずに、提げて來た辨當を持つて臺所に起つたが、「阿母さん、姉さんは？」

「姉さんはね、先刻お直さん所へ行つて、未だ歸つて來ないんだよ。」

「然う、もう頭痛癒くなツて？」

「あゝ、もう癒くなツたよ。」と母は臺所から出て來た娘を見上げて、「お前御苦勞だけどね……。」

「あゝ。なに？」と火鉢の傍に坐つた。

「お前、取煖つてからで可いがね、お直さん所へ行ツてね、姉さんに、お師匠さんが、先刻から來て待ツてお出でですから、直ぐにお歸りなさいツて、然う云つて來てお呉れな。」

「ぢや、直ぐ行つて來るよ。」と片膝を立てる。

「なアに、取煖つてからで可いんだよ。」

「寒かないわ。」と云ひながら出て行かうとしたが、「阿母さん、もう日が暮れるねえ、洋燈點けて行かうか。」

「然うさ、まだ明燈點けるにも早いねえ、ぢや出してツてお呉れな、私點けるから。」

「然う。」とお菊は押入から、玉火屋の置洋燈を出して來、「燐寸此處においてよ。」

「本當に感心ですねえ。」と喜代壽は出て行くお菊を見送つて、「お幾歳でしたツけねえ？ 姉さん。」

「菊ですか、三でございますよ。」

「然うでしたか。」と點頭いて、「菊ちやんは、姉さんと違つて圓顏ですのねえ、體格も大きいしさ。」

「えーえ、彼女アもうお潰し物でございまさアね。顏は彼樣なですけどもね、氣は、眞に優しうございますよ、でも、姉思ひでしてねえ、姉さん姉さんて、姉さんの跡ばツかり追つてるんですよ。」

「然うの樣ですねえ。此のもう、氣心の優しいのが何よりでございますよ。姉さんはまア、良い娘さん達お持ちなすツて、本當にお幸福ですねえ。」

「なアに、幸福だか不幸だか知れアしませんよ。」

「だツて姉さん、彼樣な瀧山さんの樣な立派な方が、お俊ちやんに大騷ぎやツてるぢやありませんか。」

「本當にねえ、出て早々、其樣なに御贔屓にして下さるツてのは有難い事ですねえ、それと云ふも、皆なお喜代さんのお蔭ですよ。」

「なアに、私のお蔭なんて、其樣な事はありやしませんけども……。」と云つて、喜代壽は煙管の灰を叩きながら、「昨日もねえ、車夫が歸つて來て、お俊ちやんが、身體が何で來られないツて云つた時に、何樣なに落膽なすツたでせう、私もねえ、何だかお氣の毒の樣でしてねえ……、そ

れも可いけどもねえお前さん、現金ぢやありませんか、おほゝゝゝ。」
此方も笑ひながら、
「何うしたんです？」
「お俊ちやんが來ないツてたらね、厭な顏色して、御酒も飲まなきやお肴へも手着けないでね、歸つて了ひましたよ、なんぼ私だツて、態見ろと思ひましたね、はツはゝゝゝ。」
「ほゝゝゝ、本當に、身體が惡かつたとは云ひながら、瀧山さんと仰有る方にもお喜代さんにも、お氣の毒でしたことねえ。そんな事ですのにまア、」と茶棚の上に載つてる水引の掛つた反物を見返り「此う云ふ結構な頂戴物して、本當に何とお禮申して可いか分りませんのねえ。今に歸つて來ましたらば、今夜は、是非とも上る樣に致させますよ、本當に、然うしないんぢや濟みませんからねえ。」
「然うして下されば、瀧山さんの悅は何樣なでせう、而して、私だツて大威張りでさア、ね御使者の役目が濟んだツてもんですからね。」
「ほゝゝ、然うですねえ。今夜は、是非とも一緒にさし上げる樣に致しますから、瀧山さんへは何卒、お喜代さんから宜しく執成して下さいましよ。」
「えーえ、もうお俊ちやんの事なら、お執成でもお執持でも何でも致しますよ。」と笑ひながら云つて、偕と對手の顏色を覗た。
「おほゝ、何卒何分……。」と此方も笑ひながら云つた。
「ま、今夜はね、只だ連れて來いツてだけですから、私も此うやつて來ましたけれども、今度は姉さん、何樣な御註文が出るかと思ふと、本當に私ア、惴々もんなんですよ。」と始終笑顏を離さず、對手の顏色を覗ひながら云つた。
此く云はれて、母はじろりと喜代壽を眺めたばかり、默つて煙草を喫んで居る。
「先方ぢや其樣な騷ぎだし、正直な所、お俊ちやんだツて……」と口を噤んで了つた。
「ぢや何ですか、お俊が其の瀧山さんにどうか、何してる樣な擧動でも……。」と眼を瞬つた。
「御身代だツて、先刻お話した樣なんですし、顏だツて心だツて、女にしても可い樣な優しい方なんですもの、お俊ちやんだツて姉さん、厭だツて筈がないぢやありませんか。」
「本當に呆れたもんですねえ、手許に置きや、何時までも小兒の樣に思つてますけど、もう其樣な心出すんですかねえ、油斷のならないもんですねえ。」と母は何故か語調を更へて云つた。
格子戸ががらりと明いた。
「阿母さん只今。」とお菊の聲がした。
「おや、大層早かつたねえ、姉さんは？」と母は背後を振返つて云つた。
「姉さんはね、私がね、地藏樣の前まで行くとね、彼方からずん／＼歸つて來たのよ、だから一緒に來たの。」と云ひながら唐紙を明けた。
「お師匠さん、入らツしやい。」とお俊は入つて來るや否や母の傍に坐つて「先晚は有難う。」
「先晚は御苦勞樣。」と喜代壽は莞爾しながら挨拶した。
「俊ちやん、お師匠さんがね、先刻から來て待つてお居でなんだよ。お前また、何時までも歸つて來ないんだもの。」と云ひながら母は急須に湯を注して、「お茶進げようか。」
「あ、一つ頂戴な。」と母から茶を貰つて、「お師匠さん、濟まなかツたのねえ。」
「いゝえ、何う致しまして。あのね、今夜またお座敷ですよ。」
「然う、何誰？」
「何誰だか當てて御覽なさい。」
「何誰だか、聞かない中は分らないわ。」とお俊は笑つて、「ぢや、矢張り昨日の方？」
「當つた當つた。さア行きませう。」と煙草入を

懐に入れる眞似をした。

「昨日は、お氣の毒様だッたのねえ。怒つて居らッしやりアしなくッて？」

「いゝえ、何う致して……。今日は行つて下すッて？」

「あゝ參りませう。ねえ阿母さん。」と母へ相談する樣に云つた。

「あゝ行つてお來で。銅壺が僂湿んでるだらうからね、鳥渡鬢を直してね……。早くするんだよ。」

「あゝ、直ぐ出來ますよ。」とお俊は臺所へと立つて、「暗くなッたねえ。」

「あ、姉さん今洋燈持つてッてよ。」とお菊は洋燈を點けて、臺所の茶の間の間に置いた。

此の茶の間は六疊で、母の坐つてる欅胴の長火鉢の脇には、蠅帳になッてる食廚、其れと並んで桐の茶棚がある、長火鉢と對合つてる向うの鴨居には神棚が設けられて、此れには煌々する御神酒徳利が供へてある、其の下には、古ぼけてるが總桐柾目の重簞笥を初めとして、蒔繪の文庫、鏡臺、針箱、それから袋を被つた煙草盆などが積重なり、其の脇の壁には、二挺の三味線が懸つて、壁と對合つてる唐紙には、縞だけ縮緬の半襟メリンスのお俊の長襦袢が、だらりと衣紋竹に釣られて居、其のまた長襦袢の下には、白木の手垢だらけな見臺が、稽古本、稽古撥など載せた小机と並んでる。

久くすると母は臺所の方を向いて、

「俊ちやんや、お前何着てお出でだい？」

「然うねえ、縞のを着て行かうか。」と臺所から答へる。

「それが可いだらうよ。」と母は身體を痛相に徐に起上つた。

母のお梅は喜代壽より一つ年上であるが、昔時柳橋で全盛を謳はれた程あッて、近年持病のリウマチスに惱まされて、身體が衰弱へたとは云へ、また此の久堅町に引越して以來、人の目に着く場所に出られぬ樣になり、從つて風體にも態にも構はぬ身になッたとは云へ、顏容も齡よりは若く、誰が目にも通常者ならずと思はせる昔の俤が殘つてゐるのである。顏は一面に小皺に刻まれ、鬢の毛半ば白くなッてはゐるが、全體薄皮の色白で、額から頰の邊の艶は今に人に優れて、物云ふ度に笑ふ度に、微に見はるゝ金を塡めた絲切齒も、愛嬌にはなれ厭味には見えぬのである。服裝は幾度か水を潛つた木綿物の綿入を厚く着た上に、病身の故か、一圓に繼の當つた小紋縮緬ののと、縞柄の分らぬ程になッた細眞子ののと、二枚の綿入袢天を厚く重ねてゐる。

簞笥の前まで歩寄つた母のお梅は、徐に上の抽匣を引いて、先づ取出した敷紙を擴げて、一品宛置陳べたのは、瀧縞の絲織の小袖、金茶繻珍の丸帶、緋に白く牡丹を染拔いた帶揚、藤色の丸打の帶留。それから其の下の抽匣から取出したのは、中形メリンスの腰巻、白キャラコの足袋。次に下の小抽匣を明けて、此處からは繻珍の紙入、鼻紙、鶯色の絹手巾。續いて鏡臺の下の抽匣よりは、二十年も前に流行つた、金銀象嵌の松葉形に五分珠珊瑚の簪、蒔繪の政子形の櫛……。

「姉さん其れから、腕車を何卒、」と喜代壽は、今しも長襦袢に手を通したお俊を眺めながらお梅に云つた。

「あゝ然う然う、」と母は初めて氣が着いて、「菊ちやんや、お前當の家へ行つてね、今姉さんが出る處だから、一人乘三臺持つて來てお呉れッて、然う云つてお出で……。」

「あゝ。」と姉の側に坐つて居たお菊は忙しく起上つた。

「菊ちやん、それからね、何卒速くしてお呉れッて云つて下さいな。」と喜代壽が口を添へた。

「あゝ。」

「お氣の毒ですねえ菊ちやん。」

「いゝえ。」とお菊は駈出した。

母は手傳つてお俊に着物を着せてゐる。お菊は呼吸を喘ませながら歸つて來て、

「阿母さん、然う云つて來てよ、あのね、」と呼吸をせか〳〵してゐる。

「おや、早かつたこと。來るのかい？」と母はお俊の帶を締めて遣りながら訊くと、

「あゝ、直ぐね、參りますツて。」

「然う、誰が來る風だツたい？」

「あのね、親方とね、辰さんとね、二人ね……。」と云ひながら姉の前に坐つて、喘々肩で息してゐる。

「菊ちやん、如何したの？ 其樣なにまア、」とお俊は妹を見下して云つた。

「何故、其樣なに駈けて歩くだらうねえ。」と母も眼を圓くしてお菊を眺めた。

「だツて、姉さんが行ツ了ふと大變だもの。」

「行くたツて、腕車が來なきや行かれないぢやないかね。」と母は可笑いのを耐へて云つた。

「だツても。」

と云つたのが可笑かつたので、三人一同に「おほゝゝゝゝ」と笑出した。

彼此する間にお俊の服裝も出來た。

「へえ、お待遠さま。」と戸外に車夫の聲も聞えた。

母はまた火鉢の前に來て腰を下し、急須に熱い湯を注しながら、鏡へ背後向に立つて、切りと帶を弄つてるお俊に、

「俊ちやん、緩いかい？」

「緩かないけど、皺が寄つてるもの。」

「それぢや爰へお出で。」と母はお俊を呼んで、横に手を突込んで帶の皺を直して遣る。

お俊は其處を撫でながら、火鉢の脇へ坐つて、

「お師匠さん、どうもお待遠樣。」

「さア、それぢや出掛けませうか。」

「ま、お茶一つ。」と母は止めて、喜代壽とお俊に茶を注いで遣り、「俊ちやんや、お前瀧山さんに會つたらね、熟くお禮を申してお吳れな、此樣な、結構なお土産を頂戴したんだから。」と棚の上から水引の掛つた大島紬を下して示せた。

「おや、然う、瀧山樣、家へ入らしツて？」と云つたが、云つてる間に、驚いた顏が次第に赧くなツた。

「いゝえ、然うぢやないのよ。」と母は、昨日松源から呼びに來た時に行かないので、喜代壽に見舞旁、今日此品を持たして、お俊を呼びに寄來した事情を簡短に語り、「だからね、熟くお禮を申上げてお吳れよ。」

「あゝ。」とお俊は許し相に母と喜代壽の顏色を見廻した。

「さ、お俊さん。」と喜代壽はお俊を促し、お梅とお菊に挨拶して起上つたが、また氣の着いた樣に坐り直つて、「姉さん、旦那がお歸りなツたら何卒宜しく。」

「ぢや阿母さん、行つて來てよ。」

「あゝ行つてお出で？」と母は唐紙に掴まりながら上り口まで出た。

「阿母さん、また今夜も、阿父さん醉つてお歸りだらうねえ。」と履物に足を掛けたお俊が心配相に云つた。

「大方然うなんだらうよ。」と母も同じく元氣の無い聲で云つたが、また氣を取直したらしく、「ま、阿父さんの事は心配爲ないでも可いから、まア早くお出でな。」

戸外も眞暗になツてる。お俊も喜代壽も腕車に乘つた。戸口に立つて見送つてゐたお菊は、「姉さん姉さん。」と急にお俊の傍へ駈寄つた。

姉妹は何か小聲に話してゐたが、

「姉さん必然よ。」とお菊の聲。

「あゝ必然とも。待つてお居でな。」と腕車の上

から笑を帶びた姉の聲。
「あゝ、寐ないで待つててよ。」

第八

　秋の日靜に暮れて、つい先刻まで彼樣なに多かつた人影の、俄に何處に消えたかと驚かるるばかりに、上野の公園は淋しい所と變つた。風が無いので落葉一つ動かない。空を見上ぐれば、未だ星は尋ね當らぬが、梢に懸つてる弦月は次第に光を增して來る。博物館の門の前を、駄菓子屋の屋臺店を引いて歸る者がある、其の車のきい〳〵云ふ音が森に反響して、一段淋しい感を起させる。
「それが、矢張り騙されてるんぢやないかね。」
「ですけれど、今迄其樣な人ぢや無いんですから……。」
「今迄だツて、何樣な事してたか知れるもんかねえ。」
「だツて、其れア……。」
「だツてだツて、お前だツて徒に着いてたんぢや無からう。」
「其れア着いちや居ませんけれど。」
「着いてなけりやお前、內證で何樣な事してるか分るもんかアね。」
　辨天前の新坂を話しながら登つて來た男女は玉枝と龍太郎の二人である。玉枝は斜綾羅紗の吾妻コート、頭髮は輪の大きい銀杏返しで、額は見違へる程思切つた厚化粧をしてゐる。龍太郎は米琉の龜甲絣の綿入に同じ書生羽織、紺の絹天の鳥打帽を戴き、足袋も下駄も買つたばかりと思はるゝ新らしいのを穿いてゐる。
「姉さん、お合乘でお供なりませんか。」と客待をしてゐた車夫は玉枝の傍に步寄つた。
「奧さん、溫泉までお供仕ませう。」とまた一人が調戲ひながら聲を掛けた。
　玉枝は返辭も爲ずに平氣に步いて行く。
「如何です、お安く參りませう。」と云つても默つて行くので、「小恥かしくもなく、好く彼樣な、若えの引張ツて步きアがるなア。」
「あーあ、」と一人は伸をしながら、「呼く晴れてるなア、明日の日曜は團子坂ア大當りだぜ。」
　玉枝は步を速めて龍太郎に追着き、
「お待ちなねえ龍ちやん、お俊ちやんを惡く云つたツて、其樣なに怒らなく〳〵ツても可いぢやないか、」と龍太郎の手を摑んで顏を覗込み、力を入れた聲で、「ねえ龍ちやん。」
「然うぢやないんですけれど、車夫が煩いから。」と龍太郎は離れて、東照宮の方へ行かうとする。
「其方ぢやなくツてよ、此方へ行くんだわね、」と素早く袂を捕へて、「私と一緒に行くの厭になツて？」
「然うぢやありませんけど……。」
「もう、厭だツて云はうが何と云はうが、聞きアしないよ。婆やから借りて來たんだもの。」と押へる樣に云つて、「今度は、離しアしないから可い。」
　龍太郎は體裁惡さうに、誰も居らぬ四邊を見廻しながら、
「一體何處へ行くんです？」
「好い處へ……、何處だツて好いぢやないかね、お俊ちやんに發見らない處なら。」と龍太郎を笑ひながら睨めて、「其樣なにも怖いのかなえ。」
　龍太郎は無言で、俯向きながら步いてる。
「其樣なに惴々お仕でないよ、今頃はお俊ちやんだツて、お客でも引張つて、何處の待合へでも行つてらアね。」
「ぢや先刻の、待合の話ア本當ですか。」
「池の端の待合に、斧岡ツて人と一緒に入つたツて事かい？　あゝ本當とも、本當位ぢやない、私ア、一昨日の晚確に見たんだもの。ちや龍ちやん、私の云ふ事疑つてて？」

「然うぢやないんですけれど……。」
「お前だツて然うぢやないか、お俊ちやんに會はうと思つて行つたツて、何日も家に居ないツてぢやないか、其れア何だアね、方々の客を引張つて、ほツつき歩いてるからなんだアね。」と云つたが、また龍太郎の顏を覗いて、「お前然う思はなくツて？」
「ですけれど、今迄其樣な人ぢやありませんから。」
「まだ其樣な事いつてるの。お前、餘程巧くお俊ちやんに騙されてるんだよ。其樣なに、お俊ちやんの事ばかり思つてて、私の云ふ事なんか、本當にもして呉れないなんて、夫れぢや龍ちやん、餘りぢやないかね、」と強く龍太郎の手を握つて、「此樣なにして進げても、未だ私が憎くツて？」
「ちえーすと！」と突然に叫んだものがある。
龍太郎は無理に玉枝の手を離して、博物館の脇通へ駈けて行つた。背後の樹の間から出て來たのは、散歩に出た二人の書生である。玉枝も吃驚はしたが、澄ましたもので、
「龍ちやん、お待ちよ。」と呼びながら跡を追蒐けた。
二人はまた肩を擦りながら、徐に新坂の方へ歩いて去つた。

第九

剃刀の尖ででも切つた樣な薄い月は、彼方の谷中の森に落ちて、露深き庭の彼方此方で、途切途切に鳴く蟲の音、風無きに人をして覺えず肩を竦ませるのである。大宮行の終列車が今通つたばかり、宴會崩れの佳い客はそろ〳〵是からと云ふ可き時、温泉料理しほばらの二階の欄干に身を倚せて、見る物も無き暗い庭を見下してゐるのは喜代壽である。
「姉さん、鳥渡。」と喜代壽は、背後の座敷から出て來た女中を見ると低聲で呼び止めた。
「はい。」と女中は喜代壽の傍に來て「何です？」
「もう、彼方ぢや臥ましたか。」
「えー、旦那はお寢りましたけれど……。」と女中は莞爾する。
「まだ起きてるんですか、何してるんだらうねえ。」と喜代壽も笑顏を作りて、「可い加減に、世話燒かせて置けば可いのに。」
「はにかみなんでせうよ、おほゝゝゝ。」と笑ひながら女中は彼方に去つて了つた。
「厭な娘だねえ。」と喜代壽は獨語したが、また戸外を眺めて、「おゝ醉つたこと。」
又背後の障子が徐と開いた、喜代壽は驚いて見返つた。座敷から出て來たのは、中高島田に結うた頭を重相に俯向いて、今帯を解いたばかりと見え、博多の細帯一筋卷着けた腰の邊なよ〳〵敷く、風通の二枚小袖の、裾の引摺るのを白い素足で拂ひながら、片手を胸に、何事か深く考へて居るらしきお俊である。
「おや、お俊ちやん、未だお寢らないの？」と喜代壽は吃驚した顏をして前に進み出た。
お俊は思はぬ處で聲掛けられたので、膽を潰した樣に立止つたが、さツと赧くした顏を急に俯向けて、
「はア、今……。」と漸と聽取れる樣な低い聲で答へた。
「何處へ、便所？」
「はア。」
「速く行つて來らつしやいよ。焦らすのも可い加減になさいな、彼樣な佳い旦那をさ。」と輕くお俊の背中を叩いた。
お俊は莞爾と笑つたが、默つて其の儘廊下を折つて、徐に梯子を下りて去つた。
喜代壽は久くお俊の跡を見送つてゐたが、何事か思出した樣に障子を細く明けて、
「旦那。」と低く呼んだ。

けれど座敷からは何の返辭もないので、

「旦那……。もうお寢りましたか。」と云ひながら座敷へ入つた。

六尺屏風深く、裡には籠行燈の影朦朧として、郡内の夜具を被いで居る男は、彼の銀行員瀧山春雄である。

「あ、師匠か。」と瀧山は眠つて居た樣に眼を擦りながら、「此方へお入り。」

「はい、有難う。」と喜代壽は顏だけ屏風の裡に入れて、「旦那、明朝お立ちになツても宜うございませう。」

「いや、其樣な事しちや居られない、更くも歸らなきや可けないんだから。」と瀧山は煙管を把上げて、枕頭の火鉢を引寄せた。

「だツて、一晩位可いぢやありませんかね。貴方が歸ると仰有つても、お俊ちやんが歸さないツて云や、仕樣がないぢやありませんか。」

「はゝゝ。」と笑つたが、「いや、冗談ぢやない、些し用があるから。」

「用があるツて無いツて、明日は日曜ぢやありませんかね。お俊ちやんだツて此儘別れたか無からうぢやありませんか。また大森へでも連れてツて遣つて下さいましな……。なんかんて、私がお伴したいもんだから、おほゝゝゝゝ。」

「あ、連れて行くよ、連れて行くけれどね、また二三日の中に。」

「然うですか……、可けませんかねえ。」と拗ねる樣に云つたが、「おや、それは可いけれど、何うしたんだらうねえ。」

＊　＊　＊　＊

瓦斯の反射で、鏡の樣に光る廊下の角で、俯向いて來た二人の男女がぱツたり行逢つた。

「おやツ、龍ちやん！」

「あツ、お俊ちやん！」

二人は立止つた、見合つた顏と顏は忽ち赧くなツた。

「龍ちやん、お前さん、誰と此樣な處へ來てるの？」とお俊は先づ口を開いた。

「誰ツて……。」と龍太郎は口籠つて、氣遣はし相に四邊を見廻す。

「お前、彼の眞宮の御家さんと來てるでせう。」とお俊は、龍太郎の見馴れぬ服裝をしてゐるのをじろ／＼視て、「然うでせう。」

龍太郎は體裁惡さうに俯向いて、

「僕は厭だツて云つたけれど……。」

「然うでせう、彼の御家さんとでせう。」と云つて久くつ默て、「何爲に來たの？」

「夕飯食ひに行くからツて、無理に……。」と云ふ時、彼方に人の足音がした。

「ま、此方へ入らツしやいよ。」とお俊は龍太郎の手を曳いて、離室に通ふ暗い廊下へと出た。

夜燈の燈明木立の陰に隱れて、裾から入る夜氣は肌を刺す樣である。男女は身を擦寄せて離室の濡緣に立止つた。

「何時頃から來たの？」

「日暮方から來てるんだけれど……。」

「今迄、御飯食べてたの？」と腰を下して、「寒いからお坐りよ。」と龍太郎の袂を引いた。

二人は肩を並べて坐つた。廂の檐頭に當つて大きな星が白銀の樣な光を放つてる。二人は其の薄い光を便に、夢の樣に互に顏を見合はせた。

「龍ちやん、」と云ツて呪と龍太郎を視詰めて、「此頃は、毎日彼の人と一緒に歩いてるの？」

「歩きたか無いけれど、叔母さんが行け行けツて云ふもんだから。」

「此頃、些とも私の處へなんか來て呉れないのねえ……。」と云つて、俯向いて默つて了つた。

龍太郎も默つて居る。久くするとまた、

「もう、私なんぞは、交際つても呉れないのねえ……。然うなの？」

彼方の廊下で、ばた／＼と駈ける足音がして、

「いゝえ、居らッしやいませんよ。」と聲がすると共に、戸の間から女中が顔を出して、「何うなすッたんでせう。」

「龍ちやん。」と同じく玉枝も庭を見廻し、「龍ちやんや。」

「本當に、何處へ行らしッたんでせうねえ?」

お俊と龍太郎は、手を引合つて、跣のまゝ庭の木陰に姿を潜めた。

＊　＊　＊　＊　＊

二階の瀧山の座敷では、喜代壽が獨りで饒舌り續けて居る。

「ですから、阿父さんさへ彼樣なに遊蕩して呉れなきや、今の樣な貧乏なんざ、夢にも爲ないんですわね。可哀想なのは、彼の姉妹でござんすよ……、妹は貴方、漸と十三でございませう……、顔色は彼の娘の足下にも追着きませんけれど、何しろ十三で貴方……。」

「お師匠さん、鳥渡。」と障子の外から女中の聲がした。

「あ、姉さん、何うしたんですよお俊ちやんは? 早く呼んで來て下さいよ。」と喜代壽は坐つたまゝ、焦れツた相に云つた。

「あの、居らッしやいませんよ。」

「何ですツて? 便所へ行つたんですよ。」

「でも、便所に居らッしやいませんもの。」

「まさか落こッたんぢやありますまい、おほゝほゝゝ。」

「おほゝゝゝ。」と女中も笑つたが、座敷へ入つて來て、「本當に、何處探しても居らッしやいませんのですよ。」

「えッ、本當ですか。」と喜代壽は容易でない顔をして突膝をしたが、「だッて姉さん、帯から何から、此通り脱つてあるぢやありませんか。」

「ですけれども、鳥渡。」と女中は額で喜代壽を招いだ。

「何ですの?」と喜代壽は起つて來た。

「鳥渡此方へ。」と女中は低聲で、喜代壽を廊下へ連出した。

「何うしたんです?」

「何うも、逃げた樣ですよ。」

「えッ、」と思はず大聲を揚げたが、女中の袖を引いて、「ま、此方へ來て下さい。」

「實は、階下にもね、若い、綺麗な男を連れて來たお客が有るんですよ、然うすると、其の綺麗な男も、便所へ行つた切り歸らないんでせう……。さア大變て云ふんで、帳場から何から、大騒で探したんですけど、何うしても居ないんですよ。而してね、庭の非常口の戸が、明放しになッてるんでせう……。」

「へえ、ぢや其の男と、」と云つたが、「まさか、知らない男と。」

「そりやア、一緒ぢや無いでせうけども、何處にも居らッしやらない處を見れば、必定逃げたんでせうよ。」

「然うでせうか。さア大變だ!」と喜代壽は顔色を變へて、「まア、何う爲たら可いだらう。」

「お家は、此の近所ぢやないんですか。」

「いゝえ、近所ぢや無いんです。」と目を据ゑて云つたが、「だッてまア、帯から紙入から、皆な置いてさ……。若しや、他の座敷へでも行つてやしませんか。」

「他の座敷ッて貴方、おほゝ。」

「然うですねえ。」と首を捻つて、「だけども、逃げる樣な事は……。」

女中は笑顔を作りながら、

「お師匠さん、彼の旦那を、嫌つてゐらッしやるぢやないんですか。」

「いゝえ、其樣なことは少しも。」と首を掉つたが、「姉さん、誠に濟まないけどもね、もう一遍、私と一緒に探して見て下さいな。」

「えー宜うございますとも。」

二人は二階を下りた。喜代壽が前に立つて、

再び便所から客の無い座敷、それから離室、それから庭の隅々まで殘る所なく探した、けれどもお俊の姿は終に見えぬのである。
「あゝ、何うしたら可いだらうねえ。」と喜代壽は庭下駄を引きながら、縁側に上つたが、「私アもう、旦那に會はせる顔がありやしない。」
「本當に、お氣の毒でございますねえ。」と云つて、女中は提燈を吹消した。
喜代壽は太く溜息をしたが、
「姉さん。」
「何でございます？」と女中も立止つた。
「お前さんに、一生のお願なんですがねえ。」と思込んだ樣な語調で、「私を、助けると思つてねえ。」
女中はまた、
「何でございます？」
「私アもう、到底此の儘ぢや、旦那に顔が會はされませんからねえ、急いで彼の娘の家へ行つて、呼んで來ますからねえ、何卒其の間、旦那のお前を執成して置いて下さいましな。」と云ひながら懐中から一圓紙幣を取出し、手早く紙に包んで、「此れア、眞の些少ですけれど、何卒取つて置いて下さいまし。」
「いゝえ、此樣な事を爲すツちや貴方……。」
「ま、然う仰有らずに、」と喜代壽は手で押遣つて、「大急で行つて來ますから、何卒其の內、旦那の前を執成して置いて下さいましな。」
「はア、宜うございますとも。」
「ぢや何卒ねえ、本當にお願ですよ。」
喜代壽は腕車を呼んで、久堅町へ急いで行つた。

第十

小石川柳町の角で舵棒を下したのは、辻車らしい合乘の腕車で、中から下りたのはお俊と龍太郎の二人である。
「兄さん、此れア五十錢ぢやありませんか。」と車夫は龍太郎の渡したのを提灯で見ながら云つた。
お俊も龍太郎も一癖あり氣な車夫の顔を眺めた。
「五十錢で可いぢやないか。」
「冗談云ッちや困りまさア、お一人五十錢の極めぢやありませんか。」
「一人五十錢だ？ ぢや一圓だッてのか。」
「當然でさアね、此樣な夜更に、根岸から遣つて來たんでさア、一圓なら安いもんでさア。」
「まア車夫さん、餘り亂暴ぢやないかね。」とお俊が口を出した。
「亂暴ですツて？ 何が亂暴なんだい？ 箆棒め奴、一圓だツてから、此方も急いで來たんだい、五十錢許しのはんぱ錢で、誰が小石川くんだりまで來るんでい。なんだ、其樣な態アしアがツて、當り前ならな、極めの外に酒代の五十錢も寄來して可いんだ、其れを何だい、つべこべ吐かしアがツて、汝達だツて、明るみへ出られるなら來やがれ、屯所でも何處へでも行か、此の駈落者奴。」
お俊は龍太郎と何か耳說きあつたが、
「ぢや、今、お前さんの云ふ通り上げるからね、少し待つて、お呉れ。」と云つて、其處から三四軒彼方の、此邊に目に着く二階作り、軒ランプに琴風亭とある、彼のお直の家の戸を叩いた。
「何誰？」と直ぐ內から戸が明いて、「おや、まアお俊ちやん、何うして？ さア、早くお入りなさいよ、もうねえ、お客が無いから、今寢ようと思つた處なのよ。」
「あの、小母さん、濟みませんけどもね、何卒、五十錢貸して下さいませんか。」
「あ、五十錢？ 宜ござんすとも、お安い御用。」とお直は簞笥の上の錢箱から銀貨を持つて來た。

お俊は龍太郎を小手招して、お直から借りた五十錢を渡した

「態ア見やがれ」と車夫は龍太郎から金を取るや否や彼方へ歸つて去つた。

お直は火鉢の前に坐り、客座蒲團を拂ひながら、戸口の方を覗き込み、

「お俊ちやん、寒いからお入りなさいよ、何してるんですよ。」

「はア、」と云ひながら、お俊は靜に履脫の處まで入つて來た。

「おや、お俊ちやん跣ですか、まア。」とお直は起つて來て、「あら、帶しろ解……？」と仰山な聲で云つた。

お俊は顏を赧くして俯向いて了つた。

「ま、何う爲すツたんですねえ。」とお俊を見上げ見下したが、「何處から來たんですよ、其樣な姿でさ。」

「あの、新坂から……。」と微に答へた。

「新坂？　何處の？」と云つても默つてゐるので、「ま、然う仕てたツて仕樣がないから、お上りなさいよ……。あ、泥足だね、今水進げますから、」とお直は背後を振返つて、「花や、花！」

而ると二階から、

「はーい。」と答へる聲がして、火鉢を持つた女中が降りて來たが、お俊を見ると莞爾して、「おや入らツしやい。」

「お前、ばけつに銅壺汲んでお出で。」

「おや、貴方何うなすツたんです、まア。」と女中は細い眼を睜つて、訝し相にお俊を眺めた。

「ま、可いから早く汲んでお出でよ。」とお直は女中に言付けて、「新坂て云ふと、お俊ちやん、何處からです？」

「あの、根岸ですよ。」

「根岸ですツて、根岸の何處から？　何か、亂暴な者にでも遭つたんですか。」

「いゝえ、然うぢやないけども。」

「然うぢやないツて、帶も無けりや、頭だツて其樣な……。」とお直は、足を洗ひ了つたお俊と共に火鉢の傍に來り、「根岸から爰まで、其樣な風して來たんですか。」

お俊は俯向いたまゝ突立つてゐる。お直は火を掻擴げて、

「さ、まお取煖りなさい、寒いでせう。」と云つて、傍へ小火鉢の火を移けに來た女中に、「なんだか寒いねえ、おや、表の戸が明放しになツてるよ、お前閉めてお出で。」

女中は、言付けられたまゝ土間に起つて行つたが、

「おや、貴方。」と吃驚した語調で。

火鉢の前に居たお直が、

「花、何誰？」

「あの、お鶴さん處の……、」と答へたが、頓狂な聲で、「あら厭だ、貴方も足袋跣だよ、おほほゝゝ。」

お直はお俊の顏を見守り、

「厭だよ此人は……。おほゝゝゝゝ。」と笑つたが、「二人なら二人ツて云や可いのにさ……。ぢや、早く此方へお入りなさいツて、然うお云ひよ。」

龍太郎も恥かし相に家へ入つて來た。

女中は始終笑ひながら、

「今、水を汲んで來ますから、貴方も、疾く足をお洗ひなさいよ。ほゝゝおほゝゝゝ。」

お直も笑ひながら、

「足袋跣なら、其樣に汚くないでせう……。今、お俊ちやんの使つた手拭お上げよ。」と女中に言付けて、「ま、二人が二人とも跣ツたア、何て事たらう、ほゝゝおほゝゝゝ。」

お俊は洋燈に顏を背向けて、俯向いてゐる。

龍太郎も家へ上つた。

お直は龍太郎の座蒲團を直して、

「さ、寒いだらう、龍ちやん此處へお出でな……。

二人お並で。」

「いゝえ、寒くありません、此處で宜うござんす。」と龍太郎は上り口に坐つた。

「寒くないッてお前、おほゝゝゝ熱いの？　おほゝゝ。ま其様な事云はないで、此方へお出でつたらねえ、お俊ちやん、お前さんも何とか云つてお上げなさいなねえ。」

お俊は小聲で、

「龍ちやん、お入んなさいよ。」

「ほゝゝゝ、入つてらアね、此人、餘程何うかしてるよ。おほゝゝ。」と耐らな相に笑つたが、「ぢや、二階へお出でよ、此處ぢや體裁が惡からうから。」

お直は火鉢にまた火を移して、

「さア、龍ちやん、此方へお出で。」と前に立つて梯子の口に行き、「疾くお出でよ、何してるんだねえ」

龍太郎もお直の跡に從いて二階に上つた。二階は六疊と四疊半の二室である。龍太郎の導かれたのはその四疊半で、疊は野郎疊、壁は鼠漆喰の剝げかゝつたのに、煤たけ紙を張つたので、押入脇の三尺の床の間には、南山壽と云ふ凝物の鐵舟の一軸を懸けてある。

「お俊ちやん！　お俊ちやん！」とお直は梯子の下を覗込んで呼んだ、「此方へお上んなさいよ。」

「はア。」お俊は長火鉢の前を動く樣子もない。

お直は、憫然突立つてゐる龍太郎に、

「まア、お坐りなさいよ。」と火鉢を押遣り、「何うしたッてんだねえ今夜は、お前さんまで、其樣なにはにかんでてさ、何時も來る私の處ぢやないかね。」

龍太郎は體裁惡さうに坐つた。

お直は、是迄にない龍太郎の服裝を眺めて、

「龍ちやん、根岸は何處へ行らしッて？」

「鹽原ッて家へ行きました。」

「然う、お俊ちやんと？　而して、何うしてまた、此樣な、跣でなんか歸つたの？」

「いゝえ、然うぢやないけれど……。」

「だッて、跣ぢやないかね。ぢや途中から？」

「いゝえ、然うぢやありません……。」

「ぢや、何うしたの？」と顏を覗いたが、「何が何だか、さッぱり解らないぢやありませんか。おほゝゝゝ。」と笑つたが、また聲を張揚げて、「お俊ちやん、お俊ちやん。」

また返辭はしたが、お俊の上つて來る樣子が無いので、

「何うしたッてんだらう。」と起上り、「龍ちやん、今連れて來るからね、溫和くして居らッしやいよ、ね。本當に、世話燒かせる人達だよ。ほゝゝゝ。」と獨り笑ひながら梯子を降りた。

お俊は襟に顏を差入れて何か考へてゐたが、お直を見ると坐住居を直した。

「何うしたんですよ、お俊ちやん、さ、彼方へ行らッしやいよ。」と云ひながらお直は火鉢の此方に坐つた。

「何うも、小母さん濟みません。」とお俊はお點頭した。

「何ですねえ、水屋の喧嘩ぢやあるまいし、其樣な事云はないで、ま、彼方へ行らッしやいよ。」

「あのね小母さん、今夜ね、私……、家に歸れないんですよ。」と澁りながら云つた。

「だから、泊つてきや可いぢやありませんかね。」とお俊を視詰めて、「だけどもまア、一體今夜の始末は何うしたッてんです？」

「今夜ですか、今夜はね、贔屓のお客に呼ばれてね……。」

お俊は一部始終を語出した――卽ち、近頃瀧山の贔屓を得て居た事、衣服の頭の物のと種々の物を澤山購うて貰ひし事、所々の料理家を喜代壽と三人で遊んで歩いた事、今夜は何うしても瀧山の意に從はねば義理の立たぬ樣な場合に

到つた事、廊下で龍太郎に出逢ひ、人に採出さるゝが厭さに前後の考も無く非常口から逃げた事より、龍太郎も今日叔母と共に玉枝に連れられて芝居を觀に行き、歸途に同じ温泉に無理に伴はれし事までを。

「其樣な事情ですから、お師匠さんにも濟まないし、瀧山樣にもお氣の毒ですけど、」とお俊は今更途方に暮れたと云ふ樣な顏をして、「本當に何うすりや可いんだか。」

「それぢや、跡で大騷でせう……。まあ、」とお直は眼を圓くしてお俊を視詰め、「何樣なだらう！」

「お直さん、何うしたら可いんでせうねえ。」

「誰も、龍ちやんと一緒だたア氣が着きますまいねえ？」

「何うですか……。」とお俊は次第に顏を蒼くして「小母さん、何うしたら可いんでせうねえ。」

「然うですねえ。」とお直も首を捻り、「阿母さんにだッて、龍ちやんの叔母さんにだッて、知れないでる筈が無いんだし。」

「小母さん、後生ですから、何卒力に爲ッて下さいな、ねえ小母さん。」と祈る樣に云つて、「力に爲る人ア小母さんばかしなんですから、ねえ、一生のお願ですから、ねえ、ねえ小母さん。」

「宜うございますとも。」

「本當に、助けると思つてねえ……。其の代り、精々席の方も勉強して、其の中、必然何うか爲る樣にしますから……、ねえ小母さん。」

「宜うございますよ、ま、其樣なに心配爲ずに居らッしやいよ。」とお直は長煙管を叩きながら首肯いて、「今夜、お俊ちやんが一人で入らしッたッて云や、それで濟むんですからねえ。」

「何卒ねえ小母さん。」と力を入れて云ふ。

「あゝ、可いんですッてば。龍ちやんの叔母さんにだッて、龍ちやんが一人來て泊つたッて云や、其れッ切りですからねえ。まさか、雨方聞合せて、私の處へ談じつけに來も爲ますまい。」と云ふ時、頭の上の柱時計が一時を報じた、「おや、もう一時だよ。龍ちやんは先刻から一人でまア……。お俊ちやん、早く二階へ行らッしやいよ。」

「はア。」とお俊は急に俯向いた。

「よ、お俊ちやん……。仕樣が無いねえ。」とお直は起上つて、「さ、ぢや一緒に行きませう。」

お俊は漸く立つて、お直に從いて梯子を登つたが、座敷には入らない。お直は行きなり押入から寢具を取出し、

「龍ちやん、ま、お前さん早くお寢なさい。」と座敷を出て來て、薄暗い梯子の口に立つてゐるお俊に、「何してるんですよ、おほゝゝゝ、早く此方へ入らッしやいなね。」と袖を引いて、「其の押入に入つてますからね、お俊ちやんの床は、お俊ちやん出してお敷きなさいよ。」

「小母さん、死んでも忘れませんよ。」と低聲で云つた。

「ま、何ですねえ。」とお直は無理にお俊を座敷に突入れて、外から唐紙を閉め、「もう降りて來ちや可けませんよ、呼んだッて來やしないから。」

梯子を降りる音がとん〳〵〳〵。

＊　＊　＊　＊　＊

長家の露路から廻つて、芥溜を足場に、ひらりと琴風亭の庇に登つた男がある。元より手を脱いた安普請、雨戸の隙間から燈火の影は縞を爲して漏れ、耳を着くれば微に話聲も聽取られるのである。瘋癲病院の夜廻の太鼓獨り寢靜つた世間に轟渡り、水の樣な空では星が頻と飛ぶ。

件の男は、久く息を殺して内の樣子を覗つてゐたが、密々話の聲も聽えぬやうになるや否や、雨戸を外し障子を倒して、宛然疾風の如くに座敷へ躍込んだ。夜着を蹴退けて起上つ

たのは龍太郎である。室外へ迯出でんとしたのは、其處の火鉢の傍に坐つて居たらしいお俊である。躍込んだ男は、意外だと云ふ樣に室内を見廻したが、梯子の口へ駈けて行つたお俊の襟をむんずと捕へた。

「あれー、何するんですよ。」

「こら、靜にしろッ！」と無理にお俊を曳戻して、「淫賣して居やがツて。」

「何です貴方は！」と龍太郎は起直つて、木綿絣の書生羽織を着た、古ぼけた鳥打帽を冠つた赤顏の男の前につか〳〵と進んだ。

「巡査だ。」と手帖を出し示して、「貴樣、此女を買つたらう。」

「旦那、貴方御冗談なすツちや困るぢやありませんか。」と寢衣のまゝ起きて來たお直は、行きなり巡査に詰りかけた。「此人達ア、其樣な者ぢやございませんよ。」

「お直、馬鹿云へ、己を誰だと思つてる。」と嘲笑ひながら傲然と云つたが、お俊を嚴然と睨付けて、「貴樣、淫賣したに違ひないぞ。」

「おほゝゝ、國池の旦那、貴方、御自分でお見違爲すツて、其樣な御無理を仰有ツちや困るぢやありませんか。」とお直も冷笑を面に表はして鋭く問詰めた。

「何だ？ お見違だ？」

「あゝ、お見違ですとも。此の人ア貴方、淫賣するなんて、其樣な賤しい人ぢやないのですよ、御覽爲すツたら分るでせう、貴方だツて……。」

「こら、默らんか、失敬な奴ぢや。」と巡査は大聲に怒鳴りつけて、「淫賣したから爲たと云ふんだ。一緒に本署まで來い！」

「だツて旦那、其れア貴方、御無理ぢやございませんか。」

「何が御無理だ？ 來い。」と云つて一段聲を勵し、「何でも可いから來い！ 貴樣、乃公の命令を背くのか。」

「いゝえ、決して背くんぢやございませんけれど。全くの事ですよ、其樣な、御無理をお通しなすツちや困るぢやありませんか……。」

「何でも可いから來い！」と巡査はまた叱り付けたが、お俊の傍に寄らうとする龍太郎を見るや否や、「こら！ 退いて居れッ。」と手で拂つたので、龍太郎は其處へ尻餅を衝いた。

お俊は泣きながら、龍太郎お直と共に、警察へ拘引せられたのである。

第十一

同朋町の待合、雪島の裏二階、茶縁の八疊の間に置行燈の影朧に、花梨の火鉢からは火花盛に飛んで、若い男女の聲、酒の廻つた故か次第に高くなツて來た。

「可かんねえ、其樣な、改まつて禮なんぞ云ッちや。」

「だツて、お禮はお禮ですもの。」

「それでも可かんよ。水臭いぢやないか。」

「お禮を云や水臭いんですか。ぢや何うすりや可くツて？」

「何う爲れば可いが、自分の胸に訊いてごらんな。」

「また、彼樣な難かしい事仰有るよ、おほゝゝほ。ぢや、もツと御酒を戴けツて仰有るの？」

「はゝゝゝ、まア其樣なもんだ。」

「だツて貴方、先刻から飲め飲めと仰有るから、戴けないのを此樣なに戴いてるぢやありませんか。」

「ぢやもう一杯。」

「まア、此品でですか。此樣な大きい物で？」

「ぢや、此れでお納めにするから。」

「だツて……私ア、もう到底も其樣なに……。」

「何だい何だい、酒なら幾らでも飲むと云つたぢやないか。醉潰れたら、僕が介抱して遣るから可いぢやないか。」

「それぢや、此れを戴きや歸して下すッて。」
「また、逃げ支度するね。」
「あら、逃げ支度ぢやありませんよ。」
「今夜もまた、其邊に龍ちやんが來て居るんぢやないか。」
「また其樣な事仰有るよ。」
「はゝゝゝ、これで小しゆんちやんは、中々油斷がならんからな。」
「知りませんよ。」
「併し何樣な物だね、嘸可愛いだらうねえ?」
「知りませんよ。ま、早くお酌して下さいましなね。」
「うーん。ぢや飲むんだな?」
「貴方が飲めッて仰有るから、戴くんぢやありませんか。」
お俊の出した麥酒の洋杯に、徳利を倒にして七分目許り注いだのは、瀧山春雄が友人と名告る笠田秀二である。一昨日の夜、琴風亭で取押へられたお俊の、證據不十分と云ふので、説諭だけで警察から歸されたのであるが、何處の誰が洩したものか、温泉から風俗掛の警官に踏込まれた迄の艶種が、某通信社から各新聞に廻されたと云ふ事を笠田に告ぐる者があッた。是から賣出さうと云ふ藝人に取つて、由々敷き一大事であるから、と笠田はお俊母子に報告し、母子の請を容れて、其種の取消運動を始め、今夜首尾好く其の目的を果したと云ふので、此くお俊を引止めて酒を強ひてゐるのである。
お俊は、幼少い時から親父の對手に杯を手にすることを覺えさせられ、他人の前では愼んでも居るけれど、親子對坐の膳の上、佳い魚でもあると云ふ樣な時には、猪口で三つ四つは何時も甘く飲むと云ふ口である。けれども、今夜は笠田に強ひらるゝまゝ飲んだので、泰然と我慢は爲てゐるものの、其苦しさは例ふるに物もないのだ。
「それでは旦那、是を戴きますからね、もう是切りで歸して下さいましな。」と洋杯を前に出して云つたが、その手が定まつてゐない。
「また、歸る事云ひ出すね。はゝゝ。」と笠田は笑ひながら、目色から體の動く處から、最早十分に醉の廻つたお俊を眺遣りて、「ぢや、送つて行から、何うだ、僕に送られるのは厭かね?」
「いゝえ。ぢや送つて下さいな。もう、是でお仕舞ですよ。」と半分ばかり飲んで、ぷーと苦し相に息を吐き、「あー苦しい。」と力なくがくりと首を垂れて默つてゐる。
「おい、小しゆんちやん、何うしたね?」と顏を覗いて、「もう飲めないのかい、半分助けて進げようか。」
「え、ぢや、旦那、もう……。」と首を垂れたまま、何やら分らぬことを云ふ。
「おい、何うしたんだよ!」と背中を輕く叩いて、「また、好い人の事でも思出したかね?」
お俊は力無く首を掉るばかりである。
笠田は傍近く摺寄つて、徐とお俊を抱きかゝへ、
「おい、小しゆんちやん、睡くなッたのかい、お目覺めに好い物見せて上げようか。」と云ひながら、懷から絹表紙の小本を出してお俊の目前に突出し、「おい、何うだね?」
「えッ、此樣な物穢はしい!」と一目見るや否や、奪取ッて壁へ叩付けた。
「はゝゝゝ。」と笑ひながら、笠田は其の極彩色の小本を拾上げて懷に納め、また傍に摺寄つて、お俊に何か耳語かうとしたが、お俊は蹌踉きながら起上つた。
「何うしたんだ、何處へ行くんだい?」と笠田は歩く態を眺めながら笑つてゐる。
「貴方、可けないから。」と轉び相になッて唐紙に寄掛り、「旦那、私歸りますよ。」

「ぢや、送つて行かうぢやないか。」
「送らなくツても澤山。」と緣側へ出るや否やばいゝたりと倒れた。
「何うした、何うしたい。」と笠田は駈けて來て抱起し、「確りしなくちや可けないよ。それでも歸るツてのか。」
「なんでも可いから離して下さいよ……。もう歸りますから。」
「離せツて云や離すけれど、直ぐまた轉ぶだらう。そゝ、そら、其樣なに轉ぶぢやないか。」
「轉んだツて可いから、お離しなさいよ。」
「だツて危險ぢやないか、怪我でもすると可けないよ。」
「宜ござんすよ、怪我したツて。」
「おや、何うなすツて！」と女中が駈けて來た。
「濟まないけれど姉さん、何卒私の腕車を……。」
とお俊は倒れたまゝでゐる。
「おい〳〵、腕車處ぢやない、大變醉つてるからね。」と笠田は女中に何か耳語くと、
「は、は、畏まりました、は。」と女中は首肯いて、お俊を抱起し、「さ、貴方、私の肩へ掴まつて居らツしやいよ。」
「旦那、私歸つても宜うござんすね。」
「宜ござんすから、私の肩へお掴まりなさいよ。」と女中が歩かうとすると、お俊はばいゝたりと倒れた。
「あら、可けませんねえ、確りなさいよ。」
「可かん可かん、到底其樣な事ぢや可かん。」と笠田は背後から抱きかゝへた。
「貴方、彼方へ行つて居らツしやいよ。」とお俊は笠田を拂退けようとする。
「あら、彼樣な手爲さるよ、おほゝゝゝ。」
笠田と女中と二人で、生體の無いお俊を次の四疊半に連込んだのである。

＊　＊　＊　＊

手拭で耳の邊を拭きながら、急し相に梯子を登る者は笠田秀二である、秋の日も高く昇り、庭の小町竹の影は緣側に搖き、門口には乞食の三味線が聞える。
「おい、小しゆんちやん。」と笠田は障子を明けて、暗い屛風の中へ靜に入り、「未だお目覺めぢやないのか。」
凝純子の夜着蒲團、轉落ちてる括枕は天鵞絨の房付、お俊は蒔繪の箱枕に髮も亂れて、背後向きに默つて臥てゐるのである。
「おい、未だ睡つてるの？　既う十時だよ。」と覗込んだが、「如何した、泣いてるね。」
「泣いてたツて可いぢやありませんか。」と震聲で、「貴方、恐ろしい人ですねえ。」
「小しゆんちやん、困るねえ其樣な事を云ツちや。」と床柱に背中を滑らせながら徐と腰を下した。
「宜ござんすよ、散々無理酒飮ませて置いて……新聞へ出さないツての恩に被せて……」と聲は次第に高くなツて來る
「困るねえ。ぢや、僕ア何うすりや可いんだい？」と是は次第に低聲になる。
「新聞へ出されるのが何で怖いんです？　新聞へ出されたツて、私の一生は廢りアしませんツ……。」
「實に困つたねえ。」と力無さ相に云つたが、「小しゆんちやん、私も笠田秀二とも云はれる男だ、今後は何處までも、お前の力に爲ツて進げるからね、何卒、今度の事は勘辨してお呉れ。」
「貴方の樣な怖ろしい人には、力になんぞ爲ツて貰はないでも宜うござんす。私ア貴方の爲に、生涯廢り物に爲ツて了ひました……。」と云つたが、いゝ耐切れずにわツと泣出し、夜具を被つて了つた。
靜に障子が明いて、
「旦那、お茶を召上りまし。」と女中の聲がした。
「ん。」と答へたばかり笠田は考へて居る。

「それから、お支度は何うなさいます？」

「飯か。いや、其樣な事してる暇がないんだ。」と笠田は屏風の外に立出で、「私ア直ぐ歸らなきやならんから……、左樣さなア何か、一人前取つて貰はうか。」

「はい、ぢや彼の方の？　何が宜うございませう？」

「訊いて見てね、何でも美味物を取つて遣つてお呉れ。それから、大急で腕車を呼んで呉れ、直ぐ歸らなきやならん。」と女中に命令けて笠田は昨夜酒を飲んだ八疊の間に入ッた。

久くすると、四十幾歳と云ふ年輩の、眉毛を落した顏色の淺黑い主婦が、障子を明けると直ぐに世辭笑をして、

「まア、御飯も食らないでお歸りでございますッて？」と挨拶の樣子は、笠田とは親しき間と見える。

笠田は羽織の紐を結びながら、

「午前に、横濱へ行く用があるんでね……。」

「おや、左樣で居らッしやいますか。」と膝行寄つて茶を酌んで出す。

「まア、此れ取つて置いて呉れ。」と五圓紙幣一枚を出し、「また、直ぐに來るからね。」

「は、然うですか。」と主婦は不足相な顏をして、其紙幣を手にも取らず笠田を額越に視てゐる。

「旦那、お腕車宜うございます。」と女中が入つて來た。「それからね旦那……。」

「何だ？」

女中は笑ひながら、

「彼の方は、何處かお惡いんですか、何申しても、默つて居らッしやいますよ。」

「然うか。」と輕く答へたが、笠田の顏色は蒼くなッた。

「お支度を何にして置きませう？」

「まア、何でも宜からう。」と笠田が外套を着ようとすると、女中は背後に廻つて手傳つて遣つた。

「ぢや旦那、彼の姉さんは？」と主婦は笠田から眼を離さずにゐる。

「飯でも食はせて歸して呉れ。」と云つても主婦が默つてゐるので、笠田は嚴然とした顏をして、「可いだらう？」

「へい、宜うございますとも。」と笠田に從いて座敷を出た。

笠田はまたお俊の寢てゐる室に入つた。

「小しゆんちやん、僕ア、急ぎの用が有るから歸るよ。」と枕頭に寄つて、「お前爰に居るなら、また後刻に來るからね。」

お俊は夜具を被つたまゝ泣いてゐる。笠田は聲を優しくして、

「可いだらう。ぢや、また後刻に來るよ。」と屏風の外に出ようとした時、

「お……お待ちなさい！」

笠田は愕然としたが、

「何だね？」とまた坐つた。

天鵞絨の襟からお俊は顏を出して、涙の溢るゝ眼に屹と笠田を睨めてゐる。

「何か用かい？」と訊いても默つてゐるので、

「僕ア少し急ぐからね……。まア、起きて御飯でもお食り……。宜く家へ賴んで置いたからね……。」

お俊の前齒で嚙んでる脣はぶる／＼と顫へてゐる、もう、物も言ひ得ぬ樣子である。

「ね、可いだらう、何か、甘い物でも取つてお食り。」と云つて起上り、「急ぐから行くよ。」

障子がばたりと閉つた。跡にはわッと泣出す聲が聞えた。

笠田の歸つて半時間と經たぬに、名刺を持つて入つて來たのは女中である。

「烏渡貴女、」とお俊の向いてる壁の方に廻つて、「今、此方が入らッしやいましたよ。」

お俊は初めて目を開き、清元喜代壽とある小

形の名刺を一目見たがそツけの無い調子で、
「何か用なんですか。」
「は、何うですか。」とお俊をじろりと見て、「鳥渡何つて來ませうか。」
お俊は目を閉ぢて默つてゐる。女中は少し憤然とした樣子で、衝と起つて出ようとすると、
「ぢや、私今起きますから。」
「然うですか、ぢやお通し申しませうか。」
「何卒然うして下さい。」
喜代壽はしほばら以來初めてお俊に會ふのである。其の夜は、お俊の跡を追蒐けて久堅町まで俥を飛したが、家にも歸らぬと云ふので、自分も大變に困つた事を陳立たて、お俊の母の謝罪を聞いて、また空しく根岸へ取つて還し、瀧山には平謝罪に謝罪つて、自分も逃げる樣に家へ歸つたのである。然るに、今朝お俊の家へ行つて聽けば、新聞の一條から笠田に連れられて此の待合に泊つたと云ふので、一理窟陳べる氣で訪ねて來たのである。
「階下へお通し申しましたよ。」と女中はまた入つて來た。
お俊は漸く床を起き、誰が脱がせて誰が疊んだか、亂れ箱に入つてる着物を着た。女中は肱掛窓の戸を明けた。室の中はぱツと明るくなツた。
「あ、姉さん何卒、」とお俊は慌しく云つた、「もう少し待つて下さい。」
「戸ですか、だツてお暗からうと思つて。」と不思議な顏をする。
「でも後生だから！」
「然うですか。」と明け掛けてまた閉め、「おや、是だけも。」と屛風を引寄せた。
お俊は急いで帶を締め、紙入を挾みながら室を出ようとした。障子を明くれば、日影はかんかんと縁側に射つてゐる。お俊は明けた障子をまた閉め、
「姉さん、」
床を疊んでゐた女中は、
「はい、何でござんす？」
「眞に濟みませんけどもねえ……、主婦さんに然う云つて、何卒此室へ通して下さいませんか。」
「今の方をですか。」と變な事を云ふといつた樣な顏をして、「おや、然う申して見ませう。」
女中は疊んだ夜具蒲團を縁側に出し、階下へ降りて行かうとすると、
「姉さん、宜ござんす。」とお俊は室を出て來た。
「ぢや、階下へ行らツしやいますか。」
「は、今行きますから。」と裏梯子から便所へ下りて行つた。
四疊半ではあるが、半疊だけ梯子に奪られて、變な形狀を成してゐる、一方明りの陰氣な室で莨を喫んでゐるのは喜代壽である。
「本當に、何を愚圖愚圖してるんだらう、人を待たせて置いて。」と獨でぶつ〳〵云つてゐる。
「此方。」と女中は駈けて來て障子を明けた。
俯向いたまゝ無言でお俊は入つて來た。
「お俊ちやん、お前さん何うしたんですよ。」と顏を見るや否や喜代壽は切口上で云つた。
お俊は障子を背後に衝立つたまゝで、
「私ア、何うも爲はしませんよ。」
「何うも爲ないもないもんです。ま、お坐りなさいよ。」
「坐れツてんなら坐りますけど、何か用なんですか。」と坐つた。
「何ですツて？」と喜代壽は呆氣に奪られて、只だお俊の顏を眺むるのである。
久くして、喜代壽は煙管を叩き、
「お俊ちやん。」と靜に出直した。
お俊は暫と喜代壽を見たばかり默つてゐる。
「お俊ちやん、過日の夜は、彼ア何うしたんです？ 貴方、彼で濟むと思つてらツしやるんで

すか――、何うせ此様な顔ですから、私ア、顔潰されたッて何でもありませんけれど、彼で瀧山の旦那に済むんですか。」

「済まなきや何うするんです？」

「えッ。」と重々吃驚して、「何うするんですッて？　まア。貴方、其様な事を云へる義理ですか、何處押しや其様な音が出るんです？　貴方だッて兒童ぢやあるまいし、人から澤山に物を貰つて置いて、知らない顔で済むと思ふんですか……。貴方は、衣服から、頭の物から、お金まで彼様なに戴いて置いて、彼の所為は何事です？　瀧山様が、貴方に彼様な大金消費つたのは何の為です？　いゝゝ騙奴ぢやあるまいし、人の物を只奪して、其れで済むんですか……。それも可いけども、昨夜の始末は何うしたんです？」

「ぢやお師匠さん、私ア淫賣爲なきや、瀧山様に義理が立たないんですか。」

「淫賣ですッて？　淫賣たア何の事てす？　お俊ちやん、お前さん其様な事は云ふもんぢやありませんよ。ぢや今迄、何故瀧山さんにくッ着いて遊び廻つたんです？　ぢや過日の夜は、何う云ふ氣で帯まで解いたんです？　えッ？　ぢや昨夜は何うしたんです、瀧山様と泊るのは淫賣で、笠田様の様な、彼様な羽織破落漢と泊るのは何と云ふんです？　淫賣ぢやないんですか……。」

お俊は顔に袖を覆て泣出した。喜代壽は、吸泣いてるお俊の島田の動くのを呪と見てゐたが、一段聲を低くして、

「お俊ちやん、お前さんも阿母さんからお聴きだらうけどねッ、お前さんの逃げた跡の私の心使ひッてものは、何ら程だッたか、少たア考へて見て下さい、旦那に會はせる顔は無し、然うかと云つて、私も逃げる譯には行かず、旦那の前に出て平謝罪に謝罪つて、女中に迄頭を垂げて……、まさか、旦那は可けないと仰有りアしないけども、私はもう、身を斬られるよりも辛かつたらうぢやありませんか……。」

お俊は矢張り顔を覆ひながら、

「お、お師匠さん、何うも済みません……。」

「其れアお俊ちやん、私だけなら何うでも可いけれどもさ――、例ひ帳場で笑はれようが、彼の家へ行く事が出來なくならうが、彼の旦那を失敗らうが、此様な齢になッてるんだもの、諦めようと思や、何うにだッて諦めの付かない事は無いけどもね、ま、お氣の毒とも何とも、例へ様の無いのは龍山様ぢやないか……。」

「お師匠さんにも、旦那にも済みません、何卒勘辨して下さいな。」泣逆吃しながら云つた。

「まア、お俊ちやん、幾ら財産家の若旦那だッて、お金ッてものは、木へ生るもんぢやあるまいし、然うあたふた使へるものぢや無いぢやないか、其れをまア、簪の、衣服のッて買つて下すッて……、其の帯だッて、何十とお金を出したのぢやないか……。其れ許りぢやない、彼アして遊んで歩いてる中にア、奥様へだッて義理の悪い事もあッたらうぢやないか、其様なや此様な苦しい思をして、漸と彼までに漕着けたかと思や、お前さんに逃げられて了ふし……。ま、お前さんが旦那であッてごらん、此様な目に遭つたら何様な心持だか……。」

「お師匠さん。」とお俊は顔を上げて、「何卒お師匠さん、お願ですから、旦那に會はせて下さいな、何様なにでもして、旦那の御心持の直る様に爲ますから、ねお師匠さん。」

「それぢやお俊ちやん、旦那に會つて下さるの？」

「はア、然う爲なけりや済みませんもの。」

談は極つた。二人は腕車を連ねて此の待合雪島を出た。

第十二

駒込蓬萊町に大泉寺と云ふ梵刹がある、宗旨

は曹洞宗、寺格は一等法地、檀家には伯爵某と云ふ大名華族もあッて、内福の噂世間に聞えてゐるのだ。

　時は午後の二時頃、最早斜になッた秋の日影一つ落ちて居ない、本堂から山門まで五十間餘もある石疊の上を、日和下駄の音かた〳〵と、今汲んで來た手桶の水を重さうに身を傾げて、鐘樓の前まで來ると歩を止めたのは、淺黄股引に綿の出てゐる袖無し、頭の禿げた皺だらけな門番の老爺である。

「道光樣、お前樣、好く働かッしやるねえ。天氣も可えだから、大概に仕舞つて、團子坂でも行つて見さッしやらねえか。」

　鐘樓の後ろで、竹箒で落葉を掃いて居る、鼠木綿の衣服に襷掛けして、坊主頭に淺黄の手拭を締りなく姉樣冠りにして、額から頰に掛けて大火傷の痕赤く光つてる、五十に近い坊主が箒の手も息めず此方を向き、

「はゝア、瀬助さんかい、俺人が出る事ちやらう喃。」

「出るに出ねえのッてお前樣、此樣えな好え天氣だゝ、お墓詣りせえ澤多來るだア……遊山場で叩ッ返されねえ人だアね、何んでもはア、有難え物天道樣だアね、私等だッて、天氣が好えだと貰え物多えだし……。あーれ、またお客樣だッ。」と門番の老爺は、山門の方に人影を見るとまた手桶を持上げ、「そんだら道光樣、お茶でも入れべえから、煙草休みに來さッしやれ、先刻貰ッた饅頭あるだアから。」

　山門脇の門番室を竊と覗いたのは、藤色縮緬の頭巾目深に被つた、黑の一本綾の吾妻コートを來た若い色白の女で、

「おや、誰も居ないよ。」と獨語して四邊を見廻した。

　門番の老爺の下駄の音近づいて、

「はい、是アお出でなさえませ。」と女の前に進んで、「お花上げますか、お線香上げますべえか。」

「いゝえ、お花なんか入らないのよ。」と笑顏を見せて、「あのねえお老爺さん。」

「何でござりますね？」と眼をぱちくりして衝立てゐる。

「お前樣にね、鳥渡お願があるのよ、」と帶の間から出した五十錢銀貨を紙に包んで、「是、僅かだけれどもね。」

「此樣ねえな物、何うしるだアね、」と白い紙に包んだ物を、燻り返つた掌に載せて、女の顏を視詰めてゐる。

「お前さんに上げるのよ。あのね、老爺さん、」と低聲になッて、「此寺にね、二三日前から、小石川のね、戸崎町から來てゐる人があるでせう。」

「何うだかねえ、私知りましねえだが、」と云つて、また掌の上を見て、「此樣えな物戴えて、私何うするだアね。」

「おほゝ、ま、取ッて置いて下さいよ。だッて、大泉寺樣てな此方でせう。」

「はア、此寺ア大泉寺樣でござります。」

「ぢや、來てゐる筈なんですよ。お前樣見なくッて、十七八の、顏の綺麗な……。」

「十七八の顏の綺麗だ？」と女の跡に付いて云つて、「娘ッ子かアね？」

「おほゝ、男なのよ。彼の、方丈樣の親戚だとか何とか云ふ。」

「ん――、彼の子けえ、」と大え聲を出して、「來てござらッしやるよ、龍……何とか云つたッけ？」

「あ、龍ちやんて云ふのよ。來てゐるでせう。」

「ござらッしやりますよ。」

「濟まないけどもね、お前さん何卒……、鳥渡此處まで呼んで來て下さいな。」

「あの子をかね？　あー、呼んで來ますべえ、

何と云つて呼ぶだアね？」
「あのね、久堅町のね、桐澤が、鳥渡お目に掛りたいからッて……、彼處に待つてゐるから、直ぐ入らして下さいツて。」
「桐澤ツて云ふだアね、ぢや然う云つて來ますべえ。」と云つて、また掌を氣にして、「お前樣ア、此樣えな物戴えちや濟まねえだが、戴きますべえかね。」
「可いから、ま取つて置いて下さいよ。而してね、私と云はないでよ。」
「お前樣と云はねえで……。其えぢやア、何と云ふだアね？」
「いゝえさ、女ていふ事云はないでですよ。」
「女て云はねえだかね？　男て云ふだかね？」
「いゝえさ、他の人達へ知れるとね、面倒ですからね。」
「然うかね、」と考へて、「虛言吐くだかね？」
「いゝえ、譃ぢやないんですよ、」と周章した語調で、「桐澤てのはね、私の阿父さんですよ、待ツてゐるんですよ、其處に。」
「然うかね、ぢやア然う云つて來ますべえ。」
老爺は石疊を本堂の方へ急いで行つた。
女は老爺の姿が玄關の方に曲るまで見送つてゐたが、小股走りに前の通に出て、角に待たせて置いた車夫を小手招ぎして、
「辰さん辰さん。」
「へい。」と黑鴨仕立の車夫が、膝掛を小脇に丸め、鳥打帽を脫ぎながら駈けて來た。
「あのね、お前さん其邊でね、綺麗な腕車一臺雇つてお吳れな。」
「ヘツ、畏まりました。何方まで？」
「然うさね……。ま、出てから極めよう。」
「へい。」と車夫は彼方に駈けて行つた。
女は往來の人の目に着かぬ樣に、樹の陰を往きつ戾りつしてゐた。久くすると、玄關の方から、門番の老爺と連立つて、下駄草履を穿いた龍太郎が出て來た。
龍太郎は、彼の警察に拘引された後は、工場の方も退いて、伯父に當る此寺の住職に引取られてゐるのである。衣服は古い瓦斯雙子の綿入に、裄の合はない鐵お納戶の紬の羽織を肩細りと着て、櫛を通さない髮の毛蓬々と、木陰の故か、顏色一段に蒼白く見える。女は山門の內まで步み迎へて、
「龍ちやん、暫くだッたねえ。」と傍に寄つて云つたが、ほろりと淚を零した。
「あ、お俊ちやん、好く來たねえ。」と龍太郎も近く寄つて、「此の近所へ用でもあツたの？」
「お前さんに會ひに來たんぢやないか。」と小聲で云つて、門番の老爺に背後向きになツて、竊と手を握り、「お前さん、何日も好く達者で居て吳れてねえ。」
龍太郎は微し顏を赧くしたが、
「あゝ、お俊ちやんも……。」と門番を氣にしてゐる。
「種々話したい事があるけどもね、此處ぢや何うする事も出來ないから、私と一緒に、鳥渡其處まで行つてお吳れな。」
「鳥渡其處ツて、何處だい？」
「直き其處なんだよ、お前さんもう、私と一緒に出るのは厭になツたの？」
「其樣な事アないよ、其樣な事ア無いけれど、此樣な風體して居ちや可笑いぢやないか。」
「風體なんか、何うでも可いやね、厭でなけりや一緒に行つてお吳れよ。此方に來る時だッて、私にア何とも云つてお吳れで無かツたぢやないか、私ア餘りだと思つたわ。」
「其樣な事云つたッて、彼の時ア、お俊ちやんの處へなんか、行く間が無かツたんだもの。」
「來る間が無きや、はがき寄來したツて可いぢやないか。彼の晩ツ限り會はないんだもの、私ア、何樣なに心配してたか知れアしない、まア

其樣なことは何うでも可いから、行からぢやないか、種々話したい事もあるんだから。」と通へ出た。

角に居た車夫も、雇うた腕車も見えぬので、

「何うしたんだらうねえ。」と云ひながらお俊は彼方へ歩かうとした。

「おい、景山君、何處へ行くね？」と、頭の青い布衣を着たのが、背後から龍太郎の肩を叩いた。

「やア、良慶さん。」と龍太郎は吃驚して脇へ躍退いた。

お俊も顏を赧くした。二人は手を握合つて此處まで來たのであツた。

「矢張り、此方に居る坊さんなの？」とお俊は通過ぎた良慶の背を見ながら、龍太郎の傍に歩寄つた。

「體裁が惡かツたなア。お俊ちやん、早く行かうよ。」

「だツて、腕車が居ないんだもの、困つたねえ。あゝ、來た／＼。辰さん辰さん、何處へ行つてるんだねえ。」

「何うもお待遠さま。」と今雇はれた腕車も駈けて來た。

「辰さん、先刻から待ツてるぢやないかね。」

「何うも濟みません、生憎好いのが居ませんで……。」

「だツて、餘り長いんだもの……。龍ちやん、お前さんは其方へ。」と云ひながらお俊は腕車に乘つた。

龍太郎も腕車に乘らうと、蹴込に片足を掛けたが、

「あツ、大變だ。」と叫んだが、「お俊ちやん、叔母さんだ。」

龍太郎は直と後ろに逃げて行つて了つた。

お俊は吃驚して、

「何うしたツて？」

と同じく腕車を下りようとしたが、脇を通る荷車が行過ぎると、風呂敷包を抱へたお鶴婆が、つか／＼とお俊の前に歩寄つて、

「お俊ちやん、お前さんて人アま、顏に似合はない太膽い人ですねえ。」

お俊は顏色を變へて、腕車に腰を掛けたまゝ默つてお鶴を見下してゐる。

お鶴は甲走つた聲を次第に高くして、

「お前さんは、此のお寺まで來て、何にも知らない龍坊を連出さうツてんですか。」

「小母さん、もツと靜に云つたツて分るぢやありませんか、私ア聾ぢやなくツてよ。」とお俊は荒く呼吸を爲ながらも、落着拂つた語調で云ひ返した。「お鶴さん、此處は何處だとお思ひなの？ 此處は往來ですよ。」

「其樣な事ア、お前に聞かなくとも百も承知だよ、それよりはお前、」と聲を震はせて、「何と云ふ氣で、音なしくしてゐる龍坊を連出さうとするんだい。憚りながら龍坊はね、此の大泉寺樣の跡繼になる、大切の身體なんだよ、お前の樣な冷飯藝人なんぞに手も着けて貰ひ度か無いんだよ……。」

「何でえ、此の糞婆奴！」とお俊の車夫はお鶴を突飛ばして、「愚圖愚圖吐しアがると、擲ツ殺すぞ。」

「何するんだよ、お前さんは？」とお鶴は倒れ相にして踏止り、「年寄を、餘り酷い事をするぢやないか。」

「何だと、此のくたばりそくなひ奴、」と車夫は拳を握つて前へ踏込むと、

「ま辰さん、拋棄ツとお置きよ。」と車夫を宥めて、「お鶴さん、私も清元の小しゆんて云や、可なり世間に名賣つてる者だよ、龍ちやんの一人や二人、お前さんが逆天棒振つて騷いだツて、何うか爲ようと思や何うにだツてなるよ……。」

「高慢な事仰有るなよ、清元の小しゆんも宜く

出來た。」と云つたが、車夫を怖さうに、二歩三歩と後退しながら、「此の地獄阿魔奴！　今度來たら見やアがれ。」

「何だと？」と車夫は怒鳴り付けた。

　お俊は、解けかゝつた頭巾を強く鼻の上まで冠つて、今頼んだ車夫に幾錢を遣はし、

「さ、辰さん行かう。」と云つたが、其聲は震へてゐた。

第十三

　から〳〵ぴしやりと格子戸が閉つて、お俊の家からは、今誰やらが出て行つた處だ。茶の間には、母のお梅と文遊とが話してゐる。お俊が藝人になッてから、未だ一月と經たぬに、家の樣子も母の服裝も大分變つてゐる。綿入ではあるが、母は垢の着かない衣服を重ねてゐるし、柱には大きな懸時計が懸つたし、茶棚には新しい茶道具が光つてるし、座蒲團も新しいのになッたし、過日まであッた鐶の脱れた鏡臺は何處にか影を隠して、大きな鏡の付いた西洋鏡臺が其の跡に代り、茶の間の疊も新しいのに代つてる。

　母は坐つたまゝ背後を振返つて、客間に置いた、友禪縮緬の長襦袢に瓦斯八丈の褞袍を懸けてある火鉢の中に手を入れて見、また文遊に向直つて、

「ですからね文遊さん、彼が歸つて來ても、今の事は何うか默つてて下さいよ。」

「へー、宜うございますとも。」と文遊は首肯いて、擽つたい樣な顔をして、「ぢや奥さん、彼ア何でげすか、お俊ちやんの幼な馴染ッて云ふ樣な譯でげすか。」

「幼な馴染ッて云ふ譯でもないけれどもね、誠に合口でしてねえ。」

「へい、然うでげすか。何點か此う、此の間亡くなッた、小傳次ッて處がありますな。へえ、然うでげすか。へゝゝゝ。」と笑つたが、「其處へ行ッちや、私の旦那ア較べ物になりませんなア、先アづ、松助か團藏ッて處ですからなア、へツへゝゝゝ。」

「いゝえ、文遊さん然うぢやないんですよ、彼ア、本の友達なんですよ。」と母は力を入れて云つて、「只だね、彼の子の叔母さんて人はね、少し面白くない處のある人ですからね、私ア、成るッたけ心易くさせたくないと思つてね、それで、祕して可い事は祕す積りなんですよ。」

「へい、成程、御尤でげす、其樣な者が附いてましてはな。」と文遊は氣の着いた樣に急しく煙管の灰を叩き、また喫ふのかと思へば其煙管を抛り出して、「時に、奥さん、」と語調も靜に、顏を上げて、「肝心の……今の一件でげすが、何う云ふものでせう。」

「斧岡樣の方のお話ですか、然うですねえ。」と考へながら云ふ。

「ぢやア、まア、貴方は何う云ふ思召です、一つ、貴方の御胸を伺ひたいもんげすな……。拙者も、旦那が、根岸にお居でになる時分から、只今までのお出入場ですからな、決して、此方樣のお名前に關る樣な事は致しません、何うか一つ、正直な處を、私だけに伺はして下さいませんか、ねえ、奥さん。」と首を捻つてお梅を覗込み、「是がね奥さん、幾ら人に頼まれましたからッて、何でもございに持込むんぢやございませんや、何しろ貴方、先方は、山の手切ッての金満家と來てゐるんでげせう、其れに、奥樣は無しさ、お嬢樣と云つた處が、まだ、是んばかりの小兒ッ子でせう、他に厄介の有らうぢやなし、お妾と云つた處が、奥樣も同樣ですからな……、ぢやありませんか。其の上に、御兩親の方でも御同胞衆でも、何樣なにでもお世話爲ようッてんでげすからな、先アづ、拙者の心得では、此の上も無い旦那と思ふんでげす

がな……。」

「其れア、もうねえ……。ですけども、是ばッかりは御縁もんですからねえ。其れに、彼の娘の心が基礎だッて云つた樣なものですからねえ。」

「ですからね奥さん、お俊ちゃんの方で、旦那の顔が氣に入らないとか、齢を老つてるから厭だとか、其樣なやうな事なら、何も傍に從きッ切りで無くツても、此方に居らッしゃりたけア其れも可し、藝人を爲て居らッしゃりたけア其れも可しと、な、其處のところはまた、何うにでも拙者が、如才なくお話し致しまさアね、宜うがせう……。ですから、其處で先づ、貴方の御思召を伺はして下さいましよ。」

「其れアねえ……、私ア何ですけれども。彼はね、實は、少し義理の有る娘ですからね、然ら、此方の思通りにも出來ませんからねえ。」

「へえ、義理がある？　へい。貴方がお產みになッたんでげせう？」

「えー、其れア私の產んだ子ですけどもね、種々、家の爲にもなッて居ますからねえ、其れに彼の通り、我儘一杯に育てた子ですからね、阿父さんの云ふ事だッて、私の云ふ事だッて、中中、聽くんぢやありやしませんからねえ。」

「其れアもう、御尤でげすとも。併しながらお俊ちゃんは、中々親思ひで居らッしゃいますからなア。お座敷へ出ても、少し遅くならうもんなら、阿父さんが待つてるだらう、阿母さんが心配してるだらうッて、二言目には阿父さん阿母さんでげすからなア、實はもう、いゝ、てこずるんでげすよ。ですからね、旦那が一番に惚込んでるのは、其の親孝行の事なんでげすよ……。」

母は眼を拭つて、

「其れアもう、我慢させて置く代りには、眞に優しくして呉れましてねえ……。」

「彼のお娘の事ですから、貴方が一つ何とか仰有れア、御承知なさるのは知れ切つてるぢやありませんか。」

「ですけれどもねえ文遊さん、私の身に爲れア、彼の娘に、此樣な商賣も爲せたか無いんですからねえ、いゝ、よくせきの事たから、此樣な事は爲せる樣なものの、人樣の妾には上げたかありませんからねえ。私の心ぢや、末々は、彼の氣に適つた、固氣の婿でも取つて遣りたいと思つてるんですよ……。まア、折角のお話ですけれども、此の事はまア、お斷り申しませうよ。」

「へッ、お斷りですッて？」と文遊は聲色を變へて、「其れア、何う云ふ譯でございます？　此れまでにお話の纏つたものを……。何か、拙者の申した事に、お氣に障つた事でもござんしたか。」

「いゝえ、其樣な事ぢや無いんですよ、彼アもう、阿父の秘藏娘ですから……。」

「ですが奥さん、止すと仰有つても、例の、お金の一件は何うなさいます？」

「然うですねえ。」と母は胸に手を置いて考込んだ。

格子戸が明いた。

「おッ、お歸りだ。」

母は背後を振向いて、

「おゝ、お歸りかい。」

「只今。長かッたでせう。」とお俊は湯歸りと見えて、濡れた手拭に包んだ七つ道具を持つて入つて來て、「おや、文遊さん入らッしゃい。」

「今日は、昨夜ア何うも失禮。」

「文遊さんはね、先刻から、お前を迎に來てお居でなんだよ。」

「然う、私が行くと直ぐ入らしッたの？」と母の酌んで呉れた茶を一口に飮んで、「おゝ熱いこと。」と絲織の袢天を脫がうとする。

「着てお居でよ、湯上がりだから熱いんだアね、風邪でも引くと可けないぢやないか。」

「熱いねえ。」とまた被つて、「お化粧でも爲よう。文遊さん、鳥渡御免よ。」

「へッ、何卒御緩り。ですがお俊ちゃん、其の上御化粧なすッちや、辨天樣が地滑りしますよ。へゝゝゝ。」

「馬鹿にしてるよ。」とお俊は起つて鏡臺を取卸した。

母は不自由な足をしながら、お俊の背後に立つて、頭髪を直して遣る。お俊は鬢を掻きながら、鏡に寫つた文遊の顏を見ると、

「おほゝゝゝ、厭だよ文遊さん、其樣な顏をして。おほゝゝゝ。」と耐らな相に笑ひ出した。

「剽輕者だよ、文遊さんは、おほゝゝゝ、お止しよ、おほゝゝゝ。」と母も笑出した。

「えへゝゝゝ。」と笑ひながら文遊は鏡の側へ來て坐り、「何うして、此樣なにお美しいんでせうねえ、是ぢや、旦那の惚れるのも無理が無え、違えねえ。」

「厭だッたらねえ、彼方へお出でよ。」と云つて、化粧が出來たのでお俊は鏡の前を立つた。

母は首を捻りながらお俊を眺めて、

「ぢや、直ぐ着更へてお仕舞ひな。」

「だッて阿母さん、まだ早いもの。」

「早いの結構、何卒直ぐに。」と文遊は火鉢の前に坐つた。

母は時計を見上げて、

「もう四時だもの、さう此うしてる中に暮れらアね、早く着更へてお仕舞ひよ。」と母は火燵の中に手を入れ、「丁度好く温まッてるよ。」

「ぢや、直ぐに着ようか。」とお俊は四疊に行つて、帶を解きはじめる。

母は箪笥から出した物を取揃へて、お俊に着せてゐる。

「文遊さん。」

「へッ。」

「昨夜、彼から久しく居て？」

「いゝえ、貴方が歸つたんで、旦那はもう、さッさとお歸りなりました。」

「然う？ 彼の旦那も好いけれども、お酒飲め飲めには弱るのねえ。」

「其處ア貴方、お俊ちゃんには飲ませたいんでさアね。私なんかには願つたッて下さらないんですからな、へゝゝ。違へば違つたもんだ。」

「姉さん、出來てたよ。」と戸外から呼びながら、妹のお菊が風呂敷に包んだ物を持つて入つて來た。

「然うかい、御苦勞樣、好い光澤になッたらうねえ。」

「あゝ、綺麗になッたよ。」と姉を見上げて、「また、何處かへ行くの？ 是插して行くと可いわ。」と鼈甲の櫛を出す。

「あゝ。阿母さん、好い光澤になッたよ。」と背後に居る母にも見せて、「菊ちゃん、仕舞つててお呉れな、今日は別のを插したから。」

「あゝ、」とお菊は莞爾しながら姉を見上げて、

「姉さん、綺麗な半襟だねえ。」

「まア可いから、疾く仕舞つてお置き、また齒でも缺くと可けないから。」と母はお菊に仕舞はせに遣る。

「あ、然うだッけ、姉さん、」とお菊は櫛を鏡臺の抽匣に入れるや否や、茶の間から駈けて來て、「今ね、私ア彼處でね、龍ちゃんに逢ってよ。」

「おやッ、本當？」と顏を赧くして。

「あのね、姉さんに宜しくッて、然う云つてよ。あの、家へ寄つたけども、姉さん、居ないッて然う云つたッて。」

「まア、」と母の方へ向いて、「阿母さん、龍ちやん來たの？」

母も顏色を更へて、

「あゝ、先刻ね……。」

「然う、來たの？ 何故待たせて置いて呉れな

いの？」と強く坐つて、「何だツて歸ツ了つたの？」

「何故ツて、歸つて了つたものを其樣な事云つたツて。」

「お湯へ行つたんだもの、直ぐ歸るのは知れてるんぢやないか、阿母さん、私ア、龍ちやんに會ッちや惡いの？」と甲走つた聲で云つた。

「いゝえ、其樣な譯は無いけどもね、」と母は困つたと云ふ樣な顏して徐と坐つた。

「然うでないなら、何故待たして置いて呉れないの？　而して、私が歸つて來たッて、祕してるぢやないか。」

「いゝえ、祕しアしないけどもさ‥‥。」

「だツて、默つてるぢやないか。」

妹のお菊も坐つて、

「姉さん、怒つたの？　默つてりや宜かつたツけ、私知らないもんだから‥‥。」

「俊ちやんや、然う怒るもんぢやないよ、默つてたのは惡かッたけどもね、私つい忘れてたもんだから‥‥。」と母は謝罪る樣に優しく云つて、「それにね、彼の子の來る前から、文遊さんが來てお居でだッたしね‥‥。」

「文遊さんが來てりや何うしたの？　可いよ、私もう、お座敷へなんか行かないから。」

「困るぢやないかねえ、お前其樣な、小兒見た樣な事云ッちや。」

「困つたツて知らないよ。」とぷいと起上つた。

文遊も其處へ來て、

「お俊ちやん、まア貴方、何うしたッてんですねえ。」

「何うしようが此う仕ようが、私の勝手ですよ。」と上り口の障子を明ける。

「まア俊ちやん、待つてお呉れよ、お前何處へ行くんだねえ？」

「姉さん、待つて頂戴よ、」とお菊は姉の袂を捕へて、「よ、私が惡きや謝罪るからさ。」

「お前は可いんだよ、可いから其方へお退きよ。煩いねッ。」と土間へ下りて下駄箱を明け、「私の吾妻下駄が無いよ、何處へ遣つたんだい？」

母も立つて來て、

「俊ちやんや、お前本當に何處へ行くんだい？　其樣な事するもんぢやないよ、ま、此方へお入りよ。」

「知らないよ。私の下駄何うしたんだよ。」

「姉さんの下駄、齒入れに行つてるぢやないか。」と妹はべそかきながら云つた。

「齒入れに遣つたのは、此の間ぢやないか、何故取つて來て置かないの、私を出さないッてのかい？　私が出なけりや、お前達は何うするんだい、えッ、焦躁ツたい！」と云ひ樣、一番に好い都形の駒下駄を手荒く出して、足を突掛けると、直ぐに戸外へ出て了つた。

妹のお菊は、いゝ、わッと泣出した。

第十四

「阿母さん阿母さん、大變だよ。」

戸外から呼びながら、娘のお蔦がばた〳〵と駈込んで來た。龍太郎を對手に茶を喫んでゐたお直は、笑ひながら八を寄せて、

「何だねえ、其聲は？」

「だツて、叔母さんが來たんだよ――龍ちやんの。」

「叔母さんが？　家へかい？」と眼を圓くした。

「家でなくツて、何處へ來るもんかね。」と云つて戸外を見返り、火鉢の前まで駈けて來て、「阿母さん、其處まで來たよ。」

龍太郎はむッくと起上つた。お直も眼をきよいゝろきよろして、

「龍ちやん、速く二階へお出でよ、二階二階、何だよ、其方ぢやないよッ。」と急しく指圖したが、「蔦ちやん、下駄があるよ、速くお隱しよ。」

「何れだい、阿母さん是れ？」と薩摩下駄を持

つて、お蔦も同じく二階に登つて行つた。

「此方に、私共の龍坊が來てゐませう。」と戸口から怒鳴つて來たのは、龍太郎が叔母のお鶴である。

お直は態と澄して、

「いゝえ、來やしませんよ。まアお上んなさいな。」

「來ないも好く出來たもんだ、お直さん、此處に下駄が脱いであるぢやありませんか。」

「然うですか、其れアお客樣のですよ。」と笑顔を作つて云つた。

「恍けるにも程があるぢやありませんか、是がお客の下駄ですか、是が、」と薩摩下駄を取上げて、「此の、あぶの燒印の捺してあるのが、お客の下駄ですか……。」

「へい、虻の燒印ですツて？」

「馬鹿に爲なさんなよ、誰が虻の燒印て云つたんです、此の通り、鐙の燒印が捺してあるぢやありませんか、此の燒印は、大泉寺樣の燒印ですよ、此樣な物で、お前さん達に馬鹿にされる樣な、其樣な耄碌アしませんよ、さ、速く龍坊出して下さい、二階にはまた、彼の地獄阿魔が來てるんだらう。出さなきや、家探しても連れて行きますよ、速く出して下さい。」

「まア小母さん、も少し靜に御有つて下さい、家にア、韓が一人も居ませんからね、」と澄して煙草を詰めながら、「私の處は客商賣ですし、二階には、お客樣も居らッしやいますし、餘りがア／＼怒鳴られると、迷惑しますからねッ」

「お客樣も無いもんだ、二階に居るのは、彼の地獄だらう……。」

「地獄ですッて、地獄たア小母さん、それア誰の事です？」

「誰でも無い、彼つお俊の阿魔の事さ。何でも可いから、速く龍坊を出して下さい。」と云つて一段聲を張上げて、「龍坊、龍坊や、何故隱れアがるんだ、速く此方へお出でよ、來ないと引摺り出すぞ。龍坊ッ。」

お直は煙草を喫みながら、額越にお鶴をじろじろ睨めてゐる。龍太郎は惴々ながら二階を下りて來た。お鶴は一目見ると疊の上にあがッて、龍太郎の肩を引張り、

「此の餓鬼ア、何だツて此樣な處へ來やがるんだい？」

「何たい叔母さん、靜に爲れア可いぢやないか。」と龍太郎は叔母に引かれながら云つた。

「何だと、默つて居やアがれ。此樣な處へなんぞのそ／＼來やアがツて、また、警察署へでも引かれたら何うするんだい？ 彼樣なすべた地獄なんぞに誑されアがツて。」と怒鳴りながら土間へ下りると、

「小母さん、すべた地獄すべた地獄てお云ひだけれど、其れア、誰の事なんです。」とお直は首を伸して問掛けた。

「彼の、へぼ畫工の娘の事さ、お俊の事さ。」と龍太郎の手を引張つて、「さ、來やアがれ。」

「小母さん、鳥渡待つて下さい。お前さんは、何も御存知なからうけれどもね、お俊ちやんの御家は、私のお袋が御奉公申したお家でね、私に取つても御主人筋ですよ、今こそ、彼樣なになつて居らッしやるけども、旦那は立派な畫の先生ですよ。お前さん見た樣な者に、然う踏付にアして貰ひますまいよ！」

「立派な先生が聞いて呆れらア、彼の態ア何だ、へぼ畫工奴。私の龍坊はね、是れでも、大泉寺樣の跡取になるんだよ、大泉寺樣と云や、昔時は御朱印付きの立派な御寺だ、彼樣な、すべた地獄なんか執持たれて耐るもんか。」

「ふん、大層お威張りですことねえ。お俊ちやんのお家だツてね、昔時は、根岸の殿樣とも云はれた家なんですよ、其れに、本當の親御さんはね、憚りながら、馬車に乗つて歩く方なんで

すよ、子細が無きや、お前さんなんざア、お俊ちやんの傍へも寄れないんだ。」

「何樣な者の娘だッて、地獄ア地獄だ。誰だッて、地獄の傍にア寄れないよ。」

「おほゝゝ、お鶴さんは、龍ちやんを地獄にした覺はなくッてねえ、眞宮の後家さんに賣付けようと爲なかッたり、今度だッて、可哀想に十八にもなッてる男の子を、無理やりに坊主に仕ようとしたり、お前さんも、中々お情者ねえ、お年の寄るのも御尤も、ほゝゝゝ。」

「なんだ、地獄屋め、龍坊さへ取返せア、汝達に用は無いんだ。さ、龍坊行かう、お出で。」と捨臺詞を殘して、お鶴は龍太郎の手を引いて出て行つた。

「何て云ふ惡たれ婆だらう。」とお直は獨語したが、二階から降りて來た娘のお蔦を見ると、

「何だねえ蔦ちやん、お客樣の下駄なんぞ持ッてッて、ほゝゝゝ。」

「だッて、阿母さんが是だッて云つたから、持つてッたんぢやないか。」とお蔦は赧くなッてる顏を袖で拭ひ、「あゝ熱い、怖かッたねえ。」

中仕切の障子が開いて、臺所から入つて來たのは、風通織の晴着を着たお俊である。

お直は吃驚して、

「おや、お俊ちやん、何時入らしッて、臺所に居らしッたの？」と眞蒼になッてるお俊を見上げた。

「お直さん、今云つた事は本當なんですか。」と火鉢に攫まつて、ぶる／＼と顫へながら、お直の顏を視詰めた。

「えッ。何です？　まア眞蒼になッて、如何したんですよ？」

「小母さん、今の話ア本當ですか、私ア、阿母さんの子ぢやないんですか。」と云つたが、はら／＼と涙は落ちた。

「えッ、ぢやお俊ちやん、先刻から爰に居たんですか」と云つたが、見る見るお直の顏も眞蒼になッた。

「え？　皆な聽いたんですよ。小母さん、本當ですか、私の親達ア他所に居るんですか……。後生ですから小母さん、何卒隱さずに話して下さいなねえ、小母さん……。」

「なアに、然うぢやないんですよ、然うぢやないけども、彼奴が餘り憎らしいからね、私も、出鱈目云ッたんですよ……。」

「其樣なに隱して下さらないだッて可いぢやありませんか、小母さんの顏色だッて變つたし、本當なんでせう、何うか隱さずに話して下さいよ、私ア、此樣なに小母さんを賴りにして居るぢやありませんか、ねえ小母さん……。私の親達は餘所に居るんですか。」

「私も、貴方に然う問詰められちや、何うする事も出來ないけれども、」と太く溜息を洩して、「あゝ、飛んだ事を云つたッけねえ、何うしたら宜からう。」

「ぢやお直さん、本當なんですか。」と云つたが、耐へかねて其處へ泣伏した。

お俊に迫られたので、お直は終に一部始終を語出した。お俊は實に素雲お楳の子ではない、お菊とも全くの他人である。今現に海軍部内の或樞要の職に在る某將官の先妻、松子夫人と云ふ腹に出來た子なのである。十九年前の昔語、其將官が官命を帶びて洋行した後、一年餘經つて夫人は懷姙した、惡評忽ち世間に響いて、昔氣質の里の親に引取られ、後悔と苦勞の間に女の子を擧げたのであるが、未だ巢に居る中に歸朝した夫の、明日横濱に着くと云ふ前夜、臍の緒も取れないお俊を遺して自殺して了つたのである。それは素雲が根岸に全盛を誇つてゐた時、藝妓上りのお楳が四年添うて、醫師にも掛り湯治もして、未だに子の無きを嘆いて居た處へ、後日行通ひしたいと云ふ

約束で、世話する者の有るを幸ひ、我が子として養育てる事になッたのだ。が、前世の緣が深いと云つたものか、雙方の性が合つたと云ふのか、親が可愛がれば娘も慕ひ、實の娘のお菊が生れてからも、親に隔ての心も出でず、お俊やお俊やで、今日に到つたのである。

お直の長物語を聽いて居たお俊は、力なく顏を上げて、

「あゝ、小母さん、私ア其樣な身の者でしたかねえ……。知らないたア云ひながら、今迄我儘ばッかりしてねえ……。」

「ですけれどもねえ、お俊ちやん、貴方がね、此樣な事を聽いたと知ればね、阿父さんや阿母さんが、何樣なに面白くないか知れないんですからね、決して、擧動にも出しちや可けませんよ、ね、」とお直も眼を拭ひながら、「だけれども、お俊ちやん、其樣な事情ですからね、本當の阿母さんは此の世にア居ないし、阿父さんは何處の誰だか、皆無分らないんだし……、貴方の御兩親はね、今の阿父樣阿母さんより他にア無いんですから、決して隔の心を起しちや可けませんよ、吳々も、心違の無い樣にして下さいよ、ね、ねお俊ちやん。」

「小母さん、何うも種々有難うございました、私アねえ、今迄よりも、阿父樣阿母さんを大事にしますよ、決して隔の心なんか起しアしませんから、何卒御安心なすッて下さいよ……。」

「おや、もうお歸りですか、未だ可いぢやありませんか、もう御飯時ですから、何か美味い物でも拵へようぢやありませんか。」

「有難う、また阿母さんが待ッてますから。」とお俊は力無く起上つて、側に怪訝な顏してゐるお蔦に笑顏を向けて、「蔦ちやん、左樣なら。」

「あー。」とお蔦は改まつた返辭をする。

「本當にねえ小母さん、」立止つて、「小母さんにも蔦ちやんにも、長い間種々お世話になりましたッけねえ、矢張り是も、前の世からの御緣でせうねえ。」

「ですけれどもねえお俊ちやん、」とお直は心配相な顏して上り口まで立つて來、「お前さん、其樣な事を氣に懸けてね、身體でも惡くすると、それこそ大變ですからね、決して氣に懸けるんぢやありませんよ。」

「あ、有難う、」と云つて土間に下りようとしたが、自分の履物は無い。

「阿母さん、お俊さんの下駄は臺所にあッてよ。」とお蔦は母に云つた。

「何だねえこの子は、ぢや速く持つて來てお上げなね。」とお直は元氣好く云つた。

「あい。」と駈けて行つたが、直ぐ持つて來る。

「何うも濟みません、」とお俊は下駄を穿かうとして凝然と眺め、「此樣な下駄をまア……、服裝だッて此樣な服裝して……。私ばかり、大變に贅澤をしてゐるんだねえ!」

お俊は琴風亭を出た、お直母子は常に無く悵然其跡を見送つてゐた。

第十五

其の翌朝のことで、雙親の對合つてる長火鉢を少し離れて、兩手を突いて俯向きになッてゐる者はお俊だ。

「何故、其樣な詰らん事を云ふのだ？」と白き毛の交つた腮の鬚を拔きながら云つたのは、父の素雲である。色の淺黑い、骨張つた、鼻の高い顏で、胡麻鹽頭髮を綺麗に分け、衣服は茶微塵銘撰の綿入に、羽織は黑太織の三つ紋、鼠色に變つた縮緬の兵兒帶を細く締めてゐる。

お梅は解せないと云ふ樣な顏して、久く默つて娘を見下してゐたが、

「俊ちやんや、お前何だッて其樣な、心細い樣な、變梃な事云ひ出したんだねえ、お嫁に行くッて事はお前、女の大事ぢやないかね、其れ

をまア、奉公にでも出る樣に、突然に何の事たねえ。」
「だッて阿母さん、私も、熟く考へた上の事なんですから。」とお俊は俯向いたまゝで云つた。
「其れア、お前だッて考へたらうけれどもね、他の事と違つて、お前の心任せにする事は出來ないんだよ。緣談てものは、第一ア釣合が肝心ぢやないか、其れア、斧岡樣て人ア、お金は澤山あるだらうけれども、お前の阿父樣と云つて可い齡ぢやないか、其れに、九歲になる女兒まであるッてぢやないか、お前だッて、滿足な顏して居て、齡だッて、嫁に行遲れた齡ぢやなし、何で其樣な、馬鹿氣た事を云ひ出すだらうねえ」と母は力を入れて云つて、「阿父樣を差置いて、此樣な事を云ふんぢや無いけども、鼓噴一つ擔へずに育上げたお前を、何で彼樣な、年寄の處へ情氣も無く遣られるものかアね、是ばかしア、何うあッても私は承知する事が出來ないんだからねえ、お前も、其樣な事ア諦めて了つてお呉れよ。」
「ですけれどもねえ阿母さん、私が斧岡樣に嫁けば、今の樣に借金に責められる事もなし、阿母さんだッて、お體が御不自由なのに水を汲んだり、臺所の事を爲さらないでも、女の一人位は使へませうし、菊ちやんだッて、學校へも遣られませうし、皆なが都合好く行くんですからねえ。何卒是許りは、御聽屆なすッて下さいましな。」
父は切りと鬚を扱きながら、
「其樣な解らん事を云ふもんぢやない、お前は桐澤家の總領ぢやないか、總領ならば、跡を相續する身ぢやないか、其れを餘所へ行くとは何の事だ。」
「阿父樣、それ程迄に私を思つて下さるんですか。」と云つて、突いてる手の上にはら／＼と涙を零した。
「其樣な、下らん事は再び云ふな。」と云つて、女房に、「お梅、もう九時ぢや、行つて來るぞ。」
「行つていらッしやいまし。」と妻は夫の跡に從いて、緣の擦切れた中折帽を持つて上り口に行つた。
お俊も同じく四疊まで起つたが、其處に坐つて、
「阿父樣、眞に諄く申上げて濟みませんけれども、只今願ひました事は、何卒御承知なすッて下さいまし、今日の中にも文遊さんに談して貰つて、早く取極め度うございますから。」
父は土間に下りて朴齒の下駄を穿いたが、
「何故、何時までも其樣な事を云つてるか、借金を何うの此うの云ふけれど、借金の事なんぞは、お前が氣に爲んでも可いのだ、今に阿父樣が仕事する樣になれば、な、再舊の樣に、何不自由なく暮されるんぢや、然うなりや、お前にも立派な婿を取つて遣るんだ、其樣な事を云はんで、久々辛抱して居れ。解つたか。お梅。熟く云うて聽かせて遣れ。」と言遺して素雲は出て行つた。
母は茶の間に來て火鉢の前に腰を下し、
「俊ちやんや、鳥渡此處へお出でな。」
「はい。」と涙拭きながら來て、火鉢から離れて坐り、手を突いて、「何でございます？」
「何だねえお前は、其樣なに改まつて……。ずッと火鉢の傍にお出でな。」
「はア。」と前に進んだが、手を膝に載せて俯向いてゐる。
「俊ちやんや、何うしたッてんだねえ。お前、誰にか何か聽きアしないかい？」
「いゝえ、何にも。」
「いゝえ何にもッて？　昨日からのお前の擧動は、全然違つてるぢやないか、何を云へばッて何を爲ればッて、全然他人行儀ぢやないか……。」

何様な事だッて、阿母さんに祕す事は無いんだから、聽いた事があるなら、有る樣に話しておくれな。」

「阿母さん、本當に何にも無いんですよ、」と無理に笑顔を作つて、「阿母さんこそ、可笑な事を仰有るぢやありませんか…。」と云ひ切らぬに、またはら〳〵と涙を零して急に俯向いた。

「何にも無いと云ふけれども、其の通り泣いてるぢやないか、顔色だッて惡いんだし、昨夕から、碌に御飯も食べないぢやないかね。」

「だッて、阿母さん、昨日彼樣な、惡口なんぞ吐いたんですもの…、知らないたア云ひながら、好きな我儘ばッかり爲て…。」

「えッ、何だい、知らないたア?」と母は顔色を變へた。

「いゝえ、何でもないんですよ…。」と云つたが、其處に打伏して、聲立てて泣出した。

母も顔を袖で覆して了つた。

* * * *

素雲もお梅も快く承知は爲なかッたが、お俊の熱心なる嘆願は、終に兩親の心を動かして、此の縁談は、結納の取交せを爲る事にまで進んだ、勿論是は、文遊の口を賴まず、お俊が親ら希岡に會つて極めたと云ふことで。

第十六

駒込千駄木町の、造作は古いが、此邊の人には、石町の隱居の家とばかり呼ばれた、狹いけれど手の掛つた庭もあり、間數も五間からある冠木門の家へ、五六日前、桐澤といふ標札が掲げられた。

「…したりやヨメ〳〵、しんにヨタ〳〵してがん〳〵…。」と唄ふ聲がして、足音がどしんどしん。

「あッはゝゝゝ。」「おッほゝゝゝ。」と臺所と茶の間で五六人の笑聲がした。

「あゝ、お腹が痛い。」と轉廻つて笑つてゐたお直は、漸と起上つて、眼を擦りながら臺所から出て行つた。

「何うも師匠さん、今の袴の腰付ッてものはありませんなア、はゝゝゝ。」と勝手口に箒を突いて起つてゐるのは、お俊の車夫の辰である。

「何時でも、文遊さんに掛ッちや敵はないねえ、ほゝゝ。」とお梅は、盆に載せた唎酒の燗したのを持つて、次の客間の襖を開けた。

爰は六疊であるが、座敷に溢るゝばかり種々の物が置列べられてある。柾目の簞笥が三棹、長持が二棹。それから用簞笥。金蒔繪對の文庫、鏡臺、針箱。壁の片隅には銅箍の盥、眞鍮の金盥、嗽茶碗。其の下に下駄箱、下駄箱の側に、油臭い蛇の目傘、之と相對して、敷込の床の上には、萌黄眞田の紐で結へた膳箱を初めとして、ボール箱、桐の箱、水引の掛つた紅白の眞綿、反物、下駄、鰹などがごた〳〵と置かれてある。

「貴方、烏渡是を御覽きなすッて下さいな。」とお梅が坐つた。

床の間の前で、祝儀袋へ金を入れてゐるのは夫の素雲である。

「酒か。」と素雲は寒相な顔を向けたが、「お前飲んで見たら可からう。」

「私達ア、何だッて宜うございますから、貴方飲つて見て、佳いのを然う仰有つて下さいましよ。」と猪口を出す。

「いや、今日は飲み度らない。」とお梅とは反對の、沈んだ語調である。

「何ですよ、何日も飲る癖に、今日に限つて。」と元氣好く云つて、「お俊とお酒飲むのも、今日限りぢやありませんかね。」

「いや、欲しくない。」と猪口も把らない。

「何うなすッたんですねえ、今日に限つて?」と怪訝な顔をしたが、爰へ入つて來た文遊を見る

と、「あ、文遊さん、好い處へ。鳥渡來てお吳れ。」

「へツ。」と傍へ來ると、「やア、是は御新造、何うも御馳走樣。」

「お前さん、一つ喇いて下さいな。」

「へえ、畏まりました。然う云ふ御用なら何日でも結構。」

「而してね、」とお梅は忙し相に起つて、「喇いて見て、佳いのを云つて遣つて下さいな。」

お梅は緣側に出たが、庭でお蔦と遊んでゐるお菊に、

「おいく、菊ちやん、袖が引摺るよ。家でお遊びなねえ。」

「あゝ。」とお菊はお蔦と共に緣側に來たが、「阿母さん、姉さん處へ行つても可いかい？」

「あゝ、可いとも。」

「ぢや行かう、蔦ちやん。」とお菊は嬉し相にお蔦の手を曳いて、通の間から次の四疊半に入らうとすると、

「菊ちやん、鳥渡お待ち。」と柳行李に色更の衣服を入れてゐた母は、紙縒に力を入れて俄に呼止めた。

「阿母さん、なアに。」

「鳥渡此方へ、」と手招して、お菊の耳に口を寄せて、「あのね、先刻の事をね、姉樣に云ッちや可けないよ。」

「先刻の事ツて、龍ちやんの？」

「然うさ。」と母は首肯いて、「可いかい？」

「あ、可いよ、云やアしないよ。」

お蔦は母子の顏をじろく眺めてゐたが、

「菊ちやん、何？」

「あれ、先刻の……、今日龍ちやんが……。」

「今日坊樣になるツて云ふ事？」

「あゝ。」と眼を大きくして首肯き、「蔦ちやんも、云ッちや可けないのよ、諾ツて？」

「あゝ、云やしなくツてよ。何故？」

「何故でも、叱られるんだもの。」

二人は耳語き合つたが、軈て通の間と中仕切の唐紙を半分ばかり明けて、お菊は、

「姉さん來ても宜くツて？」

「あゝ、可いとも。」と答へたのはお俊である。

此處は裏庭に向つた四疊半で、お俊は今髪結に髪を解かせてゐる處だ。二人の小娘は、鏡臺の脇に行儀好く列んだ。髪結は世辭笑して、

「御孃樣、皆な御姉妹でございますの？」

「いゝえ。」とお俊は答へた。

「然うでございますか。」と服装の美い方のお菊を見下して、「ぢや、此方の御孃樣は、御妹御樣でございませう。」

「あ、然うですよ。」

「然うでございませう。何處か似て居らッしやいますもの。本當に、御美貌人で居らッしやいますことねえ。」

「あら、厭な人だよ。」とお菊は笑つて、「似て居るツて？　私、姉樣の樣に綺麗ぢやないわ。」

「おほゝゝ、彼樣な事を仰有るよ、」と梳櫛を握つた手の甲で口を押へて、鏡の中のお俊を見たが、「もう、四五年も經つて御覽遊ばせ、お姉さまよりも、美しくお成りなさいますから。然う爲ようもんならもう、お嫁の口が降る程來ますよ。」

「あら厭だ、今ッからお嫁だッて。ねえ蔦ちやん。」

「本當でございますよ、ねえ御孃樣。」とお俊に話掛けたが、またお菊に、「貴方の御嫁に行らツしやる時にも、私がお髪を上げますよ……。おほゝゝ、笑つて居らッしやるよ。」

「種々な事云つてるよ、人が默つてれば。」とお菊はお蔦と見合つて笑つてる。

「本當に、此う云ふ御孃樣方はお樂みですねえ、是からお嫁に行くんですからねえ……。美い容貌に生れて、惚れた御亭主でも持つたら、何

樣なに樂みでせう、おほヽヽヽ。」

「姉さん、何うして？」とお菊は、急に顔へ袖を覆てた姉を覗上げた。

「おや、何うなすツて？」と髪結も云つた。

「何だか、目が……。」とお俊は面を押へながら云つた。

「何か入りましたの？」と云つたが髪結は前髪を取らうとして、「少し仰向いて下さいな。」

お俊は髪結の爲すまゝにしてゐたが、顔を隱したまゝで、

「髪結さん、鳥渡……。」と低聲で云つた。

「は。」と手を息めた。

「何卒、鳥渡卷いて下さい！」

「然うですか。」と厭な顔したが、それでも直ぐに櫛卷にして遣る。

お俊は其の儘衝と起つて、裏庭に下りた。

「姉さん、何うして？」と云つたけれども返辭がないので、お菊は肱懸窓の障子を開けたが、「あら、居ないよ。」

＊　＊　＊　＊

大泉寺の山門鎭守、稻荷の祭日と云ふ今日、龍太郎が得度の式を擧げらるゝ事となツた。風は出たが朝よりの天氣に、近所の子供等廣き境内に群がツて、門内には飴屋、駄菓子屋、水菓子屋騷しく、玩弄店の風船は風で切りと身を躁く。「餘り騷ぐと太鼓を取上げて仕舞ふぞ。」と寺男に叱られても、また其後から叫喚き廻る子供等の間に紛れて、稻荷祠の背から茶畑の間を拔けて、本堂の右側に出たのは、櫛卷の頭髮に綿銘撰の不斷着、頭巾も無ければ、足も素足に子供の下駄穿いた、今我が家を駈けて來たばかりのお俊である。

惡戯好の子供等も此處には影なく、大屋根の檐下森閑として、人の足音に彩色した樣な小鳥が驚いて飛立つた。お俊は四邊に氣を配りながら、高い緣の下から徐と其處の障子を明けようとしたが、其の手を掛けた時しも、内から大勢の唱和る讀經の嚴かな聲が聞えたので、思はず總毛立つて、其の掛けた手を引いて、身を萎めた、が、

「菩薩大士一心念、我弟子良透、此鉢多羅應量器、今受持常用故。」と唱ふる聲は、凝ふ可くもあらぬ龍太郎の聲である。お俊はまた立寄つた。音のせぬ樣に障子を明けた。がらんとした薄暗い本堂の、本尊樣の前の間に、燭臺の火小さく燃え、香爐の煙白く立つて、墨染の布衣着た肩細く、剃つたばかりの頭小さく、今しも、人と離れた疊の眞中に、徐に退いた横顔は、我が戀人の龍太郎である。

お俊は衝立つたまゝ、凝然と俊太郎を視詰めてゐる。涙は雨の樣に落ちる、身體が顫へて來たので、敷居に攫まつて見たが、仕舞には、障子までが共にかた〳〵と鳴つて來た、お俊は其處を離れた。

「我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身口意之所生、一切我今皆懺悔。」とまた龍太郎の聲が聞えた。

お俊は徐に大泉寺を出た。何處を何う歩いたことか、何時の間にか我身は、坂道の、右方は竹藪風に戰ぎ、左手は野菜畑廣々と開けた田舍道に來てゐる。

背後から吹く風に送られて、遠くに半鐘の音が聞えた。振返つて眺むれば、遙か彼方の木立の頭に、小山の樣に高く出てゐるのは寺院の家根だ。彼は大泉寺ぢやないか、今鳴つた鐘は彼の寺の鐘ぢやないか、龍ちやんの得度の濟んだ鐘ではあるまいか……。

＊　＊　＊　＊

此の日の夕方、千駄木町の桐澤の家から、湯島なる斧岡の家に、人目を驚かす程な立派な嫁入があツた。

はやり唄

叙

自然は自然である、善でも無い、悪でも無い、美でも無い、醜でも無い、たゞ或時代の、或國の、或人が自然の一角を捉へて、勝手に善悪美醜の名を付けるのだ。

小説また想界の自然である、善悪美醜の孰に對しても、叙す可し、或は叙す可からずと羈絆せらるゝ理窟は無い、たゞ讀者をして、讀者の官能が自然界の現象に感觸するが如く、作中の現象を明瞭に空想し得せしむればそれで澤山なのだ。

讀者の感動すると否とは詩人の關する所で無い、詩人は、唯その空想したる物を在のまゝに寫す可きのみである、畫家、肖像を描くに方り、其の鼻高きに過ぐと云ひて額に鉋を掛けたら何が出來ようぞ。

詩人また其の空想を描寫するに臨んでは其の間に一毫の私をも加へてはならぬのだ。

辛丑陽月　天外

第一

四五日降續いた卯の花朽も曉方から收つて、この村を肥す惠の夏が今日の南風に乘つて來たかと思はるゝ卒の暑さである。

土からは土の香氣、草木からは草木の香氣が、此の暑い日光に蒸されてぼや／＼と立騰つてるが、其の立騰つた香氣の凝つて出來たのか、晴渡つた空を煙の樣な淡い雲が途切途切に飛んで行く、と、其の雲の上では、雲雀のお饒舌が引切無しに聞えてゐる。地の上は地の上で、何處でも家を空にして働きに出たか、田にも畑にも一面に人影が散ばッて、日光を反射する農具の鐵がぴか／＼と動き、溫んだ水の中では蛙が唄つて居る。村の地勢は北に進むに連れて次第高になッて、上の方は悉く畑で、折しも鎌を入れる許りに實つた麥は、暖かな風に黄色い浪を打つてゐるが、其の浪の消える際涯に、丁度丘を登詰めた所に、大きな寺の山門が見える。

眞言宗で修行院と云ふ寺だ。宇都宮某侯の菩提所が在るので、縣内に名の聞えたものだが、久しい前に下男の過失からさしもの大伽藍を全燒にした後は、廣き境内に假御堂淋しく、本堂再建の札も雨風に墨色失せて、松、樅などの大木、晝も小闇きまでに繁茂つた下に、鐘樓と山門ばかりは昔時のまゝに遺つてあるのだ。

「私等が口で此樣ねえなこと云つてはア、今の旦那樣にも奥樣にも濟まねえけんど、何でもこれ、代々然うした血統だんべえ云ふ話だよ。」

「ぢや、つまり淫亂な血統ッてんだね。や、其奴ア厄介な血統だ。」

「其が證據にはお前樣、今日の佛樣だの、先の奥樣だの許りで無えだからね。」

「へい、其の、男狂ひ爲た奴がね、へい?」

「あゝ、男狂ひも男狂ひ、始末に能ねえ婆樣が在つただよ。」

「婆樣ッて云ふと?」

「先の奥樣の阿母だがね……。私等、未だ根から小兒の時分だで、能くは覺えて無えけんど、何でも色の白え、でッぷら肥つた、えら、立派な婆樣だッけえよ……。」

「ぢや、其の婆樣も、矢張り男狂ひを遣らかして、身でも投げて死んだ奴だね?成程、此奴

ア血統かも知れねえ。
「なアにさ、婆様は其様ねえ事でおッ死んだで無えだがね。如何だッぺえ、六十から以上になッて、男妾の三人も置いただアよ。」
「三人？　へい！　六十にも成ッて？　大變な奴が有つたもんだなア、何の事ア無い、宛然女の狒々だ、あはゝゝゝゝ。」
　三時頃の日脚を一杯に浴びてる山門の石階の下で、紺の半被を着た車夫と、いゝ、ちよん髷の百姓とが此様な談話をして居る。車夫は言葉付から、尻こけに八端の細帶を氣取つて締めて居る處から、一見して東京の者と判るが、斯る田舍には勿體ない程綺麗な腕車の蹴込に腰を卸して居る。百姓は此と横向きに石階に腰掛けて、雁首の大きな奴で臭い莨をぱくり〳〵遣りながら、其からそれと限もなく饒舌つて、時の經つのも平氣で居るのは、只だ談話好きの故のみで無く、今日桑伐に出たのも眞の若者達への手助けに出た隱居の身の上だからでもあらう。
「だが爺さん、能く其れで、三人の妾同士が治まッてたもんだな、矢張り、意氣地無奴が廻部屋に打込まれた圖で、温和く婆様のお廻りを待つて居がッたんだね、はゝゝゝゝゝゝゝゝ。」
「ところが治まらねえだ。」
「妾同士が・・・？　成程、此ア治まるめい。女の妾だッて、三人も有つた日には何だ、能く芝居でも演る奴だが、御家騷動の發端なんだ・・・、況して野郎の妾と來ちやアな、うん、此奴ア治まるめいよ。」
「治まらねえのなんのッて、初中終紛擾返して、出るの出さ無ねえのッて、物言許爲ちよりますだ。それも可えけんど、其の度に費る物はそら、此だッぺえ！」と百姓は太い指を丸くして見せる。
「うん、金が、然うだらうッて、妾の機嫌を取らうて日には、是非其奴を握らせなきや成られいんだからな。だが、三人で以て強請つた日にア、大した費だッたらうなあ？」
「費つたの費ら無えのッて、七兵衛河さ行きや鵜が水浴びる、圓城寺婆様金浴びる、て、歌にまで唄つただからね。」
「へい。」
「其の婆様の代までは、高根澤の圓城寺て云やお前、江戸まで響いた長者だつた。」
「おや、其の、婆様の淫亂で可け無く成ッ了やッたんだ？」
「なアに、可け無くなッた云つても、圓城寺様は圓城寺様だアね。未だ、芳賀鹽谷二郡で、二番た下らねえ地主様だからね。」
「でも、其の前までは未だ良かッたんだ、其の、今の多淫婆様の前までは？」
「其れアお前様の前だけんど、江戸はお膝下だ云つても、彼様ねえ大仕掛な生活無かッぺえよ、何だッてお前、お上から炊婦までつッ括めたら、五十人から居ただア、それに、馬だら二十疋、犬猫だッて十疋二十疋は蓄つて置くだア・・・。」と乘氣に成ッて自慢話をすると、
「はゝゝゝ。其のまた犬猫が、淫亂の血統を引いて矢鱈と子を放りやがるか？　此奴は大變だ。あはゝゝゝ。」
「全くだよ、あはゝゝゝ。」
二人が大聲で笑ふと、直ぐその頭の上で、
「えせゝゝゝ。」と締なく笑ふ聲がある。
「えッ、勘公か、誰かと思つた。」と車夫は吃驚する。
「己も吃驚しただア。」と百姓は肩で溜息をして、「やい、勘公、汝、其れでも人の談話とこ解るか？」
「手前なんか何だ、土百姓の齒拔爺。」
「彼様な事を云つてやがら、手前は何に成ッた氣だらう？」
「何でも、御役人様か御大名に成ッてるだア

ね、」と爺は笑ひながら「やい、勘公、汝其物を何處から採つて來ただ？」

「己が畑から採つて來ただ。」

「己が畑か？　はゝゝ、己が畑は可いぢや無いか、はゝゝゝ。」と車夫は笑ふ。

「勘公の氣ではア、村中の地所皆な我が有だからね、一番に可いだよ。はゝゝゝ。」

二人が笑ふと、また、

「えせゝゝゝ。」と聲を合はして笑つた。

雀の巣の下がッてる山門の柱に凭ッかゝッて、勘公は、三十許りの日に燒けた黑い顏で、赤い髮の毛を蓬々と長く生し、袖の横斷れかゝッた垢だらけの着物で、誰の惡戯やら、細い帶の端を綺麗に縫つて長く垂れ、而して何處から拔いて來たのか、土の着いてるまゝの麥株を片脇に抱へて居る。

「だが爺さん、今こそ此樣な狂人だが、勘公はこれで、今日の佛樣と奇な間だッたてぢやねえか？」

「なアに、今日の佛樣ぢや無えだよ、今日の佛樣の色狂ひおッ始めた時分にやア、勘公最う此樣ねえ成ッてただよ。」

「然うか、なア先の奥樣だね、其の……、茶人の種を宿して披露したッて云ふ？」

「然うだとも、其の奥樣だよ……。」

「へい、」と車夫は勘公を見上げて、「色は思案の外ッて事は有るが、此樣な奴の何處が好いのかなア？　奥樣は餘程な茶人だッたなア、あはゝゝゝ。」

「茶人云や茶人に違え無えだね、何樣ねえ男でも、變つた男せえ見りや、みんなしやぶつて見度えだからねえ、はゝゝゝゝ。」

「だが、是でもお情受けたんだと思や可笑いや……。やい、色男の勘公、はゝゝ、彼樣な顏を爲やがら……。勘公、汝、奥樣に口說かれた時は何樣なだッたい？」

「氣い此樣なで無えだと、其れ話爲せたら可笑がッぺえね、」と爺も勘公を見上げて云つたが、「勘公、ほら、蜂刺すだ。ほら打拂はねえかよ、汝、其の面蜂に刺されて何うするだ、ほら。」

「はゝゝゝ、色男奴、蜂に追蒐けられて逃出しアがッた、あはゝゝゝ。」

「何と云ふ態だッへえ。やーや、跛曳いてるだア。また、誰か惡戯したゞアね、可哀想に……。」

此う云つてる中に、勘公の姿は桑畑の蔭に見えなくなッた。

「考えて見りや、世の中は色情さねえ。」

「まアづ其樣な物だッぺえ、あはゝゝ、」と爺は大口を開いて笑つて、「何樣ねえ偉ア人でも、此の道許辛抱出來ねえだからねえ。」

「血統ッてのも變だが、其樣な、六十にもなッて、男妾の三人も置いた婆樣が有つて、彼樣な、勘公見た樣な奴にまで手を出す奥樣が有つて……。」

「それに今日の佛樣だ、淫亂に淫亂遣つた擧句、庭の池さつッ陷つておッ死ぬだから……。」

「成程、此奴ア血統かも知れねえ、」と車夫は首を捻つて、「だが、爺樣、今日の佛は何樣なだッたね？」

「面かね？」

「今の奥樣の姉なら、醜い筈は無えなア。」

「醜く無えのなんのッて、彼樣ねえ美しい女、繪にも描けねえだよ。だもんだで、稀に宇都宮さ出るだと、町中魂消打つてはア、みんな眼球剝出て見るだアよ。」

「ふーん。」

「お前なんぞ見せただら、腰打拔かしてはア、腕車挽く事も出來ながッぺい、あはゝゝ。」

「はゝゝ、ちや、まア見ねえで幸福だッたねえ、はゝゝゝ。」と車夫も笑つたが、「其樣な女に生れて……、惜いもんだなア爺樣。」

「珠に瑕云ふなア彼の事だアね。何でもはア、美い男見るだと、諸味食つた泥鰌の様に成ッ了ッただからね……。」

「その、男狂ひ始めたた幾歳からだね？」

「さアればな、何でも十六七の頃だッぺいよ、未だ根から小児の時分に、學校の先生とお前、東京さ駈落遣らかしただアから。」

「早く、婿でも取つて遣りや好かッたらうにな。」

「婿を取つて遣つたアね、だけんど、幾ら取つてやつてもはア、珍らしい中許で、直ぐ他の男拵えるだアから、誰だッて辛抱して居ねえだ。」

「其樣な鹽梅ちや、關係つた男の數許しも大したもんだらうねえ？」

「其はお前、何十人有るだか知れ無えだ。今の奥様から三歳上でよ、何でもおッ死んだ時は二十二だッけよ、十六から男狂ひ打始めて、十六、十七、十八……。」

と爺が指を折り始めた時しも、突如に山門内から人聲が聞えて、飴色の西洋犬が二人の前を駈抜けたので、吃驚して背後を見返ると、

「畜生畜生。」と叫びながら、水兵服を着た男の兒が、靴音荒く石階を駈下りて、逃廻る犬を追蒐けて來た。

犬は桃色絹の大きな手巾を銜へて居るが、男の兒に追はるゝのを嬉し相に、其邊を一廻りして、また山門の中へついと駈込んで行つた。

「畜生畜生。」と少年も續いて門内に行つて了つた。

二人は呆氣に奪られて其の跡を見送つて居たが、軈て爺は腰を伸して、

「やれ〳〵、えけいい事お饒舌爲たッけい。どーれ、仕事に掛るべえ。」と煙草入を腰に提げ、其處に置いた桑切鋏を取上げて、「血統血統云ふけんど、其樣ね惡え血統はア、今日の佛樣で斷れだッぺえよ。奥樣は彼樣ねえ學問爲ただし、旦那様たア間は好えだし、それに、末の孃樣だッて、獨身で堅くして居なさるだもの……。」

「全くだ、爺樣の云ふ通りだ。今後は反對に、婦人の鑑になる樣な、立派な血統に變つて行くんだ。」

「然うだッぺい。どーれ、其だら己も怠慢無えで、良え血統でも遺すべえか。」

爺は桑畑の方へ下りて行つた。車夫は大きく伸をして、

「あーあ、最う何時だらう、大分待たせるなア。」と一人言して、腕車に被つた塵をはた〳〵と手で拂くと、畑から飛んで來た砂埃が蒲團の上に浮くのである。

ところへ、石疊を踏む下駄の音騒しく、がやがやと話聲が近付いて、杖を支いた老人を眞先にして、孰れ令孃か奥樣と云ふ風の束髪が二人、丸髷が一人、少し後れて殿引に半合羽の下男が一人、日の煥々と射す山門を出て來たが、出て來るや否や、言合はしたやうに三人の婦人は、黒と緋と海老色繻子との三色の洋傘をぱッと開いた。

「こかあがみやアと、うらのけえけいッぽえいだ。」と石段を降りようとした老人は立止つて、廻らぬ舌で此う云つて笑つた。

「え、何ですッて？」と老人の手を曳いて居る丸髷は訊ねた。

「うらのけえけよ。」と老人は同じことを繰返すと、

「は、村の景色ですか、」と丸髷は點頭いて、「然うですねえ、此處から見下すと、何時見ても好い景色ですのねえ。」

「いゝもうせんれのけいきだ。」

「え、芋……、芋が何うしたんですッて？」と丸髷が解しかねて、可笑いと云ふ樣な顔をする。

「いもでれい、いゝもうせんれ。」と廻らぬ舌で焦躁つた相に云ふ。

「いゝもう……？」と丸髷は二人の束髪を顧みて、「いゝもうツて、何でせう？」

「こかあがめいと、いゝもうせんれ。」と老人は又云つた。

「爰から眺めると、いゝもう……。」と年長の束髪が考へながら云つた。

「あゝ、一望ですか、」と年下の束髪は老人の顔を覗いて、「一望千里……、然うでせう、ねえ阿爺さま。」

　而ると阿爺様は莞爾して、

「然うら。」

「おほゝゝゝ、姉様は芋だなんて、ほゝゝゝゝ。」と年下のが笑ふと、他の二人も聲を合はせて笑つた、而して老人を扶けて一同が徐に石段を降りた。

　老人は五十幾歳と云ふ年輩である。脊の高いでツぷり肥つた大男で、額は深く禿げ、下唇は少し歪み、右の肩は筋の斷れた樣に下つてるが、何處か品の有る立派な貌で、茶微塵の一樂の給に黒羽二重の五つ紋の羽織を着てゐる。三人の女は孰も紋織御召の給に繻珍の帯で、顔から扮装から此邊に珍らしい美人であるが、中にも際立つて見えるのは丸髷で、容貌も一番に優れて居るが、一番に金の費つた服装をして居る。

　二十二三の年頃、艶のある白い活々とした顔で、何處か明け放しの、更に餘念の無い樣な冴えた黒目勝の眼、何時も笑つてる樣な可愛い口で、細面ながら頬の邊むツちりと肉付いて居る。

「お危なうございます。」と車夫は駈けて來て老人を抱下さうとした。

「だ、大丈夫。」と老人は扶ける他の手を振離して、獨でさツさと下りたが、危く轉び相になツた。

「あら、阿爺様？」

　一同石段を躍下りて老人を抱止めた。

「おー危なかッた。」と丸髷はほツと息をい吐た。

「轉んだら如何だツたらう、まア！」と若い束髪は他の顔を見廻した。

「ですから阿爺様、其様な無理を爲さるぢやありませんよ。」と年長の束髪が云つた。

「だちよだ。はゝゝゝ。」老人は力なく笑つた。

「大丈夫な事はありませんよ。石段で轉んだら大變ぢやありませんか。」矢張り年長の束髪が云つた。

「だちよだ、未だ、此通へだ。」と利かない足を無理に地蹈して、「はゝゝゝ。」

「ま、其様な事はお止しなさいよ。」と丸髷は老人を抑へて、「おほゝゝゝ。」

「本當に阿爺様は可けないよ、無理許り爲さるんだもの、貴方は病人ぢやありませんかね。」と年長の束髪は、其の蒼白い顔を少し勃然とさせて云つた。

「何日迄病氣えもんか、も大丈夫だ。」

「だツて、お藥飲んで居らツしやるぢやありませんか……、あら、腕車へ乗らないの？」

「餘え、好景氣だから、少え散歩すう。」

「其様な事を云は無いで、お乗んなさいよ。」

「大丈夫だ、はゝゝゝ。」

「ま、薫さん、可いぢやありませんか、云ふ通りに爲して置きなさいよ。」と丸髷は、年長の束髪の袖を曳いて、「阿爺様、おや、私お手を曳いて進げませうねえ。」

「お前可けえ。」と老人は丸髷の手を退けて云つた。

「あら、私ぢや可けませんの？」

「たけほ。たけほ。」

「竹代様ですか？ 然う？ 竹代様、」と丸髷は若い束髪を振向いて、「貴女でなきや可けません

と。私、阿爺様に嫌はれてよ、ほゝゝゝゝ。」

「ほゝゝ。」と笑ひながら竹代は老人の手を取り、徐に歩を移したが、「おほゝゝ、阿爺様彼様な事を、ほゝゝゝ。」

「何うしたツて？」と薫は後から訊ねた。

「ほゝゝ、」と竹代は猶も笑ひながら、「彼のね、良人の有る人の手はね、可けないんですと、おほゝゝゝゝ。」

「おほゝゝゝ。」と薫は丸髷と顔を見合はせて笑つたが、「阿爺様たら、厭な事を仰有る人ねえ。」

「ぢや、今後は、何様な事有つても、手なんぞ曳いて進げないわ、ねえ薫さん。」

「えゝ、誰が。」と笑ひながら云つたが、背後に立つてる半合羽の下男を顧みて、「儀助、お前其の、箱は腕車に載ツけて、阿爺様の傍に附いてお居で。」

「はい。」下男は命ぜられたまゝ、線香や何やを入れて來た定紋の風呂敷を被けた箱を腕車に載せて、老人の背後にのツそり附いて行く。

「おや、秀様は何してるんだらう？」と丸髷は立止つて山門の方を振返つた。

薫も車夫も同じく山門を見上げた。直ぐ先刻の水兵服の少年が丁度犬と共に出て來た。

「秀様、速くお來でよ、何してるの？」と薫が聲を掛けた。

「こら、方丈様から此様なに貰つた！」と少年は手巾に包んだ物を振上げて見せたが、其機にばら／＼と枇杷の實が零れて、石段の上をころころと轉げる。

「やア、平吉、拾つてお呉れよ。」と少年は叫んだ。

車父は石段の下に駈けて行つたが、

「坊様、まア洋犬をお離しなさい、そら／＼、また落ちます。それ、それ。」

「秀様、手巾に穴が明いててよ。」と此方から丸髷が聲を掛けた。

「本當？」と包を上げて、「やア、此様な穴が明いてら。」

そこで、丸髷も石段の下へ行つて枇杷の實を拾つて遣る。少年はまた其を他の手巾に包んで貰ふ。

「阿爺様は腕車へ乗らないの？」と少年は二三十間前に行つた老人等を眺めて、「ぢやア、僕乗らう。」

「お止しよ秀様、お前様は歩けるぢやないかね。」薫が止めると、

「だッて、僕ア疲れ了つたんだよ‥‥。雪江様、乗つても可いねえ？」と丸髷の顔を覗いて、「そら、可いんだとよ、雪江様家の腕車だもの、雪江様が可いッたら可いぢやないか。」

「それでも、平吉も疲れてるぢやないかね。」

「なに疲れてるもんか、ねえ平吉、乗つても可いだらう。」

「お召しなさいまし。」

「そら見ろ、えー！」少年は叫んだ、而して洋犬と共に腕車に躍乗つた。

「まア、洋犬と合乗なの？」と薫が呆れると、

「合乗ぢやないよ、此奴は手荷物だよ。」

「秀様、それ、手荷物が顔を嘗めますよ、ほゝゝ。」と雪江が笑つた。

「おほゝゝ、お前達は、本當に仲が好いのねえ。」と薫も笑つた。

車夫は梶を上げた。兩端を柔かな青草に縁取られた田舍道を、車は音も無く廻つて行く。暖かな風の吹渡る毎に、左右の畑は緩く浪を打つた。着物の裾は飜る、紅い襦袢がぱッと出る。

第二

「阿爺様、其様な事を云は無いで歸りませうよ、既う遅くなりましたもの。ねえ雪江さん。」と老

人の袖を曳いて云ふのは薫である。

「えゝ、其れに、叔母様のお家は忙しいから、また他日來ることに爲ませうねえ。」と雪江も共に老人を賺す樣に云つた。

一行は今しも廣く枳殻垣を廻した、粗末な開き戸の柱に「栃木農談會高根澤支部」と記した札を掲げた家の前に通り掛つて歩を停めたところである。

「先刻約束したから、鳥渡寄つて行う。」

老人は他の止むるも肯かず、其處の門内に杖を入れようとしてゐる。

「だッて、叔母様の家は養蠶で忙しいんですもの、お邪魔ですよ、歸りませうよ。何も今日に限らないぢやありませんか、よ、阿爺様。」と云つてる間、腕車に乗つて居た少年は、早くも犬と共に下りて門内に駈込んだので、薫は聲を揚げて、「秀様、何處へ行くんですよ、此方へお出でなさいよ、秀様や。仕様が無いねえ、ぢや捨てゝ行きますよ。」

「捨てゝッても可いよ、僕は一人でも歸れるよ……。」と少年は桑の樹の間を母家の方へと駈けて行つた。

而ると、忽ち母家から一人の白い手拭を被つた、色の白い、丸顔の四十幾歳とも見える婦女が、襷を脱しながら此方へ駈けて來て、

「おや、今お歸りですか、」と皆へ小腰を屈めて笑ひながら近寄り、「大變長かッたぢやありませんかね、さ、まお入りなさいよ、何して居らッしやるの？」

「は、有難う、」と雪江は點頭いて、「叔母様、今日は遲くも成りましたから、是で失禮しますよ、何卒皆様へ宜しく……。」

「何ですよ、雪江様、先刻、歸りに寄ると云つたぢやありませんか、お入りなさいな、折角進げようと思つて、拵へてた物もあるし、さア。」

「だッて、叔母様も忙しいでせうし、」と薫を見て、「ねえ薫様。」

「えゝ、また他日上りませうね、お養蠶が濟んでからね。」

「何ですよ、貴女まで其様な事を云つて、可けません、寄らなきや歸しません、」と叔母は人々の背後に廻つて手を擴げて、「さ、皆なお入りなすッて下さいよ……、さ、雪江様、如何したんですよ、貴女が其様なにしてるから、皆な遠慮してるぢやありませんかね。」

「でも、忙しい處へお邪魔だらうと思つて。」と雪江は爲方なしに二歩三歩を移した。

「いゝえ、今は丁度暇な處ですよ……。何が何だッて、此處まで來て寄らないッて事があるもんですか、さ、竹代様、貴女まで遠慮してるの、如何したんですよ今日は？」

「わかいもは、うちいまッれるものがあるから、はゝゝゝ、」老人は何の締なく笑つた。

「若い女は、家に待つてる人が有るから、ですか？ ほゝゝゝ、然うでしたねえ阿爺様。」と叔母は元氣好く笑つて、「ですけれど、常華様は未だ歸らないでせう……。幾ら狹く會ひ度いと云つても、家に居ない者仕様が無いぢやありませんかね、それとも、人情は然う云ふものか知ら？」

「叔母様ッて云や、直き彼様な厭なことを……。」と雪江は紅くなッた。

「だッて、ねえ薫さん、ほゝゝゝ。」

「おほゝゝゝ。」と薫も竹代も笑出した。

一同は門の内に入つて來た。小半町ばかりの間は一圓に桑畑で、其處を通抜けると瓦葺の大きな平家があるが、其の玄關から上らずに庭へ廻ると、養蠶時で此處の掃除までは手が屆かぬので、桑だの藥屑だの一杯に散ばッてる間を、數多の雛を伴れた牝雞が餌を求り歩いてる。

「叔母様、過日蠶に鼠が付きましたッてねえ、」

と薫は、近年建てたらしい養蠶小舍の檐下を通

る時に云つた、「此處へ置いたのですか。」
「いゝえ、彼方の座敷にね、」と叔母は母家の方を顎で示して、「七分二枚置いたのをね、只た一晩の内にまア、悉皆遣られて了つてね・・・。」
「おや、皆な鼠に遣られて？」と雪江も訊ねる。
「えゝ、大變な事しましたよ。左樣さ、三ヶ一も遣られましたらうよ。本當に大きな目に遭ひましたよ。」
「まア、可けない事を爲ましたねえ。」と云ひながら、雪江も他の人々と共に立止つて小舍の中を覗込んだ。
天氣が好いので戶は悉く明放してある。小舍の内は二間に五間許りを、二列に長く棚を設けて、天井へ達く程に積並べた籠の數は幾百枚あるか、蠶の桑を食む音は一種の騷音を成し、其のまた臭氣は、暖かな風に蒸されて人々の鼻を衝くのである。
「おー、大變大きい成ツたらア。」と老人は杖を力に内を覗込んで云つた。
「最う三眠でせう？」と薫は訊ねた。
「あゝ、明日ですよ。」
「ぢやア、此からが忙しいのですねえ。」と雪江は何故とも無く莞爾して、「叔母樣、皆なで手傳に上りませうか？」
「あゝ、何卒ねえ、」と叔母も笑顏を示せて、「常雄樣と一緒に來て下さいな。」
「また彼樣な・・・。」と雪江は無理に厭な顏を作る。
「ほゝゝゝ。」と薫がまた笑つた。
さて此の養蠶小舍の前を過ぎると、處々に梅を植ゑた茶畑で、茶畑を通拔けると、茲に廣き邸内を一目に見渡す樣に建てられた二階作の離座敷がある。一同は此處へ案内された。成程歸りを待受けて居たものらしく、室の内を片付け、座蒲團、茶器、煙草盆など並べて、緣頭にはラムネが水に漬つてる。
「二階だと宜かッたけれど、餘り取散してあるし、それに、阿爺樣が何だからと思つてね、」と叔母は一同を室の内に請じ入れ、「おや、お民は何處へ行つてるだらうね？　お民や、お民・・・。」
緣側に立出て呼ぶと、屋後の彼方から答へる聲がして、十四五のほッそりとした、顏色の黃色い小娘が駈けて來て、一同へ笑ひながら挨拶をした。
「お民樣、暫く會ひませんかッたのねえ。」
と竹代が懷し相に云ふと、お民も懷し相に其の傍へ寄つて、
「はア、暫く。此の頃は蠶が忙しいもんだから、上り度いにも上れないんですもの。でも、毎日一回は、復讀してますの・・・。」
「お民、何ですよ、其の言葉が、先生へ對つて無作法な。」と母は叱つて、「いゝえ、竹代樣、然うぢやありませんよ、勉强する氣ならね、幾らも勉强する時間はありますけれど、少し暇があると、只だ最う遊んで許り居るのですよ。」
「あら、阿母樣、譃ばッかり。」
「譃なことあるもんですか、今も其の通り、遊んでたぢやないかね。」
「いゝえ、遊んでやしなくッてよ。秀樣が、櫻實を採つてお吳れッて云ふから、それで採つて居たのよ・・・。」
此う云つてる處へ、例の水兵服の少年が口の端を眞赤に染めて駈けて來た。
「おや、如何したの秀樣・・・？」薫は少年の顏を見て吃驚したが、「おほゝゝゝ。」
老人も、雪江も、竹代も叔母も、皆などッと笑出した。少年はきよろ〳〵と人々の顏を見廻して、
「何だい、皆なして笑やがッて、何だい。」と泣出し相な顏をした。
「だッて、其樣な顏してるぢやないかね。洗つてお出でなさいよ、見ッとも無い。」

と薫が云ふと、少年は最う涙を見せて、

「可いぢや無いか、何樣な顏したツて可いぢやないか、櫻實食や、叔母樣だツて、脣へ着くぢやないか、何だい、人を笑やがツて。」と泣吃逆しながら云ふ。

「まア秀樣、堪忍してお上げなさいよ、まア此方へお入りなさいよ、笑つたのは叔母樣許りぢや無いもの、皆な笑つたんだもの、堪忍して頂戴よ、ね、可いでせう。」と雪江は少年を宥めて、網上げの靴を解いて遣りながら云つた。

少年は雪江の爲すまゝに導かれて、老人と雪江との間の座に就いたが、猶泣吃逆しながら、

「何だい、人の事を笑やがツて、叔母樣だツて、小兒の時は櫻實を食つたらう、其時は、矢張り、口へ着いたぢやないか、何だい、人の事ばかり……。」

「あゝ頓い、」と薫は笑ひながら顏を顰めて、「叔母樣なんか、小兒の時でも其樣な下等な物食べた事は無いよ。」

「譃を云へ、譃だツて小兒の時は食ふんだ。ぢやア叔母樣は、生れた時から直ぐ大人なんか……」

「あゝ、私は生れた時から大人さ、秀樣の樣な其樣な小兒ぢや無かッたよ。」

「小兒で無きや、ぢやア、叔母樣は大人で生れたのか、其樣な道理が有るもんか、人間は皆な、人間は皆な……。」

「まア秀樣、可いぢやありませんかね、堪忍してお遣りなさいよ、」と雪江は宥めて、更に薫に眴せして、「貴女もまた、默つてらッしやいよ。ねえ秀樣、小兒に調戲つたりなんかして、本當に厭な叔母樣ですわねえ。ま、今日は堪忍してお遣りなさいよ、叔母樣が惡いのだから、ね。」

「嫁に行きや出されて來る癖に、何だい、人の事ばかり笑やがツて……。」と少年は猶も口を止めぬのである。

薫は此く云はれて、みんなの手前も體裁惡相な顏をしたが、

「おほゝゝゝ、是は一言も無いねえ、ほゝゝゝ。」

「一度嫁に行つて、其家で辛抱する事も出來ない樣な者は何だ、一生、人間の瘢物なんだ。何だい、意氣地無しの癖に何だい、人の事を笑ふなんて、何だい……」

「然うさ、私は意氣地無しさ、意氣地無しの瘢物さ、だから私は、一生秀樣の厄介に成るんですよ。」

「誰が其樣な、意氣地無しなんか厄介に爲るもんか……。」

「だッて、秀樣の家で生れた人だもの、何處までも、厄介に成らなきや可けないよ……。」

「まア、默つて居らッしやいてばねえ……、」と雪江がまた間に入つた、「秀樣、貴方も最う堪忍してお遣りなさいよ、男兒ッてものは、左樣何時までも、一つ事を云つてるもんぢやありませんよ。」

「秀、堪忍して遣え堪忍して遣え、」と老人は、中風の爲に利かなくなッた肥つた手で、少年の頭を撫でながら、「男は、女い構うもでれ、堪忍しろ、うー、堪忍しろ。」

「厭だい厭だい、」と少年は、其の撫でられてる五分刈の頭を揮つて、「家へ歸つたら、皆な阿父樣に言告けて遣らア……。」

「あゝ、言告けてお遣りとも。」

「何だい、其樣なに威張つたツて、阿父樣に叱られりや泣きやがる癖に……、何だい……、」と少年は切りと泣吃逆して、「何だい、其樣な意氣地無しで何だい……。嫁に行つて出されて來やがツて、一族の恥辱に成ッたぢや無いか……、其樣な、嫁に行つたり出たりして、何とも思はない者なんか……、新家の家の血統を引いてるんだ、血統を引いてるから、仕舞には、河へ落

ちて死んで了ふんだ。」
　人々は皆顏色を變へた。雪江と竹代とは急に俯向いて默つて居る。薫は人の顏を見たばかりで、言ふ可き言葉も知らぬ樣子である。
「秀樣、最うお止しなさいよ、男兒てものは、氣質が好くなきや可けません、云ふだけの事を云つたら、綺麗に堪忍して遣るもんですよ、ね。」と主婦の叔母は、お民と共に御馳走を室の眞中に並べて、「さ、是を食つて下さいよ……、皆なね、私の畑で出來た物ですよ。お宜しけりや、まだ、幾らでもありますよ。」
　御馳走と云ふのは、蜀黍の餡ころ餅、西洋苺、新茶、それに冷して置いたラムネ位のものであるが、一同珍らし相に飲みつ食ひつするのである。其の中に少年の心も解け、時々笑聲も起る樣になツた。就中老人は大した機嫌で、例の廻らぬ舌で切りと他を笑はせる。
「ほゝゝゝ。本當ですねえ、阿爺樣が癒くなツたら、大番振舞を爲ませうねえ。」と主婦は老人の言葉を受けて元氣好く云つた。
「何か好え趣向考アでるが、ゑんえい會が宜からう思ツてら、」と老人は莞爾して、如何にも乘氣になツて話して居る。
「は、ゑんえい會……、ゑんえい會ツて？」と主婦が解しかねると、
「叔母樣、園遊會ですよ。」と薫が通事をする。
「あゝ、園遊會？」と首肯いて、「園遊會は可いでせう、提燈を下げて、花火でも揚げてねえ、何樣なに面白いでせう……。お民や、雪江樣へ餅を代へてお上げな。……本當に、園遊會は好い思付ですねえ。」
「庭ア廣えかア、新家の庭借りれらア…。」
「然うですねえ、雪江樣のお家で無きや可けませんねえ、盛大きく遣るには。」
「去年かア病氣見舞來た人皆な呼ぶろ、二三千の客だからア。」
　薫は他と目を見合はせて竊に笑つた。以前は並外れの小心家であツた老父の、去年病氣に罹つてからは、生れ變つた樣な粗放な性質になツて、何事も大袈裟に云ふのが癖であるが、今も二三千の客などと途方も無い事を聞せられたので、皆一家親族の血を配けた間とは云へ、娘の身からは體裁惡く感はるゝのである。
「夏ア暑うれ可げ無え、秋い成ツて、涼風吹れかア遣らう思つてら。」
「然うですとも、是からは暑くて可けませんねえ。それに、阿爺樣ももツと癒くならないぢやねえ。」
「己か、己ア最う大丈夫ら、不斷と何處も變つ處無い。」と老人は機嫌の惡い顏色をしたが、直ぐまた莞爾として、「其時ア、お前達を皆ら茶屋の姉樣にしら、紅え前垂締めれ、揃えの浴衣着せれ、はゝゝゝ。」
「ほゝゝ。くゝゝゝ。」
　と雪江を首め、薫も竹代も餅を入れて居た口を押へて笑つた。
「而しれ、仕舞に手踊を踊らせら、はゝゝゝ。」と老人は益々得意なのである。
「まア、私達に？」と雪江は呆れる。
「阿爺樣、ておろりツて何だい？」と少年は訊ねる。
「手踊たア、手れ踊る事ら。」
「手で踊るのかい……。然うか……。」と少年は食ふ丈の物は食つて了つたので、退屈相な老人の顏を眺めて居たが、軈て洋犬の事でも想出したかぷいと外に驅出した。
「其の時こそ、常雄樣に隱し藝を遣らせなきや可け無いねえ。」と主婦も笑ひながら、「ねえ薫樣、其時は、何と云つても遁しませんねえ。」
「えゝ、今度はもう。」
「あら、其樣な、藝なんぞ有る人ぢやありませんよ。」と雪江は二人の言葉を打消して云つた。

「無い事があるもんですか、阿父様はお能が上手で名高い方だし、阿兄様は素人義太夫で、東京でも指折の方だと云ふ話だもの、常雄様に許り藝が無いなんて、其様な理窟が有るもんですか、ねえ薫さん。」

「え、有りませんとも……。」と薫は何やらを呑込んで、「必然ね叔母さん、私達は田舎者だから、何を聞かしたッて聽く耳が無いと思つて、其れで祕してるんですよ……。美術家だのに、洋行までなすッて、それで何も藝が無いなんて、誰が承知するもんですが、ねえ竹代様、貴女だッて然うでせう?」

「え、其れはねえ。」と竹代は、雪江に氣の毒相に曖昧に云ふ。

「あら、竹代様まで彼様な事を云ふよ、お前様だッて知つてるぢやありませんか、其様な、遊藝なんぞの嗜が有るか無いか。」と雪江は眞面目な顏をしては居るが、其の眞面目な顏の中にも、良人の噂をさるゝ嬉しさが十分に見えるのである。

「ほゝゝ、彼様なに、一生懸命に爲つて祕すから尚怪しい、おほゝゝゝ。」と薫は笑出した。

「だッて本當ですもの、貴女方は思違ひしていらッしやるんですもの、其はね、兄様はね、新橋だの柳橋だの、始終藝妓買なんぞ許りしてる人だけれど、彼の人はもう、實に堅いんですよ、ですから學友間で、温和いと來てはもう有名なんですッて。」

「然う? 本當?」薫は態と仰山な顏をする。

「本當ですとも、道樂と云つては、繪を描く事と書を讀む事ばッかりよ。」

「然う? 其ればッかし? 未だ有るでせう?」

「未だッて、何?」

「奥様に優しい事!」

「あら!」雪江は赧くなッた。

「おほゝゝ。はゝゝゝゝ。」

と老人を首め、其様な情の未だ解らぬ筈のお民までが聲を合はして笑つた。

その笑つた聲が餘り高かッたので、彼方で遊んで居た少年が駈けて來て、

「何だい? 如何したの? え、竹代様如何して?」

「本當に薫様は人が惡いよ。」と雪江は、まだ笑つてる薫を睨めて云つた。

「あーお腹が痛い。」と薫は眼を拭つて、「雪江様、到頭乘つたから可笑い……。」

「可いから、覺えて居らッしやいよ。」

「如何したの? 雪江様如何して? え?」と少年は雪江の赧くなッた顏を覗く。

「貴方の叔母様は、本當に人の惡い厭な叔母様よ。」

「併し、其が一番に可え、夫婦間可えなア家内安全の基らア、はゝゝゝ。」

「全くですねえ阿爺様、夫婦間が好くッて、他に謂皷はれる位結構な事はありませんやねえ。」と主婦が云ふ。

「知りませんよ。」

「亭主を有ッら、其位思ッち無えで可げれえ、今日の佛らッて、自分の亭主を亭主に思は無えから、彼様、非業な最期を遂げらんからア。」

老人が此う云ふと、一同急に改まッて、首を垂れて默つて了つた。宛然誰も彼も隱し居る醜い大瘢を人前に浚け出された様な鹽梅である。暫く談話が途切れた。

「御新造、常五郎殿の桑持つて來ただが、根から、些とん許きや有りましねえだよ。」と云ひながら、額の汗を拭き拭き下男が縁頭に立現はれたが、室内に居る人達の顏を見ると、「是は、御來でなされまし。」

「然うかい、でも、何貫目有るんだい、」と主婦は縁側に出て、「今夜だけも間に合ふまいか?」

「如何してお前様、漸と四貫目きや無えだ。」
「其許りか、ぢや仕方が無い……。如何したら可いだらう、お寺の桑は如何だらうな?」
「お寺の桑ア駄目だッぺえ、今朝ッから、徳右衛門爺来て採つてるだ。」
「ぢやお寺でも賣つて了つたらうか、困つたねえ、」と云つて背後を振向いて、「あの、新家では如何でせう、最う賣りましたか?」
「如何でせうねえ、」と雪江は答へたが、「竹代様如何だらう?」
「然うねえ、今朝までは有る様だッたが、其れとも賣つたか知ら。」
「ぢや、新家へ行つてお來で、最う十貫目も有れば澤山だ。」
「手紙持つてか無えでも可えだかね?」
「手紙も何も要らない、番頭様へ然うお云ひ、あの、家の奥様が來らして然う云ひましたッて、未だ餘所へ賣らない様なら、私共へ賣つて下さいッて、然うお云ひ。」
「畏まりました。」
「暗くなると可けない、皆な連れてお出で。」
「ぢや行つて來ますべえ。」
「それからな、お腹空いたらうから、臺所へ廻はつて餅一杯搔込んでお出で。」と背後から聲を掛ける。
「は、戴きますべえ。」
主婦が内へ入ると、薫が雪江に、
「最うお暇にしませうか?……」
「然うねえ、餘り遲くなると何だから……。」
「未だ可いぢやありませんか、未だ、五時打つた許りですもの。」
「だッて、お忙しい處にねえ。」と雪江は薫に目配せする。
「いゝえ、忙しい事有りませんよ、ぢや、最う少し待つてて下さい、今儀助と平公に餅を食べさせてますから……。お民、お前悧然してないで、何か、御覧になる物でも持つてお來でなね。」
そこでお民は駈けて行つて、母家から種々な物を抱へて來た。先づ目に着いたのは金線の寫眞ブック、繪畫の小説本、栃木新聞の未だ封を切らぬの、大賞堂の營業一覧、女學講義などであるが、別に一冊の薄い雑誌を上に載せて、
「これをね、過日東京から送つて下さいましたの。」とお民は其れを雪江の前に出した。
「然う〳〵、常雄様から、大變立派な御本を戴きましたよ。もう皆様御覧になッたらうけれど、常雄様の繪は一番に綺麗ですねえ、何と云つても、西洋へ行らしただけに、他の及ばない處が有るんでせうよねえ……、」と主婦は老人の傍に其雑誌を持つて行き、「御爺様、これ綺麗ぢやありませんか、宛然生きてる様ですよねえ。」
それは美術雑誌の臨時増刊號で、某洋畫會の秋期展覧會の優等品十幾枚の寫眞石版が載せられてあるのだ。中で今この一座に持囃されるのは、萩原を押分けて前へ歩を踏出さうとする美人の圖で、賞は金牌、畫工は圓城寺常雄とあるのである。人々は前にも幾度か見たのであるが、今爰で手に取れば又新しい興を感じる様に、只この繪ばかりを眺めて互に奪合ふ程に騒いで居る。併し、雪江のみは一人取澄して、其の間に顔を突込まずに、他の物を手任せに開いて居たが、これとても、何時までも同じ頁ばかりを見て、一寸一寸他の顔に注視を投げるのは、其の繪に對するみんなの評を聴取らうとして氣を配つてでも居るからである。
だが、此等の人の口から出る繪の評と云つたら、綺麗だとか、生きてる様だとか云ふに過ぎない。幾ら有りたけの辭を殘らず寄集めた處で、此の上に「まア」とか、「本當に」とか、「實に」とか「宛然」とか嘆辭を冠せる位なのだ。
其の雑誌が竹代の手へ渡つた時、何か母に言

付けられて起つたお民が、急々と座に戻つて、同じく顔を寄せて、

「ね？ そら、似てませう？」

「然うねえ……。」と竹代は眼を据ゑてその雜誌を視詰めた。

而ると雪江は首を伸して、

「何が？ 誰に？」

「あら、さうぢや無いんですよ姉樣。」と云つた竹代は、如何したのか眞紅になツた。

「だッて、誰に似てるの？」と雪江は初めて其を我が手に取つて、「誰かに似てるツて云ふの、誰に……？」

「いゝえ、似てやしませんよ、些とも似てやアしないわ……。」とお民もどぎまぎして云つて、何故だか是も顏色を變へた。

「詐しな人達、彼樣なに祕してさ……。」と雪江は笑つた眼で竹代とお民を見たが、二人とも顔を紅くしてるに氣が着くと、更に詐し相に眼を睜つて、「竹代樣、此の繪、誰に似てるの？」

「いゝえ、然うぢやありませんよ姉樣。」

「だッて、お前樣が……。」と竹代を視詰めて云つたが、更にお民に向いて、「お民樣、誰に似てるの……？ 祕さないでも可いぢやありませんか、誰か似た人が在つて？」

「いゝえ、似てやしないんですよ、本當に似てなんか居ませんよ。」と云ふお民は、赧くした顔を着くして居るのである。

「然う……？」と雪江は愈よ解せぬ顔をしたが、見ると主婦も薫も尋常ならぬ目付をして居るので、凝然と繪を視ながら考へた。が、また面を上げて、無理に笑つた口許で、「お民樣、ぢやア、誰に似てないの？」

「誰にツて……、あの、誰にも似てませんもの……。」

「何だよお民、頓狂な事をお云ひでないよ、」と母が口を出した、「雪江樣、其樣なに氣に懸けることありませんよ、子供だから何を云ふか分りませんもの。……過日も然う云ふんですよ……私に、此の繪が、秀樣の阿母樣に似て居るなんて、何を見て云ふんだか、些とも似た處が無いぢやありませんか、齢だッて顔だッて……、秀樣の阿母樣は瘦顔の方だけれど、この繪は丸顔だし、目だッて鼻だッて……、ねえ、然うでせう？ 何處を見て云ふんだか、子供なんて仕樣が無いもんですよ、おほゝゝ。」

「然う？ 本家の姉樣に似てるの？」と雪江は繪よりも人々の顔を見廻して、「私には、然うは見えないけれど……。」

「見えませんとも、誰にだッて。」と主婦は直ぐ引受けて、「これが似て居たら、見る方の眼が如何かしてまさアね、ねえ薫さん。本當に、幾ら子供でも、何處を見てるんだか。能く目を開いて御覽なね。」

「だッて、私ア……。」とお民は只だ母の顔ばかりを覗る。

「おや、本家の姉樣に似てるツて云ふの？」と雪江はお民の顔を覗いて訊ねた。

「え。」と曖昧に答へて點頭く。

「竹代樣、然う？」

「え。」と是も曖昧である。

「あら、阿爺樣何處へ行らッしやるの？」と薫は卒に座を起つた。

老人は何時の間にか庭へ下りて、少年と共に彼方へ行かうとしてゐる。

「阿爺樣を、梨畑に連れて行くんだよ。」と少年が答へる。

「可けませんよ、其樣な處へ行つちや。最う歸るんですよ、」と薫は驅けて行つて老人を座敷に伴ひ來て、「雪江樣、如何です、餘り遲くならない中に……？」

「然うですねえ、最うお暇しませう。」

最う蠶に桑を遣る時が近付いたので、主婦も

引留めはしない。一行は再賑かに爰を辭し去つた。

第三

外へ出ると空は綺麗に晴れて、何時の間にか風も凪ぎ、見渡す限の田圃は、夕陽を浴びて宛然火の子でも散した樣に赤くきら〳〵して居る。

さて、達者を誇りたがる老人も流石に草臥れたかして、今度は他の云ふまゝ温和く腕車に乘つた。三人の女は惜氣も無く美しい顏を夕陽の野道に曝して、是が宇都宮ででも有らうものなら、行逢ふ者は膽を潰すであらうと思はるゝ活潑な歩調をして腕車に續き、少年の秀吉は例の洋犬と路草を食つて駈廻り、下男の儀助は正直に殿をして、御主人樣達の長く伸びた影を踏まぬ位に離れて、のツそり附いて來る。

「秀樣秀樣、其樣なに駈けると轉ぶよ。」と薫が此方から聲を掛ける。

路傍から鳩が二羽ばた〳〵と羽音を爲せながら飛揚つて、麻畠を横切つて、彼方の堤の、柳に夕陽の赤く射してる沼の方へ下りた。洋犬は其れを追蒐けて畑の中へ躍込んだ。長く延びた麻の穗は、犬の駈けるに連れて細く波を打つた。而ると又、畑の中からばた〳〵と鳥が飛揚つた。

「ヤア。野鴨だ野鴨だ！」と少年は小さな手を叩いて駈出した。

見てゐる間に鳥は沼へ下りて了つた。

「彼樣なに駈けてまア……。儀助、」と薫は跡を振返つて、「此方へ連れて來てお呉れな。」

下男は命けられたまゝ沼の方へ行つた。

「竹代樣。」と、叔母の家を出てから未だ一言も口に出さない雪江が、此う云つて妹の顏を凝然と見詰めた。

「え、何です？」竹代も姉の顏を視たが、また、「姉樣、何ですよ？」

「私の思ふ樣でも無い、本當に、お前樣は水臭いよ。」

「あら、」と竹代は眼を睜つて、「何を……私が如何かしまして？」

「彼樣なに恍けてるんだもの、」と嘲る樣な眼をして、「薫樣だツて然うだわ。」

「おや、私が……、私が水臭いツて……、何を？」

「水臭いぢやありませんか、」と云つて、勃然とした顏をし、「宜うござんす、夥多然うなさいまし。私は、是で良人に祕する事でも貴女がたには打明けて居るのに、貴女の方ぢや然うで無いのだから……。宜うござんすとも。私の樣な缺點の多い者は、友人を得る資格が無いのでせうから、宜うござんすとも。」

「ぢや、姉樣、先刻の、彼の繪の事ですね？」と竹代は途切途切に云つた。

「宜うござんすとも、然う云ふ意ならそれで、」と雪江は再同じ樣な事を云つて、「私だツて目が無いぢやなし、本家の姉樣に似てるなんて、彼樣な紛しを爲ないでも可いぢやありませんか……。」

「だツて、彼は金森の叔母樣の云つた事ぢやありませんか。」と薫は辯解した。

「幾ら祕さうたツて、探す氣に成れば直ぐ判るぢやありませんか、」と雪江は獨語の樣に言續けて居る、「また祕すなら祕すも可いけれど、其が何程大事な事だらう、其樣なに一生懸命に成ツて祕す程の價値が有る事なの……、何處かの藝妓に似て居るとか……、常雄の圍つてる妾に似て居るとか……、詰り其樣な事でせう……、其れが、一生懸命に成ツて祕す程の大事な事なの……。」

竹代と薫とは目を見合はせて、云つて了はうか如何爲ようかと迷つて居るらしい。雪江はま

た言續けた。

「貴女がたの意は此うでせう……私に聽かして、不快の念を起させちや詰らない、若し、嫉妬の餘り、何か不料簡でも起させちや大變だから……、此う云ふんでせう、然うでせう？」

「いゝえ、然うぢや無いけれど……ねえ竹代樣。」

「いゝえ、然うです、然うで無いものなら、何故祕すんです？」と雪江は二人の顏を交る交る視て、「貴女がたは、些とも私を信じちや呉れないのねえ。私が其樣な事を聽いて、不料簡を起す者か如何だか、大概、私の性質だッて知つて居さうなもんぢやありませんか。私は、今日の佛の妹と云ふ事は、片時だッて忘れアしませんよ……。阿叔樣は如何して亡くなッたか……世間では、私の家を何と云つて評判するか……。」

此うまで云つて、雪江は顏を覆うて泣出した。

竹代も同じく眼を押へて居る。薫は悄然と俯向いて、時々溜息を洩すのみである。

「何樣な事を聽いた處で、豈夫私まで、世間の胡盧に成るやうな事は爲なからうぢやないか、それとも、竹代樣達から見れば、私も矢張し危險な人間なの？」

「あら、姉樣、然う云ふ譯ぢや無いんですよ、私の祕したのは惡いけれど、其樣なに、姉樣を疑ふなんて……。」

「ぢや、此樣なに氣を揉ませないで、直ぐ話して呉れても可いでせう。」

「え、姉樣が然う云ふ意なら、最う何も祕す事なんぞ無いけれど……。」とは云つたが、薫と顏を見合はして言淀んでゐる。

「ぢや、一體彼の繪は、誰に似て居るて云ふの？」

「彼ですか、彼はね……、」と云つて、急に語調を變へて、「姉樣、何も彼も云つて了ひますからね、是まで祕して居た私の意を察して、何卒姉樣……、お願ひですから……。」

「可いと云ふのにね、本當に竹代樣は苦勞性だよ……。」

「だけれど姉樣……。」竹代の顏色は眞蒼に變つて居るのだ。

「其樣な勿體振らないで、疾く云ッ了や可いぢや無いかね。お前樣が然う祕したがるから、何樣な大事かと思つて、益々氣に成るぢやありませんか……。」

「竹代樣、可いから、もう全部話してお了ひなさいよ、」と薫も竹代を覗込んで云つたが、「ぢや、私から話しませう、彼はね、宇都宮のね、小福と云ふ藝妓に酷く似て居るから、常雄樣は多分、其の藝妓をモデルにしたのだらうと云ふんですよ。」

「然う？ 宇都宮の藝妓？」と雪江は何故か莞爾して、「ぢや、其の藝妓が、……其の小福とか云ふのは彼の人の外妾だと云ふんでせう、其樣な事てせう？」

「其れも、只だ世間の噂だから、本當に外妾に成ッてるか、それとも、只だモデルに許りなッたものか、何も判然したことぢやないんですよ……。」と薫が言足すと、

「おほゝゝ、何だらうまア。あんまり仰山に、祕し祕すから、何樣な事かと思つたわ。ほほゝゝ、それだけの事なら、祕すも尋ねるも無いぢやありませんか、おほゝゝゝ。」

「私もね、最初の中は、そんなに思つたけれど、竹代樣が大變に心配して、姉樣に知れちや惡いからッて云ふもんですから、つい釣込まれてしまつたんですの……。」

「だッて、姉樣が本當に然う思つて居らッしやるなら、私だッて夫は何も……。」と竹代は眼を据ゑて姉を視た。

「本當にも譃にも、竹代樣も學生してる人の樣

でも無いねえ、」雪江は輕く打消して、「畫家がお妾を有つてるなんて、もう世間一般の例と云つて可い位ぢやありませんか……。モデルが無きや繪が描けないだらうし、モデルにするには美人で無きや興が湧かないだらうし、そら、自然とお妾でも置いて、其れをモデルにすると云ふ事に歸着するぢやありませんか……。」

此う云つてる時しも、背後の方から、日本種ではあるが肥く逞しい栗毛馬に騎つた若い男が、はい〳〵と勇ましく掛聲を掛けて通りかゝッたが、狹い田舍道なところへ、此方が女連であるので、急に馬の歩を緩めて、片脇に寄つて徐に通過ぎた。

それは此邊で見馴れぬ男である。二十七八の、夕陽を正面に受けた顏は紅く光澤を放ち、活々とした眼で、鼠色のセルの背廣に獵帽を輕く戴き、脊は左程高くは無いが、夕燒の空に映つた姿はすらりとして、何處か貴公子と云ふ風貌である。三人の女は等しく口を閉ぢて、其の背後を眺めたが、青年も七八間行くと一度此方を振返つて、手巾を出して顏を一つ撫でた。

「もし、鳥渡伺ひますがね、」と馬を止めて、其處の麻畑から出て來た下男と秀吉に訊ねた、「圓城寺様と云ふ家は何處でせうな？」

「圓城寺様云つて、大圓城寺様と小圓城寺様と二軒あるだ、お前様の尋ねなさるなア、何方の圓城寺様だかね？」

「何方だか分りませんが、」と少し當惑して、「爰は高根澤でせうな？」

「高根澤だともね、お前様何處からござッたか知んねえが、一里許跡で、橋渡りなさッたべえ、彼からずうと、彼處に見える山の根まで、皆な高根澤だからねえ……。だけんど、高根澤廣えけんど、圓城寺の苗字名乘る家、二軒ほかござりましねえよ、圓城寺庄左衞門様と、圓城寺常雄様、此二軒ほか無えだからね……。」

「何方だか分らんが、何でも、禮之助君と云ふ人がありませう、東京へ出て居る學生で……。」

「東京に出て居る人で……？」

「儀助、叔父様の事たよ。」と馬上の人ばかり眺めて居た少年は下男に云つた。

「然うだ然うだ。」と下男は點頭いて、「そんだら、大圓城寺様の事た……、大圓城寺様はね、其處の庚申様の路左へ入つて、何でも眞直にござれば、彼方にほら、杉だの樅だの、森の様だ處見えるだね、彼所だ、彼所が、お前様の行きなさる大圓城寺様の庭だア、譯は無えだよ。」

「然うですか、や、如何も有難う。」

「ほら、彼方の桑畑の中を……、」と儀助は伸上つて彼方を指したが、「今隱れて了つただが、隱居様腕車に乘つてござるだア……、大圓城寺様のよ……。爰に居る坊様も、矢張り圓城寺様の坊様でござりますからね。」

「あ、然うですか。」と笑ひながら挨拶すると、

「ほら、ほら〳〵、」と儀助は遠くを指して、「彼處行く腕車見えますべえ、母衣さ夕陽射つて……、見えますべえ、ほら、光々してるだア……、彼、大圓城寺様の隱居様でごぜえますよ……。」

「あ、然うですか、や、是は如何も有難う。」と云つて、少年へも輕く挨拶して馬を急がせた。身體の搖く毎に、其の鞍がきい〳〵と野面の空氣に鳴る。

「叔母様、叔父様へ來た客だよ。」と少年は薰の傍へ嬉し相に駈けて行つた。

「何處から來たんだらう、東京か知ら？」と薰は呟いた。

三人の女は先刻から儀助と客との話を殘らず聞いて居たのである。

「必然東京だよ、大學の工學士だよ、賭しても可いや。叔母様、疾く歸らうよ。」と薰の袂を

曳いた。

「私、何處かで見た樣だが、」と竹代は首を傾げて、「靈様の下宿だッたか知ら？」

「何うも、此縣の人の樣ぢや無いねえ。」と薫は、桑畑に隱れて半身より見えぬ今の青年を眺めながら、「だけれど、東京の人なら、宇都宮の方から來さうなもんだが、訝しいわねえ。」

「必然東京だよ、可いなア、可いなア、馬に乗つて漫遊するんだ、可いなア、」と云つて、また薫の袂を曳いて、「叔母様、疾く家へ行かうよ。」

此樣な事を云つてる中に、一行は庚申塚の前まで來た。爰から道が二筋に岐れて、薫と秀吉は左に、雪江と竹代は右に別れるのである。下男は雪江の下男であるが、此方が家へ近いと云ふので、辭退するのを無理に薫に附けて遣り、姉妹二人は肩を並べて、僅か三四町彼方の、小高い丘の上に見える、宛然小城の樣な嚴しい構の我が家の方へと足を向けた。

「おや、洋犬が……。」と竹代は突然口へ出した。

少年に曳かれて行つた犬が、頸の繩を引摺りながら此方へ逃げて來たのである。これも雪江の家の番犬なので。

「竹代様、お前様の其れを知つたのは、如何云ふ處からなの？」と今まで何事か考へ續けて居たらしい雪江が云つた。

「え、知つたッて？ 何を？」

「其の、小稲と云ふ藝妓と彼の繪の女と似て居ることさ……。如何して知つたの……、お前さん見たことでもあッて？」

「彼の事ですか、彼はね、私、姉様に祕して濟まなかッたけど、過日の新聞にね、義兄様と其の藝妓の事が出て居たんですの……。」

「おや新聞に？」と眼を睜つて、「何の新聞……？ 何と云つて出てたの？」

「栃木新聞ですけれど……。」

「栃木新聞に？ まア、些とも知らなかッたよ。何て記いてあるの……？」

竹代は姉の顔を見ると、また急に心配になッて來たので、

「ですけれど、新聞なんか姉様、何を記くか分らないぢやありませんか、根も葉も無い事を搆へたり、平氣で間違つた事を記いたり……。」

「だけれど、まアさ、何樣な事が有つて？」

「だッて、彼樣な事を……」と其の心配相な眼で姉を凝然と視た。

「ほゝゝゝ、また始まッたよ、おほゝゝ。」

雪江は笑出した、「竹代様、お前様て云ふ人はまア、如何したてんだらう……。其樣なにも私が不確な女なの？」

「いゝえ、然うぢやないけれど、」と云つたが、氣を變へたらしく莞爾して、「あのね、彼の藝妓がね、餘り綺麗な處から、義兄様がね、モデルに爲ようと思つて呼んだんですと、だけど、最初は如何しても諾かないんですッて、裸體になることを……。それですから、義兄様も到頭……何して、その……、ほゝゝゝ。」

「ぢや、其れから深くなッたて云ふ事情ね？ 而して、今は如何なッてるだらう、矢張し外妾の樣な關係？」

「然うですッて。新聞の云ふ事なんか信にならないけれど、今では、彼女でも大騷ぎ遣つてるんですッて。」

「然う、ぢや、つまり相惚なのね、おほゝゝ。」

「それからね、私も、何樣な藝妓かと思つて、實は過日、金森の民ちやんが宇都宮へ行く時、彼の藝妓の寫眞を買つて貰つたんですの……。」

「然う？ 何樣な藝妓？ お前様其れを持つて？」

「え、持つてるけど、其樣な、評判する程の女でなんぞ無いわ。」

「然う？ だが、其の新聞へ出たのは何日頃？」

「私、つい見なかッたよ、その日に限つて家へは

來ないのか知ら？」

「いゝえ、來ましたよ。だけれど私、姉樣に見せちや惡いと思つたもんだから……。」

「まア、お前樣隱したね？」

「え、濟まないけど。ほゝゝゝ。」

「道理で、私や知らなかツたよ。竹代樣も油斷がならないねえ、おほゝゝゝゝ。」

道は次第に爪頭上りになツた。畑を隔てて彼方から口笛が聞える。洋犬は路傍の土塊に前脚を掛けて、耳を垂れた長い首を伸上つて、久く其の口笛のする方を見て居たが、吠えもしないで默つて主人の跡を追蒐けて、姉妹の脇を通抜けると、其邊の草を嗅いだり、尾を振つたりして、夕陽の射る丘をせツせと登つて行く。

第四

本家別家の間なので、庄左衞門の家の大圓城寺と呼ばるゝに反して、雪江姉妹の家をば小圓城寺と呼ぶのであるが、併しこれは村の者だけの呼ぶ名で、もう二里も先方へ出ようものなら、高根澤の圓城寺とさへ云へば、誰も彼も常雄……卽ち雪江の夫の事として通つて居る。と云ふのは、數代前から國中に響いた豪家で、何萬と云ふ數へ盡せぬ金が有つて、眺めても目の屆かない程の廣い耕地を持つて、大名の樣だと云はるゝ豪奢な生活をして來たからである。

で、其樣なに名が聞えたのであるが、明治の初年から掛けて、貸した金が倒れたり、製絲會社で失敗したり、先代……卽ち雪江等の親父が夭死したり、種々と都合の惡い事が續いたので、昔時に較べては半分も無いと云はるゝ財産と成ツて了つた。が、まだ〳〵圓城寺は圓城寺で、此の地方で誰も肩を並べる財産家は無い、此の地方ばかりで無く、縣内を通じても納税額は六七番に位する多額の納稅をするのであるが、所有主の名義が常雄と雪江との二つに分たれてある關係から、未だ貴族院議員の資格に達し無いばかりで、何處へ出ても昔時の格式で押通らるゝのだツた。それに今の主人の常雄と云ふのは、梅園と云ふ男爵の三男とやらで、洋行までした油繪の畫家で、橫文字の書も讀めば、莨も薰の高い葉卷ばかり喫む……、村の百姓達の目には何所から何所まで、床しく物々しく見えるのだつた。

邸は舊のまゝであるが、家屋は先代が改築したので、昔の樣にだゝ廣くは無いが、中々意匠を凝らした普請である。母家のみで間の數は十二からある。中でも宴席などに用ゐる大廣間は、疊の三十疊も敷かる廣さである。この外に前庭に面した洋室、奧庭に離れてある茶座敷、三棟の土藏、納屋、それに洋種の草花を育てる溫室まで加へたら、坪數ばかりも大したものであらう。それだのに家族と云へば、常雄夫婦と妹の竹代の三人だけで、他は悉く雇人ばかりである。執事の駒尾と云ふのを首めとして、園丁の堀田、下男頭の團五郞、車夫の平吉、これに三人の作男を加へて男が七人、女の方は茶と生花の師匠で、諸事御作法係の奧村、料理番のお松、お針のお種、この外に仲働女が二人、炊婦が二人で、合せて是も丁度七人。

邸が廣いだけに雇人も多いのだが、都會と違つて來客が煩くあるのではなし、每日是と極つた手の掛る仕事も無いので、誰も彼も此のせち辛い世間を門から外の世界のやらを顧して、何所やら暢氣に日を送つて居るのである。だが其の中に交つて、一人自分の爲る事一つに魂を打込んで、一瞬の時間をも仇には過すまじと決めて、始終緊張し續けて居る者がある。それが夫人の妹の竹代である。

竹代は今年十九に成る。姉に較べては流石に見劣りもするが、併し百人優とも千人優とも

云はれる美人である。加之に去年東京の高等女學校を卒業したので、近頃申込まるゝ縁談の口は、其れこそ雨の降る程にあるのだが、當人は女ながらも學者に成ッて、一生を獨身で通すと云ひ張つて、何の縁談も何の縁談も跳付けて、この事ばかりは姉の勸告にも耳を傾けぬのである。

併し今日は四年前に亡くなッた姉の忌日に當つたので、家中の者に休暇を與へた程であるから、竹代も今夜ばかりは机に對ふことを止めて、何か面白い談話でもして吳れぬか、と雪江に誘はれたまゝ其部屋に行つて、元より賴に成るも賴に爲るも姉妹二人限りの間で、睦しからぬ筈も無いが、夜の更くるも忘れて話込んだのであッた。

妹が部屋を出て去つた跡、雪江は婢を呼んで臥床を設けさせ、自分も寢衣に着更へたが、傍と其處の紫檀の小机に、新聞と共に載つてる手札形の寫眞に目が着いて、今しも婢が置處を變へて行つた洋燈の下へ持つて來て、暫く其れに凝然と眺入つたが、其の顏に不快の色が現然と見えた。

「此樣な者がまア‥‥」と思はずも口に出して云つたが、嘲る樣な眼をして、「何處が氣に適つたんだらう?」

で、今度は急に身を起して、三面を出したまま四つに折つてある新聞を持つて來て、モデルの小福と題した一段餘りの雜報を瞬きもせずに讀通した。而して讀了ると、美しく莞爾として、新聞も寫眞も元の處へ置いて、解けかゝッた寢衣帶の端を結直して、靜に床の中へ入つたが、手を伸べて夜具の上を叩いて、枕を窮屈で無い樣に仕更へると、また莞爾と笑つた。

今日墓參の歸途に聞いた時は、其の藝妓は如何なる藝妓で、其の新聞には如何なる事が書いてあるかと、想像は面白からぬ方にのみ馳つたのであるが、今夜見れば藝妓は思うたより醜く、新聞も思うた程の事は記いて無いので、是ならば、左迄氣に懸ける事は無かッた、と竹代にも話し、自分にも然う思うたのである。また、この雜報中には、良人と小福との事ばかりで無しに、雪江と夫婦に成る緣の初めの事を、「彼方も美人此方も美男なれば、彼の淨瑠璃の文句ならねど互に見交はす顏と顏‥‥」などと綴り、婚禮の時のことを「あひに相惚の夫婦こそ目出度かりけれと謠ひしとかや」などと俗惡な文章で冷かしてあるので、雪江は新聞記者の惡戲と知りながらも、猶憶出さるゝ嬉しいところもあるので、此くは獨で微笑まれもするのである。

「お安眠遊ばしまし!」

每夜のやうに御枕頭に具へる湯沸、湯呑、煙草盆をはじめ、蒔繪の御手箱、呼鈴など落ちも無く揃へ、洋燈も絹張の行燈に取更へた仲働女は、敷居の外に畏まッて、此樣に申上げたのである。

而ると雪江は仰向いたまゝで、

「あゝお休み、」と輕く挨拶したが、婢の足音が二つ三つ彼方に步出すと、「あの、筆や!」

「はい。」婢はまた坐つた。

「竹代樣は最う息んで?」

「いゝえ、未だお起きなすッて居らッしやいます。」

「然う? ぢやね、」と笑を帶びた聲で、「竹代樣にね、今夜はね、此方へ來て臥て下さいッて‥‥。何だか私、淋しいから。」

「はい、畏まりました。」と婢は起上る。

「だけれど、其樣なことを云つて笑はれるか知ら?」と獨語したが、また急に、「筆や、可いよ、默つてお居で。」

「は。」

「たゞね、身體に障ると可けませんから、大概にしてお息みなさいッて、然うお云ひ。」

「はい、畏まりました。お息み遊ばしまし。」
「あゝ、お前達も早くお息み。」
婢の足音の彼方に消えた後は、屋の内外が急に寂然となツて、遙かの池から蛙の聲が低く聞え、是も毎夜の例になツて居る、婢が燻いて置いた床の間の香爐からは、夢を誘ふ美い香が燻じ上るのである。

雪江は暫く目を閉ぢて、眠つた樣に凝然として居たが、偶と寢返りをして、二三度枕を仕更へて、漸と窮屈で無くなツたと云ふ態に、ほーと吐息を吐いて、また凝然として居る。それが久くのことであるから、最う眠つたらうと思へば、突如に深く溜息を洩した、而してまた寢返りをした……、かと見る間に、今度は蒲團の上に半ば身を起して、片肱を枕に凭せて、煙草盆を引寄せた。

煙草は嗜きで喫むのでは無い、只だ良人の眞似して煙管を把つたのが習慣となツて、枕頭に此の道具が無くては淋しい樣な時の稀にあるので、此く揃へさせて置くのである。で、雪江は煙管を把上げて、何事か想ふ眼に昵と行燈を視詰めながら煙草を詰めて居たが、偶と其の眼を瞬いて、四邊を見廻して、するりと夜具の中を脱出た。

寢衣の前がしどけなく開いて、胸は乳房まで見はれ、褄の間からは褌のちらつくのも其のまゝ行燈の傍へ寄つて、手燭に火を點し、彼の小幅の寫眞を取上げて直ぐに部屋を出ようとしたが、夜更で、見る人の無いとは云へ、流石に襟を搔合はせ帶を結び直して、さて椽側傳ひに行くところは、書齋とも畫室とも兼れた一室である。

扉を開けて、手燭を高く擧げた。二十坪ばかりの室內に弱い燭光は朧氣に行渡つた。美術家の書齋だけに隨分ごた〳〵と取散してある。布を張つた枠、指物師から屆いた許りの布も張らぬ枠、長い枠臺、畫掛けた畫稿、布の卷いたの、夜見ては薄氣味の惡い石膏細工の半身像など、一面に列べてあるが、雪江は其等には眼も呉れず、壁に隙間も無く懸けてある油繪の額を視るのであつた。その額の數は十五六枚もある、中には常雄が西洋から購めて來たのもあれば、我國の先輩の筆に成ツたのもあるが、多くは自分の描いた物で、孰も孰もすばらしい額緣に塡められてある。

さて雪江の目を注めたのは、就中立派な額緣の、三尺に四尺許りの繪で、滿幅悉く春草の柔かに茂つてる野原の上に、散髮の美しい女が、何處に布片一つ着けず、全くの裸體となツて、翔行く鳥でも招く樣な手をして、無心に大空を視上げて居る。

雪江は久くは瞬きもせず眺めて居たが、軈て彼の寫眞を取出して、此方を一目彼方を二目、顏の似て居る處を仔細に較べはじめた。と、其の眼は次第に鋭く輝つて、見る見る顏の色は燃える樣になり、動氣が強くなツたか、呼吸までも苦し氣にするのである……、と思ふまに、鋭い眼容で四邊を見廻し、何を索めるのか不意に卓子の前に駈寄り、荒々敷く其處を掻廻すのだツたが、其物の探當らないのか、又片隅の繪具箱などある棚の前に行くや否や、大きなナイフの、柄に繪具の染着いてるのを取上げて、忽ち裸體畫の前に駈戻り、物をも云はず顏を目掛けて斬付けた。布はぱり〳〵と快い音して、美人の身體は眞中から二つに裂けた。

また斬付けた、美人の腕は離れた。また斬付けた、乳から掛けて左の股がぶらりと垂がツた。また斬付けた。今度は横に薙つた。次にはナイフの刃は額緣を刺した。が、最う目が眩くなツて、振上げたナイフを固く握つたまゝ、强い音をさせて雪江の身體は仰向きに床へ倒れて了つた。

第五

圓城寺常雄の家と本家の圓城寺庄左衛門の家とは、田だの、畑だの、雜木林だのを隔てて、其間が凡そ十町許りもある。

家産は別家の十ケ一にも當らぬが、併し此邊で三番と下らぬ財産家で、昔時は代々庄屋を勤めたものである。この村に古くから言傳へられた話に據れば、修行院を開基した某阿闍梨と云ふのは、藤原秀郷何世かの孫で、圓城寺の先祖は其の某の家臣であッたが、共にこの村に身を隱したものだと云ふ。その古昔の事は如何でも可いが、成程高根澤で草分の舊家とも思はるゝ邸内の樹木、松、椎、樅などが幾百年を經たものか、遠くからは宛然小山の樣に高く茂つて見える。

今この樹木の暗く茂つてる庄左衛門の邸内に、「かい、から〳〵と腕車を乘入れた男がある。車夫は昨日の平吉で、腕車は矢張り昨日庄左衛門を乘せた腕車であるが、男は三十前後の、黄色く膨れた顏で、度の強い近眼鏡を懸け、鍔の廣い古い中折帽を冠り、縮布の單物に黒絽の羽織を着て、安物の臭い紙卷煙草を銜へて、低い鼻穴からもや〳〵と煙を出して居るが、腕車から下りた處を見ると、脊の低い姿勢の醜い男で、泥の着いたズックの運動靴を穿いて居る。

廣い前庭に通拔けようとすると、丁度厩の前のところで、畑の下男共に何か指圖に行つて來たらしい戸主の理八郎に出逢つた。

「や、堀田君か。」と戸主から聲を懸けた。

「や、」と此方は帽子を脱つて、五分刈の頭を丁寧に垂げて、「お早うございます。」

「お早う。」と輕く挨拶して、「如何だ、病人は？　最う落着いたらう？」

「はア、最も大丈夫でございます、お食事も、殆ど毎度位食りましたさうで……。」

「然うか、ぢや最う安心だな。」と云つて、腕車に乘つて來たのを訝し相に、「それで、今朝は如何したんだ？」

「は、實は、もう一回、東京の御客樣に診察を願ひ度いと云ふので、それで、拙者がお迎に出ましたのでございます。」

「然うか、石丸樣に。」

「奧樣は、最う何とも無いから、診て貰ふ必要は無い……、此う仰有いますが、竹代樣が非常に心配しまして、是非、今一回診て戴き度いと云ふので……、それで、拙者がお迎に出ましたので……。」と云つて莞爾と笑つたが、この男が笑ふと、眥が垂れて、脹れた頬が高まッて、其れは餘程滑稽な顏になる。

「あゝ然うか、」と主人も對手の笑つた顏に催されて莞爾と遣つて、「まア此方へお入り、丁度、今散歩から歸つた樣だッけ。」

主人の理八郎と云ふのは庄左衛門の總領で、戸籍上の戸主は父の名になッて居るが、最う餘程前から一切の家事を執つてゐるのだ。未だ三十八歳の壯年であるが、顏には小皺が刻まれ、頭髮には白い毛も交つて、知らぬ者の目からは四十以上とも見らるゝ。

さて二人は家へ入つて、土間を裏庭へ通拔けて、苔の生えた、樹蔭で薄暗い程になッてる間を離座敷の縁頭近く進むと、今しも散歩の汗を庭で流で拭ひ、タヲルの單物に着更へたところで、兵兒帶をぐる〳〵と卷きながら立迎へたのは、昨日から此處に客となッてる石丸達と云ふ醫學士、即ち雪江の一行が、墓參歸の途中で見たあの馬上の青年紳士なのである。

「お歸りですか、何方まで行らッしやいました？」と云ひながら、理八郎が先に立つて座敷へ上つた。

「修行院とか云ひましたな、彼の、村外のお寺……。」

「あゝ、修行院、彼様な處まで行らッしやいましたか…。」

而ると、別家から使者に來た堀田は、緣側に腰を掛けて丁寧に叩頭して、

「お早うございます、昨夜はお出で下さいまして有難うございます、宜しく御禮を申上げる樣に申付かつて參りました。」

「いや、昨夜は失敬。如何です、彼からずうと睡ましたか？」

「は、今朝七時まで安眠なすッたさうでございます。」

「それぢや、頭痛も何うもなさらんでせう？」

「は、何處も苦痛を訴へる處はありませんさうで、體溫は六度五分、脚搏は七十二、食事も平常と同ぐ位召上つたさうでございます。」

「然うですか、ぢや、最う心配な事が無いでせう、只だ、可及的腦を使はない樣にしなきや可けませんな。」

「それで、最う一回先生に診て戴き度いと云ふので、お迎に參つたのださうでございます。」と云つて、主人は其の眼を堀田に向けて、「なア堀田君。」

「左樣です、甚だ失禮でございますが、何卒、今一回御診察を願つて、御投藥をして戴きたいと云ふので。」

「藥ですか、左樣、藥には及びますまいよ。何處か、苦痛を訴へるところでもあればですけれど…。」

「私も、其の事は申上げましたが、如何も、餘り急に癒くなッたのが不思議だなどと仰有いまして…。」と堀田は笑つた眼で醫學士を見て云ふ。

「如何も、婦人と云ふものは眞に愚癡な者で、」と主人も笑つて、「何卒、一つお出で下さる樣に。」

「いや、私の行くのは何でもありませんがね。」

「而して何か…、健胃劑か何か投藥して下さりや、其で落着きませう。つまり神經ですからな。はゝゝゝゝ。」と堀田は鼻に皺を寄せて笑つた。

醫學士は厭な顏色をしてじろりと此方を見たが、何にも云はずに紙卷莨に火を點けた。丁度この時、庭口からのッそり入つて來た男がある、二十五六の、脂肪の多い、丸く肥つた大男で、紺絣の單物を脛の半分ばかり現はれる程に着て、鳩尾まで胸を開けてゐる。顏色は淺黑く、頭髮は五分刈であるが、地肌の見えぬまでに濃く、狹い額には深い皺が刻み、一目見て餘り頭腦の働き相で無い容貌をして居るが、圓城寺家の血統に特徵とでも云ふべき筋の通つた鼻と、愛嬌のある脣とを有つて居る。禮之助と云ふ者で、主人の理八郎には季の弟で、この外に義七――これは工兵の軍曹で佐倉に居るのだが――それと、一旦緣付いて離緣になッて歸つた薰と、四人は庄左衛門の實子なのである。

長い間東京に出て、首尾好く行けば去年の夏で工學士と成ッたのであるが、肋膜炎に罹つて、既う一年許りと云ふもの休學して居るのだ。

「今日は、」と堀田は、直ぐ自分の前を通る禮之助に笑顏を見せて「最う散歩にお出でださうですな、如何です、何か佳い句が出來ましたか？」

「やア、俳句かね、」と禮之助は薄ら笑をしたが、其れ限りで默つて、實兄と學士との間に圓く胡坐を組いた。

「急に夏構だね、寒かないのかい？」と學士は禮之助を眺めながら云ふ。

「なアに、此でも暑い位だ。」と云つて、斷りもなく學士の莨を喫ひはじめる。

「禮之助、」と理八郎は弟に話掛けた、「新家から、最う一回先生に診て戴き度いと云つて、堀田君が迎に來たんだがな。」

「然うですか。」と答へた限り澄して莨を喫んで

居る。
「それから、御隱居樣が然う仰有いました、御暇なら禮之助さんも一緒にお出でなさいッて。」と堀田は禮之助に云つた。
「僕に？ 僕が病人の處へ行つたツて仕樣がないさ。」
「だが、一緒にお連れ申して、油繪でもお目に掛けるか、溫室でも案內して上げりや可いぢや無いか。」と主人は弟に勸めた。
「然うですな。」と云つて、强く吸つたので莨の煙をもや〳〵と出して、煙ツたい樣に顰めた顏を、其のまゝ學士に向け、「君は如何だ、見たいのかい？」
「然う、拜見したいね。」何處か思切の惡さうに云ふ。
「然うか、君が見たいと云ふなら行つても可いが、併し詰らんぞ、油繪だからなア……。四五枚は西洋の繪もあるが、跡は大概常雄樣の描いた奴で……、それも、面白い山水か何かなら可いが、菜畑だとか、野中の一本道だとか、でなきや、作男の寫つた繪だ……、僕なんかには更に感服しない物だ。」
「併し、材料は何樣な物を採つても、巧くさへ描けりや美術だらうぢやないか。」學士は微笑を帶びて穩かな語調で云つた。この人の物を言ふ所を見ると、何處か心の中では十分に確と信じて居る事も、其の信じたまゝ鋭く言放つては、聞人を驚かすか知れないと懸念でもして居るやうに、眼の中には其の色は見せながらも、聲は至つて優しい聲で云ふのである。
「然う云ふものかなア。」禮之助は餘念の無い眼を一杯に明いたが、「君は、元から彼樣な物が好きだツたなア、君が見たら、或は、何處か美い處が有るかも知れんよ。併し、僕には解らん。」
「其樣な事を云つてないで、新家でも待つてるだらうし、速くお伴したら可いだらう。」
「然うですな。」と兄に答へて、「ぢや君、一處に出掛けようか？」
「あゝ、何卒それでは。」
「併し、先生には腕車が來て居るから。」
「然うですか。ぢや、僕は先へ行かう。」
「ま、待ち給へ、僕も一緒に行くから。」
「いや、君は乘つた方が可い。」と禮之助がステッキを振りながら出ると、
「また、俳句のお談でも爲ませう。」と笑ひながら堀田は肩を並べて連立つた。
「俳句かね、うん、それも宜からう。」愉快相に云つて、禮之助は晴渡つた村の空を見上げた。

第六

西洋室から續いた廊下の中程に、古新聞やら、ボールの空箱やらを一杯に詰込んだ二間に一間ばかりの物置があるが、今しも此の物置から出て來たのは、薰と竹代の二人である。
「竹代樣、如何なすツて？ 疾く彼方へ行きませうよ。」
「えゝ。」と竹代は物置の帶戶を半ば閉めたが、矢張り內を覗きながら、「だけど、是で發見らないか知ら！」
「此處から？」と薰は物置の中よりも先づ竹代の顏を訝し相に眺めて、「如何して？ 見える筈なんか無いぢやありませんか？」
「だけど、若しか、偶然用でも出來て入つて來たら……。」
「誰が……常雄樣が？」
「姉婿樣が直接に入らないでも、何か……新聞が何か調べることがあッて、誰か入つたら……、如何でせう、發見らないか知ら？」
「誰が氣が着くもんですか、第一、彼樣な箱を開ける筈は無いんだもの。」
「だッて、若しか……。」

「ほゝゝ、然う、貴女の樣に氣に懸けた日には、何うする事も出來無いわ。寧そ河へ流した方が可いと云へば、人に拾はれて、常雄樣の歸つた所へ屆きでもしちやア困ると云ふし、燃さうて云へば、煙が出るから家の者が怪しむだらうツて云ふし、隱せば隱したで、何處へ隱しても知れるだらうし……、ぢや此うすると可いわ、彼を確り肌へ着けてさ、夜具を被つてさ、而して貴女、昨夜臥たッきりで居ると可いわ。おほゝゝゝ。」と薰は笑つた。

「其樣な馬鹿な事が……。」と竹代も笑つたが其の戸を締めて、薰と共に座敷の方へと歩を移した。

「だけど、然うして臥て居る處を人が見たら、如何だらう……？ 彼で、彼の繪が男だと、まアてい、いゝ、ツきり戀病ひと云ふ事になるんだけれど……、おほゝゝゝ。」

けれども竹代は眞面目切つた顏をして、

「誰も、見て居た者はありませんわねえ？」

「えゝ、誰も。」

「此うして置いて、皆な忘れた時分に、燒いてでも了や其れツ限りねえ。」

「然うですとも……。あら、雪江樣が起きてますよ。」

苔の着いた梅の枝の斜に出た、その下には八手が青々と茂つてる彼方の縁側に、寢衣姿の雪江が起つて居て、此方の二女を眺めて莞爾笑つた。

「姉樣、起きて居らッしやるの？」と竹代は遠くから云つた。

雪江は鬢の毛を搔きながら何か答へたが、聲の低いのと、此方の足音に消されて聽取れぬのである。

「青葉が映つてか知ら？ 顏色が惡いわねえ。」薰も雪江を眺めながら。

「彼樣なにしないで、臥て居らッしやりや可いのに。」竹代は顏を顰めたが、姉の傍に近寄るや否や、「姉樣、手水にお起きなすツたの？」

「いゝえ、何だか餘り退屈だからね、」と雪江は又莞爾として、「貴女がたは何處へ行つてたの？」

「今ね、彼を……」と竹代は言出したが、「ま、姉樣はお臥つて居らッしやいよ。」

「また臥るんだツて？ 最う可いだらう。最う何とも無いもの。」雪江は、可笑な事を云ふぢや無いかと云つた樣な顏色をして薰と共に笑つた。

「いゝえ、何とも無い事無いわ、顏色だツて惡いし、ねえ薰さん。」

「えゝ、其れは惡い事は惡いわ。」

「然う、其樣な厭な顏色してて？」と袂で顏を拭く。

「ですから、まアお臥つて居らッしやいよ。」

「だツて、顏色が惡いたツて、臥ないでも可いでせう。何處も、痛い處も痒い處も無いもの、ねえ薰さん。」

「其樣な事を云ふけれど、昨夜、彼樣な事の有つた今朝ぢやありませんか……。」と云つてる間に、何を想出したのやら哀し相な顏をして「姉樣は、些とも私の云ふ事なんか聽いて下さらないんだもの。」

「本當に竹代樣は解らないよ、私が何とも無いと云つたら其れで可いぢや無いかね……」と笑つた眼で妹を睨めたが、「お前樣の樣に心配ばかし爲た日には、本當に病人に成らなきやならないわ。」

「ですから、何にも難かしい事は無いから、只だお臥つてて下さいよ、後生ですからさ。」と竹代は眞面目切つて云ふ。

「竹代樣には敵はないねえ、」と雪江は笑ひながら、「ぢや、最う幾日臥せッてりや可いのです？」

「何日つて、私には分らないけれど、今彼の……、

本家に來て居る・・・。」と言が躓くと、
「石丸樣。」と薫が助けて遣る。
「・・・石丸樣を迎に遣つたから、彼の方が來て・・・。」
「おや、本當に迎に遣つたの？　私が要らないッて云ふのに・・・、仕樣の無い人ねえ。」
「仕樣が無い事無いわ、良い醫師に診て貰つて、一日も速く癒くならなきや損ですもの・・・。それも、宇都宮からでも呼ぶなら何だけれど、幸ひ本家へ遊びに來て居る方なんですもの。」
「だッて、此んばかりの事に。村の道順樣で澤山ぢや無いかね。だけれど、まア迎に遣つたものは詮方が無いとして、彼の人が來てから如何仕ようて云ふの？」
「如何ッて、只だ、診て貰ふ許しぢやありませんか。」
「それで、若し服薬する程の事は無いと云つたら・・・？　それでも臥てなきやならないの？」
「いゝえ、其樣な事あるもんですか、」と姉の冗談半分に云ふのとは違つて、竹代は何處までも眞面目で、「醫師が診察して、起きて居ても關はないと云ふなら、それで可いぢやありませんか、姉樣はそんな事を云ふけれど、一寸した事から後で取返しの付かない樣なことがあッちや大變だから、それで、私は此樣なに云ふんぢやありませんかね・・・。」
「最う解りましたよ。」と姉は首肯いて、「醫師に訊くまで臥て居たら、それでもう、何も貴女の方に苦情は無いでせう？」
雪江は笑ひながらも妹の云ふがまゝに部屋へ戻つて、其處に設けてある床の内へ入つた。薫と竹代とは左右から手傳つて、臥被を徐と被けて遣る。
「到頭臥かされッ了つた。」と雪江は笑ひながら、「本當に、竹代樣は壓制だよ。」
「壓制でも仕方が無いわ。」
すると薫は、
「だけど、同じ壓制でも、竹代樣のは好意の壓制だから。」
「好意も然うだけれど、一つは何だわ・・・。」と云つて、雪江は笑つたばかりで止めて了つた。好意の壓制もあるが、一つは苦勞性の壓制で、と云はうとしたのである。
其處へ婢が入つて來た。竹代は此に茶を命じて、さて低聲で姉へ話出した。
其の事と云ふは、昨夜雪江の斬裂いた油繪を、彼のまゝ常雄に見られては大變な事になる故、何も枠も人の知らぬ處に隱して、常雄の歸つた日には彼の繪ばかりを如何したのか盜難に遭つたと虛構事の分疏をする、と云ふ事である。此は竹代の心から許り出たのでは無い。昨夜から伯父と共に泊つて居る薫と、如何にすれば常雄に不快の感も起させず、雪江も公然に謝罪ることは無く、從つて一家に波風の起らぬ樣に、穩かに始末が着けらるゝものか、と種々に工夫を凝して、種々に相談を重ねて漸く此と決した次第である。
雪江の意中では、一時の不快な情を制し切れないで、亂暴な事は爲て了つたが、彼樣なに卒倒して、深更に人を騷がせる樣になッたのも、詰りは覿面に夫の罰が當つたのだと後悔し、今後は決して嫉妬を起す樣な、彼樣な淺ましい事はしないと深く思つて居る。油繪の事に就ては、切裂いたのは惡いけれども、私が頭を垂げて謝罪つたならば、彼樣な物一枚位のことを宥さぬと云ふ筈も無く、假し少し位機嫌の惡い顏を見せられても、此方の仕向け樣一つで機嫌を直して貰ふ事は出來る、と云ふ位に思うて居たのである。
けれども、今竹代と薫とが親切に相談をして吳れるのを聽くと、其れで濟まされるものならば、無論然うした方が後に物も殘らず、何程か

自分にも都合が好いので、一も二も無く二人の云ふまゝに同意して、
「貴女方にばかし、種々と心配を懸けてねえ。」
などと禮を繰返した。
「其様なこと何でも無いけど、昨夜ばかしはねえ！」と薫に云ふ。
「えゝ、私は本當に、如何なる事かと思ひましたよ。新家の奥様が此々だッて言ふから、もう、夢中で飛んで來て見ると、未だ貴女、何を云つたッて口も利けないぢやありませんか……。」
と薫の說出したのを初めとして、竹代も昨夜の出來事を……即ち自分が未だ机に對つて居る時に、西洋室の方に當つて強い物音がしたので、駈付けた事から、本家に來て居る醫學士を呼んだ事まで、今更それを姉に訴へる心算では無いが、想浮ぶまゝを話出したのである。而ると、薫は一寸竹代の袂を曳いて、
「竹代樣！」と小聲で注意した。
見ると、今迄默つて二女の談を聞いてゐた雪江は、昨夜の疲勞が出たのか、何時の間にか快く睡つて居るのである。竹代は其のまゝ口を噤んだ。而して、臥被から外に投出してる姉の手を徐と中に入れて遣つて、拔足して此の部屋から出た。

暑い日影は庭の芝生一杯に射つて、雀の囀るのが軒近く聞え、蓮の葉の廣く浮いてる池の彼方の離座敷からは、ぱちん〳〵と碁石の音が響く。
「おや、未だ遣つてるよ、」と薫は立止つて、彼方の離座敷の方を眺めながら呟いたが、「幾ら好きでも、身體に障るわ。止めて來よう。」
竹代は、其には何とも應へず奥の方へ行つて了つた。薫は庭へ下りて、日の煥々と照付くる中を、手巾で額を被ひながら、敷石傳に池の船板橋をばた〳〵と駈渡り、築山の裾から大明竹の植込を通拔ければ、爰に萱葺屋根の、柱の細い靜な離座敷があッて、軒に迫つた青葉の影の薄暗い窓の下で、彼の中氣病人なる薫が父の庄左衛門は、同じく白髪頭の、肩の骨立つた老人と夢中に碁を圍んで居る。
この老人は駒尾知之進と云ふ者で、宇都宮の士族で、數年前この高根澤の村長を勤めたのであるが、今は圓城寺の家政を支配して居る執事―　村の者の口からは番頭樣と呼ばれるのであるが　執事である。至つて正直な、何事にも几帳面な、慾氣と云つたら微塵も無い、綺麗好きな、その代り癇癪持な、兎もすると眞赤になッて怒つて、主人だらうが誰だらうが會釋も無く怒鳴り付けることはあるが、平生は至極温和く、主家の財産を殖して行くことにのみ掛つて居る男で。勿論財産を殖すと云つても、邸内に出來る果物でも、野菜でも、家で消費つた物の餘は安直くとも金に換へるとか、反古紙一枚でも丁寧に皺を伸して、紙縷に縒るか、拂塵にすると云ふ位のことであるが。
で、此の執事の理財の術は其様な處であるが、その人が家政を支配する事となッて以來、圓城寺家の財産は年々幾何か宛殖えて行くので、忠實な確かな人として家の内外に名が通つて居る。その中で最も褒めて居るのは本家の人々で、蔭でも駒尾樣駒尾樣と呼び、駒尾樣が無ければ、未だ生若い者許りの新家の家産は、今頃は彼の半分も無かッたらう、などと話して居る。それも其の筈で、雪江姉妹の母が死んで、後には幼い娘のみ殘つた處へ、養子を貰ふ、その養子を貰つた姉が人聞の惡い事を爲始める、引續いて其れが身を投げて死ぬ、金は水を流す樣に出るので、世間では最う圓城寺の財産も盡きて了つた樣に噂をした時に、本家ではあり、雪江竹代からは伯父――庄左衛門は雪江等の母の兄で、本來を云へば此の家を相續

す可き筈であるが、如何云ふ事情か反つて本家の圓城寺の養子となツたので――雪江姉妹には伯父に當る庄左衛門が、他の親類の苦情あるにも關らず、斷然此の駒尾知之進を執事に擧げて、一切の家政を委ねて、長い年月の間是と云ふ失策も無く今日に至つたので。

それで、本家の人々は口を揃へて執事を褒めるが、反對側の親類から云はせると、其處には別家の財産を自由に仕ようと云ふ惡い計畫が横はツてあるからだとも云ふ。併し實際は何う云ふものか、本家が別家から金を借りて居るのは確かで、雪江や竹代の、本家の人々と親しくして居ることもまた確かな事實である。

其れはそれとして、さて薫は、餘り長く碁を圍む事の病中の身に害ある可きを說いて、強ひて半途にして止めさせ、手を曳いて父を母家の方へと伴れて來た。

「竹代様、最う仕事に掛つてるの？　貴女も、少し息んだが可いぢやありませんか。」

其處の椽側に、籐の肱掛椅子に凭つて、靴下を編んで居る竹代に、薫に此くと聲掛けられて顏を上げたが、ちよいと笑つたばかりで、默つてまた俯向いて、また指を動かし始める。

「貴女の様に、然う精々と働いて許り居た日には、身體が耐らないわ。」と薫は父と共に椽側に上つて、「其の通り顏色も惡いし……、昨夜から些ともお眠らないでせう？」

庄左衛門も竹代の傍に寄つて、

「此品え編と、一足幾何に賣るからア。」

「一足ですか、幾らにもなりませんよ。」と竹代は伯父を見上げて、「それでも、徒居るよりはと思つて。」

「お前、其内職遣つたら、金を貯蓄れたら、あゝもうぢんこ起すと可え、はゝゝ。」と老人は與らぬ舌で云つて獨で笑ふ。

「何ですツて、金を貯蓄めてて…？」と竹代は面を上げて、「お金を貯蓄めて、餡もうぢん……、おほゝゝゝ。」

「あゝもうおんこ。」

「編物…？　編物銀行ですか？　おほゝゝほゝ。」

竹代が笑へば、薫も同じく笑つて、

「阿父様て云へば、何時も彼様な洒落ばツかり云つて…。あら、阿父様、何處へ行らツしやるの？　雪江様はお室つてますよ、此方へ來らツしやいな。」

「園五郎へ命令けれら事あうから。」

「ぢや、園五郎を此處へ呼んだら可いでせう。阿父様、爰に居らツしやいてば、最う家へ歸りますよ。」

「可いぢやありませんか、牧欒ツときなさいよ。歸るたツて、平吉が來なきや廃事も無いし。」

「だけど、下男の仕事を邪魔するから…。阿父様、あら、到頭彼方へ去ツちまツたよ、仕様が無いねえ、宛然小兒だよ…、また、奥庭へ行つて果物でも採らせようと云ふんでせう。」

「だツて、病氣の故なんだから仕方が無いわ。」と竹代は矢張り編物を續けて居る。

「幾ら病氣の故でも、如何して彼様なに成ツたらう、宛然、別の人だよ…。」

仲働女が彼方から出て來て、椽側に膝を支いて、

「竹代様、あの、御膳は孰に致しますか？」

「御膳？　それはね、奥村様に云つて置いたからね、彼の人に訊いてお呉れ。」

「あ、左様でございますか。それから、御酒の方は何方に致しますか…、矢張り日本酒でございませうか…？」

「然うねえ…？」と云つて、竹代は薫に向いて、「彼の人、お酒は？」

「些とは飲る様ですよ。」

「然う？　ぢや、日本酒を出してお呉れ。」

「畏まりました。」
「それから、葡萄酒も出す樣にね……、阿爺樣も靈樣も辛い方は可けないから。」
仲働女が仰を受けて退くと、薫が、
「姉樣の傍に誰も附いてないの？」
「え、筆が。」とせッせと指を動かす。
「然う？」と薫は點頭いて、「忙しいでせうねえ……臺所の方が。私、彼方へ行つてお手傳ひしようか知ら？」
「いゝえ、忙しいたツて別に……。」竹代は椅子を離れて、「まア、此方へ來らッしやいな。」
矢張り編物を持ちながら前に立つて、薫を廣い客間へ導いた。十二疊許りの室で、床には墨繪の佛像を懸け、萍蓬花の生花は白く、疊は塵一つ止めず、明放した庭からは日に蒸さるゝ草木の香氣が入つて來る。
「だけれど、貴女全く顏色が惡いよ。もう、其樣な事は止したら可いでせう。」と薫は、客間に來るや否や云つた。「幾ら、働くのは人間の義務だと云つて、身體を惡くして働く事は無いでせう？」
「働くと云つても、此樣な事なんぞ。それに、怠慢る癖を付けちや際限が無いから。」
「貴女の樣に、然う働くのも際限が無いわ。」と笑ひながら、「此う云つたら、貴女はまた、働けるのは人間の幸福と仰有るか知らないけれど、何にも、編物の内職して、身體を惡く爲ないでも可いでせう……お止しなさいよ、もう。貴女まで病氣になッたら如何するの……？」
「おや、」竹代は急に面を上げて、耳を澄まし、「姉樣が起きたか知ら？」
「姉樣ぢやありませんよ。」薫も耳を澄まして、「彼でせう……？ 彼は竹の聲ぢやありませんか……、ほら、ねえ？」
「あゝ、」と竹代は點頭いて、また指を働かしながら、「だけれど、石丸樣は如何したらう？ 遲いことねえ、居ないのか知ら？ 堀田がまた、餘計なお饒舌して居るか知れないわ？」
「然うねえ、だけれど未だ……、」と云つたが、何を想出したか急に笑つた眼を瞬き、「竹代樣……！」
「なに……？」
「貴女知つてませう、彼の方を……？」
「誰……石丸樣？」
「知つてませう？」
「いゝえ。」
「知つてますよ。貴女は祕してるんだわ。だツて、石丸樣の方ぢや知つてましたもの。」
「あら、本當？」と竹代はさッ、と紅くなる。
「知つてませう？」と薫を視詰めてゐる。
「いゝえ。」と頭を掉つたが、「何處かで、何は見た樣だけど……靈樣の下宿か何處かで。だけど、全く知らない方よ。」
「然う？ でも可笑いわねえ。」
「何か、私の事を云つてて？」
「え、云つてましたよ……、あの、此樣な田舍に置くには、惜しい別嬪さんだツて。」
「あらいやだ、」とまた紅くなッて、「おほゝゝほ。」
「おほゝゝゝ。」と薫も笑つたが、「だけど、冗談は冗談として、本當に竹代樣を知つてるさうですよ、私、直接に聞いたんぢやないけど……。」
「然う？」とまた編物を始めながら、「一體何處の方なの？ 東京？」
「何でも……、名張とか……何とか、確か其樣な處の樣でしたよ。何國でせう？ 名張ツて、私聞いたこと無いわ。」
「名張……伊賀の名張か知ら？」と考へながら、「でも、東京に居る方でせう？」
「えゝ、東京に居るさうですよ。何でも、大學の病院に勤めるんだとか、勤める處だとか……

其樣なお話よ。」
「それが、如何して此地へ遊びに來らしッて？」
「如何してだか、何でも、喜連川の親戚に來て居るんですと……。だから、此地方へ來た便次に、貴宅へ寄つたのでせう……多分。」
「矢張り、運動仲間か知ら……、見た處は、其樣な性格でも無いけど。」
其處へ、仲働女が駈けて來て、
「竹代樣、彼の、昨夜のお醫師樣がお出でになりまして。」
「おや、然うかい。」竹代は起上つて、「ま、彼方の八疊へ、お通し。」
「はい、お通し申して置きました。」
「然う？　姉樣は如何だらう、未だお睡つてるか知ら？」と云つて、縁側へ出ようとしたが薫を振返つて、「貴女、失禮だけど、何卒彼方へ行らしッて下さいな。」
「あゝ。」と薫は點頭いたが、「竹代樣一寸。」と呼止めて、「貴女も、着物をお着更へなさいな。外見ない。」
「私？」と自分の服裝を見廻して、「私はこれで可いわ……」
「宜かありませんよ、貴女が其樣な服裝してちや、他の者が困るぢやありませんか。」
「だッて、此れ私の不斷着なんだか。」
「だから、不斷着でない、別の物を召したら可いでせう……、簞笥一つ抽きや、何樣な物でも有る癖に。」
「然う、」と竹代は苦笑として、「ぢや、まア姉樣を起してから。」
薫は客の座敷へ、竹代は姉の部屋へ行つて見た。
「おや、最う起きて居らしッて？」
「先刻からですよ、ねえ筆、」と雪江は、其處に跪いて居る女中に云つて、笑つた眼を妹に向け、「貴女方は、私を寐坊にして行つて了ふんだもの、本當に酷いよ。」
「然うぢや無いけれど、」竹代は眞面目で、「姉樣、お醫師樣が來ましたッて。」
「然う？　ぢや、彼方へ行くの？」
「いゝえ、此室で診て貰つたら可いでせう。而して、まア其の寢衣をお着更へなさいな……」
竹代の指圖で、女中は別の寢衣を出す。雪江は其れを着更へながら、
「何樣な人だい？　昨夜は全然夢の樣で、些とも覺えてないんだもの。」
「だッて、昨日、お寺から歸途に見ましたらう、ほら？」
「いゝえ、能か覺えてないよ。筆、何樣な男？」
「はい、眞にあの……、綺麗なお方でございますよ。」
「然うかい？　でも、それで醫學士だッて？」と床に入りながら、「其處から、其の鏡取つてお呉れな。」
竹代が其物と櫛とを取つて遣ると、雪江は顏を近く寫して、
「まア、何て云ふ頭髮だらう、解いて貰はうか知ら、」と云つて、額に皺を寄せてくい〳〵と摑く搔上げ、「可いわ、此品、其方へ遣つてお呉れな。」
雪江は横臥になッた。竹代は仲働女に爰に跪いて居る可き事を命じて、さて我が部屋へ着物を着更へに行つた。雪江は元よりであるが、女中共まで縱にか横にか絹絲の交つた物を不斷着にして、村の者が、贅飾す事を圓城寺樣の下婢が宿下りする樣だと譬に引く程の質素な家の中で、竹代ばかりは綿服の外不斷着に用ゐぬのである。勿論、此うなッたのは二三年前からのことで、それまでは頗普通の外見に心を奪られたのであるが、何處から如何感じたのか、卒に此う云ふ氣になッて以來は、誰が勸めても論しても其の勸を入れないのであつた。と云つて、何

か心中に不平な事があるとか、我が身を儚なんで此うした拗ね方でもするかと云ふに、更々其様な様子もない。何時見ても何處か愉快相で、人には情深く、而して慾も徳も忘れた樣に机にばかり對つて居る、でなければ餘念もなく編物を遣つて居る。

さて竹代は薫に勧められて、平常ならば肯く筈もないが、今日ばかりは不在の主人にも病中の姉にも代つて客に接しなければならぬと考へたのか、夫とも他に感じた事でもあるか、我が部屋へ來て、不斷着を、茶色の勝つた瀧縞の節絲の袷に着更へ、帶も繻珍と紅無友禪の腹合せの帶に締更へ、束髮の鬢も撫で、華簪も插し更へて靜に客の居る室へと出て行つた。

醫學士は病室に通つた後で、座敷には薫と、今暑い處を歩いて來た禮之助とが團扇を使つてゐる。挨拶が手輕に濟むと、

「雪江樣は臥て居りますか、其樣なに惡いんですか？」と禮之助は竹代に訊いた。

「いゝえ、其れ程ぢや無いけれど、何しろ疲れてるもんですからね、それに、急に暑くなッたもんだから……。あ、禮樣、過日は筆記を有難う。」

「いや。解りますか、僕の記いたのが？」

「え、解りますよ…、處々脱けてますけれど。」

而ると薫が、

「禮樣の事たもの、大概坐睡でも爲て飛ばしたんでせう、おほゝゝゝゝ。」

「姉樣、其樣な失敬な事ッてありますか。僕は、教場で坐睡した事なんかありません。」

「でも、此頃は屢く遣るぢやありませんか。」

「其ア、頭腦が惡いからでさ。頭腦が惡きや詮方が無いさ。」と眞面目に辯解したが、「姉樣、何卒冷水を一杯下さい。」

薫が起つて去つた。引交へて園丁兼書記の堀田が、薄い俳諧の雜誌を持つて入つて來た。

「先刻お話したのは此れですが、」と禮之助の前へ來て其雜誌を開いて見せる。

「はゝア、成程、是が君の句だね、若竹の撓る力や雀の子……。僕には好く解らんが、面白い樣だ。未だ有るね、えゝー、毛蟲化して蝶と成る日や青嵐、此奴は面白い、何うも餘程氣狀だ。毛蟲化して……。」

「何方が好いでせう？」堀田は滿面に嬉しさを見はして、「毛蟲の方が好いでせう？」

「無論此の方だね。」

「然うでせう、それを、駒尾樣は雀の子が優いと云ふんです、其の、撓る力と云ふのが面白いッて。」

「成程、然う云はれると此れも面白い、」と首を傾げた處へ、姉が水を持つて來て吳れたので、雜誌を其處に置いて、「併し、僕には解らん。」

「是は洒落たパイプだ。」と堀田は其處にある醫學士のパイプを把上げて、「藝妓に情婦が有るだけ、持物が洒落てるぢやありませんか…。」

「おや、彼の方其樣な方？」と薫が吃驚した顏をして禮之助に訊ねた。

竹代も同じ樣に眼を睜つた。

「然うですとも、樣子を見ても解るぢやありませんか、」と禮之助よりも速く堀田が答へた、「一寸意氣な處があッて…、品が有つて…。併し、肝心の醫術の方は未だ熟れてない樣ですね。」

「禮樣、彼の方は其樣な方なの？」と云ふと、禮之助が雜誌を讀んでゐる目を此方に向けたので、「藝妓に情婦なんか有るの…？」

「誰？　石丸ですか？　然うですかねえ。」とばかりで、また讀みはじめる。

「だッて、今堀田樣が…、」と今度は堀田に向いて、「貴方は、何うして其樣な事を知つてるの？」

「大概解りまさア。」と嘲る樣な顏をして、「故郷に許嫁の女がある相です、けれども、東京

に非常な奴が着いてるもんだから、郷里へ歸つて厭な細君を持たせられるよりはと云ふんで、それで、東京に愚圖愚圖してるんでさア。」

「然うかなア？」と禮之助は訝しさうに云つた。

「でなきや、如彼して愚圖愚圖してる理由が無いぢやありませんか、旣う、去年卒業した人が……。」

「いや、其れは違ふ、其は學校に居つて研究を續けたいからだ。」

「然うですか、ぢや、病院の助手になりたいんで、それで如彼してるんですか？」と云つたが、また變に笑つて、「でも、其の藝妓と深い關係が有るから、それで其樣な氣にも成ッたぢやありませんか、で無いものお貴方……。」

「堀田樣、」と竹代は口を出した、「貴方、何處で其れを聞いて來て？」

「いえ、今禮之助樣から聞いた許りですがね。」

とまた變に笑つた。

竹代も薫も解せない事に思つた。成程解せない事である。話した本人よりも、聽いた方が餘計に知つて居ると云ふ事は有る可き事でない。

雖然是は、禮之助の囊に堀田が術を通して見たまでのことで、當否孰にしても、傍から氣を揉む程の大事ではないのである。全體この堀田と云ふ男は、人の噂をするが好きな更り、何樣な詰らない話も面白く脚色する能がある……、豚の胃袋は人間の棄てた食滓を消化して人間の食へる美味い肉に變へる、丁度其れと同じことで、この男の耳に入つた談は、忽ち小說になッてこの男の口から出て來る。途中で禮之助の話した事と云つても、實に詰らぬ話で、種々と石丸の噂が出た中に――勿論其の噂は主に堀田の方から誘つたので――「時に、彼の人は未だ獨身でせうな？」と堀田が訊いた。「然う、故鄕に許嫁の女が居ると云ふ話だが。」「はゝア、ぢやア、其の許嫁を嫌つてますね、でなきや、卒業して獨身で居る筈がない……。附かない事を伺ふ樣だが、彼の人は酒は飮けますか？」「多量には飮かんが、一寸一寸遣る。」「其れぢや、隨分遊びませう？」「少しは遣るかな。」「男振は好し、融通は利くだらうし……、必然好過ますな。何處か知ら？ 無論藝妓でせうな？」「如何だか。」「必然、深くなッてる藝妓がありませう？ 何處です、下谷ですか？」「誰だか、其樣な話もあッた樣だ……。」「有りましたか、それだ、其れに違ひ無い、何うも私も然う思つたよ、昨夜見た時直ぐ、この學士は、是ア只の鼠ぢや無いと……。」「鼠と云ふのは？」「鼠ですか、やア、此れは貴方には解らなかッた……。」

と云つた樣な談話であッた。それを何時の間にか堀田が此う云ふ筋に作して、此う云ふ風に二女を吃驚させたのである。

「私等には、其樣な人に見えないけれど。」と薫が半信半疑の顏をすると、

「見えない事もありませんさ、樣子だッて、言葉付だッて……？」堀田は飽までも自分の小說を云ひ通す。

「禮樣、本當ですか。」と竹代は膝を前める。

「え、何が？」と雜誌に見入つて居た禮之助は面を上げて、「何です？」

この時、金盥を持つた仲働女の、忙し相に其處の緣側を通つて行くのを見ると、竹代は吃驚して、

「おや、筆、お前姉樣へ附いてないの？」

「いゝえ、只今お洗水を……。」

「何だねえ、彼れ程云つて置いたぢやないか。」

と竹代は顏を變へて起上る。

「如何して？」薫も、竹代の尋常事ならぬ樣子に吃驚して同じく起上つた。

「ま、疾く彼方へ行つてお居でよ。其樣な物は私が持つて行くよ。」常に無き慳貪に云つて、仲働女から水の盛つてゐる金盥を取つた。

「如何も濟みません。」と赧くなつて謝罪る。

「其樣なことは可いから、ま、疾くお行でツてば！」と逐ふ樣に云つて、「先刻から、彼方へ行つてたのか知ら？」

「如何したの、え、竹代さん…？」

「まア…。」

「如何なすツて？　筆が如何かして？」

「いゝえ。」と頭を掉つて、「だツて、姉樣の處に、誰も附いてないんだもの。」

「誰も？　だツて、今迄筆が…。」

竹代は深く溜息を吐いたが、暫く首を捻つて、さて其の金盥を持つて姉の部屋へ行つたが、丁度其處から出て來た石丸醫學士と出逢した。竹代は縁側に坐つて、水を前に置くと、

「や、是は失禮です。」と學士は手を洗つて、竹代の出した手拭を取つた時、偶と二人の手は觸つた。

竹代ははツと感つて我が手を引込ませたが、醫學士の手の觸感だけは溫かに遺つた。で、何か挨拶を爲ようとする間もなく、學士は彼方に行つて了つた。

「筆、其の上敷は干して置いてお吳れ。」と云ひながら、部屋を出て來たのは姉の雪江で、「竹代樣、それ御覽、最う何處も何ともありませんと…。」

「然う？」

「だから私ア、起きて居ても可いツて云つたぢやないかね、それを、强情を張つてさ。」と姉は莞爾して、「私の方が勝つたらう？」

「然うねえ。」

「本當に、貴女には酷い目に遭はされたよ。」と雪江はまた笑つたが、「如何したの？　其樣に惘然して…。」

「姉樣。」

「何…？　厭だよ竹代樣は、私の顏ばかし覗詰めてさ。如何したの？」

「姉樣、」と竹代は起上つて、「彼の方何樣なお話したの？」

「お醫師さん？　何樣なツて、種々な事を訊いたよ。だけれど、齡の若いにしちや感心な人ねえ。」

「然う、何樣して？」

「親切でさ…。それに、學問だツて中々確りして居る樣だよ。全く優いんだよ、如何して、宇都宮邊の開業醫師とは全然違ふ…。」と云つたが、急に氣が着いて、「姉妹で此樣なお饒舌してても仕樣がない、竹代樣、彼方の方は可いの？」

「然うでしたねえ。」これも初めて氣が着いて、姉に別れて客の座敷へと出た。

それから、禮之助と堀田との案內で、學士は油繪と植物溫室を覽て、晝飯の饗應を受けて、再遊びに來る可き約束をして歸つたのである。

第七

馬車ならば、二輛も輪を並べて出入のなる可き廣い表門の扉は一杯に開かれながら、太い鐵鎖に往來を止めたれば、爰から一目に見通される玄關まで、凡そ三十間許りの間に人影一つ無く、定木でも平した樣な小砂利に陽炎がきら〳〵と燃えて、何處からか桐の花が香うて來る。

今しも此の表門の耳門から入つて、建仁寺垣に沿うて中の口の方へ行く男がある。ネルの單衣に雙子の羽織、メリヤスの股引に、紺足袋麻裏草履の扮裝、スコッチの鳥打帽を冠つて、何處かに油斷のない目の配り、商人とも見えず、勿論百姓ではない。齡は四十以上で、肩幅のがツしりと脊の高い男である。

而ると、其處に臥て居た洋犬は、むくりと躍起きるや否や、咬付くばかりに吠出した。

「洋犬、こーれ、」一人の下男が駈けて來て犬を

逐ひながら、「これ、退けえよ、こーれ、洋犬、何するだアよ、こーれ。」

犬は家の人が出たので、ます〳〵猛り立つて躍掛らんとする。けれども其の男は格別怖れもしないで進寄つた。丁度内から例の堀田が黄色い顔を出したので、

「圓城寺様は御在宅ですか、私は宇都宮から參りましたが、」と云ひながら懐中から書狀を出して、「一寸御目に掛りたいのですが。」

「然うですか、」と堀田は横柄に答へて、多分また無心に來た流浪書生であらう、くらゐに考へながら其書狀の裏書を見ると、主人と懇意である宇都宮警察署長鷲田某の名なので、「一寸お待ちなすッて。」

奥へ駈け入つて、それから庭下駄を穿いて前庭の池の方に進んだ。

植込の間を縫うて、葉卷莨の煙が燻ずる。日蔭を遮る青葉の美しく傘の張つた芝生の上に、白毛布を被けた籐の寝椅子を据ゑ、主人の常雄は新聞を讀んで居る。三十前後の年輩、肥滿と云ふ程では無いが肉置豊かに、肌は艶やかに、樹影の映つた顔は鮮かに白く、脣などは紅でも點したかと思はるゝ樣である、鼻下には濃からぬ八字髭を生し、切長の目に度の弱い近眼鏡を懸けてゐる。

「宇都宮から參つたさうですが、此を持つて參りまして、御面會が願ひ度いと申して居ります。」と堀田は恭しく手簡を出して云ふ。

常雄は新聞を看て居た眼を徐に其方に向けて、

「何と云ふ者か？」

「は、」と驚いたやうな眼をして一つ頭を垂げて、「名は申しませんが……、訊いて參りませう。」

常雄は新聞を肱掛に載せて、默つて其の手紙を取つて裏書を眺めて居たが、頓て怠さうな手態をして封筒を裂いた。衣服は鼠色のセルの單物に黒魚子の羽織、帶は白縮緬をぐる〳〵と太く卷いて居る。

「此の男は何處に居る？」と常雄は手簡を讀終ると云つた。

「は、」と堀田は、風で足元に飛落ちた新聞を拾つて、「内玄關に待つて居ります。」

「前の客間へ通して置け。」

「は。」

「それから、駒尾に一寸來るやうに。」

「畏まりました。」

堀田が靜に退くと、また新聞を取上げて、今まで讀んでゐた處を搜して、さて肱掛に載せ置いた葉卷を一口喫つて見たが、脂が上つてるので其のまゝ手任せに放つた。而ると其れが岸の石の上をころ〳〵と轉げて、池の中へ落ちるといちうと消えた。

「待つて居らしたでせう。生憎とお湯が微温いもんだから。」と云ひながら、珈琲の盆を持つた雪江は良人の傍に歩寄つた。

「……また責任か、」と新聞のことを獨語しながら身を起して、「喧ましいなア、如何して日本人は此う狹量だらう？」

「何ですの？」と雪江は笑顔を作つて云つたが、良人の帶の解けかゝッてるのを直して、其身も其處の椅子に腰を掛ける。

「いや、大學でさ。今回ペスト菌の鼠が出た處がね、責を引いて院長に辭職爲ろと云ふ話だ。」と云つて顔を上げて珈琲茶碗を取つたが、其まゝ雪江の面を凝然と視詰めた。

今珈琲を煮に行つた間に、雪江は衣服を着更へて來てゐる。素肌に瀧縞のネルの單物、帶は黒繻子と友仙の腹合せを引掛けに結んで、從來見たことの無い意氣な風をして、良人に視詰められるのを體裁わる相に面を赧め、

「此樣な風、可笑いでせう？」と莞爾笑ふ。

「いや、可笑い事は無いさ。」常雄も何とはなしに莞爾する。
「ミルクが多過ぎまして？」と一口飲んで見て、また莞爾する。
「いや、丁度好い。」
二人は少時默つて居たが、
「貴方、ペストが東京へ來ましたッて？」
「大學で鼠が捕れたさうだ。」
「鼠が？ 鼠が捕れりや如何するでせう？」
「院長の辭職と云ふ位だから、隨分騷いでるだらう。」
「然う。鼠が捕れれば、何らして辭職しなきや可けないんでせう？」
「馬鹿氣た談さ。」
「本當に馬鹿らしいわ。」
「今夜あたり如何だらう、」と常雄は眼を瞬いて、「石丸に來て貰つて、ペストの談でも聽かうか？」
「然うですねえ、ですけれど、彼の方、今日あたり立つたかも知れませんよ。昨日、竹代樣へ小説を返して、急に東京へ歸る事になッたから、皆樣へ宜しくッて、確か手紙を遣したさうですもの、多分立つたでせうよ。」
「然うか、私には、此の夏まで遊んで居る樣に話したが。」
「では多分、今度の其の騷で、それで急に歸る事になッたんでせう・・・。」
と夫婦の話して居る處へ、執事の駒尾が急足で遣つて來て、
「お召になッたさうでございますな、丁度、畑へ指圖に出て居りましたので、」と其のひよろ長い體軀でぎくりと會釋をしたが、その又聲と來ては、宛然屋根の上に居る人へ話でもする樣な馬鹿高い聲なのである。
常雄は微笑を含んで、例の寛々とした語調で、
「いや、其樣な大した用ぢや無いがな・・・。」
「は、何樣な御用で？」と凹んだ眼を急しく瞬きする。
「まア、其處へお掛け。」
「はッ。」
雪江は手早く其の腰掛の上の物を除けて、
「駒尾樣、お掛けなさいな。」
「はッ、や、何うも恐入ります。」とまたお叩頭をしてから腰を卸すと、
「それ、眼鏡が落ちましたよ。」と雪江は注意する。
「や、此れは、」と老人は少し慌てて、其の懷中眼鏡を拾上げようとすると、脹らんだ懷から、今度は淺黄の手拭と、鼻紙とがばた〳〵と續いて落ちる。
「おほゝゝ。」と雪江は吹出して、袂で其の口を抑へた。
常雄も同じく笑出すところを、流石はぐッと耐へたので、眼の邊を微し紅くしたばかり、然あらぬ體で其の用事と云ふのを話出した。二三日前、豫て懇意にして居る、毎年缺かさずに年賀に遣つて來るのと、此の地方へ巡廻に來る度每御馳走になッて行く位の懇意であるが――其の懇意にして居る宇都宮警察署長の鷲田へ、我が不在中に起つた彼の油繪盜難の一條を、公然と屆出しはせぬが、自分に取りては金に換へ難き大切の品である故、再び我が手へ戻る樣骨を折つて貰へまいか、と依頼の狀を出したのである。而ると、此の狀持參の某と云ふは、當警察部内に敏腕の稱ある刑事巡查である故、萬事は此の者へ御相談下され度しと云ふ意味の紹介狀を携へて、今しも一人の男が客間に通つて待つて居るのである。
「然う云ふ事情だから、お前其の男に會うてな、熟く、前後の事情を話して遣るが可い。」
「は、承知致しました・・・、がその、前後の事情と申しますると・・・？」

「いや、何か……、探偵の手懸りになる事を訊くだらうから、……其事情を、お前の知つてる限り、熟く悉しく話して遣るが可い。」
「は、承知致しました。」
「それからな、若し、西洋室を見たいと云ふなら、何處でも構はん、先導して見せて遣るが可い。」
「は、それぢや、」と老人は起上つて、「兎も角會つて參ります。」
「鳥渡、駒尾様！」
老人の背後から急に呼止めたのは、今まで二人の談話を聞いて居た雪江である。
「は、」立止つた老人は、「何か御用で？」
それには答へもせず、雪江は常華の顔を視詰めて居たが、
「貴方、それでは、探偵をお呼びなさいましたて？」と云つたが、其の顔色には今までの色も失せて、何うやら息も喘んでゐるのである。
「いや、呼んだ譯ぢやないが、今も話した樣な事情で……」常華は斯う云つたが、夫人の尋常事ならぬ樣子に急に言を斷つた。
「え……？」と眼を据ゑて云つて、其の後を促すのである。
「實は、お前にも話さうと思つて居つたが、如彼いふ物は其の、他の物と違うて、捜索して貰うたら直ぐ知れるだらうし……、丁度、鷲田へ用も有つたから……、えー、それで、出るか如何かは分らんが、一つまア、探偵して貰はうと思うてな、それで、頼んで見たんだが……、なに、一應探してそれで出なけりや、其れまでの話さ。」
と云つたが、何處か舌が重く聞えた。
「左樣でございますか、」と雪江は冷かな語調で云つて、考へる樣に俯向いたが、直ぐまた面を上げて、「彼の繪の事なら、もう過日、届けない事にお決めなすッたぢやありませんか。」
「屆は出さんが、併し、出來る事なら失くし度ない繪なんでね……。」
「左樣でございますか……。」
「如何致しませう？」と老人は主人夫婦を見較べて、「彼方でも待つてませうが。」
「あ、お前は疾く會つて呉れんか。」
「畏まりました、それでは。」と老人は駈出す。
「あ、鳥渡待つて下さい！」と雪江は再び呼止めたが、其の聲は老人の耳に入らなかッた。
「何故？　可いぢやないかな、」常華は一段と有情い聲で、「刑事巡査が來たところで、此方がお探偵されるのぢやない……、此方が呼んで、此方が探偵させるのだ、些しも氣に構ふ事なんぞ無い。」
「ですけれど、」と聲を震はして、「貴方……？」
「何だ、如何したんだ？　ねえ、雪江、」と常華は額に皺を寄せて、「此樣な下らん事を、如何したんだ？」
「貴方……、彼の油繪は、それ程大切な繪なんですか？」と云ふや否や、涙がはら〳〵と零れる。
常華は呆れて暫時は口も利き得なかつたが、忽ち面白からぬ顔をして、じろりと雪江を見下して、兩肱を肱掛に凭せて、淋し相に其の眼を芝生の上に移したが、さて、獨語でもする樣な徐々した語調で、
「如何云ふ意で其樣な事を云ふのか、お前の然う云ふ意味は解らんけれど……、或は、油繪一枚失くなッた位で、探偵を呼ぶなどいふ騷は爲んでも宜からう……と云ふので、それで、其樣な不快な意を起したか知らんが……、併しねえ、此處はお前にも考へて貰はんと困るんだが、お前達の目からは、繪具と布さへ有れば、繪と云ふ物は何時でも描ける、また、何樣な物でも繪になる……と見えるだらうが、決して然う云ふものぢや無いよ、製作の興が出なければ、たとひ草の葉一つでも、木の枝一本でも面白く

は描けんものだよ……。」
「それは、以前から伺つて存じて居ります。」
「其れを知つて居るなら、今改めて、大切の繪かなど訊かんでも可いぢやないか……。」と云つて、態と笑聲になり、「萬金を費して購めた物ばかりが貴い物ぢやない、美術家から云はしたら、所有る財產を抛つても、自分の意に適つた繪だけは保存して置きたい、と云ふかも知らん、或は……、生命を棄てても保存して置きたいものかも知らん、彼のそら、血達磨の狂言……、お前も知つてませう、彼は、忠義の爲に一命を棄てたのぢやね、けれど、畫工から云はしたら、未だ……。」
と、常雄の言の切れぬに、雪江は屹然と面を上げて、
「貴方、其れ程貴方は、彼の繪が大切ですか、それでは、若し……若し私が破つたと致したら、貴方は如何なさいます？」
「お前が破つたら？」と常雄は眼を睜つたが、
「可笑な事を云ふぢやないか。」
「私が破つたら、私を罪人として、警察へお渡しなさるでせう。」と云つて、涙の眼で凝然と良人を視詰めて居る。
「困るねえ、其樣な頑是の無い事を云ッちや。お前が破つたとは何の事だ。私は只だ、出來るものなら自分の手に戻したい……と云ふに過ぎんぢやないか。」
「彼樣な者の裸體畫なんぞ、」と雪江は泣聲で云つた、「あ、貴方は、貴方は祕して居らッしやるけど、私は、悉な存じて居ります、何も彼も悉な……。」
常雄は此の一言に驚かされて、さッと顏色まで變つたが、其の脣を嚴と結んで、泣崩折れて居る雪江の頭から睨めて居た。雪江の方は只だ泣くばかりで、ものも言ひ得なければ面も上げ得ぬのである。
日脚に伴れて樹影は東に滑り、芝生の上には楓の若葉を斜に洩る日光が綛を散らし、珈琲茶碗や匙は燦々と輝いてるが、何時の間にか蠅が群つて居る。
途切途切に暖かな風が吹き通るのであるが、其の度毎に柔な葉と葉の相摩れる音が、快い夏の囁語を聞かせるのである。裏庭との境に、小十間許りの間を、棕櫚樹が列を正して植ゑられてあるが、孰も崩るゝ許りに花穗を着けて居る。その棕櫚の間を透して、彼方に白いペンキ塗の、硝子屋根の光々するのが植物溫室で、時々締の無い大きな笑聲の聞えるのは、其處の畑に働いてる下男共と、茶摘女等との間に交はされる露骨の情事談の喝采である。
常雄は久く厭な顏をして髭を捻つて居たが、頓て椅子を離れて、雪江には言も掛けず、徐に築山を後に下りく、竹林の彼方に姿を隱して了つた。雪江は泣いてる面を起して其の背後を眺めたが、別に呼止めようともしなかッた。久く良人の凭て居た椅子に打臥して、身動きもしずに居たが、併し最う泣いてるのでは無かッた、妬ましい小福と良人との間を、末は如何なる事かと案じ詰めて居るのであッた。
爰へ駈けて來たのは、例の顏色の黃色い堀田であるが、靜と雪江の傍へ寄ると先づ腰を屈めて、
「奧樣、旦那樣は何方へお出でございませう？」と駈けて來る程の急ぎの用にしては、如何にも低聲で云ふのである。
「何處だか知らないよ、彼方へ行らしッたやうだよ。」雪江はつゝッ伏したまゝで答へる。
「左樣でございますか、はてな、何處へ行らしたか知ら？　座敷か知ら……、それとも奧庭か知ら……？」と獨語の樣に云ひながら、雪江の樣子の常ならぬを、扨も不思議な樣を見るもの哉、とでも云ふ顏をして、其邊を見廻して居た

が、「奧樣、奧樣は御存じなさりはしませんですか、私は、確かＥＴと記して有つた樣記憶して居りますが、如何でしたらう、彼の裸體畫の、旦那樣の御姓名でございます。」

「其樣な事を私が知るもんかね。」と短氣に云ふ。

「左樣…ですか、」と云つて、眼を尖らかしたが、また怖々に、「奧樣、如何かなさいましたか、何處か御氣分でもお惡いので…？」

「可いから、まア、何卒彼方へ行つててお呉れ。」

「左樣ですか。」と云つたが、大切の主人の機嫌を損じたと思つたものか、元來血の氣の乏しい顏を最ど眞蒼にして立竦んだ。而して如何云ふものか、一寸肩を縮めて、口を曲げて變に笑つた。

で、足音を竊んで怖々に後退をして、二三間も離れると、

「何處へお出でなすツたらうな？　駒尾樣、直接に聽いて呉れりや可いのになア。」と雪江に聞える樣な獨語をして、奧庭の方へと歩を移す、と、

「堀田、一寸。」

「は。」背後を振返ると、雪江は眼を紅くして此方を見て居る。

「あの、先刻の人は未だ居るの…宇都宮から來た刑事巡査？」

「は、未だ居ります。」

「ぢや、直ぐ歸してお呉れ、何も探偵なんぞして貰ふ事はないから…。駒尾樣に然う云つて、直ぐ歸してお呉れ。汚らはしい。」

「は、」と解せぬ顏をして、「では、油繪を盜まれました事は…。」

「可いから然う云つてお呉れ、」雪江は慳貪に云つた、「彼樣な繪が何だ！　彼樣な物は、無くなツたツて何うしたツて構やしない、汚らはしい、直ぐ歸してお呉れ。」

「は、承知しました。」とお叩頭して彼方へ驅戻つた。

雪江は其跡を眺めて、久く氣難かしい顏をして、何事か考へて居た。偶と竹代の室からオルガンの音が聞える。此の四五日はこの優しい音樂も耳にしたかツたので、今日に限つて如何したのだらう、何か氣の騷ぐ事でもあツて、氣晴しに彈づるのではなからうか、と思つて、此處からは樹蔭になツてる見えない彼方へ耳を傾けて居る、と、何時の間にか其の音に心が引込まれて、つい聽惚れて了ふ。

雪江はほツと息を洩して、

「あゝ、私と云へば、此樣な事で修羅を燃すなんて…。此れよか、獨身で居た方が何樣なに好いだらう、あゝ、竹代樣は羨ましい！」

其から、庭を廻つて徐に其の音のする方に歩を轉した。大きな讓葉の根方に來て見ると、其處の二階の、北向の小窓の障子が一枚開いて、結立の桃割の小娘の後姿が、肉色のネルの單物を着た肩から上を見はして居る。

「おや、民ちやん！」と雪江は聲を懸けた。

けれども、二階ではオルガンに聽惚れてるらしく、此方へは見向きもしない。そこで雪江は小石を拾つて、其の窓を的に投げて見た。二度目のが窓際の壁板にかちりと當つて、其の小娘の小さい顏がくるりと振向いたが、

「あら、」と云つて、綺麗な齒を見はして莞爾と遣つて、「今日は。」とお叩頭をする、と其の顏が窓の下に見えなくなる。

而ると、今度は小さな毬栗頭がひよツくり出て、

「やア、雪江樣！」

「秀樣もお來でなの？」と笑つて見せると、

「雪江樣、僕其方へ行かうか？」と元氣好く叫ぶ。

オルガンの音がぱツたり止んで、續いて竹代

の顔も並んだ。
「皆様で何してるの？」と云つて首を傾げて、
「私も其處へ行つて可い？」
「えゝ、來らッしやいな。」と竹代が點頭く。
「雪江樣、僕ねえ、明日遠足するよ。」と秀吉は急に附かぬ事を叫んだ。
　それから雪江は緣側に廻つて梯子を登つた。
「雪江樣、明日ね、僕に洋犬貸してお呉れ、」と叫びながら、紺絣の單物に同じ筒袖の羽織を着た秀吉が、梯子の口まで出迎へて、雪江の手を曳張る樣にして、「ね、可いだらう、貸してお呉れよ、遠足に伴れてくから、よ、雪江樣。」
「あゝ、伴れてらッしやいとも。」
「宜うし、本當？　明日一日だよ‥‥、眞岡へ行くんだもの‥‥。」
「今日は、久く御無沙汰致しました。」とお民は改めて雪江の足元へお叩頭をする。
「今日は。」と雪江も腰を卸して、「好くお來でだこと、本當に久くねえ。もうお蠶の方は濟んで？」
「はア。いゝえ、未だ忙しいんですけど、餘り御無沙汰してるもんですから。」
　爰は長四疊で、次の八疊の取次の樣になッて居る。窓の下に寄せて綺麗に拭込んだオルガンが据ゑられ、其の廻りには花緞子で包んだ床几と、黑塗の椅子が一脚。それから壁には精圓形の姿見鏡、畫工の使ふ樣な羽箒、裁縫用の燒鏝、頭に紐を通した護謨人形などが吊下つてる。オルガンと反對の片隅には、不斷着を入れるらしい重箪笥、眞鍮の金具の燦々する用箪笥、如何したのか此品ばかりは獨り眼に着く金蒔繪の古い針差箱などが重なッてる。
　長四疊は此の通り種々な物を列立ててあるが、八疊は廣く片附いて、段通を敷詰めた片隅の、緣側の障子に向けて一閑張の机とメリンスの座蒲團が出て居る許りで、この外には違棚の上下に一杯に積んだ和洋綴種々の書籍と、床の間に懸けてある石版畫の磔刑の耶蘇と、其の下の紫檀の文臺に立ててある竹の寫眞插に塡められた婦人の寫眞――撮つてから餘程歲月が經つたので、最う色が褪めて、全體に朦朧しては居るが白襟紋付の禮服で、頭髮は丸髷、年は四十位、二皮眼の、雪江姉妹に其のまゝの美しい鼻を有つて居るので、誰が見ても先づ二人の母と見る可き、品の好い婦人の立姿であるが――その寫眞と、寫眞の前に白百合の半ば開きかけたのを生けた一輪插‥‥位が出て居るばかりで、實に綺麗に片附いた座敷である。
「姉さま、これをね、」と竹代は蒔繪の八寸重を雪江の前に出して、「民ちやんが持つて來て呉れましてよ。」
「然う、何‥‥？」と重の中を覗いて、「お柏餅‥‥、まア甘味さうだこと、民ちやん、毎度有難う！」
「いゝえ、此樣な物は食るか食らないか知らないけれど‥‥。」
「いゝえ、」雪江は一つを摘んで見て、「葉が新しいから、好い香だこと。」
　それから茶を取寄せて、姉妹とお民と三人で――秀吉は何時か家外へ出て行つたので――三人で八疊の緣側近くに坐つて、養蠶の事から談が始まッて、織物の事、編物の事、女子大學に裁縫科が有る事、改良服には髮の結風と履物を改良するでなければ何樣な妙案も行はれぬと、某文學者が演說した相だが、之は至極道理であると云ふ事、お民の髮は大變美く出來た事、矢張り娘の中は此れが一番に似合ふ、改良も惡くは無いが、先走りしては可けない‥‥、などと其れからそれと取留めなく談が轉つたが、
「私なら、似合はないでも關はないから、皆な改良服にしたいけれど‥‥」とお民は熟々思込んだ樣に云ふ。

雪江は之を可笑な事に思つて、若し突飛に其様な事を爲たなら、人も笑ふだらうし、第一早速にお嫁に貰ふ人も無からうと云ふと、お民は中々眞面目で、善い事を行て人に笑はれるなら笑はれても構はない、人に笑はれるのが怖い様では、善い行が出來ませんと、竹代の口眞似やら、自身で考へて居るのやら、齢に似合はぬ事を云つて、

「而して、私はあの、お嫁になんか行かないんだから。」

「おや、では貴女も、獨身の組なの？」と雪江は笑ふ。

「私は然う思つてますの、だツて、幾らも然う云ふ例があるんですもの。」

「おや、獨身で教師にでも成らうと云ふんだね……、矢張り竹代様に感化れたんだよ……」と云つたが、笑つてた後から忽ち淋しい思案顔をして、「然うねえ、出來るもんなら、其の方が氣樂だらうけれど……」

而ると竹代は姉の顔を凝詰めた。雪江は猶も考へてゐたが、

「だけれど、婦女の道を守つて……、人の妻なる事と成ツて、それで、樂しく生活す事は、到底出來ないものか知ら？」と云つたが、「ねえ竹代様、其様な道理は無いだらう……、夫を有つと云ふ事だツて、人間の道に外れた事ぢやあるまいし、ねえ？」

「然うですとも、當然ぢやありませんか、有つ可き者を有たなかツたり、世間を遁れて彼の……隱君子の様な、人間の盡す可き義務を遁れたり、自分一己を潔くすると云ふ事こそ、道に外れた卑怯な事ですわ……。」と竹代は熱心に説出した。それは耳新しい事でも無ければ、別に興味の有る事でも無いが、雪江は常になく耳を澄して聽入つて居る。お民は元より、我が佛と崇めてる人の云ふ事であるから、一も二もなく感服し切つて、一言も聽洩すまいと氣を込めて居る。

「然うだねえ、辛いの悲しいのと云ふのも、詰りは、義務を遁れようと云ふ、我儘から起る事なんだわねえ。」と考に沈んで居た雪江は、靜に面を揚げて云つた。

竹代は今しもお民に對つて、女が獨身で通すと云ふ考への間違つて居る事、今後は忘れても其様な事を口へ出すものでない、と云ふ様な事を説いて居た處であるが、姉の唐突に此う云つたのに驚いて、其の顔を眺めて居たが、頓て姉の胸中を何う察したのか、直ちに其言に贊同をして、義務を完行する樂しい理由を説出した。

人は感情を恣まにする事を快樂の極と妄想して居る、けれども感情を恣まにすれば親友も放れる、世間も敵になる、自分の事業は破れる、健康は衰へる……と云ふ結果に終る、快樂どころか反つて苦痛の悲境に沈淪する事になる、然れば眞正の快樂は何處に在るかと云ふに、只だ此の感情を抑制して行く間にのみ生るゝのである、理性の目を眩まして、暴力を振はんとして居る此の感情を抑へると云ふ事は實に尊い事である。百萬の敵を破る英雄も多く此の心の敵には敗を取つたのである、若し我々が、此の心の敵に勝つことが出來れば、英雄ですら能はなかツた事を遣り遂げるので、其功業は實に稱讃に値するものである、之をこそ理想の快樂とも、幸福とも云ふ可きものである……と説出した。勿論是は、竹代自身の心から出た説では無く、學校に居る時に、生徒等の深く敬服して居る某教師から聽いたのだと云ふが。

お民は元より、雪江も餘所見一つしずに聽いて居たが、其の聽いてる間に、今迄の淋しい顔の色に、次第に活々とした、雜念の無い、平常の華かな顔色に變つて行くのだツた。

さて姉が平常の顔に復ると、竹代は益々元氣

に嬉しくなッて、談話は他の事に轉るのだッたが、雪江は僞と調戯ふ樣な調子で、何故お嫁に行かないのか、とお民に訊ねた。

「だッて、阿母樣が種々な事云ふんですもの。」

とお民は體裁惡さうに云ふ。

「如何云ふの？　獨身の方が可いッて？」

「然うぢや無いけど、あの、私が何かしますと、一々あの、其樣な態で誰がお嫁に貰ふもんか、て叱るんですの、ですから私、其樣な難ケ敷いお嫁なら、獨身で居た方が餘程可いと思つてますの……。」

「然う？　それで民ちやんは、お嫁に行かないと極めたの？」

「えゝ。」

「おほゝゝゝ。」

と雪江が笑出すと、竹代も同じく笑つた。

お民は面を赧くしたが、

「だッて、私の阿母樣、本當に口喧しいんですもの、」と體裁惡さうに云つた、「今朝も、彼の……、石丸樣の來た時、彼の人の居る前で種々な事を云ふんですの……。」

而ると竹代は、

「あら、石丸樣は未だ立たないの？」

「然うでせうよ。」

今度は雪江が、

「民ちやんの阿母さん、何處か不快いの？」

「いゝえ、何處も不快か無いけど……。」と、お民は石丸醫學士を招んだ事情を話した。

その話に據ると、お民の兄が何處で聞いて來たのか、石丸は漸く昨年校門を出たばかりの新醫學士であるが、醫術も中々優れた腕で、同輩間にも秀才の評判ある男である。母には現在病氣と云ふものも無いが、此る田舍になんぞ來ることの無い名醫の來たのを幸ひに、健康診察をして貰ふが可いと云ふので、進まぬ母に無理に勸めて、今朝石丸を招んだ次第である。

お民が此樣な話をして居る處へ、急しく二階に登つて來たのは仲働女の筆である。

「おや、此方にお居で遊ばしましたか、」と雪江を見ると膝を突いて、「奥樣、何卒一寸……。」

「何だい？」と美しい額が其方を向くと、

「あの、旦那樣が……。」と何うやら口籠る。

「然う……、呼んで居らッしやるの？」と氣輕に起上る。

「いゝえ、お呼びぢやございませんけれど、」と仲働女も同じく起上つて、雪江の傍に來て低聲になり、「あの、旦那樣は、何方へかお出ましになる相でございますよ。」

「おや、然う？」と仲働女と共に梯子を降りながら、「何處へ……、散歩をなさるところぢやないの？」

「いゝえ、」と容易ならぬ目色をして示せて、「何ですか、お洋服に御召更なりまして、平樣に、支度をしろと仰有いまして。」

「腕車で……？　まア、何處へ行らッしやるんだらう？」と眼を圓くしたが、其の間に顔色が變つて來た。

「何方へ行らッしやるんでございますか……。」

「何處？　此方のお部屋？」

「旦那樣でございますか、いゝえ、只今洋館にお居でございます。」

「然う。」と雪江は點頭いたが、仲働女と別れて、廊下を西洋室へと急いで行つた。

扉を開けようとして、偶と我が姿を見廻して、一寸衣紋を直したが、さて靜に室内へ入つた。

彼方の壁際に据付けた欅の卓子の、荷皺の付いた新着らしい英字新聞、繪畫雜誌、それから紙剪ナイフが枝折の樣に插まれた小說、葉卷莨の吹殼の横はッてる銀の灰皿、麻の手巾、その手巾の下から半分出て居る黄金光する捻出鉛筆などの載つてるのに片肱を凭けて、何か考へに沈んで居たらしい顔を揚げて、此方を振向いた

のは良人の常雄である。
成程仲働女の云ふ通り、合着の背廣に外套を被り、鍔廣のパナマ帽さへ冠つて、今にも外へ出ようとするばかりの支度である。
「貴方、何方へか行らッしやるのでございます。」と雪江は徐に夫へ、歩寄つて云つた。
常雄は無表情な顔をして、
「うん、一寸宇都宮へ行つて来る。」
「左様でございますか、」と卓子に両手を掛けて凝然と常雄の面を視詰めて、「何か、急に御用でも出来たんでございますか？」
「用が有るから行くんだよ。」と顔は壁に懸けた油畫の方を睨めて居る。
「左様でございますか、」と云ふや否や、雪江ははら／＼涙を零した。
常雄は暫時壁の方を睨めてゐたが、
「未た支度が出来んのかな、」と怒つた様な聲で云つたが、椅子を離れて其處に装置けてある呼鈴を押して、室の中を彼方此方と歩きながら、「何時まで、何を愚図愚図してるんだらう？」
雪江は額を抑へて居た手巾を退つて、
「貴方、先刻は、飛んだ失禮を申上げまして済みませんでした、」と又眼を拭つて、「何卒、御勘辨遊ばして下さいまし。」

扉が徐と開いて、仲働女が顔を出すと、
「腕車は如何したんだ？」
「は、お支度はお宜しうございます。」
「筆、」と雪江は震聲で云つた、「腕車の支度なんぞ、要らないよ。」
「はツ。」仲働女は主人夫婦の顔をきよろ／＼と見廻すのみである。
「可いから、お前は彼方へお出で！」と叱る様に婢を追ひ遣つて、「貴方、若しや、先刻の事をお腹立なすツて居らッしやるんぢや無いんでせうか……。若し、然うでございますなら、何卒御勘辨なすツて下さいまし。」
常雄はじろ／＼と妻を見てゐたが、
「其様な事は無いよ。」と不機嫌に答へて、直に扉を開けようとした。
雪江は駈寄つて、
「貴方、まア待つて下さいまし、」と涙ながらも、無理に外套の袖を捉へて、「若し、私の申した事がお意に済まないなら、何様にもお詫致しますから……、まア此方へ来らして下さいまし。」
常雄は袖を曳かるゝまゝ、椅子に凭りは凭つたが、
「其様な事を云つたところで、用が有つたら出るぢやないか。」
「だツて、貴方は、爰の家の戸主で居らッしやるぢやありませんか……、私が御意に召さないなら、貴方がお出にならないでも、私の方が出なきやなりません、貴方は何卒、家に居らして下さいまし。」
「そんな亂暴な事があるもんか、」と常雄は再椅子を離れて、「出なきやならん用が有ると云ふのに、それでも止せと云ふのかい？」
「然う云ふ譯ぢやありませんけれど、用が有ると云つて、然う急に御用の有る筈はありませんし……、」と云つてる間、常雄は扉を開けようとするので、「貴方、まア何卒然うなさらないで……。」
「離さないか。」
「いゝえ、貴方を出しては濟みません……。それ程まで一緒に居るのがお厭なら、私の方から出ます……、私が出ますから、貴方は、爰に居らしツて下さいまし……。」と雪江は無理に夫を室内に押留めて、自分が扉の外へ出た。
而して衣服を着更へるでも無く、其のまゝ腕車を走らせて、本家の庄左衛門方へ、相談に行つたのである。
夫婦となツて前後三年、内外の者にも睦し過ぎるとまで笑はれた程の間に、突然此う云ふ事

が突發したので、誰れも彼も目を見合はせるばかりであッた。就中竹代の驚愕と云ふものは、其は實に一通りでなかッた。

第八

その翌日のことで。

昨夜夜中から降出した雨も、正午前にはからり霽れて、ちぎれ〳〵に飛んで居た雲も山の彼方に姿を沒め、初夏の日光が急に暑く照付けるのである。地上は片脇から乾き始め、草木は雨後の柔かな葉を微風に顫はせて居る。

本家の圓城寺では、今朝の雨を幸ひに下男共總出で胡麻莚をして居るが、母屋續きの、厩脇の下男部屋で、直ぐ軒先に溜つてる眞黑な溝から、噎せる樣な臭氣がぷん〳〵入つて來るのも平氣で、何處か身體に仔細の有りさうな、透通る樣な蒼膨れた顏の、最う可い齡の老爺が、それでもきりりと向鉢巻などをして、怠さうな手態で草鞋を作つて居る。

「爺やさん、はゝア、今日は草鞋作りだね、ぢやア、些たア快いと見えるね。」

「やア、此は堀田樣かね、お出でなされませ」と胡坐を組いたまゝで一寸お點頭して、「何だかね、奧樣のお迎に御來つただかね？」

「ふん、まア其樣な物さ、」と變に莞爾と遣つたが、「如何だね、過日の藥は？　顏色なら大變快いぢやないか。」

「はえ、有難う。お前樣のお蔭で、今日ら大きに快えでがんすよ、この通り、草鞋でも作るべえ氣になッたゞアからね。」

「然うか、實は私も氣にして居たが、好い鹽梅だッたね。食事は何うだね…？　未だ平常の樣には行くまい？」

「矢張り可げましねえ。何日まで此樣な事ぢや成らねえ思つて、私、意地張つて遣つて見るだけんど、何ぢよにも彼ぢよにも、咽喉穴三寸通らねえだ。」

「然う無理に食ッちや反つて惡いよ。まア、氣を揉まないで療治することさ、其の中にア、自然と食事も進む樣になるよ。」

「然うだッぺえねえ。まア、お前樣此處へお懸けなさらねえかね。」

老爺が其處に散かッてる藁屑を掃いて呉れたので、堀田は笑ひながら徐と腰を懸けた。此の男は、今こそ他の家の園丁とまで零落れては居るものの、七八年前は東京に出て、去る私立の藥劑師を養成する學校に通つて居たとやらで、醫師と云つて只だ一人の漢法醫がある許りの此の村では、兩圓城寺家の下男共や、其邊の婆嚊達から、醫道の心得も有る人と噂される程で、風邪を感いたとか、腹痛とか云ふ場合は、先方から頼まれないでも、藥を調合して服ませて居るのであッた。

「だが爺やさん、」と堀田は紙巻煙草に燐寸を擢りながら、「昨夜、新家の奧樣が此家へ泊つたんで、皆なが種々な評判するだらうな、何う云ふ評判だね？」

「奧樣が泊つたでかね、去アればね、評判とッて、私聞か無えだけんど…。」

「ぢや、未だ誰も知らないんだね、昨日の一件を？」

「何だかね、昨日の一件云ふだと？」

「旦那と奧樣の喧嘩さ…、ぢやア、全く知らないんだね…。へゝえ、田舍の人は暢氣だねえ…。」

「何樣ねえ事有つただかね？」

「昨日は隱居樣が來る、今日はまた、朝ッぱらから旦那が馳付ける…、大騷ぢやないかね、爺やさん、お前達にア、あれが氣だ着かないんかね？」

「其れア知つてるだが、私、別に何うも思は無えもんだで。」

「何うして、喧嘩も喧嘩、開闢以來の大喧嘩さね、何ぼ養子であッても、細君たるものが、旦那に向つて出て行けと云ふ一件だらう…。」

「へえ、出て行けとね？」

「怖ろしい話さ、小糠三合て喩はあるが、華族樣の次男と生れて、洋行までした男がさ、何うだ、是ぢや少し侮辱され過ぎるぢやないか。」

「何だッて又、其樣ねえ大逸れた事云ひ出しただね、不斷なら、えら間好えだッてぢや無えかね…。矢張りはア、餘り間好え過ぎて、我儘出るだアね。」

「處で、其樣な些細な事ぢや無いんだ、此れには深い事情が有るんだよ。」

「何樣ねえ事情だね？」と老爺は膝を進めて、い、しよぼ〳〵した眼で凝然と堀田の顏を視詰めた。

「何樣なッて、」と堀田は得意相に莞爾して、「實はね、昨日の話さ…、」と急に言を斷り、「だけれど、爺やさん、此はお前さんだけの話だよ。」

「可えだとも、私、人に話して、三文の德無えだからね。」

「なアに、主人の耳に入るのが怖いんぢやないかね…、豊夫、圓城寺から放逐されりや、明日から糊口に困ると云ふ私でも無いからね…」

「大きにね。」

「自分の口から此う云ッちや可笑いが、私も是で、獨立して行けるだけの書は讀んだ者だからね…。それに、若し明日にも圓城寺の家を出たとなると、家へ來て居たまへと云ふ友達だッて、五人や十人あるからね…。だから、今の主人のお拂箱なんか怖か無いが、でも煩いからね、私の口から洩れたとなるとさ。」

「然うだともね。」

「だから、本當の事此の場限りの話だよ、可いかね…。」と低聲に力を籠めて云つて、氣遣はし相に四邊を見廻した。

時しも此の廐の前を、犬と共に母家の方へ驅拔けようとした少年の秀吉は、偶と堀田の姿を見付けて、

「堀田、君も雪江樣の迎に來たんかい？」

「やア、坊ちやんですか、」と堀田は笑ひながら少年の肩を叩き、「如何です、貴方も一處に遊びに行きませう。」

「いやだ、僕ア、石丸樣と釣魚に行くんだもの…、御飯食べると。」

「然うですか。新家の池でもね、大きな鮒が付きますよ、明日でも來らッしやい、釣つて進げますア。」

「本當？」と元氣好く云つたが、「譃だい、君は口ばかりだから可けないんだ。」

「貴方も口が惡いねえ、何日私が、坊ちやんへ譃を云ひました？」

「だッて、日外から鐵砲花火製へて呉れるッて、未だ製へて呉れないぢやないか。」

「あゝ、彼ですか、彼はね、製へて進げようと思つても、良い煙硝が無いんですよ。今度宇都宮へ行つたら、必然買つて來ますよ。」

「何時も彼樣な事を云つてら、」と少年は面白く無い顏をして彼方へ驅出さうとしたが、また背後を振向いて、「堀田、ジャックも連れてくんかい、雪江樣許りだらう？」

「然うですな、如何したら可いでせうな、坊ちやんが餘り酷い事を云ふから、ジャックも連れて行かうと思ふけれど。」と笑ひながら云ふと、

「だッて、此れア君のジャックぢや無いよ、新家の…、常華樣のジャックだよ。何だい、君は、新家の書生ぢやないか。君が連れてくたッて、僕ア雪江樣から借りるから可いや。」と憎々しく云ふや否や驅出した。

其處から中庭の垣の外を通り、洋犬の首鎖を柱に結着けて家へ入ると、彼方の庭に面した奥座敷に、嘗と雪江の後妻が見えたので、秀

吉は中の間、上の間を通抜けて、直ぐ雪江の傍へと駈寄つた。

雪江ばかりで無く、其の傍には腕組をした親父の理八郎も居る、床の間の前に胡坐を組いて祖父の庄左衛門も居る、襟の間へ顔を突込んで、深く考へに沈んでるらしい竹代も居る。

「雪江様、彼のね、」と傍へ寄つたが、孰も口を噤んで、常ならぬ顔をして居るので、子供心にも容易ならぬ事と思つたらしく、瞬く一座を見廻した。

雪江は自分の傍へ來た秀吉の肩を撫でて、何か愛想を云はうとしたが、其面を竹代に振向けて、

「竹代様、其れで可いのだから、ま心配しないで、凝然として見て居て御覽よ。」

「だッて、然うなッた日には、一寸で濟む事も、大事に成ッて了ふぢやありませんか、」と竹代は怨めし相に姉を視て、「幾ら姉様が然う云つた處で、姉婿様として、其様なら家へ入れませうなんて、云ふ筈も無いんだし。」

「如何云ふか、其處は聽かない中解るもんですか…。」と云つて雪江は氣味惡く笑つて、「其様な氣に適つてる女なんだもの、大悦で家へ引込むかも知れませんよ、それに、彼女でも普通でない逆上かたなんだッて云ふから、何様なに嬉しがるか知れないわ。おほゝゝゝ。」

理八郎も竹代も言合はした様に眼を瞬つて、其の笑ふ雪江を眺めたが、庄左衛門のみは例の締のない聲で「うはゝゝゝゝ。」と笑つて、

「然うならッら、可笑えもんらろ…。らが、其の藝妓と一緒なッれれ、お前折合つて行げるから…？　悋氣は女の愼む處らが、二人の間の好え處見せられれ、温和しくして居られるから？」

「其の藝妓を家へ入れてから、悋氣なんかしないで、温和しくして居られるかですッて…？　其れは阿爺さん、私から進んで提出す位ですもの、温和しくするも爲ないも有りやしませんわ…、悋氣をする位なら、此様な事、最初から提出しはしませんよ。」

「然うか、其ぢや、お前ア日本一の貞女ら。あはゝゝゝ。」

「日本一ですッて、まア大變だこと。」と雪江はまた笑つた。

一座は又靜になッた。最前から人の顔ばかり見廻して居た秀吉は、この時雪江に近く顔を寄せて、

「雪江様、あのね、お家へ歸るならね、ジャックだけ貸して置いてお呉れね、ね？」

「え、ジャックですか？」

「えゝ、明日一日貸してお呉れね、ね、可いだらう？　だッて、遠足に伴れてくんだもの、ね、雪江様…？」

「秀吉、お前は彼方へ行つてお居で。」と今まで無言で居た理八郎が云つた。

「だッて、雪江様からジャックを借りるんだもの。」と不平な顔をする。

「あ、ジャックですか、何日までも貸して上げますよ。」と雪江が云ふと、

「本當？　本當に何日までも貸すかい、三日でも、十日でも、え？」

「えゝ、貸して上げますよ。」

「本當？　ぢや、一箇月でも…？　百日でも…？」

「えゝ、何日までも、秀様の飽きるまでよ。」と可愛い手を握つて、笑つた顔を頷いて見せる。

「僕の飽きるまで？　だッて、僕はジャックなんか飽きやしないんだよ、何日まで置いたッて…。ぢや、一年でも二年でも貸すんかい？」

「宜ござんすとも。」

「宜うし、ぢやア僕、首環へ然う書いッ了は

ア。僕の犬と書いッ了はア。可いだらう、それで…。」

「秀吉、煩いから彼方へ行つて居ろと云ふに。」と親父の理八郎は再叱つた。

「だッて、雪江様から借りたんだよ、ねえ雪江様、ねえ?」と雪江の點頭く顔を覗込んで、「宜うし、ぢや僕、首環を掛更へるんだよ、掛更へるんだよ、宜うし、掛更へるんだ。」

少年は勇んで家外へ駈出した。瞬時して理八郎は、其の思慮臭い眼を瞬いて、

「雪江様、私が再、然う云つて行く事は仔細の無い事だがね、貴女も、最う少し考へて見なきや可けませんぞ。」

「考へるッて、如何?」

「熟く考へてごらんなさい、常雄様の心になッて…。今迄人に秘して置いた女の事を、突唐に、家へ入れたが宜からうと勧められて、何う感じるか…?」

「私から出た願だと云つたら可いでせう。」

「然うは可かんよ。いくら貴女の願だと云つた處で、誰も言葉通りに解る筈はないんだ。常雄様の一番強く感ずる事は、女の事を、公然と私から問質ねかれたと云ふ、耻かしさだらうと思ふが、何うだね?」

「其れは、些とは體裁が悪いでせう…。だッて、今迄其様な者を匿つて置いた罰だから仕方がありませんわ…、自業自得だわ。」

「姉様、其様な事を云つても詮方がないぢやありませんか、それぢや、好んで事を荒立てると云ふもんですわ。」

「何も、荒立てる氣ぢや無いけれど、だッて仕方が無いわ。また、自分の好きな女を家へ入れる處だもの、彼の人だッて、其位の辛抱は當然ぢやないの。」

「然うばかり云つても可けないね。」と理八郎は獨語の様に云つた。

「可けないと云ふと…、何處が可けないんです?」

「いや、常雄様がね、此方の云ふ通り、其様なら早速家へ入れませうと云ふなら、其れは、些し位の恥辱を受けるのは當然だとも云へるが、豈夫常雄様として、其んな事を承諾す可き筈はない…。」

「ありませんとも。」と竹代も口を添へた、「彼の通り、萬事謹愼にして居る姉婿様ですもの、其様な馬鹿な事を承諾するもんですか。」

「謹愼ですッて、藝妓をお妾にして置く人が。飛だ謹愼も有つたもんだ。」と雪江は嘲つて、「だが、其様なことは如何でも関はないけれど、今更、家へ入れ無いと云つても困るぢやありませんか、然う云ふ氣に適つた女を外へ置いて、一寸一寸家を空けられた日には、外聞も悪いし、第一家の締が付きませんもの。」

「だッて、其様なに一寸一寸家を空けないぢやありませんか。」

「今迄は其様なでも無いけれど、此から以後、如何云ふ事になるんだか…」と辛に眼を大きくして妹を視、「それとも、お前様に保證が出來るのかい、其様な事が無いと云ふ…?」

竹代はさッと赧くなッて、

「保證なんて、其様な事は出來ないけれど…。」

「そら御覧なさい、何う云ふ變化が起るか、誰にも保證は出來ないでせう。」

「其は出來ないけれど、大概、人は性質で分るぢやありませんか…、私なら然う思ふわ、若し其様な、彼の藝妓を家へ入れて下さいなんて云つたら、もう必然、本家の人達まで心配をかけて濟まなかッた、以後は、断然彼様な者と關係を斷つから、何卒、過去の失行は宥して下さいッて、謝るに極つてるわ…。」

「其様な事を云つたら、私が承知しない…。それぢや、私が此様な事を言出した爲に、想

合つてる間を無理に裂いた事に當るんだもの。默つて居られないわ。」
すると、庄左衛門は又口を入れた。
「然うなッら、大變都合が好えぢや無えか、藝妓と手を切ッれ、お前許え大事にするから、最う、外へも出無え様に成ッだらうし、今度の様な喧嘩ア、最う爲たいたッれ爲え無く成るんだ。」
けれども雪江は眞面目切つた顏色で、
「いゝえ、其れぢや私が義理が立ちません、例ひ何様な事があッても、家へ入れて貰は無きや可けません……。」
「其様な事を云つても、姉婿様が入れ無きや仕方が無いでせう。」
「然う云ふ時は、私が行つて無理にも引張つて來ます。」
「まア、彼様な亂暴な事を云つて居らッしやるよ。」
「だッて、然うしないんぢや、私が濟まないもの。」
理八郎は默々として雪江の言ふ處を聽いて居たが、
「雪江様、私の云ふのも其處です、幾ら他で勸めるからと云つて、常雄様の承知しないのは分り切つてる……。」
「だッて、其れは分りませんよ……。」
「いゝや、然うぢや無い、」と雪江の言葉を遮り、「假ひ貴女の望だと云つても、常雄様は決して承知しません、其れは最う極り切つた談です、そこで、私が此の談を持つて行く……、貴女から賴まれたと云つて、可しかれ、而ると、常雄様として何うすれば可いのです、貴女へ謝罪つた上で、其の女と別れる外に道はない……。」
「何も、謝罪つて貰は無いでも宜ござんす。」と雪江は少し勃然として、「また、幾ら男でも、自分が濟まない事をしたと思ふなら、謝罪るのは當然ぢやありませんか。私は、決して謝罪つてなんぞ貰ひ度か無いけれど、でも、先方の、謝罪る事まで氣の毒がらないでも可いと思ひますよ。」
「貴女のやうに云つて了へば、花も實も無いけれど……。」
而ると竹代は、
「姉様、何故其様な事ばかし云ふんですよ、皆なして、此うやッて心配して下さるのは、姉婿様に不快な感をさせないで、穩かに治め度いからぢやありませんか、それだのに、肝心の姉様の方は、將來は何うなッても構は無い、虐めるだけ虐めて遣らうと云は無い許しなんだもの、それぢや姉様、誰に聞かしたッて、姉様の我儘としか聞えませんわ……。」
「可笑な事を云ふ人ねえ、外へ圍つて置いたお妾を、家へ入れて下さいと云へば、其れが虐めるて云ふもんなの？」
「えゝ、虐めるとしか思へませんとも。だッて、熟せ姉婿様の承知しない事と分つてる癖に、其様な事を提出して、恥辱を被せて……。」
「おや、其れぢや竹代様、私は……、熟せ承知しないと分つて居ながら、心にも無い談を提出したと云ふのですねえ？　ぢやア、今度の事を好機に、本家の人達の手を假りて、彼の女と手を斷らせよう魂膽で、それで此様なことを提出したと云ふのねえ？　竹代様、それは貴女、餘り私を蔑視ると云ふもんですよ。」と云ふ雪江の眼を催涙んで、其の聲は微に震へた。
「あら、然うぢや無いんですよ、姉様の心が如何だと云ふのぢや無いけれど、詰り結果が、然うなるから、それで、姉婿様に恥辱を被せる許しだと云ふんぢやありませんか、姉様に魂膽が有るなんて、私、其様なこと思ひもしませんわ……、また、其様な事を云ひもしないし……。」と竹代も同じく催涙んで云ふ。

「雪江様、私の懸念する處も矢張り其所ですよ。要は、今其様な事を提出した處で、常雄様に恥辱を被せるに過ぎないから、その女を家へ入れようと、また手を斷らせようと、何方にしても、其れは他の口なんぞ假りないで、貴女から直接に……常雄様の機嫌の好い機を見て、貴女から直接に談した方が良策だと思ひますが、何うです。然うすれば、常雄様も辱かしい感を爲ないで濟む、從つて、この將來も圓滿く治まツて行かうと云ふものだ……、然うした方が可いぢやありませんか、其の方が貴女にも得なんですよ……、ね雪江様、私なら然う思ふが?」と理八郎は雪江に首を傾げて、低聲ながらしんみりとした調子で云つた。

雪江は俯向いて考へに沈んで居る。

「姉様、何卒然うして下さいよ、而して、何にも云はないで、私と一緒に家へ歸つて下さいよ、ね。彼の通り姉婿様も、昨日の事は私も惡かツたとまで仰有るんですもの、姉様も機嫌を復して歸つて下さい……、お願ひですから、ね、姉様。」

「其れでは、貴方がたは、些とも私の心は察して下さら無いのねえ。」と雪江は矢張り俯向きながら云つた。

「何うして、然うぢやありませんよ、姉様の事を思ふから、強ツて此様な事も云ふんぢやありませんか……。」

「でも、私の云ふ事は採用げちや呉れ無いんだもの」と怨めし相に理八郎を見上げたが、「宜ござんす、其れぢや、貴方がたの可い様にして下さい、私は最う、何にも知らないから。」と云ふや否やつい と座を起つて了つた。

「あら、姉様何處へ行らッしやるんですよ」と竹代は吃驚して、「ま、此處に居て下さいよ。」

雪江は答も無く、次の間の縁側から庭へ出て行くのである。庄左衛門も理八郎も、其の我儘な所爲に呆れたらしく、只だ其の背姿を眺めて居た。

「姉様、貴女、其様な短氣を起しちや困るぢやありませんか、」と竹代は同じく庭へ駈下りて、姉の袖を控へて云つた、「姉様、何が其様なに氣に障つたんです、え、私ばかしぢやありませんよ、本家の人達だツて、彼様なに心配して居るぢやありませんか、其様な我儘な事を爲すツて、仕舞には如何する心算ですよ、姉様、其様な我儘な事をなすツて、本家の人達が、最う關はないと云つたら如何なさるんですよ。」

「なに、厭な者なら、誰にも關つて貰はないでも可いんだよ……、」と云つたが、自分を視詰めてゐる妹の顏の着襟めて、眼には一杯の涙を湛へて居るのを見ると、雪江も急に悲しくなツたのか、「私には私の考へもあるから、まア放棄ツと置いてお呉れ、可いから、お前様に心配掛ける様な事は爲ないから……。」

「姉様、其様なに、何處までも我を通さないだツて可いぢやありませんか、よ。其様な事云つてる暇に、何卒私と一緒に家へ歸つて下さいよ、姉様、姉様てば。」

「竹代様も強情たよ、私だツて、圓城寺の家に生れた娘ぢや無いかね、然う何も彼も、良人の勝手に成ツて居たら宜からうけれど、然うは出來ませんよ。」と無理に竹代の手を引離した。

竹代は餘りの悲しさに繼ぐ可き言葉も出で ず、手巾を顏に被てたゞ突立つて泣いて居た。

雪江も妹の胸中を察して居ないではないが、胸の中が亂れに亂れて、何だか小舟に乘つて只だ一人、暗い沖へでも漕出した樣な、後からは有らゆる知つた程の人聲がして、自分を呼返さうとするけれど、振向きもしないで、意地になツて沖へ沖へと急いで行くが、其の心細さが何とも云へない樣な……、そんな寂しい心地で、的は無けれど、奥庭の樹の間を、足に任して進

入つたのである。

「ヤア、御散歩ですか。」

直ぐ頭の上で呼ぶ聲がしたので、振向くと其處の築山の摺鉢形した頂上に、日外の嵐に半吹飛ばされたまゝの古い屋根の四阿が在つて、其處の腰掛臺に、片隅の下つた卓子を隔てて對合つてるのは、從兄の禮之助と客の石丸達である。

「まア、」と雪江は頂上を眺めて、「貴方がたは、其處で何して居らツしやるの？」

而ると禮之助は例の眠足らない様な、食つた事の無い物を口へ入れた時の様な、惘然した様な、眞面目の様な、一種特有な不斷の顔を此方へ振向けて、

「何もして居ません。」と本色の愛想氣無く云ふ。

「まア此處へ來らツしやいませんか、大變好い景色ですよ。」と達は笑顔を作つて招くのである。

「然うですか。」と云ひながらも、竹で土留をした段々を登つて行く。

最う爰は奥庭の端で、薄い生垣の外には對岸まで四五町も有る利根の廣い流が、昨夜からの雨に水嵩増つて、渦を巻きながら流れて、對岸の青々とした小山が倒に映つて居る。

「本當に此所は、何時見しも、見飽きない景色ですのねえ。」と云ひながら、雪江は二人に離れて腰を卸すと、

「其の柱へ寄ツちや可けません、羽蟻が大變です。」と達が注意する。

「おや、」と吃驚起離れて、「まア、大變な羽蟻だこと！」

で、今度は達の傍へ行つて腰を卸すと、其れまで煙草ばかり味へて居た禮之助は、

「雪江様、貴女は未だ家へ歸らんですか？」

對岸を眺めて居た雪江は、其の眼を禮之助の顔に轉して、

「えゝ、未だ……。」と云つても從兄は默つて居るので、「何故……？ 可いでせう、歸らないでも……？ それとも、此うして居ちや可けないこと？」

「然うぢや無いが、私は只だ、直ぐ歸ると許り思つてましたから。」

「然う……。」と莞爾したが、「だツて、歸りたいにも歸り様が無いんですもの、常雄に放出されて了つたんですもの……。」

禮之助も達も等しく眼を瞬つた。雪江は又笑顔を作つて、

「また、學生にでも成らうと思つてるの……、如何でせう？」

「それぢや、家の事は如何するんです？」と禮之助は眞面目と云ふよりは、何處か怒つた様な調子で問反す。

「如何するツて、最う私の家ぢや無いのですもの……、自分の生れた家でも、良人の機嫌一つで、何日でも逐出されるんですもの、女ッて、何て云ふ詰らないもんでせう……。」と云つて凝然と考へて居たが、「三界に家無しと云ふが、全く其の通りなんですのねえ！」

禮之助は雪江をじろ／＼視て居るが、さて何とも云はずに紙巻莨ばかりを弄めて居る。達も何か云ひ相な面をしたが、他の家庭内の事に口を挿れるでも無いと思つてか、此も矢張り默り續けて居る。

久くして、禮之助は唐突に、

「それで、君の方は其れに決し給へ。」

「えッ？」雪江は吃驚して面を揚げると、

「然うさなア。」と達は笑つてゐる。

雪江は眞紅になッて、

「私の事ぢや無いのね？」

「え、私の事ですが、」と達は禮之助に代つて答へた、「郷里から、親戚の者が上京するから、

熟く相談をして、進退を決める、と云うて來たものですから。」

「あ、然うですか。」

「それで可いだらう、」と禮之助は又云つた。「僕の方なら、決して遠慮は要らんぞ。」

「有難う、ま、最う少し考へて見よう。」

「考へても可いけれど…、併し、多少疾患の有る身體で、此から暑くなるばかりの東京へ出るのは愚だよ。」

達は笑ひながら、

「この地方だツて、夏になツたら暑くなるだらう？」

「暑いには暑いが、併し傳染病なんざ出ん、」と禮之助は眞面目で云ふ、「夫に、酷暑の中でも、朝夕が凌ぎ宜いからな、其れは、東京とは違ふさ、ま、居つて驗して見い、非常に違ふ。」

「然うだらうね、この通り樹木は多いし、河の岸ではあるし、」と云つて、今度は手持不沙汰にして居る雪江に、「お宅も涼しいでせうなア。」

「はア、其樣なでも有りませんけれど、東京よりは幾らか…。」雪江の云ひ切らぬに、

「其代り、僕の家に居つても御馳走は無いぞ。」と禮之助は云つた。

「御馳走なんか爲れちや、氣の毒で居られはせん。」

「美味い物は東京へ歸つて食ふさ…、君は、料理屋でも藝妓でも知つて居る人だからな。」

「其樣な冗談を云ッちや可かんよ。」と達は微し顏を赧めた。

「でも、僕よりは知つてるさ、」と云つたが、「如何だ、君は腹が空かんか。最う正午だらう？」

禮之助が築山を下りるので、達も雪江も四阿を出て、互に前を讓つたが、結局女の方が前に下りて、

「今のお談の御樣子ですと、數日此地に居らツしやる樣に承はりましたが、左樣でございますか？」

「いえ、未だ決めた譯ぢやありませんが、」と云つて微笑を含んで、「御覽の通りの書生ですから、何處でもまア、置いて呉れる處へ轉込むですな。」

「結構でございますわねえ。」

「いや、更に結構な事はありませんよ、まア、此が性質でせうなア、詮方が有りません。何か、豪い希望でも抱いて居る人なら、例ひ性質であッても、此樣な事は撓正して行くのですが、私の樣な、希望も野心も斷つた者には、此れを撓正して行く氣力なんか有りません…。無效です、矢張り此れで、失敗の生涯を送るのでせう…。」と地上に眼を落しながら歩いて居たが、急に面を揚げて、「併し關ひません、失敗なんか更に悔いません。世間の笑ひ物になりませう、親しい者からも見離されませう、最う現に、親父なんかは對手にも爲て呉れませんからねえ、併し持つて生れた性質だから詮方ありません、また、此れを撓正して、自分の意志を押付けるでなければ、名譽とか富貴とか云ふ物が得られないと云ふなら、私は、其樣な物は欲しかありませんからねえ。」

「はア。」雪江は耳新しい事に思うて居る。

「丁度此の蟲ですな、」と達は目に着いた木の葉に着いて居る黒い羽蟲を指して、「此うして居る處は　葉を食ふのか露を吸ふのか知りませんが、—、此うやツて居る處は、全く安住して居る感ですな、而して、何處か此う、盛に發達しつゝある樣ですな…、然うでせう？」

「はア、然うですのねえ」曖昧に答へる。

「でせう…。處が、夜になツて燈火を見ると、此奴が、皆な飛んで來て火に投るでせう、如何云ふもんでせうな、凝然として此の葉な葉に着いて居たら宜さ相なものだが、飛んで來ます、可哀想だと思つて外へ投げて遣る、投げ

ても又飛んで來る、何故でせう？　蟲の性質です！」と云つて莞爾とやり、「飛んで火に投る夏の蟲……、思慮の無い者の例に引きますが、思慮ぢや無い、性質です。詰り、蟲の身體を組織して居る要素が、火と一致すべき性質を有つて居るのです、詰り此の性質が、蟲の羽翼を動かして火の中へ連れて來るのです。」

「然う云ふものですかねえ。」

「私も丁度此れですよ……私の精神を組織して居る要素に導かれて、此樣な我儘を爲らせるのです、他が見たら嘸可笑いでせう、飛んで火に投る夏の蟲の類でせう、併し、此が性質なんだから詮方がありません、」と云つて、何時までも無言で歩いてる禮之助に、「なア君、然うは思はんのか？」

「うーん、一理は有るやうだが、併し僕は服さん。」

「何故？　だツて、僕が此樣なに遙々君を訪ねて來たと云ふのも、詰り……。」

と云ふ時、禮之助は何の氣無しに背後を振返つたが、

「あ、彼處に竹代樣が居る。」

「え？」と雪江は道の談に聽惚れて居た面を揚げて、「あら、竹代樣……」

今しも三人が通つて來た松の樹の間に、何時から其處へ立つて居たのか、片手を帶へ突込んで、惘然と此方を眺めて居るのは竹代である。

「竹代樣、如何したの！」と雪江は呼んだ。

而ると、何うしたのか返事も無く、竹代はついと其の樹蔭に身を隱した。

「如何したんだらう、可笑な竹代樣。」と云つたが、雪江は厭な顏をした。

第九

一家親族の間で思慮に富んだ人と推さるゝ理八郎が諭しても、姉にも妹にも只だ一人の竹代が涙ながらに諫めても、何處までも今の間に取極めないでは一家の締が着かぬと云ふ事を楯に、雪江は遮二無二強情を張通して、到頭理八郎をして、彼の宇都宮の藝妓小福を家へ入るゝ一條を常華に申込ませたのであツた。

常華の答は何と云ふのであらう？　人々は皆思ひ思ひの想像をしたが、併し誰の想像も、養子の身として、此る事を許かれては、其女と縁を斷ると云ふ他に、返事の爲やうは有るまい、と云ふ事に一致して居た。ところが、豫期とは少しく違つて、自分の不品行と、此る事が本家の耳にまで入つた事を詫びて、孰れ熟考の上に確答を申上げたい、何卒暫く時間を與へて下されとの挨拶であッた。

人々は皆案外に思うた、併し、其の座で直ぐ、縁を斷るから恕して呉れと云ふも餘りに不見識であるから詮方なしに然う云ふので、熟考などと時を延して置く間に、彼方の女へ縁を斷る交渉を濟ます心算であるか知れぬ、と推測して居た。

雪江のみは其の返辭を焦燥しく思うて、自分の愛して居る女を家へ入れるのに、熟考など勿體振らないでも宜い筈である、と躍起になつて、理八郎などが「常華樣も如彼まで云ふのだから、貴女は兎も角も家へ歸つた方が宜からう、」と勸めても、此の一條の結着せぬ間に、家へ歸つた處で面白く無いから、と他の言を耳に入れぬのである。

然るに熟考の上にすると云ふ常華の其の返辭は、翌日になツても音沙汰が無い、雪江は俄に氣を揉み出して、理八郎に返辭を確めに行つて呉れと急立てた。併し其樣な事をしては、常華の感情を害ふ許りであると理八郎に諭されて、詮方無しに素直に待つ事とはしたが、如何も氣に懸つてならない。その間に日が暮れて夜が明け、また日が暮れてまた夜が明けて、空し

く時が經つばかりである。竹代は毎日缺かさず訪ねて來るが、雪江は妹の口から聽くばかりで飽足らぬか、二人の仲働女を交代に呼寄せて、良人が何を爲て居る、家の者へ何う云ふ言葉を掛けた、機嫌は如何であるか、何樣な客が有つて何樣な談話が交されたと、事細かに尋ねるのであツた。

竹代や仲働女のみで無い、何分大事の主人が家を出て居るのであるから、御匠の奥村、料理人のお松、お針のお種、園丁の堀田秋助――此の男は一番好く他の落度を拾つて來るのだが――此と、それから下男頭の團五郎、炊婦共までも、用の都合を見計つては、交代御機嫌伺ひに遣つて來る。而るに雪江は、何事も措いて先づ良人の事を訊ねる、訊ねられた者は器用不器用の舌を働かして、見ただけ聞いただけの事を最も細かに申上げる。で雪江は、良人の事となれば、今日は何の肴で飯を幾杯食つたかと云ふ事までも知悉して居る譯である。

待ちに待つて居る返辭は遂になツて、雪江が本家へ來てから最う六日目と云ふ日の暮方に、執事の駒尾卿之進が遣つて來た。雪江は元より、本家の人達も無論常盤からの返辭を持つて來たものに思つて、行きなり駒尾を取卷いて聽くと、其れは一時の據處ので、用事と云ふのは、嘗て金を融通してある足利の織物會社から、利子を拂ひ證券を書更へて、猶幾箇月かの借用を願ひ度い、と申込があるので、如何に答へて遣つて宜いのか、その指圖を伺ひに出たと云ふのである。

「何ですよ駒尾樣、其樣な事を……、」と雪江は、「其樣な事を私に訊いたツて、私が知るもんですかね。何處へ貸して有るか知りもしない者に、證券が何うの此うのツて……、家に旦那が居るぢやありませんか、旦那へ訊いたら可いでせう、其樣な事を。」

「は、旦那へ伺ひましたら、旦那は、奥樣へ伺へと仰有るものですから。」

「私へ聽けですツて……。」と雪江は顔色を變へたが、「其樣な事を云つて、私を困らせようと云ふんですね……其れぢやア、最う……旦那は、家の事は一切關はないと云ふんですね……」

「いゝえ、然う云ふ次第でもありませんが……。」

とばかりで、雪江の樣子の常ならぬのに呆れて、暫くは次ぐ可き言も出なかツた。

此の老人は、隨分主家を大事に勤めては居るが、それは眞の家政上に對してのみで、他の出來事、例へば主人の病氣だとか、親戚の慶弔、家庭内の爭論等には、至つて無頓着で、自分の膳の香物が刻まれて無い程にも氣に懸けないのである。これも老人の性質か、で無ければ、若い時から種々煩さい事に世話を焼いて來たので、其樣な事に關り合ふのは面倒臭いのか、夫とも、自分の負擔した事務が忙しくて、其處までは手を伸す暇がないと云ふのか、孰れにしても其樣な出來事には極めて冷淡である。で、今回の主人夫婦の仲違に就いても、他の者は己が受持の用を抛けて氣を揉んで居る間で、駒尾ばかりは一向平氣に構へて居たのであツた。と云ふのも、今日雪江に會ふまで、此の夫婦の仲違を、少しも重大視して居なかツたからでもあらう。

「其れでは駒尾樣、旦那が如何云ふんです？」

と雪江は久くしてから、漸と常の聲に復つて云ふ。

「如何と申して、別に、如何と仰有るのぢやございませんが、只だ單に、此の事は、奥樣に伺つて決めるが可い、と仰有るもんですから。」

「然うですか、其れだけですね、他には何にも云ひませんでしたね？」

「はい、別に如何とも……。」

「然うですか。」と雪江は點頭いた。
　それから其處に居る理八郎と駒尾との間に、農事に就いての談話が二つ三つ交はされるのだッたが、
「駒尾様。」と久くしてから、雪江は其の傾げて居た顏を向更へて、「その、今の證券と云ふのは、何でせうね、常雄の名宛に成ッてませうね？」
「は、其れは矢張り、旦那の名に成ッてます。」
「然うでせう、では、旦那の決める事で、私の知つた事ぢや無いでせう？」
「は、まア然うです…。」
「まア然うですッて？　それなら、」と雪江は膝を進めて、「それなら何故、私の所へ持つて來るんです？　何か、それだけの理由があるんでせう？」
　駒尾老人は眼をぱちくりして、
「えゝ、理由も何もありませんが、たゞ、旦那が持つて行けと仰有るものですからな…。」と云ひ切らぬに、
「だッて、只だ持つて行けと云はれたばかしで、譯も訊かないで持つて來る貴方でも無いでせう、何か其處にそれだけの理由が有る筈です、其れを話して下さい、私へ持つて來た理由を…？」
「奧様、貴女の様に仰有つては困りますよ、」と老人は嚇となッて、高い聲を一段高くし、「何も無い事を話せと仰有つても、何を話します、そんな無理な事を仰有つては困ります。」
「無理とは何方で云ふ事です、譯も知らない私に、そんな事を持つて來て…。」
「まア、雪江様、」と理八郎は從妹の口を止めて、「貴女の様に云つても可けませんよ、駒尾様は單、使者に來た許しぢやありませんか、駒尾様に食つて掛つた處が…。」
「ぢや、私は如何すりや可いんです？」と云ふや否や、はら〳〵と涙を落して、「私は今、家を出されて居る者ぢやありませんか、それを、貸金が如何だなんて…、調戲半分に其様な事を持つて來て…。」
「奧様、一寸待つて戴きませう、」と駒尾老人は例の高い語調で、「調戲半分たア何です？　私は、自分一己の了簡で參つたんぢや有りませんぞ、これでも、旦那の命令を受けたから參つたのです…。」
「まア〳〵駒尾様、貴方の云ふ事は能く解つてますから。」と慌てて理八郎は制する。
「調戲ふと云ふもんです、私は今、其様な…、其様な氣樂な身ぢや無いぢやありませんか、證券が如何の此うのッて、」と雪江はます〳〵泣きながら、「其れは、皆な掛つて、私を虐めると云ふもんです。」
「虐める、奧様、虐めるとは何う云ふ譯です？」
「まア〳〵、私に委せて下さい…。」
「虐めるのですとも、金も財産も、私は其様な事なんぞ…。」
「雪江様、貴女も如何したのです…。」
　理八郎が仲裁で漸と二人は鎭まつた。元より根も葉も無い爭ひなので、怒易い老人は心の解けるも又速く、年甲斐も無く大聲を揚げた事などを詫びて、歸る時には常の駒尾知之進に成ッて歸つたが、雪江の涙は中々止まなかつた。

＊　　＊　　＊　　＊

　日が暮れて久くして、森の様に繁つた庄左衛門の邸の木下闇を破つて、下り藤の定紋の手丸提燈が、二人の人の腰から下を照しながら出て來た。一人は黑い股引で、素足に藁草履を穿き、一人は白足袋に兩刳の駒下駄、鼻緒は繻珍か何か燈火の下にちら〳〵と見事に、着物は八丈か絲織かと思はれる裾を翻して、歩調優しく、凸凹ある田舍道を北の方を差して歩いて行く。

　空は霽れて星は蒔いた樣である。其處の樹の間此處の藪蔭から、百姓家の燈火の點々洩れて見えるが、物の音一つ響いて來るでもなく、路傍の小流と蛙の聲のみが、此のしツとりと夜氣に眠つてる田圃を支配してゐる。

　小半時も經つて、二人は小圓城寺の邸前の岡を登り掛けたが、藁草履が立止つて、

「やア、御覽なされませ、お月樣お出はりなさツただア。」

「大きいお月樣だこと……。今日は何日だらう？」

「十八日でござります。」

「いゝえ、舊暦でさ。」

「舊暦だツて十八日でござりまさア。」

　二人は、彼方の修行院の山續きの、疏らな松林の後から月の登るを眺めながら、表門の耳門から徐と入つた。

　玄關も中の口も締切つて、其處ばかりは戸を明けてあるのか、勝手口から燈影が長く彼方の木立の根まで走つて居る。

「傳八、一寸。」と奥樣が小聲で呼ぶと、

「何でございますかね。」と日向臭い顏を持つて來る。

「最ツと小さい聲でお云ひよ、」と奥樣は傳八を制して、さて其の日向臭い顏に口を寄せて何か言付けると、

「畏まりました、そんだら、奥樣は此處で待つてござらツしやれ。」

「他の者に氣取られ無い樣にね。」

「畏まりました。」と傳八は臺所の方へ行つた。

　奥樣は建仁寺垣に身を寄せて、暗い處に立つて居るのだツたが、何やら不意に後から來て裾に觸る物が有るので、吃驚して振向くと、鼻を鳴して躍着くのは蓄犬のジャックである。

「こら、ジャック、何をするのよ」と低聲で叱り付けても離れないので、踏む眞似をして威せば、その足に戯れ着くし、擲らうとすれば其手を嘗める。

　ところへ、臺所の方から日和下駄の音を忙しく、傳八と共に仲働女の筆が馳けて來て、

「まア、奥樣で居らツしやいますか。」と暗いので摸索しながら、先づ丁寧にお辭儀をする。

「筆、誰にも知れやしないかい？」

「はい、何誰も存じません。まア、お入り遊ばしまし。」

「入れたツて、然う從々入れやしないよ……、こら、ジャック、ま其方へお退きよ。」と猶も戯れ着く犬を追拂はうとする。

「これ、ジャック、何だよお前は……。」

「筆、最ツと靜にお仕よ、」と奥樣は、思はず高くした仲働女の聲を止めて、「本當に誰も知りはしないね、皆な何處に居るの？」

「大丈夫でございますよ、お松樣はお裁縫ですし、駒尾樣と堀田は碁を圍ツて居りますし、」云つたが、聲を殺して「ほゝゝ、」と笑つて、「奥樣、御覽遊ばせ、ジャックが此樣なに喜んで居ります、此樣なでも、能く解るんで御座いますよ。ジャック、其樣なにもお前は嬉しいかい……、うん、然うかい、然うかい。」

「筆、旦那樣は何方？」

「旦那樣は西洋館にお居で遊ばします。」

「お一人で……？　矢張り勉強して居らツしやるの？」

「はい、最う明るい中から、彼室に居らツしやいます……。」

「然う？　竹代樣は？」

「竹代樣も御勉强で居らツしやいます……。まア奥樣、然うして居らツしやらないで、家へお入り遊ばしたら宜しうございませう。」

「いゝえ、然うは可かないよ……。」と考へて居る。

「何故でございます？」

「然うは可かないんだよ、」と同じことを云つたが、「筆、おやアね、少し用が有るからね、彼の、竹代樣の室の、下の雨戸を徐と明けてお呉れな。」

「それでは、お庭からお入で遊ばしますか、畏まりました。」

仲働女は直に彼方へ引返したが、忽ち庭の木戸を明けて奥樣を內へ導いた。

さてそれから庭を通り、椽側に上つたが、雪江は其處から一人で暗い梯子を徐と登つて、洋燈の油煙臭い竹代の室へと入つた。

「竹代樣、御勉强？」と背後から聲を懸ける。

机の上に心を奪はれて居た竹代は、

「まア、姉樣、」と吃驚して、「如何なすツて？」

「少し持つてきた、物が有つてね、」と云ひながら妹の傍に近く坐つて、「何を勉强してるの？」

覗いて見ると、其れは和譯の新約全書であッた。竹代は開いて居た書を靜に閉ぢて、凝然と姉を見戍つたが、忽ち耐へ切れぬ情に襲はれたらしく、その眼は催涙んで、脣の邊は顫へて來る。雪江も、最初は默つて妹を視て居たが、其身も忽ち胸が一杯になツて、たわいもなく涙がほと〳〵と膝へ零れるのだッた。同胞の胸には今しも同じ思ひが、影のやうに射したのである。久くして、

「姉樣、最う何にも云はないから、私と一緒に姉婿樣の室へ行つて下さいな。」と竹代は思込んだ樣子で云つた。

雪江は返辭も無く悄然と俯向いて居る。

「ね、何卒一緒に行つて下さい、」と同じ事を云つて、「幾ら謝罪つた處で、自分の所天に謝罪るんですもの、恥辱でも何でも無いでせう。」

「だがねえ竹代樣……。」と溜息と共に云ふと、

「最う姉樣、何にも云は無いで下さい、私に委せて、一緒に行つて下さい。」と云ひながら、既う心に決めたらしく姉の手を提つて起たうとする。

「まア竹代樣、」と其手を徐に振離して、「今更、然うは可けないんだよ。」

「何故です。姉樣、何だッて我儘を通さうとばかしなさるんですよ。」

「ま、其樣なに泣いたッて仕樣がありませんよ、」と妹を慰めて、「私だッて、何も、我儘を通さうと云ふんぢや無いけどもね。」

「いゝえ、それは我儘を通すと云ふものです……、お妾を家に入れなきや、何故姉樣は家へ歸れ無いのです、爰は姉樣の家ぢやありませんか。眞實所天を愛して提出したことなら、何故姉婿樣の意任せにはして措かないで、何處までも家へ入れなきやならないなんて、其樣な、壓し付ける樣な事仰有るんです、我儘ぢやありませんか、我儘です、貴女だッて、良心に問いたら解るでせう……。」

「然う云はれると、私も我儘だッたけれどね……。」

「いゝえ、今回の事ばかりは姉樣の我儘です、假令、姉婿樣に落度が有つたとしても、それは、貴女の待遇け樣一つで、平穩に解決の出來る事なんです。今に成ツて、此樣な事を云つても仕樣が無いけど、彼の妾妓の事が氣に懸るなら、何故私へ有りのまゝに云つて下さらないんです、彼樣な、繪を裂いたりなんかして……、姉婿樣の機嫌の惡いのも、彼時からぢやありませんか……。」

雪江は一言も無く、心に染みて妹の言を聽いて居る。竹代は又も涙を拭つて、

「……妾を置かれたのが面白く無いなら、何故眞率に、止して下さいとは願は無いんです……？所天を愛する情に虛僞が無いなら、何樣な事でも云へない事は無いぢやありませんか……、假しそれが爲に、一時は機嫌を損くした所で、

此方で誠實に盡してした事なら、何時かは姉婿樣の心も解ける時が來るぢやありませんか……、それを……、姉樣のやうに拗ねて許り居なすッては、事柄は益々困難になる許しです。私は、私は其れを思ふと、此の末が如何なる事かと思つて……。」とまでは云つたが、竹代は聲も續け得なかッた。

雪江も、情理の備つた妹の言に動かされて、後悔の涙を禁め得なかッたが、併し、此の儘此所に留まる譯にも行かなかつた。孰れ明日は本家の理八郎を賴み、改めて此迄の不心得を謝して、夫から歸つて來る樣に手順を執らうと云ふ事を告げて、漸と妹を慰めた。それから、餘り更くなッては、村の内とは云ひながら女の身の歸途が心元ないと云ふので、密に泊つて呉れと勸めるけれど、其樣な事をして常[illegible]の眼に留まつても妙でない、下女下男共に見られても變なものである、などと云つて、強ひて此の二階を降りたのである。

二階を降りたが、何か自分の室から持つて行く物があるので、仲働女の筆を呼んで、他の者の知らぬ樣に徐と其室へ忍込んだ。爰を出て未だ幾日も經たぬけれども、何だか旅からでも歸つて來た樣な感がする。物は皆な自分の置いた處に其儘になッてあるが、疊む物は疊み、蓋をする物は蓋をして、きちんと片附いて居るが、其の片附いて居る處が一種淋しい感を起させる。

「おや、呼んで居らッしやるぢやないか？」と雪江は傍に附いてる仲働女を顧みて云つた。

西洋館から夫の鳴す呼鈴が響いたのである。

「お竹樣が參りませうから……。」

「其んな事を云はないで、お前行つておいでよ、あれ、又呼んで居らッしやるぢやないか。」

「では、一寸伺つて參ります。」と仲働女が急々と出て行く。

雪江は自分の用簞笥から、今しも何物かを取出さうとしたが、丁度筆が前の緣側を通るので、

「筆、何の御用……？」

「お茶を煎れて來いと仰有います。」

「然う？」と云つて、筆が茶の間の方へ行かうとすると、「筆。」

「はい？」

「私煎れて進げようか。」

「は、左樣でございますか。」

「内證でだよ、」と笑つて、「あの、鐵瓶を持つてお來でな、鐵瓶と旦那のお湯呑を。」

そこで仲働女は茶の間から命けられた物を運んで來る。雪江は自分の茶簞笥から茶道具を取出し、彼此する間に、豫てから心得て居る夫の喫加減の濃さに煎れて、

「塵の入らない樣に氣を注けてね。」と筆に持たして遣る。

筆が彼方へ行くと、雪江は久く其跡を見送つて居たが、如何思うたのか、徐と此の室から滑び出て、前後を見廻しながら、爪立てるやうにして西洋室の方へ歩を轉した。

而ると廊下で筆の此方へ來るに出逢つて、

「今、何をして居らッしやるの？」と低聲で訊く。

「御書を見て居らッしやいますよ。」

「然う？　何の御書を……？　お茶を喫りながらかい？」

「何の御書でございますか、横文字の御書でございますよ。」

「筆、お前ね、再室内へ入つて御覽な、何樣な事して居らッしやるか、私、扉の蔭から窺いて見て遣るから。」

「彼樣なお人のお惡い事を、」と筆は笑ひかけた口を押へて、「再入れと仰有つても、何も御用が無いんでございますもの……。」

「既う、今のお茶碗が空いた頃だから、彼を下

げに行つたら可いだらう、よ、筆、入つて御覽よ、お前の背後から覗いて遣るからさ。」

「左樣でございますか、」と筆は主命默し難く、また彼方へと引返した。

雪江も其跡に付いて、怖々に西洋室の方へ行つたが、忽ち目の前の扉が内からがちり開いて、燈影の迸ると共に、葉卷莨を銜へた大きな人影が黑く見はれた。

「奧樣、旦那樣が。」と筆は慌てる。

雪江も吃驚したが、幸ひ直ぐ脇の、古新聞や古雜誌など投り込んである物置の戸を、誰が閉め忘れたか半開に成ツて居るのを幸ひに、逑くもその内へ身を隱した。

廊下を踏む上靴の音が徐に近くなツて、

「御散歩でございますか？」

「うん、庭へ……、」と機嫌の好い聲で、「お前な、臥床を取つて置いて呉れ。」

「畏まりました。」

と云ふ間に、悠然とした足音は彼方へ通過ぎて、葉卷の快い香氣が煙と共に輕く漂ふ。雪江は戸の間から竊と顏を出して、其の後姿を見送ると、今しも反射鏡のぎら／＼する洋燈の下を、肩の圓い、太い腰に卷着けた兵古帶の端の下つた、裾の下から白い脛を露出した夫が、薄暗い彼方へ遠ざかり行く。

「見たか知ら？」雪江は物置を出るとほツと溜息を吐いた。

「いゝえ、御覽なさりアしません。」

「然うか知ら？」と既う居なくなツた跡を眺めて居る。

「また、御覽なすツてもお宜しいぢやございませんか。」仲働女は少し調戲ひかける調子で云ふ。

「いゝえ、見られたら大變よ、」と怖い顏をして見せたが、「お前、お床を取つて上げなきや可けまい。」

「左樣でございます、では失禮いたします。」と西洋室の方に行く。

「まア書齋の方は竹にでも掃除させて、お前はお床を設るが可いぢや無いかね。」

「それですから、此方へ……。」

「おや、ぢや今夜は此方へお寢なさるの？」

「いゝえ、今夜ばかしではございません、此の四五日、何時も此方へお寢でございますから。」

「此の四五日？」と吃驚して、「如何して？」

「如何爲さいましたか……、」と筆は奧樣の仰山なのが可笑く、「矢張し、奧樣が居らツしやらないからなんでございませう。」

「だツて、洋館の方は、疊も敷いて無いぢやないか。」

「は、でございますから、彼のお寢臺に。」

「おや、寢臺を出したの？　然う？」と點頭いたが、獨語の樣に、「私はまた、座敷へお寢と許し思つてたよ。」

所天の日々の所爲は悉皆聞いて居る筈なのに、寢臺を爰に轉した事ばかりはつい聞洩して居たのである。

さて雪江は、仲働女と共に常雄の書齋に入つたが、

「まア、酒臭い事、如何したんだらう？」と云ひながら、夫の卓子の傍に行つて見ると、果物の罐詰と共に盆に載つてあるのは、ウヰスキーの壜である、「筆、此頃は何時も是を飲るのかい？」

「はい、此頃は初終其の類を召上る樣でございます、今朝程も、一本の壜が悉り空になツてございました。」

「え、今朝もだツて、」と臥床の敷布を直して居る仲働女を振返り、「ぢやア、此れ何時口を取つたの？」

「何時でございますか？」奧樣の樣子を訝りながら、「何故でございます？」

一だッて、最う此樣なに無くなッてるぢやないか。」と云つたが、思はずも溜息を洩して、其處の椅子に腰を卸して、さて凝然と考へに沈んだ。

仲働女は其の樣を不思議相に、じろ〳〵と見るのだッた。さて、廣い室の內を六尺屛風で限隔り、寢臺を少し壁に寄せて、其眞中程に置かれてある。

「おや。」と雪江は椅子から躍離れた。

「何でございます。」

「旦那樣がお歸つて來たぢや無いか？」

「いゝえ、誰も參りは致しませんよ。」

「だッて、今足音が……。」と耳を澄して、「一寸、其處から見て御覽な。」

仲働女は命けられたまゝ扉を開けて見て、

「誰も參りは致しません。」と奥樣の傍へ來て云ふ。

「然う……。だけど、爰へ入つて來られちや大變だねえ……。」と云つて、雪江は夫の寢床へ立寄つたが、「筆、お前は其處へ立つてゝ、一寸看てお居でよ。」

「奥樣、大丈夫未だお歸りぢやございませんよ。」

「でも見てお居でよ、よ、筆や。」

「左樣でございますか。」と詮方なしに入口に立つて居る。

奥樣は、今しがた仲働女の敷いた許りの蒲團を直し、毛布と小搔卷を揃へ、丁寧に枕を置更へ、さてネルの寢衣を擴げて其襟を顔に當てて見たが、

「これ、何日洗つたの？」

「何でございます？」と仲働女は背後を振向く。

「この寢衣がさ。」と又鼻へ押着けて嗅ぐ。

「つい、この間洗濯した許しでございますよ。」

「然うかい、でも……。他の物と取換へてお上げな、汗ッ臭いぢやないか。」

「左樣でございますか、でも、此の間までお寢衣にして居らしたのなら、旦那樣がお召しなすツて居らツしやいますが。」

「ぢや、彼方の、別の物を出して上げよう。」

それから雪江は、仲働女を伴れて自分の座敷へ來て、簞笥から未だ水を潜らした事の無いネルの單物を出して渡した。筆は其れを心の中に可笑く思ひながらも、仰せらるゝまゝに主人の臥床に置いて、不用の器物など此方に下げて來て見ると、今まで此室に居た奥樣の姿が無い。最うお歸りになツたかと見れば、簞笥から出した物も其儘取散して、お歸りになツた樣子でも無い。別に伺ふ用が有るでも無いけれど、氣に懸るまゝ緣側へ出て見ると、先刻爰へ脱いだ庭下駄が二足とも無いのである。一足は旦那樣の、一足の方は奥樣の、さては竹代樣の處へでも穿いて行らしたのか、と眺むるとも無しに夜の庭に眼を遣れば、月は棕櫚樹の頭を高く離れて、薄靄の輕く棚引いた彼方に、池の水はきら〳〵と光を搖かして居るが、樹影は黑く闇を疊んで、折しも空を過ぐる鷺の聲が聞える。

仲働女は、此の夜景色を見て東京に居る親達の事でも思出したか、緣側に佇んだまゝ久く恍然として居たが、偶と築山の植込の間から、星のやうに紅い物の光るのに眼を瞬つた、が、其の光の忽ち消えると同時に、直樣それが、常雄の葉卷の火であると云ふことを覺つた。と見ると、その赤い星は築山を下りて、松の葉蔭をちら〳〵と過ぎると、體格の巨きな主人の影が、徐に池の橋を渡るのだツた。月は正面にその眼鏡に映り、莨の煙は白く横になぐれて、氣の故か香氣が爰まで飛んで來るのである。最う家へ入らるゝ處だらうと思はれたが、橋を半ば渡り掛けた常雄は、何に驚いたのやら、其所にひたと歩を止めて、此方の岸を屹と見て居る。と、

何時の間に其處へ行つたのか、それとも最前から其邊に隱れてでも居たのか、見紛ふ可くも無い雪江の後姿が、此方の滿天星の傍に、いさゝか面を背向けて起つて居るのである。

仲働女ははツと思つた。先刻まで人に見らるるのを避けて居た與樣の、何故彼樣な事を爲さるのであらう、何か感じた事でも有つて、是までの我儘を謝罪る意に成られたのか、と息を殺して主人二人の動作を窺つて居ると、屹然と衝立つたまゝの當雄と、俯向になツた此方の雪江と、互に石のやうに相對して居たが、頓て女は靜に腰を屈めて、怖れる物にでも近寄る樣に、二歩三歩寄つた……と見る瞬間に、男は疾くも身を反して、ついと築山の彼方に姿を隱して了つた。

雪江は危くも其處に倒れようとして、漸と樹の枝に摑まツて、さて、夫の見えなくなツた木蔭を凝然と眺めて立つて居た。

第十

やがて雪江は家を出たが、その出る時の樣子は、先刻竹代から說かれて、是までの我儘を悔いた時とは、全然人が變つた樣．昻奮した荒々しい氣持になツて居た。それを眼に留めた竹代は、再び受に泊る樣に勸めたが、雪江はろくに口も利かない位だツた。

だが雪江は、歩む脚にも力なく、時々思出した樣に溜息を吐くのだツた。供の男が何か話掛けても返辭一つ吳れなかツた、然うかと思へば、惘然途に立止つて、獨で首を捻つて居るのだツた。

夜は更けたと云ふ程でも無いが、月は空高く登つて、薄靄の懸つた村の內に、燈火の影一つ見えなかツた。

雪江が默つて居るので、供の下男も同じ樣に默り込んで、根から詰らな相に後に從いて、月明で不用になつた提燈を、右手に、左手に持更へたりして、丁度受から道の岐れる庚申塚まで來たが、大きく欠伸をして、

「高根澤も聞けただアね、此の夜更小更に、彼樣ねえ人通りあるだア。」と獨語の樣に云つた。

雪江は何も云はなかツた。成程桑畑を隔てて背後の方から、人聲が近付いて來る。村の者で有らうが、祕に我家へ歸つても、其所へは泊ることもならず、再本家へと戾つて行かねばならぬ此の樣を見て、何樣な噂を立てることであらう、出來るなら、他に顏を見せ度く無い、とも思つたが、生憎と月は晝の樣に明るいのだ。

「やア、金谷の嘉吉殿でねえか。」と下男は、次第に近くなる話聲を聽き澄して居たらしく、此方から聲を掛けた。

「誰だかね？」と彼方からも聲を掛ける。

「俺だよ。」

「おゝ、大圓城寺の傳八殿だね」

「何處え行ぐだ？」

「何處え行ぐもんで、此ん通り、お客樣送つて、お前等處まで行ぐだア。」

近くなるに從つて、其の客と云ふのは此の月上旬から滯在して居る、齡は若いが優い學問のあると云ふ醫學士の石丸達なので、傳八は腰を屈めて、

「これは、お歸りなされませ。」

達は輕く會釋したが、疾くも四五間前に行き過ぎた雪江に追附いて、

「何方へお出でした、今時分御散歩ですか？」

「は、彼の、一寸家まで。」

「あゝ、お宅まで、」とは云つたが、直ぐ雪江の樣子の平常と違つて居るのに氣が注いたらしく、「良い月ですなア。」

「はア、まことに良いお月で。」と如何やら物を言ふのも辛さうである。

達は自分に從いて來た供の男に、

「何うも御苦勞だッた、最う此所で可いからね、お前樣は家へ歸つてお呉れ。」
「はえ。」と首を擧げて、「私、大圓城寺まで送ら無えではなりまし無えですよ。」
「でも、此の通りお連があるからね、お前樣は家へ歸つて息んでお呉れよ。」
「それだッて、私、申付かッた事果さ無えでは、氣イ濟まねえだからね。」
「嘉吉殿、先生樣彼あ云はッしやるだ、爰で御免願つて、家さア歸ッたら宜かッぺい。」
「然うだかね、だけんど、其れでは濟まねえだから、私、矢張り大圓城寺の門まで從いて行ぐべえよ。」
「何アに、宜えだよ、汝が代り、己がお供しるだア。」
「然うかね、其樣だら傳八殿、お前等に賴むべえか。」
「宜えだとも、己が引受けるだア、速く歸つて、寢むが宜えだ。」
「そんだら先生樣、是で、御免の蒙りましだア。」
「や、御苦勞でした、何卒宜しく。」
「小圓城寺樣の奧樣、善う行らッしやいませ。」
「あ、叔母樣へ宜しくね。」と雪江は微に點頭いた。

金谷の下男は歸つて去つた。達が明日此の村を立つて喜連川に歸るので、此くと聞いた金谷の家では、過日母が診察して貰つたお禮を兼ねて、達と禮之助とを晩餐に招いだのであッた——禮之助は頭痛がする爲同行はしないが——。

さて、雪江も達も押默つて歩いて居る、後に從いてる下男は二人の後姿を眺めながら、優え人達は違つたもんだ、若え同士並んで歩えてで、談話一つなさらねえだ、是が村の者だと、惚れだの惚れられだのッて、直き姦通騷動でもおッ始めるだが、何と云つても、學問爲れば爲ただけのものあるだア、などと感心して歩いてる。

「良い月ですな。」と久くしてから達は天を見上げて、「空氣が澄んでる故か、何だか秋の樣ですね。私も、學生中は旅行好で、方々歩きましたが、夏の初めに此樣な冴えた月は記憶ありません。全く、空氣が良いからですなア。」

而ると雪江は、じろりと達の顏を覗上げて、直ぐ其の眼を足元に落して、
「左樣でございすかねえ。」と氣乘のしない調子で云ふ。

また久くして、
「過日、御當地へ來た日も、確か爰でお目に懸りましたねえ、」と達は急に笑聲になッて、「人の縁て、可笑なもんですねえ、明日立つと云ふ今夜、偶然また、御一緒になるなんて……、はゝゝゝ、不思議と云へば不思議にもなりますなア。」

雪江は一寸歩を止めて、
「あの、明日お歸りなんですか？」
「は、然うです。大變長く遊びましたから。」
「左樣でございますか。」と雪江は、まア何と云ふ急な事てせうと云ふ樣な語調である。併し、達が急に出立する事になッた譯は、今日庄左衞門の庭で、薰や禮之助と一緒に、雪江も聞いて居たのであるが、其時は執事の駒尾と言爭つた後なので、能く心に留まつて居なかッたのである。
「それでは、彼地から直ぐ、東京へお歸りでございますか？」
「左樣……、私は其の心算ですが、如何なりますか、喜連川へ行つて——喜連川には、私の母の兄が居るのですが——、之へ行つて、熟く相談をして見なければ、確とした事は決められませんが。」と云つて急に笑聲で、「何うも、四方八方から束縛されてる身體ですからなア。」

雪江は其れを聞いて居るのか居ないのか、俯

向きながら歩いて居たが、
「東京へお歸りになると、大學の病院へお勤めなんでございますか？」
「然うです、大に、實地研究を遣るつもりです。」
「結構でございますわねえ」と云つて、久く考へて、「私も、寧そ東京へでも出たいと思つてますけれど。」
「然うですか、御見物ですか。」
「いゝえ、矢張り、何か修業でもして見たいと存じまして。」
「修業…、何を御修業なさるのですか？」
「婦女の身で修業した處で、孰せ何にも成りませんけれど…。」
「其樣な事は無いでせう、併し、それは如何云ふ理由です。修業と云ふと、何う云ふ物を御研究なさるので…？」
「いゝえ、別に此れと云ふ課目なんかありませんの、只だ此うして居つても詰らないからなんですの。」
「詰らない？」と達は呆れたと云ふ語調で、「變ですねえ。此うして居らしても詰らないから、それで、修業なさらうと云ふんですか？」
「えゝ。」
「貴女が詰らないとしたら、この世の中で、何樣な者が詰る者です？」と達は笑ひながら、横から、雪江を覗いた。
けれども、雪江は、何を考へるのか、口を噤んだまゝ靜に歩を運んで居る。達も同じく歩調を合はせて居たが、
「冗談は冗談として、今朝、お宅へ暇乞に出まして、種々美術上のお話を承はりましたよ…、實に、優い方ですねえ御主人は。此樣な田舍へ引込んで居らッしやるなんて、惜いもんですなア。」
「然うですかねえ。」と口頭でばかり云ふ。
「私も、俗物の癖に繪は好きでしてねえ…、勿論見るのですよ、とても描けアしません…見るのが好きで、是迄も種々な繪を見ましたが、何うも、圓城寺樣の繪の樣な、あんな立派な…自然を摑んだ繪は見たことがありません、全く、天才と云ふんでせうなア、確か、春の展覽會でも、金牌をお取んなすッたんだとか承はりましたが、然うでしたな？」
「えゝ。」
「…また、それだけの賞を受ける資格があります、今日の美術界では、全く群を拔いてますからな、」と云つて、急に語調を變へて、「それから、此とも知らなかッたが…、大學にも、二年許り居らした事があるんですッてねえ…。」
「あの、石丸樣、」と雪江は卒に顏を揚げた。
「何です？」達は訝し相に、「何ですか？」
「貴方も彼の…、」と可笑さを耐へる樣な語調で、「何な相でございますねえ…、奧樣を、お嫌ひなすつて居らッしやるとか聞きましたが、譃ですわねえ？」
「譃ですとも。好きも嫌ひも、私は未だ獨身ですよ。」と達は笑つた。
「いゝえ、未だ御婚禮は成さらないでも、御鄕里には、ちやんと居らッしやると云ふぢやありませんか。」
「やア、其れですか。何うもとんだ事が露現して了ひましたなア」とまた笑つて、「誰です、禮之助君話しましたね？」
「え、禮樣から…。」と、如何したのか、雪江は不斷よりも輕い語調になッて、「ですけれど、嫌つて居らッしやるなんて、そんな事譃でございませう？」
「嫌ふ…、左樣、嫌ひと云へばまア嫌ひですかな、私は、更に結婚する氣なんぞ無いのですから。」
「何故でございませう？　一體、何樣な處がお

氣に召さ無いんでせう？」
「何樣な處と云つて、爰と指して云ふ事は出來ませんが、まア全體が厭ですなア。」
「お可哀想に。だツて、折角貴方を待つて居らツしやるぢやございませんか。」
「さア、如何云ふもんですか。」
「如何云ふものかツて、貴方、其れがお解りなりませんの？」
「解りませんなア。また、解つた處が仕樣の無い話ですよ、私から賴んだ理由ぢや無し、彼方の勝手で待つてるのですからなア。」
「まア、酷い事を仰有るんですのねえ！　貴方と御一緒になるお約束で、それで爾うやツて待つて居らツしやるんぢやありませんか？」
「けれども、其の約束は、私の結た約束ぢやありません。」
「それだツて貴方。」
「それでも、私の方が無理でせうか？」
「えゝ、御無理ですとも、」と半笑ひながら、「一體、男の方ツて云ふものは、皆な然うした物ですのねえ！」
「世間は何うですか、私としては、些か疚しい處はありませんよ。」
「ぢや貴方は、非常に貴方を念つて、それが爲に、生命を縮めるやうに惱んで居る女が有つても、知らん顏をなすツて、平氣で居らツしやいますのねえ？」
「私を懷つてる女が……？」
「えゝ、蔭ながら戀を捧げて居る女があるとしまして。」
達は久く無言で步いて居たが、
「私は、其樣な無情の者に見えますか？」
「然う云ふ譯ぢやございませんけれど、」と雪江は、對手に眞面目になられたので、慌てて言消したのである、「たゞ、例を引いて見たんですの……。」
達は如何にも思込んだ語調で、
「雪江樣、私だツて血も淚も有りますよ……、其樣な、利害だとか、生活だとかばかり、大事にして居る人間ぢやありませんよ……。」
「え、其れは仰有る迄も有りませんけれど……」と雪江は稍震聲で云つたが、「おや、傳八、門が締つてるよ、叩いてお呉れな。」
三人は最う庄左衞門の邸に着いたのである。

第十一

翌日、雪江の臥床を出たのは、最う十時過ぎであツた。昨夜は、歸ると直に枕に就いたのであるが、種々の事が胸中を往來して、眼が冴えて、下男達の畑地へ出る時分になツてから、漸と眠ついたのであつた。其の爲であらうが、顏には艷も消せて、冴えた眼も曇つて、誰が見ても一方ならぬ憂に沈んで居ると云ふことが解つた。薰は其れと氣注いて、何うして慰めて遣らうと氣を揉んだ。初めは他から物を云はるゝも煩さ相にして居た雪江も、何時かその親切に絆されて、昨夜我が家に歸つた一部始終を靜に打明けるのだツた、而して其れを話して居る間に、何うしたと云ふのか、雪江は、次第に元氣を恢復して、音聲も顏色も快活した常の雪江らしくなツて來た。だが其の打明けた事柄は、聽く者に執つて、息も詰まる樣な事柄なのであツた。薰は卽座に雪江の解釋を打消して、その庭の池を渡りかけて、辛に道を返した常雄の意は、決して外の意味があるのではない、暗い樹蔭であるから、見違へたのである、などと慰藉めて遣つた。ところが雪江の云ふには、最う惡意が有らうと無からうと、其樣な事には頓着しない、先方で會ひ度く無いと云ふなら、會つて貰はないでも差支はない、家へ入れ度くないならば、此方も入り度いとは云はぬ、可愛い妾が有る以上、女房は要らぬと云ふなら其れも宜

し、夫婦別居をするとならばそれも宜い、私は何方でも可いから、彼方でも根負けして、世間から笑はれぬ様にして貰ひ度い、と嘲笑ふのである。薫は、雪江の口から常雄を罵る言を聞いたのは初めてであるが、丁度其處へ――二女は座敷の縁先に居たので――、不意に枝折戸が明いて、竹の鞭を振廻しながら、達が入つて來た。

「好い天氣ですな、」と雪江の顔を見ながら歩寄つて、「昨夜は失敬しました。」

雪江は、何處やら狼狽して、

「は、昨夜は何うも。」

「何うも、昨夜は些とも眠れんもんですから、頭痛がしまして‥‥。禮之助君の留めるのを幸ひに、今日もまた、出立つのを止めましたよ。」と達は笑ひながら、「爰へ來ると、書生の身は氣樂な物ですなア。」

而ると、何うしたのか雪江は、其處には得耐へぬものの様に、不意に奥へ駈込んで了つた。

薫は膽を潰した顔をして其の跡を眺めたが、さて達を見返ると、此れも同じ様に、落着かぬ態で控へて居る。薫としては怪まずに居られなかツた。仍で下男の傳八を蔭へ呼んで、昨夜供をして歸つた途中の事を秘に聽糾したのである。

鍬柄提る外には、何等の特色もない無教養の下男の口から聽いた處で、執せ滿足に探る事は出來ないのである。薫は、此の神經の鈍い下男の氣に着かぬ事が、昨夜の歸途に有つたものに決めて、眼を離さずに二人の擧動を注意して居た。然う思うて見る故か、雪江と達との間が今迄の様で無い。今迄は、人の見ぬ處でも二人は平氣で對合つて談を交はして居たものであるが、今日の雪江は、達に顔を見らるゝのも體裁惡氣に、懸つて傍へ寄らぬ様に逃廻つて居る、と、達の方では反對に、氣を焦つて近寄らうとして居る様に見える。

薫は獨で氣を揉んで、何卒して間違が無くて呉れゝば宜い、何卒して二人の間を分けて了ひ度い、それには、竹代にも打明けて相談をしようか、禮之助に賴んで、達を速く此地から立たせる様に仕たものか、如何したものかと胸を痛めてゐる間に、意外な事が勃興つて、雪江は急に我家へ歸ることゝなツた。

意外の事と云ふのは、此の地方選出の代議士で、常雄と雪江とが結婚の際には、媒介周旋の勞に當つた某から、理八郎へ宛てた來狀が有つたことである。その來狀の文意は斯うだ。

常雄は、油繪盜難一件から、引續いて藝妓小福を家に入れる様にと本家の口を以て公然と迫られたので、親戚に對しても面目を失したし、雪江との間も折合つて行く望は絕えた處から、圓城寺家を去つて、實家へ復籍が爲たい、と其の代議士へ書狀を遣つたのである。代議士も驚いて、雪江や親戚の方は如何様にもして常雄の滿足する様に相談を纏めるから、自分に一任して、離緣の考へだけは棄てて貰ひ度いと請うて遣つた。ところが、常雄の決意は案外に堅く、家族からも親戚からも信用を失つた境遇には、一時も止まる事が出來ぬ、貴下が同意して呉れぬとならば、止むを得ず自己の意志通りに決行する、と折返して迫つて來たと云ふのである。

代議士の某も今は、面前雙方を説付ける他に策が無いとは思つたが、此の三四日は自分にも大切な公用があるので、先づ是を理八郎まで通じて寄越した次第であるが、この書狀を開封した理八郎の驚愕、此くと告げられた雪江の狼狽と落膽、一家中の者は顔を見合はせて呆るゝより他は無かツた。

爰に到つて案外にも從順な心を現したのは雪江である。他の人々は、其の代議士の來るのを待つて、穩かに常雄の怒を宥める道を講

じて貰ふ他に仕樣が無からうと思つてる間で、雪江は、此う云ふ事になツたのも、要之私の我儘から起つたのである、他の力を借るまでも無い、自身で良人の前へ出て謝罪り、何處までも恕して貰ふ樣に頼みますから、と言出して、理八郎等が、其れで愈よ常華樣の怒が解けるとしてからが、過日から問題にして居た例の妾の事は如何決める心算である、此方から其の樣に謝罪つて出て了へば、既う再び此の事で苦情を提出す權利を喪失して了ふ、熟く將來を考へて、後日に悔を遺さぬ樣に行動すべきであると說いたが、雪江は耳にも入れなかツた。その圖く思詰めた意は、妾を置くとか、家へ入れるとか、そんな事は問題にもして居ないらしかツた、一刻も速く良人の傍へ行かうとのみ焦つて居るらしかツた。

それから雪江は理八郎に伴はれて家に歸つた、而して常華の前に出て、今迄の我儘[illegible]、自分の勝手に前非を後悔した事、今後は屹度慎みます故、恕し難き處であらうが恕して戴き度いと云ふ事と涙と共に願つた。常華は、一旦離縁とまで決心した程であるから、今に至つて彼から悍に願はれた處で、急に心を變へる譯に行かない、などと言つたが、併し本家の理八郎まで一緒に頭を垂げて詫びるのに、養子の身として强硬に跳付ける事も出來なかつた。で、煮え切らない言葉ながらも、兎に角願はるゝまゝに其場は承知することとなツた。

こんな事で雪江は家に歸つた。達も其翌日親類の家が在ると云ふ京達川に立つた。前は、私かに安堵の胸を撫でた。幼弟の話に據れば、達は再び此地へ寄るかも知れぬと云ふが、雪江が家へ歸つたからは、最う心配するものは無いのである。

* * * *

さて雪江は斯うして家へ歸つたが、僅十日許り離れて居た間に、常華は別人の樣に變つて、言葉付から樣子から、更に從來の樣ではなかツた。嫌に改まツて、嫌に丁寧で、嫌に遠慮深いのである。此方から談話を仕向ければ返辭はするが、自分で進んで話出すやうな事はない、庭へ出る樣に勸めれば、何時でも一緒には出るが、親の葬式にでも出た樣に、冗言を一つ利くでもなければ、笑顔一つ見せもしない。大概は書齋に引籠つて、書具を把玩るか、書を讀むか許りして居る。天氣の好い日だと辨當携帶で寫生に出掛ける。夜も雪江とは別々に、室に寢を別にして書齋に一人寢る。

雪江は、夫婦の間に、池か河でも出來て、越された岸に取遺された樣な寂しさを感じた。けれども事茲に到つたのも、自分の我儘から生じたのである、良人に怨む可き處はない。自分で蒔いた種ならば、自分で刈る他に仕樣があるまい、夫だとて元來私の氣心を知らぬ人では無いのである、また、私の性質が滿更氣に合はぬのに、夫婦と成る筈も無いのである、此うして受けるだけの罰を受け、辛い思を忍んで居る中には、良人の情だツて舊に復る日もあらう、いや、何處までも私の力で、舊の良人に復さなければならない、夫までは辛抱爲なくてはならぬのだ。

雪江は此う決心をして居た。けれども、夫に冷淡な待遇をとらるゝ度毎、胸も潰れる、涙も出る、虚病をして、觀し切らぬ悲しさを夜具の裡で泣く夜もある。

以前の雪江ならば、一時も我慢の仕切れぬ事のみであるが、熟々深く諦めたもの、と見えて、不平な色一度人に見せぬやうにして、只管夫の機嫌を復すことにのみ掛つて居る。それを始終傍で見て居る竹代の身になると、その辛さは百倍である、彼女は蔭になり日向になりして、姉を慰める事に懸つて居る。

それこれする間に五月も六月となツた。常雄の機嫌も、幾分か和んだ樣であるが、未だ未だ舊の打解けた態には到らなかツた。

そんな處へ、東京へ歸ると云ふ達が、又しても纖之助を訪ねて遣つて來た。それを薫から竹代に警告した、竹代も祕して居られないで、雪江に話した。けれども雪江は、只だ「然う?」と云つたばかりで、別に取合ひもしなかツた。

第十二

常雄の書齋である西洋室で、仲働女のお竹と炊婦のお末とが、何か話合ひながら掃除をして居る。二人とも銀杏返の頭髮を手拭に包み、お仕着せらしい同じ柄の雙子の袷をぐるりと端折り、濡れた西洋手拭を手にして居るので。

「おほゝゝ、ぢや、お前樣が奥樣なら如何するの?」と書棚の硝子を拭いて居る仲働女が、踏臺に脊伸をして窓を拭いて居る炊婦に尋ねた。

「私が奥樣なら? 私が奥樣だらうもんなら、それこそ反對に、彼方から御機嫌を取らせてお目に掛けまさアね。」

「まア、自分の御亭主に?」

「あゝ。御亭主だらうが何だらうが、然う成ツたら負けるもんですか。云はゞ此方は、家附の女だ。なんぼ亭主關白でも、威張られて耐るもんかね。」

「ほゝゝ、幾ら家附の女だツて、一旦御亭主にした上は然うは出來ないわ。お末どんの樣に云つた日にア、一家の和合は滅茶滅茶ぢやないか。」

「だツて、此方で和合したいと云つても、彼方が強情なら仕方が無いでせう……?ぢやアお竹樣、お前樣は、旦那樣の方に御無理が無いと云ふの? 奥樣をお可哀想たア思はないの、え?」

「いゝえ、然うぢや無いけれどさ、」と云つたが、「あの、此の人は厭だよ、眞面目に成ツてさ、只だ談話ぢや無いかね。」

「だツて、私ア旦那樣の威張臭つて居らツしやるのを見ると、腹が立つて腹が立つて、如何して上げようかと思ふ位だもの……。彼樣なに、一生懸命になツて奥樣が御機嫌取つて居らツしやるのに、知らアん顏して、ろくぞツぽ談話もなさらないし、夜と云へば、只だ一人で此處へ御寐なさるし……、本當に、此樣な寐臺なんざア、打毀し了や可いんだ。」

「おほゝゝ、大變だこと……。」

「だツて、お前樣は然うは思はないの? 奥樣の、彼樣なに憔悴れて居らツしやるのが解らないの……?」

「其れはお末どん、お前樣が云ふまでも無い、誰にだツて解つてらアね。」

「ぢや、お前樣だツて、然う云へた義理ぢや無いでせう?」

「私や、別に何とも云やしないわ……。可笑なお末どんだよ、彼樣な喧嘩面して。お前樣の樣な人たア、迂り談話も出來やしない。」

「ふん、お前樣に談話して貰はないだツて、些とも困りませんからねえ。」

「可笑なお末どんだよ。」

二人ともじろりと睨合つて、口を噤んで、雜巾を動かし始めた。頓てお末は踏臺を下り、床に置いたバケツで雜巾を洗ふと、それ迄肥つた體で遮られて居た十時頃の日脚は、其處の窓から四角に射して、バケツの水影がきら／＼と天井に跳り、壁に懸けてある油繪の額縁はパッと明るくなる。

「奥樣もまた、餘り意氣地が無いぢやないかね、何も、旦那樣許りが男ぢや有るまいしさ……。」お末は働きながら獨り呟くのだツた、「此う云ふ結構なお家にお生れなすツて、御容貌て云や、繪にも描け無い美い御容貌でありながら……、

お婿様を新規に仕ようてたら、華族様でも大臣様でも、それこそ選取りぢやないか……、旦那様の機嫌がお惡いたツて、何可怖ない事あるんだ……。」

而ると仲働女は、可笑な事ばかり云ふよ、と云つた顏をして此方を見るので、お末は愈よ躍起になツて、

「ふん、幾ら旦那様でも、小糠三合のお仲間なんだ、其様なに威張られて耐るもんか、」と他の窓の下へ踏臺をがたりと強く置いて、「本當の事、此様なに家中總掛りで、毎日旦那様の事ばかりするには當らないんだ。此様なにやいゝいほいするから、可い氣に成ツて威張腐るんだ。奥様も、凝然として放棄かして置きなされば可いんだに……、毎日寫生に出ようが、離々臥ようが、何が怖いんだらう、先方が然う云ふ氣なら、此方は此方で、俳優でも呼んで誘示けて遣れば可いんだ……。」

「ほゝゝゝ、おほゝゝゝゝ。」

「お竹様、何が可笑いの？ 可いから夥多お笑ひなさいよ！」

「おほゝゝゝ、お末どん、お前様其様なに口惜いの？」

「知らないよ。執せ私は馬鹿ですからねえ。」

「可笑なお末どんだよ、獨りで憤つてるんだもの、」とお竹は睨めて居たが、また、「だけどねお末どん、最う、其様なに口惜がる事もなからうよ。昨日あたりから、旦那様の御様子も餘程有情くなツたし、奥様だツて、今朝あたりはお元氣は可いんだし、最う、お仲直遊ばすだらうよ……。然うなるとねお末どん、お末どんてば……。厭だよ此の人は、返辭もしないで。ぢや、何も話して上げないから可い。」

「だから、何ですよ。」

「知らないよ。」と仲働女は怒つた顏色をして見せ、獨語のやうに、「誰かに聞かしたら、また悋氣かも知れない……、默つて居よう。」

「何ですツて……？ ふん、お前様ぢやあるまいし。」

「おや、私何時、奥様と旦那様の間を悋いた事があツて、え、お末どん……？」

「有りますとも。お前様は何時も然う云ふぢやないか、旦那様と奥様と居らツしやる處へは、惘然入ツちや行かれない、此方で體裁の惡いことが有るなんて。」

「其れが嫉くと云ふもんなの？」

「だツて、嫉かなきや其様な事を……。」

と二人が下らぬ事を言爭つて居る處へ、仲働女のお筆が入つて來て、

「お竹様、そのお掃除は後にしてね、ベッドをお庭へお出しなさいと……、日の射る處へ。」

「おや／＼、今度はベッドを乾すの……。」

「おや／＼だツて、如何したの？」

「如何もしないけどね、」とお竹は笑つたが、「お末どん、此を二人で、庭へ持つてけるかねえ？ お筆さん、お前様、一寸手を借してお呉れな。」

「いゝえ、私は然うしてられないの……。」とお筆は急に忙し相に室を出て、廊下を座敷の方へ急ぐと、丁度其處から奥様が出て來た。

婢共の噂する様に、憔悴れたかと見れば、成程頬の邊に其の影の少しは見えぬでも無いが、今しも髮を結つた許りの――髮は毎度料理番のお松が結ふのだが――結つたばかりのところで、豊な毛に櫛目の跡美しく、就中今日の丸髷の出來が顏に似合つたのに、頬のあたりに異つた化粧品でも用ゐたらしく、毎日見慣れて居る仲働女にも、見惚れるばかり品よく美しいのである。

「厭だよ筆は、私の顏ばかし視て居るんだもの。」と雪江は優しく莞爾して、「ベッドを然う命令けて來たかい？」

「はい、然う申して參りました。」

「それからね筆、平吉を呼んでね……確か、旦那樣のお靴を磨いてる筈だからね、平吉を呼んで、お風呂を沸す樣に命令けてお吳れ。」
「はい。矢張し、お午からなんでございませう。」
「いゝえ、お靴を磨いたら直ぐにだよ。」
「餘りお早いぢやございませんでせうか。」
「だツて、過日の樣に、お午過に直ぐお歸りだと可けないもの……。然う命令けてお來でな。」
「畏まりました。」
　雪江は此う云ひ付けて、綺麗に掃除の逹いた前庭を眺めながら、緣側を廻つて十二疊の客間に入つた。爰には、妹の竹代と本家の薰とが、膝の突合ふ許りに近く坐つて、何事か密々語合つてゐたが、如何してか雪江が入ると、い、ひたと口を噤んで了つた。雪江は其れと感着いて、厭な顏色をしたが、
「竹代樣、氣分は何樣なの？」と雪江は妹の顏色を見ながら坐つた。
「いゝえ、別に此うツて處も無いけど。」
「だツて、今朝から御飯も食べないで……。顏色だツて其樣な……、ねえ薰さん。」
「えゝ、私も今夫を云つてた處ですよ。せめて、お臥つてたら可いんでせうツて……、竹代さん肯かないんですもの。」
「だツて、何處も不快い處も無いのに。」
「無い事は無いでせう、その通り顏色も惡いし、御飯も食べなからうし……、」と雪江は心配相に凝然と妹を視て、「今、お前樣に臥られる樣な事が有つたら、私はまア、如何したら可いだらう！」
「あら、私の事なんぞ、何も心配して下さらないでも可いんですよ……、私の事なんか關はないから、何卒、姉婿樣の機嫌の直る樣にして上げて下さいよ、私は只だ……。」と竹代は忽ちに催淚んで、「其れ許しが氣に懸つて……。」
「それこそ、お前樣の心配しないでも可い事ぢや無いかね……。」
　と云つてる處へ、書生の堀田は盆に洋杯を載せて入つて來て、
「如何です、未だ惡寒がしますか？」と竹代へ紙包の散藥を渡す。
「え、大きに快いんですけれど、未だ少しばかり……。」と云ひながら、堀田に渡された散藥を洋杯の水で吞まうとした。
　雪江は默つてそれを眺めて居たが、今しも口へ投れようとすると、
「竹代樣、一寸、」と慌てて引止め、「何の藥なの？」
「堀田樣から調合して貰つたの。」
「だけれど、何と云ふ藥？」
「解熱劑です。」と堀田が輕く答へた。
「解熱劑？　解熱劑は可いけれど、」と云ふ時、又も竹代が口へ投れようとするので、「まお待ちよ、其樣な輕卒な事しちや困るぢや無いかね。」
「奥樣、大丈夫でさ、」と堀田は笑ひながら、「何樣な醫師に掛つた處で、熱の有る人には解熱劑を用ゐる他、仕樣が無いもんです……、大丈夫です。」
「だけれどね、」と雪江は心配の眼を瞬き、「お前樣、熱が有るの？」
「え、眞の些とばかしだけど。」
「だけれど、何で出た熱なんだか、」と云つて堀田に、「何の熱でも效く藥なの？」
「は、何にでも同じ事です、ザルチルサンソーダ、解熱劑には、最う此れに限るんですからなア。」
「姉樣、大丈夫ですよ。」と云つて、竹代は顏を顰めて吞んで了つた。
　雪江もそれを顏を顰めて見て居たが、
「執せ藥を服む位なら、今朝、石丸樣の來た時、

に診て貰へば可いのに・・・。竹代樣は輕卒だから可けない、そんな、素人の藥なんか服んで、若し間違でも有つたら如何するの？　其樣な事もあるまいけれど。」

「此れん許しの事で、間違も何も姉樣・・・。」と笑つて見せる。

「また、私だッて、」と堀田は不快の色を見せながら、「解熱劑を用ゐる方法位は知つてますよ。」

雪江はじいッと堀田を睨めて、

「其れは知つてるだらうさ、だけれど、お前樣は醫師ぢや有るまい？」

「其れは仰有るまでもありません。」と黄色い顔を皺くした。

「専門の醫師でも、診察を誤る事が有るぢやないか、」と雪江は近頃珍しくも勃然として、「醫師の學問も無い癖に、何うしてお前だけ間違が無いと保證出來るのッ？」

「何うも、恐入りました。」と堀田は小さくなッた、

「是許しの事で、そんなに仰有らないだッて可いぢやありませんか、」と竹代は氣の毒相に姉を咎めた、「私が頼んで調合へて貰つたんですよ、堀田が好きでした事ぢや無いんですよ・・・。」

此う云つてる間、竹代は胸苦し相に噫氣をして居る。

「如何したの？」と薫は訊ねた。

「何だか少し・・・。」

「吐きたい樣ですか？」堀田は心配相に云ふ。

「え、何うも・・・。」と切りに耐へる樣子だッたが、最う耐へ切れなくなッて、縁側へ駈出るや否や、今飲んだ物を庭へ吐いて了つたのである。

さア、何樣なに雪江が怒るだらうと、堀田は元より、薫までが惴々思つて居ると、今度は小言一つ云はず、竹代を徐に座敷に臥させ、車夫を本家に駈けさせて、彼の石丸醫學士を招くのであつた。

「姉樣、私なら最う快いんですよ、最う落着きましたから、何卒石丸樣なんぞ呼ばないで下さいよ、最う大丈夫ですから・・・。」と竹代は枕に倒れながらも云ふのだ。

雪江は、妹の云ふ事など採用げなかッた。其の中に學士が駈付けるから、氣を揉まずに居よとのみ諭したが、竹代は無理に起上らうとして、

「最う、本當の事何とも無いんですよ。私、彼の人には診て貰ひ度か無いんですもの、彼の人に診て貰ふ位なら、村の道順樣に診て貰つた方が可いんですよ、何卒、彼の人を呼ぶ事だけ止して下さいよ、彼の人は厭ですもの、來たッて診せはしませんわ。私最う起きて居よう。」とは云ふが、矢張り苦し相に臥て居るのである。

それから雪江は、爰に臥て居ては病人の氣も落着くまいと云ふので、婢共に命じて急に二階の竹代の室を掃除させ、直に其處へ移さうとしたが、移しかけて偶と何やら考へ直して、

「然う然う、西洋館の方が宜かッた、彼處だと靜でもあるし、梯子を昇降する厄介も無いし・・・、西洋館が可い、西洋館に移さう。」

と云ふことになッて、竹代は常雄が昨夜まで用ゐて居た寢臺に臥せられた。それこれする間に、石丸醫學士も駈付けた。

＊　＊　＊　＊

胡麻竹の高い燈臺形の臺に載せられた洋燈には、今しも火が點つた處である。夕風が冷たいので窓を閉められ、カアテンは引かれてあるが、家外は未だ明るく、そこいらで燕の囀るのが聞える。

寢臺の上に竹代は靜に眼を閉ぢて居る。顔色は薄く紅味を帶びて、いゝ、しッとりと發汗んで、額に載せられた氷嚢は、心臟の鼓動と共に微に顫へて居る。醫學士の云ふ處に據ればインフル

エンザで、或は肺炎に變ずるも測られぬが、このまゝ體熱が退りさへすれば大した事はあるまい、兎も角今が大事であるから注意せねばならぬとの事である。

寫生に出た常雄は未だ歸らぬ。薫も醫學士も疾に本家に歸つて了つた。雪江は仲働女の筆と二人で病人の傍に附いて居た。醫學士の言を想出し、妹の容態を看て居れば、心配になる事哀しい事が際限も無く湧いて來る。其樣なことも有るまいけれど、此のまゝ重患くなツて、若し萬一の事があツたら如何しよう、兩親には夙く別れて、賴にも力にも、血を分けた同胞と云へばこれ一人の妹にまで亡くなられたら……、と想の走ると共に涙は頰を流れるのである。

「最う、十五分になりますから。」と筆は微に云つて病人の腋から驗溫器を脫取らうとした。

雪江は彼方の棚の上なる置時計を眺めて、

「然うだねえ、」と同じく低聲で、「睡つた樣だから、徐とね。」

云はるゝまゝに驗溫器を脫取つて、仲働女は洋燈の下へ寄つたが、仰山な顏色をして、

「奧樣、大變でございますよ。」

「え、何度？」と雪江も起つて行つて額を寄せる。

「四十度八分ございますよ！」

「まア！」

二人が顏を見合はせた時、

「姉樣、何度行つて？」と病人が突然口を利いた。

「おや、目が覺めたの？」と雪江は額の氷嚢を直しながら、「なに、其樣なにも無いよ、八度と少し許し……。」

「然うですか、ぢや、最う何でも無いんですのね。あーあ、皆なへ心配懸けて濟まなかツた。最う起きませう！」

「其樣な事を云はないで、まア然うしてお居でよ。何だね、子供見たいに。先刻臥たばかしぢや無いかね。」

「然うですねえ、ぢやア、最う少し此うやツて居ませう、明日の朝まで……。」

「あら、其樣なに夜具をお剝ぎなすツちやお惡うございますよ。」と筆は、病人の身體を被して遣る。

「然うかねえ。」と仲働女の爲るまゝに任して居たが、「姉樣、姉婿樣は最うお歸りになりまして？」

「未だ歸らないよ、最う歸る時分だけれど。」

「然うですか。」と云つて久く默つて居たが、また、「姉樣、私の事なんぞ、最う何にも心配して下さらないで宜うござんすよ、最う快いんですから。この通り最う、何とも無いんですもの。何卒、姉婿樣の處へ行つてて下さいな、姉婿樣が大切ですから。姉婿樣の機嫌の直る樣にね、何卒辛抱して、一生懸命に盡して上げてね、決して、我儘な氣を出しちや可けませんよ、ね、姉樣……。」

「何だね竹代さん、」と雪江は妹の口を止めて、「其樣な事を氣にしないで可いから、速く癒くなツてお呉れよ、お前樣は病人ぢや無いかね……。」

と雪江の云ひ切らぬに、竹代は又、

「假ひ他家から來た人でも、良人に二種無いんですからねえ、決して我儘な心を出しちや可けませんよ……。」

「可いツてばね、」雪江は又云つた、「最うお前樣の云ふ事は解つてるから、最う何にも心配する事無いんだよ。今後はね、私もね、生變つた氣に成ツてね、全力を擧げて盡しますよ。だから、何卒安心してお呉れ、ね、私の事は心配しないで可いから、氣を樂に有つてね、何卒、悠然治療してお呉れよ、ね、解つたら、ね竹

代様……。おや、最う眠つてるよ。」
覗いて視ると、息を急しく、眼を閉ぢて居るのだ。
「筆、大變熱相だから、其の毛布だけ脱つてお遣りな。」と雪江は起上つて、「餘り熱がらせても惡いんだよ。」
「だツて、惚れたんだから詮方が無いわねえ。」と突然に竹代は叫んだ。
「え、何だツて？」雪江は吃驚して、「竹代様……」
「譫語の樣でございますよ。」筆も病人を視詰めながら云つた。
「其れは、石丸樣の怖がるのも無理は無いけど、其れぢや姉樣が可哀想ぢやありませんか……。」と又高聲で言ひ出した、「最う、石丸樣が馬へ乘つて此村へ來らした時、彼の時から惚れてるんですよ、本當ですとも、姉樣然う云ひましたもの、美男子だツて、私も然う思つてよ……、だツて、些とも恥ぢる事なんか無いわ、綺麗な花は誰にも綺麗に見えるんですもの……。」
「竹代樣、竹代樣、」と雪江は耐へかねて、妹を搖り起して、「何うしたんだよ、竹代樣、貴女何を云ふんですよ。」
「は、は。」と竹代は目を覺して、「私をお呼びになツて？」
「如何したんですよお前樣は……。其樣な……。」と熱の發した妹の顏を熟と視て、何か云はうとすると、
「奥樣、あの、」と仲働女は其袖を引いて、低聲で、「御病氣に障ると可けませんから。」
「だけれどまア、」と躊躇しながら、「竹代樣、氷でも進げようか？」
「えゝ、何卒。」
小さい塊の一つを口に投れて遣つて、
「竹代樣、今のやうな事を云つて呉れちや困りますよ、私と筆ばかしで、誰も居ないから可いけれど……。」とまでは云つたが、我から口を噤んだ。
「私、何か云ひまして？」
「何かツて竹代樣……。」と矢張り言出しかねて、「お前樣、夢を見たんだらう？」
「何うですか……、能くは分りませんけれど……。」
「だけれど、其れも此れも、私を案じるからなんだらうけれど、」と雪江は溜息を吐いて、「竹代樣、お前樣ねえ、種々と私を邪推…、彼の、誘惑に勝てない、弱い女だと思つて、心配してお居での樣だけれど、これでも私は、お前樣の心配する樣な馬鹿な眞似を爲る人間ぢやないよ。何卒、其樣な心配は止してお呉れよ、私だツて、少しは教育を受けたもんだし、良心と云ふ物も持つてるんだからねえ、豈夫、人の物笑ひになる樣な事は爲なからうぢやないか……。」
「ですから、何卒、姉婿樣の機嫌を害ねない樣にねえ。」
「其樣なこと解つてますよ。」
「姉婿樣に負けて居ても、些とも恥辱ぢや無いんですもの。」
「可いツてばね。」
「もう止しませうねえ、姉樣も寢んで下さいな。」
「私は可いから、お前樣こそ、何にも氣に懸けないでお寢み。」
「どうも濟みません……。姉樣、其處の机に、金筆が載つてませう、何卒、インキを拭つて置いて下さいな。」
「金筆ですツて？　何處の机に……？　此所は竹代樣の室ぢやないよ。」
「あ、來ましたよ、來ましたよ。」と竹代はまた急に高聲で云つた。
「え、誰が？」と雪江は吃驚した。
「大變です、槍を提げて來ました。ほら〳〵、

遠くお逃げなさいよ、石丸様、姉様を伴れて逃げて下さいよ。おほゝゝゝ、其様なに夜具へ潜込んだッて知れますよ、姉様、髪が毀れるぢやありませんかね、姉様てば、あら、まア仕様の無い人達ねえ、おほゝゝゝ。」

雪江は呆氣に奪られて了つたが、竹代の聲がいひたと止むと、

「まア、」と溜息を吐いて、傍に體裁惡相に俯向いて居た仲働女と顔を見合はせ、「だけれど、誰も聞きやしまいねえ？」

「大丈夫でございます、誰も居りませんから。」

「お前、其邊を見てお見れ。」

筆は扉を開けて廊下を見廻し、靜に元の處へ歸つて、誰も居らぬ由を申上げた。

「如何したんだらうねえ！」と雪江は今は顔を蒼くして、「旦那の耳へでも入つたら、大變ぢやないか！」

「ですけれど、譫語でございますから。」

「なんぼ譫語でも、他の事と違つてお前……」と首を傾げて、「困つたねえ！」

「其様なに、御心配遊ばさないでも……。」

「竹代様は……、私も子供の時から熟く知つてるけれど、假にも此様な、猥褻しい事なんか口へ出す人ぢや無いんだのに……、何うしたんだらう、口では愼んで居ても、心の中ぢや矢張し……。」と云つて、雪江は深く嘆息した。

二人は口を噤んだ。病人は息急しく眠つて居る。薄絹で包んだ洋燈は朧月の光を投げて、耳に入る物は置時計の秒を刻む音ばかりである。久くすると、筆は氷嚢の中を入更へる爲に徐と室を出たが、この時、内外の靜さを破つて、廊下を急いで來る足音がとん〳〵と響いた。雪江は屹と面を揚げて、聞耳を立てて居たが、いゝ、がちりと扉を開けて、仲働女の竹が顔を出した。

「靜にお爲！」と制して、雪江は病人の寢顔を振返り振返り其傍に歩寄り、「何だい？」

「旦那様御歸宅でございます。」

「おや然う？」と思はずも莞爾したが、衣紋を直しながら室外へ出ると、丁度其所へ入つて來る常雄に出逢つた。

「お歸りなさいまし。」

「いや、今日はつい遲くなツてね、」此頃に無い機嫌の好い語調で、「竹代様、病氣ださうだねえ。何様なだね……。」

「貴方、ま何卒、」と雪江は、室内へ入らうとする良人を止めて、「何卒彼方へ來らして下さい。」

常雄は變な顔をしたが、引かるゝまゝ暗い廊下へ出て、

「如何したんだ？」

「あの、傳染ッちや大變ですから……。」と雪江は、醫學士の云置いたことから、竹代の容體を詳かに常雄に告げた。

「然うか。併し、インフルエンザなら、その位の熱は當然だよ。其様なに心配せんでも、大した事はないよ。」とまたも室内へ入らうとする。

「あら、貴方まア。」

「如何して？」

「若し、傳染つたら大變ぢやありませんか。」

「其様な、心配するほど傳染るもんぢや無いよ。」

「それでも、何卒入らないで下さい。」

常雄は瞬く何とも云はなかツたが、頓て柔和に笑ひながら、

「其様な事を云つても、此の通り、繪具箱や何か持つてるぢや無いか。」

「それは、私が置いて參りますから。」

「然うか、それでは、私は、此の室に入ッちやならんのかい……？」と常雄の聲は凜然として聞えた。

「いゝえ、然う云ふ譯ぢやありませんけども、たゞ、傳染つてはお惡うございますから。」と慌

てて分疏をする。
「おや、お前は如何だ、お前には傳染らんのかい？」
「は、」と雪江は行詰つたか、「私はあの、姉妹だから詮方がありませんけれど……。」
「それで、私だけは竹代樣の傍へ行ッちや惡い……、然うだらう？　ふゝん、お前も中々、私の爲には細心に注意して呉れるのだねえ。」と嘲る如くに云つた。
雪江は何とも云ふことが出來なかッた。
「併し、それ程私の爲に注意して呉れる人が、何故、私には無斷で、私の室へ竹代樣を入れたんだ……？」
「はア、」と雪江は悄々して、「伺はないのは、惡うございましたけれど。」
「勿論、何處へ誰を入れようと、此の家の事はお前の自由なんだからなア……。」
「あら、決して然う云ふ心でしたんぢやありませんわ……。」
「お前の自由だらうけれど、」と常雄は同じことを繰返して、「併し、此の室には、私の日用品が入つて居ます。」
「貴方へ伺はないのは惡うございました、何卒、御勘辨なすッて下さいまし。」
常雄は雪江の言など耳にも入らぬ樣子で、
「けれど、其れも宜しい、入つてならんと云ふなら入りません、」と云つて久く口を噤んだが、「併し、私はね……。」
「は、」
「貴女達からは、如何云ふ者に見られて居るか知らんが、私は其樣な、他の輕蔑を受ける樣な、非廉恥の人間ぢやありません……、失敬な、妻の姉であるから、見ても遣らうと云ふのだ……。」
「私だッて、別に何にも……。」
「人に疑を懸けるも程度がある……、失敬な。」と云つたが、足音荒く廊下を彼方へ歩出した。
雪江も良人の後に附いて行つた。漸く直りかけた機嫌を又損じるのかと思へば、餘りの情なさに口も利き得ぬのである。この立腹の樣子では、再外へ出ると云ふか知れぬが、何として夫を留めたものであらう、日外の樣に無理に引留めて、反つて機嫌を害ねても困るし、然うかと云つて出るまゝに出して遣つては、立腹まぎれに何樣な事を斷行するも知れない。
けれども、如何思返したのか、常雄は外へ出ようとはしなかッた。機嫌は非常に惡く、雪江には言葉一つ掛けなかッた。夫でも雪江は、家に居る事を有難い事に思うた。此の上は、嫉妬の譫語を聞かせぬことである。だが、今にも物を出す爲にあの室へ行かないとも限らぬ、其の時、偶然と彼樣な譫語が始まッたら！
良人の機嫌も直さねばならぬ、病人の看護も指圖せねばならぬ、雪江は負ひ切れぬ此等の心配で、一夜をまんじりともしずに過したのである。

第十三

暑くなると屢く釣寝臺を釣らるゝ二本の椎の木が、裏庭の東の端の、爰には花を見せるばかりの彼岸櫻、枝垂桃、山椿、それから秋になると紅い實を着ける似柿、それから此頃一つ二つ咲初けた杜鵑花などが、枝と枝とを組合はせてる間へ、假へたら、丁度小學校の生徒の群を、老夫婦の教師が見下してでも居るやうに、高く、靜に立つて居る。
此の椎の木の根方に、力無く籐の腰掛椅子に凭れて、美しい眼を半開にして、何物を看るとも無く恍然と見詰めて居るのは雪江夫人である。種々な心痛に昨夜は少しも眠らず、今朝は今朝で、良人の外出を止めようとした爲に烈しい

怒に觸れたので、樂しさにも悲しさにも、心の力には限が有つて、到頭疲が出たのか、午頃から正體も無く睡くなツて、四時迄もぐツすり眠つたのである。

大切の良人の機嫌を害ね、病人の妹を控へて、如何して此樣な氣樂な眞似が出來たもんだらう、と自分で自分を怪んだが、怪みながらも、婢共の云ふまゝに風呂に入り、顏も化粧し、着物も新しく着更へ、帶も氣に適つたのを擇つて締更へ、姿見の前に立つては、我と我が姿に莞爾して、何故とも無く其まゝ庭に下り、來るとは無しに此の奧庭まで出て來たのである。と云つて、無論良人の機嫌を害ねた事を忘れて居るのでも無ければ、妹の病氣を氣に懸けて居ないのでも無い……、無いどころか、心の中は此の二つが巴をなして沸騰返つてゐるのである、が、只だ忘れて居たいのだ……、忘れようとして忘れらる可きでないから、せめては知らぬ風をして居たい、外の事に紛らして居たい、沸騰返る心に蓋がして置きたい、而して、暫時なりとも身體を息めて居たいのである。

「奧樣、只今、お醫師樣がお來でになりましたよ。」

此う云ひながら傍へ進寄つたのは、葡萄酒の壜と、コップと、外皮を剝いたジャボンの皿を運んで來た仲働女のお竹である。

「然うかい、筆が附いてるだらう?」

「はい、お筆さんが……。」と腰を屈めたが、葡萄酒の壜を把上げ、「お口を拔きましたのは、此よか見えません樣でしたが。」

「どれ、」と雪江は壜のペーパを讀んで、「あゝ、此だよ、一杯お酌してお呉れな。」

仲働女の酌したのを、嘗める樣にして一口飲んだが、雪江は顏を顰めた。

「如何でございます?」

「ちツとも甘味か無いよ、」と云つて又一口飲んだが、其のコップを日の前に揚げて、「竹、御覽、綺麗ぢや無いか。」

日光が射して、コップの中は血を盛つた樣である。

「眞紅でございますねえ。これが、皆な血に化るんでございませうか?」

「そんな事が有るものかね、」と笑つて、又一口飲んで、「其品は此處へ置いて、お前は彼方へ行つてお居で。」

「左樣でございますか。」

「而してね、私少し息んでたいから、誰にも默つてお居で。」

「畏まりました。」と盆を草の上に置いて、母家の方へ行つて了つた。

雪江は茲の景色を樂みながら、嘗める樣にして葡萄酒を味つて居る。

奧庭の廣さは二千坪餘もあるが、此處からは其の三ケ一も見えぬ。左手は木立の葉蔭深く、前庭も、母家も、土藏も一體に深緑の幕に遮られて、只だ物置小舍の一部だけが――赤茶色た土を塗つて、棟には水と云ふ字を漆喰で出し、屋根には竹梯子が懸つて、其邊に巢でもあるのか、引切無しに鳩の遊んでる――小舍の一部が見えるだけである。右手の方はと云ふと、折しもの西日を一杯に浴びて、眞明い許りにぎらぎらする硝子と、白く塗つた柱とから構造てられた植物温室が、この椎の木から五六間離れて、直ぐ目の前に背中を擡上げて居るので、其の後の茶畑も、葡萄棚も、梨園の林も、藁に被はれた凄い池も見えないのである。

が、此の温室と左手の木立との間は、遙か西南の――其處には梢一杯に白い花を被つてる栗の樹が林を成してるが――西南の垣根まで、専ら家で自用するために作る野菜物の畑が、長く、一目に見渡さるゝ……。手入が十分なので、何も勢好く、生々と茂つてる處へ、遮る

物の無い日光が煥々と射つて、これがまた植木屋の鋏で作つた庭とは變つて、一種の趣があるのだ。

雪江は葡萄酒を嘗めながら、恍然と前の畑を眺めて居た。下男達は殘らず邸外の畑へ出て居るらしく、廣い屋敷内に人聲一つ響かず、草も木も和かな初夏の日に蒸されて、悠然と手足を伸して居る。彼方は鷄の餌に植ゑた麥畑で、其の手前が葱畑、それから浪の飛沫を散らした樣に白い花を着けた隱元豆、それからぐツと脛を脱出してる大根、瑠璃色の實を光らしてる茄子、それから黄瓜、彈け相なキャベツ菜、風の通る毎にいや〳〵をする芋の葉……。

偶と頭の上で小鳥が鳴出した。樹の上を眺めても、何鳥やら形は見えない。枝と枝とが重なり合つて、縱横に網を編んだ中に、葉の隙間を洩れる日光の、星を蒔いた樣な影を投げて居るのが如何にも綺麗である。暫く其處を見上げて居ると、背後から、誰やら人の來る氣勢である。

何心なく振向くと、直ぐ二三間後に、藍鼠色のセルの單衣に黑羽二重の單羽織を着た石丸達が、此れも意外な處へ來合はしたと云ふ風に、躊躇ひながら起つて居る。雪江は、椅子を離れると、手にした葡萄酒のコップを下に置き、

「今日は……、好う來らして下さいました。」と微か狼狽した心を隱して、靜に挨拶をした。

「お一人で居らッしやいますか？」と達は其處に立つたまゝ、この上近寄つて可いか不可いかを決しかねた樣に、顏だけで笑つた。

だが、その顏色は或る亢奮に蒼白めて、眼の色も常に異つて居る」雪江は葉影と光線の反射だらうとのみ解つて、

「はい、」と自分も笑つて見せ、「何ですか、氣が悶々しまして……。」

「急に氣候が變つたからでせう。」

「まア、何卒此れへ。」と雪江は椅子を侑める。

「廣いお庭ですなア……、餘り景色が美いので、つい此樣な處まで來て了ひました。」と云ひながら、次第に傍へ歩寄る。

「あの、病人は如何でございます？」

「未だ、確とした事は分りませんが……。」と云つたが、急に判然した語調で、「大した事はございません。」

「如何したんでせう、大變熱が有る樣でございますが……。」

「左樣、未だ、一寸熱は降りませんなア。」

「肺に關係の有る熱ぢやござんすまいか？」

「いや、其樣な事はありません。」と云つたが、達が熟と視て居るので、慌てて目を外して、「それに、何う云ふもんですか、譫語を申して仕樣がありません……。」

「譫語ですか……！」と云つた達は、忽ち顏が紅くなツた。

雪江は別にそれと氣も着かず、

「彼を、止めて戴く譯に參らないものでせうか？」

「譫語でございますか、然うですな……。」

雪江も此の時達の樣子の變なのに氣が着いたが、

「矢張り、熱の故なんでございませうねえ？」

「無論、然うでせう……。」と息を咽んで、「何樣な事を云ひます？」

「何ですか彼の……、」と急に面を背向けて、「種々な事を申しますんですの。」

「何か、聞苦しい事でも……？」

「は、實に困つて了ひまして。」

「困ると仰有ると……？」と云つて、そのまゝ默つてゐる。

「何か、あれを止めるお藥が無いもんでせうか？」と訊ねたけれど、達が依然默つて居るの

で、「熱が下らなければ、止まらないものなんでせうか？」
それでも達は沈默を續けて居る。雪江は訝しさに其面を覗いた。四邊が急に靜になツた、と思つたら、今迄頭の上で鳴いて居た小鳥の聲が止んで居た、彼方の林へでも飛んで去つたのであらう。
「奥様、」と何處やら震聲で、「實は、私も聞きました。」
「え、あの、譫語を？」と雪江は忽ち顏を火の樣にした。
「私も聞いて來ました…。」と達は、憶するわが心を勵ましながら眞正面に雪江を視詰めて同じ事を云つたが、言續けようとして言續けかねるのだツた。息が喘んで、外から見ても、胸の騒ぐのが分る程である。
雪江は消えも入り度き風情で、小さく俯向いて居たが、最う耐りかねて、畑の方を指して逃出さうとした。
「ま、待つて下さい。」と達は慌てて其袂を捉へたが、「私、決して御無禮な事なんぞ致しません、何卒鳥渡お待ち下さい、この機會に是非聞いて戴かなきゃならん事がございます。」
雪江は何とも口が利けなかツたが、捉られた袂を拂ひもしなかツた。
「雪江様、私も、疾から貴女を懷つて居つたのです…。無論、貴女の御身分は熟く知つて居ます、立派なお配偶の有る事も、何も彼も知つて居ます、知つてますが…、私は何うしても貴女を斷念める事は出來ませんでした…。」
「何卒、お離しなすツて。」と雪江は聽取れるか聽取れぬ低聲で云ふ。
「貴女は、怒つてお居ででせう、嘸、失禮なことを云ふ奴と思召すでせう、併し、私も、多少身分の有る者です、名譽と云ふ事も考へて居ります…、此樣な事を口へ出すからは、私も決心した上の事です…。」
「まア、何卒お離しなすツて、」と雪江は矢張り低聲で、「若し、見られると可けませんから、何卒。」
「お逃げなさるのでせう、ぢや雪江様、」と何處までも女の眼を視詰めて、「それでは、此樣な失禮な事を申上げた事は何卒お恕し下さい。」
「恕すの恕さないツて、其樣な貴方…。」
「ぢや私には、最う口を利くのも汚らはしいと云ふのですか？」
「いゝえ、其樣なことを貴方…。」と息苦し相に辛に云つたが、「まア、何卒お離しなすツて、人が來ると可けません…。逃げは致しませんから…。」
達は初めて、其の手を離して、
「御腹立は御尤もです。突然、此樣な事をお聞かせしたら、狂人の樣にお思ひでせうが、實はこの村へ入つた彼の日から、一刻も貴女の事が心から去れませんでした…。」
「………。」
「永久獨で思つて、永久心の底に祕して置く可きだツたのです。ついそれが、お妹さんの譫語から、制し切れなくなツたのです…。失禮でございました、幾重にもお詫申上げます、何卒お恕し下さい。」
「然う嚴格しく仰有つては、私こそ、本當に困つて了ひますわ。」
「ではお恕し下さるのですね。この場限り、水に流して下さるのですね…？　有りがたうございます。私もやツと、顏を隱さないで此の村へ告別が出來ると云ふものです。」
「厭でございますわ、其樣な事ばかし仰有つて…。お詫しなきゃならないと仰有れば、私こそ、何樣なにもお詫しなきゃならないんでございますもの…。」と半ば呟くやうに云つたが、俯向いた顏に眼だけを起して、「心で思つてる

事が知れましたら、私なんぞ、面と向つてお目にかゝる値はございませんわ。」
「奥さん…。」
「誰も知るまいと思つても、彼女だけは感付いて居つたんですわ。」と耳語くやうな聲。
「お妹さんのことですか…では、あの譫語は…、雪江さん…。」
「私、あの譫語を、取消す資格がございませんの…。」
「それは、本當ですか…。」と達の手は、力強く雪江の肩を摑んだ。
「あれ、彼所に堀田が。」と達から衝と離れたが、足元の盆を顚覆して、後をも顧ずに蒼然に温室の室後へと駈込んだ。
　達も一方ならず驚いたが、誰かを探して居るらしく、近眼鏡を懸けた眉を顰めて、母家の方から急いで來る堀田の姿が、直ぐ背後の、唐黍や、綉草やの繁つた畑の徑から現はれたので、逃げも隱れもならなかツた。乃で達は、散歩でもして居たものの樣に悠然と其邊を歩いて居た。
「や、此所にお在ででしたか、」と初めて達の顏が分つたらしく、「最うお歸りになすツたかと思ひました。」
「何ですね…？」
「今の、此の散藥の調劑ですが…。」
　堀田は、昨日から竹代の藥を調合することになツて居るのであるが、その調合に就いて、卒に醫學士に尋ねる事が出來たので、この奥庭まで捜して來て、不思も二人を驚かしたのである。
　さて、堀田の影に驚いた雪江は、温室の後まで駈けて來たが、其處の扉の開きかゝツて居るのを見ると、何う思うたのか窃と室内に忍込んだ。
　室は三つに限隔られ、寒い季節は三室の温度に夫々差があつて、爰に培養される種々の鉢物に、その産地と同じ温度を與へる裝置である。今は蒸氣の釜も焚かず、湯を輸る鐵管は冷たくなツてゐるけれど、三室の間は矢張り戸を限隔つて、室の廣狹と、窓の開き加減とで、矢張り温度は同じ度でないのである。
　雪江は廣い中央室を横切つて、奥の室の段を上つて、扉の手を引いた。締切つた室の空氣は扉と共に搖いて、棚に列べた鉢物の葉は一時に波を打つた。刹那に混じ合つた草花の香氣が鼻を衝くのである。
　九尺に三間ばかりの温室で、兩側は長く棚を設けて、蘭科、秋海棠科、鳳梨科など、數種の鉢物が隙間も無く列べられ、眞中だけ通れるやうになつて居るが、硝子戸を透す四方からの初夏の光線は、隅々までも明瞭見える程である。水は規則正しく朝夕與るのであるが、其れが終日日光に蒸されて居るので、外と交通を斷たれた室内の濕つた空氣は、氣分の重くなる樣な温氣で、中央の柱に懸けた寒暖計は華氏の八十五度を示して居る。
　雪江は葡萄酒を飲んだ後なので、身體中の血が何だか奔流となつて駈けるやうに感じた。さて、窓際に寄つて、窃と室外を覗くと、辛か七八間前に、堀田に何か教へて居る醫學士の横顏がある。聲は聞えぬが、滴るばかりの綠葉を後にして、西日を滿身に浴びた二人の姿は、髮の毛までも數まるゝ程である。
　硝子を通して見る故か、それとも皮膚の黃色い、戲けた顏の堀田と並んでゐる故か、今日の醫學士は如何にも優雅で、風采が立ちすぐれて居るのである。顏は白いと云ふ程でも無いが、額は廣く、鼻は高く、冴えた眼は活々して、成程二十六で學位を得つた才子らしい相である。
　雪江は瞬もせずそれを眺めて居た。温度の故か、上氣して顏がくわツ〳〵する。先刻湯

に浴つた許りの肌は汗發んで、襦袢がしッとりとなツた。

やがて二人の談話が濟んだらしく、堀田は母家を指して引返した。醫學士は堀田に別れると、直ぐ溫室に眼を轉じた。雪江は此室に居る自分を發見けたのだと思うて、我知らず窓から身を退いた、が、男の姿は眞直に此方を指して近づいて來た。雪江は胸が騒いで、何うやら夢路を辿る心地であツたが、其の中入口の扉の明く音がした。

何處から迷込んだか、羽衣蝶が一つ室内へ入つて來た。葉も花も見慣れぬ世界に出逢つたので、彼方此方と珍らし相に飛廻つて、羽を細かにばた／＼して居たが、偶と人間の顏に近寄つて、熱い息を嗅ぐと、穢れた物にでも出逢つた樣に、吃驚した鼓翼をして、慌てて此の室を出た、而して中央室の半開になツてる窓から飛拔けて、外の友達の居る畑を目掛けて飛んで行つた。

丁度この時、母家の方から又しても堀田が駈けて來た。椎の木の下へ來ると、覺束ない目を萎めて、暫く四邊を見廻したが、茶畑の方へ下りて行かうとして、偶と溫室を覗くと、何うしたのか吃驚して飛退いて、黄色い顏を眞赤にして、何と云ふ譯も無く池の岸まで駈け續けに駈けて來て、そこでほッと息を吐いた。それから二三度も池のぐるりを廻つて、竊と家へ入つたが、其の時は最う醫學士は腕車で本家へ送られた後であツた。雪江はと見ると、これは平常よりも冴えた顏をして、病人の枕頭に靜に附いて居たのであツた。

＊　＊　＊　＊　＊

二三日經つて、些かな過失が因で、書生の堀田は邸から放逐された。

竹代の病氣は氣管支炎に變じたが、一月と經たぬに全快した。其の病氣中は、殆ど一日も缺かさずに、醫學士が招かるゝのであツた。

常雄と雪江との間は次第に冷かになツて、竹代の全快すると間もなく、親族會議だの、本家の理八郎と雪江との爭論だの、種々紛擾した事が重なつた結局、常雄は東京の實家に復籍する事に決まつた。

其の頃から、此の地方に可笑な歌が流行り出した、それは、

溫室で蒸されて　下紐解けて
狂ひ咲く花　親の種

と云ふのであるが、是は書生の堀田が作つた、「溫室で蒸されて花託が解けて咲くは仇花親の種」と云ふのを、誰が作更へるとも無く作更へたのだと云ふ。

醫學士は間も無く東京に歸つた。引續いて雪江の姿も村の者の目に留まらない樣になツた。あさましい噂が、歌と共に擴がツたのである。

魔風戀風（前篇）

序

作中の主人公と二三の主なる人物とは、曾て世に在つた人、それから今現に世に在る人をモデルにしたのだ。

とりわけ主人公とは五六回も面を會はしたことがある、全く美人で、學才も秀でて、男に騷がれた事は中々爰に描いたやうなものでは無かつた。病氣を得たのは、もう少し悲慘な事情からであるが、今の小理窟の小五月蠅い日本では、遺憾だがそれを有の儘に寫すことが出來ぬ。

この作は、世の所謂婦人問題、女學生問題に意を用ゐる人にも多少の利益を與ふるものと信ずる。

癸卯十月

如是庵天外

第一　記念會

二三日前から、都下の新聞は筆を揃へて、帝國女子學院の、創立十周年祝賀會の盛大なる催しに就いて掲記てるのである。

校長の挨拶、學監の報告、來賓の祝詞や演說、夫等は何處の會にも珍らしくは無い、觀物は工藝科學生の競技陳列品、文科學生の英語の戯曲朗讀、音樂科は云ふ迄も無く洋樂の演奏、また夜に入つては、一時世評に喧しかつたので、今では美しい令孃揃ひと云ふ事と與に、此の學校の名物に數へらるゝ假裝舞踏會の催しも有るとのことである。

それから饗應は、婦人が多い所から和洋二種の獻立、受持は築地ホテルと新橋の花月、互に腕を揮うて來賓二千の舌に其の巧拙を競ふ由、などと孰も仰山の事のみなるに、今朝の新聞を見ると、若し晴天ならば、今日の女子學院の祝賀會には、畏くも皇后陛下を初め奉り、某宮、某宮の二內親王殿下、某宮妃、某宮妃等打揃ひ御臨場相成る由と、其時までの御順路をさへ細かに記してある。都民は皆な目を瞬つた、在學生は常に千名に近く、其の基本金は五十萬圓、器械の具備した事から教授方の整頓した事、卒業生には多くの名媛を出して、最早東洋屈指の大學校ではあるが、申さば一個の私立校に陛下の行啓遊ばさることとは、如何にも異例の如くに感はるゝので。

三四日打續く春日和、今日も南の風晴と云ふ天氣豫報は中りて、寒がりも綿入を一枚脱ぐ程の陽氣である。陛下の御出門は一時、祝賀式は二時半と有るに、駒込から巢鴨に掛けて、來賓の馬車、見物人の雜沓、午過からは容易に通切れぬ程である。

學校の正門前は、爰に綠色の虹の湧きしかと思はるゝ大綠門、交叉したる大國旗は微風に重く搖いで、其端は正に御者の絹帽子を掠めん許りに垂れて居る。道は撒砂に清め、兩側は巡査の警衛、着御の時刻次第に近けば、騎馬の警吏頻に上下して、群集の動搖は十里の長汀に打つ潮の寄せては返す如くである。

正門から七八町が間は、山の手名物學校の女生徒整列して、錦の幕を張りしにも似たるが、此處から彼方は某佐官邸の石垣に沿うて、道幅急に狹きだら／＼坂、群集の頭の遂に黑く見渡さるゝ間を、一條の御通路、此方より逆行する者を禁じたれば、馬車を驅る者、人車を走

らす者、宛然流に浮ぶ木の葉の如くに、女子學院の構内へと注込むのである。忽ち來賓の馬車は絶えた。最早御着あらせらるゝと覺ゆるぞと、群集は襟を掻合はせ固唾を吞んで、頭の物を取るやら、姿勢を正すやら・・・。

「こら〳〵、何處へ通るのか？」

一輛の腕車が驅けて來ると、一人の巡査は敏捷くも梶棒を押へた。

「へ、染井へ參りますんで・・・。」車夫は一も二も無く恐入つた、車上の男は、果して女子學院への來賓では無かツた。

「今此處を通ツちや可かん。」と、巡査は大聲に叱つた。

車夫はへどもどして、幾回か首を垂げて、直ぐ樣群集の中へ腕車を曳入れようとした。

「こら、お前も降りなきや可かん。」また一人の巡査は、其の車上の男を叱つた。

髯の長い二重瞼の其の男は、見掛にも依らず、慌てて腕車を降りるや否や、ぴよこ〳〵叩頭したが、その機に黑の山高帽をぽこんと地面に落した。兩側からどツと笑聲が起つた。

「こら！」と巡査はまた其の聲を制した。

男は赤くなツて、窃々と人の中に消えた。

すると、此の時しも坂の曲角に立つ人々の眼は、皆一樣に輝いて下の方に向いた。此方に立つ群集も、そりやこそ御出でだと首を伸し、人の背後なるは足を爪立てた。

鈴の音高く、見れたのはすらりとした肩の滑り、デートン色の自轉車に海老茶の袴、髮は結流しにして、白リボン淸く、着物は矢絣の風通、袖長ければ風に靡いて、色美しく品高き十八九の令孃である。

兩側に列ぶ幾萬の目は、只だ此の自轉車を逐うて輝くのであるが、令孃は學校にのみ心急ぐか、夫とも群集の前を羞かしいのか、切りにペタルを強く踏んで、坂を登れば一直線に、傍目も觸らず正門を指して驅付けんとすると、今しも腕車を曳込んだ雜沓の間から、向う側に移らんとしたらしく、二人の書生が不意に躍出した。

曲角の出合頭、互に避くる暇もない。後なる書生に自轉車が衝突つたと思ふ間も無く、令孃の體は横樣に八九尺も彼方に投げられ、書生は仰向きに其處に倒れたのである。

第二　病院

（一）

大學醫院の外科病室の長廊下で、兩方から行逢つた若い二人の看護婦は、互に莞爾して、懷かし相に窓際に立止つた。

「ちよいと、貴女の患者は大變な別嬪さんだツてぢや有りませんか。餘り評判が好いから、私、一寸見に行く處なのよ。」

「えゝ、別嬪さんよ、貴女その新聞御覽なすツて？」

「新聞に出てるの？　何新聞？」

「何ですか、二の側で其樣な評判でしたから・・・。あの、女子學院の生徒で、大變に英語の優る女ですツて。ですからね、昨日なんかも、皇后陛下の御前に出てね、何か英語のお話を御覽に入れる豫定でしたツて・・・。」

「爾う、其樣なに優るの？　だツて、未だ十五六にきや成ら無いツてぢやありませんか。」

「いゝえ、十九よ、私、入院證を見ましたもの、千葉縣香取郡佐原町平民、學生、萩原初野・・・。」

「あら、田舍の女？　ま爾う。私はまた、華族とか高等官とか、紳士の令孃と許し思つてたら・・・。田舍の女なら、何程別嬪さんでも知れてるわ。」

「いゝえ、でもそれは別嬪よ、全く別嬪さんよ。目の大きいね、鼻の高い、色なんぞは、宛然透

通る樣なのよ。彼樣なに苦痛んで居て彼樣なに綺麗なんだから、平常はまア、何樣なだらうと思ふ位よ。」

「爾う、其樣なに？」

「貴女に見せたら、必然ぽーッとなッ了ふわ。」

「見たいわねえ。」

「來らッしやいな、見せて進げるから。」

「貴女の附いてらッしやる時で無きや可笑いわ……、一緒になんか入つてツちやア。今は何してるの、お眠つてて？」

「正午頃から漸と眠つたの。今朝までの、其の惱み方ッたら無いのよ、熱が上つてね、もう、譫語許し云つてるのよ。」

「可哀想にねえ、腕を折つたんだッてぢやありませんか。」

「え、上膊骨の外科頸……。」

「餘程酷く落ちたんだわねえ、自轉車も怖いわねえ、好くまア、頭を怪我しなかッたこと。」

「矢張し、頭を怪我しまいと思つて、そら、夢中になッて手を突いたんでせう。」

「だけど、自轉車へ乘るなんて、餘程お轉婆さんねえ。」

「いゝえ、夫は、餘程確乎した氣性の女よ、彼樣なに苦しがッててね、醫師に聞かれると、判然答へるんですもの……。加之に、其の譫語がね、それは感心な事を云ふのよ。」

「何樣なことを？　情夫の事でも云やしなくッて？」

「いゝえ、此ん許しも……。何でも、妹か何かでせう。波ちやん波ちやんてね、種々な事を云つて、何でも論して聽かせる處でせうよ……最う少し辛抱して居てお呉れの、それから、書を讀む許しが學問ぢやない、苦しい境遇に居つて、心を清く持つのが一番の學問ですッて……。」

「でも、其樣なに譫語を云ふなら、一語位男の事も出さうなもんぢやありませんか。それを聽き度いわねえ。」

「始まッたよ。ほゝゝゝ。」

「爾う云ふ容貌なら、誰も放棄ッとく筈は無いんだもの……。ぢやア、全くの處女か知ら？十九にも成ッて、感心だわねえ。」

「處女は最う處女に違ひ無いけれどね、爰に一つ解せない事はね、始終、病狀を視に來る男が一人在るのよ。」

「へえ、何樣な男？」

「何ですよ、其樣な仰山な顏をして、ほゝゝゝ。」

「でも何樣な男？　學生？」

「え、法科の制服を着て居る男よ。」

「大學の？　まア、何樣な男？　何て云ふの？」

「何て云ふか知らないけど、男らしい、立派な學生さんよ。昨日もね、入院する時一緒に附いて來たし、今日も、今朝ッから最う、三度も視に來たのよ。」

「へえ、怪しいわね。」

「だから、誰の鑑定も、何か關係の有る男に違ひ無いッて云ふのよ。」

「私も爾う思ふわ。」

「だけれど、見た所では、何うも爾う云ふ樣子も無いのよ。」

「ぢや何なの？　同胞？」

「左樣ねえ、同胞にしては似て居ないし。」

「ぢや許嫁男？　でなきや從兄妹？」

「左樣ねえ。」

「だッて、大體擧動でも解るぢやありませんか。まア、談話の樣子は何樣なの？　其の、口の利きッ振がさ？」

「それが、一回も未だ談話を交ないのよ。だッて、昨日は其の通り人事不省でせう、今日も、來るには來たけれど……、彼樣なに苦痛んで居て、傍に誰が居るか判らない位ですもの、談話を交よ

うたッて、交る暇なんか有りアしないわ。」
「その談話を聞けば、必然判るんだけれどねえ。」
「私も、爾う思つて氣を着けてるけれど…。それにね、それに可笑いのよ、先刻もね、學校の女教師とか云ふ女の來て居る時にね、また視に來てね、人が居るもんだから、體裁惡さうにしてね、而して、私を呼出して病態を訊くのよ。」
「夫ぢや愈よ怪しいわ。同胞とか從兄妹とか云ふなら、何も、他人が居たから入れ無いッて法は無いでせう、可笑いわ、可笑いに極つてるわ。でなきや…。」
と聲の高くなるのを一人は袖を引いて、
「一寸一寸、背後を御覽なさいよ。背後を…。」
と低聲で注意する。
振返れば、玄關まで一目に眺めらるゝ長廊下を、十六七とも見える美しい令嬢が、海老茶の袴の裾より見事な靴下細く、纖細な手には
いゝいゝ
しツとりとした袱紗包、病室の番號札を讀みながら此方に歩み來るのである。二人の看護婦は言も無く、其の令嬢の通り過ぐるを眺めたが、
「まア、美い容貌ねえ！」と低聲に目を光らす。

「服裝が莫大した服裝ぢやありませんか。それに彼の指輪…。何でせう、ダイヤか知ら？」
「何樣な處の令嬢でせう、何でも、餘程良い處のだわねえ、美い姿だこと…。」
「いゝえ、萩原樣の方は、彼よりか未だ未だ、ずうッと優よ。」
「彼女より？」
「えゝ、優ですとも、色だッて白いし、もッと艶々して、第一、彼樣なに瘠せてやしないわ…。おや、私の室へ入つてよ。」
「必然、萩原樣のお友達でせう。」
「未だお眠つてるか知ら…。失禮しますよ。」
と一人が彼方に小走に去らうとすると、
「ぢや、後に行つてよ。」
「えゝ、來らッしやいな。」

（二）

看護婦の入つた室は、此の側の曲角から二室目の上等室である。
「萩原樣はお眠つて居らッしやいますのねえ。」
徐に中仕切の扉が開いて、次の室から今の令嬢が出て來たのである。看護婦は、此の社會の特有とでも云ふべき、氣取つた樣な一種の會釋をして、

「は、午後からは、好い鹽梅にお眠みになりまして…。まア貴女、此方へお掛けなさいまし。」
と云ひながら、看護婦は前に寢室に入つて、消え掛つた暖爐の前に椅子を直し、蜜柑の皮と共に石炭を掬つて、ぢやくりと一つ焚べたものである。
壁白く天井高き五六坪の一室、眞中より少し窓際に寄せて鐵製の寢臺、向うの隅棚には鏡一面、之には白いベッドから白い被蒲團、括枕に崩れ落ちた患者の髮、溫度表の下に垂がッてる西洋手拭などが、青く斜に映つて居る。
令嬢は暫く寢臺の側に起つて、眠りながらも時々額を顰む患者を視詰めたが、頓て徐と身を退いて、
「大變な事になッたわねえ！」と溜息と共に口に出したが、白い帽子の看護婦を見ながら、「些とは、使用へる樣な手に成るでせうか？」
「成りますとも、もう、全然癒つて了ひますよ…。まア貴女、お掛けなさいまし。」
「其樣なに折れて了ひました物が、また使へる樣に？」
「癒りますとも、三週間も經てば、もう全治退院になりますよ…。」
「まア、只た三週間で…？」と初めて其處の

椅子に腰を卸して、「其様なに速く癒るもんでせうか？」

その聲が高かッたのか、患者は目を覺したらしく、口の中でむにや〳〵と唸くのが聞えた。二人は背後を振返つた、而して暫く物も云はずに眺めて居ると、被蒲團が緩く波を打つて、「あー。」と深く溜息をした。

「お目覺ですか？」看護婦は顏を覗く。

患者は又口をもぐ〳〵爲せて、

「凍氷を一片下さいな。」

「萩原様。」と令孃も起つて來て看護婦の後から覗いた。

「まア、夏本様なの。」と患者は眼を瞬つた。

「大變な事を爲たわねえ。」と顏を寄せると、

「もう、此様なに成ッ了つたの。」と聲も震へて、い、はら〳〵と涙が溢れた。

それと見ると、此方も急に悲しくなッたらしく、潸然んだ眼を慌てて手巾に押へた。看護婦も二人の様子を見て、何でも非常に親しい間柄に違ひ無い、他に聞かせぬ談話も有らうと思つた。で、凍氷の碎片を口に投れようとすると、患者は濡れた目を閉ぢて頭を掉るので、夫を機に室の外に出て行つた。久くして、

「好く來て下すッたわねえ、」と患者は染々云つた、「私、何様なに貴女に會ひたかッたらう……、だッて、昨日は最う、此の儘死ぬ處かと思つてよ。」

「馬鹿馬鹿しい、義姉様のやうでも無いわ、これん許しの負傷で死んで何うするの。」と笑顏を作つて、「だけど、今朝新聞を見た時はね、私、實に吃驚してよ……。直ぐにも駈けて來ようと思つたけれども、母様は、もツと暖かに成ッてからでなきや可けないッて、何うしても出して呉れ無いんですもの、本當に氣が氣で無かッたわ。」

「でも、最う快いの？」

「快いも不快いも、只だ鼻風を感いたのよ。」

彼女は、それが爲に四五日以來外出を禁められ、昨日の記念會にも出なかッたのである。

「貴女は直ぐ風を感くのねえ。」と凝然と其の服装を眺めて、「薄着だわ、夫で寒か無いこと？」

「暖かだわ、」と云つたが、何うしたのか、患者の顏は見て居る間に淋しい色に變つたので、「何うしたの？　痛んで來て？」

「いゝえ、」と微かに答へたが、續いて深く溜息を洩した。

友達の美しい服装を見て、昨日着た我が一張羅の小袖、自轉車などを想起したのである。何様なに破れたか、何様なに毀れたか、最う再び用ゐられぬ物に成ッて了つたらう、今更それを惜んでも仕様がない、此様な大負傷までしたのだもの、舊の様な身體に成れれば、最うそれで滿足せねばならぬのだ。けれども、今後の我が身を顧みれば、最早如彼いふ服装などをする望は無いのである。

「あゝ！」と又嘆息して、「私の様に不幸な者も無いわねえ。」

「其様な事は無いわ、怪我ですもの、誰だッて、怪我なら詮方が無いわ。」

「だけれどねえ、芳江様……。」と云つて言澱む。

「はア？　何？　何なの？」と聞いても言葉なき患者の目には、又しても涙が浮んで居るので、「可厭、義姉さんは、其様な哀しい事許し想つて……。不治の病氣に罹つたぢやあるまいし、退院する時には、舊の通りの體に成ッて退院されるぢやありませんか。それは、今の内は痛みもするだらうけれど、だッて夫位の事で精神を挫くなんて、餘り意氣地が無いわ……。」

而ると患者は、行きなり利く方の手を伸べて、友達の纖細な手を強く握つた。握られた手の主ははツと思つて、その蒼白い顏を微し紅くした。

「堪忍して頂戴よ、私ね、精神を挫きも何うもしないけれど、芳江様を見ると、急に氣が弛んでね、理由も無く哀しくなッて來たのよ。矢張り、獨立心が弱いからなんだわねえ。」
「其様な事は無いけれど。」と芳江は離された手を徐と引いた。
「漸との事で、妹も故郷へ歸したし、今後は最う、煩い事も無いんだし、學資も兎に角間に合つて行くしするから、六月迄は一勉強してね、餘り惡くない成績を取り度いと思つて居たんでせう、其處を此様な酷い難に遭つたもんですから、希望も計畫も、もう、めちや〳〵に成ツ了つた様に感つてね…。」
「夫れは、義姉さんに成れば無理はないけれど、だツて、長く入院つてる譯ぢやなし…、試驗にだツて十分間に合ふわ。」
「いゝえ、今は最う何とも思はないの…、直ぐ退院が出來ると云ふ事ですもの。だけれどねえ、初めは最う、何うなる事かと思つたのよ、肩から先は、宛然、鋸ででも挽かれる様に痛むし、熱は出るし…。」
「爾うでせうねえ、私も、何様なに痛んだらうと思つてね」と芳江は美しい眉を寄せて「それで、貴女、如何して此處へ連れて來られたの？」
「それが、些とも分らないのよ、目を開いて見るとね、何時の間にか此様な處へ臥かされてゐるんでせう…。」
「ぢや、誰に連れて來られたかも…？」
「分らないの…。先刻ね、楠田先生が見舞に來て下すツたから、事務の方に聞いて貰つたらね、入院證書には、下宿屋の印が捺してあるんですと。」
「ぢや、島井の主婦が來たのか知ら？」
「必然、警察からでも呼ばれて、詮方なしに保證人に成ッたでせうよ。爾うでも無きや、彼の主婦が何うして。」
「幾ら島井の主婦でも、夫位の事は爲て呉れるでせうよ…。保證人と云つた處が、僅か三週間經てば退院が出來るんですもの…。」と云ひながら、芳江は忘れて居た見舞の西洋菓子を出した。
「三週間？」患者は解せぬ眼をした。
「え、私今、此處に居た看護婦の人から聽いてよ。三週間で、全治退院が出來ますッて。」
「三週間？ まア、其様なに長く費るの？」
「長いことは無いわ、只た三週間ですもの。」と芳江は笑出さうとしたが、對手の顏色には分明と心配の影が見えるので、急に眞面目になツて、「義姉さんは、幾日許し掛ると思つてて？」
「三日も立てば、最う身體を動かしても可いッて云ふからね、私は、五日か…長くも一週間位で退院されると思つててよ。」
「其様な大負傷をして…？」
「だッて、三週間なんて…、」と考へる顏色をして、「私は、到底も其様なに長く在院つてる譯には可けませんわ。」
「何故？ 何故在院つてられないの？ 假ひ何様な事情が有つた處で、癒くならなきや仕方がないでせう。」
「だッてねえ…。」と凝然と芳江を視た。
「何うしたの？ 何か、在院つて居られない事情でも有つて？」
「此うして居ればねえ、日に、二圓以上も費るのよ。」
「二圓費つても三圓費つても、全治するまで居なければ…。」
「…加之に、先刻故郷へも手紙を出したんだから…。」と又嘆息した。
彼女は、今朝の新聞に自分の負傷した記事の出て居る事を聞き、故郷の母に心配を懸けまいと思うて、四五日で退院する由を、見舞に來た學校の女教師に代筆の郵便を賴んだのだ。一旦

彼樣な書狀を出して、三週間も費るから夫だけの送金を頼むと、今更願つて遣られもしない、又幾ら願つた所で、金錢に嚴格しい異母兄の、夫を承諾する筈もないのだ。

「あゝ、また頭痛して……。芳江さん、看護婦を呼んで頂戴な。」と額を顰める。

「貴女、其樣な餘計な心配するからだわ。費用なんぞ幾ら費つても、母に爾う云つて、私何うにでも爲るわ。」

「だけれどね、貴女はね、私より年下なんだから、若し其樣な事でもすると……。」

「また、義姉樣は其樣な事を……。」と芳江は怨めし相に云つた、「口で許し義姉妹だなんて、私なんか賴には爲て下さらないんだもの、餘りだわ。」

「いゝえ、爾う云ふ譯ぢや無いけれど……。」

「だツて爾うだわ、波ちやんを歸す時だツて、私の願つた事は採用して呉れないでせう……。それぢや、餘り水臭いと思ふわ。」

「其樣な事は有りませんよ、貴女の心はね、夫は熟く分つてるけれどね……。」

「ぢや、今度の事は可いでせう、私に任して下さるでせう……病院の費用を、ね、可いでせう？」

「併しね、それはね……。あゝ痛い、」と耐へられぬ樣に額を顰めて、「看護婦を呼んで頂戴な。頭が破れかへる樣よ……。あゝ痛い……、あゝ！」

芳江は驚いて看護婦を呼んで來た。氷嚢を載せても痛が去らぬので、醫員を連れて來る樣な騷をした。芳江は、我が談話から此樣な事に成ツたのを悔いながら、日沒までも傍で看病をして居た。

第三　下宿

駒込は千駄木林町に、某淨土寺院の地續き、杉垣薄く廻らして、泥濘の露路深く、突當は北向の潜格子、下宿營業島井もと、と記した看板には、最う皺くちやに成ツた明間ありの紙札、之には但し男子の客は御斷り申候、と書添へてある。

去年の春、女學生の醜聞が世間に喧しく無かツた頃までは、帝國女子學院の認可下宿として、十に餘る室は常に滿員の繁昌を續けたものであるが、校則改正の結果その認可も取消されて、急に今日の淋しい有樣、親戚とか何とか事情を作爲へて居る二三名の他は、悉く女子學院ならぬ名も聞えぬ女學校の學生、それから他の職業に轉じようとして居る看護婦、産婆、まだ給料に有付かぬ女教師、始終醫師に通ふ子宮病患者、と云つた樣な輩のみ下宿して居るのだ。

客が此れと決つてないので、引斷なしに移動がある、從つて下宿料も、月末月末にきちんと入つた元の樣な譯には行かぬ。ならまだ可いが、二月三月と滯つた擧句、ふいと姿を隱す質の宜しからぬ者さへある。主婦は大歎しで、此樣な詰らない商賣に無い、と人を見ると算盤珠を彈いて示せ、

「そら、ねえ、此れぢや貴女、淺草公園へ行つて、鯉に麩でも遣つてる方が餘程氣が利いてるぢやありませんか。」と云ふ。

で、家屋は餘程以前から賣物に出してあると云ふ話も有るが、買人が出ぬのか、値が纏らないのか、愚癡を零しながらも相變らず營業を續けて居る。近所や出入の商人の噂では、主婦は種々な世界を渡つて來た苦勞人で、確り者で、甘い酢で食へない人で、損の行く商賣を一日も遣つて居る筈がない、何しろ客は若い女生徒、此の頃は服裝を飾つた男も出入する樣子、其處にはそれ、明けて云はれぬ巧い儲け口

もあらうさ、と仔細有りげに云ふ。
午後四時頃、日沒には未だ間が有るのに、白い物でも落ちて來さうな空の色、昨日の雨に濡れたまゝの庭は、枯木立靜り返つて、室々の窓の中には人聲も聞えない。
みしり／＼と梯子を降りて、煮物の香のする臺所の前を、
「左樣なら、」と其處に働いて居る下婢に挨拶して通るのは風呂敷包の書籍を長く背負つた男である。
而ると、直ぐ其處の斜向ひの室から、
「お兼、何だい？」と荒びた女の聲が起つた。
下婢のお兼が未だ口を開かぬに、
「へい、拙者で。」と男は一寸足を止める。
「おや、貸本屋さんかい。先刻からまだ居たの？」
「へゝゝ。」と鼻に皺を寄せて笑つて、「何ぞ御用で？」
「一寸待つとお呉れ、今朝中村さんからね・・。」
と云ひながら、障子を明けて出たのは、丸髷の、五十近い主婦である。
「へえ、中村さんのですか・・・。」と貸本屋は、禿掛つた頭を動かしながら歩寄つた。
「確か五十八錢だッたねえ。お前さん、五圓紙幣でお釣錢を持つて無いだらうか？」
「へえ、お生憎樣で・・・。なアに、またお便次に戴きませう。」
「爾う、ぢや、次回來た時まで借りとかうかね・・・。」と主婦は、出した紙入を肥つた帶の下に仕舞つて、「だけれど、先刻からお前さん、何處で油を賣つてたのさ？」
「へ、お二階の？」
「石本さんの室かい・・・？　お前さん又、惡い本なんか持つて來たんぢや無からうねえ？」
「へゝゝ。」
「へゝゝぢや無いよ、彼樣な物を持つて來られちや、全く困るからさ。」
「いゝえ、そんな物持ッちや參りませんよ、小說本許りですよ。」
「本當かい？　私は、此處で改めて見るよ。」
「お改めなさいとも。」と云ひながら出て行く。
「本當なら可いけれど・・・。」と主婦は其の背後を睨めて居たが、頓て、
「仕樣が無いよ。」と獨語しながら、今出た室に再入らうとして、其處の障子に手を掛けるや否や、吃驚した樣に、
「まア、此の煙！」と顏を顰めて身を反した。
紙卷煙の煙の渦卷く底には、押入と床の境の柱に背を凭せて、色白の若い男が、黒の二重鳶を被たまゝ胡坐を組いて居る。
「毒ですよ、些と明けときませう。」と主婦は內に入つて、「寒いんですか？」
「いゝや、寒か無いが、可いのかね？」と何處か笑つてる樣な調子。
「何がです？　此處を明けてもですか？」と主婦は小火鉢を間に男の對うに坐り、「大丈夫ですよ、誰も覗いて見る者は有りませんよ。まア御覽なさい、此の煙ですもの・・・、ふう、ふう、おゝ大變だ。」
「如何だ、最う一戰爭來る氣が有るかね？」
「遣りますとも、撒いて下さいな。」
「敗けた人から撒くさ。」
「でも、貴方は上手いから。」
若い男は、火鉢の傍に散ばッてる花骨牌を拾上げて、細い指を器用にはた／＼と切始めた。二十四五の年輩、少し顏は小さいが、色白で、髭を剃つた跡が蒼々として、頭髮はコスメチックで綺麗に分けて居る。二重鳶の下から見える其の服裝は、大島らしい十の字絣に、黒八の襟の揃うた下着を二枚も重ね、白ッぽい八丈格子の絲織の書生羽織を着て居る。
主婦は木綿盡め、寒くさへ無ければ何でも構

はぬ、と云つた樣に、肩を丸く着込んで居る。何方かと云へば大女の方で、手も頸も肥つて、色は黃色い。目の緣は小皺に刻まれ、鬢の邊には大分白い毛が見えるのだ。

「……今の話は、彼は皆な貸本の見料かね？」と男は、骨牌を撫きながら問いた。「五十八錢とか云つたが、何樣な書籍で、其樣な高い見料を取るんだらう？」

「いゝえ、彼は貴方、二月分も溜つたからですよ。一種の御本で其樣な、五十何錢なんて、其樣な馬鹿馬鹿敷い見料が有るもんですかね。」

「でも、今の樣子ぢや、隨分怪しい物も持つて來るやうぢや無いか。」

「怪しい物ですか、はゝゝ。」主婦は高く笑つたが、「流石は酸井樣だよ、お耳の早いこと…、はゝゝゝゝ。」

「だが、僕は初めて聞いたが、女學生が其樣な物を借りて見るのかねえ？」

「いゝえ、手前共では貴方、此うやッて私が眼張つてますもの、其樣な物なんぞ入れさせるもんですか。」

「一々檢査する譯にも行かないぢやないか…。併し驚いた。全く意外だ、貸本屋も拔目は無いねえ、可い所へ目を着けたもんだ、是は必然的るよ。」

「先アづ、商賣を始めるなら貸本屋ですかね、はゝゝ。」と主婦は花骨牌を叩きながら、「貸本屋に依ッちや、隨分質の惡いのがございますからねえ。彼の爲に墮落る女學生さん許しも、中々少數いことぢや無いでせうよ。夫で無いでも、私が此うして見てますに、最う小說本を借りる樣になッちや駄目ですねえ。」

「そんなら家へ入れなきや宜さゝうなもんだ。」

「爾うは行きませんよ、舊と違つて、爾う嚴ましく云ふ權利は有りませんもの。夫に、手前の方で幾ら嚴ましくしても、今ぢやお客が曳張つて來ますもの。」

「爾うか。ぢや仕樣が無いね。…ぢや、今の其の女も、其の貸本の方の組だね？」

「其の女…其の女ッて誰です？」

「今話した娘さ。」

「萩原樣ですか、萩原樣は貴方、彼の方は別物ですよ、何うして、貸本どころか、學校の勉强の他には、餘所見一つなさらないッて方ですもの。」

男は義齒を光らして笑ひ、

「大層褒めたもんだね。」

「だッて、實際のお話ですもの。」と主婦は力を入れて云つた、「また、如彼で無きや、彼樣な成績の優い筈はありませんからねえ。」

「お主婦が爾う云ふ位ぢや、餘程變つてると見えるね。」

「變つてるッて貴方、如彼が本當の學生さんなんですよ、變つてるのは、他が變つてるんでさアね、勉强家で品行が良くッて…。」

「それから美人で…。」と男は調戲ふ樣に口を插れる。

「爾うですとも。」主婦は眞面目に點頭き、「別嬪さんでは有るし、お家は財產家だし…。」

「加之に、片方の手がぶらんさんだしか、はゝゝ。」と笑ひ出した。

「また其樣なお口の惡い事を。手は貴方、最う直き癒ッ了ふぢやありませんかね。」

「夫は冗談だが、卒業して何う仕ようと云ふんだらう？ 財產家なら、學問が無いでも、幾らも貰ひ人が有りさうなもんぢや無いか…？ 必然何だね、許嫁でも在つて、其奴が敎育が無ければ不可いとか何とか…、其樣なところだね？」

「だッて、當今は最う、何樣な處の阿孃さんでも、皆な、御修業なさるんぢやありませんかね。」

「けれどな、皆な夫々の事情が有るさ。獨立して生計を立てなきや成らんとか、或は、許嫁の希望だとか……、何か其處に仔細が有るさ。」

「夫はまあ爾うでせうけれど。」

「でなきや、女子が學問して何に成るんだ…？學問か、や、一口に學問て云ふけれど、一學科を修めるのは容易なことぢや無いんだからねえ、男兒の學生だツて、首尾好く成功する者は一割……漸と二割有るか無しだらうよ。」

「爾うでせうよねえ。」

「夫も可いが、首尾好く卒業してからがさ、先づ、喰つて行くだけ取れれば上出來、でなければ、借金を拵へる許しだ。まア、何方かと云へば借金を拵へる方が多いね、況して女だ……、女て云ふ物は、是で男よりは金が費る物だからね……。」

「いゝえ、女だツて女にも依りけりですけれど、金の費る事は男の方ですねえ。」

「女には衣服と云ふ物が有るさ。」

「男の方にだツて有るぢやありませんか……。まア、衣服だツて頭の物だツて、女の使ふ御金は、使つた丈の品がちやんと其處に殘つて居ますけれど、殿方の遣ふお金は爾うは可けません。藝者だとか、交際だとか……、その外にも、貴方の樣に爾う云ふ……」と迄云つたが、「ほほゝ、はゝゝゝゝ。」

男も笑つて、

「ぢや、男の方が餘計に費るとしても可いさ、兎に角、女の腕で取る金なら知れたもんだよ、此の物價騰貴の世の中で、二十や三十の給料が何になるんだ、少し好き嫌ひを云つたら、一月の屋賃にだツて足りやアしない。」

「いゝえ、女子學院の本科を卒業したとなると、未だ未だ猶と取れます。去年卒業なすツた方で……矢張し拙者共に居らしツた方ですけれど、廣島の學校へ、五十圓で抱へられて行きましたもの。萩原樣は如何云ふ思召か知れませんけれど、月給取りにお成り成ツたら、五十圓の物は七十圓も……八十圓もお取りなさるでせうよ、だツて、學校の人達の評判て云ふものは、夫は大した物ですもの……。」と、主婦は、我と我が談話に感心して首を捻り、「全く人望が有りますねえ、蔭でだツて、惡口一つ云ふ人は有りませんよ。」

「爾うかねえ、餘程優ると見えるね。」

「何しろ、女子學院の花だの、珠だのツて云はれる位ですからねえ……。さ、今度は貴方の番ですよ。」と主婦は、我が手の骨牌に目を轉したが、また、「さ、殿井樣、如何なすツたんですよ、早くお遣んなさいましよ。」

「ま、此樣な事は止さう。」と殿井は、骨牌を其處に投つて、「いゝ、もツと、その萩原の話を聽かうぢや無いか。」

主婦は呆れた顏をして、爾う云ふ殿井を眺めて居たが、頓て、

「おほゝゝゝ、はゝゝゝゝ。」と笑出した。

「何だい、他の顏を見て突然に笑ふなんて……、失敬な。」その癖、自分も可笑いのを耐へて居る樣な風である。

「ほゝゝゝ、また貴方、そろ〳〵持病の蟲が起りましたね、はゝゝゝ。」

「だツて、餘りお主婦の話が巧いもの、つい、迷はされて了ふぢや無いか。」

「けれども不可ません、萩原樣ばかしは不可ません。」と主婦は手を振つた。

「不可ないツて？　何が可可ないんだ？　可笑いぢや無いか、談を爲ちや可けないのかい？」

「いゝえ、お話は幾らでも致しますけれど、あの方許しは不可ません。お堅いんですもの、不可ません……。」

「だから、何が不可ないと聞いてるぢや無いか、可笑なお主婦だ、自分獨りで合點して居るんだ、

はゝゝ。」と無理笑のやうに笑つて、「まア冗談で無く、その話を聽かせないか……、郷里は千葉縣の佐原とか云つたね？」

「萩原樣ですか……？」と主婦は初めて手にした骨牌を捨てて、「大變な御執心ぢやありませんか……。ですけれども不可ませんよ、幾ら御執心でもこれ許しは駄目ですよ……。」

「また始まッた。」と殿井は焦燥ッた相に云つた、「執心も執心で無いも、只だ談を聽く許しぢやないか、厭ならお止し、もう聽かない。」

「お話だけなら譯はありませんがね……。」

「ぢや、勿體振らないで、疾く話してお聞かせよ。その代り、今夜はお主婦の好きな物を散財つて上げよう……。」と殿井は二重鳶を脱いで胡坐を組き直した。

「爾うですか、爾う云ふ事なら私も……。」と主婦も膝を進めたが、男の注ぐ急須の空なのを見て、「おや、注しませう。お兼、一寸お兼……。何處へ行つてるだらうねえ。お兼や。」

「はい〳〵。」と云ふ返事は、遙か玄關の方から駈けて來て、障子の外から、「お主婦、お呼びでしたか？」

「何處へ行つてるんだよ、」と障子の間から湯沸を出して、「一寸、此れを注してお來でな。」

それと同時に、赤々、肥つた下婢の手がぬッと内へ入つて、

「只今、この郵便が。」と青い封筒の書狀と葉書を投込んだ。

主婦はそれを手に取上げたが、

「此の葉書は、これは石本樣へ來たのだよ。」と再びお兼に渡して、我が名を認めた書狀を、近視眼の覺束ない眼で見詰める。

「骨牌を曳く時は平氣で、文字を見る時に近眼に化るんだね、不都合な眼もあつたもんだ。ははゝゝ。」

「また其樣な……。」と云つたが、其の書狀を殿井に向けて、「これ、此れですよ、萩原吉兵衞ね、千葉縣佐原町、ね？」

「此れが何なんだ？」

「萩原樣の兄樣、此の方が戸主なんですよ。阿父樣は、何でも二三年跡に亡くなッたとか云ふお話ですがね……。」と云ひながら、主婦は開封した。

殿井は紙卷莨を喫みながら、眺むるとも無く主婦を眺めて居たが、

「如何したね？」と夫を讀んで居る主婦の顏色が變つたので、此う問いた。

「まア、何う云ふ譯だらう？」と主婦は獨語して首を捻つたが、再び前から讀み始めた。

「如何したんだ、其樣な顏色をして？」

「まア呆れた！」と主婦は書狀を其處に置いて嘆息するやうに此う云ふ。

「何故、何樣な事を云つて來たんだ？」

「實に亂暴ですねえ、是ぢや、義理も人情も知らないと云ふもんですねえ……。」

「どれ、見ても可いかね？」

「まア御覽なすッて下さい。私がね、此の間貴方、萩原樣の入院した事に就いてね……。」と主婦は息卷いて語り出した。

その云ふ所を摘むと、萩原初野が自轉車から落ちて入院した其の日の樣子から、自分が保證人に成ッた事、醫師の話では、三週間で全治退院さるゝ事、少しも其の痕が遺らぬと云ふ事、上衣は落ちた機に擦切れたが、他の物は何とも無い事、自分も時々見舞に行く事、及ばずながら出來る限りの力は盡す心算なれば、決して御心配には及ばぬ事まで、細かに認めた書狀を、初野が兄なる吉兵衞と云ふに送つたのである。

殿井恭一は、主婦の話を聞きながら此の來狀を讀むと、此樣な意味が書いてある。初野の事に就いて種々御親切を下すッて有難い、其の儀は厚く御禮を申上げるけれども、金錢の事

に關しては餘り立入つて御世話下さらぬ様に願ふ、それも一貴下に於て責任を負ひ下さるゝ御所存ならば格別に候へども」私より償却せしむる心算ならば、それは斷然止めて貰ひ度い、全體初野を修業に出したのは、一家親族悉く反對であるが、當人が強ての願に止むを得ず許したのである、從つて學資も定額外には一錢も送らぬ約束、私の方でも其の外の準備が無ければ、送る事が出來ぬ次第である、然るに此の度の御手紙に據れば、平生自轉車など乘廻し、又病室が寒がツて居るとは云へ上等室に入院するなど、その贅澤には驚き入る、然し當人には、其費用を手配の的が有つて爲たのだらうから、其處まで私の方から、苦情は申さぬ、只だ私の方では此の度の費用には一切關係せぬから、左様に承知して貰ひ度い、と云ふのである。

「酷く殘酷な物だね。」と殿井は讀終つて主婦に面を向けた。

「下宿屋と客とは云ひ條、申さば私は他人ぢや有りませんか、他人の私に此程心配を掛けて置いて、現在兄たり戶主たる者が、此様な不人情な事を云へるもんでせうか。」

「全く亂暴だねえ、これでも、同胞なんだね？」

「同胞ですとも。勿論阿母さんは違ふ相ですが、それでも貴方、兄妹は兄妹ぢやありませんかね。」

「母が違ふと云ふと？　初野さんは後妻の子かなんかだね？」

「爾うです、萩原様の阿母さんて云ふ人は、舊はお妾だツたて相ですけれど……。」

「成程、夫で此様に情愛が無いんだね。併し、夫にしても亂暴だ。金は持つてるんだらう？」

「持つてるのなんのツて、佐原でも屈指の財產家でさアね。」と云つたが、主婦は急に考へる顏色をして、「だけれど、本當にお金を送らなかつたら、如何したら可いでせうね？」

「入院料かい？　夫は、初野さんに手配の的が有るだらう。」

「如何ですか？　否え、お故鄕の外に的なんぞ有りますまいよ。何しろ、一日二圓以上、彼此三圓も掛りますからねえ、三圓が三週間……それから、六十圓から以上ぢや有りませんか、如何して貴方六十圓なんて……。」と云ふ中に主婦は眼を睜つて、「さア大變だ！　其様なお金なんぞ負擔はされた日にはまア！」

「其様な事が有るもんか、親類も有るだらうし友人も有るだらうし……、六十圓許し、金策へようと思や何うでも出來るよ。着物とか、書籍とか、何か有る物を賣つても出來ようぢや無いか。」

「ですけれどもね、」と考へて居たが、主婦は思出した様に座を起つて、「貴方、濟みませんが一寸何卒。」

「何を……？　如何するんだ？」

「一寸何卒……。些し見て戴き度い物が有りますから。」と主婦は前に立つて、此室から一間隔てた六疊の一室に入つた。

第四　其の室

此處は萩原初野が室である。四五日前までは、彼の記念會の朝、慌てて出たまゝに取散されてあるのを、主婦が丁寧に整理けて、見渡した疊の上に紙片一つ落ちて居ない。

「大變に暗い室だねえ。」と殿井はのツそり、敷居に立つて居る。

「貴方、まア靜になすツて下さいよ。」と主婦は殿井を內に入れて障子を閉め、其處の橫手の肱掛窓をがた／＼と明けた。

鼠色の障子から、薄い光線が射込んだ。目

に着く物はインキの痕に汚れた桐の勉强机、蒔繪の硯箱と鐵葉のインキ壺、それと並んで筆記帖が二三冊に英和字書の綴絲の切れたのを重ねて、その上に肉色の吸取紙を石の文鎭で押へてある。机の後には、二本立の桐の書棚と、硝子戸の洋本棚と並べてあるが、硝子戸には中の見えぬ樣に白紙を張つてある。また此の机の下には、反故紙に炭俵、それから緣の取れ掛つた栗材の角火鉢。

「宛然男書生の室の樣だね。」殿井は四邊を見廻して獨語した。女ならば、定めし見事な物、綺麗な物、色彩の濃い物に飾られてあると思ひの外、其樣な目に着く物は一品も無いので、當今の女學生としては變つて居る、成程偉い者かも知れない、と竊に感心した。

「貴方、まア一寸此れを御覽なすツて下さいな。」と云ひながら、主婦は押入から斜に自轉車を引出した。

「はゝア、此車か。」と殿井は傍に寄つて、「ピアスだね……隨分酷く遣つたと見える。把手が此樣なに曲つてらア、鈴も毀れたね……。でも、此車は未だ新しい、女だけに使用が良いんだね。」

「如何でせう、此樣な物でも、賣ふと云つたら早速買手が有るでせうか？　幾何位に取れるもんでせう？」

「賣るのかね？　如何して？　入院料を取られるから？　だツて餘り狼狽へた話ぢや無いか？」と殿井は笑つた。

「いゝえ、私が賣るんぢやありませんけど、過日、見舞に參つた時にもね、其樣なお話がありましたし、それに……。」

「賣る？　萩原が賣る氣なんだね？」

「だツて、此うなりや貴方、此樣な物でも賣らなきや、仕方が無いぢやありませんか？　如何云ふもんでせう、早速買ふ人が有るでせうか？」

「其ア有るとも、爾う云ふ別嬪の乘つたのだもの、幾人も買手はあるさ。」

「冗談で無くさ貴方。」

「なに冗談なもんか……。ぢや、僕が引受けても可い。」

「貴方が？　だツて、貴方には如彼いふ立派なのが有るぢやありませんか。」

「有つても可いさ、勿論、僕が買ふとすれば、其處に一つ條件があるね。」

「條件と仰有ると？」

「お主婦の話では嫁だ、當人から、直接に賴むんで無きや買はない。」

「そら、貴方のは直き其れだから可けませんよ。ほゝゝゝゝ。」と笑つたが、直ぐまた眞面目に成り、「本當の事、幾何位で拂へるもんでせう？　實はね、先月分の下宿料が其のまゝに成ツてるもんですからね、萩原樣はそれを氣に懸けて、其せもう、自轉車なんざ不用なもんだから、彼品を賣つて勘定を濟まさうツて、此の間も爾う云ふんですよ、けれども私は……。」

と云ふ主婦の顏を、殿井は訝しい眼で瞻めて居たが、

「先月の下宿料？　怪しいねえ。ぢやア、矢張し墮落生の仲間ぢや無いか？」

「いゝえ、墮落生なんて貴方……。」

「いや、お主婦の辯護も可いけれど、學資が滯り無く來て、眞面目に勉强して居る女なら、月々の下宿料の溜る筈は無いぢやないか、怪しいよ、何うしても此は怪しいよ。」

「いゝえ、些とも怪しい事はありませんよ、今迄は、只だの一回だツて此樣な事なんか無かつたんですけれども……。」

「ぢや、先月あたりから男狂ひを始めたんだ！」

「はゝゝゝ。まアお聞きなさいよ、男狂ひなんて、萩原樣が其樣な事を爲さる人なもんで

すか……！」

「ぢや、何故下宿料が拂へないんだ？　可け無いツて事よ、幾ら辯護しても駄目だツて事よ。」

「先月はね、お故郷から妹さんが逃げて參りましてね、最う久く、萩原樣の厄介になツて居たんですよ。だもんですから、方々の見物、買物、それから、お郷里へ歸す時の旅費、土產物……、何うして貴方、月々送つて來る學資で間に合ふもんですかね、加之に、感心に妹思ひですからね、二人一緒に出る時なんぞ、私ばかし肩掛をして、波ちやんが何にも掛けないぢや外見ないツて……其の妹が波ちやんて云ふ娘なんですよ……外見ないツて、寒い日でも貴方、何にも掛けずに出るんでせう、終ひには、自分と同じ樣なのを買つて遣りましたけれど……、まア、一體が斯う云ふ性なんですからね。」

「爾うか、ぢやア、中々感心な所があるね。」

「ねえ、感心でせう？　男狂ひだなんて、餘りお酷いぢやありませんか。」

「併し、其の時に、郷里から妹の金と云ふものが來たらう？」

「いゝえ、夫が參りませんの。」

「酷いね、其の兄と云ふ奴は何だい、商賣がさ？　憎い奴ぢや無いか。」

「舊は造酒屋だツたとか云ひますが、今は、別に商賣は無いやらですよ、何でも、銀行にでも關係して居なさる樣子ですが。」

「何しろ、餘程吝嗇な奴だな。夫ぢや萩原樣も可哀想だし、其の妹も可哀想だ。」

「夫よりは、阿母樣が何樣なに辛いんですか？」

「阿母樣？　阿母樣なんざ如何でも構はないさ。」

「何故？　年寄だから……？」

「女の年寄なんざ、世の中に不用の物だ。」

「まア彼樣な、はゝゝゝゝ。」と主婦は高く笑つたが、押入の內を覗込んだ殿井を退ける樣に手を擴げ、「何をなさるんですよ、其樣なに覗くもんぢや有りませんよ。」

「可いぢやないか、ま一寸見せて呉れ。餘り感心だから、何だか急に見度くなツた。」

「何を感心なさるんだか、貴方の事だもの、僻るもんですか。」

「ま一寸。」云ひながら、殿井はぐいと其の唐紙を明けたが、機に上の棚から轉げ落ちた物がある、「や、枕だ、括枕を遣つてるね。美い香だ、ふん、ふん、何だらう？　ま嗅いで御覽。」

「厭ですよ、殿井樣、汚ない。頭髮の臭氣ぢやありませんかね。」と主婦は其物を中に投り込んだ。

けれども殿井は、尙ほ紙門を閉めさせようとはせぬのだ。

押入の中は二段に仕切られて、上にはお納戸キャラコの裏の、紡績八丈のふツくら膨らんだ夜具蒲團が一組、縁の切れた茶色毛布の端、色の褪めた天鵞絨の襟の掛つた銘仙か節絲か、何でも萌葱色の多つた瀧縞の小搔卷、小豆色のネルの寢衣、これが又丁度襟の方が前に出て、汚目の見える肩當が綻びて下がツて居る。以上の物の上に、紫地のメリンスの座蒲團と、主婦が今投り込んだ枕までを詰めたので、脂ッこい天井板が跳反りさうである。それから、其の隣には縞ズックの支那鞄、吳服屋から仕立物でも入れて居いたらしいボール箱が二箇、桑材の西洋鏡臺、但し鏡には白金巾を被せてあるが、油やら白粉やらの汚染が附いたまゝに成ツて居る奴。

「や、此樣な物が在る。」下の棚を覗込んだ殿井は丸藥の入つてる小さな壜を拾上げて、「何だらう、黴毒の藥だな？」

「冗談を仰有いよ、萩原樣が其樣な藥を服むもんですかね……。それは貴方、夜分お眠られないもんだから、睡眠劑でさアね。」

「成程、健腦丸か、僕はまた、黴毒の藥かと思つた、はゝゝゝゝ」

「……まア貴方、其樣な搔廻すことはお止しなさいよ、何ですねえ、御人品に障るぢやありませんかね。よ、閉めますよ。」

「まア一寸。可いぢや無いかね……。」と殿井は、主婦の制止むるを肯かず、切りと其の內を見廻す。

　柳行李が二箇重なり、其の傍に紐で結へた雞卵の空折、中からは古新聞が溢出してゐる。それから婦人雜誌、算術を稽古した古手帳、風月堂の菓子の丸罐、洋傘に雨傘、これは孰れも袋に入つたので。

「おい、お主婦お主婦、大變な物が出たぞ。」と殿井は卒に勇んで云ふ。

「何です？」と主婦は肩から覗込んで、「其樣な事を爲すッちや可けませんよ。まア、錠をお明けなすッて？」

「なに、僕が明けるもんか、明いてたんだよ。そら、此物は如何だ？」

「何ですッ？」と主婦は、其の文庫から出た物を手に把つた。

「質屋の通だ！　此う云ふ物が出たら、最うお主婦の抗議も立消だらう。」

「まア、此樣な物が在るんですか。」

「如何だ、吃驚したね。ま中を開けて御覽、それ、二月二十五日、八圓で袷一枚と縮珍の丸帶、ね、二十五日と云ふと、女子學院の記念會ぢや無いか？」

「いゝえ、彼は二十六日です。」と主婦は呆れながらも通帳を繰返して、「茲に、六圓で風通の小袖と云ふのが消えてますよ、ぢや入替へたんだよ、まア、此樣な事を爲さるんですかねえ。」

「案外だらう？　だから、人は見掛に依らぬ物さ。此樣な事を爲るんぢや、最う、品行も大概推測が附くさ。」と笑つて、「だから、お主婦の云ふ事も餘り信にならないッて事よ。」

「ですけど……」と首を傾げて、「ま、待つて頂戴よ。これが二月二十五日と……。」

　主婦は通帳の日を調べて居たが、頓て小膝を撲つて、

「然うだ、彼の妹の來た時からだ、」と面を上げて、「可哀想ぢやありませんか、皆な貴方、お妹御に何か買つて遣る爲でさアね。それ、通帳の日が丁度……まア、感心ぢやありませんか……。」

　と云ふ時、臺所の方から慌しく下婢が駈けて來て、

「お主婦、お主婦、お主婦は何方です？」

「何だよ、此處だよ。」

「お主婦、速く來て下さいよ、萩原樣がお歸りになりましたよ……。速く來て下さいよ。」と叫びながら、またも彼方に引返した。

「えッ、萩原樣が……？」と主婦は吃驚して、通帳を文庫に投り込むや否や紙門をばたりと閉める。

　それより狼狽へた殿井は、直に縁側に出ようとすると、

「可けません、其方へ出ちや可けません！」と主婦は背後から曳戾して、遮二無二其處の肱掛窓から出さうとする。

　殿井は目を圓くして、

「冗談ぢや無い、此處から何うして出るんだ……？」

「ま、殿井樣、何卒早く……。」と無理に突出して、速くも窓を閉めて了つた。

　其處は垣根を添うて庭續き、前は便所の釣口板、椿が一本高く茂つて、其處の二階の戶袋を隱し、花は濡れた地に紋の樣に落ちて、掃除口には石灰の痕跡なく、殿井も思はず鼻を蔽うた。

「失敗な！」と彼は窓の中を睨め返したが、未

だ鼻緒擦も見えぬ紺足袋の下から、氣持惡き泥水が浸込むので、其足を爪立て、その衣服の裾を手繰つて、今度は金の入歯まで出して、―實に失敬な！」

室の内は寂然して、その初野の入つて來た樣子も無く、主婦の聲も聞えぬ。日沒に近き空は雲色濃く寒がツてるが、それでも西の山際が晴れて居るか、何處かに明るい光線が射して、高く飛んで居る鳥の下腹が赤く見える。

殿井は馬鹿馬鹿敷く、起つて居る譯にも行かぬので、成るたけ乾いた處を跳びながら、庭の木戸を開けようとすれば、内からさる、、が掛つて居る。忌々敷さに二つ三つ強く押すと、古くなッた建仁寺垣が、今にも倒れさうに搖くけれど戸は開かない。仕方なく檐下を杉垣に添うて廻れば、淺いか深いか行先に水溜が在つて、其の先は廣い茶畑を見越して寺院の白壁、何處か遠くからは井戸車の音が響く。

「畜生！」と四邊を睨廻して唇を咬んだ。

彼は如何にも當惑したが、頓て又元に引返した。其の摘み上げた衣服の下からは、縮緬の長襦袢の裾が溢れて、毛の厚い脛に纏まるのである。帶は繻珍、之に黄金鎖を卷いて、磁石、寫眞入、扨鉛筆などが、身體を動かすと共に燦爛する。

「……大丈夫でございます、確乎私に捉まツて居らッしやいまし。」と云ふ主婦の聲が、突然室に入つて來た。

何うやら二三人の跫音がする樣だ。殿井は耳を欹てた。

「何だね、氣の利かない、お蒲團は後にして、まづお枕をお上げなね。」と又主婦の聲。

續いて紙門に突當る音がした。

「宜うございますか……、徐と……、お痛かございませんか……。」

而ると、何を云ふのか聽取れぬが、靜な別の聲がした。

「はい、お冷水を……？」と答へたが、急に調子を高く、「それ、お爺……。」

お爺が出て行くと、

「既う快うございますから、何卒、彼方へ行らしツて下さいな。」と低聲ではあるが、明晰したのが聞えた。

「なんですよ、其樣な御遠慮なんぞ……。」と主婦が云ふ。

「いゝえ、少し安眠みたいんですから。」

其處へお爺が水を運んで來たらしい。暫く物音もせぬ。

―あー。」と溜息が聞えた。

「宜うございますか……？ では、ま暫く徐として居らッしやいましよ。」

「―種々と、何うも、御心配を懸けて濟みません。」

夫ツ切り返辭も無い、主婦も下婢も出て行つた樣子である。殿井は窓近く耳を寄せて、室内を窺つて居た。寂然として何の音も響き來ぬ。眠つたのか思つたらと、久くして微に欠伸するのが聞えた。

と、不意に殿井の袂を曳く者がある、愕然として振返ると、背後に主婦が笑を殺して起つて居る。殿井は勃然として睨めると、益々可笑い顏をして、終ひには口を袖で被して、默つて脚下を指示す。見下せば其處に下駄を揃へて、それを穿けよと促すのである。殿井は一段と怖い顏をして、泥足袋を其のまゝに突掛けて、室の病人にも響けとばかり、跫音荒く庭から縁側へ廻つた。

第五　入院料

（一）

床の間から下した机には、見事な毛絲の編物を敷いて丸心の洋燈明るく、初野と主婦と對坐

つてゐる。

「如何でございます?」と主婦は顏を覗く樣にして、「夫で宜しいぢやございませんか?」

「爾うですねえ、」初野は、俯向いた面を擧げて、「如何したら可いでせう? 私も迷つて了つて?」

「何故でございます? 何か、後日で難題でも言掛けられては、と云ふ樣な御懸念でも…?」

「其樣な事も有りますまいけれど…。」

「ございませんとも貴女、」と主婦は笑つて、「三條の殿井と云へば、越後でも聞えた財產家ですし…、加之に、今は如彼して遊んで居らッしやいますけれど、ちやんと美術學校を御卒業なすッて、油繪の方では最う、立派な先生株なんですもの。」

「では畫工ですか?」

「は。御郷里が其樣な御身代でございますから、職業と云ふんで無く、眞の御道樂に遣つて居らッしやいますけれど…。何ですか、其の中洋行でもなさる樣なお話もございますよ…。」

「洋行?」初野は目を瞬つた。

「は。」と主婦は點頭き、「爾う云ふ方ですもの、後日で御迷惑を爲さるなんて、請合つて其樣な事はございませんよ、大丈夫でございますよ。」

「爾うでせうとも、私も、決して其の方を疑ふんぢや無いんですけれど…。何だか、餘り。」

「餘りお談が好過ぎるから…?」

「一度も會つた事も無いし、名も知らない方が其樣な、無擔當で金を貸して下さるなんて、何だか私には…。」

「否え貴女、爾う云ふ譯ぢやございませんよ、私の話し樣が下手なもんですからね、」と主婦は膝を進めて、「昨日でした、その殿井樣が來らッしやいましたからね、過日お話の、自轉車の事をお訊きしたんですよ…彼の方も自轉車を持つて居らッしやるもんですから。而ると、夫は、賣ると云へば幾らも買ひ手は有る、けれども非常に安直い、買直の半分も取れはしない、まア、大概の事なら止した方が可い。何故賣るんだ、と此う仰有いますから、實は此々で、最う、自轉車は見るも怖いと云ふ事で、それでお拂ひなさるのでございます、と云ふと、や、萩原樣の自轉車か、大變英學の出來ると云ふ、彼の、女子學院で有名な萩原樣のか、てね貴女。」

「あら、私の名を知つて居らしッて?」と蒼白い顏を赧くした。

「新聞で御覽なすッたんでせう。で無いでも、交際の廣い御方ですから、何處か、御婦人達からでも聞いて居らッしやるでせうよ、貴女の事は、熱く御存じでしたもの。それでね、」と主婦は、何處までも眞面目な顏色で、「其の殿井の談なる物を吝みなく遣立てるのである。

卽ち、萩原の如き將來有望の女學生の爲には、金錢で成る事ならば何樣な力にも成ッて遣り度い、自轉車も金の入用で賣るならば、其の金は此方で出して遣り度い、只だ愛に困るのは、一面識も無いのに其樣な事をして、何か野心でも有る如く邪推さるゝことである…。

「だから、私の名を知らさないで、お主婦の手で都合した樣に、其點は、萩原樣の感情を惡くしない樣に話して呉れッてね貴女、爾う仰有るんでございますよ。」と主婦は言ひ足した。

初野は、胸を轟かしながら此の話を聽いて居た。我が名の左程まで世に廣まッたか、と思へば、此のまゝ死んでも惜くない樣な氣もするのである。

入院して未だ十日と經たぬ。醫師からは元より退院の許容を得たでないか、郷里の兄からの來狀に、賴んで遣つた金を送らぬのみか、定額の學資で不足ならば早速歸鄕せよと有つたので、今に明日拂ふ可き入院料を算斷せねばならず、看護婦等の危むも構はず外出を賴つて、

此く我が下宿へ歸つて見たのである。

下宿に歸ると、果して卒倒し掛けたが、併し後で考へれば、多少衰弱した身體を突然腕車で駈けさした爲で、別に挫いた手が何うなツたと云ふのでは無い。ギブス繃帶とやら、是は癒る迄この儘に置く物とのこと、何も高い金を出して病院に居る必要はない、隔日位に此家から通うても、三週間を過せば全治すると云ふ其の三週間に二種あるのではない……勿論今は金を出す的が無いので、入院して居れと云はれても不可能な事であるが。初野は愈よ退院と決めた。それに附けても先に立つ金の手配、今は恥かしいとのみ云つて居られぬので、主婦に自轉車を賣る事を相談して見た。而ると主婦からは前の樣な談で、此樣な好都合の事は無いから、先方の云ふがまゝに借りたが宜いぢやありませんかと勸むるのである。

「如何でございます、矢張し、お氣に濟まない所が有るんですか……？」何時までも對手が考へて居るので、主婦は此う促した。

「はア、何うも……。」と初野は、考へながら首を捻つて、「何う考へても、見ず知らずの方から、爾う云ふお金を借りる理由は有りませんから……。」

「宜しいぢやございませんか、貴女が見ず知らずでも、殿井樣の方では、貴女の御名譽を慕つて御用立て度いと仰有るのですもの、宜しいぢやございませんかね。」

「爾う許しも云へ無いでせう……。若し、私の樣な者でも名譽が有るとすれば、其樣なお金を借りましては、直ぐ不名譽に成ツ了ふ譯ですから……。」

「え、不名譽？ 御不名譽でございますか？」

「はア、何うも……。」

「では、何うなさるお心算なんです？」

「矢張し、自轉車を賣つた方が一番に良い樣ですが……。お主婦、何う云ふもんでせう？」

「それが貴女、早速買手があれば宜うございますけれど……。」と言を斷つて、「また、有つた所で、早速明日のお間に合へば宜うございます……けれど。」

「然うですねえ。」と微に肩で息をした。

二人とも久く默つて居た。火鉢の火も小さくなツた。何の室からか、微に月琴を鳴らすのが聞える。

「また始めたよ。」と主婦は天井を睨めて、「幾くら止して下さいと云つても……、仕樣が無いねえ、他の邪魔になるのが、解らないでせうかねえ。」

「如何でせう、彼樣な物は質屋ぢや取ら無いでせうか？」と初野は突然に云つた。

「え、質屋で……？」と主婦が見返ると、初野は眞紅になツて居る。「月琴でございますか？」

「いゝえ、あの自轉車ですの……。」と俯向いた。

「如何でせうか？ 此の頃は、嵩張つた物は取らないとか云ふ事ですから。」と默つて初野を眺めて居たが、「それでは殿井さんのお談は如何致しませう？」

「何卒、お主婦から宜しい樣に仰有つて下さいな。」

「謝絕るんですか？」

「はい、何卒……」

主婦は、其の案外なる言に呆れたが、併し毛程も厭な顏色は見せない。

「では、彼品を御拂ひなさるんでございますね？」

「何うも、外に仕樣が有りませんから。」

「爾うですねえ、ま、爾うなさるのが、一番跡に物が殘らないんですねえ……。ぢや、今夜は最う遲くもなりましたから、明朝早く、本郷に問合しに遣りませう。」

「何卒願ひます。」

「おや、最うお火が無くなりましたね。」
「否え、火は要りません、最う寝みますから。」
「爾うですねえ、急に起きて居らしッて、嘸お疲れでせうから。」
「えゝ、何だか、悄然し了つて。」
「左様でございませうツて……。」と主婦は起上つて、其處に敷いて在る蒲團や夜具やを直し、
「如彼いふ、立派な西洋室に居らしッちや、此樣な處は小舍の樣でございませうねえ。」
「いゝえ、何だか、故郷へでも歸つた樣で、大變に悠然しましたの……。」と初野も座を起つたが、「お主婦、失禮ですけれど、其方の浴衣を出して、着更へさして下さいませんか……。最う此樣な、一人で着物も着られない不具者に成ッ了つて。」
初野は淋しく笑つた。主婦は「最う數日の御辛抱、」などと慰めて、行李から洗つてある白地の浴衣を取出し、さて初野の傍に突膝して、其の締めて居る紫紺地らしい緞子の帶、絲織の曙縞の綿入、下着は絹の櫻小紋、その下のネルの襦袢を分ければ、何處からとも無く白薔薇香水の香ひ、肌は珠玉の如きに、乳房むッちりと締まり、細腰より下は腰卷の色か、しッとりとして、紅の瀧の落ちるとも譬ふ可きである。

「あら、お主婦……。」と叫んで、何うしたのか初野は燈火を背後に身を捩つた。
「ほゝゝゝ、宜しいぢやありませんか。」
「だッて。」
「些たア、お瘦せなさいましたねえ。」と主婦は、浴衣に寢衣の細帶を着せて遣りながら云つた。
「瘦せもしますわ、彼樣なに……。」
と云ふ時、不意にがたりと緣側から障子に觸れる物音がした。
「あら！」と初野は吃驚して其の障子を視詰めた。
「誰だい？　お兼かい？」と主婦も聲を掛けたが、「誰が覗くもんですか、猫でも觸つたんですよ。」
そこで、初野は帶も締めて貰つて、主婦の出て去く迄床にも入らずに居た。
主婦は、今脫がせた衣服を倉皇に整理けて、さてお息みなさいの挨拶して此室を出た。
暗い緣側から臺所を拔けて、直ぐ其處の茶の間の、燈火の一杯に射してる障子を明くれば、湯の沸騰つてる長火鉢の向うに、殿井恭一ただ一人、燻ッたい樣な顏をして胡坐を組んで居る。

「貴方でせう？」と主婦は詰問する樣な調子で、先づ火鉢の此方に腰を卸した。
「何を？」
「何をぢやありませんよ。若し、障子が開れたら何うなさるんですよ？」
「はゝゝゝ。」と殿井は笑つて、「併し、中々美人だねえ。」
「美人だも無いもんです。萩原樣に覺られや爲まいかと思つて、私、はら／＼しましたよ。」
「ふゝゝ。」鼻で笑つて居る。
「爾う性急に成さらないで、まア暫日、凝然として待つて居らッしやる譯には參らないもんですかねえ？」
「兵は拙速を貴ぶさ。」
「何ですッて、貴いッて、何が貴いんです？」
「遲いより速い方が可いッて事さ。」
「ほゝゝゝ。幾ら速いが可いッて、今日初めてお話の出た事ぢやありませんか。今日の話を今日の中に物に成さらうと云ふのは、夫ア貴方、餘りお性急過ぎますよ。」
「爾うぢや無い、物に仕ようて云ふんぢや無いがね……。」
「無いが如何したんです？」
「兎も角、まア僕を會はして呉れるが可いぢや

ないか。」

「可けませんよ、其様な事を仰有つても、彼の通り固いんですもの、直接に御會ひなすッて御覧なさい、それこそ、出來る物も毀して了ひますよ……。貴方は、通常の女學生と一緒に思つて居らッしやるから可けない。何うして、萩原様許しは貴方……。」

「また始めた、先刻から何遍同じこと繰返すんだ？」

「だッて、貴方は餘り安く見て居らッしやるからさ。」

「けれども、幾ら高く見ても女學生は女學生だらう……、女子學院の秀才だらうが、新聞に肖像が出ようが、僅な入院料に差支へて、自轉車を賣らうとしてるんぢやないか？」

「夫は、まア爾うですけれど……。」

「蔭で談話を聴いて居たが、音聲だッて言葉だッて、別に變つた處も無いぢやないか、矢張し人間の娘ぢやないか？」

と殿井は笑つたが、主婦の方は中々眞面目なもので、

「いゝえ、今夜は貴方、彼の通り卒倒したり何かした後ですもの……。」と主婦の言の終らぬに、

「ぢや、通常は音樂の様な聲で、身體から後光でも射すんだね。はゝゝゝ。」

「通常ですか、」と主婦は笑ひもせず、「通常はもッと提然して、音聲も冴々として、顔も綺麗ですし、第一、彼様なに耗入つて居らッしやいはしませんよ、元氣が有つて、活潑で、如何して貴方……。」

「ふん、女の活潑か……これで、お轉婆と云ふ奴は、餘り自慢に成る物ぢやないからね。」

「いゝえ、お轉婆なんて……、途方も無い。彼様な優容で、品の良い、人柄な……。」

「始まッた始まッた、はゝゝゝ。」と殿井は腹を抱へて笑つたが、「最う効能も其邊で止さんか、餘り廣告すると、賣藥だッて信用が無くなるぜ。」

主婦も笑つて、

「だッて、貴方もまた、意地になッて貶すんですもの。」

「そこで、今後何う爲るんだ。」

「ですから、まア凝然として、時節を待つて居らッしやいましよ。」

「其點は解つたが、今の談話の様子ぢや、何だか、僕の方は脈が斷れた様ぢや無いか。」

「いゝえ、御自分で許し賣るに決めた處で、早速買人がございません……、此う云へば、それ、其れッ限りでせう。」

「成程。買人が無いと云つて置いて、困らして置いて、また僕の話を持出すと……。」

「賣るも買ふも貴方、彼様な繃帯した身體で、豈夫自身外へ出る譯にも行かないでせう、そら、是非私がお世話しないぢや、何うする事も出來ないでせう？」

「其點を見込んで……、成程、流石はお主婦だ。」

「ね、解りましたらう。」

「や、感服感服、流石は昔執つた杵柄……。」

「ま、一寸、」と主婦は殿井の口を止めた。

耳を澄ませば、彼方の室から初野の聲がして、之に答へる下婢の、

「はい、畏まりました。」と、緣側を此方に急ぐ跫音も聞える。

「おや、未だ起きて居らッしやるんですよ。」

「聞えたか知ら？」と殿井は微し怖くなッた。

「貴方、餘りお聲が高いんですもの……。」と叱言の様に云つたが、丁度臺所に物の音する下婢を呼んで、「お兼、萩原様は未だお寢らないのかい？」

「はい、あの、睡眠劑を服るから、お冷水を呉れと仰有いまして。」と下婢は障子の外から答

へた。
「睡眠劑を？」と殿井は咎める樣に、「眠れないんだね？」
「左うでせう、考へても御覽なさいな、御無理は無いぢやありませんか。」と主婦は低聲に力を籠めて云ふ。
「ぢや、眠らなきや金が出來るんかい？」
「其樣な貴方、思遣りの無い事を御有るもんぢやありませんよ。」
「だッて其の通りぢやないか……。いや、女と云ふ物は愚癡なもんだ。」
「それぢや、將來に能く教へてお遣んなさいましな。」
「教へろ？　僕がか？　はゝゝゝゝ。」
「何ですねえ貴方、」と主婦は、殿井の大聲を制して、「もッとお靜になさいましよ。」

（二）

初野は夜明前になッて漸と眠に就いた。夢で、郷里の母が[illegible]か逝つたと云つて、態々見舞に上京したが、其の話に、近頃は兄も母に有情くなッて、今度上京するに就いても、小遣だと云つて此樣なに金を呉れた、と旣に一枚の紙幣を出した。之さへ有れば自轉車を賣ることも要らぬ、入院料は元より、看護婦や世話になッた人々に思ふ程の謝禮をして、夫から下宿の拂を濟まして、質を受けて、日頃欲しいと思つた彼品を買つて此品を整へて、と喜んだが、其の紙幣は悉く贋紙幣と云ふ事で、母も自分も警官に捕まらうとするところ、捕まッては大變と、母子手を握合つて逃げ廻つたが、幾ら逃げても逃げても跡から追蒐けて來る、其の靴音が次第に近くなッた、其劍のがちや〱鳴るのも聞える、何うやら手が背中に觸る樣だ、それ、捕まッては大變だ、と一生懸命に駆出すと、横合から不意に男書生が出て來て、矢庭に衝突つて、一二間も前に投出された、と思ふと目が覺めた。

見廻せば節の多い下宿の天井、障子には日光が射し、庭の木影も映つて居る。

「あー、夢で宜かッた。」と溜息を吐いた。身體中汗を發いて、浴衣はしッとり濡れて居る。何時頃かと思つて、枕から銀側の懷中時計を取ると、既う十時に程も無い、此樣なに眠つたのか、と驚いたが、驚くと共に、入院料……自轉車の賣却、午前中に病院に歸らねばならぬ事などが、水桶の栓でも拔いた樣にどッと心中に湧出た。

「一刻も此樣なにしちや居られない。」と呟きながら、負傷した方の手を物に觸れぬ樣に徐と起上つた。

他手を借らなくては、帶を結ぶこともならぬので、障子を開けて誰か呼ばうとすると、綺麗に片付いた臺所、日光が一杯に射込んで、へッつひ、銅壺、雜巾の跡の鏡の如き其處から、斜に見通さるゝ茶の間まで、寂然と靜まり反つて、垣の外を洋燈屋の觸れて通るのが聞えるのみである。

「お兼さん、お兼さん。」 何處に居るか分らぬが、此う呼んで見た。

返辭はない。豈夫に誰も居らぬ筈は無いが、何うしたんだらう、と訝りながら二歩三歩、緣側を勝手の方に行かうとすると、直ぐ前の木戸口から、バケツに水を提げて、ひよッくり下婢が出て來たが、

「おや、お目覺めで居らッしやいますか。」と自分の用をば其處に置いて、襷を脫しながら上つて來た。

先づ衣服を着更へさせて貰ひながら、お主婦の事を聞けば、今朝早く本郷から神田の方へと出られて、貴女がお目覺めならば、其の事を申上げよ、と云ひ置いて行つたと云ふ。

「それから、先刻お客樣がお出でございました。」と下婢は、寢具を片付けながら、思出した樣に云ふ。
「おや、何誰？」と初野は楊枝を使ふ手を止めた。
「何誰ですか、お姓名を伺ひましたけれど、仰有らないんですもの…。何でも、日外來らしツた事の有る方ですよ。」
「日外ツて、其樣な事ぢやお兼さん、分らないぢやありませんか。」と笑つて、「而て、何か言置いて行つた事でもあツて？」
「いゝえ、只だ、」とお兼は顏を紅くしたが、其處へ突膝して、「あの、何う云ふ事で、昨夜は此方にお泊りなすツたか、今日は、病院へお歸りになるか、何時頃にお歸りになるかツて、只だそれ許しお訊きでした。」
「誰だらう？　何うして、此方へ泊つた事が分つたんだらう？」と訝つた。
病院へ訪ねて、看護婦から聽いて來たとしても、何も言置く程の用事も無い身で、私の病院に歸るか否かだけを尋ねて行つたとは何うした事だらう。
「一體何樣な方なの？　何樣な服裝して？」
「矢張り袴を穿いて居らツしやいました。」
「齢は？」
「左樣でございますねえ、薄く髯が生えて居らツしやいましたから…。」
「あら、男の方なの？」
「は。」
「ぢや、大學の…角帽を冠つた？」
「はい、左樣でございますよ。」
「背の高い？」
「は、御存じで居らツしやいますの。」
初野はそれには答へず、考へる顏をして、
「而して、貴女何て云つたの？」
「あの、未だお寢ッて居らツしやいますツて。」
「爾う。」と少し紅くなつたが、「而したら、何樣な事を云つて？」
「あの、急に外出して、何處にも觸つた樣子は無いかツて。」
「其樣な事を訊いたの…。」と美しい眼を輝らして、「夫ツ限り？」
「は。夫ツ限り…。何ですか、怒つて居らツしやる樣な方でしたよ。」と云つたが、急に格子戸の開く音がしたので、緣側に駈出して見て、「おや、お主婦が歸つて參りました。」
初野は、何事を措いても先づ自轉車が賣れるか何うか、主婦の話を聽き度いのであるが、今起きた許りで、顏も洗はず口も嗽がぬので、
「大變に寢過して了つて。」と會釋して、急いで毎の洗面場の方に行つた。
主婦は、座敷の掃除が濟んだなら、其處に出す可き牛乳、膳に供へる香の物の事まで下婢に命令けて、金盥に顏の湯、嗽ひ茶碗の水も齒に刺みぬ程に加減して待つて居ると、丁度初野が便所から出て來る。
「でも、此樣にお寢られて好うございましたねえ、私はまた、急に勝手が違ひなすツて、如何かと思つて心配して居りましたよ。本當に好い鹽梅でございましたこと。」と主婦は、何を爲るにも片腕の利かぬ初野を、手拭を絞るやら、背後から袂を押へて遣るやらして、對手を焦躁させぬ樣に氣を配つて手を假して居る。
「何處かで鷄の聲を聞いてから眠つたんですけど、でも、先刻迄何にも知らないんですの。」
「左樣でございませう、今朝程、竊と覗ひましたら、熟くお睡ッて居らツしやいましたもの。」
「おや、爾う、些とも知りませんわ。お主婦の出て行つた事は、今方、お兼さんから聽いた許し…。」と濡れた手拭に襟頸を撫で上げながら、「此樣に寒いのに、朝ッから濟みませんでしたわねえ。」

「いゝえ、寒いツて貴女……、其様な事なんざ何とも有りませんがね……」と困つた様な顔をするので、

「あれ、如何でした？」と手を止めて訊く。

「何うも貴女、無效でございますよ、本郷から下谷、神田の淡路町から鍛冶町の方まで、大概の處は聞いて廻りましたけれど、何うも、今が今と云ふお間には合はない様でございますよ……。」

「まア、此處ぢや何ですから、何卒彼方へ……。」と、初野は顔色まで變へたが此う云つて、先づ我が室に主婦を伴込んだ。

室は綺麗に掃除が濟んで、火鉢には火が熾り、座蒲團も正しく、机の傍に鏡臺まで出してあるけれども初野は、今は鏡に向ふ氣力も無く、手拭も楊枝も其上に置いたまゝ、

「では、何處にも、買つて呉れる店は無いんでせうか？」

「日本橋から京橋の方から、ずうツと探したら無いこともございますまいけれど……。」と主婦は話出した。

自分の廻つた處では、生憎と主人が不在だツたり、居ても古物は取引しませんと斷つたりして、本郷の通から神田に掛けて、自轉車商會の十五六軒の店々、誰も引受けようと云ふ者は無い。勿論、池の端に一軒、品物を拜見の上、直段に依て頂戴しても可いが、と云ふのが在れど、二三日後で無ければ、それを鑑定の番頭が歸らぬとやらで、これ以て今日明日の間に合ふ話ではないのだ。

「買手が無きや仕方が無いけれど……。」と初野は當惑の溜息を洩して、「如何したら可いでせうねえ、私も實に困つて了つて。」

「それで、私も途々考へたんですがね……。」

「は、」と初野は其の後を催す様に、「何うしたら可いでせう？」

「其様な譯ですから、今急にお拂ひなさると云つた處で、孰せ今日今日のお間には合ひませんからね……。」

「え、」と點頭いて、「爾うですわねえ。」

「ですから、如何です……、」と主婦は躊躇しながら凝然と初野を見て、「昨夜のお話の、彼の方からお借りなすツては？」

「昨夜のお話と云ふと？」

「殿井様のお話でございますかね。」と云つて、初野の顔色を覗つた。

殿井の談と云はれて、初野は暫時口を噤んだ。

金に差支へたとて、縁もゆかりも無い見ず知らずの他人から、貰ふ様な借金を仕度くは無い。後で利息を添へて返濟すれば夫で濟む様なもの、夫を濟ます迄は始終恩を被て居る様で心苦しいのだ。且つ、先方では我が學校に於ける成績なども知つて補助し度いと言出したとか、若し、其の言に乘つて、其様なら早速是だけの金を貸して貰ひ度いと申込んだなら、如何に厚面皮い女と蔑まるゝか知らぬ、或は其様な卑しい女ならば、と其の取引の際に臨んで謝絶られる様な、辱かしい目に遭はうも知れぬ。

「彼の談なら、まア止しませうよ。」と思切惡さうに云ふ。

「左様でございますか……、では、何か他に良いお考へでも？」

「別に、良い考へも無いけれど……。」と初野は當惑したが、良い考へが無いからと云つて、因縁なく他人の補助を受ける理由も有りませんから。」

「いゝえ、貴女は因縁が無いと仰有いますけれど、殿井様の精神は爾う云ふ理由ぢや無いんですよ。今も、歸途にお目に掛りましたらね、お主婦の話し様が惡い、夫ぢや、萩原さんのお怒んなさるのも道理だと仰有いましてね……。」

「その、殿井様とか云ふ方へお寄りなすツて？」

「え、直ぐ切通下に居らツしやるものですか

られ……。

……と云つてる處に、下婢が牛乳や膳を運んで來た。主婦は傍近く躙寄つて、食事する初野に手を假しながら、

「殿井様は、貴女の様にお優なさる方が、些細なお金で御心配なさいますのが、それが如何にもお氣の毒だと仰有いましてね……。」

「では、自轉車を賣ると云ふ事も、其の方へお話しなすッて?」と初野は紅くなッた。

「別に、委しい事はお話も致しませんけれど、孰せお謝絕する便次ですからね……、」と云つて主婦は息を吞んで、「而ると、お主婦の様に下手な云ひ方をするから、それで萩原様もお怒んなすッたんだ、乃公の精神は爾う云ふのぢや無い……。」

「いゝえ、怒るなんて、決して其様な事はありませんけれど。」と初野は口を插れた。

「……それで、僕の精神は爾うぢや無いけれど、お主婦の云ひ様が惡い許しで、却つて萩原様を怒らして了つたんだ、併し、今更それを恨んだ所で仕樣がない、また、僕の身に取つて、三文の德にも成る事ぢや無いから、惡く思はれても怒られても、其樣な事は更に氣にも掛けんが、何しろ、萩原様ほどの人が、其樣な些かな金に差支へて、自轉車を賣るのなんのッて、外聞の惡い事をするのが如何にも遺憾だ、幸ひ僕は、爰に少し許し金を持つてるが、如何だらう、此金で今日の急場を救うて上げる事が出來まいか、勿論、僕の金と云ッちや可けない……其様な失禮な事が無いなんて、また反對に怒られでもしちや何にも成らないから、僕の名を出しちや可けない……、其點を何とか、お主婦の計ひで、他で手配した様に作へて、兎も角も、爾う云ふ不名譽な事は爲せない様にして上げてお果れ、此う仰有いましてね、御覽なさい、此様なに……。」と云ひながら、主婦は肥つた懷中から紙幣の一束を出したのである。

初野は丁度食事を終つたところで、意外な紙幣の一束を見せられて、思はずも顏を染めたが、それを主婦に凝然と視て居られるので、何と云ふ譯も無く恥かしくなッて、最う耳の脇までも紅くした。

「折角彼程まで仰有るのですもの、兎も角も、之はお使用なさるが可いぢやありませんか、」と主婦は勸め出した、「何ですよ、何も、考へる事も危む事も無いぢやありませんかね?」

「いゝえ、危むなんて、其様な事は無いけれど……。」

「知らない男から世話になるのがお厭ならば、後でお返しすれば夫で濟むぢやございませんかね?」

無論それに違ひ無い、利息を加へて返却すれば夫で可いのだ、けれども、自分は未だ金を借りた經驗がない。借財！ 只だ之を思った許りで、罪惡、失敗、墮落の淵に陷ちて行くやうな氣がするのだ。と云つて、目の前に迫つた入院料を何處から何うして手配す可き的も無い。

「ほゝゝゝ、萩原様の様でも無いぢやありませんか。」と主婦は、初野の吃驚する程快活な語調になッて、「是ん許しのお金、御卒業後には、御給料の半月分にも當らないぢやありませんかね、ほゝゝゝ。」

此う笑はれて、初野は主婦を凝然と視詰めたが、頓て自分も莞爾として、

「而して、此金は幾何あるんでせう?」と云つたが、それが急に明晰とした音聲と變つた。

「五圓紙幣で、丁度五十圓でございますよ。」

「お主婦、それでは此うして戴く譯には行かないでせうか。故なく他から金を借りる理由はありませんから、證文を書いて、利息も極めて、單純な貸借と云ふ事にして、而して貸して戴く譯には行かないでせうか?」

「證文なんて、其樣な小難かしい事をなさらないだッて貴女……。」

「いゝえ、爾うでないと、私は却つて氣が濟けて可けませんもの……、如何でせう、爾う云ふ事に、殿井樣に御相談なすッて下さいませんか。」

「なアに、相談も何も、一切私に任されてますから、其樣な事は要りませんけれど……。」

「ぢや、何卒爾う云ふ事に御承知なすッて下さいな、而して、此のお金は私に貸して下さいな、ね、何卒爾うなすッて下さい、ね。」

「ぢや、何うでも、貴女のお氣の濟む樣になさる事として、まア兎も角も、速く病院へ行つていらッしやい、最う貴女、彼此お正午でございますよ。」

「爾うですねえ、夫では、證文の事は歸つてからとして……。」

「證文なんざ、何うでも宜ござんさアね、殿井樣の方から、別に、書いて與れとでも云ふのと違つて。」

於此、主婦の云ふまゝに此の金を借りる事に決めた。五十圓、此れだけ有れば、入院料も、主婦への借も、前月分の下宿料の滯りも、悉く濟まされるのだ、初野は、初めて安堵の太息を吐いた。

夫から主婦に手傳つて貰つて、頭髪を正し、顏を一寸化粧へ、衣服は昨日のまゝなれど、襦絆だけは新しい白羽二重の襟の掛つたのに着更へ、肩掛は白鳥の羽毛を散したフラシテン、袴は唐草模樣のカシミヤを裾長に穿いて、氣取るとも無くついと立つた其の姿の美さ、品の高さ、見慣れた主婦も只だ目を睜つて見惚れる許りである。

彼此する間に、呼びに遣つた腕車の聲も聞えた。

「お忘れ物がございませんか?」

「いゝえ、別に。」

初野は前に、主婦は後に、二人は伴立つて室を出たが、此の時しも、穿物を揃へに玄關に駈出た下婢は、

「あら、お主婦、殿井樣が來らッしやいましたよ。」と吃驚した樣に云ふ。

(三)

殿井が來たと聞いて、初野は思はずもはッと歩を止めたが、これと同時に、必然此の金を取返しに來たに違ひ無い、と云ふ事が電光の如く胸に閃く。

主婦はまた、素早く初野を驅拔け、直ぐ脇の客間を横に玄關へと出たが、其の後に明放した障子を透して、此處から二間許りもない上り口に、茶色のインバネスに同じ色の背廣、起ちながら茶革の靴を脱ぐ姿も瀟洒に、色白の横顏、

「一寸、お主婦に話したい事が有つてね。」

悠然と大樣な物の云ひ風、初野が目には二十七八とも見える青年紳士が入つて來た。

主婦は其處に膝を突いて、

「左樣でございますか、好くお來で下さいました、何卒まア此方へ。」と幾度となく頭を垂げて、直ぐ前の客間へ請じ入れようとするのである。

初野ばかりは、獨で出て行く譯には行かず、然ればとて我が室に引込むことも出來ず、何うしたものかと進退を決しかねて居る中に、

「あ、貴方、」と主婦は急に氣の付いた如く、「彼の方が萩原樣で居らッしやいますよ。」

「あ、爾うか。」と殿井は初めて帽子を脱ぎ、インバネスもするりと其處に投つて、初野に近く腰を卸した。

「萩原樣、」と主婦は初野を見返り、「殿井樣で居らッしやいますよ。」

初野も紹介さるゝまゝ室に入つた。外出せんとする處を不意に紹介された上に、是が初對面の男で、五十圓と云ふ金を貸して呉れた上に、我が境遇から學校の成績まで知つて居るのだ、と思ふと、羞かしさに額の赧らむを避け得なかツたが、併し禮儀は飽までも正しく、初對面の挨拶を流るゝ如く濟まして、

「お主婦から承はりましたが、此度は、種々有難うございます。」と、默つて居る譯にも行かぬので、金の禮を云つた。心の中では、此の金は蓋く此の場で返さねばならぬ事と成るだらうと思ひながら。

「いや、何ですか……」と、案外にも殿井は金の話を避くるものの如く、「併し、お負傷なすツた處は、最うお痛は去れましたか。」

「はい、觸ると痛みますけれど、此うして居りましては別に……。」

「爾うですか、併し、何樣なにか御不自由でせう。飛んだ難にお遭ひでしたねえ。私も、始終自轉車へは乘つてますが、新聞で貴女の事を見てから、急に怖氣が附いて止めて居ります。それは、私許りぢや無いです、私の友人にも、其樣なのが二三人もありますよ。」

主婦は二人に座蒲團を勸め、火鉢を運んで、茶を入れる心算か、障子を閉めて彼方に行つて了まつた。初野は、我が負傷が他の噂に上つて、殿井等の友人までが自轉車の乘用を止めたと云はれて、胸の轟くを止め得なかツた。

「如何です、何處か、外出なさる處ぢや無いですか？」初野が默つて俯向いて居ると、殿井はまた口を切つた。

「は、一寸病院へ參ります處で。」

「爾うですか、では御遠慮なくお出でを願ひます。また、お目に掛る機會も有るでせうから。」と云ひながら、隱袋を探つて鰐革の卷煙草入を出した。

此の一語を聞いて、さては金を取返す爲に來たのでは無かツたと、初野は安堵した。併し安堵すると共に、金の事を此のまゝ默つて別れるのは、如何にも狡い者の樣で心苦しい、主婦を間に置いての貸借とは云へ、一通りは自分からも話して置かねばなるまい、と此う思うて、

「あの、お主婦にも賴んで置きましたが、今回拜借のお金は、此の夏までの期限にして戴き度いのですが、それで御承諾が願はれませうか？」と言ひ苦しき事を、一生懸命になツて云つた。

「期限ですか、はゝゝゝ。」と殿井の方は耳にも掛けぬ樣子で、「其樣な事は如何でも可いぢやありませんか。」

「それでも。」と初野は、對手に笑はれたので稍し紅くなり、「あの、貸借上の事ですから、定めて戴きませんと。」

「いや、私は金貸ぢや無いですから、其樣な御心配は成さらん方が可いです、まア、お使用なさい。」

「ですけれど、夫では何うも。」

「爾う氣に掛けて下すツては困るですな、私は、其樣な心算で上げたのぢや無いですから、ま、其樣な話は止して戴きませう。」

初野は他に恩を施しながら、酬を求めようともせぬ殿井の高き志に感ぜぬ譯には行かぬ。

「だから、私は、名を秘して呉れと云つたです……、失禮か知りませんが、實は、貴女とは係り會ひ度く無いと思つて居ました。何うも此の、金の貸借……、借りる方に成ツても然うだが、金貸と思はれるのは厭な物ですからな、寧ろ敵なら敵、仇なら仇と極つた方が、却つて男らしくて可い位なものです。ですから、私は決して人に金は貸さん……貴女にだツて、貸したんぢや無い、御立腹か知れんが、貴女の名

寄、貴女の德を慕つて進けたので…、貴女の樣な有望な方が、些細の金に困つて居らッしやるが遺憾で、それで進けたので、決して返して貰ふ心算ぢやないのです、返して貰ふ心算なら、(元から進げやしませんや、金を出した上に、金貸なんて厭な名を附けられるなら、初めから出さん方が氣が利いてますからね、はゝゝゝ。」と笑つたが、急に氣が付いた樣に、「や、此樣な下らない事許り饒舌つて居て…、貴女は遅くなりはしないですか、何卒、構はずお出でなすッて下さらんですか。」

初野は此樣な男に會ふのも初めてであるが、此樣な利慾の念の薄い、浮世の外に住つて居る樣な話を聽くのも初めてなので、何時か耳を傾けて、成程此う云ふ精神の男から見れば、自分の樣な言は不快にも聞えたか知れぬと思うた。で、

「それでは、孰れお主婦と相談しまして、決める事に致しますから。」と挨拶すれば、

「や、これは御無禮を致しました。初めてお目に掛つたのに、亂暴な事ばかり申上げて、嘸御立腹でしたらう…。まだ書生ですから、何卒惡からず思召を。」

「いえ、私こそ飛んだ失禮ばッかし…。」

「や、未だ名刺を上げませんでしたな、」と急に名刺入を取出し、「此樣な處に居ります、何卒、此れにお懲りなく御交際を…。」

初野は其の名刺を一寸戴いて、

「何卒宜しく…。」

「いや、お送りしませう。」と起上る。

「何卒お構ひなく。」

「いや、餘り失禮しましたから。」

初野の止むるも聽かず、殿井は强ひて上り口まで送つて出たのである。主婦は手を挽いて腕車に扶け乘せたが、初野の姿が露路を曲るや否や家へ入つて、其處に立つて居る殿井に、笑つた目で何やら合圖をした。けれども殿井は、憫然と垣の外を眺めて、主婦の笑つた目に對へる顏色も爲なかッた。

第六 意外

(一)

入院以來、毎日苦勞にして居た入院料も、漸と此金で濟まされる事になッたので、初野は勇んで下宿を出たのである。

ちぎれ／＼に雲は飛んでるが、吹く風も寒くはあるが、背に射る日光暖かに、乾いた道路の車上心地快く、此の上の願は、醫師から退院の許諾を得る事である…勿論許諾されずとしても退院する氣ではあるが。

此く心地快く氣の勇む間に、一瞬も胸を離れぬは殿井恭一の事である。けれども夫は、美しいと見た顏容のことではない、綺麗に撫で通した頭髮、卷莨を喫ふ纎細な手、その指に塡めた指輪、色から縞から流行に後れぬ洋服や半外套やの事でもない。好き嫌ひを云つたら、嬌冶た、男らしくない、而して何うも學問の無さ相な…寧ろ厭な方の男であるが、何の由緣も無い者に五十圓と云ふ金を與へて、何を要めようとするでも無く、夫を恩に掛けるの高慢振るのと云ふ事もなく、「貴女とは會ひ度く無かッた」と云つたり、婦女と對座するを迷惑にでも思ふか、病院に行く時間が遅れるの、再會ふ時も有らうのと、逐立てぬ迄に他を急かして、それで女學生と見て輕蔑するのかと思へば、出口まで態々送つて來て、音聲も顏色も甚だ眞面目なものであッた。

外見には依らず、淸く、尊い性質の人で無ければならぬ。現在血を分けた兄ですら、定額の學費の外には、一錢も入院費用を送らぬと云ふのに、我が成績を聞き、我が學業を成就させ

度い許りに此れだけの金を與へて、その名も出來る限りは祕さうとするのである。蓋く今の世に稀な同情に富んだ紳士であらう。少くも我が爲には知己である、感謝す可き恩人である、「御交際を願ふ」などと云ふのは、元より一時のお世辭に相違ない、また、卒業もせぬ身で、彼様な紳士と交際すべき必要も無ければ、交際すべき資格も無いのだ、夫は無いのだが……、併し、一體何様な身分……何様な地位に居る人であらう？　三條の殿井と云へば越後でも聞えた財産家……、美術學校を卒業……、油繪では先生と云はるゝ技術……、洋行する計畫……、あゝ、何うもお主婦の云ふ處のみでは解らぬ、次回話が出たならば、もッと詳しく聽いて置かう、若しお主婦から話が出なかッたら、その時は此方から尋ねて見よう！

―あら、萩原様ぢや無くッて！―

不意に我を呼ぶ聲がする、初野は考へに沈んだ面を上げると、我が腕車は何時の間にか赤門を潛り掛けた處で、聲する後に梶を向けたが、彼方からも引返す二臺の腕車、二人の女。

「まア、楠田先生……。」と初野は思はずも紅くなッて、「三浦様もまア……、お見舞に來らしッて下すッたんですか。」

「なアに、降りないでも可いんですよ、」と楠田と呼ばれた近眼鏡の婦人は、初野の梶棒を下させるのを止めて、「一緒に行きませう、ねえ三浦様。」

而ると若い方の束髪は、

「え、參りませう、」と活潑に答へて、「好かッたわねえ、最う一歩の事で、行違に成ッ了ふ處だッたわ。」

三臺の腕車は駈出した。藥壜を提げた通院患者、筆記帖を持つた學生、白い看護婦も、黑い給仕も、往來の者は歩を停めて、愕然とした目をして美しい初野ばかりを眺むるのである。

（二）

此の楠田友子と云ふのは、校長の從妹とか云ふことで、女子學院創立の當時から、和文の一科目と初等算術の教師で、生徒間には餘り受の宜い方で無いが、その代り教師仲間では中々羽振の宜い一人である。少しお饒舌で……、機嫌買で、好嫌ひが強くッて、高慢で、負惜みで、吝嗇家で、加之に人一倍の多情……と蔭口を云ふ者もある。此う云へば何處に一つ採る可き處も無い様だが、併し、幾ら校長の親族と云つて、それで十年來教師で通して來らるゝ筈もない。隨分學問好きで……好きな割には進歩はしないが、兎に角机に向ふのが好きで、一度でも生徒の質問に窮した事が無い。夫に良い點を擧ぐれば、中々深切で、他の事を我が事の如く氣に掛けて、頼まれもしない事に骨を折るなど云ふ事は珍らしくない。

只だ一つ惡い癖は、生徒の好き嫌ひ……顏の美いのを贔屓することである。それは何の先生にも有ること、醜い物が厭で、美しい物の好きなのが人の情の自然ならば、敢て此の人ばかりを攻めるのでは無いが、此の人は夫が少しばかり烈しいと云ふ評判。

それで、對人は更るが、始終美しいのを一人手懐けて置いて、一緒に散歩したり、一緒に辨當を遣つたり、それから迷惑がるのを無理に接吻したり、それから、冗談か知れぬが……色々な事を云ふこともある。於此、對手に成ッた者は皆顏を顰めて厭がる、遁げる魂膽をする……で續けて長く親しくして居る者はないと云ふ。「餘り執拗くて、本當に厭になッ了ふわ。」と蔭でも身顫ひさるゝ程である。

さて、萩原初野も其の手懐けられた一人であるかと云ふに、爾うではない。勿論入學の當時からして、

一貴女はウヲッチされてゝよ。」などと友人から注意された事は間々あるが、今迄其樣なことは無くて濟んで來たのだ。けれども、二人の間は決して疎くはない、疎くない處か、初野から云つても他の教師の誰よりも楠田先生と親しくして居る。

楠田はまた、出來るだけ有情くして、始終初野の機嫌を取る樣にして居るが、他の者に對する時の樣に、無遠慮な事を云つたり、大膽な擧動をしたりはせぬ、隔の無い樣に見せて居ながら、何處かに一目を置いたと云ふ風も見える。

初野の方では、此う有情くさるれば爲るゝ程、親しくさるれば爲るゝ程、禮も守れば、言も謹んで、決して狎易いなどと云はれまいと氣を配つて居る。

初野が斯う心掛けると、夫だけ楠田の方では疎く爲れる樣な氣がして、不快でもあり、また焦躁くもあるが、其樣な事は色にも見せず、入院してからと云ふものは、今日で最う三回も見舞に來て居る。勿論今日は、

一……可愛い顏を見る許しで來たんぢや無いの、校長の代理と云ふ、堂々たる資格で來たのよ。」と楠田先生は冗談の樣に云つたが、實際冗談でなく、校長よりの見舞として、奉書包の菓子料、傍に金三圓と記したのを患者の前に出した。

一學生の爲に、校長から病氣見舞などの來た事は、全く前後に例の無い事である。初野も意外なる贈物に、受けて可いものかと暫く躊躇したが、楠田は、是と云ふも貴女の成績の優れたのと、品行の正しいのが學校の内外に知れ渡つてるので、一はそれを賞する爲め、一は他の學生を奬勵の爲に贈られたのだから、無論大威張りで受けた方が宜い、と云ひ、傍に居る友達も口を添へて勸めて吳れるので、

「ぢや、戴いても可いでせうか。」と初野は夫を手に把つたまゝ凝然と視詰めて居たが、「だけれど私の事を其樣にまで……。」と許り、美しい目は最う感慨の涙に滿ちて、口も利き得ぬのであッた。

校長からの見舞と云ひ、殿井の言と云ひ、思合すれば、此の身は最う他の耳目を惹くだけの、賞讚を博するだけの學力……、品行……、其樣な資格を具備して居るのであらうか？　未だ世間へ出ない前から、未だ學生である中から……？　何うも夢の樣である、其樣な理窟の有らう筈はないが、併し證據は爰に二つ迄も出て居るのだ。

三人の間には種々の談話が交されたが、教師の楠田も友達の三浦も、治療半ばにして退院せんとする初野の考への輕卒である事をば、互に繰返して止めるのであッた。厚意から云つて吳れるものを、强ひて反對すべきで無いから、初野は可い樣に聞流しては居たが、心の中では、決して初めの志を變へぬと誓つて居た。此く他に注目さるゝにつけても、大切なのは此の夏の卒業試驗である、社會に出て好地位を得るも、此の上に名譽を博するも、一に卒業の成績に依つて決まるのだ。夫を思へば、一時も此うして遊んで居る暇などはない、假し今退院した爲に、少し位片腕が利かなくならうとも、生涯の榮辱浮沈の岐路に臨んで、何を怖れ、何を躊躇する事があらう！

此う考へると、今迄に覺えなき勇氣が出て、體熱までも高まッた樣な心地がする。

「は、有難う。」と聲だけは常の如く溫順に、「私も、種々と考へた上に決めたのですから。」

一考へるも考へないも、」と楠田先生は眼鏡の額を反して、「此樣な事は、自分の考へで極まる事ぢや無いでせう。ねえ三浦樣？」

「えゝ。お醫師樣の命令に據るべき次第ですわ。」と三浦は點頭いて、一貴女、何故其樣なに退

院を急ぐの？　何か急ぐ事情でも起つて？」
「事情も爾うだし……。」
と初野の云ひ切らぬに楠田は、
「何に事情が有るもんですか、」と我が事の如く打消した、「假し何樣な事情が起つたにしても、身體には換へられやしない、身體在つてこその事情だ、ねえ三浦樣、爾うでせう？」
「私も爾う思ひますわ。だッて、輕重を顚倒して居るんですわ。」と三浦も云つた。
「平生の萩原樣にも似合はない、全く無謀だよ。」と楠田は叱言でも云ふ樣な語調で、「今退院なんかしたら、私が肯かないから可い。」
初野は只だ莞爾した許り、何とも口を利かぬ。
楠田はまた、
「私が可けないッて云ふのに、豈夫無理に退院しやしないでせうね、ね萩原樣……、私に心配を掛けるのが面白い譯でも無いでせう？」
「其樣な事は無いんですけれど。」
「ぢやア私も滿足よ、」楠田は莞爾して、「私に心配を掛け度く無いと聞けば、最う其の一言で滿足なのよ……。どれ、其の嬉しい言葉を土產に、今日は是でお暇と爲ませう。午後からお客が有るんでね……、あら、大變だ、最う二時よ。」
懷中時計を見るや否や椅子を離れて、急し相に襟を正しながら、
「三浦樣、貴女は未だ話してるの？」
「え、最う少し。」
「其樣な事を云つてないで、一緒に來たんだもの、一緒に歸らうぢやないか。」
「ですけれど、少し用が有るんですの。」
「爾う、ぢや私ばかり、」と厭な顏色をしたが、「何だか、嫌はれた樣だわねえ。ほゝゝゝ。」
「あの、先生、」と初野は言出し難さうにして、「種々御親切に仰有つて下さいますけれど、矢張り、退院する心算なんですから、何卒爾う思召して……。」
楠田は其の細い眼を出來るだけ睜つて、
「まア、何うしても……？」と呆れた樣に初野の顏を視詰めた。
「はア、」と微し紅くなッて、「種々都合が有るもんですから。」
楠田は定めし坐り込んで、再止めに懸るのかと思へば、如何したのか其樣子も無く、
「意志が強くなきや誘惑に勝てないッて云ふけれど、それぢや、餘り强過ぎるぢや無いかね……。此樣な可愛い顏をして、本當に顏にも似合はないよ。だけれど、退院すると云ッても、今日今日に爲るんぢや無いでせう？」
「は、今日は最う、受持醫がお歸りになッたさうですから。」
「では、何れお醫師樣に聞いてからですね？　其樣ならまだ可いけれど……、只だ强情を張るんぢや、私は、決して默つてられ無いからね……。ぢや、急ぐから、今日はまア此れで歸りませう、明日にもまた出直して來て、今度は熟く腑に落ちる樣にね……。」と二人に挨拶して扉の際まで行つたが、「あ、大切の事を悉り忘れる所だつた、萩原樣、鳥渡。」
「は？」初野は寢臺の上から聞いた。
「ま鳥渡、少し話したい事があるから。」と扉の外に手招するのである。
初野は詮方なしに寢臺を下りると、
「聲戒聲戒！」と三浦は低聲で云つて、腰の邊を徐と突いた。
初野は知らぬ顏して出て行つた。

（三）

跡に一人遺された三浦絹子は、擽ッたい樣な顏をして、暫く扉の彼方を眺めて居たが、軈て氣を轉へて、一寸四方を見廻しながら、我が袂から取出したのは、日本製の紙卷煙草と燐寸

箱であるが、手早く火を點けて、すぱ〳〵と渇ゑた樣に喫み始めた。

絹子は、初野と同じ文科の三年生で、齡は一つ劣と云ふことである。雀斑の多い、頰骨の高い、頤の突出た、瘦顏であるが、目は冴えた大きな目で、鋭い、才氣の湛が躍つて居る。成績も中々良い方で、數學、諳記物などは、初野にも優つた點を得ること間々あるが、兎もすると教師を嘲弄したり、お轉婆な惡戲をしたり、氣の弱い者を泣かしたりするので、操行點は甚だ惡く、席順は何時も級中の中程邊を上下して居る。

誰が言觸したともなく、横濱の女郎屋の娘として名が通つて居る。他は悉く中流以上の紳士の娘なので、絹子のみは何事にも一人除物にされる傾がある、けれども當人は一向平氣なもので、口惜い樣な風もしなければ、强ひて仲間入をしようともせず、何時も面白相で、而して何時も活潑なのである。

ところが、如何云ふ機會からか、初野とのみは互に親しくして、一緒に撮つた寫眞も五六種ある。「三浦樣は才女だから、巧く取入つて交際を廣めようと懸つてるのよ。」或は、「彼樣な人に纏着されるなんて、萩原樣のやうでも無いわ。」などと、他の噂は種々であるが、去ればとて初野は絹子を疎んずる樣なことはせぬ。

さて絹子は、早くも一本の卷莨を喫み終り、引續いて二本目をも、噛んで飲む樣に咽喉を鳴して味つて居たが、不意に扉が開いたので、吃驚して其の喫殘しを背後に隱した。入つて來たのは初野である。

その顏色を見ると、少時の間に色も惡く、扉の外には、確に何事か有つたらしく思はれる。絹子は、背後に隱すと共に速くも揉消した卷莨を、笑ひながら友人の前に出すと、初野は難かしい顏をして、物をも云はず寢臺に上つた。

「如何したの？」と絹子は覗く樣にして、「犯られたの？」

初野は只だ頭を掉つた。

「ぢや、如何して？　不滿の黑雲は、彼女の月の顏を蔽ひけり……だわ。」

「だツて、實に人を侮蔑してるのよ。」と初野は忌々敷さうに云つた。

「誰が、愚圖田先生が？　ぢや、到頭犯られたんでせう。」と絹子は笑つて、「私も、危險いと思つたのよ。」

愚圖田とは、楠田女子の渾名である。初野は又も頭を掉つて、

「いゝえ、其樣な事ぢやないの。私の下宿にね、色々善からぬ評判が有るんですツて、ですからね、退院するならば、他へ轉宿しろ……ですと。」

「善からぬ評判て、何樣な……？」

「男の入込む事や、それから、此の頃工藝科の女生でね、一人墮落く成ツた人が有るもんですからね……。」

「あの、貴女の……、彼の島井に下宿して居る女生？」

「然。」と點頭き、「あの、お主婦と云ふ人はね……。」

「不良い人？　まア、私は些とも知らなかツた。」

「私は最う、疾から爾う思つてるのよ、だけれど、外に墮落い人が出たからツて、私にまで、其樣な疑を懸ける事は無いと思ふわ。」

「誰が其樣な事を云ふの？　愚圖田先生一己の意見？」

「いゝえ、監督の話ですと。全く、人を侮蔑してるぢやありませんか……。」と初野は涙ぐんだ。

「失敬だわねえ！」

學科は元より、志操の堅固な事も、蓋く校中第一と他にも信用を得、自分も爾うと許して居

た處を、他に墮落生が出來たから轉宿せよと云ふのは、詰り我が志操が弱く、誘ふ物あれば墮落もする樣に斷定されて居るやうで、初野は耐へがたき侮辱を感ずるのである。

「私は此樣な口惜い目に遇ふのは初めてだわ。」

「必然、貴女を妬る者の爲た事なんだわ。」と絹子も忌々敷さうに、「貴女、何ういふ返辭をしたこと？」

「少し考へさして下さいッて。」

「何故其樣な弱い事を云ふのよ？　私なら、斷然排付けて遣るわ。だッて、島井は親戚と云ふ事になッてるでせう、保證人でせう、何も、校則に牴觸する事は無いわ。私なら、意地に成ッて動かないわ。」

「私も其の心算よ。だッて、試驗前になッて、其樣な手數な事なぞ出來やしないわ。」

「幾ら監督だッて、其樣な事まで干渉するなんて、越權よ、全く越權よ。」と絹子は罵ッたが、「誰だらう、其樣な事を內通する女は？」

初野は默つて俯向いて居る。久く考へてから絹子はまた、

「男が出入するッて、何樣な男が出入するの？」と笑ひながら問く。

「其樣な事は、私は注意しないから。」

―だけれどね、」と絹子は、意味有り氣に初野を見て、「彼の男の事を、誰か知らしたんぢや無からうか？」

「彼の男？　彼の男ッて？」

「ほら、貴女の好い男…、ぢや無かッた、東の君…、ほゝゝゝ。」

「あら、また彼樣な、」と初野はさッと赧くなッて、「本當に、三浦樣は酷いわ。」

「だけれどね…。」

「私、もう知らない。」

「あら爾うぢやないのよ、まあお聞きなさいッたら。」

「だッて、餘りですもの。」

「いゝえ、私この間ね、學校で其樣な話を聞いたのよ。」

「私の事を？」初野は顏色を變へた。

「えゝ、」と絹子は點頭き、「あの、萩原樣と、夏本樣の許嫁の大學生とは、非常に親密な間だッて事だが、それぢや、夏本樣が可哀想だ…なんて。」

「まア、誰が其樣な事を？」

「貴女の樣に、爾う一々氣に懸けても仕樣が無いわよ。」絹子は困つた樣に顏を顰め、「孰せ他の噂ですもの、妬る者の云ふ事たもの。」

「いゝえ、他の事と違つて其樣な…、」と云つたが、はら〳〵と落涙して、「口惜いわねえ、私は其樣な破廉恥な女に見えるでせうか！」

「貴女は、直ぐ爾う大きく考へるから不可ないことよ。可いぢやありませんか、誰が何樣な事を云つても、自分さへ潔白なら…。私なら爾うだわ。」

「だッて、其樣な事が芳江樣の耳に入つたら何うでせう…。貴女だッて知つてるぢやありませんか、私と芳江樣の間は何樣な間だか…。」

「豈夫芳江樣が、貴女を…自分の許嫁の男を奪る女とは思はないわ。」

「爾うは思はないでも、何樣なに不快に感ふんですか！」と手巾で顏を被して、「其樣な事が聞えた日には、私はもう、芳江樣に顏を合されやしない。」

絹子は、初野の餘りに強く感激したのを見て、惡い事を言出したと悔んだが、今更冗談に云ひ紛らすことも出來ず、久くは只だ口を噤んで居た。初野は漸と涙を止めて、

「夫は…東吾樣は、私の力と頼む方ですとも。本科に入る時も、彼の方の意見を聽いて入つたんだし、卒業後の方針だッて、彼の方に相談の上極める心算で居ますわ…だけれども、

只だ力と頼む許しで…、智慧を藉りる許しで、何も、親しいの、特別の關係が有るのツて、其様な祕密な間でなんぞ無いんですわ…。」

「萩原様、貴女困るわ、其様なに私に喰つて掛つた處で、私が言觸した事ぢやあるまいし。」

「いゝえ、貴女に喰つてかゝることは無いけれど…。私だツて三浦様、其様な噂を立てられて口惜いわ。」

「口惜いたツて…、」と考へて居たが、「私なら、一言の下に解決が出來ると思ふわ。第一、彼の東吾様て云ふ方は、夏本子爵の養子でせう、而して、芳江様とは、最う斷るに斷れない間になツてるでせう？」

「斷るも斷れないも、最う此の夏で、法學士に成れると云ふのも、皆な芳江様の阿父様が保護をして下すツたからですわ。」

「それ、爾う云ふ義理が有るでせう。加之に彼の方だツて、豈夫政略で養子に入つた組ぢや無いでせう。」

「東吾様が…？　政略なんて、其様な卑劣な事なんか、夢にも思ふ人ぢやないのよ、表面は磊落に見えても、情には脆くツて、義理堅くツて、思慮には富んで居るし…。」

「それ、爾う云ふ立派な男でせう…。」

と云つた絹子は、微しく笑を含んだ。初野は、その笑つた顔を見ると、何うしたのか頬の邊をほんのり染めて、

「私、只だ褒めるんぢや無いけれど、だツて、事實だから仕方が無いわ。」

「私だツて、事實で無いと云やしないわ。」と絹子は又笑つた。

「それで、如何したの、彼の方が其様な性なら…？」

「爾う云ふ、誰にも好かれる様な人なら…？」

「好きとも嫌ひとも云やしないわ。」

「ぢや、尊ばれる人…、可いでせう…、尊ばれる性質の人…。」

「それで？」

「それで、爾う云ふ人なら、交際する者は悉な、互に性格を理解し合つて居る人でせう。其様な噂位で、彼の方の徳を疑ふ様な者は無いでせう…？　貴女だツて爾うだわ、芳江様の許嫁を奪るなんて、貴女の友人が、何で其様な馬鹿らしい事を信ずるもんですか、誰も信じやしないわ、耳を假しアしない…、私なんざ、幾ら目の前で…。」

と云つてる處に、扉がさツと開いて、附添の看護婦が急しく入つて來た。

「萩原様、」と何だか呼吸を喘ませて、「今、辛と會計が諒きましたからね、彼金を納めに參りましたらね、最う、貴女の御勘定は濟んで居りますよ。」

「え、私の入院料が…？」

「は、皆な濟んで居りますよ。」と看護婦は紙幣を初野に渡した。

「だツて、私の拂はないものが…？」初野は解せぬ顔をして、「間違ひぢや無いんですか…、其様な事は無いぢやありませんか？」

初野の知らぬ間に、初野の拂ふ可き入院料が、初野の知らぬ人に拂はれてあるのだ！「夢ぢやあるまいか？」と初野は心の中で思うた。昨夜の夢を想出したので。

「不思議だわねえ、」と、絹子は初めて口を利いた、「貴女、誰かに頼んだ覺えが無いこと？」

「頼むツて、お拂をする事を？」

拂をする事を頼んだ覺えがあるならば、元より顔色を變へて不思議がる事は無いのだ。絹子は直ぐに其れと氣が着いて、

「爾うねえ…、其様な理由は無いわねえ、」と首を傾げて、「だけれど、何か貴女、思當る事が無くツて？」

初野は只だ頭を掉つた。惘然と何事か考へて

居るのである。
「頼まれもしない金を拂ふなんて……。だけれど、如何しても貴女の事を熟く知つてる、極く貴女に親しい人に違ひ無いわ、」と云つて、其處に起つてる看護婦に、「ねえ、貴方でせう？」
看護婦は椅子に背中を擦りながら、
「何うですねえ、親しいお方で、それで、顔を見られるのが體裁が惡いと云ふやうな……。」と意味有り氣に笑顔を作る。
此方の二人は一時に眼を瞠つたが、其の中にも絹子は莞爾して、
「何うだ、解つてよ、男の方よ。必然戀してる男なんだわ……。」
「また、三浦さんて云へば……。」と初野は紅くなツた。
「だツて、其れに違ひ無いわ、現れたら私、何でも散財りませう。ねえ、貴女の解釋は何う？」とまた看護婦に話し掛けた。
看護婦は只だ笑つて居る。初野は、親しい者の名を胸に浮べて、彼か此かと獨で吟味をして見た。學校の友達、教師、學校外で知り合つた二三の男兒、下宿で顔を合せた誰彼、東京へ出て最う五年にもなるので、其の數も少くないが、我に代つて拂を濟まして呉れさうなのは、交の親密な點から云つても、其の資力の有る處から見ても、彼の姉妹同樣にして居る夏本芳江一人なのである。
「あの、此の間まで毎日の樣に來た夏本樣ねえ、」と初野は看護婦に尋ねた、「彼の方が、今日私の不在に見えはしませんでしたか？」
「如何でございましたか……、お見えに成りません樣でしたよ。」
「いゝえ、芳江樣ぢや無いわ、」と絹子は口を挿れた、「男の方だわ、芳江樣なら、拂つたら拂つた樣に、必然手紙かなんか置いて行くぢやありませんか……。男だわ、必然男兒！ さア、誰だらう？ 貴女、誰か、萩原樣に隱れて、竊り見舞に來る人が無くツて？」
而ると看護婦は笑つて、
「何うですねえ、」と變に患者の顔を見て、「此の頃は來らツしやいませんけれど、日外中は、屢く來らツしやいましたよ。」
「日外中は……！」
「え、私に隱れてですか？」初野も吃驚した。
「一寸、何樣な方？」
「何ですか、法科の方の樣でしたよ。」
「え、大學の……。」絹子は叫んだ。
「まア學生……。」見て居る間に、初野は火の樣になツた。
「ほら、愈よ例の一件だわ！」と絹子は笑つて、初野が膝の邊を突つくのである。

第七　子爵の養子

（一）

午砲が轟いて最う餘程經つたが、講義は今終つたところと見える。帝國大學の正門から、丁度煙突を出る煙の樣に、一群の學生がむら〳〵と溢れ出て、右に、左に、煙突の煙と風に散つて行く。孰も一樣に半平帽、インキ壺に筆記帖を提げたが、服裝は和洋思ひ思ひの扮裝、中には制服に足駄と云ふ變つたのも交つてゐる。
空は晴れて居るが、昨夜の大雨の痕が未だ乾き切らず、街の中程は往來繁き車馬に搔廻されて、穿物を沒する許りの泥である。此の惡路の中に赤い脛を顯はせながら、其の門を出て來る學生等の顔を、瞬もせず眺めて居るのは、Nの字を縫つた紺の半被に半股引、氣の好さ相な車夫である。
「はてな、見はぐツたか知ら……。皆な同じ樣な書生樣だから、見はぐツたかも知れねえ……。春は高えし、色は白えし……、何樣な大勢の中

だッて、一旦で分ると思つたら、中々偏うは不可ねえ……。」と車夫は獨語して居たが、急に勇出して、「ゑ、彼男だ彼男だ、漸とお出でなすッた……。何時見ても落着いた、立派なお方だ。や、殿様のお眼識は違つたもんだ。他日に御家督に直つたら、何樣な偉え方に成るか知れやしねえ、學問はお優なさるし、身持は良えんだし……。だが、彼の服裝は何て云ふ服裝だらう、幾ら構はねえッて、最う少し何うにか成りさうなもんぢや無えか、彼ぢや、夏本子爵樣の御養子て云つたッて、誰も眞實にする者は有りやア無え……。」

　車夫は呟きながら、彼方から出て來る大學生の方に歩を運んだが、何處から見はれたか、疾くも其の大學生の傍に駈寄つて袖を留めたのは、これはまた意外にも十六七の銀杏返、肩揚の深き銘撰の格子によれ／＼のメリンス友禪の帶、ママ、職人か小商人の娘と云ふ後姿である。

「おや、何者だらう？」と車夫は、娘に先を越されたので此方に立止つた、「彼樣な者と親しくするなんて、東吾樣も彼あ見えて中々油斷は成ら無え……、あれ、彼樣なに馴々敷……、笑つて居らッしやる、おや、此方へ來ようて云ふのを袖なんか曳いて……、何を話すんだか……、往來中で能く彼樣な事が出來たもんだ、畜生、一番驚かして遣れ……。」

　車夫は直に二人の前に歩寄つて、

「へ、只今お歸りで居らッしやいますか……。」大學生に腰を屈める。

　娘は驚いた樣に後に退つたが、大學生は顔色も動かさず、近眼らしい眼を車夫に移して、

「松藏か、如何した？」

「へ、先刻から、爰ん處でお待ち申して居りますんで、へえ。」

「なんだ？　何か急用でも起つたか？」

「へ、阿孃樣が、なんですか急にお目に掛らなきや成らないと仰有いまして、彼方の横町に待つて居らッしやいます、へえ。」

「なに、芳江樣が……？」

「へ。今、倉岡樣へ行らしッて、それから此方へ廻つた處でございます、へ。」

「偏うか。何處に居るんだ？」

「直き其處の……。」と云ひながら、車夫は前に立つて大學生を導くのである。

（二）

「兄樣、此處ですよ。」

　其處の本屋の店から、車と共に出て來たのは、學校通ひの服裝を其のまゝの芳江である。

　車夫と共に將に横町に曲らうとした大學生は立止り、

「お、芳江樣か……。今歸る處だね？」

「いゝえ、今日はね、昨日兄樣に命令かつた事をね、初野樣に勸めようと思つてね、」と芳江は男の傍に寄つたが、往來の人が顔を見て通るので、氣が付いてまた一歩離れ、「私、それで學校を休んだの。」

「偏うか。」と只だ點頭いた。

「だけれど無效でしたよ、初野樣は、最う退院したんですもの……昨日。兄樣知らないこと？」と男の顔を見たが、默つて居るのでまた、「初野樣は、醫師の許容を得て退院したッて云ひますけれど……、本當でせうか？　だッて、繃帶なんか舊のまゝよ。」

「ぢや、未だ手を使ふ事は能きんのだね？」

「えゝ、使ふ處ぢや無いわ、動かす事も能きやしないわ……。彼樣なで退院するなんて、私、初野樣の心中を察しると、何だか悲しくなッて……。」と云ふ中に涙ぐんだが、直ぐに手巾で拭つて、「兄樣、私、種々相談したい事が有るんですから、午後から、宅へ來て下さい

な。」
「いや、今日は可けない。」
「午後からも授業が有つて・・・？　可けないわねえ・・・。」
「お、松藏が巡査に叱られてる。」
芳江も彼方を眺めて、
「私を、彼樣な處に待たして置くなんて、餘り氣が利かないんだもの。好い氣味だわ。」
「人が立つと可けない、もう少し彼方へ行かう・・・。」と歩出したが、芳江を見下して、「芳江樣は靴だね、其方を廻るが可い。」
「なに、可いのよ、此樣な物・・・。」と云ひながら、芳江は速くも汚れた路を跳越えて向側に行つた。
道を往來の人は、呆れた顏をして芳江を見て通るのである。
「失敬だよ、他を笑つて、」と芳江は、自分を眺めて通る者を睨返して、不平らしく呟いた。
「今の高躍は巧かつたねえ、皆な人が見て行つたよ、」と大學生は緩りと足駄を運びながら笑つて、「芳江樣は活潑だなア。」
芳江は、近寄る大學生を見上げて居たが、如何したか急に眞紅になツて、
「だツても・・・。」と微に云つた許り、急に摘んで居た袴の裾を下して、歩調も小さく、俯向きながら徐に歩み出した。
二人は、赤門から大學の構内に入つたが、芳江は何時までも默つて居るので、
「話す事が有ると云ふぢや無いか？」と大學生の方から口を出した。
「え。」と微に點頭いた。
「何だね？」と芳江を覗きながら聞いたが、「昨日話した樣に金を持つてツて遣つたんだね」
「え、其事でですの、」と面を擡げて、「兄樣が、幾何か補助をして上げたら、と仰有るから、母樣に願つてね、二十圓だけ持つてツたんですよ、だけれど、最う退院して了つたからツて、何うしても初野樣取つて呉れ無いんですの・・・。何うしたら可いでせう？」
「取らない物は詮方が無いさ・・・、」と、足下を見ながら考へて、「ぢや、金に困つてる風は無いかね？」
「如何ですか、私には分らないけど・・・、」と云つたが急に思出した樣に、「兄樣、而してね、誰が拂つたんですかね、初野樣の入院料をね、皆な拂つてあるんですと・・・知らない間に。」
「爾うか？」
「其樣な事が有るでせうか、本人の知らない間に拂つて置くなんて・・・、」と芳江は、男の平氣なのを不足相に、「怪しいわねえ・・・、兄樣は何う思つて？」
「さう・・・。」
「初野樣はね、必然私の爲た事と思つてたんですと。それですから、私は知らないツてたら、ぢやアどなただらう、些とも想像が付かないツて、大變に考へてましたの・・・。何だか、小說の樣だわねえ・・・。あら、彼處に松藏が來てよ。」
成程、車夫が綺麗な空腕車を曳いて、がら〳〵と赤門を入つて來た。
大學生も近視眼の目を細くして車夫を眺めたが、何とも云はずに其の紺メリンスの兵兒帶に巻着けた鐵鎖の、銀側時計を探り出して、
「最う一時だ、」と急に忙がし相に、「時に、其の金を何うするね。」
「何うしたら可いでせう？　私、どうでも兄樣次第ですわ。」
「母樣に返すかね？」
「兄樣が返せと云へば返すけれど・・・、私は、何だか初野樣が氣の毒で・・・。」
「爾うだ、」と、芳江の言を褒める樣に點頭いて、「孰せ遣らうと思つた金なんだから、取らせ

なきや僞だねえ……。何でも初一念を通さなきや不可ん……、人は意志が弱くては不可ん、善い事を思立つても、それを行はなきや何にもなりアしない、その儘消えて了ふなら、寧ろ最初から思はない方が優だ。」

芳江は、瞬きもせず聽いて居たが、

「それもさうだし……。平素あんなに有情くして下さる方ですもの、此う云ふ時にでも力に成ツて上げなきや、私、なんだか友誼に背く樣で……、」と云つて男の顏を見上げ、「何うしたら可いでせう？」

「おや、躊躇する事は無いさ。無理にも取らせるさ。」

「いゝえ、それを取る位なら、私だツて何も困る事無いけれど、何うしても取ツちや吳れ無いんですもの……。」と芳江は溜息を吐いた。

「さア、何うしたもんかなア。」と、これも當惑した。

「それで、私此う思ひますの、寧そ、兄樣から遣つて下すツたらと。」

「え、私から……？」一茫然としたが、忽ち平生の調子に復つて、「何だッ――其樣な事を云ふの、私から遣つては、芳江樣の情が知れないぢや無いか？」

「だッて、初野樣が使つて吳れれば、私の意が貫ると云ふもんですわ……。加之に、初野樣は、兄樣が遣ると仰有れば、取るに違ひ無いんだから。」

大學生は芳江の眼の處を視詰めて、

「何故？」と驚いた樣に問いたが、「其樣な事が有るもんか。」

「いゝえ、兄樣の云ふ事なら、何樣な事でも背きはしませんよ。もう、兄樣の事は、非常に信じ切つてますもの。」

大學生は微し紅くなツたが、

「其樣な事が有るもんか、」と無理に笑つて、「私が遣ればいゝなんて其樣な條理の合はない事を云つても駄目だ。ぢや、此うするさ、最う一度行つてね、芳江樣の意を明して見せるさ……、不斷から、初野樣に對して何う云ふ友情を有つて居るか、また、此の金は、何う云つて阿母樣から貰つたか、悉な打明けて、而して何處までも勸めて取らすさ……？」

「最う一度……？　今直ぐ……？」

「今でも明日でも、其處は芳江樣の都合で……。」

「熱と行くなら、私氣に掛るから、これから直ぐ行くわ。」

「ぢや爾うするさ。ま、最う一度行つて勸めて御覽、必然、芳江樣の意が貫るから。」

「爾う。ぢや、直ぐ行くわ！」芳江は忽ち意を決めて、彼方に待つて居る腕車の方に步み寄つた。

男は、賺むるとも無く其の後姿を眺めて、同じく門の方に步を運んだが、急に、

「芳江樣……。」と呼んだ。

「え？」と、片足を腕車に掛けた芳江は、背後を振返るや否や、網上げの靴を輕く駈けて來た。

「なに、來なくとも可いんだ。」と男の方でも駈寄つて、「今日、萩原は僕の事を何とか云つたかい？」

「いゝえ、何とも云はないわ。」

「私の事が話に出なかツたね。」

「え、何故？」

「何でも無いが、只だ、」と答へたが、「貴女が、私の事を信じてゐるなんて云ふからさ。」

「爾う？」

「それだけだ……。ま、疾くお出で。」

「ぢや、兄樣失禮してよ。」と美しく莞爾して腕車に乘り、「兄樣、歸りに寄つても宜いこと？」

「寄つても可いけれど、今日はまアお歸り、母樣が心配すると可けない。」

「爾う？　ぢや、寄らずに歸つてよ。」とまた優

しく顏を横に向けた。
　腕車は駈出した。あゝ彼の目、何う云ふ意で彼樣な目をするのか…？　許嫁の男子にそれの解らぬことはない。
　大學生は立止ッた、而して其の跡を見送つて、深い深い溜息を吐いた。

（三）

「夏本樣、一寸夏本樣、夏本樣たら…、聞えない風して行くんだよ、惡らしい。」と云ひながら駈付けて、「夏本樣！」
　夏本東吾は初めて立止り、
「お、梅ちやんか、未だお前此處に居たのか。」
「酷いよ、夏本樣は、彼樣なに呼んでも知らない顏をして…。」と東吾を笑ひながら見上げて、「今の別嬪樣は、彼れは誰？」
「梅ちやん、先刻の話の外に、未だ命令かッた事が有るのか？」
「ふゝん、佯僞くれて居らッしやるよ。知つてますよ、其樣なに祕しても。當てて見ませうか…、夏本樣のお孃樣、貴方の將來のフラウ、ね、當つたでせう、ほゝゝゝ。」
「フラウ？　フラウと云ふ事を知つてるか？」
「知つてますよ、其樣な事を。人を馬鹿にして居らッしやるよ…。可いから、皆なに爾う言つて觸れて歩かう、阿孃樣が門の處に待つて居て、夏本樣を大學の庭へ曳張つて行つて、何時までも何時までも、二人で祕密談をして居たッて。」
　東吾は顏で笑つて居たが、別段これに取合ひはせぬ。丁度此の時、二人は高等學校脇の曲角まで來たが、梅ちやんと云ふ娘は急に東吾の袂を提へて、
「あら、何處へ行らッしやるの？」
「下宿へ行くとこぢや無いか。」
「あら、今言つたぢやありませんか。倉岡の叔母樣に賴まれたことを…。」
「俺の兄樣が來て居るから、下宿へ歸らないが宜いッて云ふ事か？」
「え。何でも、また無心が有つて來たんだらうから、お會ひなさらない方が宜しうございますッて。」
「倉岡の奧樣も、酷いことを云ふぢや無いか。」
「だッて、貴方の益にならないからですよ。兎角歸つて來らッしやると、碌な事が無いから、學校へ行つて知らしてお上げッて、氣を揉んで居らッしやいますの。」
「可いぢや無いか、碌な事が有らうが無からうが。」
「だッて、醉ぱらッてますよ。」
「梅ちやん、見たのか？」
「見ましたとも、徐と二階に昇つて…。貴方の座蒲團へ胡坐を組いてね、其邊中へ書籍を散かして、書籍を見ながらお酒を飲んでますの…手酌で。」
「爾うか。」と首を傾げた。
「それでもお歸んなさるの？」と顏を覗いて、
「私の家へ來らッしやいよ、よ。」
「や、有難う。小母樣へ宜しく、」と云ふや否や、東吾はさッさと追分町の方へ行つた。
「あら。これだから强情と云はれるんだよ。」と娘は、東吾を眺めながら獨語した。
　駒込の通を眞直に二町許り來ると、左へ曲つて兩側は生垣の小路、孰も官署か會社の勤人らしい門構であるが、東吾は、右側の唯ある二階家の格子戸を威勢好く開けて入つて行つた。
　その音を聞付けてか、四十許りの、一寸品の良い丸髷の婦人が奧から駈出て、
「おや、梅ちやんを上げた筈ですが、お逢ひにならなかッたんですか？」
「逢ひました。」と常の聲で云ふ。

「兄様が來らしツてますよ。」と低聲が愈よ低聲になる。
「あ、爾うな相ですな。」
「大變に醉ばらツて居らツしやいますよ。」と顏を顰めて見せる。
「爾うですか。」と許り、東吾は一向平氣で、さツさと梯子を登り掛けたが、呆れて居る婦人を見下して、「まだ飯前ですから、お膳を出して下さい。」
梯子を上れば、突當は薄暗い紙門を洩れて、煙草の煙やら酒の臭やらが鼻を衝くのである。

(四)

「兄様、好くお來ででしたねえ。」
「お、今歸つたか。例に依つて此の通りだ、あはゝゝゝ。」
「久くお目に掛りませんでしたな。此の頃は如何です。過日お話の鑛山は何うなりました？」
「はゝゝ、鑛山か、失敗失敗、最う皆な失敗だ。人間も、此ら失敗許し續いちや、自分ながら愛想が盡きるよ。どうだ、一杯飲らんか？」
「有難う、ま、お酌しませう。私は、此の頃は禁めて居ります。」
「爾うか、それは善いね。自分が飲んで居つて此様な事を云つちや可笑いが、酒は止した方が良い、何うも頭腦が惡くなツて可かん、忍耐力が衰へる、氣力が弱くなる、何うも可かん……。お前などは、是から世間へ出ようと云ふ大切の身體だ。酒と女は愼まなきや可かん……。」
「今日は何うしたんです、大變お説法が出るぢやありませんか？」
「愚癡になツたと云ふのか、はゝゝゝ、愚癡にもなるさ、此うまがり屋さんに成ツちやなア……。」
「まアお飲んなさい。何も嘆息する事は無いぢやありませんか、今に如何にか成りますよ……。些とも飲らないぢやありませんか。」
「なアに、最う四五本も倒したんだよ。」
「でも、兄様の量にしては……。」
此處へ、下婢が東吾の飯を運んで來た。兄は醉眼を濛りながら大きく欠伸して、
「まだ飯前か、腹が空いたらう、己に構はず食れ食れ。」
「私は何うでも、ま、飲つたら可いでせう、有りませんか、おい……。」と下婢を呼止めて徳利を命ずると、
「止せ止せ、もう厭になツた。」
「爾うですか……。何にも肴が有りませんな、刺身でも取りませうか。」
「なに、最う澤山だ、己の酒は肴で飲む酒ぢやない。加之に、今日は少々お前に相談したい事が有つてな……。」
「相談て何です？」
「孰れ己の相談だから、碌なことぢや無いがね……。まア後で話さう、飯を遣つて了へ。」
「ぢや失敬します。」と東吾は箸を把つたが、「兄様は何うです、未だ御飯前でせう？」
「己か、最う此の上に何が入るもんか、はゝゝは。」
兄の東一は三十二、即ち東吾の八歳上であるが、額は禿上り、目の縁には小皺繁く、鳥渡見には四十近くにも見える。面貌とて、目鼻容は似ても居るが、東吾の筋肉發達して、頬など丸く膨つて居るに反し、兄は骨立つて色も黒く、醉の廻つた目にのみ鋭き光を有つて居る。服装は、黒斜子の羽織に茶微塵の絲織の綿入と云ふのであるが、孰も垢染みて、反つて弟の紺絣の木綿羽織や綿入の方が美く見えるのである。
「此の間、阿父様が風邪を感いたツて聞きましたが、最う快いんですか？」と東吾は飯を食ひながら聞く。

「あゝ、もう快い樣だよ。己も、此の四五日家へ歸らないもんだからな……。」と兄は其處に置いた白氏の詩集に眼を移しながら云つた。

「家へ歸らない？　何故歸らないんです？　何うしたんです？」

「なに、何うもせんな……、」と弟を見返つたが、「其樣なに驚く事は無いよ。」

「でも、家で心配してるでせう。」

「なアに、居ない方が反つて好いのだ。己が家に居ると、朝から借金取ばかし詰掛けるもんだからな……。」

「ふーん、さうですかなア。」と東吾は溜息を吐いた。

「まア、其樣なに氣に掛けた處で詮方が無いさ……。」兄は又も書籍に眼を向けたが、何だか思出笑でもする樣な語調で、「東吾、先刻書籍の中から出たが、此の書狀は、これは女だね……萩原初野、女だらう？　女にしては巧いもんだなア……。」

「あ、其れですか……。」と東吾は慌てて、面を赧くした。

兄は東吾の赤面したのに氣も付かず、

「餘り能く書いてあるもんだから、つい看る氣も無く看たが、文章も流暢だし、中々學問も有る樣だ……、女にしちや珍らしいもんだね、一體此女は何者だ？」

「學生です……女子學院の。」と何處か狼狽へた語調で答へる。

「學生？　ぢや芳江樣の友人ででも有るのか？」と訝かし相に東吾を眺めて、「まさか、お前の情婦ぢや無からうなア？　はゝゝゝ。」

「兄樣、そんな戲談を云つちや可けません。」と又眞紅になツた。

「爾うか、いや、其樣なら可いが……、此の書狀を看ると、何だか此う穩かならん文句が有るからな。」

「何處にです？」

「何處だツけ……、」と、兄は書狀を擴げて、「えーと、梅櫻花は咲くとも、盲人は杖に探らん由なく……、いや、爰で無かツた、えー、其の事彼の事、思出づれば悉く御情の賜ならぬは無きを、愚にも今日が日まで、白菅の知らで過せし……」

「それが穩かで無いんですか？」と東吾は速くも兄の聲を止めた。

「爰と指して拾ふ事は出來んが、全體の意味が怪しい、母は在れど兄は在れど、力と賴む可き者は一人も無いと有る、これぢや、お主一人を力草とでも來るところだ、あはゝゝ。」

「それは兄樣、貴方の感違ひですよ。女の書狀ですもの、男と違つてそれ位の事は皆な書きますよ、けれど、實際は中々確乎した女で、男に戲談一つ云はさない嚴格者です……。」と東吾は、初野の學校に於ける評判から、自轉車から落ちて入院した事などを話して聞かせた。

兄は笑ひながら、

「だが、餘程お前に傾いてる樣だ、氣を付けなきや可かんぞ、お前もまた、竊に見舞に行つたとか、彼女でも今日まで知らずに居たとか……、其樣な事が有るぢや無いか。」

「竊にと云ふ事もありませんが、學校の中だもんですから……。」と曖昧に云つた。

「それに、此の入院料と云ふのは何うしたんだ、お前が拂つたと云ふのか？」

「其れは何かの間違です、何の餘裕が有つて、私が其樣な事を爲ませう？　兄樣は、私を其樣な者に思つて居らッしやるんですか！」と急に怒つた樣に、一生懸命で問詰めた。

「はゝゝ、氣に障つたか？　氣に障つたら堪忍しろ。」

「其樣な事は無いけれど、何だか僕を疑つてる樣だから。」

「疑ひも何らもせん……、何らもせんが、己の眞似を爲ちや困ると思つてだ……。いや、戲談ぢや無い、血氣未だ治まらず、之を戒むる色にあり、實に千古の格言さ、此の兄だツて、生れながら此樣な意氣地無しぢや無かツたんだ」と我と我が身を嘲る樣に云つたが、凝乎と東吾を見て、「お前などは、學問も有るし、財産だツて地位だツて、どんな事業も出來る人間だ、一時の迷から、一生の不幸を招く樣な事があツちや可かん、善く愼んで呉れなきや困る……。」

東吾は、飯を食ふ箸を息めて、兄の言に耳を傾けて居た。兄はまた、

「お前の知つてる通り、己は始終夏本を惡く云ふ、また實際嫌ひだ……、吝嗇で、不人情で、傲慢で、彼樣な厭な人間は無い、顏を見ても癪に障る、けれども、それは己の事だ、己が嫌ひだからツて、お前もお交際に嫌ふ渾由は無い、お前には恩人だ、義理ある親だ、己が惡く云つたからツて、お前まで惡く思ッちや濟まん……、恩を報じなきや、その、孝養を盡さなきや可かん、芳江樣を泣かせる樣な事を爲ちや濟まん、他へ女を拵へたりなんかしては」と泣云つたが、急に高聲になツて、「はゝゝゝ、此樣な馬鹿なことは止さう、はゝゝゝ。まア、速く飯を食らんか、あはゝゝゝ。」

(五)

さて東吾の食事が濟むと、兄は其の用談を説出した。

矢張り無心の事である、數ある借財中の一口に、此の十五日までに違約償金を渡さなければ、委託物費消の罪に問はる可き件がある。彼は此の金を手配の爲に、四五日は家へも歸らず、知つた限りの誰彼と賴廻つて、手段も工夫も盡きた果は、八歳の年下の弟、しかも袴一つの學生で、養家から貰ふ學資の外には、何處に金を手配る道もなかる可き其の弟に相談に來たのである。と云ふのは、爰に一人、兄には信用は無いが、夏本家の養子たる東吾が連印をするならば、其の金を貸して遣らうと云ふ者がある。利息は種々な名目を附けて法外の初減、證書と云へば、萬一期限相違の節は、一つしか無い首を斬られても聊か異存申す間敷き樣な下書、如何に苦しいとて此樣な金を借りねばならぬかと思へば、兄は口惜いよりも、東吾の耳に入るゝが恥かしいのである。

また猶う一つ兄の心苦しく思ふのは、昨年の歳末の事、同じ樣な借財で、東吾の印を捺させた處が、違約から債主の談判嚴しく、果は養父の子爵の耳にまで知れて、其の金は兎も角も夏本家の辨償で濟んだが、東吾はこれが爲に、暫くは養父の前に頭も擡げ得ぬまでの不首尾を蒙つたのである。勿論東吾は、其の不首尾の內情を固く祕して居る、兄に知らした處で、只だ不快を思はする許り、只だ養家と生家との不和を深からしむる許りだからである。けれど東吾が祕して居た處で、夏本子爵の性質を知つて居る兄は、其の時の東吾が受けた迷惑の如何許りであツたかは大槪察して居たのだ。

であるから、幾ら同胞でも、今また此樣な事が賴まれた義理では無いのであるが、併し此弟を外にしては、三千世界に術も法も盡き果てた身を如何に爲うぞ。

「爾うですか……。」と東吾は深く溜息を吐いたが、「何樣なにかお困りでせう……。困りましたなア!」

「いや、お前の樣に爾う心配しても可かんよ、」と兄は急に磊落に云つた、東吾の顏色が變つたので、「何だ、高が金の貸借ぢや無いか。熟く云ふ奴だが、借金取に食はれて死んだ者は有りやせんよ、はゝゝゝ。」

「併し、告訴でもされたら何う爲るです?」

「告訴？」と兄は今更ながら愕然としたが、また忽ち語調を變へて、「それは嚇しさ、まア爾う云つたものさ。己を牢に入れて、貸主に何程の徳が有る、やはり婆婆に置いて、一錢でも餘計に絞り取つた方が得ぢや無いか……。此樣な事は、小兒にも分る理窟だ、嚇しさ、無論嚇しに過ぎんさ、はゝゝゝ。」

聲高に元氣好くは云ふものの、最う酒も醉め果てて、包むに餘る憂の色は、目にも顏色にも明白に讀まれるのである。其の意中を知つて居る東吾も、實は胸を絞るの思ひ、

「困りましたなア！」と力なく首を垂れた。

「如何だらう、金高も多くは無いんだし……、五月になれば返す的も有るのだが、どうだらう、一つ印を捺して呉れることは出來まいか？」

「それは易い事ですが……、實は、僕の印は爰にありません。」と言難さうにして云つた。

「何處へ遣つてるんだ？」と屹然と東吾を見たが、「お前の養父樣が預つてるな！」

「は……。中々干渉家ですから……。」と苦笑した。

「ぢや何だな、お前が持つて居ちや、また、己に迷惑を掛けられる虞れが有るから……と此う云ふのだな？」

「其樣な事も無いでせうが。」

「其樣な事まで……、」と忌々敷相に鼓舌したが、頓て苦笑して、「此の前の一件も有るから、それもまア、無理は無い樣なものの……。」

「だが、今其樣な、過ぎた事を云つても詮方が無いぢやありませんか、」と東吾は兄の言を遮つて、「何とか、他に方法が有りさうな物ですなア、澤山の金と違つて……。」

と云つてる處に、

「あの、阿母樣がお來でになりました。」と下婢が入つて來た。

「なに、我家の阿母樣が？」と兄は吃驚した。

「はい、今、階下でお話をなすツて居らツしやいます。」と下婢は、何を聞いて來たのか意味有り氣な目で東吾を見て笑ふ。

「滅多に來る事の無い人なんだが、何の用だらう？」と東吾も訝ッた。

「必然、己を探しに來たんだ。困つたなア、今阿母樣に會ふのは、甚だ妙で無いが……。」

と云ふ中、梯子を登つて來る跫音が聞えた。

入つて來たのは母である。髮は半ば白く、ゆいゝツたりとした頰にも皺の波深く、最う六十近い婆樣であるが……二人の兄弟の齡から勘定しても其の筈であるが、未だ何處かに艶も殘つて、色も紅白い處の有る、品の好い中婆さんで。

「東一、お前はまア、如何したのですよ？」と、母は坐るや否や兄に云つた、「またお酒を飲んでるんだね、氣樂な人ですねえ……。」

東一は只だ莞爾としたが、急がし相に煙草を喫み始めた。東吾は押入から出した毛布を折つて母に敷かせ、

「阿母樣、今日は何處へいらしたんです？」と母が小紋縮緬の羽織、茶萬筋の結城紬の綿入など、總て外出の奥の手を出した其の服裝を訝りながら云つた。

母は、爾う云ふ東吾を瞥と見たが、直ぐまた兄に對つて、

「今日で幾日になると思ふの？　最うお前、六日になりますよ。何處の世界に、無斷に家を飛出して、六日も七日も歸つて來ない戸主が在ります？」

「阿母樣の樣に、爾う叱言を云つても仕樣がない、兄樣だツて、出るだけの用が有つて、出ても居るぢやありませんか。」

「叱言を云ふのぢや無いけれどね、餘り氣樂過ぎると思つてさ……。」と母が困つた樣に額を顰めると、

「これで、阿母樣には氣樂な者に見えますか

な？」と兄は笑ひながら云つた。
「氣樂でも無からうが・・・。ま、寢る時許しも、家へ歸つて寢たら可いぢや無いかね。お時がお前、毎夜寢ずに待つてますよ・・・。病氣に障ると可けないから、幾ら寢んでお居でッて云つても、何うしても肯かないんだよ・・・。」
「嫂さんは何處か惡いんですか？」と東吾は驚いて問く。
「阿父樣から傳染つたんだらうよ、風邪を感いてね。如彼いふ柔順い性なもんだから、我慢するに可いだけ我慢してね、能く能く、苦痛しく成ッてからでなきや、醫師に掛ると云はないもんだからね・・・。」
「なんだ、下らない、其樣な話はお止しなさい。」と兄は、母の言を消した。
「いえ、下らない事は無い・・・。」と東吾は、此の時許りは兄を咎める樣に云つた。
「無いともさ、お前・・・。」と云つて、母はじろりと兄を睨め、「家に居る者は、誰も此樣なに、お酒なんか飲んで好い氣嫌で居るとは知らないからね、今日は歸るか、明日は歸るかと、朝夕噂の絕える隙はないんだよ、況してお時なぞは・・・。」
「はゝゝゝ、好い機嫌か、はゝゝゝ、好い機嫌は宜かつた。あはゝゝゝ。」と兄は高聲に笑出した。
母は勃然として久く其の笑ふのを睨めて居た。東吾も困つたものだと云ふ樣に、兄を見詰めて居たが、只だ溜息を吐く許りで、諫める言も容易に出ないのである。
「どれ、ぢや歸ると爲ようか・・・。」と兄は突然に云つて、煙草袋を帶に插し、羽織の紐を結び直して、茶革の折鞄を膝近く引寄せた。
「爾うですか、ぢや其の方が宜いでせう、」と東吾は點頭いたが、「併し、今の談は何うしませう？」
「左樣さ・・・、」と首を傾げたが、急に元氣好く起つて、「なアに、何うにか成るだらう。」
「本當ですか、的が有りますか？」
「まア可い、其樣な氣に懸ける事も無いさ・・・。」と兄は點頭いて見せ、「阿母樣、失禮しますよ。」
母は兄を見上げて、
「お前、直ぐ家へお歸りだらうね？」
「未だ用が有りますから、今日は歸れないかも知れません。」
「兄樣、其樣な事を云はないで、まア兎も角も歸つたら可いでせう。」
「まア可い、己だッて、種々都合が有るからな、」と兄は、東吾を鎭めながら室を出て、「併し、此樣な俗事なんぞ氣に懸ける事は無い、お前はまア勉强してお呉れ。」
「併し、先刻の談なら、爾う狼狽へた處で仕樣が無いぢやありませんか。明後日からは私も休になりますから、また熟く相談しませう、今日はまア家へお歸りなさい・・・。」
「宜し宜し。まア宜いッて事よ、其樣なに心配せんでも。これで又、大いに畫策する處ありさ・・・。」
兄弟は梯子を降り掛けたが、
「兄樣、一寸待つて下さい。」と東吾は兄を止めて置いて、我が室から蟇口を持來り、「これ、僅ですけれど使つて下さい。僕は差當つて入りませんから。」と皺くちやになッた五圓紙幣一枚を出した。
「いや、是はまア借りまいよ。何うせ此樣な物が有つた處で、所謂燒石に水だ・・・。」と兄は取らうとした手を引込ませた。
けれども東吾は、押付ける樣にして無理に渡して遣つたのである。

（六）

東吾が室へ歸ると、母は竊と目を拭つて、

「最う歸つたかい？」

「歸りました…。兄樣も、此の頃は變りましたねえ、何だか、年寄の樣に成ツ了つた。」

「苦勞が絕えないからね…。」と力なく云つて溜息を吐く。

「困つたもんですなア…。併し、如彼して出て步いたら、跡が困るでせう。」

「なアに、跡はね、宜く命令けて置くものと見えて、お時がもう、夫は何から何まで、私達には心配掛け無い樣にして能く氣を付けて吳れるんでね、其點はもう、それ程困りもし無いけれど、私達に祕して居る事で、何樣な事が起つて、彼樣なにも家に落着いて居れないのかと思ふと、誠に案じられてねえ…。」

「兄樣も情の厚い善い人だが、何うも膽が大き過ぎる、彼處が缺點ですね。」

「最も少し、山氣が無くなツて吳れると可いけれど…、損を爲ようが失敗らうが、最う平氣なんだからねえ。加之に、阿父樣は如彼いふ人なもんだから、失敗して窪む樣な意氣地無しなら、山刀で睾丸切つて了への、錦に括まるも菰を被るも一生は一生だ、何うせ遣るなら大きい事を遣れなんて、嗾ける樣な事ばツかし云ふもんだからね、彼はまた、段々氣が大きくなる許しで、私やお時は最う、氣の息む時無しなんだよ、」と母は額を顰めて云つたが、凝然と東吾を視て、「だからね、お前許しは何卒、兄樣の眞似を爲ない樣にしてお吳れよ。これは阿母樣のお願ひですよ、ね、東吾、本當にお願ひですよ。」

「私ですか、私の樣な意氣地無しが、兄樣の眞似なんか爲ようツたツて出來ませんよ。」

「いゝえ、其の意氣地無しで丁度好いんだよ…。」

「なに、好い事が有るもんですか、私の樣な者は、男兒として一人前の資格は有りませんや、はゝゝ、あはゝゝゝゝ。」

「なに、無い事が有るものかね、今に卒業すれば、男の中の男とも云はれる學士にも成るだらうし、夏本家の相續人て云へば、昔なら大名格ぢや無いかね。お前は之れで未だ不足なんかい。」と母は笑つて、「矢張り慾が深いんだよ、中々兄樣に負けないよ。」

「はゝゝ、まア、不足が無いとして置きませうよ。はゝゝゝ。」

「無い處ぢやないよ、」と東吾の笑ひを消して、思出した樣に煙管の灰を拂き、「東吾、私はね、今夏本樣へ行つて歸途ですよ。」

「爾うでしたか。」と東吾は、じろりと母の顏を見た。

「阿父樣はね、家へ呼んで談した方が宜いと仰有るけれども、お前も、學校が忙がしいだらうと思つてね、それで、此うやツて寄つた所ですよ。」

「何か用が有つたんですか？」

「例の、御婚禮の事ですがね…。」と母は襟を搔合せて坐り直り、「今日は、熟くお前の意中も聽いて置かうと思つてね…。可いだらうね？」

「學校は有りませんが…、」と東吾は厭な顏色をしたが、「彼の談なら、此の間もお話したぢやありませんか。」

「けれども、夏本の奧樣はね…。」と母の皆まで云はぬに、

「困りますねえ、其樣な煩いことを云はれちや…。約束ぢやありませんか、過日も云ふ通りです、今年は何うしても可けません。」と短氣に云ひ斷つた。

母は呆れて東吾を視詰めたが、頓て嚴然とした語調で、

「何ですツて？何うしても出來ません…？」

「出來ません。此の間も彼程詳しく云つたぢや

ありませんか、僕にだッて都合が有りますよ、考へが有りまさ……。幾ら養子でも、何事でも唯々云ふ譯には可けません、これでも奴隷ぢやありませんからねえ、一個の男兒ですからねえ。人間で有る以上、僕にだッて意志と云ふものが有りまさ……。」

「何ですよ、お前は？」母が笑顔を作つて、「阿母樣と議論する處かい？」

「議論ぢや無いけれど、餘り分らないから。」

「何が……？　何方が分らないんだい？」と其の笑を鼻に出し、「私の云ふ事を熟くも聽か無い前から、藪から棒に、煩いの、何うしても出來ないのッて、何ですよ其れは？」

東吾は母に顏を背向けて、默つて他方を向いて居る。母は煙管を把上げて、瞬きしながら眞を詰めて居たが、

「何故、今年は結婚が出來ないの？　都合が有るッて……、何樣都合が有るの？　ま、夫から聽かうぢや無いか、何う云ふ都合なの？　え、何う云ふ譯なの？」

「此の間も云つたぢやありませんか、」

「ぢや、兼ての約束が、芳江樣が卒業してからと云ふのだから、來年、芳江樣の卒業の上で無ければ出來ない……、此う云ふのですね？」

「まア爾うです。」と固く答へた。

「ぢや、お前の都合よりか、芳江樣の都合から云ふ事なんだね？　それぢや、芳江樣も承知だらうし、御兩親も其の思召なら、今年だッて何日だッて、お前には異存が無さ相なものぢや無いかね？　私なら爾う思ひますがね、爾うぢやないのかい？」

「爾うは可けません……、ぢや、養子と云ふものは、首を呉れろと云へば首を遣らなきや可けませんか？」

「え、首を……？　ほゝゝゝゝ、何だよお前、おほゝゝゝゝ。」

東吾は怒に顏を蒼くして、

「彼方の都合で決めた約束だから、彼方の都合で破約すると云ふ法が有りません、一旦契約が成立つた上は、其の權利は五分五分です、私だッて一個の男兒なら、希望もあります、計畫もあります、社會に出る準備として、調べる物もあります、實地の觀察をする必要もあります。」と噪氣いて自分の云ふ事ばかりを饒舌り出した。

「東吾、ま、お待ちなさい、」と母は其の言を遮つて、「何です、生意氣な　權利は五分五分ですと？　何の口で其樣な勝手な事が云へます？　今日、其樣な一人前の口の利ける樣になッたのは、それは誰のお蔭と思ひます？　お前は、夏本樣の御恩を何と心得て居るんです？」

「爾う何事にも、恩を振廻されては困りますねえ……、ぢやア、今年結婚しなきや、離縁するとでも云ふんですか？」

「離緣？　まア離緣とは何だよ？　誰が其樣な事を云ひました？」と母ははらはらと涙を溢して、「東吾、お前はまア、何うして其樣な薄情な氣に成ッてお呉れだらう……。」

東吾は流石に口を噤んだ。母は目を抑へながら、

「ぢやア、矢張し奧樣の云ふ通りなんだ……、お前は、その萩原とか云ふ、田舍から出た女學生に、必然約束か何かして居るに違ひ無いんだ……。」

「え……？」と愕然とした。

「他が知らないと思つて……、先刻からまア、種々な事を……。」と母は涙に妨げられて、言も繼ぎ得ぬのである。

（七）

東吾と芳江との結婚は、芳江が女子學院を卒業の後、卽ち來年その式を擧げる約束となッ

て居た‥‥約束と云ふ程でもないが、雙方の親達も、當人同士も其の心算で居たのだ。ところが、此の頃になッて、卒然に模樣が變り、東吾が卒業したなら早速に式を擧げて了はうと云ふ事に更ッた。言出した者は子爵夫人である。其處には何も理窟と云ふ程の理窟、事情と云ふ程の事情はない、孰れにしても夫婦にするのだから、東吾の卒業の出來た目出度い便次に、寧そ此の夏に濟まして了つた方が好い‥‥と云ふ位のことだ、附加へて云つたなら、女の學問なぞは出來ても出來なくとも何うでも可い、結局は芳江をば此のまゝ退學させても、東吾には一年でも若い妻を有たせ度いとか、親の身になれば一日も速く孫の顏が見度いとか云ふのであらうが、之とても左程の事情でも理窟でもないのだ。

また此の二人の結婚に、今更事情も理窟も要つたものでない、芳江と夫婦にして、夏本家を相續させよう爲に養子に貰つた者なら、呉れても遣つたものだ。幼少いから籍を正したのも、中學から高等學校、それから大學の今日まで十幾年の修業を爲せたのも、たゞ是が爲に外ならないのだ。養父母の都合次第で、來年の結婚が今年に成ッたところで、東吾には意外の事が降つて湧いたのでも無い、それを右や左と拒む可き理由もない。

、けれども、申さば人生の一大事であるから、と云ふので、養父母から一通り東吾へ談があッた。その時の東吾の答には、元より異存のある事では無いが、成る可く最う一年も勉强した後に、と云つた位のことである。けれども生家の父母に對つては、高等官の試驗を受けて置き度いから、結婚は是非とも來年に延して貰ひ度いとの賴であッた。

親の身になれば、東吾の願も道理に聞える。僅か一年位のことで、之を終生の遺憾に思はせ、大切の結婚を面白くない物にして了ふのも妙でない。夏本家へも其の事情を談し込んで見た。然るに先方では、來年は種々都合の惡い事がある、是非とも此の夏に式を擧げ度いと云ふ。今日、母の夏本家へ呼ばれたのも其の事であるが、併し此うまで云はるゝものを、何の義理が有つて、それでも何卒と願はれる關係ではない。その上、子爵夫人の話の中には、母の身として是非とも承知せねばならず、また、當人にも綺麗に承知させねば分疏の立たぬ事もあッたので、何事も我が身が引受けて、先方を安心させる樣な立派な挨拶をして來た處である。

「阿母樣、何の事です? 萩原と云ふ女學生に何うしたと云ふのです? え、阿母樣、何う云ふ話が有つたんです? 阿母樣、只だ獨りで承知して居ても詮方が無いぢやありませんか、その話を聽かして下さい、何う云ふ話です‥‥」

と東吾も、今は容易ならぬ顏色をして膝を進めた。

母は怨めし相に我が子を睨めて、

「十何年と云ふもの修業爲して戴いた上に、大切の娘に嫁せて、何萬と云ふ財產まで讓つて下さるのに、ま、何て云ふお前は義理知らずなんだらう?」

「其樣な事は、今更聞く必要は有りません、僕だッて義理も知つてます、恩も知つてます、一々口に出さないでも、十分に承知して居ます、‥‥刻だッてそれを忘れはしません。」

「それ位承知して居るなら、何故其樣な、間違つた事を爲てお呉れだい!」

「だから、それは何の事です? 何を間違へて云ふのです? 他の事と違ふ、誰の口から出たか知らんが、何處までも私は訊正さなきや可けない、何處までも自分の潔白を示せなきや可けない、何樣な話です、阿母樣。聽いた通り話して下さい。」

そこで、母は子爵夫人から聴いた、東吾と初野との間に置かれた疑ひを話し出した。聴いて見ればたわいいも無いことで、母子が此様なに泣いて騒ぐ程の事では無い。萩原初野と云ふは芳江の仲善で、此方からも其の下宿に遊びに行く、彼方からも時々遊びに來る、其の遊びに來た時に東吾が來合はせると、二人が睦まし氣に一緒になッて居る事がある。それは昨日今日のことではない、二三年以來始終見受けることなのだ　若い同士と云つても、互に教育の有る身で、無論間違つた事の有らう筈も無く、子爵夫人とて更に其様な疑ひを起すのではないが、他を善く云ひたがらぬは婢共の例で、誰が云ひ出したのか、初野と東吾とは互に慕ひ合つて居る、其と知らずに居る芳江許りが可哀想だ、など云ふ噂があッて、何時か夫人の耳に入つたのである、幾ら其様な噂の有つた處で、不斷から東吾の人物を信じて居る夫人は、其の噂などに動かされも何うもせぬのだが、之が芳江に聞えては可哀想である、世間に擴まりでもしては、我が家の瑕ともなる譯だ、夫人は之が爲に一方ならず心を惱まして居る、で、此樣な惡い噂を絶やす爲から見ても、二人をば遠く夫婦にして了はねばならぬ、と云ふのである。

「何だ、それだけの事ですか？」と東吾は、聴き終るや否や嘲る樣に云つた。

「それだけ？　それだけッてお前、其樣な噂を立てられると云ふのも、皆な、お前の心得違ひから起ることぢや無いかね？」

「心得違ひッて、何樣な事をしました？　何も、僕は其樣な事を云はれる覺えはありません‥‥、阿母樣の方にだッて、何も、私を責める證據は無いぢやありませんか、それとも、何か證據が有りますか？」

「何ですと‥‥、證據ですと‥‥？　これ、東吾、」と母は泣聲を揚げて、「お前はまア‥‥。」

「まア、靜に云つても分りますよ‥‥。」と東吾は母の險相に辟易した。

此の倉岡と云ふ家は、養父が昔し官途に在る時から配下にした男で、其の縁故で自分も下宿したものであるが、此樣な母子が泣聲を立てて言爭ふ處を聞かれては、恥かしくもあり、また自然養家にも知れる虞れがあるのだ。

母は中々黙らない。

「‥‥證據か無ければ夫で可いと云ふのかい？　何樣な噂を立てられようと、それが爲に養家の名を瀆さうと、お前は夫で構はないと云ふのかい？　それでお前は義理が立ちますか‥‥？　恩を忘れないと云へますか‥‥？」

「もう解りました、」と東吾は母の聲を止めた、「結婚をしませう、云はれる通りになりませう、今爲ろと云へば今でも爲ます、可いでせう、それで可いでせう、何でも云ふ儘に成ッたらそれで可いでせう、他に苦情は無いでせう？」

「確と爾うだね？」と母は嚴然と東吾を視詰めた。

「學問するのも他の爲にするんだ、結婚も他の爲なんだ、僕は他の爲に生きて居るんだ、他の犠牲なんだ、糞ッ、意氣地無し奴！」と熱病患者の囈言の樣な事を云つて、むッくと起上るや否や、荒々敷く室の中を歩き出した。

母は老眼を瞬つてそれを眺めて居たが、別に何とも云はなかッた。

（八）

叱られたり、泣かれたりして、結婚は養家の望み通り、此の夏に式を擧ぐる事に承諾をして母を歸した。

歸した後で、あゝ惡い事を云つた、彼樣なに云はずともの事を、と後悔した。如何なる理窟があッて、此の養家の申出でを拒まんとしたのであらう？　如何なる事情有ッて、其事

を厭に思つたのであらう？　心に問うて見て、其様な物は一つも無い。然らば、芳江は我が妻として不足の有る女か、と云ふに、爾らでも無い、從順くて、親切で、是まで唯の一回も、自分に對つて厭に感はせる仕向をした事も無い、長い月日であるから、其様な事の一二回は有つたかも知れぬが、今に記憶に殘つてる様な事は一つもないのだ。而て見れば、無論不滿足に思ふ筈は無い、未來の我が妻として、心の中で愛して居るんだ、いや、愛して居たに違ひ無いのだ！

「己は、此の頃何うかして居るか知ら？」と口に出して訝つたが、二つ三つ頭を振つて見た。

頭腦には仔細も無さ相だが、併し何うも不快でならない。愈よ承諾した。愈よ結婚するのだと思ふと、その不快の感が段々增して來る。

「此様な時には、盛に飲むと可いんだが、」と思付いた様に獨語したが、また考へると、「試驗を目の前に控へて、其様な無鐵砲な事も出來まい……。矢張り東京を去るのが一番に好い。なアに、何處か海濱に行つて、波の音でも聞けば直ぐ忘れて了ふ事た、必然勉強も出來る、爾うだ、愈よ其事だ……。」

試驗前の勉强を房州で爲ようと云ふのは、豫て養父母にも談して許容を得た事である。明日の午前に一度講義を聽けば、最早學校へ出る必要もない。

「寧そ、明日の中に立つて了はうか知ら？」と此う考へて、心が次第に其の方に傾き掛つたが、旅行の準備、借りて行く書籍など、種々と大切な用事の雜然と思浮んだ中に、萩原初野の事が一番強く頭を擡げた。

それは、今朝手に入つた書狀に返書を出さねばならぬ事である。學校から歸る時は、午後から初野の下宿を訪ねる心算だツたが、今は其様な事をするのは、何だか恐しい様な、濟まない様な氣がするのだ。さて東吾は机に對つて書狀を認めた。書いては破り、また書いては破り、二三回同じ事を繰返したが、到頭四五尺許りの長い物を書終つた。封筒へ卷込まうとして、初めから讀返したが、中程へ來て首を捻つた。二三行讀むと又考へた。

「いや、不可ん、此様な事を書いちや不可ん？」と獨語して、突然それを引裂いて終つた。

而して、また書直すのかと思へば、今回は葉書を取出して、すら／＼と此様なものを書いた。

拜復御退院之段奉　慶　賀候御下問の件は小生の與り知らぬ處に候間右御承知被下度候不一

これに表書をして、散歩ながら自分でポストに投れる心で宿を出た。

街路は大分乾いて、最う低い下駄でも歩ける。日沒には未だ間があるのに、其處にも此處にも檐洋燈が紅く點いて、緣日へ出る植木屋の荷車が續いて通る。東吾は、日沒に近き町の賑かさを眺めたが、格別に何と感じた樣子も無く、い、さツさと表通の方を指して步を運んだ。その間には、ポストが立つてあるのに、忘れたのか、別にその葉書を投げ込まうともせぬ。

何時の間にか足は林町に入つて、彼の初野が下宿する島井の前に來た。一寸露路を覗くと、入口に宿車が二輛待つて居る。東吾は停止りもせずに其處を通り過ぎたが、一町ばかりも來ると、其處の曲角に在るポストに葉書を投れて、また元の道を引返した。島井の入口には、未だ腕車が待つて居る。彼の下宿にしては鳥渡異數だ、初野への見舞人か、それとも初野が外へ出る處か、と思ふとも無く思ふと、偶と我が姓を呼ぶ聲がした。がら／＼と傍を通る二輛の腕車、其の後のには美しい初野が乘つて居るのだ。

「や！」東吾は意外なので顏を紅くした。
一車夫さん、一寸、何卒、」と初野は腕車を降りて傍へ寄つたが、「あの、昨日書狀を上げた筈ですが……。」
「は、拜見しました。」
一入院中は種々どうも……。」と體裁惡相に腰を屈めて、「些とも存じませんものですから。」
「いや、なに……。」と云つた許りである。
初野の美しさを珍らしいのか、忽ち道を行く人の二三が立止つて、而して後には、下宿の主婦が眼を圓くして、二人の樣子を車上に見下して居る。
「孰れ、お宿へ伺ふ心算ですから……。」と初野は羞かし相に云つて腕車に乘つた。
一併し、僕は旅行しますから……。」
一おや、何方へ……？」と云つたが、東吾の答無きに車夫は驅出した。
其の美しい顏は、街角を曲るまでに二回三回背後を振返つた。

第八　濫江の家

（一）

露路を入つて、再曲つて、古い黑板塀に冠木門、殿井と記した點燈の文字は、掠れたまゝ向う隣りの板壁に朦然映つて居る。塀の中には、屋の衣を黑くひよろ松が四五本、桃か櫻か紛糸かツた樣な枝風のが一本高く頭を突出して、池の端、切通坂の雜沓を吹送る夜風に、微な反響を立てゝ居る。
二輛の空腕車は、最う二時間も前に歸つて去つた。
一おや〳〵、此の皿も洗つたの？　何だねえ此の女は、これは魚勝の皿だツて云ふのにさ。」
「おや、爾うでしたか？」
一仕出し屋の物を洗つても、誰も有難いた云は無いよ。旦那の話が出ると、宛然夢中なんだもの、も些と確りお爲なね。」
一ほゝゝゝ、また婆や樣に一本遣られましたねえ、あはゝゝゝ。」
「それ〳〵、云つてる中から夫だもの、其のお椀は、それは仕出し屋のお椀だと云ふのにねえ。」
「おや、此れもですか？」
一此女は、今夜は餘程何うかして居るよ。」
「だツて、彼樣な別嬪樣を曳摺り込んで、此れから何樣な事に成るだらうと思へば、私だツて婆や樣、些たア氣にも懸りまさアね。はゝはゝゝ。」
「はゝゝゝゝ、妬けるんかい、はゝゝゝ、齡を勘定して御覽な、齡をさ。」
一幾歳ん成つたツて、此事許しは婆や樣、はゝはゝゝ。」
「敵はないねえ、親方の氣を揉むのも道理だ。」
「なアに彼樣な宿六なんざ……。」
「まア、可いかい、言告けてやるよ……。」
二人は顏を合はせて笑つた。丸心の釣洋燈の下、鏡の樣な臺所に突蹲をして、其處に洗上げた皿小鉢の數々を拭くのは、長いこと殿井に奉公して居る婆やで、流し元で水を使つて居るのは、急の客で洗ひ物に頼まれた車屋の主婦である。
「冗談は冗談だが、今夜はまア、何う仕ようてんでせう？」
「何うするものかね、旦那の事たもの、泊めて遣んなさるだらうよ。」
一まさか、彼樣な阿孃樣が……？」
一なアに、阿孃樣だらうが何だらうが、此の頃の女生徒なんざ。」
「爾うか知ら？　だツて、未だ漸と十七八でせう……、泊れと云へば、彼れで泊つて行く氣か知ら？」
一行くともさ、二つ返辭だアね。彼の主婦と同

伴だもの、其點は既う、悉皆と存込んで來て居らアね。」
「彼樣な可愛い顏をして？　へい！」
「存込んで居るともね、假や、否を云つた處が、何うして、家の旦那の事たもの……。」
「嘸、口說き樣が巧いんでせうねえ？」
「なアにさ、口說くんぢや無いんだよ……。」
と云ふ時、奥の方から跫音が近付いた。二人は驚いて其方を見遣ると、
「婆や樣、お手傳も爲ないで濟みませんねえ。」
と出て來たのは、彼の島井の主婦である。
「おや、御用でしたか、呼鈴を鳴らして下されば可いのに。」と婆やは熟々敷く笑ひながら云ふと、
「いゝえ、あの一寸ね、濟みませんけれど、何卒旦那を呼んで來て下さいな。何か、婆や樣が用の有る風をして……。而してね、彼の阿孃樣が、若し私の事をお聞きでしたら、何うしたか知らないツて、爾う云つて下さいな。」
婆やは主婦の顏を眺めて居たが、頓て點頭きながら奥へ入つて行つた。
すると、間も無く急しい跫音が威勢好く梯子を降りて、茶の間の障子をがらりと顏を出したのは、色白の顏にほいゝ醉の眼の緣、髮は油を塗つた樣に艶々としたるに、大島か何か知らず、細かい絣の着物に同じ羽織、但し此の羽織は、袖の邊繪具に汚れた上に、片方の紐も紐付も脫れたのであるが……それを被つた主人の殿井恭一である。
「何だい……、何うしたんだ？」と臺所を見廻すまでも無く、先づ主婦を笑ひながら睨めた。
「旦那、」と主婦は嘲る樣な目で、「今夜は何うなすツたんですよ。」
主婦は輕く恭一の肩を叩いた。此方は叩かれたまゝ笑つて、
「別に、何うも爲ないぢや無いか……。」
「何うも爲ないも無いぢやありませんか、最う少し、快速なさいましよ、」と笑ふ樣な叱る樣な語調で、「私は最う、これでお暇致します。」
「何故？　何故歸るんだ？」
「だツて、私の役目は最う濟んだんぢやありませんか。」
而ると、其處に起つてる婆やが、
「媒人は宵の中ツて、ねえお主婦。」突然に笑ふ。
「なんだ婆や、」恭一は短氣に叱つた、「婆やなぞ默つてお居でよ、何にも知らない癖に。」
婆やは主婦に笑顏を作つて見せたが、其の實大いに膨れて、澄まアした風をして流し下へ下りて行つた。
「何故歸るんだ？」と恭一は主婦許りを睨めて云つたが、「此處ぢや可けない、ま彼方へ來てお吳れ。」
下宿の主婦は、恭一の云ふまゝ茶の間の火鉢の前に坐つて、
「最う、私の居る用は無いぢやありませんか……。婆や樣ぢや無いけれど、それこそ宵の中でさアね。」
「いや、爾うぢや無い。今歸られちや跡が困るんだ、何卒もう少し居てお吳れな。」
「ほゝゝゝ、今夜は何う爲すツたんですよ……。」と笑へば、
「ま、靜に、」と恭一は手で抑へて、二階に耳を澄ました。
主婦も吃驚口に手を蓋したが、同じく天井を見上げて、
「大丈夫ですよ、」と低聲になツて、「未だ何か、私の御用があるんですか？」
「用と云ふ事も無いけれど、お主婦が居ないと、談話をするのも妙で無いからね。」
「何ですよ貴方、貴方の樣でもない。私の前のお話と、お二人對向ひの時たア、お話が違

ふぢやありませんかね……。」

「いや、爾うぢや無い、」恭一は固く頭を掉つて、「彼女は堅固い、中々何うして……。迂濶した事を云はうもんなら、何樣なに怒られるか知れアしない。」

「ほゝゝ、弱い事を仰有るぢやありませんか、彼れは、貴方が彼樣な、美術だとか……何とか彼樣な難かしい事ばかし仰有るからですよ。」

「爾うか知ら？」

「爾うですとも、彼のお金の事だッて、蔭では何うあッても、返濟しなきや濟まないッて云つたものが、貴方の一言で、出した物をまた引込まして、證書も要らないと云へば、それも其の通りになッて……、その上、御飯の御馳走になッてさ、引留められるまゝ彼樣な種々なお話をなすッてさ……。」と變に笑つて、「大概、萩原樣の意中だッて解つてるぢやありませんかね。」

「爾うか知ら？」

「ですから、私なんざ、反つて居ない方が宜いんですよ……、若し、歸るて云ふ樣だッたら、「ナニ私が出たから、私が歸つてから同伴にお歸りなさいッて、何時迄も留めて置けば可いぢやありませんかね、その中には、夜も更けるだらうし、眠くもなるだらうし……、ほゝゝゝ、後は、貴方の腕次第ぢやありませんかね、ほゝほゝゝ。」

（二）

二階には初野が一人遺されて居る。八疊の室で、床も違棚もそれ〴〵手を掛けた普請であるが、それに釣合ふ樣な道具一品飾られて無い。たゞ四五枚の油繪、孰も目星い程燦爛する額縁に塡められてあるが、座敷と調和は取れぬながら、如何にも立派に、如何にも美しく見えるのである。

眞中には藍模樣の見事な段通を敷き、桐の小火鉢が二つ、それを取卷いて絹緞の座蒲團、空氣洋燈は花櫚の臺に高く滿月の光を放ち、燈火の下には菓子皿、茶道具の種々、就中て目に付くは和洋數十種の繪畫雜誌、春の花秋の紅葉を扱き雜ぜて、室も香ふばかりに美しく取散らされてある。

「おや、お主婦は何處へ行つたらう？」と初野は雜誌から眼を離して、初めて四邊を見廻した。

服裝は萌葱の勝つた亂だつの一樂の袷に同じ物の羽織、金絲の光る繻珍の帶、髮も、束髮では人目に付くとの主婦の助言を聽いて銀杏返、學校通ひの初野のみを見た目には、別人かと思はるゝ許りに艷なのである。

「最う何時頃だらう？」と又獨語をした。

初野は、贅澤を盡して居る殿井の前に恥かしく、是まで身を離した事の無き懷中時計を下宿に置いて來た。けれども、夕方に此處へ來てからの事を考へると、最う餘程の時間が經つて居る。深更くならぬ中に歸り度いものだ、主婦は何をして居るのだらう？　不斷は彼樣な性急の癖に、御馳走に成れば歸ることも忘れて了ふと見える、氣樂な人ぢや無いか。殿井樣は、外見に依らぬ確實な人だから宜い樣なものゝ、私を知らない家に伴れて來て、若し間違ひでも有つたら何う爲ようと云ふのだらう？　無責任な人ぢやないか……。

「全く、殿井樣が確實な人だから宜いけれど……。」と又も口に出して云つた。

今から思へば餘り目が無かッた、殿井樣は美術家だもの、此樣な優い技倆を有つた畫工だもの、出世間の藝術家だもの、不見不知の私に金を補助したとて、何の怪しい事が有らう？　それを、凡俗な自分の心に邪推して、何か可厭な下心でも有る如くに恐れて、利息を添へて無理にも返さうとして來たのは、反つて我が卑しい意を表した樣なものだ、思へば殿井樣に對して

恥かしい事ぢやないか！　初野は此う考へて獨りで赤面した。久くして又、

「だけれど、彼の入院料も殿井樣ぢや無からうか？　如彼いふ人だもの、矢張り祕して居るのぢや無からうか……？」

此く思ふと同時に、先刻此處へ來る途中で、東吾と逢つたことが胸に浮んだ。今日に初まツたのではないが、彼の怒つた樣な語調、彼の冷淡な顏色……、何で彼の人が入院料を拂つて與れる樣な事を爲よう？　養父から貰ふ學資の他には、何處から手配する當も無い人で、三十圓近くの金を何で私の爲に竊に出して下さる譯が有らう？　それを、私は彼の人の爲た事の樣に思つて、彼樣な書狀なぞ遣つて。

「あゝ、矢張り私の迷なんだわ……！」と初野は溜息を吐いたが、氣を紛らさうと思つて、障子を明けて椽側に出た。

春の夜は薄く霞みながら、空は晴れて、星も數まるゝ。見渡せば、縱横に波打つ街の屋根の間は、街燈の光に夜氣を暈し、人の聲車の音、雜然として一種の市街の響が漲る。

初野は身動きもせず此の夜景色を眺めて居たが、何故か其の眼は涙に霞んだ、而して思はずも深い溜息が吐かれた。

「如何なすツたんです？」

不意に背後から聲を掛けられた。驚いて振返れば、何時の間にか、其處に恭一が起つて居る。

「頭痛でもなさるんですか？」と恭一も欄干近く、初野と並んで起つた。

「いゝえ、」と初野は竊と眼を擦つて、「餘り彼方が賑かなもんですから。」

「風が出て來ましたね、貴女、寒かありませんか？」

「いゝえ。先刻葡萄酒を戴いた故か、何ですか溫かで。」

「爾うですか。併し、何の彼の云つて、最う花も咲きますねえ。」

「おや、最う……？」

「今日上野を通りましたが、大佛の前は餘程紅くなりました……。貴女は、花は好きですか……？」と云つて、ぷツ切つた樣に口を閉ぢた。下らない事を云つたものだ、と自分から思つたらしい。

「は、好きですけれど…。」と鳥渡躊躇つて、「群集へ出るのが嫌ひなもんですから。」

「如何です、それぢや、一度小金井へでも、御同伴に遠乘しませうか？　お出でになツた事がありますか？」

「小金井ですか、いゝえ、最う何處へも參つたことありませんの。」

「ぢや、是非お出でなさい、此樣な、東京の樣な俗地と違つて、十分行つて見る値はありますよ…。」と急に熱心に勸める。

「ですけれど、最う自轉車には懲々しまして…。」と微に笑ふ。

「大丈夫です、僕が附いて居りや、怪我なぞなさる事はありません。最う、手もお癒りでせう？」

「は、明日あたりは繃帶も去れますさうで。」

「此方でしたか、」と恭一は徐と初野の手を握つて、「痛いんですか？」

不意に手を握られたので、初野は呼吸の塞るまでに吃驚して、

「いゝえ。」と震へて、其の手を徐と脫したが、直ぐ座敷の内に入つた。

「小金井行は是非お約束したいですな、」と云ひながら、恭一も後から座敷に入つて、「自轉車が可けなきや、腕車も宜いぢやありませんか。」

その顏を見ると紅くなツて居るので、初野は俯向きに雜誌を開けて、

「爾うですねえ、孰れまた……、」と曖昧の返辭

をして、「お主婦は何うしたんでせう？」
「階下で談話してるでせう。呼びませうか？」と恭一は直ぐに呼鈴を押した。
婆やが上つて來た。恭一が主婦の事を問くと、今鳥渡用が出來たと云つて出たが、直ぐ戻つて來るさうです、と云ふ。
「おや、何處へ行つたでせう？」と初野が當惑すると、
彼のお主婦のことだから、何か買物でも思出したんでせう。」と笑つて、梯子を降りる婆やに、「歸つたら直ぐ此方へ來るやうにな‥‥。」
「如何したんでせう？」
「まア、其樣なに氣を揉む事も無いぢやありませんか。」
「でも、最う餘程遲くなりましたから。」
「まだ貴女、今日が沒れた許しぢやありませんか。あ、去年小金井で描いたのが一枚ありましたッけ。お目に掛けませう、此方へ來らッしやいませんか。」と恭一は急に洋燈を持つて起つた。
初野は、氣は進まぬながらも男の後に附いて行くと、間際の襖を明ければ鼻を衝く繪具の臭ひが籠つて、卽ち恭一のアトリエなのである。

前に立つた恭一は、洋燈を高く壁際に寄つて、
「此繪ですが、」と初野を振返り、「見えますかね？」と洋燈を下げる。
「え、」と男の傍に進んで、其處に懸けられた細長い寫生畫に目を留めた。
恭一は、去年の春、此の繪を描く爲に一週間許り小金井に行つて居た事から、繪に出てある家や、木立や、田舍道などの說明をして聽かしたが、突然思出した樣に笑顏を作り、
「貴女も御存じでせう、去年まで貴女の學校に居つた女ですが‥‥。」
と同じく女子學院の生徒で某と云ふ女が、親達に伴はれて小金井へ花見に來て居つた。然るに恭一と共に寫生に行つた友人は、偶としたことから此の女と親しくなツて、それが緣の絡まる始めで、二人は到頭結婚をしたと云ふのである。
「御存じでせう？」と恭一は再聞いた。「餘り美い顏ぢやありませんが、色の白い、一寸目に付く顏でしたよ。」
「いゝえ、存じません。」
「爾うでせうな、數ある女の事だから‥‥、」と云つて洋燈を卓子の上に載せて、「お掛けになりませんか。」と其處にある籐の臥椅子を勸め、「併し、貴女の學校ぢや、彼樣な女が隨分多いでせうねえ‥‥卒業前に結婚するツて云ふやうな女が。」
「は、隨分‥‥。此の頃は餘程減じましたが、それでも。」
「爾うでせう。僕等の學校でも爾う云ふのが有るくらゐですからな‥‥。」と云つて言を切つて、「併し、貴女は最う卒業ですなア‥‥。如何なさるんです、御卒業後は？」
「如何ツて？」
「いや、故鄕へお歸りですか、それとも東京に居らッしやる心算ですか？」と何故か狼狽へた樣に云つて、また椅子を指さし、「まア、お掛けになりませんか。」
初野は輕く點頭いたのみで、
「如何なるんで御座いませう？出來るならば、東京に居り度いと思ひますけれど、」と笑つて、「まだ分りませんわ。」
「併し、お故鄕には何でせう‥‥貴女の‥‥、」と呼吸を彈ませて、「待つて居る人が在るでせう？」
初野ははツと思つた。見ると、恭一も顏は紅くなツて居る。

「ほゝゝゝ。」と無理に笑つて、「御冗談を仰有つて。」

「必然在るでせう‥‥、許嫁の男とか、でなければ、お互に黙約をしたとか‥‥。」と恭一も無理に莞爾して、「必然在りますよ、在るに違ひありませんよ。」

「其様な者なんぞ‥‥、」と初野は漸と答へたが、「お主婦は未だ歸らないんでせうか？」

「では貴女は獨身主義ですか？　一生獨身で居らツしやるのですか？」と少し前に進んで、「え、爾うですか？」

「如何なるんですか‥‥、」男が餘り熱心に問き出したので思はずも後退りした。

「けれども、貴女の意は何うです‥‥？　貴女の意は決まツてるでせう？」

「だツて、其様な事未だ考へた事も無いんですもの‥‥。お主婦は何うしたか知ら？　階下へ行つて聞いて見ませう。」と行かうとすると、

「萩原様、」と恭一は其の袂を捉へて、「ま、一寸待つて下さい」

「御冗談なすツちや可けません。」初野はがたがたと顫へながら云つた。

「いえ、決して冗談ぢやありません。」

「ま、お離しなすツて‥‥。」と無理に袂を引離して、夢中に次の室へ逃込んだ。

「萩原様、ま、何卒‥‥。」と續いて恭一も、其の暗い次の室へと追蒐ける。

第九　同胞

（一）

下宿の主婦が家へ歸ると、下婢は常に無く駈けて來て、

「お主婦、萩原様は何うなすツたんです？」

主婦は愕然として、

「何故‥‥？　何うなすツたツて可いぢや無いかね。」と怖い目をして、「後からお歸んなさるんだよ。」

「あの、日外も參りました、あの萩原様の妹さんの方、また參りましたよ。」

「おや、何うして？」

「何でも、逃げて來らしツたやうな御様子ですよ。」

「一人でかい？」

「はア。姉様が叱りや爲ないかツて、可哀想に泣いて居らツしやるんですの‥‥。」と下婢は、それで今迄慰めて居た由を語る。

主婦は、それは困つたもんだと許りで、直ぐ茶の間に入つて今日の帳合に掛つたが、それが済むと何か考へて、軈て初野の室に行つて見た。

洋燈の前に、いゝいゝしよんぼり俯向きに坐つて居た小娘は、夢から覺めた様に顔を上げたが、主婦を見ると淋しく笑つてお叩頭した。

「お出でなさい。何うなすツたんです？」と主婦は有情く云つて其處に坐つた。

「あの、私、また逃げて來ましたの‥‥。」と紅くなツて云ふ。

「おや、何うしてです？　お家では、何様にか探して居らツしやるでせう？」

「だツて、家に居ると辛い事許しなんですもの‥‥、」と云ふや否や、何を思出してか急に泣出した。

其の姿を見た許りでも、成程辛い日に遇つて居るのが分る。初野の妹だけあツて、顔貌は惡い方でなければど、痩せて、骨張つて、艶と云ふものは探しても無い。衣服と云へば縞の模様も消える迄洗晒の木綿物、それも垢に汚れて、皺くちやに成ツて、東京ならば下婢風情にも恥かしい服装である。

「姉様は如何して？　お主婦と一緒ぢや無くツて？」漸と涙を拭いて云ふ。

「え、最うお歸りでせうがね……。」と主婦は曖昧に答へて、「だけれど、能くまア一人で來らしッたことねえ。怖くはありませんの？」

「いゝえ、怖くなんぞ……。姉さんに會へると思ふから、私嬉しくッてよ……。あゝ、速く歸つて呉れれば可いのにねえ。」と悦ぶかと思へば、忽ちまた困つた顔をして、「だけれど、歸つたら何樣なに叱られるかと思つて……。」

「なに、叱るもんですか、彼樣なに可愛がつて居らッしやるんですもの。」

「だッて、日外逃げて來た時も、此の夏までは郷里で辛抱しろッて、彼樣なに熟く教はッたんですもの……若し、姉樣に關はないッて云はれたら、私、何う爲よう！」とまた泣出した。

「其樣な事はございませんよ。若しか、お姉樣がお叱りなさる樣だッたら、其時は、私がお詫をして上げますよ。ね、ですから、其樣なにお氣に掛けないで、ま、お寢みなさいまし、其の中には、最うお姉樣も歸つて來らッしやいませうから……」と慰めて、主婦は押入から夜具を引出すと、

「いゝえ、私寢ないの、起きて待つてますの。」

「それでもお睡いでせう、最う十一時ですもの。」

「でも、起きてますの。」と頭を掉ッたが、「おねえさん、本當のこと、叱られたらお詫して頂戴ね。」

主婦は下婢に命じて蒲團など運ばせ、初野と妹の床を設けて、再臥る事を勸めると、

「いゝえ、起きてますの。だッて、睡て了へば、明日まで姉樣に會へないんですもの。」

「貴女は、其樣なにもお姉樣がお懷かしいんですか？」

「え、」と莞爾首肯いて、「郷里に居ても、私、姉樣の事ばッかし思つてますの。」

「それぢや、速くお迎に行つてまゐりませうね……。」

主婦は斯う云つて茶の間に歸つたが、元より迎に行くのではない。殿井の家に殘して來た初野の事を想ひながら、最う夜も深けたので、其のまゝ床の中に入つた。

久く經つて、主婦も快い心地になつて、半ば夢の世界に入り掛けた處を、突然戸を叩く音に眼を覺ました。

「明けて下さい、明けて下さいな。」と云ふ聲は、正しく初野の聲である。

「おや、歸つて來らしッたよ。」と主婦は思はず床に起きて、「如何したんだらう？」

今出て行つては妙でないので、主婦は只だ耳を澄まして居た。寢靜まつた深更を、戸を叩く音が家中に響渡つた。

「はい、はい〳〵。」と下婢の寢惚聲がした。漸と目を覺ましたものと見える。

「爺、鳥渡、」と主婦は起きて行つて障子から竊と覗いた。

戸を明けに出ようとした下婢は、眠い目を擦りながら、

「え、何です？」と大きな聲で云つて、鼻頭で臭い欠伸をする。

「何だよ、」と手で押へて、耳に口を寄せ、「私の事をお問きだッたらね、後でまた出て、未だ歸らないと云ふんだよ。いゝかい。私は居ない心算なんだよ。」

下婢は點頭いて、さて小洋燈を片手に戸を明けに出た。入つて來たのは初野である。

「お歸んなさい、お一人でございますか？」

初野は答もなく上つたが、

「遲くなッてお氣の毒……。」と只だ一言、いゝさと我が室の方に行つたが、障子を明けると吃驚して起止つた。

慌てて他の室に入つたかと思つた。床が二つ並んで、机の側には小娘がハッハッ伏して轉寢を

して居る。

「おや、お睡つてらツしやいますね、」と跡から來た下婢は室を覗いたが、日沒れて間もなく、只だ一人で、姉を尋ねて逃げて來た妹の事を簡短に話した。

下婢から聞くまでも無く、初野は直ぐ妹である事も知つたし、また逃げて來たことも解つたが、久くして、

「まア、何と云ふ大膽な娘だらう！」と傍へ寄つて凝然と寢顏を見下した。

「でも、お疲れなすツたんでせう、此樣なに熟くお睡つて……。」と下婢は、消え掛つた火鉢の火を熾さうとする。

「いゝえ、最う火なんざ要らないの。此處は可いから、お前樣は寢んで下さい。」

その語調は慣ってでも居る樣に聞えるので、下婢は訝しさに初野の顏を視た。色は蒼く、眼は常になき光を放つて、固く結んだ口は、強く切齒でもして居る如くである。意ひ掛けぬ妹に遇つた爲か、それとも他に仔細の有る事か、元よりそれを質す可き間ではないので、云はるるまゝ、「お寢みなさい」と挨拶をして出て去つた。

初野は、洋燈を近く寄せて、

「此樣な汚い服裝をして……、まア可哀想に、また痩せたよ。」と獨語したが、耐へ難ねた淚はいはらはらと妹の顏に落ちた。

「あら、」と妹は可愛い目をぱツちり開いて、「姉さん……」

「波ちやん！」と抱き寄せた。

妹は固く抱付いて、

「會ひ度かツたわ！」と之も泣出す。

(二)

火の消えた火鉢の傍に、姉は當惑の頭を垂れ、妹は濡れた目に姉の顏を覗込んで、此の度逃げて來た宥を願つて居る。

「今に成ツて、最う何を云つても詮方が無いけれど……。」と姉はほツと肩で息をした。

「ぢや、堪忍して吳れるの？ え、姉さん、堪忍して吳れて？」

「堪忍するの爲ないのツて、其樣な事ぢや無いのよ、」姉は首を掉つたが、又溜息を吐いて、「波ちやんには解るまいけれどね、私だツて波ちやん……。あゝ、困つたわねえ！」

「困るツて何？ お金の事？ お金の事なら姉さん、其樣な心配すること無いよ。」

「如何して？」姉は眼を睜つて、「金を如何かしたの？ 誰か、波ちやんに學資を送るとでも云ふ人在るの？」

「うゝん、爾うぢや無いけれど、」と頭を掉つたが、久く姉を見て、「只だ。」

「ぢや、何故其樣な事を云ふの…？ 可笑な娘だよ。」と淋しく笑つたが、「其樣な事は何うでも…、種々な酷い目に遇はされるツて、何樣な事を爲れたの？ 幾ら兄樣でも、豈夫、打つたり蹴たりは爲やしないだらう。」

「うゝん、打つよ、此の間もね…」とお波は、兄の兒を守りして居て、轉んだのを知らずに居た爲に、頭に瘤の出來るまで打擲された事を告げた。

「まア、其樣な事を…？」と初野は顏色を變へて、「可哀想に…、兄樣も餘りぢや無いか、自分の兒許し兒で、妹の事は何う思ふんだらう…？ 孰せ厄介者だから、何樣な事しても宜いと思つてるのか知ら？ 慘酷な人ねえ！」

「私許しぢや無いよ、姉樣の事も始終惡く云つてるよ。」

「孰せ爾うだらうよ…。」と初野は顏を顰めて、「私、最う其樣な事は聞き度か無い。」

「だツてね、家へ來る人達がね、姉樣の事が新聞に出たツて云ふとね、なアに、女の學問なぞ

知れたもんだ、今に男でも拵へて、私生兒でも產む位のものさ、なんてね……。」
「えッ、何だッて、私生兒だッて？」と初野はぶるぶる身體を顫はしたが、疊に泣伏して、「ああ、私口惜い！」
「私も口惜くッてね、阿母樣と二人でね、一夜隱居所で泣いたの。」とお波は夫を想出してか、同じく泣出した。
　初野は久く顏も擧げ得ぬ。お波は、口惜い事は夫に止まらず、兄や嫂の對遇を見て居る雇人共までが、母を粗略にして、用を命令けても誰一人肯く者さへ無くなツた事など、夫から夫と語出した。
「波ちやん、何卒最う止してお吳れ、」と淚を拭きながら面を擧げて、「最うね、泣く事も、口惜い事もないからね、何卒、お前も勉强してね、優い人に成ツてお吳れ……、立派な學者に成ると思つて、必死に勉强してお吳れ、ね……。」
「え？　ぢや堪忍して？　ぢや姉樣の傍に置いて吳れて？」
「あゝ、置く處ぢやないよ、最う歸るたッて歸しアしないよ。」
「本當？　嬉しいねえ？　姉樣、私何樣な事でも爲るよ、奉公に出てもね、姉樣には心配を掛けない樣にするよ。」
「なに、奉公なぞ爲る事が有るものかね……。まア宜いのよ、姉樣にも考案が有るからね、後で熟く、明日でも、熟く相談する事に爲ようよ、ね、」と初野は決然した語調で、「さ、最う心配する事は無いから、今夜は睡よう……。もう餘程遲いんだよ。」
　姉妹は臥る支度をしたが、頓て、お波は何か考へる顏をして、
「姉樣、だけどね、必然……兄樣が追蒐けて來るよ。」
「何故？」と初野は我が床に入らうとして、「其樣な事が有るもんか、兄樣の事だもの、厄介拂したと思つて、反つて悅んでらアね……。」
　初野は嘲笑つて、さて机の上なる洋燈を枕頭に下さうとしたが、初めて其處に在る東吾の葉書が目に着いて、
「おや……。」と慌てて手に把上げた。
「姉樣、如何したの？」常事ならぬ姉の目色顏色を氣遣はしく、お波も其の葉書を覗いて、「え、姉樣、何か心配な事でも出來て？」
　姉は只だ頭を掉つたが、幾度か讀返しては又讀返すのである。
「だッて、何だか……。」と妹が心配の顏をすると、
「なアに、可いのよ、何でも無いのよ。」と其の葉書を抽匣に納つて、思はずも溜息を吐いたが、「さ、波ちやん、臥よう……。一緒に臥ようか？」
「え、」と妹は勇む。
「枕を持つてお出でな。」
「姉樣、久し振だわねえ。」
「もッと此方へお來でな。まア此樣なに、お前は本當に瘦せたよ。」
　花と花、美しく腕をからみ合つて、風溫き春の夜を、何處に夢の飛ぶことやら。

（三）

　明る朝は、姉妹睦じく目を覺まして、床の中から笑つて起きたのである。
　昨夜の、我が歸つた後の殿井の首尾を氣遣つて居た主婦は、其の笑ふ聲、話す聲の聞える度に耳を澄まして、不思議さうに眉を顰めたり、小首を傾げたりして、切りに初野の意を測る事に掛つて居る。下婢から聞けば、昨夜歸つた時の樣子は、顏色も惡く、言葉付も怒つてる樣だツたと云ふのに、今朝の彼の機嫌の好さは何うしたのだらう？

思合つた妹と過つて、其の嬉しさに昨夜の事も忘れたのか、然て見れば、昨夜の怒つた事柄と云ふのは、左程の事柄で無かッたに違ひ無い。左程の事柄で無いとすれば、彼時から殿井は何樣な事を爲たのであらう？　初野は何樣な事を爲れたのであらう？

他からは、胸の中の知れぬ、甘味い酢では喰へぬ、一癖も二癖も有る者の如く噂され、自分の口でも、若いから散々苦勞をして來た、と云ふ主婦であるが、漸と十九に成つた許りの、世間見ずの、怜悧と云つた處が高が女學生たるに過ぎない初野に對しては、心底から憚つて居て、何らも萩原樣は窮窟な女だ、と思つて居る。それで、昨夜殿井の家に演ぜられた事柄……事柄と云ふ程の事柄が起らぬにしても、兎に角殿井の家に伴れ出し、雙方の間を執持つ樣な談話をして、初野一人を殘して歸つた許りでも、

「必然私の所爲を怒つて居るに違ひ無い……。殿井樣と共謀な事を覺つたに違ひ無い。」と初野の立腹を恐しく思つて、今に何樣な事を云はれるだらう、何樣な顏を見せられるだらう、とそれのみを氣に懸けて居た。

氣に懸けると云つて、恐しく思ふと云つて、高が他へ轉宿する位のこと、大した損の行く事でもない、從つて左程に困る事では無いのだ、それは無いのだが、初野から其樣な事を聽かさるゝのが辛い、其の分疏をするのが辛い、たゞ其の鳥渡の間が誠に辛いのだ。

それで、主婦は成るたけ初野に面を會はせる機會を避けて居たが、初野の方でも同じ思の有ることか、朝飯が濟むと直ぐ病院に行き、病院から歸つても室にのみ閉籠つて、妹や下婢への話聲はすれど、主婦の事は口にも出さぬのである。

「必然、昨夜の事が體裁惡いんだよ……、體裁が惡いとすれば、ぢや昨夜殿井樣に……。」と主婦は何事か想出して莞爾したが、また獨りで首を掉つて、「いや、其樣な事が……、だッて、彼樣なに早く歸る筈は無いもの……、必然何も無かッたに違ひない。」

主婦は獨語をした時、直ぐ其處の障子が開いて、

「お主婦、少し、お願ひが有るんですけれど……、お邪魔ぢや無いんでせうか？」と思ひ掛けぬ初野が入つて來た。

主婦は黃色い顏を少し赧くして、

「おや、萩原樣、御用がお有んなすッたら、呼んで下されば宜うござんしたに……。」と敷物を裏反したり、坐作を直したり。

「本當に、お邪魔ぢや無いんですか？」

「えゝ、さ何卒、」とお點頭して、「昨夜は飛んだ失禮致しました、鳥渡ね、退引ならない用が出來たもんですからね……。だけれど、何樣なに待つて居らッしやるかと思つて、大急ぎで戻つて參つたんですよ。すると只ッた一步のことで殘念でございましたよ、眞の一步のことでまア……。」

「爾うでしたか、」と初野は更に顏色も動かさず、「お主婦、甚だ失禮ですけれど、此を何卒、殿井樣にお返しなすッて下さいな……。」

「何でございます、おや、お金ですか、」と顏色を變へて、「だッて、此のお金の事は貴女、昨夜のお談で、もういゝちやんと極つてるぢやありませんか……？」

「え、昨夜は彼樣なに極めたんですけれど、後で考へますと、何うしてもお返ししなきや濟まない事情が有るもんですから……、それは、此の書狀にも書いてありますから、御手數でも、これ何卒、殿井さんに上げて下さいまし。」

「いゝえ、手數なんて、些とも其樣な事は少とも何でございますがね、」と主婦は、初野の顏を解む樣にじろ〳〵と眺めたが、「ぢや、殿井樣

は何と御有るか知りませんけれど、兎も角もまア、お預りして置きませうか。」

「では何卒。」と許りで、夫れ限り他の話もなく、初野は此の茶の間を出て去つた。

跡に主婦は、

「矢張り怒つて居らツしやるよ。」と獨語して、初野の置いて去つた紙幣と書狀と眺め、「之を開封すれば分るだらうか、如何したんだらう？　殿井様も器量の惡い話ぢや無いか！」

突然格子戸が強く明いて、高聲に脚夫が電報を投けて行つた。驅けて行つて見ると、それは初野へ來たのである。

「萩原樣、電報でございますよ。」と主婦は直ぐ初野の室へ持つて行つた。

初野は鉛筆を削つて居たツけが、其の電報を開封すると忽ち顔色が變つた。

「何方からでございます？」と主婦は、氣遣はしさうに尋いた、「若しや、何か變つた事件でも……？」

「は……、」と氣抜けのした様な風で、「本當か知ら……？」

これは郷里の兄から來たので、文字に正して見れば、

渡、金持ツテ逃ゲタ、押ヘテ置ケ。

と云ふ電報なのである。

第十　あらそひ

（一）

茶の間の出窓の障子を、外からこと〱と叩いて、

「おい〱、お主婦……。」と低聲に呼ぶ者がある。

火鉢の傍で算盤を彈いて居た主婦は、起上つて其の障子を明け、

「あら、殿井様、まア何うなすツたんですよ？」と笑つて、「其様な處に起つて無いで、此方へお入んなさいましなね。」

殿井は體裁惡氣に莞爾として、

「併し……何は居るだらう？」

「誰？　萩原様ですか？　え、居らツしやいますよ。」

「何樣な様子だね？　怒つて居やしない？」

「いゝえ、其樣な御様子も有りませんよ。」と主婦も莞爾して、「彼樣から何樣なでございました？」

殿井はそれには答へず、只た笑に笑つたが、

「何か、昨夜の話が出たかい？」

「いゝえ、別に……。」

「無かツた？」殿井は目を圓くした。

「ございませんよ、」と主婦は點頭いて、また、「彼樣から何樣なでした？」

殿井は同じく夫には答へず、首を捻つて切りと考へて居る。

「ま、爾うして無いでお上んなさいましよ。昨夜のお話には有りませんけれど、先刻ね……。」と主婦は、先刻紙幣と書簡とを初野から託された次第を簡短に告げた。

「え、手紙？　ど、どれ。」

「ですから、まお上んなさいましツたら。」

「上るは可いけれど……。」と四邊を見廻して、「竊と、知れ無い樣に入る譯に可かんかねッ？」

「誰に？　萩原様にですか？　ほゝゝ、何で貴方、知れるもんですかね。」

「だけれど、出逢しちや妙で無いからね。」

「何ですよ貴方、ほゝゝゝゝ。」

「いや、冗談ぢや無いよ。」と紅くなツた。

「大丈夫ですよ、出て來らツしやる氣遣ひなんかございませんよ。先刻ね、お郷里から兄様が來らツしやいましてね、御妹子の事で、今談判最中なんですよ……。」

「兄様が？　萩原の兄様かい？　如何して？」

主婦は、昨日夕方に妹の逃げて來た事から、電報の事、兄の上京したのは妹に持逃げされた金を取返す爲である事などを話して、それであるから早く家へ入れよと言葉を添へた。

殿井も初めて主婦の言を信じた樣に、直ぐ表へ廻つて格子戶から入つて來た。

「何だか、此室は不用心だねえ。彼方の室に行からぢや無いか。―

―大丈夫ですよ。―

―可いのか。―と云ひながら、火鉢から離れて簞笥の蔭に、其の春着の背廣服に、壁土の附くのも構はず坐つた。

主婦は笑ひながら、

―如何でした、昨夜は？―

―いや、大失敗！―と殿井は又も紅くなツて「彼樣なことを云ふんぢやなかツた。お主婦が惡いよ。」

―何故でございます？ ぢや、貴方の腕でも矢張し……？―

「實に弱ツ了つた……。ま、其の手紙を見せてお呉れ。」

「へえ、爾うでしたか？ へえ！」と主婦は感心した樣に首を捻りながら、初野に託された書簡を出した。

殿井は直ぐ樣それを開封した。

（二）

―何、波は其樣な大膽な事を爲る者で無い！ ぢや何か、私は、失くならない物を失くなツたと云つて、お前達に言掛を爲ると云ふのか？―

―あら、兄樣爾うぢや無いんですよ……。只だ、彼樣な頑是の無い者ですから、金を盜むなんて、其樣な大膽な事を爲る筈は無いと云つた許りで……。」

―ぢや、お前は何だらう、波は信用するが、此の兄の云ふ事は信ずるに足らん、と此う云ふのだらう？ いや、まア聽け、私の口位で、波に對する信用は動かん、此う云ふんだらう。だツて、誰に聽かしたツて、爾うとしか解れんぢやないか……。」

―爾う理窟詰に爲れては、私は最う、何にも云ふ事は出來ないけれど……。―

―理窟詰ぢや無いが、道理は然うだらう？ 此うして態々出て來るからには、彼女が盜んだと云ふ的が有るから出て來たんだ。それを、何かの間違ひだらうの、其樣な大膽な事を爲る筈は無いのと、何でも、私許りが無理な者の樣に……、ま考へて見るが可い、お前達の贔屓目には、頑是無い者としか見えんだらうが、十二や十三で、最う二回も東京へ逃げた少女だ……。」

「然う仰有るけれど、此樣な事を爲ると云ふのは、詰り……、私は……、ですから、彼女が可哀想でなりません。」

「なに、可哀想だ？」

―え、兄樣は、可哀想たア思はないんですか？」

―お初、ぢやお前は何か、波の此樣な事を爲るのが、波が惡いのぢや無い、私が惡いからと云ふのか、私の待遇が惡い、殘酷に取扱ふから、それで逃走つて步く、此う云ふのだな？―

「爾う云ふ譯ぢや無いんですけれど……、誰が惡いたツて、一族の恥辱ぢやありませんか。―

―一族の恥辱だから何うしたんだ……、おい、一族の恥辱だから何うしたと云ふんだ？ 一族の恥辱なら、恥辱になる樣な事を爲せなきや可いぢや無いか……、出奔したり、竊盜をしたり……、今から是ぢや、將來何樣な惡婆に成るか知れたもんぢや無い、私の一族には……萩原家も之で十一代續いた舊家だが、波の樣な者は一人も出た事は無い、私の血統には一人も無いのだ……。―

―それでは、波は萩原家の血統ぢや無いんですか？―

「如何云ふもんだか、其點は、亡くなッた阿父様とお前の阿母様が知つてるだらうよ、阿父様は何うでも、お前の阿母様だけは承知してる筈だ、熟く承知して居る筈だ、はゝゝゝ。」

初野は脣を咬んで、涙一杯の目に屹と兄を覗詰めたが、何か云はうにも口が動かぬので、つい其處に泣伏して了つた。兄の吉兵衞は、鋭い目にそれを見下して、無言で紙卷莨を喫んで居る。

兄妹と聞けば、目鼻形の何處かに似た處も有るが、骨張つた角面で、脊も低く、色も黒く、何うしても之が美人初野の兄とは思はれぬ程である。齡は四十を越したらしい、八字髭を濃く生やし、服裝は絹物の絣に黒斜子の羽織、兵兒帯、金時計、黒革の折鞄、地方では立派な紳士で賣つて居るらしい服裝はして居る。

さて、兄妹は互に言葉も無かッたが、偶と縁側を此方に近付くお波の聲がすると、

「うん、小阿魔ッちよ、歸つて來やがッた……。」

吉兵衞は屹と其方を振向いた。

「兄様、何卒まア、其の詮議は私に爲して下さいな、何卒、手荒い事なぞなさらないで……、外聞が悪いんですから、ね兄様、お願ひですから。」と涙を拭きながら云つて、内から縁側の障子を明けた。

（三）

「何故逃げるの？　何が怖いの？　まアお坐りよ、姉様が附いてるから……、可いから、まお坐りッてば……、」と初野は、下婢に伴はれて買物から歸つた妹を無理に坐らせ、「其様なに逃げたり何かするから、疑はれ無いでも可い事を疑はれるぢや無いかね、まア落着いてお居でよ……。然して、まア兄様にお謝罪なさい、兄様の許容を得ないで、東京へ來たのは悪うございました、何卒堪忍なすッて下さいッて、謝罪なさい。」

「……何卒、堪忍なすッて……。」

「整然と手を支いて……。濟みませんでした……。」

「濟みません……。」

兄は怖い目を光らして居たが、忌々敷相に、

「濟むも濟まねえも、此の泥棒阿魔ッちよ……。」

と怒鳴り出すと、

「兄様、まア何卒叱らないで下さいよ、」と初野は兄の聲を止めて、「今、兄様の目の前で詮議してお目に掛けますから、盗つた物ならば、私出させますから。」

「ちや、疾く出さして見ろ、何處までも強情を張つたら、警察へ引渡すから衛う思ふが可い。」

「え、警察へ出すんですッて？」

「當然よ、懲めの爲だ、警察にも出すし、監獄にも入れて遣る、衛う心得て居るが可い。」

「衛うですか……？」と初野は目を押へたが、また妹を顧みて、「可いのよ、何も怖いこと無いのよ、悪い事を爲なきや、警察も裁判所も怖い事は無いからね、落着いて居るんだよ。法律と云ふ物は、善人を保護する法律なんだから、弱い者を虐める道具ぢや無いんだから……。」

「何だ、弱い者を虐める……？」兄は鋭く咎めた。

初野は知らぬ顏色して、

「……弱い者を虐める道具ぢや無いから、些とも怖い事有りアしないよ……。だから、正直な處を云つてお呉れ、昨日ね、お家を出る時に、ね、奥室の嫂様の簞笥から、五十何圓とか入れてある紙入を盗つて逃げたと云ふが、本當に盗つたのか、其様な事をした覺えは無いのか、正直の處を云つてお呉れ、え、波ちやん、何も怖がる事は無いよ、盗らなきや盗らないと、判然云つてお呉れ、え、波ちやん、盗つたの。盗らない？　盗らないでせう？」

「其様な、其様な事を……。」お波は口を利いたが、怖い兄の顔を見ると、默つて了ふ。
「え？　其様な事を……？　其様な事を何うしたの？　其様な事は知らないツて云ふの？　え、波ちやん……？　何が怖いんだよ、知らなきや知らないと、可いから判然お云ひよ。え、知らない？　爾らか？」
「知らない！」
とお波の云ふや否や、矢の如く突出た吉兵衛の腕。
「此の阿魔ッちよ……！」の聲の下、頭と云はず顔と云はず、續け様にお波を撲ち据ゑたのである。
「兄様、貴方何を爲さるんです！」と叫んだ初野は、兄の腕を確かと捉へ、「亂暴にも程が有ります、幾ら兄でも、其様な無法な事をして可いのですか？」
「何だと？　こら初、汝は兄に抵抗する氣だな？」と吉兵衛の聲は噛付く如くである。
「抵抗ぢやありません、貴方の亂暴を止めるのです……。」其の調子は如何にも落着いて、判然として居るが、手も顔も、ぶる〳〵と顫へて居る。
「何だ、亂暴だ？」
「亂暴ですとも！　無法です！　野蠻です！　幾ら兄様でも、此様な少女を撲つて濟むんですか。貴方だッて、郷里では地位の有る紳士ぢやありませんか、腕力を振ふとは何事です、弱い者だから毆打るのですか、卑怯ぢやありませんか……。」
「生意氣な事を云ふな、泥棒する様な奴だから、此の兄が折檻して遣るのだ……。放せ、放さんか？」
「放しません、毆打るならば、波ちやんの代りに私を毆打つて下さい。」
「いゝえ、姉様を打つなら私を打つてお呉れ……。」とお波は兄の前に進んだ。
「波ちやん、何ですよ、お前は、お前は宜いから、ま其方へ退いてお居で。」
「だッて、姉様は大切の身體だから……。」
吉兵衛は姉妹を睨め廻して居たが、
「うん、これは何だな、汝等二人申合して爲た事だな。金を盗んだのも、逃げて來たのも、皆な初の指圖だな。」
「兄様、何ですッて……。何ですッて、それは貴方、餘り失敬ぢやありませんか……。」と許り口惜さに口も利き得ぬのである。
「いや、それに違ひ無い、姉妹共謀になツて、此の兄に迷惑を掛けようと云ふんだ……。此の室中を家探するから爾う思へ。」
「家探でも何でも爲すッて下さい。だけれど、若し無かッたら如何します、幾ら兄様でも、其様な言掛を掛けて、無かッたら何うするんです？」
「出なければ、警察の手を借りても出して見せる。ま、其方へ退かんか。」と兄は初野を突退けて、行きなり机の抽匣を抽いた。
初野は物をも云はず、兄の爲る處を凝然と睨めて居る。吉兵衛は無遠慮にも、机、本箱、文庫の隅々までも搔探したが、金は元より紙入も見えぬので、偶と姉妹の顔を見ると、初野は火鉢の傍に坐つて居るが、お波は押入の紙門の前に、其處を隱す様に手を擴げて起つて居る。吉兵衛は其處を屹と睨めたが、不意に押入の前に駈寄つて、
「こら、其方へ退かんか？」
「だッて、此處は……。」とお波は小腕ながらも抵抗ふ様にすると、
「汝、彌よ……。」と叫ぶや否や、手荒くお波を突轉ばして、紙門をがらりと明け、先づ目に着いた桑材の鏡臺に手を掛けると、お波は懲りずにまた兄の手を抑へようとする。
「波ちやん、何をするんだよ、」と初野はお波を

抱止めて、「可いから、兄様の好きな様に爲してお置き…。」

と言ふ時、吉兵衛が援出した抽匣の中、古新聞の上包を破れば、松に鶴の模様美しき女持の紙入。

「そら、此れは何だ？」と吉兵衛の聲は雷の落ちた如くであつた。

紙入の中を檢めれば、果して五十幾圓の紙幣がばら／＼と落ちた。

「如何だ、初、」と吉兵衛は、紙幣を鼻前に突付けて、「これでも未だ辯解が有るか？ これでも兄が無理か…？」

「波ちやん、お前はまア、如何して此様な淺ましい事を…！」と初野は額に袖を當てて泣伏した。

「何だと？ 露見したら、此度は波に許り罪を被せるのか？」と兄は惡々敷く笑つて、「其様なに言抜けようとしても駄目だ、皆な白狀して了へ！」

「なアに、姉様の知つた事ぢや無いよ、私一人で爲たことなんだよ。」と、それ迄默つて居たお波が膝を進めて、「惡い者は私許しなんだから…。」

「默つて居ろ、此の阿魔、」と平手で頬をぴしやりと打つて、「姉妹馴れ合つて、此の兄に迷惑を掛けようと云んだ、萩原家に仇を爲ようと云ふんだ。」

「だツて、私だツて、姉様だツて、萩原の家の者ぢや無いか、兄様許しの阿父様なもんか、兄様許しの財産なもんか…。」

「何だと、財産…？ 兄様許りの財産でない？」吉兵衛は叫ぶや否や、襟頸を捉つてお波を曳据ゑ、「誰から聞いた？ 誰が其様な事を云つた？ 姉からか？ 母からか？ さ、夫を云へ、誰から聞いた？ それを吐せ！」

「兄様、貴方まア、」と初野は兄の手に縋り付いて、「其様なに私共が惡いんですか？ 金を持つて逃げたのは惡いでせうが、幾ら惡いたツて、貴方にも妹ぢや有りませんか…僅か五十圓や百圓の金で、其様な手荒な事を爲さらないだツて宜いぢやありませんか…。私の惡い處は幾重にも謝罪りますから、何卒波を勘辨して遣つて下さい、よ、兄様、何卒勘辨して遣つて下さい。今後此様な、間違つた事を致さない様に、熟く諭して遣つて下さい、え、兄様。善くとも惡くとも、斷つても斷れない兄妹ぢやありませんか、孰せ兄様の厄介になる妹ぢやありませんか、え、兄様…。私は此の通り…。」

兄の手が搖むと共に起直つたお波は、姉の言の未だ終らぬに、

「なに、兄様の厄介になぞ成るもんか、阿父様の子なんだ、阿父様の財産を費ふのは當然なんだ…。」

「これ、」と初野は妹の口を押へて、「お前はまア、何故其様な馬鹿な事を言ふんです。兄様は萩原家の戸主で、お前でも私でも、皆な兄様に養はれてる者ぢや無いかね、皆な厄介者ぢや無いか…。」

「だツて、だツて皆な然う云ふんだもの、家の財産は、阿父様の増殖けた財産だツて…、だから、阿父様が彼様なに急に亡くならなきや、姉様だツて私だツて、夥多財産を配けて貰へたんだけれど…。」

「これ、波ちやん、」と初野は強く叱ツて、「默つてお居で…。」

吉兵衛は物をも云はず、姉妹の態を睨据ゑて居たが、頓て氣味惡く笑つて、

「解つた解つた、お前達の精神はそれで熟く解つた、」と今迄とは別人の様な悠然した語調で、「初、お前今、五十圓や百圓の金で、妹を手荒な事しちや可かんと云つたな？ 五十圓や百圓…、お前は、五十や百の金は何でも無く儲

かると思つてるのだね？」

「爾うぢや無いんですけれど……。」

「爾うぢやないと？　爾うぢや無いが、妹には代へられ無いと云ふのか？　お前は何樣な働が有つて、其樣な高慢な事を云ふ？　五十圓……一圓でも、五十錢でも、只の五十錢でも、お前の腕で儲けた事が有るか？　生意氣な、僅か五十圓とは何の事だ？　私は、お前達の樣な厄介者よりは、財産が大切だ、大切だとも、其樣な泥棒を爲たり、家内を探したりする者よりは金が大切だとも、金が尊いとも……。」

「爾うですか……。」と初野は脣を噛んだ。

「爾うだ。爾うだが如何した？　金が尊いなら如何した？」

「それ程大切な金なら……？」聲は震へて、能くも云ひ得ぬのである。

「うん、それ程大切な金なら……？」吉兵衛は後を問詰めた、「大切な金なら如何したと云ふのだ？　兄の世話には成らなくも宜いと云ふのか？」

「は、成らなくとも宜うございます。」と初野は判然言ひ放つた。「今後は、貴方のお世話に成りません、學資も入りません、私と波と二人は、死んでも貴方の厄介にはなりません！」

「うん、能く云つた。其の口を忘れるな。」

「忘れませんとも、私だツて、教育の有る女です……。」

「姉樣、其樣な事を云つたツて……。」

「可いのよ、可いのよ。」と妹の手を握つたが、涙は雨の如く落ちた。

魔風戀風（中篇）

自序

この小說の主人公とした某女生前の親友だとかで、作者の爲に故人の名譽を毀損されたと憤慨する人が在るさうだ。お氣の毒な事だ。才の多少こそあれ我も詩人である、苟も筆を拈つて机に對する時は、その人物を活寫せんとする他に、義理も、人情も、國法も、乃至此等一切の考を宿す「我」をも沒了し、殺了して對するのである、名譽とか不名譽とか、そんな地の上にはい、えたいい、せはしい念で作したものでは無い。君の不名譽と觀じた箇所は、或は故人の性格の活現された箇所かも知れぬ、即ち作者の以て美なりと觀じた箇所かも知れぬ、それならば夫れで澤山ぢや無いか、斯る境遇に生れて、斯る性癖を持つて、斯る時代の潮流に漂はされて、斯る哀な最期を遂げた女として、その女が此小說に活寫されてあらば、最早それで澤山ぢや無いか。名譽、不名譽、善、惡、君はそんな窮窟な色に故人を塗つて仕舞はなければ滿足せぬだらうが、君の故人は、それに構はず此の世を去つたでは無いか。嗚呼、故人の行爲は故人の行爲のまゝに世に曝して置け、我が主人公は主人公の自由にい、い、ふるまはして置け、君も迷ふ勿れ、某女も成佛せよ。

癸卯極月　　天外

第十一　魂膽

下宿の主婦お元は、殿井から迎の腕車を向けられて、朝から何樣な急用の起つた事と訝りながら、取る物も取敢へず駈付けた處である。

「おや、お來でなさい。旦那はね、今迄待つて居らツしやいましたがね、今一寸、其處まで出て來ると仰有いましてね……。」と玄關に立迎へた婆やが云ふ。

「あら、爾うですか。私アまた、何樣な急な御用と思つたら……。」

「まアお上んなさいな。不斷の儘でお出なすツたんですからね、最う、直きお歸りでせうよ。」

婆やの誘ふまゝ主婦は茶の間に通つたが、

「だけれど、何樣な御用でせうねえ？」と火鉢の傍に坐るや否や、氣遣はし相に尋ねた。

「なアに、用ツて程の用が有るもんですか……、内の旦那の事たもの。」と婆やは笑ひながら茶を侑める。

「だけれど、畢夫御用の無いものを……。」と主婦は切りと頸を捻り、「何か、婆や樣にお話が無かツたんですか？」

「私へなぞ、何を話すもんですか……、此の間の一件からは、不機嫌で不機嫌で、夫アもう、碌そツぽ口も利きませんよ。」

「此の間の一件と云ふと？」

「ほら、彼の、貴女の伴れて來らした別嬪樣の……。」

「あゝ、萩原樣の……？」主婦は微し顏を紅くしたが、膝を進めて、「一體、彼の晩は何う仕たんです？　彼時からね、來らツしやる度にね、手を更へ品を更へしてお問きするんだけれど、白ばツくれてばかし居らしツて、何うしても本當の事仰有らないんですよ。何うしたんです。

何樣な事が有つたんです？」
「何樣な事ッてお主婦、はゝゝゝ。」と婆やは笑つたが、「本當に、旦那も器量の惡い人さねえ、彼の別嬪樣にね、眩を喰つたんですよ。」
「へえ。何樣な鹽梅に…。」
「まア二階でね、どさくさしたかと思ふとね、何だか知らないけど、梯子からお前さん、宛然石かなんか落こッた樣な音がするぢやありませんか、おやと思つてね、私行つて見るとね…、眞暗で分らないけれど、何でも彼の阿孃樣を捉まへて、一生懸命に口説いてるぢやありませんか…、あの、一時の浮氣で此樣な事を云ふんぢやありません、貴女さへ承知して下されば、直ぐにも夫婦に成る意だから…なんてね…。」
「まア、其樣な事を仰有つて？」
「…でも、彼の阿孃樣堅いんですよ、何うしても、歸るんだッて肯かないんですよ、而るとね、旦那はね、最う種々な事を列べてね…。」
「はゝゝ、夢中なんだねえ。」
「夢中ともね…、彼樣な時に諾と云はうもんなら、夫こそ、何樣な約束でも出來たんでせうよ、はゝゝゝ。」と婆やは又笑つたが、「けれども、何うしても肯かないもんですからね、終ひには貴女、ぢやア、此後は決して此樣な失禮な事は云はないから、何卒、お友達として交際して下さい、てね、願ふ樣にして賴むぢやありませんか、爾うでないと、僕は恥かしくて、最う到底も生きちや居られ無い、なんてね。」
「まア、其樣な事を？　大變だねえ！　而したら何う云ひました？」
「幾ら何てッてもね、只だ歸して下さい、離して下さい、一點張でね、到頭お主婦、逃げる樣に歸つて了つたぢやありませんか、旦那は最う、夫こそ、手の中の珠を失した樣に茫然しちやッてね、後から玄關に出て來ましたッけが、私を見るとね、吃驚なすッて、婆や、先刻から此處に居たかッ！　てね、其の怒鳴つた事ッてものは…。」
と云ふ時、主婦は婆やの口を止めて、
「お歸んなすッた樣ですよ。」
「あ、お歸りの樣だ…。お主婦、今の話は此れですよ。」
二人が茶の間を玄關へと出ると、丁度歸つて來た殿井恭一は、
「お主婦か、好く來て呉れた、まア二階へお來で。何うした此の頃は、相變らず忙しいかね？」
と愛想よく云ふ。
「はい、矢張し何だ彼だッてね貴方。」
「でも、好く來て呉れた、實はね、此の間から、何とか樣子が有るだらうと思つて、毎日待つて居たけれど、一向音沙汰は無いし…、加之に、少うし相談する事も有るんでね…。」
「おや、何でしたッけ…待つて居らしたッて云ふと？」
「忘れたのかい？　彼樣なに賴んだ事を忘れるなんて、お主婦、夫ぢや、少し薄情過ぎるぢや無いかね…。」
「いゝえ、忘れやしませんけど…、本當に何でしたッけ、彼の、此の間のお金の一件でございますか？」
「私が用て云へば金の事と思ふ…、仕樣の無いお主婦だ、僕は其樣な、卑劣な人間ぢや無いよ。」と主人の恭一は笑ひながら、「まア、もッと火鉢の傍へお來で、今日は寒いぢや無いか。」
「はい、眞に。」主婦は躄寄つて、「ですけれど、何でございましたッけ？」
「其樣な心配する事は無いさ。」
「でも貴方…。」
「ほら、此の間賴んだぢや無いか…、何か、變つた事が有るんなら、直ぐ知らしてお呉れッて…。」

「萩原樣の事ですか？　左樣でござんしたかねえ？」

「左樣でござんしたかも無いもんだ、彼程繰返して賴んだ事を……。ぢやお主婦は、四角張つて、怒つてでも云はなきや耳には入れ無いんだね、僕の云ふ事なんざ、毎も冗談に聽いてるんだね？」と目の邊を紅くした。

「あら、旦那、決して爾う云ふ譯ぢやございませんよ……。」

「餘り爾う、人を輕蔑するもんぢや無いよ。僕だツて、これで地位も有れば名譽も有るんだ、お主婦の目には取るに足らない遊惰者ときや見えまいけれど、僕だツて美術家だ、畫工の仲間では多少名も知られて居るんだ……。」

「旦那、御免なさいよ。貴方を遊惰者だなんて、誰が貴方……、決して爾う云ふ譯ぢや無いんですよ。」と幾度か頭を歪げて、「貴方の仰有る事を粗略に聞くなんて、決して爾うぢや無いんですけれど、此の間のお話では、最う、萩原樣の事は是限りで斷念する、斷念するが、此の金だけは一旦遣ると云つた物だから、私が預つて置いて、何時でも、彼女で欲しいと云ふ時に渡して遣れ、て、此う仰有いましたから……。」

「それは云つたさ、けれども、變つた事が出來たら知らして呉れと云ふ事は、二三度も繰返して賴んだ筈だ……。成程、夫ア冗談の樣に云つたか知れない、笑ひながら賴んだか知れないけれど、幾ら笑つても依賴は依賴だ、爾う忘れられちや、僕だツて面白くないからねえ。」

「いゝえ、忘れや致しませんよ……、今のお話で思出しましたよ、忘れやしませんよ。忘れやしませんが、最う、萩原樣の事は思切ると仰有つたし、加之に……、何ぞ、お知らせ申す樣な、變つた事でも有ればですけれど、別に、此れと云ふ事も無いし……。」

「でも、妹を學校に入れる事に爲たツてぢや無いか？」

「え。」と主婦は目を睜つた。

「四五日前に、自轉車を賣つたツてぢや無いか？」

「えゝ。」

「それでも金が足り無いんで、冬物を質に置いたツてぢや無いか？」

「えゝ。何うして其樣な事まで……？」

「知つてるさ。」と恭一は莞爾とした。

外に洩る可き筈無き些細な事まで知つて居るので、主婦は一度は驚いたが、これは蓋く萩原の室の外に忍んで立聽でもしたに相違ない、殿井の平生から觀ても、萩原を慕ふ樣子から考へても、何うも其樣な事をしたに相違ない、併し彌よ爾うとすれば、下宿料の滯金を取つた事も、殿井から預つた金を、其後一度も萩原の前に出さぬ事も知つて居るか知れぬ。主婦ははツと思つたが、

「まア、お耳の速いには驚きましたねえ、」と笑つて、「ですけれど旦那、彼の萩原樣て女は、何うして如彼馬鹿堅いんでせう！　私も、是迄種々な女學生も見ましたが、彼樣な方は初めてですよ。彼樣ぢや、好きで困るときや云へませんねえ？」

「矢張り性質なんだね。兎に角、今の女學生には珍らしい者だ。未練を云ふ樣だが、僕は益々感服するねえ！」と恭一は體裁惡さうに笑ふ。

「未練て貴方……、未だ貴方……。」眞面目な顏を作る。

「いや、爾うぢや無い。」と頭を掉つたが、「如何だ、其の後、鄕里から金が來る樣子かい？」

「いゝえ、其樣な樣子なんざ……。彼れツ限り、葉書一枚參らない樣でございますよ。」

「いや、彼の兄なら爾うだらう、」と恭一は點頭いて、「慘酷な奴も在つたもんだ！　可哀想なは彼の姉妹さ！」

「可哀想のなんのッて貴方……。毎夜の様に、十二時過ぎ迄勉強して居らしッてね、さア寝ようと云ふと、何方から言出すとも無く〱、お郷里の話が出ましてね、阿母様が可哀想だ、嘸私達を案じて居らッしやるだらう、兄様が何様なに辛く過るだらうッてね、二人で貴方、寝る事も忘れて泣いて居るぢやありませんか、それが毎夜……。」
「可哀想な話だ！」
「……而るとね、姉様は姉様だけに、今更泣いた處が仕様が無い、お互に勉強して、速く一人前の者になッて、而して、阿母様を東京へ呼ぶ様にしなきや可けない、てね……。」
と主婦の言の止まぬに、恭一は喫んで居た紙巻莨を火鉢に突込み、
「そこで何うだらう？ 僕は、一つ補助をして遣らうと思ふんだが……。」
「結構でございますとも……、何様なに悦びますか。」
「實はね、今日お主婦に來て貰つたのは、その様子を聴いた上で、此の話を持出さうと思つてたんだがね……。」
「此様な場合ですもの、何様なに有難がるでせう？ 只、如彼いふ女ですから、從順に受けますか何うですか、少し其點が……ねえ。」
「さ、其點だて、」と膝を進めて、「僕が出すと云ッちや無論受けやしまいと思ふ……、此の間の事も有るんだから……。」
「いゝえ、其様な事はございませんよ。だッて、此の間の事だッて貴方、如彼して此方まで來らッしやる位ですもの、心の中でも最う、十分何して居らッしやるんでさアね、だけれど、未だなんしろ未通女ですからね、其處がそれ、幾ら何しても、矢張し裁體が悪いんでさアね……、ほゝ、爾うなんですよ。」
「いや、爾うぢや無い、」頭を掉つたが、又考へて、「其様な事は如何でも構はないんだが、併し僕だッて男だ、一旦拒絶された物を、再補助するなんて其様な不見識な事は云ひ度か無い、頼まれたッて厭なんだ。」
「へい。」
「だから、僕の補助爲ようて云ふな姉ぢや無い、妹の方なんだよ。如何だらう、彼娘を、一度僕に會はして呉れまいか？」
「波ちやんをですか？ 少女の事ですもの、それはお易い事ぢやありませんか。」
「また、安請合ぢや可かんよ。」
「いゝえ、安請合ぢやございませんよ、本當ですよ。」

第十二　依頼心

（一）

「姉様は遅いねえ、また、貸家を探しに廻つたか知ら？」
お波は獨語して、退屈の伸をしたが、頓て讀掛けた國語讀本を閉ぢて、其の眞新しい栗材の机を離れた。服裝は銘撰で、紺地に矢絣の袷、帯はメリンス友仙、束髪に薔薇の花束を明るく、頭から足の先まで新しい物を着けて居るので、少か十日許りの間に、見違へる程美しい女學生と變つた。
机を離れたお波は、小さい胸に何を思ふか、惘然思案顔して、自分と反對の壁際の、姉の火鉢の傍に坐つたが、火の無い灰に手を翳して、頭の折るゝ許りに俯向いて、何時か視るとも無く視詰めた我が膝の上に、ぽたり〱と涙を溢して居る。
忽ち縁側を此方に駈來る跫音がして、其處の障子が手荒く明いた。涙を拭ふ隙もなく見返ると、
「貴女、一寸來らッしやい……。」と下婢は莞爾

入つて來て、「おや、泣いて居らッしやるの、何うなすツて？」

お波は只だ頭を掉つたが、

「何か用なの？」

「ま、一寸此方へ。」

「誰、お主婦？」

「また、殿井樣が來らッしやいましたよ。」

「あら、本當…？」

「ま、お待ちなさいよ、簪が此樣に……」と下婢は花束を直して遣りながら、「今日はね、好いお土產が有りますよ。」

「何？　また御菓子？」

「いゝえ、食べる物ぢやありません、もツと良い物ですよ！」

「何だらう…？」と顏は嬉しさに輝いて、急々と出ようとしたが、俄に起止り、「可けないわ、最う、姉樣が歸る時分だもの。」

「歸つて來らしても可いぢやありませんか。」

「可けないわ、知れると叱られるんだもの。」

「ですから、お歸んなすツたら、お手水に行らした風をして、默つて居らッしやれば可いぢやありませんか……あれ、お主婦が呼んで居ます…ね、可いでせう。速く來らッしやいよ。」

「だけれど……。」

お波は躊躇ひながらも、步は下婢と共に茶の間に向くのであッた。

「お兼や、何を愚圖愚圖してんだよ。」と內から主婦の聲が起つた。

「はい、只今…。」此方から下婢が答へた。

「速く呼んでお來でなね。」

「いゝえ、來らッしやいましたの。」と障子を明けた。

室內では恭一と主婦と、顏を擡げてお波を見上げた。お波は莞爾笑つて、起つたまゝ恭一に輕く會釋した。

「如何したね、」と恭一は優しく手招して、「愛へお來でよ。」

「速く入らッしやいよ、好いお土產が有りますよ。」と主婦も云つた。

「お入んなさいよ。」と下婢はお波を押して、外から障子を閉めた。

「今日は如何したんだ？　ま、此室へお坐り、」と恭一は手を提つて傍に坐らせ、「何をしてたの、勉强…！」

「え。」と莞爾と點頭く。

「お波ちやん、此品、殿井樣のお土產ですよ。」

「あら！　何物？」

「當てて御覽なさいな。」

「解つてよ、時計ぢや無くツて？」と云つて、恭一を覗き込んで、「ね、…ぢや無くツて？」

黑革張の小函を開けば、中には果して銀側の婦人持の懷中時計が光つて居る。此品に見事な組紐と、銀製の可愛い襟飾まで添へて、皆なお波への土產だと云ふのである。お波は嬉しさに帶へ挾んだり、また更めて手に採上げたりしたが、晴れた顏を急に曇らせて、

「だけれど、姉樣に發見つたら……！」

「私の事を、未だ姉樣に祕してるの…？　過日のお錢のことも？」と恭一が問く。

「えゝ、彼の儘仕舞つてあるの。だツて、お錢を貰つたことが知れると、姉樣に叱られますもの。」

「ぢや、昨日のお菓子は何うしました？」と主婦も問く、「貴女は、食べないで置いて、阿姉樣に進げるんだッて云つたぢやありませんか？」

「彼品も、彼の儘仕舞つて置いたの。」

「まア。」と主婦は笑つて、「ぢや、乾涸び了つたんでせう？」

「だツて、姉樣へ進げようと思つたけど、あの、無暗と、他から物なぞ貰ッちや可けないツて、此の間も云つつかッたんだから、若し出したら、叱られやしないかと思つて。」

恭一は默つて考へて居たが、
「爾うだ爾うだ、今の中は、暫く私の事を祕して置くが可い。此の時計も、まア、お主婦にでも預けて置くが可いんだ。」
「だツて貴方、」と主婦は黄色い額に皺を寄せて、「其樣な、何時までも限りも無く。」
「いや、爾うぢや無い、」と頭を掉つて、「其の中に時機が來るさ。まア、當分祕して置いた方が可いんだ。」
「爾うですか、」と云つたが、またお波に對つて、「ですが、昨日殿井樣に敎はツた事は、彼事はお話しなすツて？」
「えゝ、夫は話したの。」
「爾うしたら、阿姉樣何て仰有いまして？」
「あのね、爾う云つたらね…。」とお波は、其の姉と對話した次第を、及ばぬ舌で語り出した。
それは恭一から敎へられた事で、姉は、此の下宿に居ては金が費るから、お波と共に何處か家賃の安い家を借りて、卒業まで自炊を爲ようとの計畫を立てて居るが、夫を思ひ止まらせようと云ふのである。其の理由は、先づ自炊をしては時間が費える、金も下宿して居ると左程の差は無いから、其樣な愚な事は思ひ止まるが可い、また、此家の主婦の話では、賴み樣に依て、私の學資を出す人が在ると云ふから、其の人に出して貰つては如何であらう、と此う云ふ談である。姉は、學資を出す人と聞いて、酷く訝つたが、併し、現在血を配けた兄ですら彼樣な事をする世の中に、知らぬ他人の補助を爲て吳れる道理がない、萬一其樣な人が在るとすれば、何か計畫むところが有つて、其の學資を餌に姉妹を係蹄に陷さうとするのであらう…。
「まア、係蹄ですツて？」と主婦は、話の半途に勃然として、「萩原樣も、隨分な事を仰有るぢやありませんか！」
恭一は只だ苦笑をしたが、
「ぢや、學資を貰ふ事は止せと云ふのだね？」
お波は點頭いた。姉を惡く云はるゝが悲しいので、口を噤んで二人の顏を交る交る眺めて居る。
「而して、お家を持ちなさる事は？」主婦はまた問いた。
「それは、彼の、好い鹽梅な家が有れば…。」と怖々に答へる。
「有れば？ 有れば越すんですか？ 萩原樣もまア、何て云ふ分らない女でせう。」と主婦は忌々敷さうに云つたが、また氣を轉へて、「而して、貴女は何う思ふんです？ お家をお持ちなすツて、買物に出たり、勝手の御用したり、お姉どんの眞似しながら勉强なすツた方が宜いんですか、夫とも、殿井樣にお金を出して戴いて、此うして此家に居らしツて、整然として勉强なすツた方が宜いんですか、孰が宜いんです？」
「夫は、整然として勉强した方が宜いけれど…。」
「それ、爾うでせう？ また、折角東京迄來らして、お姉どんの眞似をするなんて、全く馬鹿馬鹿しいんですからねえ、ねえ旦那？」
恭一は點頭いて、
「第一、此樣な少女に可哀想だよ。」
「爾うですとも、」と主婦はお波に顏を向け、「ぢやアね、後刻にね、阿姉樣がお歸んなすツたらね、今度は此う仰有い、あの…。」
「あら、姉樣歸つてよ。」
「ま、お待ちなさい…。」と主婦は出ようとするお波を押へて、耳を澄ませば成程前の緣側を通る跫音、續いて下婢と何か云ふ初野の聲がした。

(三)

「姉さん歸つて？ 遲かつたわねえ。」
「波ちゃん、何處へ行つてたの、手水？」
「えゝ。」

「ま此處へお來で。如何したの、何だか顏色が惡いぢや無いか、何處か惡いんぢや無い？」
「いゝえ、何處も。」
「本當？　風邪を惡いちや可けないよ、寒か無いの？」
「暖かだわ。姉樣こそ其樣なに薄着をして…、私、だから、彼の着物は取つて置けば可いツて云つたのに…。」
「私はこれで十分さ。何處に、今時分綿入なんか着て居る者が在るの。」
「だツて、今日は寒いぢや無いか。」
「少し位寒いたツてなアに！　是から後、何樣な境遇に陷ちるか知れやしない、其樣なに、身體を慢くして何うするもんですか！」と笑ひながら元氣好く云つて、「波ちやん、今日はね、學校から直ぐ家を見に廻つたの、好い處があるよ、もう理想通りの家よ。」
　初野は、其の家の事を話して聽かせた。其處は根津の唯ある横町で、茶の湯指南の看板を出した家の二階で、前月までは、神田邊の學校に出る女教師が借りて居たが、貸二階の札を張りながら男の客は謝絶つて、矢張り婦人に限り貸したいと云ふのである。第一閑靜で、瀟洒して、その上に割安で、臺所の道具も鍋釜までは彼方のを使はせると云ふのである。
「此樣な都合の好い事は無いだらう、ねえ？」と話し終つてから姉は云ひ加した。
「ぢや、其處を借りる事に決めて？」
「お金を持つて無かツたんで、只だお約束だけして來たの。でも、此の日曜には引越爲ようと思つてるの…。好い處よ、何樣なに勉强が出來るか。」
　姉の悅ぶに引更へて、お波は少しも進まぬ顏色、
「では、本當にお家を持つの？」
「爾うさ。何故…？　此の間から談した通りぢや無いかね…。」と訝しさうにお波を眺めて、「何うしたの？　其樣なに澄まない顏色をしてさ。」
「私、詰らないと思ふわ。」
「何が？　何が詰らないの？　お家を持つことが？」
「お姉どんの眞似なんぞして、大切な時間を潰すなんて、馬鹿馬鹿敷いと思ふわ。」
「え…？」
「學問てものは、勉强許り專一にしたツて、それでも、中々難かしい物ぢやないの、それを、お姉どんを爲たり、買物に出されたり、其樣な種々な事に心を使つて、何が出來るもんか？」
「何ですツて…？」と姉は屹と眼を据ゑてお波を視詰めたが、「ぢや、何うすれば可いツて云ふの？」
「何うすればツて…。」と口を噤む。
「ぢや、昨日お話しの、その…、學資を出して下さる人が在るからツて云ふの？　其の人から、學資を貰つた方が可いと云ふの？　え、波ちやん、爾うなの？　お前また、お主姉に何か云はれたね？　爾うだらう…、何故默つてるんですよ、何か云はれたらう？」
「而して、あの、私だツて、東京まで出て來て、お姉どんのお稽古なぞ眞平だわ。」
「何ですツて？」
「お姉どんなんかする位なら、私、故鄕で…。」
「お默りなさい！」と姉は叱んだ、「生意氣な！」
「だツて…。」とお波は口を噤んだ。
　初野は眞蒼になツて、久く妹を睨めて居たが、
「波ちやん、誰に敎はツたか知らないけれど、何故其樣な情無い事をお云ひなの？　過日から、彼樣なに繰返し繰返し聽かしたんぢや無いかね…。最う、あれ忘れたの？」
「だツて、詰んない事で時間潰すよか、姉樣も

勉強が出來て、私も勉強が出來たら、其の方が可いぢや無いか。」

「だから、何樣な人でも、學資を呉れようて人なら、貰つた方が宜いて云ふの……、それが爲に、後で何樣な難に遇はされても、難題を掛けられても……、身を縛られても……、一生頭の上らない者になツても、それでも構はないの？ それでも他の助を得た方が宜いの？」

「だツて、お金を貰つても、後で返したら、それで可いぢやないの。」

「後で返せば……？」

「可いぢや無いの……それで。姉樣のやうに、其樣なに人を疑つたり、詰んない我慢したツて何に成るもんか……、それよりか……。」

「波ちやん、何ですツて……？」と最う耐へ切れなくなツた姉は、抑へる間も無くはら〳〵と涙を落して、「お前まア何うして其樣な鄙劣い心にお成りだらうねえ。自炊すればツて、お前一人を使ふんぢや有りませんよ、姉樣も一緒に働くんですよ。二人で一緒に働くのが、お前さんは厭なんだね？ え、波ちやん……、姉さんはね、お前と二人ならね、何樣な苦勞も厭はない心算ですよ、それをお前は……。」

「夫ア、私だツて……。」

「私だツて……？ 其樣な、口で許し綺麗な事云つても駄目です。何故そんなら、其樣な鄙劣い事をお云ひなの？ 獨立心が無きや可けない、他に依賴する心を起しちや可けないツて、過日から、あれ程話して聽かしたぢや無いかね……。」

「それでも、姉樣の、あの……卒業試驗は大切の試驗なんだから……。」

「大切の試驗だから何うしたツて？」

「だから、家なんか持つて、下らない事で時間潰すよか、此家で勉強してた方が可いと思つて……。」

「分らないねえお前は！ 兄樣とは彼樣な事になツて、學資の出所は無いし、お前ツて云ふ者が一人殖えたんだし、詮方が無いから自炊する事にも爲たんぢやないかね？」

「だツて……。」

「また、だツて……？」と姉は短氣に遮つて、「最う何にも云ふ事はありません！ お前の惡い樣には爲ないんだから、默ツて姉樣の爲る通りに爲つてお居で！」

「それでも、私は……。」又何か云はうとすると、

「強情だねえ！」と姉は忌々敷さうに、「それで厭なら私知らない、波ちやんの勝手にお爲ツ！ もう鄕里へお歸り、歸つてお了ひ！」

「鄕里へなんぞ誰が……。」と泣き出した。

「歸らないてたツて誰が知るもんか……。」と云つた限り、初野は妹に面を背向けて、「書籍から、衣服から、持つてる物を皆な拂つて、それで、夏まで辛抱しようと思ふから、自炊爲る事にも決めたんぢやないか……、それを生意氣な、何の彼のと強情を張つて……、可いから、最う構はないから、波ちやんの好きな樣にお爲！」

「ぢや、私は彼の、夏まで姉樣と、」泣きながら途絶途絶に云つた、「夏まで、姉樣と別れて居るわ……。」

「え、別れる？ 別れるんだツて……？」

最う構はぬと云つたのも、鄕里へ歸れと云つたのも、それは無論妹の強情なのが小癪に觸つたところから、嚇しに言つて見たのに過ぎないのである。然るに、意外にも頑なでは姉と別れて居よう、などと、これ迄の從順な妹としては、卒に人でも變つたやうな一言に、初野は續ぐ可き言も出なかツたが、久くして、

「姉樣と別れて、而してお前は何うするの？ その、お主婦から話のあツた人に學資を貰つて、學校へ通はして貰ふの？」と云つてる中、涙は斷りも無く流れて來た。

お波は答は無い。泣いて居るのか、顔から袖を離し得ぬのである。

「ぢや、姉様と一緒に苦労することなんか厭に成つたんだね……? 爾うだらう? それなら夫で可いさ……。」と云ふと、お波は頭を掉るので、「でなきや、何故姉様と別れるの? 厭に成つたからぢや無いかね……? 私はね、是までね、お前を其様な人たア知らなかつたよ。波ちやんは、些とも姉妹の情愛ッて云ふ物が無い人なのねえ……、私は、それを思ふと私は、實に情なくッて……。」

「わ、私だッて、姉様の、姉様の爲なら、私は……。」と泣吃逆するのみである。

初野も、夫れ限りで言葉も無く、只だ机に俯向いて泣いて居た。其處に下婢は夕飯の膳を運んで来た。膳は疾に出来たのだが、姉妹の泣いて居るのを氣の毒に思うて、今まで遠慮して居たのだ、けれど、二人は箸を採らうともしない。

(三)

「あら、眞暗ぢやありませんか、如何なすッて?」と洋燈を下げに来た婢は恁う叫んだ。

春の日も、何時の間にか最う暮れて居る、洋燈を點けると、出した膳が其の儘に在るので、下婢は、如何した事と訊ね、椀の物を温めなどして、お波を慰めて膳に對はせた。

二人とも言も無く箸を採つたが、一椀の飯も食ふや食はずに膳を退いて貰つた。

「波ちやん、ま此處へお來でな、」と初野は聲を優しく、食後も机に悄然俯向いて居る妹を呼んで、「叱る處ぢや無いから、ま、顔を上げてお吳れ……。先刻はね、彼樣なに云つたけれどね、熟く考へて見ると、何うしても姉様はお前と別れて居る事が出來ないの……、同胞と云つても、お前と二人ッ限りで、賴にする人も力にする人も無いんだもの、氣に懸つて、最う到底別れてなんぞ居る事は出來ないの。」

「私だッて、姉様と別れるな厭だけれど……。」

「もう宜いの、もう泣かないでも宜いのよ。」と妹の涙を拭いて遣りながら、「それでね、姉様もね、お前と一緒に居つてね、物を賣つたりなんぞ爲ないで、甚うして勉強する事を考へたの。」

「何うするの?」とお波は初めて濡れた眼を大きくして、「私はね、物を賣つたりなんぞ爲ないで、夫で姉様の勉強出來ることなら、最う私何うでも可いの。」

「爾うなつたら、姉様と一緒に居てお吳れだらう?」

「えゝ、居る處ぢや無いわ、最う、姉様の傍を離れやしないわ。だッて、如何するの、お金を?」

「お友達に賴むの……、最う、其の方は氣に掛ける事は無いの、賴めば出來るに決まッてる事なんだから。」と妹に安堵させて、「お前の、其のお主婦の識ッて云ふのは、殿井様て云ふ人のことなんだらう? 爾うだらう?」

「だッて、名を云ッちや可けないッて云ふから……。」

「お主婦が?」と初野は厭な顔色をしたが、「なに、強ひて訊く事も無いのよ……、だけれどお波ちやん、最う彼樣な男た……。」

と云ひ出して急に言澱むと、妹は變な顔をして、

「姉様も知つてるの?」

「知つてるんぢや無いけれど……。最う、決して男の人の世話になんぞ死んでも成るもんぢや無いのよ。」と何處やら曖昧の語調である。

第十三 子爵家

(一)

廣くは無けれど、古い樹木の多い奧庭を、斜に

西洋室へ通ふ廊下で、二十一二とも見える色白の肥つた仲働女が、衣服の汚れるのを氣遣ひながら其處の欄干に肱を凭せて、

「へい、其樣な事が有つて？　東吾樣も、中々性惡で居らッしやるわねえ。だけど、其者は何樣な娘なの、白晝學校まで迎に行くなんて、通常の娘ぢや無いわねえ、矢張し女學生？」

而ると、直ぐ其の下で、泥に汚れた花瓣を掃いて居る抱車夫の松藏と云ふのが、笑ひながら箒の手を止めて、

「はゝゝゝ、東吾樣の事となると、お前樣も些か心配だね、はゝゝゝ、矢張し、お政樣もぼつぼつの組だね、はゝゝゝ。」

「厭だよ松樣は、お孃樣がお可哀想だから、それで訊くんぢや無いの……、しと、ぼつぼつの組だなんて……。ぢや、お前樣何とも思はないの、彼樣な、萩原なんて、綺麗な女學生を雕込んだ上に、まだ其樣な娘が有るなんて、阿孃樣の身に成ッて御覽なね？」

「なアに、大丈夫さ。殿樣のお眼識で御養子に成ッた東吾樣だ、阿孃樣泣かせる樣な、其樣な浮氣なんか爲さるもんかね、大丈夫だよ。」

「ふゝん、其の御前のお眼識だから、猶更怪しいんぢやないの。」

「では、昨夜あたり、お政さん這入りこまれたね？」

「其樣な大聲で、馬鹿な事お云ひで無いよ。」と四邊を見廻して、「可笑くもない。」

「口ぢや爾らは云ふものの、惡くも有るめえ。」

「何だッて？」と脹れて、「厭な事た。」

「はゝゝゝ、だが、東吾樣許りは大丈夫だよ。殿樣の二代目だなんて、お前達は惡く云ふけれどね、中々腹の据つた、確りした方だ……、何うして。加之にお前、最ら此の夏は、卒業なさると直ぐ、御婚禮て云ふ事に、ちやんと決まッたぢや無えか、大丈夫だよ。……

「だけどね、是はお前樣限りの話だけどね、」と低聲になつて、「人の話だと、今度の御婚禮はね、東吾樣が厭だと仰有るのをね、是迄の恩を枷に、無理無理承知さしたんだッさ。」

「爾うかね？」

「私も爾うと思ふのは、今度房州へ行らしッてもね、御手紙なら一本、着いた時に、お葉書一枚寄來した限りなんだよ……、何らも、私達の邪推か知らないけど、彼の萩原て云ふ女學生か、でなきや、今松樣の話したその、變な娘でも作れてッてるんぢや無いかと思ふわ。」

と夢中で噂をして居る時しも、遙か彼方の廊下から、

「お政樣、一寸來て下さいな。」と同齡位の婢が手招する。

「何か御用？」とお政が駈けて行くと、

「今ね、此れをね、」と兩手に抱へた反物を見せて、「御前へお目に掛けて來いッて命令かつたけれど……、お前さん、後生だから一緒に行つてお吳れな。」

「厭だよ、お前さん命令かつたんなら、お前さんお出でなね。」と笑ふ。

「だッて、氣味が惡くッて……。よ、お政さん、後生ですからさ。」

「ふゝん、色女は違つたもんだ。」

「お政さん、何ですッて？」

「御前がお待ちかねだッさ。」

「おゝ、桑原桑原……。」と首を縮める。

二人は笑つたが、お政は、

「御前へお目に掛けんなら、奥樣もまた、御自身で持つて行らッしやれば可いのにね。」

「だッて、彼の吳服屋さん來てるんだもの、最う夢中なんだよ。」

「彼の番頭樣は、一寸小意氣だからねえ、何だぢや無いか知ら、柳橋以來のお馴染ぢや無いか知ら？」

「だツて、齡が……、全然母子ぢや無いの？」
「爾うねえ……。」
と云ふ時しも、疊を擦る跫音急しく、障子をがらり開けて、座敷を出て來た芳江は、「政、母樣は何處なの？」と餘念の無い目、すらりとした姿、外出の服裝は一段に美しく、また一段に活潑にも見えるのである。

（二）

母は中の八疊に居ると聞いて、芳江は身輕に其處へ駈けて行つた。入つて見ると吳服屋が居て、座敷中に取散した反物、母は己が小袖を出して、これでは色が合ふの合はぬのと元氣好く饒舌つて居た。

最う白髮の見える、小皺の寄つた、頰の瘦けた、頸の細い女であるが、品の良い丸髷に毛手絡、根掛は珊瑚、何處となく色氣の有る化粧なるに、皮膚にも艶があツて、眼は恐しく若い。

「今ね、貴女を迎に上げようと思つてた處ですよ、何方が好いか、氣に適つたのを擇つて御覽な。」
と其處に積んである帶地を示すと、吳服屋は敏捷くそれを擴げて、效能やらお世辭やら、べらべらと饒舌り出したが、芳江の方は無言で、軈て其中の一本を拔取り、
「私なら是が好いけれど……、如何でせう？」
と母に尋ねる。
「感心なお見立だよ、私も其邊と思つてたよ。ねえ長樣、感心ぢや無いかね。」
而ると長樣と呼ばれた其の吳服屋は、得たり賢しと又褒じ出したが、芳江は更にそれに取合はず、
「母樣、私、萩原樣の處へ行つて來てよ。可いでせう？」
「萩原樣へ？」
「えゝ、可いでせう？」
「今ツから？」
「また母樣ツたら……。」甘える樣に額を顰めて、「萩原樣へ行くて云へば、毎度其樣な事ばかし……。直ぐ歸つたら可いでせう？」
「それは可いけれど、今日に限つた事は無いぢや無いかね、何も急ぎの用が有るぢやなし……。それよりか、まア帶地でも熟く御覽なさいな、過日、品の良い長襦袢が欲しいとか云つたぢや無いか、それ、幾らも有りますよ、此樣なのも……。」
「襦袢なんか、母樣が見て下さいな。」芳江は反物など手にも觸れず、「ねえ、行つても可いでせう？急ぎの用て云ふ事も無いけど、最う、隨分長く會はないんですもの……。」
「だツて、此の間まで、學校で毎日會つてましたらう？」
「學校でなぞ會つたツて、染々談話する事も出來やしないわ……。よ、母樣、可いでせう……？加之に、此の頃は彼の方、妹さんが逃げて來てるツてから、何樣なにしてるかと思つて、私、氣に掛つて氣に掛つて仕樣が無いんですもの。」
「妹が逃げて來て……？」母は驚く。
「え、逃げて來てますツて。だけど、萩原樣は、私には何とも云はないのよ、」と芳江は容易ならぬ眼をして、「だから行つても可いでせう、ね？行きますよ。」
「ま、今日はお止しなさい。」
「何故？」と悲しい顏色をする。
「行くなら、此樣なに遲くでなく、午前の中に行つていらツしやいな。」
「だツて、萩原樣は學校へ行つてるぢやありませんか……？直ぐ歸つたら可いでせう、一時間も居て直ぐ歸るわ、ね、母樣、可いでせう？」と云つても母が許さぬので、「此樣な事なら私、默つて出て行けば宜かツたわ。」

「默つてなぞ出たら承知しませんよ、これ迄た遊ひます。」と母は嚴然と云つたが、「最う、夫人に成る女ぢや無いかれ。」

芳江はさッと紅くなッて、

「知らないわ、私。」と呉服屋が笑ひはせぬかと睨めて居た。

ところへ仲働女が入つて來て、

「阿孃様、萩原様がお來でになりました。」

「あら、本當？」

「はい、阿孃様が居らッしやいますかッて。」

「まア、」と芳江はむッくり起つて、「お一人なの？」

「芳江さん、ま、一寸お待ちよ。」と母も急に緣側へ起つて來て、何やら耳に口を寄せた。

「だッて。」と芳江は不平な顔をする。

「いゝえ、可けません。」と母は頭を掉つて固く云つた。

（三）

毎度は、取次の者が引込むと間も無く芳江が飛んで來て、直ぐ眺望の佳い二階へ伴込むのであるが、今日は何うしたのか再婢が出て、此方へと案内したのは、玄關脇の廣い客室である。是までと勝手が違ふので、初野は、女中が間違へて取次いだのぢやないかと訝つた。で、

「芳江様は居らッしやいませうね？」

と念を押して見ると、女中は變な顔をして、

「は、居らッしやいます。」と答へる。

それでも、茶が出て、菓子の器物が出て、床の山水の掛物から、芳江が手際らしい緋桃の生花、違棚の古代蒔繪の文庫まで一應眺め渡したけれど、何うしたのか尋ぬる主は未だ姿を見せぬ。

「矢張し、何處か不快いか知ら？」と思はず獨語した。

此う思うたのは、此の四五日と云ふもの、芳江の姿が學校に見えぬので、友達の間には、近い中に結婚する爲め、最う退學したと云ふもあれば、寒暖不順の近頃の時候中りで、多分親達に狎やかされて缺席して居るだらう、など噂は種々ある。初野は、結婚ならば來年卒業してからの筈、それが爲に今から退學などする理由は無い、と他の噂すること迄を打消して居たものの、實の處、自身では何方とも決し難ねて居たので。

「萩原様、何うも濟みません……、」と、聲と共に芳江が突然入つて來て、いきなり初野の前に坐つたが、「堪忍して頂戴な？」と云ふや否や、はら〳〵落涙する。

「如何なすッたの？」と初野は眼を瞬つたが「何か有つて？」

「いゝえ、何でも無いの……、」と芳江は速くも涙を拭いて、「好く來て下すッたわねえ。一年も逢はない樣だわ。」

「本當に如何なすッたの？」矢張り訝つて居る。

「何でも無いことよ。」と云つたが、初野の顔を視て急に頭を掉り、「いやよ、其樣なに氣に懸けちやア。」

「だッて、顔色も何だか……。」と凝然と眼を据ゑて、「本當に如何なすッたの、此頃は、學校にも來らッしやらないぢや有りませんか？」

「學校はね、私最う……、」と云ひ澱んで、「是ッ限りで、退くかも知れないのよ。」

「おや、如何して……？」

「如何してッて。」と微し赧くなり、「此の事に就いてね、私も迷つて、義姉さんにコンサルト仕ようと思つてね、實は、是から出掛ける處だッたの。」

「爾ら、丁度好かッたこと……。」と云つて、其の事情を聽かうとしても芳江は默つて居るので、「何故退學なさるの？　何か、變つた事情で

も起つて？」
「變つた事情てことも無いけど……、」と云ひ難さうに云ひ止んで、「まア、夫は後刻で話しませう。今日は緩り遊んでても可いでせう？」
「え、實はね、私も今日は、少し御相談が有つてね……、」と初野も云ひ難さうに云ひ澁つて、急に淋しい顏をしたが、「まア、貴女の方から聽かして下さいな、氣に成るわ。」
「何なの、その、貴女の御相談て？」と芳江は愕然として、「え、何樣な？ いゝえ、私の事なぞ心配な事ぢや無いのよ。何樣な……？ また、波ちやんが逃げて來たッてぢやありませんか、其の事？」
「あら、貴女知つてて？」
「三浦樣から聞いたの。私には祕して居らッしやるんだもの、私、怨んでたわ。」
「祕した譯ぢや無いけれど、機會が無かッたんですもの。」
「ぢや、矢張し波ちやんの事で？」
「え、」と點頭いたが、深く溜息を吐いて、「私實に困ッ了つてよ。」
初野は、妹の逃げて來た事から、兄が跡を追蒐けて來て、僅の金の一條から、以來は學資は送らぬ、貰はなくも宜うございます、と喧嘩をして別れた事まで打明けたが、流石に、夏までの學資の補助を得度い、とは云ひ出し難ねた。
「大變だわねえ！」と聽終つた芳江は最う顏色を變へて、「而して、其後、阿兄樣から何て云つて來たの？」
「いゝえ、何とも。葉書一枚來やしないわ。此方からも遣らないけれど。」
「まア、酷いわねえ！」と忽ち催涙んで、「ぢやア、大變でせう？」
「え、私も困つて了つたのよ……。私一人なら、何樣な苦勞でも負けない氣だけれど、」と初野も催涙んで、「妹が實に可哀想で。」
「如何したら可いでせう……？」と芳江は急に萎れて、「あゝ、困つたねえ！」
此の嘆息の一言を聽くと、初野は眞蒼になッた。確とは分らぬが、芳江にも何か仔細が有つて、自分を救はうにも救ふ事は出來ぬと云ふ樣に感じたのである。
「私は、熟く熟く不幸に生れたんですねえ。彼樣な負傷をしたり、學資を絕たれたり……、終ひには、何樣な者に成るんでせう……。」と急に袖で顏を隱した。
芳江は久く俯向いて居たが、頓て面を擡げて、
「今後は何うする心算？」
「何うするッて最う……、」と泣きながら、「仕方が無いから、妹と二人で、自炊でも爲ようと思つて……。」
「自炊？」芳江は吃驚し、「まア！」
「だッて、外に仕樣が無いんですもの。」
「波ちやんを、お國へ歸したら？」
「いゝえ、私の傍を離れたら、何樣な難に遭はされるかと思ふと、最う可哀想で、到底離しちや置けませんの、だから、假ひ食ふに困つても……、死ぬ樣な難に遭つても、私は妹と一緒に死ぬ氣ですの……。」
「まア、死ぬんですッて？」とはら〱と涙を零し、「其樣な事なの？」
「其樣な事も無からうけれど、それでも、私は最う覺悟を極めなきや成らないと思つてるのよ……、勿論、持つてる物を皆な擲へば、何うにか斯うにか、此の夏ぐらゐ迄は過して行けるだらうと思ふけれど……。」
「其樣な事しないだッて可いわ……。」と芳江は屹然となッた。
「だッて最う……。」
「いゝえ、私だッて何うにか爲るわ……。義姉さんの身に較べると、私なんか、罰が當る樣ですもの……。もう、自分の事なぞ構やしない、

もう、誰が何て云つても構やしない、義姉さんの苦勞を思へば私……。
「だッて、貴女許し其の意だッて……。」
「いゝえ、可いの、」と固く點頭いて、「貴女、其樣な水臭い事を云ッちや可厭よ、私、反つて怨に思ふわ。」
「貴女の、その親切は解つてるけれどね……。」
「最う可いから、默つて私に任して頂戴よ……。私はね、義姉樣、私はね、」と急に初野の手を握つて「これでも、貴女を姉樣と思つてるのよ、口頭許しぢや無いの、眞實姉樣と思つてるの……、何樣な事が有つても、もう決して此の誓は破らない心算よ、死んでも破らない心算よ！」
「それは、私だッて芳江さん……。」
「妹にして呉れるでせう……。何卒ねえ、一生見棄てないで下さいよ、ね、ねえ姉樣！」と綺麗な手に力を籠めて、「更めて、今日から誓つてよ。」
「え、私も誓つてよ！」

（四）

飾附の置洋燈の火光が、布巾の跡の光澤する室中の道具に映つてゐる、紫檀の唐机に小遣帳を擴げて、今日の買物を算盤に彈く子爵夫人、それと對つて花榴の火鉢の傍には、娘の芳江が膝の上なる白羽二重の手巾を丸めたり擴げたりして、何やら切りと強請つて居る。
「煩いねえ、」と云ひながら、母は算盤の手を止めて、初めて顰めた顔を芳江に向け、「お金は世の中の實です、たゞ出來るものぢやありません。貴女には、それが解らないんですか？」
「それは解つてるけれど……。」と何か云ひ出さうとすると、
「解つてるなら、斷つて了ひなさい、判然斷つて了ひなさい。其樣た、お金の無心なんぞは、親達が承知しませんて。」
「あら、無心ぢや無いのよ、萩原樣から言出した事ぢや無いのよ……。」
「其樣なら、何も其の樣に氣を揉むには當らないでせう？」
「だッて、餘りお氣の毒だから、私から進んで……、萩原樣は辭退するけれど、私から進んで爾う云ふ事にしたんですもの。」
「今後の學資を續けるッて？」
「然。」
「まア！」と夫人は呆れたが、「幾ら頑是が無いからッて……、お金を何と心得て居るの？」
「金の大切な事は知つてるけれど、だッて、友誼はお金より大切なんだから……。」
「また其樣な理窟を……、母樣に對つて、理窟を云ふもんぢやありません！」
「だッて……。」
「だッてと云ふ事が有りますか！」と叱る樣に云つたが、また舊の調子で、「二言目には、お友達に對する務だと云ふけれど、申さば、學校に居る間の友達ぢやありませんか……。」
母の言の終らぬに怪訝な顔を擡げて、
「いゝえ、私は、萩原樣とは終身の友達だわ。」
「いゝえ、夫は可けません。」
「何故？」
「第一身分が違ひます、彼樣な者と交際しては、夏本家の恥になります。貴女が交ると云つても母樣が許しません、今後は、今迄の樣に、爾う屢々家へ入れる事は出來ません。」
芳江は忽ち涙ぐんで、
「何故です？　是迄親くした人を、急に其樣な……、」とはら／＼と涙を溢し、「なんぼ母樣の仰有る事でも、此の事許しは私は厭です、何と仰有つても厭です。」
「其樣な分らない事を云つて、」と夫人は娘の涙を見ては此の上強い事も云へず、「友達友達と、大層らしく云ふけれどね、最う此夏からは、

貴女も良人の有る人ぢやないかね。」

「だッて、何に成ッたッて、友達は友達ぢやありませんか？」

「いゝえ、良人が有れば、最う友達と云ふ物は要らないものです。」と夫人は、今に母様の言の解る時が來るから、と云ふ樣に片頰に笑を浮べたが、「ですから、今夜は御馳走もしたんだし、最う歸してお了ひなさい、夫とも、貴女から斷絶り難いなら、母様が斷絶つて上げても可い。」

「だッて、母様に關係のない事ぢやありませんか……。母様、其樣な事を仰有らないで、今夜、二十圓だけ遣つて頂戴よ、よ、母様、萩原様は大變に困つてますからさ、お願ひですからさ。」と云つても母の肯く風が無いので、「ぢや可い、私、今日貰つた帶を返し了つて、彼の金で何するから……」

「其樣な馬鹿な事を……！」

「だッて、私帶なんか入らないわ、萩原様の困つてる事を思へば、私、裸體に成ッても構はないわ。」と涙の顏を横に掉つた。

（五）

廣い客間には初野が唯一人、芳江の樣子如何と、耳を欹てたり、投首したり、只管その座に復るのを待つて居る。

初野の心では、今日頼んで、今日の中に直ぐ諾否の返辭を確めようとしたのでは無いが、情に厚き芳江は、最う一刻も猶豫して居られぬと云つて、直ぐ相談の爲に彼方に起つたのである。けれども、幾ら芳江は夏本家の愛孃と云つても、また幾ら夏本家は有福と云つても、之から夏までの長い間を、初野姉妹に學資を補助すると云ふ事である、芳江が一席の言で承諾しよう筈は無い。況して子爵は、官途に在る頃に御用商人と結んで富を積んだとか、身分に似合はぬ吝嗇だとか評判もある程であるものを……あゝ、寧そこれは斷つて貰へば宜かつた、出來ぬものならば初めから言出さぬ方が、先方も此方も厭な思ひをせぬだけが益であッた……、最う先刻から一時間餘にもなる、暇取るのは談が難かしいからであらう……、若しや、其樣な事を引受けたのが惡いと云ふので、私の爲に芳江様が叱られて居るのではあるまいか、それならば、一つでも年上の身で、芳江様に謝罪る言もない譯だが……、あゝ、何うして此う暇取るのだらう、女中に頼んで芳江様を呼んで貰はうか知ら……。

「おゝ、誰かと思つたら、萩原様か。」

突然襖の障子を開けたのは、主人の夏本子爵である。初野ははッと坐作を正して、何か聞えぬ低聲で云つて、丁寧にお叩頭をした。

「まア爾うしてお居で、」と徐に座敷に入つて、「獨ぢやね、芳江は何處へ行ッとるか……、こら、女共は居らんか、芳江を呼んで來んか……、こら、誰も居らんのか……。」

「今、一寸彼方へ行らッしやいまして……、」と初野は、子爵の聲を止めた。

「左樣か……。」と云ひながら子爵は其處へ腰を卸さうとしたが、火鉢を見て、「お、此れは火も消えとる、此處は寒くて可かん、萩原様、彼方へお來でなさらんか。」

「はい、」とは答へたが當惑して、「此處で宜しうございますから。」

「なに、遠慮なさらんが可い。芳江も呼ぶから、まア此方へお來で……、失禮ぢやが、其の洋燈を持つて來て下さらんか。」

初野は、芳江の見える迄此室に居ようと思つたが、洋燈を持つて來て、と頼まれては厭とも云へず、それに子爵は前に立つて、早や廊下を奥の方へ行かうとするので、詮方なしにニッケルの臺洋燈を片手に、後に從いて奥の方に進

んだ。
子爵は六十を越した老人で、髪も髯も雪の様に白いが、紅味を帶びた顏の頬も圓く、眼も眼鏡の力を藉らぬのである。少し小男の方で、此の頃の陽氣を、樂な綿入にネルの單物を重ね、肌にもネルの襯衣を着て居るが、何うしたか足は素足に上靴を引摺つて居る。
「ま、此方へお入り、洋燈は其臺に置いて……。」
子爵の入つた室は、爐を切つた茶掛つた八疊で、床の飾など中々手を掛けた跡は見えながら、火の氣も無ければ、座蒲團も無い、何うやら久しく客を入れた事なども無いと見える。

（六）

いくら諭して聽しても、芳江が強請つて止まぬので、子に慢い夫人も此の時のみは腹を立てたらしく、ぷいと起つて室を出たが、背後から泣聲が耳に入ると、また料簡が動き出した。
彼程までに願ふものを、寧そ承知して遣らうか、毎月二十圓宛、五箇月で百圓、格別大金と云ふでもない、それで娘の顏も立ち、親をも有難く思はせ、萩原姉妹からは一生恩人と敬はれるなら、格別惜む事も無いではないか。
だが、爾うなツたら此の上にも親しくなツて、始終出入する事とならうか、何と東吾と……、人の恩を受けて居ながら、其様な大膽な事も爲はしまいが……、また東吾とても、何の義理で其様な徒な心を起さう筈も無いが、併し、若い同士の事だから何とも云へない。
「況して、彼樣な噂も有ることだし……」と夫人は口にまで出したが、また起止つて考へた。
考へたが、謝絶るにしても、一旦受込んだ芳江の口からは謝絶り難い筈である、また、望を叶へて遣るにしても、云はゞ金錢に關る約束、自分が直に會つて、訊くだけの事を聽き、云ふだけの事を云つて、確と決めねばならぬのだ。加之に、數年來出入して居る初野であるが、何樣な質の娘か、つい是までは氣を付けて性を驗した事も無い。
「爾うだ。兎も角も私が會つて見よう、何方にしても、會つてから決めても遲かア無い……。」
夫人は此う思つて獨りで點頭いたが、臺所の方に向けた足を急に返して、玄關脇の客室に來て見ると、先刻まで點いて居た燈火も消えて、更に人音も無い。
「おや、何處へ行つたらう？ 確か此室に……。」
と呆れたが、丁度仲働女が其處を通るので、「政ちやないか？」
「はい。」と思掛けぬ處を呼ばれて婢は吃驚した。
「政、お客樣は？」
「萩原樣でございますか、萩原樣は此方に……。」
と云つて、初めて座敷の暗いに氣が付き、「あら
「眞暗ぢや無いかね？」
「何うなすツたんでございませう、今迄居らツしやいましたツけが……、最うお歸りなすツたでせうか？」
「いゝえ、歸らないよ。何處に、挨拶も無く歸る人が有るものかね。
「左樣でございますねえ。では、若しや阿孃樣とお二階へでも……。」
「いゝえ、芳江樣は私の室に居るんだよ……。變だねえ、洋燈まで消えてるんだもの、何うしたらう？」
「本當に、何うなすツたんでございませう。」
「お前、一寸履物を見てお來でな。」
「はい。」と婢は彼方に驅けて行つた。
「怪しいねえ！」と夫人は暗い座敷に起つて呟いたが、偶と、奧の方から人の叫ぶ樣な聲が聞える。
「おや、何だらう……？」と耳を澄ませば [illegible]

障りの荒き跫音、續いてどしんと襖などに突當つた音。

夫人は、暗い縁側を右に曲つたが、燈火の有らう筈なき彼方の八疊に人影が動いて、尋常事ならぬ物音も其中から聞えるのである。

夫人は行きなり障子を開けたが、其の姿を見ると、物をも云はず風の如く出て去つたのは良人の子爵である。

續いて、手早く帶を結び正した初野も、夫人には言も無く、直に室を出ようとする。

「萩原さん、一寸待つて下さい！」

今迄初野を睨み付けて居た夫人は、鋭く此う云つて、自分も跪めて其處へ坐つた。

初野は俯向いたまゝ、怖々膝を突いたが、

「私は、歸りますから……」と震聲である。

「歸るのは御勝手だけれど、私は、尋ね度い事が有りますよ」と夫人は身を反して、「一つ、貴女に云ふ事が有ります！」

「は。何でございますか。」

「何でも無いもんだ」と忌々敷さうに云つたが、背後の縁側にお政の起つて居るのに氣が付き、「政、何だ、其様なところに起つて、彼方へ去つてお居で！」

婢は裂ける如な其聲に、顛へ上つて逃げ出さうとすると、

「政ッ、其處を閉めてお出で。誰も來ちや可けないよ、芳江様も寄來すんぢや無いよ、可いか。」

「はい。」

仲働女が去ると、夫人はまた儼然と初野に向直つて、

「萩原さん、今の態は、彼は何て云ふ態です？」

「……」初野は泣出した。

「何故貴女は此室へ入りました？ 何の爲に入りました？ 今の様な、彼様な猥褻な事が有たさに入つたんですか？ 當今の女學生には、學資に窮して、醜業を爲る者が有ると云ふが、貴女は其様な人ぢや無からうね……？」

「な、何ですツて、貴女、何ですツて、醜業ですツて……？ それは、誰に仰有ることです？」

「誰でも無い、貴女のことさ、貴女に問いたのさ……。問いては悪いのかい、何だ其様な顔をして、私は怖か無いよ。……人の家へ來て、勝手に奥へ入り込んで、今の様な、彼様な猥な眞似なんぞをして……、何だ。」

「其は貴女……、幾ら私が學生でも、其は餘り……、餘り失禮ぢやありませんか。」

「何が失禮です、勝手に他家の奥へ入り込んで……。」と云ひ伏せようとすると、

「私は、勝手に入つたのぢやありません、此方の御主人が、强ひて來いと仰有つて、無理に、無理に此様な……」と激昂か涙を嚥んで、「無理に伴れて來らしツて、彼様な暴行を爲さらうとしたんです、私は、實に口惜くてなりません……」

「無理に伴れて來たと云つて、豈夫、曳摺つて來たんぢやあるまい、貴女も承知で來たんだらう、腕力で伴れて來たんなら、彼處から此處まで來る間に、聲一つ立てずに來る譯は無からう？ 無論承知の上で、何様な事を爲れようと、それに從ふ意で來たんだらう……。」

「從ふ意……從ふ意とは何の事です？ 幾ら貴女が子爵夫人でも、其様な、其様なに人を侮辱して濟みますか？」

「何を侮辱しました、何を？ 從ふ意で來たんだらうとは云つたが、それが侮辱に當りますか、何處が侮辱です？ 生意氣な、私だツて、此う見えても洋行……した者だ。お前達の様な者に遣込められる程未だ耄碌はしない。何處が侮辱だ、理窟が有らば云つて御覽、何處が侮辱です？」

初野は顔を押へて居たが、

「わ、私は……、私は何にも申しません、お

暇致します。」と途切途切に辛と云つた。
「お歸りなさい、誰も居てお異れッて頼みやしない。だが、今後はね、私の邸へ來て貰ッちや迷惑です。」
「はい、參りません。」と初野は座を立つた。
「芳江とも絶交です。」
「はい。」と涙を啣んで、「承知しました。」

第十四　大決斷

（一）

顏も洗ひ、髮も結ひ直し、着物も着更へたけれど姉は未だ寢て居る。お波は音を立てぬ樣に其邊を整頓けて机に對つたが、只だ姉の事のみが氣に掛る。

昨夜、外から歸つた姉の樣子。顏色の惡さ、言葉の荒々敷さ、少女心にも何かは知らず容易ならぬ事起れりと察したので、尋ねても見、慰めようともして見たが、姉は頭から突慳貪に叱り飛ばして、何もお前なぞの知つた事で無い、煩い、默つてお居で、早く寢て了へと、常ならば妹の涙を見ては、直に氣も折れ、言葉も溫和くなる姉だのに、昨夜許りは何處までも機嫌惡く、强ひてお波を床に入れて了つた。

お波は、昨夜許りは心底から姉を怖い人と思つた。叱られるので詮方なしに床にも入つたが、仔細は分らぬながらも、悲しさ心細さに、何時までも、睡た態をして姉の樣子を窺つて居た。

初めは死んだ物の樣に、凝然と机に凭れて居たッけが、急にしやッきり首を上げて、怖い目をして燈火を睨めた、而ると其の燈火の映つて居る目は次第に大きく脹れ上つて、ぎら／＼と光つたが、それは涙で、頓てはら／＼と溢れ落ちた。それと同時に、我と我が手で、引捋る樣に髮の毛をひッ攫んだ。最う抑へても抑へても、泣聲は次第に高くなッた。

お波は何うしたら可いやら、起きて行つたら又叱られようし、と暗い處から姉を見て、同じ樣に泣いて居た。

姉は學校から歸ると、直ぐ夏本子爵の邸へと云つて出たのだッたが、其の子爵家で何事が有つたか、それとも他に寄道をしての出來事か、推測が付かねば、お波は只だ小さい胸を痛める許りであッた。

その中姉は机に泣伏して、久くは身動きもしない。お波も久く夫を視詰めて居た。何時まで經つても姉は其の儘で居るので、若しや睡つたのぢや無からうかと思つて、洋燈の下、書籍箱の斜に見える床の間に透して目を着けて居ると、肩から背中に掛けて黑い衣服の端が、時々歔泣の波を波打つのである。あゝ、未だ泣いて居る、まア何樣な悲しい事が出來たらう？　あれ、未だ泣いて居る……、とお波は身體の波打つ姉を視詰めて居たが、その中自分の眼瞼が重くなッて、睡つては濟まぬと思ひながらも、何時か前後も知らず睡つて了つたのであッた。

目を覺せば日は高く昇つて、姉は何時床に入つたか、すや／＼睡つて居る。お波は昨夜の事を想出して、姉の身に何樣な難儀の降掛つたか、今に目を覺して何樣な事を云ふか、また郷里へ歸れなどと云ひはしまいか、と案じて居る處に婢が入つて來て、最う遲くも成るから、姉樣に構はず、前に朝飯を食べては、と勸めたが、其の聲に夢を破られてか姉は目を開いた。

「姉樣、お目覺なの？」と傍へ寄つて顏を覗く。

「如何したら、風邪でも感いたか知ら？」と姉は臥ながら頭を掉つて云つた。

風邪と聞いて吃驚したが、それでも其の調子は昨夜と違つて溫和い語調なので、お波は胸の開ける樣に思つた。

「姉樣、偖う云へば、何だか顏色が惡くッてよ。」

「爾う？」とまだ頭を掉つて居る。
「頭痛するの？」
「少しね……。」
「ぢや、今日は臥て居たら？」
「なアに、是ん許しの事で……。」と云ひ樣、初野は急に床を蹴起きた。

（二）

「姉樣、如何して……、何故食べないの？」
「今朝は食べ度か無いから。」
「其樣なに不快いの？ 矢張し風邪を感いて？」
とお波は顏色を變へた。
「いゝえ、眞の輕微さ、何とも無いのよ……。其樣なに私の顏許し見てないで、速く食べてお了ひな。」
「だッて……。」
「何とも無いッてばねえ。」と初野は顏を顰めて見せ、「大變な相談が有るからね、ま、速く食べてお了ひ。」
「え、大變な相談？ 大變な相談て何？」
「ま、後で話すから。」
「御飯なんぞ食べないだッて。」
「其樣な分らない事が有るもんですか！」
「だッて、最う澤山よ。」お波は急に箸を投げて、姉の前に坐つたが、凝然と顏を眺めて、「姉樣、何樣な相談？ え。」
初野は言葉も無く、同じ樣に妹の眼の中を視詰めたが、深い溜息を吐くと共に、力なく首を垂れた。
「姉樣、如何したの？ 何樣な事が有るの？ 私、昨夜から氣に成ッて、如何したら可いと思つてたわ。姉樣、何樣な事が有るの？ 矢張し、昨日夏本樣に行つて？」
夏本樣と聞くや否や、初野は急に面を振上げた。而して衣服の襟を掻合せて、更めて妹に向直つたが、何か言出さうとして肩を竦めて、
「波ちやん、今朝は寒いかい？」
「いゝえ、暖かだわ。」
「爾う、如何したんだらう？」とまた肩を竦めたが、起上つて其處に懸つた羽織を着ようとして、「おや、濡れてるよ、如何したらう？」
「昨夜、雨に當つたからだらう、姉樣、歩いて歸つて？」
「おや、昨夜雨が降つて？」
「降つたわ、彼樣なに。姉樣、彼の雨を知ら無いこと？」お波は笑つた。
「氣が付かなかツたよ。ぢやア其故で……。」
子爵の暴行、夫人の暴言、それが口惜さに、歸路も何處を歸つたか、雨に降られたも知らずに居た。風邪を感いた樣な心持もそれ故であらう。
「姉樣、寒けりや褞袍でも出して上げようか？」
「爾うねえ、今日は九時から出ても可いんだから、出る迄あれを引被けて居ようか。」
お波は褞袍を出しながら、質に入れた綿入羽織でも有れば、と思つたが、姉の機嫌を測り兼ねて口には出さなかツた。
「あら、姉樣。」と背後から褞袍を被けようとしたお波は吃驚して、「此處を如何したの？ 傷が負いててよ。」
「え、何處に？」
「こら、此處。」と衿頸に徐と觸つて、「氣が注かなかツたの？」
「道理で、ひり〳〵爲ると思つたら。大きいかい？」と初野も徐と手を伸した。
「大きか無いけれど、外見ないわ。如何したの？」
「波ちやん、私はね、昨夜ね……、口惜い目に遇つたんだよ。」とはら〳〵と涙を落した。
「えッ、何處で……？」
妹と云つても未だ物心知らぬ少女に對つて、彼の夏本邸の奧の室で、危くも老子爵の爲

に終生拭ふ可からざる恥辱を受けんとした事、頸の傷も其の抵抗した際に負けたらしい事などは、如何に口惜いからとて口には出せぬので、只だ夫人に口穢く罵られ、夢中に歸る門の邊で、何かに引掻いた傷であらうと作言へて、

「だけれど、考へて見ればね、些とも他を怨む事は有りアしないのよ、依頼心を起した……他を頼らうとした此方が惡いんだから……。」と初野は眼を拭つて、「波ちやん、それで、お前に一つお願が有るんだがね。」

　お波は只だ姉の顔を眺めた。

「是は、姉樣が一生のお願だからね、何卒波ちやん、肯いてお吳れ、ね、一生に一度のお頼なんだから。」

「何なの？　其樣なに改まツて、私、姉樣の云ふ事なら、何だツて肯くわ。」

「本當に肯いてお吳れだらうね？」

「え、だけど、鄕里へ歸る事ぢや無くツて？」

「其樣な事ぢやない……。」と頭を掉つたが、如何にも云ひ出し難ねてゐる。

「ぢや何でも肯くわ、姉樣の傍に居る事なら何だツて。」

「いゝえ、姉樣と別れることよ、」と言ひ澁つたが、「波ちやん、お前ね、何卒奉公に出てお吳れな。」

　此う云ふや否や、姉の眼には淚が溢れた。

妹は左程に驚いた樣子も無く、

「奉公て、何處に奉公するの？」

「何處と云つて的は無いけれど、お前が承知して吳れれば、直ぐにも桂庵に賴まうと思つてるんだよ。」

「而して、私を奉公に出して、姉樣は何うするの。」

「姉樣かい……？　波ちやん、其處だよ、お前さんにお願するのは……。」と姉は襟を搔合はせて、「齡の行かないお前を奉公に出して、私が此樣な事を云ツちや濟まないけれどね、何卒ね、姉樣には專門に勉强爲してお吳れな……。」と、其の昨夜から考へて置いた、妹を奉公に出す譯を說出した。

　未だ頑是の無い、纖弱いお波を奉公に出すのは、身を斬らるゝ思ひであるが、二人が下宿して居ては金に窮して了ふし、自炊を遣つては、詰らぬ事に時間を費して、大切の卒業試驗を首尾好く濟ます程の勉强も出來ないのだ。若し卒業が出來なければ、姉妹二人の身は、茲に一生不幸の淵に陷つて、人に辱しめられ、人に笑はれて此の世を送らねばならぬ。忍びぬ事ながらお波を奉公に出して、自分のみが此の下宿に居る事ならば、有る物を金に換へても何うにか過して行ける。辛いと云つて卒業する迄のことである。卒業さへすれば、直ぐにも幾らかの給料の貰へる者に成れる、妹をも十分に修業させ得る、他の世話には成らず、恩にも着ず、二人は立派に獨立して行かれるのぢやないか。

「此う云ふ譯なんだから、何卒波ちやん、此の夏まで……七月迄辛抱してお吳れな、一生のお願だから、ね、波ちやん。」

「え。」とお波は輕く點頭いて、「私、奉公に行つてよ。」

「え、本當？　本當に行つてお吳れかい？」

「え、行つてよ。奉公だツて、何辛い事なんかあるもんか。」

「本當かい波ちやん、本當に、姉樣の賴を肯いてお吳れかい。」

「え。本當だわ。」

「だツて、過日、お婢どんの眞似なんか爲るのは厭だツて云つたぢや無いか。」

「彼はね、如彼云つてね、姉樣を止めなきや、姉樣の爲に成らないツて聽いたもんだから……お主婦から。」とお波は背後を見廻したが、「だか

ら、姉様の爲に成る事なら、私、何様な事でもするよ。」
「波ちゃん、貴女それ程まで私を思つてお呉れかい……。」
と姉が泣き出すと、お波も急に萎れたが、大きな涙をほろり／＼と落しながら、
「だけれど、何處へでも行くけれどね、私、屢々姉様に會へる様な……、餘り遠くない家に行きたいわ。」
「それは最う、波ちゃん……。」初野は口を利き得ぬ程である。

第十五　よわり氣

（一）

下婢のお兼が、客から借りた新聞を下に置いて、
「未だ早いけれど、お主婦も居ないし、最う掛らうか知ら？」
と柱時計を眺めて、夕飯の準備に立たうとした時、何時も身綺麗にして居る櫻井恭一が、何か忙しさうに入つて來た。
「あら、お主婦さん御宅に上るんだッて出ましたが、お會ひなりませんでしたか？」
「爾うか？」と恭一は身を反らしたが、「何時頃？」
「お午の御飯が濟んで、間も無くでございますよ。」
「爾うか。おや、歸つた處で居るか居ないか分らない。入つて待つてると仕よう。可いだらう？」
「宜うございますとも、何卒お上んなすッて。」
とお兼が他の明いてる座敷に案内仕ようとすると、恭一は此方で可いから、と茶の室に入つて、
「まア此處にお居で、少し訊き度いことが有る……。」と恭一はお兼を前に坐らせ、見て居る前で蟇口から銀貨を紙に捻り、辭退するのを無理に握らせ、「時に、萩原様は……。何だい。厭に笑やがッて。」
「あら、笑や致しませんよ。」
「その通り笑つてるぢや無いか、俺が萩原て云へば、何でも鼻の下を長くしてゐると思つて……、」と恭一も變に笑つて、「未だ學校から歸るまい？」
「はい、未だお歸りになりません。」
「波ちゃんが奉公に出たッてぢや無いか？」
「あら、何うして其事を？」
「天眼通は得ざれどもさ……、知つてるよ。何處だい、其の家は？」
「御奉公に上つたお家でございますか？　能くも存じませんけれど、何でも、直き此の、東片町ださうでございますよ。」
「商人家か、勤人か？」
「何ですか、其處の旦那は、御本を著く方だとか云ふ事ですよ……。あの、勝手の事は奥様が爲すッてね、お波ちゃんは、お子守とお使を爲さるんでございますッて。」
「爾うか、彼様な子供を、可哀想だなア！」
「可哀想も可哀想ですけれど、お波ちゃんは平氣で參りましたよ。彼で、此う申しちゃ濟みませんけれど、隨分意地の張つた質でございますねえ。」
「それは、彼の兄に虐められて育つたからさ。併し可哀想だ、彼様な小さい身體で奉公に出るなんて、實に可哀想だ。而して、萩原様は如何したんだ？」
「御勉強でございますよ、もう、學校から歸つて來らしッても、お机に向つた限り……、夜なぞは貴方、お寢みなさるんだかなさらないんだか。」
「其様な事は有るまい……、梟ぢやあるまい、

し。」
「だッて、私共が寢む時は、何時も御勉強をして居らッしやいますし、朝起きにも、最う整然とお机に對つて居らッしやいますもの。」
「それで、能く身體を害くしないなア。」
「いゝえ、此の頃は、何でも餘程お害い樣でございますよ。御飯も碌に食らないし、お顏色だッて、不斷の樣ぢやございませんもの。」
「何處が惡いだらう？」
「何處がお惡いんだか、私共には解りませんけれど……、何でも、餘程我慢して居らッしやる樣でございますよ……。おや誰か。」とお兼は障子を明けて、「お、歸つて來らッしやいました、お主婦が。」

（二）

主婦が態々殿井の家を訪ねたのは、お波の奉公に出た事を知らせる外に、過日から買つて與へた物や小遣錢やを、悉くお波から突返したので、それを屆ける爲であッた。
「最う最う、萩原樣姉妹に關係ふ事は眞平です。」と主婦は額を顰めて、殿井に渡す可き物を前に並べた。
殿井は、喧嘩でもした樣な主婦の話を笑ひながら聽いて居たが、
「何故？ 酷く嫌つたもんぢやないか。」
「だッて、彼樣な强情な、彼樣な意地張な、愛想氣の無い人ッて在るもんぢやありません……。最う最う眞平、本當に眞平……。」
「それは、妹の方か？」
「妹も爾うですし、姉も爾うです。二人とも、揃に揃つた强情者なんですよ。如彼ぢや、彼の兄樣許し惡いた云へませんねえ、此方にも、それだけの事が有るから、學資を止められたり何かしたんですよ、必然爾うですよ。」
「ぢやお主婦は、奉公に出ることを止めて見たね？」
「止めた處ぢやありませんよ、口の酸ぱくなる程……。」
「爾うしたら、何う云ふんだ？」
「理窟も何も無いんですよ、あの、種々考へた上に爲る事だから、何卒止めないで下さいですッて、生意氣ぢやありませんか。だから私は、如何でも勝手に爲やがれと思ひましてね。」
「執せ奉公するなら、私の家へでも寄來せば可いんだ。」
「それも云はない事ぢやありません、種々と、貴方の御親切な事を話して聽かしたんですけれど、最う、人の云ふ事なんぞ、頭で耳に・入れませんもの、加之に、彼の波ちやんて子はまた、奉公て何程辛いか解らない癖に、何か、お芝居へでも行く樣にね、勇んで行くんですもの、私はもう、呆れッ了ひましたよ。」
「爾うか。併し可哀想だなア。」
「なに、可哀想な事あるもんですか、自分達が、好んで苦しむんですよ。好い氣味でさアね。」
「先刻お兼から聞いたが、何だか、病氣だとか云ふぢや無いか。」
「萩原樣ですか？ 病氣にも成りませうさ、彼樣な頑是無い者を奉公に出して、自分許し澄まして學校へ通ふなんて、妹の罰でも、碌な目に遭やしませんよ。」
「いや、一概に爾う許しも云へんよ。」と恭一は腕組をしたが、「而て、其の家は何て云ふ家だね、東片町の……？」
「奉公に上つた家ですか？ 何處だッて可いぢやありませんかね、放棄つてお置きなさいましよ。」
「いや、然うぢや無い。僕も少し考へた事が有る。何處だね、一寸は分らんかね。」
「いゝえ、直ぐ分りますけれど……。何なさるんです？ 最う、お構ひなさらないが宜うござ

んすよ。」
「でも、一寸調べてお呉れ。」
「左樣でございますか。」と主婦は如何にも氣の進まぬ顔をして、それを調べる爲か、初野の室へと起つた。
後に恭一は、何を思ふか切りに首を捻つて居たが、續いて自分も初野の室へと起つた。
「如何だ、分らんかね？」と室の中に入つた。
「確か、昨日葉書が參つた筈ですが……。」と主婦は机の抽匣を吟味して居る。
恭一は、葉書よりも一ツの來翰に目を留めて、
「おや、男の手紙が在るね。」と把上げるや否や直ぐ中を讀んだ。
夏本芳江とある表記を、恭一は男の名と誤つたのである。手紙は今朝あたり着いた物らしく、中には、過日から兩度まで謝罪つて遣したのに、初野からは何の音沙汰も無き事を嘆き、會つて面のあたりお詫が爲たいけれど、如何しても母は外出を許さず、百計盡きて房州に行つた兄に事情を打明け、一寸でも歸つて貰ふ樣に頼んで遣つた事、此の頃は家の中に云ふに云はれぬ悲しい事が起つて、相談する人も、力に成ツて呉れる人も無いので、獨で胸を痛めて居るなどと、心細い文句が長々と書連ねてある。

（三）

人通り淋しき東片町の唯ある小路を、水の滴る味噌漉を片手に、鼻緒の緩んだ日和下駄を小股驅りに急ぐのはお波である。髷は何日結つたのか、亂れたまゝの銀杏返、郷里を逃げた時の布子に紅い襷、何を働いた後やら、帶をば前垂の紐に縛つて、顔こそ美しい處もあれ、最う誰が目にも田舍出の下婢なのである。
「波ちやん……。」
我を呼ぶ聲に、お波はきよろ／＼四邊を見廻した。
「波ちやん、此處だよ。」
「あら、姉樣、また來たの？」
道を少し引込んで稻荷か何か小さな叢祠が在つて、其處の樹蔭に、手には何物一つ持たず、一寸戸外へ出たと云ふ風の姉の初野が起つて居る。
「何を買ひに行つたの？」
「これ。」とお波は、風呂敷を除けて味噌漉の中なる豆腐を見せ、「姉樣、昨日彼樣なにお約束したんぢやないの……。何か御用？」
「いゝえ、用は無いけれど……、一寸散歩に出た便次だからね、」と折れて居る妹の後襟を正しながら、「昨日、遲くなツて叱られやしなかツたかい？」
妹は只だ頭を掉つて、初野の顔を見上げて居たが、
「姉樣、お醫師樣に診て貰つて？」
「なアに、最うお醫師に掛る程の事は無いからね。」
「あら、何故診て貰はないの？　姉樣は可けない、明日は是非診て貰ふなんて、彼樣なに私を騙して置いて……。」と強請む樣に顔を顰める。
「何ですねえ波ちやん、其樣な、」と妹の聲を制して、「分らない人だよ。」
「ぢや、何故診て貰はないの？」
「診せる程の事が無いからぢやありませんか。今朝から氣分も快いし、御飯も食べられるし、最う、平素と變つた處は無いもの……。」
「だツて、昨日よか、また顔色が惡いわ。」
「お天氣の故よ、此樣なに曇つてるんですもの……。」
「否うかしら、」とお波は氣遣はし相な眼をして、「ぢや、牛乳は最う取つてて？」
「牛乳もね、葉書を出すのを忘れてね……。」

「それ、姉樣はそれだもの………。」

「いゝえ、全く忘れたんだよ。」

「姉樣は可けない、些とも私の云ふ事なぞ聽いて呉れないんだから………。」

「何ですよ波ちやん、其樣な事で、氣の弱い………、ま、眼をお拭きなさいよ。」

「だッて私は………。」

「お拭きなさいッたら、姉樣の事は姉樣が好い樣に爲るからね、貴女なぞ、何も心配する事はありませんよ。」と叱る樣に云つたが、「夫より、此樣な事をしてて叱られやしないかい？　さ、其處まで送つて上げよう。」

お波は姉と列んで歩きながら、

「叱られたッて構やしない。」

「其樣な分らない事を云つて。」

「だッて、姉樣が病氣だと思ふと、私、氣に懸つて氣に懸つて、一時も奉公なぞして居られないんだもの。」

「私の病氣は、最う何とも無いと云へばね。少し風邪を冒いた處へ、胃を害くした許しなんだもの………、是許しの事で、醫師も藥も要るものかね、最う二三日も氣を注けりや、直ぐ恢復するな分つてるもの………。おや、最う貴女の前まで來てよ。」と初野は立止つて、「疾くお出でなさいよ、叱られると可けないからさ………。」

その家と云ふのは、生垣の露路の奧に、二軒建の長屋で、入口は潛格子、戸袋には牛乳の空罐が光り、標札の代りに名刺を小さく、物乾竿に濕布を懸けた庭も眺めらるゝ。

「姉樣、ぢやアね、牛乳だけは、忘れないで飲んでお呉れね。」とお波は、別れんとしては尙ほ立去り難ねて居る。

「えゝ、飲みますよ。」と姉は幾度も點頭いて、「姉樣の事は宜いから、善く氣を注けてね、身體を害くしない樣にしてお呉れよ、ね、風邪を冒かない樣にね。」

「私なんぞ、」とお波は笑つて、「而してね、牛乳のお錢はね、私から出すことにね………。」

「牛乳の代を？　其樣な事、貴女なんぞ關係しなくとも可いよ。」

「だッて、お錢が有るからさ………。」

「彼金は藏つて置いて、波ちやんのね、小遣錢になさい。」

「私ね、小遣錢なんぞ要らないわ。」

「要らないッて………、私も要らないんだもの。而して、牛乳を取つた處で、月末拂なんだもの………。ま、其樣な事は可いから、速くお歸りよ………。姉樣は最う歸りますよ。」

「え。」

「もう今度は、暫く來ないよ、可いかい？」

「あ、可いよ。」とお波は點頭いて、「此樣なに屢々來たら、勉强が出來まいと思つてね、私それが心配だ。」

「だから、最う今度は來ないよ。久々休んでたもんだから、學校は大變遲れたし、試驗も追々近付いて來るし、何樣なに勉强しても間に合やしないんだもの、もう、來たくも來られないよ。」

「爾う？　私なら、何日までも辛抱するわ。」とお波は凝然と姉を見詰めて、「私の事は宜いからね、姉樣、本當に身體を害くし無い樣にね。」

「此樣な事で時間を潰した日にや、波ちやんを奉公に出した效が無いからね、最う今度は、決して此樣なに來やしないよ。次の日曜まで顏を見ないよ。可いかい？」

「あゝ。」と點頭いたが、眼は一杯の涙である。

初野は夫を見ぬ風をして、

「波ちやん、私もう歸るよ。貴女も速くお入りよ。」

「えゝ。」

初野は、また話をしては際限が無いと思つて、其のまゝ踵を反した。未だ日沒に間が有る樣だ

が、點燈夫は忙しく駈けて通る。小半町も來て、道を曲らうとした時、偶と背後を見返ると、お波は未だ垣の前に起つて居る。速く家へお入り、と手を擧げて指圖をすると、淋しく笑ひながら點頭いて、此方を向きながら露路の中に消えた。

「あゝ、可哀想に！」初野は思はず口に出したが、涙は頰を傳はツた。

此樣な哀しい想をするのも、獨立して世に立つだけの才能が無いからである。金が無いからである。幾ら咲いた處で、卒業試驗に優れた成績を得つて、優れた地位を得る外には、方法も手段も無いのである。何の、卒業と云つても此の六月、七月になれば妹の身をも救はれるのだ、たゞそれ迄の辛抱なのだ！

「だけども、私は此うして居るから辛抱も仕易いけれど……、人の家に奉公して……、彼樣なに烈しく使はれて……。」と考へて、初野はまた歩を停めたが、

「萩原樣ぢやありませんか。何方へお出でした？」

不意に言を掛けられて、我が前に立つた男を見ると、こはそも、彼の藤井恭一なのである。

何日も身綺麗にして居る恭一であるが、今日は其の中にも念を凝したらしく、眞新しい鼠縞の薄羅紗の背廣、紅革の半靴、チェリーの杖を氣取つて小脇に挾み、帽子を脫げば何を塗つたのやら、黑く艶々する髮は、往來を流るゝ風に香を送る。

初野は思ひ掛けぬ處で思ひ掛けぬ人に逢つたので、はツとは思つたが豈夫に駈出す譯にも行かず、胸を轟かしながら、何やら我にも解らぬ低聲の挨拶をした。

「好い處で逢ひました、實は是から、お妹樣の奉公してる家へ行かうと思つて……。」と恭一も顏を赧くしたが、常と違つて何處か思込んだ語調。

「はア、左樣でございましたか。」初野には何の事やら少しも解らぬので。

「いや、藪から棒に此う云つてもお解りになりますまい。實は、此の事に關しては、一應貴女にも御相談したいと思つて居ましたが……ね、」と恭一は道の前後を見廻して、「何處へお出でです、散歩ですか？」

「はあ、一寸。」

「もうお歸りですか？ ぢやア、道中でも何ですから、」と徐に初野と歩を揃へて歩き出す。

初野は意ならずも歩を轉したが、何うして恭一と別れたものかと切りに氣を揉んで居る。

まだ日も暮れ切らず、裏通とは云へ人もちらほら通る道中で、豈夫戯らしい事など云ひもしまいが、此樣な處を、知つた人に見られたら何んと仕よう。それのみで無い、此うして連立つて下宿に歸つたなら、主婦は元から恭一贔屓の人、何樣な話を提出されて、また何樣な事を爲れるも知れぬ。夫を思へば、中々氣を弱く持つ所ではない。

「相談と云つて、別に難かしい事ぢや有りませんから……。」恭一は、四五間も來ると突然口を開つた、「此處でお話しても可いのです、實は、妹樣の奉公に出た事を聞いて、私は非常に感動されましてね、是非とも救つて遣らなきや濟まない……此う云ふ氣になりましてね。」

此う云つて恭一は初野の顏色を覗つたが、初野は矢張り俯向いたまゝ默つて歩いて居る。

「突然此う云つたら、貴女には變に聞えるでせう……、また、幾ら變に思はれても途方が無いです。貴女に對しては最う辨解の辭も無いのだから……、實は、此樣な事でも無ければ、貴女とは一生顏は合せまい、いや、合せないいちや無い、合されない、貴女を見たら逃出さなきやな

らん、」と思つて居た位です……、」と云つて久く首を垂れたが、また、「けれども、今度許しは詮方が無い、貴女に相談をしなきや……、私の勝手に成らん事だから、鐵面皮の様だが、何うも詮方がありません……。」

それでも初野は何とも云はない。

「勿論、妹様を救ふと云つた所で、何も貴女に關係した事ぢや無い、妹様を救うて貴女に謝罪ると云ふでも無きや、また、私の心をお目に掛けようと云ふのでも無い。罪は罪でさア、惡まれるなら甘んじて惡しみを被ます、此様な者でも、私は然う卑劣では無い心算だ……、併し、貴女には何う思はれても構はないが……それは諦めて了つたが、妹様は可哀想だ、辛と十三や其邊で、學問を仕ようと思つて東京へ來た者が、反對に奉公に出されるなんて、考へると實に憫然ぢやありませんか、夫も通常の家なら未だ可い、彼の金村て云ふ男は……私の國の者だが、彼は有名な肺病患者ですよ。」

「まア、」と初野は吃驚して、「肺病……？」

「肺病も肺病、最う酷い結核で……。」

「爾うですか……。」初野は顏色を變へた。

初野が心痛の様子を看て取ると、恭一は益々調子付いて、其のお波が奉公した金村と云ふ男は、肺病の爲に大學をも中途で退いた事から、今でも始終醫師に掛つて居る事、病性が惡いと云ふ事、最早三年とは保つまいと噂さるゝ事などを述べて、

「一寸傍へ寄つても、感染の恐ある位です、況して其の家に奉公して居ちや、食物から傳染るか、器物から傳染るか、案じて見りや、一刻だッて如彼しちや置け無いぢやありませんか……！」

「爾うですか？」と初野は溜息を吐いた。

恭一から云はれる迄も無く、最う一刻も其様な家へ奉公に出して置けぬのだ。けれども、今更狼狽したところで仕様が無い、恭一の言に譃は無からうが、兎も角お波に會つて様子を聽いた上に、暇を取るとも何うとも決めるより外は無い。

「それで、」と恭一は初野の顏を覗く様にして、「貴女は、入らざるお世話とも思ひませうが、夫には少し仔細の有る事で……後で島井の主婦から聽いて下されば分りますが、私も、少し考へた事が有るのですが、何卒、妹様の一身は、暫く私に一任して下さらんですか？」

初野は答辭に窮した。勿論好意からの相談で有らうが、餘り突然で、何と云つて可いものやら分らぬ。奉公なぞするより……、姉の手に在るより……、妹の爲には其の方が良いかも知れぬ……、暫く爾うして居れば私だッて……、けれども此の島井の人格……、日外のやうな事が……、矢張り警戒しなければ可けない、加之に、妹も一旦決心して奉公にまで出たものを……、私から此様な弱い氣を出しては……、然うだ、もう依賴心を起すんぢや無かッた。

「可けませんか、」恭一はまた答を促した、「自分から此様な事を言出す位だから、決して惡い様にはしない心算ですが、何うです、任しちや下さらんですか？」

「は、孰れ……、」と初野は途切途切に云つた、「また考へまして。」

「無論、御考へなすツてからですが、併し、妹様の爲には、一刻も速い方が可いぢやありませんか？」

「は、それは最う……。」

「矢張り、私には信用が置けないんですか？」

「いゝえ、其様な事は……。」

「貴女に排斥されるのは詮方が無いとして、妹様の事だけは任して下すツて可いでせう？」

「は、孰れ、妹にも談しまして……。夫に、私も考へて見ませんでは……。」

「や、成程、これは私が失禮でした。此様な

處でお談するんぢや無かッたが、餘り氣に懸るもんだからつい……。」と云ふ中、初野の足は下宿とは別の方角に向いたので、「此方が近いぢや無いですか？」
「は、私はあの、少し……。」
「何處かお寄りなさるのですか？」
「少し、お友達の家に……。」
「爾うですか……、」恭一は逃げられると思つたか、見る間に不快の顏色を浮べた。
けれども恭一は、餘り迂遠でも無いから、
などと獨語して、初野と同じ路を半町も來ると、直ぐ鼻先の横町から、賑かな話聲と共に、湯歸りと見える二人の女學生がひよッこり現はれた。
「貴方、失禮します、」初野は恭一に會釋して、直く其の女學生に追付き、「三浦樣？」
「あら、まア萩原樣。」吃驚したと見えて、ほゝゝと笑出す。
「何方へ、御散歩？」また一人の女學生が初野を見上げ見下す。
「え、一寸貴女がたの處へ。」
と云つてる時、直ぐ傍を通る恭一は、
「それでは失禮します。」と帽子を脱つて初野に會釋した。
二人の女學生は、目を圓くして恭一を睇めたが、三浦は低聲で、
「貴女知つてる方？　ちよいと美い男ねえ！」
「え……」一人も背後で感嘆して、「彼の方、何者なの？」
初野は紅くなッた。三浦は遠慮もなく、
「萩原樣も油斷がならないよ、私等に見られたもんだから、ほゝゝゝ。」
「あら、爾うぢや無いんですよ。」
「いゝえ、最う證左が擧つたんだもの、ねえ古賀樣？」
「爾うですとも、家へ入つて、これから白狀させませう。さ、萩原樣……」と手を捉る。
「だけれど、全く美男だわねえ！」
「萩原樣は辣腕家だよ！」

（四）

寒暖定まらぬ此の頃の氣候とは云へ、昨日は火鉢の傍を離れ難ねたが、今日はまた夕方から急に暖かに、只だ坐つて居ても發汗む程である。加之、顏に近き洋燈の熱で、初野の顏は薄く紅味を帶び、眼は蕩ける樣な光を湛へて居る。
「あゝ氣に懸る、此樣な事なら、寧そ家へ入つて行けば宜かッた……。」と溜息と共に獨語した。
先刻から机に對つては居るが、妹の事が心配で、書は何時までも同じ頁のみ開かれて居るのである。妹を奉公に出して最う十日にもなるが、其の間に何程も勉强は進みはしない。學校へ往く時も、迂廻りして、態々其の前を通つて見、歸りにもそれと無く樣子を見て、それでも足らずに散歩する風をして時々行つて見る。學校では左程でも無いが、下宿に歸つて机に對ふと、勉强する書の中から妹がひよいと顏を出す、と續いて可哀想な事、心配な事が、夫から夫と泉の樣に湧く、夕立の雲の樣に擴がる。
此樣な弱い氣で何が出來よう、と我と我が心を叱つて、自ら勵して、さて更めて勉强に取掛らうとするが、何うも思ふ樣に其の妄想が引込まない、それを無理に引込ませようとする、いや、引込ませまいと強情を張る……で、肝心の時間は、其の押合ひ喧嘩の中に經つて了ふ。
併し是も初めの事で、その中には慣れても來よう、氣懸りも薄らいで行かう、從つて勉强も出來よう、と初野は、只管その時の來るのを俟つて居たが、反對に、其家の主人が怖る可き神經病患者と云ふ心痛の種がまた一つ殖えたので

ある。
「あゝ、此う云ふ事と知つたら、初めから自炊でもした方が宜かッた……。」
久く考へて居ると、丁度其處へ主婦が入つて來て、
「最う九時に成りますが、御飯は如何でございます？」
「爾うですねえ、未だ欲しくはありませんの……。」と主婦の方を見返ると、
「でも、お毒ですよ、一椀召上りましよ。」
「爾うですねえ、」と氣の毒相に、「今夜は止しませうよ。」
主婦は流石に心配な顏をして、此の頃の初野の食の進まぬ事から、何處か惡いかと尋ね、醫師に掛る事など懇に勸めて、
「それでは、後刻に何か召上り度い樣だッたら、御遠慮なく爾う仰有いましよ。」
「有難う、何卒。」と出て行く主婦に禮を云ふと、
「おや、まアお珍らしい……。」と主婦は障子の外へ出るや否や此う云つて、また內を振り返り、「萩原樣、お波ちやんがお來でですよ。」
「えッ。」と初野は夢中に起つたが、何物にも躓かねにばッたり轉んだ。
「姉樣、」と急々入つて來たのはお波である。
「波ちやん、彼の葉書見て？」と初野は起上つて足を揉んで居る。
「いゝえ、葉書など來やしないわ。」と云つたが、初めて姉の樣子に氣が付き、「姉樣、何うしたの。」
「餘り坐つてたもんだからね……。」と初野は漸と坐り正つて、「葉書の付かない中……？ ぢや何うして來たの？」
「奧樣がね、行つてお出でッてね、お暇を下すッたの……。」
とお波は話したが、それは今日夕方に、妹に用有り氣な初野の姿が近所に見えた處から、親切にも腕車賃まで心附けて、此うして寄來して吳れたと云ふのである。
「奧樣が？」と初野は顏色を紅くして、「まア、何うして私を知つてらしッたらう？」
「あのね、御用聽きに來る八百屋がね、姉樣のね、往つたり來たりしてる處を見たんだッて。」
「ぢやア、其の八百屋が私を……？」
「え、知つててよ、私とね、姉樣と二人でね、屢く話をしてる處を見るんだッて。」
妹を桂庵に賴む時には、我が姓名も、女學生であることも、決して先方には洩さぬ樣にと念を押し、また妹に逢ひに行く時も、家の人達は元より、近所の目にも觸れぬやうにと氣を配つて居た。世間の耳には何と聞えて居るか知らぬが、帝國女子學院の學生萩原初野と云へば、新聞を見る程の人で、知らぬ者の無い樣に思はれる。然るに今その初野が一人の妹を下婢奉公に出して居ると知れては、名譽も評判も、地に落ちて了つた樣な感がするのだ。
「ぢやア、彼の近所では、最う皆な私を知つてるんだわねえ？ 何樣な話が有つて？」
「話ッて……？」
「奧樣がさ、何かお話が有つたら？ 必然、私の事を問いたんだらう？」
「いゝえ、別に問きやしない。」
「何にも……？」
「え、」とお波は點頭いたが莞爾して、「あのね、八百屋がね、姉樣は、非常な別嬪だッて、廣い東京にも、彼樣な別嬪は二人とは無いッて……、奧樣に然う云つてたよ。私嬉しかッたわ。」
「何ですねえ波ちやん。」と紅くなッた。
「あら、本當よ。本當に爾う云つててよ。」
「外には、何も話が無かッたの？」
「え、何にも……。」と云つたが、凝然と姉を眺めて、「だけど、私少し、姉樣に……。」
初野は、我が噂の出なかッたと聞いて、さて

は其の奥樣と云ふは、女學生とか女子教育とか云ふ事に意を向けたことの無い人と見える、併し、其樣な人でまア好かッた、若し根掘り葉掘り問かれた日には、積んだ恥辱を曝さなければならなかッた、と胸を撫下したが、妹が今しも半ば口に出して、言難さうに默つた事をば格別氣にも留めなかッた。

久くしてお波は、何か考へて居るらしい姉に、

「姉樣、而して姉樣の御用は？」

「あ、用かい……、それはね、ま熟くお前に尋かなきや分らないけれどね、」と妹に向正つたが、「おや、何だい、其の持つて來た物は？」

「あ、忘れちやッた、此品をね……。」とお波は手巾から竹の皮包の蒸菓子、奥樣から貰つた事實で買つて來たと云つて姉に出す。

「何故其樣な、無駄な事にお錢を費ふの？」

「だッて、久し振で、姉樣と食べたいと思つて……。」

初野は竹の皮を開いて、

「まア、此樣なに、ほゝゝゝ、」と耐らな相に笑つて、「此樣なに誰が食べるの？」

「だから、姉樣と二人で……。」

「何うして此れがお前……、」と又笑つたが、「お前は、此の頃お菓子なぞ食べないもんだから、此樣なに買つたらうけれど……。」

「いゝえ、珍らしか無いわ。旦那樣はね、お菓子がお好きなもんだからね、始終種々なのを購つて、私にも配けて下さるの。」

「あら、波ちやん、」と初野は吃驚して、「お前、旦那の食餘しを食べるのかい？」

「いゝえ、別に配けて下さるのよ。」

「菓子は何うでも、お肴や何か……御飯のお菜や何かは何うなの……？」

「何だッて食餘しなんぞ……。旦那樣は嚴ましいんだもの……。」

「嚴ましいッて云ふと？」

「病氣が傳染ッちや大變だッて……。旦那樣はね、肺病なのよ……。」

「おや、お前知つてるの？」

「えゝ、知つてる所ぢや無いわ。初めて上つた晩に、旦那樣に熟く命令かッたんだもの。だけど私、此樣な事を云つたら、姉樣がまた心配すると思つてね、それで、今まで默つてたの。」

初野は妹の顏を眺める許り、久くは言葉も出なかッた。お波はまた、

「姉樣は何うして知つてるの、旦那樣の病氣を？ 矢張し殿井樣から？」

「えッ、殿井樣から？ 殿井樣からッて、波ちやん……、」と思はず高くなッた聲を急に抑へて、「何うして、殿井樣から聞いたことが有つて？」

「だッて、今日、殿井樣が家へ來らしッたんだもの。」

「え、金村樣へ？」

「え、」と點頭いたが、變に姉の容樣を窺ふ樣な目をして、「私、その事で、姉樣に相談爲ようと思つて來たの。」

學校の歸途を東片町に廻つて、妹が奉公する金村の前を往復したのも、夕方に葉書を出して、明日一寸暇を貰つて來い、と云つて遣つたのも、主人の病氣を尋ねる爲め、また身の處置を相談する爲であッた。それを反對に妹から話出され、尚ほ殿井の事で相談したい事がある、と仔細有り氣な言に、初野は只だ妹の顏を視まもるのみであッたが、漸くの事で、

「殿井樣の事で相談て、何を？」

「あのね……。」と云つて語調を更へ、「姉樣、叱ッちや厭よ。」

「叱りやしないよ。何樣な事？」と云つても考へて居るので、「ぢやア、殿井樣が世話して上げると云ふから、殿井樣の世話に成り度い……、嘸うだらう？」

「いゝえ、私の事ぢや無い、姉様の事なの：：。」と、お波は到頭語り出したが、主人の金村と恭一とは同郷との事で、病氣見舞を兼て遊びに來たのであるが、歸る時にお波を人無き一室に呼んで、主人は恐る可き肺病患者である、一時も速く此家を出て、我が家へ來るか、左なくば姉の下宿に歸る樣にせよ、今後の學資は私が續けて遣らう、奉公など云ふ馬鹿な事は斷然止したが宜い、と說き勸めたのである。けれどもお波の意は少しも動かなかッた。姉は實に血を吐くの思をして私を奉公に出したのだ、私はまた何樣な辛い業に遇はうとも、姉の卒業までは凝然と辛抱して居ねば濟まぬのだ、況して病氣などは傳染らぬ樣に氣を着けて下さるし、奧樣は有情くして下さるし、奉公と云つても兄や嫂に使はれて居るより何程樂だか知れぬ位である、幾ら學資が貰へればとて、一旦誓つた言を破つて、姉の厭がる事をして、大切の勉强を妨げてなるものかと、恭一の勸をば肯かなかッた。

自分が奉公から退く事は肯かなかッたが、左程まで私を不便に思うて吳れるなら、學資に窮して居る姉を補助しては吳れまいか、と賴んだのである。而ると恭一は、初野が其の意なら、無論如何でもして遣らうと云ふ。お波は、姉には私から勸めるから、それでは何卒賴む、是非賴むと繰返して願つたと云ふのである。

「後で：：、卒業してからお返しすれば可いんだもの、夏まで殿井樣に賴めば可いぢや無いの：：、」と怖々姉を見ながら、「爾うすれば、衣服だッて賣らないでも濟むんだし。」

姉は難かしいと云ふよりは寧ろ沈んだ顏をして、久くは瞬きもせずに居たが、

「いゝえ、それは可けません、」と力無く云つた、「日外も聽かしたぢや無いか、依賴心を起しちや可けない、獨立して自分の力で：：、困難の間を切拔けなきや可けないッて：：。私は何樣な事が有つても、例ひ机に對つたまゝ餓死仕ようと：：其樣な事も無からうけれど：：若し有つても、決して其樣な、人の世話なんぞに成るまいと決めて居るんだもの、況して彼樣な：：、彼樣な殿井樣の如な人に誰が：：。」

「否え、姉樣然うで無いよ、殿井樣はね、彼樣でね、大變に優い方ですッて。」

「彼の男が？　誰が然う云ふの？」

「家の旦那樣が：：。」

殿井が歸つてから出た主人の話で、彼は財產家に生れたのと、良い友達が無いとで、今日の如にして居るが、畫工としては天才で、此の上に研究の效を積まば、恐らく史上に名を遺す大家とも成るであらう、速く確とした妻でも有たせて、品行を愼む如にさせて、眞面目な美術家として遣りたいが、あゝ惜いものだ、と嘆息して話して居たと云ふのである。

「あの殿井樣が：：？」初野は妹の言を疑ふ如く、「其樣な優い男？」

「優いんだッて！　あのね、國の片端位は賣つてもね、如彼いふ優い技術の有る人は、何處までも物にさせ度いもんですッて、旦那樣は爾う云つてよ。あの、千年も萬年も經つた將來はね、明治の日本人のね、優いと云ふ事を見せるには、軍艦でも、國會でも無いんだッて：：、あの、一枚の繪の方が、百萬の兵隊より名譽になるんだッて：：。」

「まア、それ程彼の殿井樣が：：？」と初野は息を呑んだが、久く經つて、「私は、爾うた知らないもんだからね：：。」

お波が奉公する金村某と云ふのは、一種の社會評論家として、新聞雜誌の間に多少勢力の有る男で、初野は豫てから其の名も知つて居たし、其の筆に作つた文章も讀んで、その論旨に敬服したこともある。然るに今、其の敬服し

た男の口に上つた殿井の人物評を聽けば、自分の觀たとは殆ど別人の如く勝れた人物であるのだ。

　籲つて考ふれば、最初入院料を貸して吳れた前後の始末、妹を救はんとする義俠心、素人目に能くは判らぬが美しい數多の油繪、沈着いた品の有る態度……、成程通常の人と異なる所が無いでもない。それを、如何に眼識が無いとて、彼樣なに蔑視んで、彼樣なに恥辱を與へて……、と過去の事を思出した初野は思はずも赤面した。

「姉樣、私ね、殿井樣の樣な人なら、世話に成ッたところで、迷惑を掛けるやうな事は無いと思ふよ。」と姉の顏色を見ながら云ふ。

「爾う……。」と考へながら、「爾うねえ、無論其樣な事は無いともねえ……。」

「おやア、卒業する迄お金を借りて、他の事なぞ氣に懸けないで……、一生懸命に勉強した方が德ぢや無いの？　私なら爾う思ふわ。」

「夫は爾うに違ひないけれどね、だけれど……、今更其樣な事をねえ……。」と矢張り何事か考へて居る。

「何故？　だッて、殿井樣はね、姉樣が勵むて云へば、喜んで出して下さるよ。」

「えッ？」と初野は赧くなッて、「何か、其樣な事を云つて？」

「然。あのね、姉樣の樣な人をね、金で苦しめるのは遺憾な事だッて。卒業試驗は、世間に出る價値の極まる試驗なんだから、何卒、勉強の十分に出來る樣にして遣つてね、世間に名を揚げる人にしたいんだッて……。爾う云つてよ。」

　初野は耳を傾けて居たが、深く溜息を吐いて、

「爾うかい！」

「だから、殿井さんの云ふ通り、お金を借りた方が好いぢや無いの、え、姉樣……？」

　初野は答をせぬ。

「可けないの？　其の方が德ぢや無いの？　物だッて賣らないでも濟むんだし……、可けないの？」

　初野はそれでも默つて居たが、急に强く頭を掉つて、

「あ、もう少しで私、下らない心を起す處だッた！」と自分を戒める樣に云つて、「波ちやん、其樣な話は最う止さうよ。過日から云ふ通りさ、何處までも獨立して、斃るゝ迄も私は遣遂げる心算だからね、最う決して、氣を揉くやうな事は云つてお吳れで無い、ね、最う私の心は動かないんだから、最う何樣な事が有つても動搖なんかしないんだから……。」

「だッて姉樣……。」

「いゝえ、最う決して依賴心は起さない。加之に、今になッて殿井樣へ其樣な事が……。」と云ひ澱んで、只だ頭を掉るのである。

「賴まれ無いッて云ふの？　何故？」

「何故でも。其樣な事は貴女の知らない事なのよ……。」と妹の口を制して、「だけれど、爾う云ふ優い男ならば……、無論、私はお世話になんぞ成る氣は無いけど、だけど、波ちやんの學資だけは、願つて見ようかとも思ふの……。」

「私の學資……？」

「全く、奉公なんぞしてるよりは、一日も速く學校に通つた方が可いんだし、また、私と違つて、波ちやんの事となれば、願つて願へ無いことも無いんだから……。」

　而るとお波は、小さき胸に何を思ふか久しく考へて居たが、

「姉樣、私もね、姉樣の卒業する迄は辛抱するわ。だッて、姉樣の勉强に較べれば、私の奉公なんぞ、何でも無いもの。」

「だがね、もし其樣な病氣なぞ傳染ッちや大變だから……。」

「いゝえ、傳染りアしない、その事は姉様、大丈夫よ……。」とお波は、主家に於ける消毒法の嚴重な事などを述べて、「加之に、今後毎夜、奥様から書を教へて戴く事に成ツてるし、私は最う、彼の家なら、何日までも奉公して居たいと思ふ位だもの。」

「奥様から？　ぢや、奥様は學問の有る方？」

「有る處ぢや無いわ、奥様は大變な學者よ……。あら、私、未だ姉様に話さなかツたかねえ？」

「奥様の事かい？　聴かないよ。大變な學者ツて、何うして波ちやんに夫が……？」

「奥様はね、姉様の學校を卒業した人よ……。」とお波は、主家の座敷に掛ツてゐる卒業生の寫眞を見た事から、奥様の學歴……即ち女子學院第三回の卒業生で、席順も二人目で、優等で、賞與さへ貰つた事など、其時奥様に聴いたその學歴を落も無く語り、「而してね、横文字の本なんか、夥多有つて居らッしやるのよ。」

「其樣なに優る人で、何うしてまア……。」初野は左程の成績で女子學院を卒業したならば、猶と堂々たる生活をして居さうなものを、と訝つたのである。

「奥様許しぢや無いの、旦那様も爾う仰有るの……。」と急に何か想出した樣に云ふ。

「何を？」初野は考へに俯向いた面を上げ、「旦那様が何を？」

「夜間は勉強しろッて。だから私は、姉様の卒業する迄はね、彼處に御奉公して、奥様に教へて戴く心算なの。」

「爾う？　夫は爾らして辛抱して呉れれば、最う夫に越した事は無いけれどね。」

「辛抱て姉様　私は、些とも辛いた思はないのよ。只だね、始終姉様の事許し氣に懸つてね、昨夜なんかも、何時までも何時までもね……。」

初野は態と元氣好く、

「なに、私の事なんぞ氣に懸けることがあるもんですか、此の通り、氣儘にして居られるんだし……、」と竊と目を拭ひ、「ぢやア波ちやん、卒業と云つても長い事ぢやないんだし、暫く此儘、お互に辛抱爲ようよねえ。」

「え、私はもう……。」

「ぢやア爾う決めよう、今後はもう、決して弱い氣なんぞ出しッこなしよ……、おや、何時だらう？」と折しも響く時の鐘に耳を澄ましたが、机から懐中時計を出して、「波ちやん、最う十時よ。さア、お歸りお歸り……。腕車を頼まなきや可けないねえ。」

「なアに、腕車なんか。」

「いゝえ、可けない……。」

初野は下婢に頼んで腕車を呼びに遣つた。

「姉様、これね、私要らないから、姉様に置いて行かう。」と毛絲の錢入から、銀貨を取出して姉の机に載せた。

「又ですか波ちやん、其錢は、お前が持つてお居でツてばね……。いゝえ、要らない事は無い、不時に何樣な事が有るか、まア藏つて置きなさい。」と叱るやうに藏はせる。

「ぢや、姉様お錢を有つてて？」

「有つてますとも。」

「何か、また賣つて？」と心配の顏色。

「いゝえ、」と姉は笑つて見せ、「其樣な事など、氣に懸けないでも可いのよ。ま、お菓子でもお食べな。」

「私も澤山、姉様に置いてくわ。」

「私だツて二つも食べたんだもの。ぢや、半分持つてお行でな、半分はお母様に遣らう……。」と紙に包んで妹に持たせ、「波ちやん、今後は、私も勉強しなきや可けないから、最う暫く會はないよ。」

「え。」

「能く奥様の云ふ事を聴くんですよ。」

「え。」

「泣いてるの？　何うしたの？」

「何うもしない……。」と目を拭つてる。

「だツて、其の通り……。」

と云ふ處に、下婢は腕車を知らせて來た。

「姉樣、勉强も大事だけれどね、餘り勉强して、何卒身體を惡くしない樣にね。私ならね、寧その事、もう卒業なんか何うでも、二人一緒に居てね、而して、仲好く暮せば、私はそれで可いと思ふけれど……。」

「また其樣な下らない事を、何ですよ波ちやん。」と姉は儼然となツて、「貴女は、兄樣に云はれた事を最う忘れましたね？」

「それは忘れないけれど。」

「阿母樣を、彼樣な兄樣に任して置いて、貴女は、それで安心して居られるの？」

「左うぢや無いけど……。」

「おや、其樣な下らない事は、思つたり云つたりしなきや可い！　さ、夫で解つたら、最うお歸り、何も泣く事なんぞ有りません。」

妹は無言で起つた。姉も續いて起たうとしたが、起ち難ねて足を擦つて居る。

「何うしたの？」

「脚が痲痺れて……、餘り長く坐つたからだらうよ。」

「何樣なの？　苦しいの？」と顏色を變へた。

「また、此事が氣に懸るの、ほゝゝ。」と笑ひながら初野はむツくり起つて見せ、「何でも無いんだよ、さ、お出でよ。」

姉妹は玄關に出た。主婦も出て來て顏を並べた。

「速くお乘んなさいな。寒か無いかい？」と姉が氣を付ける。

「お波ちやん、また遊びに來らツしやいよ。」

腕車の上では力の無い返辭。

頓て車夫は露路を駈出した。初野は格子に掴まツて、身動きもせずにその跡を眺めた。

靜な朧月夜である、腕車の漆の青く光つて、輕い風に吹かるゝ花の香は、何家の庭の梨か李か。

「あゝ、可哀想に！」腕車が見えなくなると、涙が一時にはら／＼と零れた。而ると、何うしたのか急に胸が惡くなツて、目が眩くなツて、最う起つて居る力も無く、我にもあらず其處に突伏したが、突伏すと同時に、咽喉を裂く許りに突上る嘔氣の苦み。

「あら、荻原樣、何うなすツたんです、荻原樣？」と下婢は駈けて來て引起さうとしたが、初野は身を倒まに煩悶いて、其處の土間へ何物かをしたゝか吐出した。

第十六　競爭

（一）

日曜の正午前のことで、主婦が臺所で客膳の準備をして居ると、吃驚する程に格子戸を手荒く明けて、

「賴む！」と宛然で士官樣が號令を掛ける如な聲である。

主婦は素早く手を拭いて、襷を脱しながら出て行くと、小倉の袴に紺飛白の袷、角帽を少し横に冠つた大學生……日外初野と共に殿井の宅に急ぐ途中で逢つたその大學生が、親の仇讐でも探す樣な洋杖を突いて、丈高き身を聳手と起つて居る。

「荻原樣居ますか？」

「は、御不在でございますが……。」

「居ない……？」と當惑したが、「歸る時間が分りませんか？」

「左樣でございますねえ、最うお歸りだらうと存じますが……、病院へ行らツしやいましたから。」

「病氣ですか……？　何時からです？」と愕然

とした樣子。
「過日から、お氣分が惡いやらでございましたが、病院へは、今日初めて行らツしやいまして。」
「俑うですか？」と重く點頭き、「ぢや歸つたられ、是非…、會つてお話しなきや成らん事が有るから、私の方へ來て呉れるか、私が此方へ來れば可いか、今日中に葉書を下さるやうに、と此う話して下さい。」
と云つて名刺を渡したが、主婦の「畏まりました。」を背後に聞いて、直にぷいと出て行く、と、廣からぬ露路を、丁度彼方から入つて來た殿井恭一とぱツたり出逢つた。
其の時の顏色、主婦からは無論分らぬが、暫と横目を光らした恭一の方は、行過ぎると振返つて、羽織を着ぬ肩幅のがツしりとした處から、泥の付いた薩摩下駄まで見上げ見下し、さて急し相に家へ入りかけて、行きなり其處に居る主婦へ、
「何だい彼は？　宛然で壯士の樣な大學生だねえ。」と云つて、主婦の持つて居る名刺を見、「何だ、法科大學生夏本東吾…。」
「旦那…、」と主婦は笑を耐へるやうな顏色で、「油斷大敵ですよ。」
「何が…？」
「萩原樣を訪ねて來らしたんですよ。」
「彼の大學生が？」と目を圓くして、「何だツて？　何の用で？」
「何の御用か存じませんけれど…、」と主婦は、今頼まれた葉書云々の事を告げて、「話の樣子ぢや、餘程親しい間のやうでございますもの。」
「何だらう、朋友か知ら？　それとも、怪しい關係の有る者か…？」
「いゝえ、萩原樣に限つて其樣な事はありませんけれど…。」主婦は、日外殿井の家へ行く途中に見掛けた、初野と大學生との事は、今に恭一へは祕して居たのである。
「併し、親しい間と云ふからは…？」と恭一は落着かぬ風で、「是まで、幾回も來た事が有るんだね？」
「いゝえ…、氣が付きませんでしたよ。」
「可笑いねえ。」
「ま、彼方へ來らツしやいましな。」
「爾うだ、立ツてた處が始まらない。」恭一は漸く家へ上つて、「時に、今日は居ないね？」
「萩原樣でございますか？　は、病院へ。」
「愈よ行つたね、到頭我を折つたと見えるね。」
と笑ひながら、主婦と共に茶の間に入る。

（二）

主婦は、彼の妹の歸つた後で僅か囁いた其の夜は、急に大病人の樣に成ツて、他に扶けられて辛と床に入つた程である事、それで居て翌朝起出ると主婦の諫も肯かず、大切の學科が有るからと强情を通して、眞蒼な顏で學校へ行つた事、餘程苦しかツたと見えて、常よりも早く歸つた事から、今朝は何う考へて我を折つたものか、到頭病院へ行つた事まで物語ると、その話を聽きながら切りと名刺を捻くツて居た恭一は、此の時はたと膝を打つて、
「爾うだ、今思出した、」と大聲で主婦を驚かし、「そら、此の間の書狀さ、萩原の机から出た…、彼狀にも、確か夏本と有つたぢや無いか？」
「左樣でございましたか？」
「夏本だツたよ、確かに夏本だ、而して彼の書狀には…。」と恭一は、朧氣に記憶して居る其の文字を思浮べて、房州に行つて居る兄を呼んで、何事か知らず、初野の怒を解いて貰ふと云ふ樣な事が書いてあツた、而て見れば先刻の大學生は其の兄で、妹の爲に謝罪に來たとしか思へぬと云ふ。

「ぢや、房州から態々歸つた處ですかねえ？」と主婦は訝る。

「併し、何樣な事だらうな？　女同士の衝突なら、高が知れたもんだが、房州から態々歸るなんて……。」

「ですけれど、彼で、他へお詫に來た處なんでせうか？　全然で、喧嘩でも賣りに來たとしきや思へないぢやありませんか。ほゝゝゝ。」

主婦は聲を出して笑つたが、恭一は中々莞爾ともしない。

「それは何樣な事件でも、兎に角、此の男と萩原たア、親しい關係に違ひ無いねえ。」と力を入れて云つて、主婦は爾うとも爾うではないとも云はないのに、「いや、それに相違ないよ、でなければ、妹が調停を頼む筈なんぞ無いもの。爾うだよ、必然爾うだよ。」

「左樣でございませうかねえ。」主婦は、恭一の顏ばかり瞻めて居る。

「女學生なんざ、此れだから可かんよ、口頭ばかり高慢な事を云つて、裏面を窺けば惡なこれだ。」と鼻で笑つたが、「お主婦もまた、餘り目が無さ過ぎるぢや無いか、萩原樣許しは別物だなんて、ふん、何か別物だい……。」

「いゝえ、全くですよ、全くお堅固いんですよ……。」

「何が堅固いんだ、親しい男が有つてそれで堅固きや、豆腐と婦女は堅固い物さねえ。ふん、僕ばかり可い面の皮だ、迂濶に誰かの口に載つて、散々に氣を揉ませられて……。」

「はゝゝゝ、まア、彼樣な事を仰有るよ、はゝゝゝ。」

「笑ひ事ぢや無いよ。何が可笑いんだ？」

「其樣な貴方、私に突掛つた處で仕樣が無いぢやありませんか、それ程御執心なら、此う云ふ場合に、遠く何うにか爲されば可いぢやありませんか。」

「何うするんだ、何か、好い方法でも有るのかい？」

「好い方法ツて……、今日から病院に通ふ事に成りましたもの、もう貴方、貴方の御註文通りに成ツたぢやありませんか。」

「其點は大いに註文通りだが、併し、彼樣な男が有ツちやねえ……。」

「幾ら何樣な男が有らうと、二人を會はせなきや可いでせう、私がさ。」

「會はせない？　萩原と此の男をかい？　ぢや、今日訪ねて來た事も默つてるんだね？」

「其處は何うでも……。だツて、何樣な人にだツて貴方、物忘れツて云ふ事が有るぢやありませんか？」

「うん、成程、流石はお主婦だ。」

「ほゝ、現金だよ。」と笑つて、「最う、お金が無くて困つてる處ですもの、今の間に、貴方の手腕をお出しなさるが可いぢやありませんか、ねえお爺、お爺や、一寸お來でな。」

臺所に働いてる下婢を其處に呼んで、

「お前昨夜、萩原樣のお使で質屋へ行つたねえ、幾ら借りてお出でだツたい？」

「は、あの、三圓五十錢でございました。」

「それ、夫ッ許しのお金ですもの、車賃から藥價から拂つた日には、もう、三四度も通ふ中には、何も無くなツ了ひまさアね？」

「爾うだ。」と首肯く恭一。

「ねえ。」と莞爾する主婦。

第十七　診斷

（一）

神田駿河臺の内科病院の患者控所に、他に面を見らるゝを厭ふ一か、壁に近く片隅に俯向いた後姿、濃い髮を英吉利卷き、筆で描いた如な三つ襟、細い頸は白玉を延べて、ひツたり

と身に附いた萌葱縞の一樂の羽織、撫肩に傷々しく痩の見えるのを、廣き室の其處此處に殘つた患者等は、或は好き心に、或は同情の目を以て、自己が病苦を忘れた樣に眺めて居るのであッた。云ふまでも無く、此の美しい女學生こそは萩原初野である。

室の正面なる掛時計は疾に一時を過ぎて、今しも緩くその三十分を報じた處である。診察は終つて、爰に殘つたのは、調劑の出來るを待つ者ばかりであるが、最う刻が刻なので、幾ら病人でも空腹を託つ者もあれば、退屈の欠伸を高く、傍人に顔を顰めさせる者もある。

たゞ初野のみは、連も無ければ人にも離れて、我が順番の來るのを待ちながら、最早病を得た此の身の、治療費！ 卒業試驗！ 之を何うしたものであらう、と思案に沈んで居る。病氣は脚氣で、胃も惡いと云ふことである。轉地治療が一番に良い、また、牛乳を多量に飲んで、滋養物を食つて……、と醫師の命ずる所は、初野が今の身に到底も及びも付かぬ事のみである。

脚氣衝心！ それは、少女の時から聞いて居る怖しい語である、また、東京に來てからも、二三の學友の此病に惱み、此病に生命を奪られたことも覺えて居る。然るに今、自分は此の怖しい病氣に罹つて了つた。勿論是位のことで生命に懸るものとは思はぬ、思はぬけれど、醫師の言を守つて治療をするで無ければ、病勢の何う變化して何樣な事に成るものやら、中々等閑にはして居られぬ場合である。

轉地治療！ 是が最良療法と云ふが、併し、身體も大切ではあるが、我が一身に取つて學校の卒業もまた大切である。住馴れた故郷を捨て、懷かしき母に別れて、試驗毎に他の羨む成績を得る程の勉强を爲續けたのも、名譽ある女子學院の卒業生として、天晴婦人社會に學者の名を取らう爲め許りである。それを今に到つて……、多年勉强の效空しからず、其の卒業も僅一箇月を餘すのみの今に到つて、幾ら病氣が怖しいからと云つて、幾ら生命が惜いからと云つて、試驗を放棄らかして浮々と轉地などがして居られよう！

養生に養生をして、注意に注意をして居たなら、試驗の濟むまで東京に居たとて、豈夫に死ぬ樣な事もあるまい、假しそれが爲に病氣が重るとも、六月さへ越せば、卒業さへして了へば、轉地治療でも、何樣な治療でも、全てが我が心の望むまゝに出來るのだ。

「これん許しの事で、志を挫くなんて……。」と初野は胸に繰返して、我と我が脣を咬んだ。

けれども、病氣の爲には志を挫かぬ、何うあッても勉强を續けようと決めた處で、所有る持物を賣拂つて、漸く卒業までの下宿料、月謝などを間に合はして行ける位のものが、藥價から、種々の滋養物から、通院の車賃から……。

「あゝ、私はまア、何うして金を手配へたものであらう！」と思ふと、我にもあらず腹を絞る深い溜息が吐かれる。

此の順に費つた日には、一月も通院はぬ中に有る物は賣盡して、裸體にでも成ッて了はねばなるまい。

矢張り殿井樣にでも賴む外に方法が無いのか？ したが、是迄幾度となく彼方の相談を斥けて、如何に窮したと云つて、今更何の顔色あッてか此樣な事が願はれよう。假しまた願つた處で、重々の無禮に腹を立てられて、最う耳も假して吳れぬかも知れない。世話好きの主婦も、最う執成してなんぞ吳れぬかも知れない。

其樣なら如何して手配へたものか？ 今の身に成ッて思へば、屢く新聞に出る操を賣つて學資を作ると云ふ樣な話も、金の得難い爲め、また志を遂げ度い爲の窮策から出るのであらう、自分とても、借りらるゝならば高利の金でも借

りよう、買ふ者があらば、身體の血でも絞つて賣らうものを！

　過日病院に入つた時は、日夜入院料の事のみ氣に懸けて、此樣なに困る事は世の中に有るまいとまで思つたが、彼の時は殿井樣も無理に金を貸して吳れる、芳江樣も彼樣なに夥多見舞つて吳れる、その上、肝心の入院料と云へば、知らぬ間に知らぬ人が拂つてあるのだッた、今の苦しさは到底も較べ物にもならぬ。

　入院料と云へば、彼の入院料の拂主は未だに分らぬ、的も附かぬのだ。その當時は種々に迷つて、彼か此かと知つた人を疑つて、何うやら東吾樣の樣に思はれる處へ、傍から三浦樣などが種々な事を云ふので、何樣なに體裁が惡かッたらう……。而して、殿井樣へ行く途中で逢ふまでは……、彼の葉書を見るまでと云ふものは、全く彼の人に決めて居た、彼の人を一番に有情い人に思つて、一番に賴母敷い人にして居たものだ……、顧へば羞かしいことである。

　けれども私は、今になッて彼の人を怨む譯は無い、不快に思ふ事も無い、芳江樣と許嫁の事は前から知つて居る。芳江樣と親しいので、未來の細君の友人として私にも交ッて居たのだ、それは其れに違ひ無い、其樣な事は私も疾から承知して居る……承知して居る筈なのだ。

「馬鹿馬鹿しい、何故私は、此樣な下らない事を考へるだらう？」と初野は口の中で此う言つて、首を擡げた。

　許嫁だらうが、結婚しようが、其樣な他の事は何うでも可いでは無いか、孰せ人は、誰だッて一度は配偶を有つ可きものだ……！　何も其處に不思議は無い……、妹の奉公する金村の奧樣、學校の一覽を見ると、六年前の卒業生の中に、妹の云ふ通りの席順に載つてあッた。六年前と云へば、卒業生の賣口も何樣なにか好かッたらうに……殊更に席順も良いのに、何樣な事情が有つてか知らぬが、今は病人の良人を持つて、而して妹に訊けば、何等の不足らしい事も云はず、靜に生活して居るらしい。

「而て見れば、孰せ私だッて……！」と初野は思はずも獨語した。

「貴女ぢやありませんか、萩原樣て云ふな？」と突然初野の傍に來て云ふのは、商人らしい患者である。

「はい、私ですが……。」

「呼んでますぜ、先刻から呼んでますぜ。」

氣が付いて見れば、最う患者も歸り盡して、廣い控室に、自分と此の男との外は誰も居ないのだッた。藥局に廻れば成程藥は出來て居る。初野はそれを丁寧に手巾に包んで、痲痺るゝ脚を徐に玄關に出て、其處に待たせてある腕車に乘つたが、轅棒を擧ぐる時に、

「あの、車夫さん、一寸切通下に寄る處がありますから。」と命じた。

　切通下と云へば、彼の畫工殿井恭一の家であらうが、併し、初野は、何の爲に殿井の家に寄らうと云ふのであらう。

（二）

　世界は廣くとも、人は多くとも、初野が今の身に倚賴とす可きは、彼の入院料を拂つて吳れた無名の恩人と、畫工殿井恭一とより他には無いのである。無名の恩人の誰であるか、何處に居るのか、それは探さうにも手懸りだに無ければ、今はたゞ嵐に耐へぬ百合の花の、力と賴むは殿井恭一のみであるのだ。

　けれども、今初野が歸途を恭一の家に廻らうと云ふのは、豈夫に此の窮境の救を求むる爲では無い……幾ら苦しいとて、其樣な事が口に出されるものでは無い、只だ是迄の親切を思へば、お波が主人の言の如く優れた人物であるを

思へば、夫から、恭一に對する我がこれまでの所爲を思出だせば、何うも一刻も此の儘に默つて居ては濟まないのである、謝罪る處は謝罪り、禮を云ふ處は禮を云はねばならぬのである。爾うしなければ氣が濟まぬのである。

　腕車は初野の命のまゝ、次第に切通坂の方に近付いた。併し腕車の輪と共に初野の胸の中も息みなく廻る。殿井に袖を曳かれて夢中に逃歸つた夜の事、彼の時の情ある言葉の數々……。

「彼樣な事が有つたのに、此うして一人で寄つたなら……、殿井樣は何と思ふだらう？　それよりも、下婢等の手前……。」初野は此う考へて、獨で顏を赧くしたのである。

　此の頃學校へ出ると、寄つて群つて友達の調戲、殿井樣の美い男である事を、口上手の三浦樣が形容すれば、最う何か關係でも有るものゝ如に、是非顏だけも見せて貰ひ度いの、繪が描いて貰ひ度いのと、昨日などは、危く楠田先生に迄聞かれる所だツた。

　誰が目にも爾う見えるものか……、併し殿井樣は未だ獨身で……、私も獨身で……、私は心を亂しはせぬが……、迫めて彼樣な美い男で無かツたら……。

　などと思ふ中に、腕車は恭一の小路近くに來た。車夫に聲を掛けようか、あゝ急に體裁が惡くなツた、だが寄らずに行つては……、あゝ最う通り過ぎる、呼び止めようか、併し入るも羞かしいし……あゝ何う仕よう、一寸息んで、少し考へさして吳れれば可いのに……。

「切通坂は何方でござえます？」車夫は足を止めた。最う池の端に出たので。

「爾うですねえ……。」と曖昧の言葉。

「なんなら、訊いて見ませう、何町でござえます。」

「いゝえ、それは分つてますが。」

「へえ、ぢや何方で……？」

「まア、今日は止しませうよ。」

「ぢや、眞直にお歸りで……？」

　車夫は一文字に駈出した。自分で命令けながら、初野は最う詮方が無いと悔んだ。

　腕車は何時か大學の背後を、七軒町を北に飛んだが、唯ある曲角で、不意に出て來た一輛の腕車と、空當らんとして辛に摩違ひ樣、見るとも無く偶と顏を擡げると、彼方の車上には殿井恭一、

「やア。」と輕く挨拶して通り過ぎる。

「おや！」と初野も口に出したが、振返れば道は曲つて其人の影は無く、我が腕車は益々馳る。

　けれども初野は、車夫を止めようとしなかツた、恭一を呼ばうとも爲なかツた。餘り唐突なので聲が出なかツたのか、それとも體裁が惡かツたのか、たゞ病ある胸の動氣のみが高く波打つのである。

第十八　許嫁

（一）

　汚點の見ゆる大分古く成ツたセルの夏服に、大學の徽章を附けた麥藁帽、片手には重さうな書籍包を抱へて、網揚げの深靴を跫音荒く、東吾は忙しく我が下宿なる倉岡に歸つて來た。

　格子戸の明く音に、奧から出て來たのは親類の娘……日外大學の正門前に東吾の歸りを待つて居た、彼の梅ちやんと呼ぶ娘である。

「お歸んなさい。暑いでせう？」と馴々しく傍に寄る。

「梅ちやんか、久し振だな。何しに來てるんだ？」

「夏本樣がね、房州から歸つて來らしたツてから、それであの……、私、來て見た處ですの。ほゝゝゝ。」と急に笑ふ。

「何か、阿母樣から傳言でも有つたの？」

「いゝえ……。あら、私持つてて上げますよ。」とお梅は東吾の風呂敷包を代つて持ち、「重いわねえ。何？　洋本？」

東吾はそれには答へず梯子を駈昇つて、室へ入るや否や、行きなり我が机の上を見廻したが、其處に來たお梅に、

「梅ちやん、私へ郵便が來なかツたか、一寸問いて來てお吳れ。」

「階下には、今誰も居ませんよ。」

「何うしたんだ？」

主婦は下婢を伴れて、本郷まで用達に行つたので、私は留守をして居る由を答へて、

「先刻の事ですから、最う歸る頃ですわ。」

「ぢや、梅ちやんの居る處へ來なかツたか？」

「郵便？　いゝえ。」

「はてな。」と東吾は腕組をしたが、「誰も、訪ねて來た者は無かツたらうなア？」

「いゝえ何誰も。」とお梅は東吾を見上げて、「貴方、大變な汗よ。洋服を着更へないで可いの？」

東吾は頻に首を捻つて考へて居る。

「本當に大變な汗だわ。拭いたら可いでせう。手拭を絞つて來て上げませうか？」とお梅は早くも柱の釘から手拭を取る。

「いや、要らない。」と首を掉る。

「だツて、此樣なに……。」と傍へ寄ると、

「あゝ煩い。」と手で拂つて、「ま、階下へ行つてお居でよ！」

お梅はぷいツと脹れて、

「酷いわねえ夏本樣は。宜くツてよ。」

「今、用が有るからさ。」氣の毒に思つたか、慰める樣に云ふ。

「宜くツてよ。」

「はゝ、怒つたな？」

「知りませんよ。」跫音荒く出て去く。

東吾は笑ひながら其の跡を見送つたが、忽ち眞面目な顏をして、また小首を捻つて、

「だが、如何したんだらう？」と獨語と共に腕組をしたが、「急に病氣が惡くなツたか知ら……？　併し、彼の手紙を見たら、何か返事位爲さうなもんだ……、自分で書けなきや、代筆でも出來る事た……。」

何を想ふか、久くは瞬きもせず天井の一隅を視詰めて居たが、急に帽子を把つて、ばたばたと梯子を降り、

「梅ちやん梅ちやん、僕はな、一寸出て來るがな……。」と靴を穿きながら、呼んでも返辭が無いので、聲を高く、「おい、梅ちやん。」

「何ですよ。」何時の間にか、音もなく背後に來て起つて居る。

「其處に居たのか。返辭位したツて可いぢや無いか？」

「だから何ですツてば？」

「まだ怒つてるのか、仕樣の無い娘だなア。」

「何うせ、私は仕樣の無い娘ですよ！」

「ちよツ。」と鼓舌したが、「後刻に主婦が歸つたらね、晩の六時の汽船で出立つからね、其の心算で準備して置いて下さいツて。」

「あら、今晩發つて行らツしやるの。」

「然うさ。可いか、賴んだぞ。」

（二）

東吾の志す處は、云ふ迄も無く千駄木林町の、彼の萩原初野が下宿である。で、戶外へ出た時の勢と云つたら、何か生命に係る事でも起つたかの樣に、夫こそ猛然と……、傍目も觸らず行くのであツたが、その步武が中途から段々漫くなり出して、最う千駄木へ入つた頃には、立止つたり、首を傾げたり、眞の人に怪まるゝを避くる許りに、詮方なしに步くのであツた。

それでも島井の前まで來た。行過ぎる風をして露路の內を覗くと、入口に紺半被の車夫體の

後姿が、何やら高聲に話をして居る。東吾は機惡しとでも思つたか、垣の前を二度ばかり彷徊く、と、頓て露路から今の車夫が出て來る。

「おい〳〵。」四五間も遣過して、背後から聲を掛けた。

「へ。」ときよろ〳〵した眼をして、一寸獵帽を脱つて、「拙者ですか？」

「確かお前だツたね、昨日、女子學院へ行つた人は？」と徐に歩寄つた。

「へ、萩原樣のお迎に…？へ、拙者でげすが、旦那は何誰樣でしたツけ？」と變に笑ふ。

けれども東吾は、笑ひもせず名告もせず、何の爲に此る事を尋ねるかも告げない。何を祕さう、東吾は昨日も此處を通つたのである…初野の樣子を探る爲か、それとも他に用事有つてか、兎に角此處を通つたのである。その際、此の車夫と島井の下婢とが、「萩原樣は何樣なに待つてるか知れやしない…、病人ぢや無いか、氣を揉ませない樣に、最う少し早く行つてて與れたが可いぢや無いかね。」「なアに、此處から學校までは、五分と掛りア爲ませんよ、大丈夫間に合ひますよ。」「でも、お前樣が其樣なに落着いてるもんだから、私許し忙しい處を使に出されたり、叱られ無いで可い事を叱られたりするぢや無いかね。」などと話しながら、空腕車をがら〳〵と急ぐ處を見たのである。

「彼の、萩原と云ふ女は、病氣ださうだね、何處が不快いんだい…、お前知つてないかい？」と東吾は、車夫に笑はせまいとでも思ふか、嚴然とした顏をして尋ねた。

「へ、能かア存じませんが、何でも、脚氣だとか申すことで、へ。」

「脚氣？ 併し、學校を休む程ぢや無いのだね？」

而ると車夫は、今も病院に藥を取りに行つて聽いて來たが、病狀に異つた事無ければ、一週一回位の通院でも差支なしと、其處の醫員の言葉を其のまゝに告げて、

「旦那は何か、萩原樣の御朋友で居らツしやいますか…？」と可笑いやうな變な顏をする。

東吾は何處までも眞面目で、

「藥を取つて來たと云ふと、ぢや、今日は下宿に居るのだね？」

「へ、今日はお午前にお歸んなりまして。」

「ぢや、今も居るのだね？」と念を押す。

「へ、居らツしやいますとも。」

「爾うか。や、此れは暇を潰して氣の毒だツた。」と銀貨を一個出して遣る。

「旦那、此樣な物を戴いちや…。」と車夫は不意くらツて、ぴよこ〳〵と頭を下げる。

東吾は對手にもせず、直ぐ後へ踵を反したが、五六歩來ると立止つて、

「おい〳〵。」

「へ、何ぞ御用で？」と最う驅けて來る。

「その病院は、何處の病院なんだ？」

「へ、駿河臺の…。」車夫の事だから、院號で無く、其の院長の苗字で答へる。

「爾うか、や。」と許り行過ぎる。

車夫は後を見送つて、笑ひながら點頭いたが、東吾が島井の露路に見えなくなると、自分も其處を立去つた。

（三）

格子戸を潜るや否や、東吾は例の聲で案内を乞うた。出て來たのは下婢で、東吾の顏を見ると、はツと思つたらしい顏色をする。

「萩原樣は居るか？」

下婢は狼狽して、

「は、あの、何卒一寸お待ちなすツて。」

「居るだらう？」と靴を脱がうとする。

「何卒、一寸お待ちなすツて。」下婢は奥へ驅戻つて、「お主婦、また參りましたよ…」

主婦は、縫物の手を息めて、
「何だよ唐突に。何が來たんだよ？」
「昨日逢つた書生樣ですよ、ほら、彼の萩原樣を訪ねて來らしッた。」
「え、彼の夏本ッて云ふ？　お不在ですッて、疾く爾う云つてお遣りな。」
「だッて、居らッしやる事を知つてる樣ですよ。」
「知つてる？　仕樣が無いねえ。」と云ひながら、主婦は膝の絲屑を拂つて出て行つた。
東吾は不機嫌な顏をして、主婦が腰を屈めても瞬き一つだにせぬ。
「お來でなさい、萩原樣はね、居らッしやいますけれどね、お寢ッて居らッしやいまして、もう、何誰がお來でになッてもお目に掛りませんのですが。」
「お寢ッてる？」
「は、どうも、お健康がお害いもんですからね」
「併し、一寸取次いで異れんか、是非會はなきや成らん事が有るから……。」と名刺を出す。
「でも、何誰が來らしッてもお目に掛らないからッて、固く言付かつて居りますんで……。」と主婦は名刺を取らうともせぬ。
「爾うか……。」と東吾は默くなッたが、徐と名刺を隱し、「過日、貴女に賴んで行きましたが、彼事は取次いで異れたらうね？」
「は、確に。」
「何と云ひました？」
「いゝえ、別に何とも仰有いませんでしたが。」
「爾うですか。」
「何ぞ御用がお有んなさるなら、何卒、拙者に仰有つて戴き度いんですが。」
「いや、それぢや、」と許り、ぶいと戸外へ出た。
　何うも非常な侮辱を受けた樣である。芳江からの手紙を見て、大切の勉强を棄てて歸つたのも、困厄の地に陷ちたと云ふ初野を救はん爲である、芳江との間を調停せん爲である……他には祕して居るが、芳江にさへ他の用件で歸つた如く話して置いたが、全く初野の爲に態々歸京したのである。然るに其の初野が、會ひに行つても會はず、手紙を出しても返書一つ寄來さぬ。車夫の話を聞いても、人に會はれぬ程の重患で無いのは明かである。主婦に賴んで、乃公が來たら此う云つて歸す樣に、と手筈を定めてあるのか知れぬ。
「失敬な、全く俺を侮辱して居るんだ、失敬な！」と東吾は歩きながら呟いた。
　併し、何故此う急に自分に冷淡になッたか、東吾には其の理由が解らぬ。養母と何か衝突が有つたと云ふが、過去に我に對する所爲を顧へば、それ位の事で、此う急に冷淡に成らうとは思へぬ。
「ぢや、若しや彼の男と……。」東吾の胸に浮んだのは、下宿の露路で擦違つた輕佻た服装の男である。
　學資に窮して、卑しい業になるなど云ふ話は珍らしくも無いけれど、自分の目が誤つて居るか知れぬが、豈夫にあの初野が其樣な墮落を爲ようとは思へぬ。
「いや、墮落爲ようが爲まいが、何も乃公に關係の有る事ぢや無いんだ。」とまた胸の中で云つた、「馬鹿だなア乃公は、彼樣な女の事で歸つて來るなんて……。」
　歸ると、直ぐ自分の前へひよッこり出て來て、「お歸りで居らッしやいますか。」と腰を屈めるのは、邸の抱車夫である。
「松藏か、何うした？」氣が付くと、わが脚は何時か自分の下宿の前に來て居るのだ。
「へ、お孃樣のお供で參りましたんで。」

（四）

二階の東吾が室に、此處の主婦の侑むる茶に

喉を潤して居るのは芳江である。粗い縞御召の袷に、帯は藤紫地に牡丹模様の繻珍、頭髪は夜會に結び、生得の白い顔色を薄く化粧つて居るが、室の故か、主婦の様な女と並んだ故か、平常よりは一段と品も高く、また一段と美しく見える。

　主婦からは主人筋の娘なので、最う有らん限りの手を盡して、嬉しがらせるに掛つて居る。菓子も買置ではあるが藤村の蒸菓子、今買つた夏蜜柑、それから親類へ來た嫁の寫眞、それから東吾から貰つた干魚の、それは美味しかッた話、海岸に行つて居らしても、少しも日にお焼けなさらぬ事、其の御帯は奥様の御見立だらうが、眞に好く御似合ひ申した事など、平常は餘り御饒舌でも無いが、今日に口を置かずに辯じ立てて居る。

「おや、お歸りの様ですよ。」と主婦は、梯子を昇る跫音を聞いて襖を開けた。

　東吾が入つて來ると、芳江は微し赧くなツて、

「兄様、お歸んなさい。」

「芳江様か。何うした？」つか〳〵と來て机の前に胡坐を組く。

「あの、少し御相談が有つて。」

「最う、先刻からお待ちなすツて居らツしやいますよ。」と主婦は東吾にも茶を侑めたが、芳江が座蒲團を外して居るので、「阿嬢様、御服が汚れますよ、御敷き遊ばせよ。」

「だッて、私ばかし……。是で宜いのよ。」と芳江は、自分のみが絹の客座蒲團で、東吾を見るとキヤラコの固く成ッたのに坐つてるので、此く滑り降りたのである。

　而ると主婦は笑つて、成程此は氣が付かなかッた、それでは若旦那にも彼方から持つて參りませう、と室を出て行く。

「なに、僕は座蒲團なぞ要りませんよ。」と東吾は背後から聲を掛けて、扨芳江に、「相談ッて云ふと、何だね？」

「萩原様の事で。」と云ふ中に顔色を曇らせた。

「如何したんだ？」東吾も氣遣はし相に、「ま、其物をお敷きな。」

「兄様、萩原様と會つて下すッて？」

「いや、會はん。手紙を遣つたけれど、何うしたか返辭も寄來さん。」

「如何したんでせう、矢張し、兄様に對しても怒つてるんでせうか？」と悲しい顔色をしたが、「兄様、ぢや、萩原様の事は、未だ些とも御存じ無し？」

「何様な事を？」

「兄様、大變ですよ……。」と前置をして、自分は三浦絹子の來狀で知つたが、初野は病氣に罹つて居る、それから妹のお波をば、下婢奉公に出して居る、と話すと、

「奉公に出してる？」東吾にも、此の話だけは初めてである。

「え、必然、お金に困つてですよ。だッて、彼様なに可愛がッてる妹ですもの、能く能く詮方が無いからなんですよ。私はそれを思ふと、萩原様の心の中が……。」とはら〳〵と涙が溢れた。

「可いぢや無いか、妹を奉公に出さうが、病氣に成らうが、云はゞ他人の事だ、何も、芳江様の關係した事ぢやないぢや無いか。」

「兄様まで其様な……。初野様は、私の親友ですもの……。私は……、未だ兄様には默つてましたけれど、私は、」と涙を拭つて、「初野様と、私は姉妹の誓をしてますもの。」

「姉妹……？」

「然、義姉妹ですの。」と芳江は流石に體裁惡氣に、「其様な誓をしては惡いんでせうか？」

「いや、それを惡いと云ふんぢやないが……？」

「ぢや可いでせう？」

「併し、芳江様ばかし其様な意でも、彼方が此

の通り冷淡なら？」
「いゝえ、初野様は其様な人ぢや無いの、決して冷淡な人ぢや無いの、私だッて、何様な性質の人だか知つてますわ。」
「けれども、芳江様からも、三回も謝罪の手紙を遣つたッてぢや無いか？」
「然、それは遣つたけれど。」
「そんなら、常識の有るものなら、何とか、返辭位は寄來し相なもんぢや無いか、」と云つてる間に語勢も鋭くなッて、「失敬な、僕も手紙を遣つた、態々訪ねても行つた、名刺まで置いて、汪姉に頼んで來たんだ、それに、昨日なんざ……、失敬な、實に失敬な奴だ、自分は何者だ、高が私立學校の女學生ぢや無いか、無禮にも程が有る……、彼様な奴、何う成ッても構ふもんか、何様な困難を爲ようと、何様なに墮落爲ようと、何等痛痒も感じはしない、彼様な女で氣を揉むなんて此方が愚だ。芳江様、最う止してお了ひ、最う絶交してお了ひ……、姉妹も割ないも有るもんか、斷然絶交してお了ひ
一兄様にまで斯う云はれると、私許り何うすれば可いんだか……。
一何故？ 何故其様なに悲しいの？ 何も、芳江様の身に降掛つた事で無いぢやないか？」

「だッて、初野様の意の中が何様なだらうと思ふと、私は……」と泣いたが、辛と面を擡げて、「兄様、私ね、他の事なら何様な事でも、決して兄様の言葉を背きませんからね、何卒、初野様の事だけは恕して上げて下さいな。私は、一旦姉とまで誓つた女を、此様な行違で失くして了ふかと思ふと、私は實に……。」
「だがね、芳江様許し爾う思つても、彼方の心が此様なぢや駄目だよ。」
「いゝえ、假ひ何様な行違で、何様なに怒つて居らしッてもね、私は何處までも初野様の心を解く心算ですの……、また、爾う爲るのが友人間の義務なんですから……、ね、爾うでせう？」
「それは爾うだが、而して、彼方の心を解いて、それから何う爲ようと云ふの？」
「而してね、初野様が怒を解いて下すッたらね、私は、學資のお手傳を爲ようと思ひますの。」
と芳江は、初野には夏まで學資を助け、お波をば奉公先から戻して遣り度いのである。而して初野の心を解く方法としては、友人の三浦絹子を間に入れて、無理にも一回相會して、自分の胸中を打明ける心算なるを告げ、

「ですから、何卒此事だけは恕して下さいな、ね、ね、兄様。」
「恕すも恕さんも無いけれどね。」
「ぢや、恕して下すッて？ ぢや、是迄のやうに親しくしても可いでせう？」と心から莞爾して、「ぢや、兄様も、今日立つことは止して下すッて可いでせう？」
「私か、私は立つよ。何も、私の居る用は無いぢや無いか。」
「いゝえ、後で、種々兄様に御相談しなきや可けない事有るんですもの……。それに、初野様には、私達が十言云ふよりか、兄様が一言云つた方が效驗が有るんだから。」
「其様な事が有るもんか。」
「いゝえ、實際。兄様の事は、非常に敬服して居ますのよ。」
「敬服？ ふん、我が手紙を遣つても、返書も寄來さない様な敬服ぢや大變だ。」
「だッて、今回の事は、行違から起つた事なんですから。」
「行違だらうが何だらうが、彼様な女學生、僕は眞平御免だ、」と東吾は笑つたが、「併し、それ程氣に掛るなら、芳江様だけは何うでも遣つて見るが可いさ、無論、それが正しい事なんだか

らねえ…。」

第十九　待人

畫工殿井恭一が家の緣側を、襷掛の姿甲斐甲斐しく、雑巾掛をして居るのは昨日から此家に引取られたお波である。

「お波ちやんや、お波ちやん、止してお呉れッてばねえ。」と臺所から呼ぶのは老婢である。

「え、最う出來る處ですから。」

「でも止してお呉れよ。其樣なにお働きの處を旦那に見られようもんなら、また、私が叱られなきや可けないぢやないかね、よ、お波ちやんや」と障子を開けた老婢は、「おや、最う出來たんかい？」

「え、大變な砂よ、こら。」とバケツの水を見せたが、「老婢さん、最う雨戸を閉めませうか？」

「まだ早いぢやないかね。ま、此方へ來てお休息よ。」

お波は云はるゝ儘庭口から勝手に廻り、さて家へ入つて手を洗ふと、臺所の片隅には、何時の間にか仕出屋の膳椀や、料理やが列んでゐるので、

「老婢さん、夥多御馳走が來てるわねえ、皆な、旦那が食るの…？」と茶の間に入りながら問くと、

「お波ちやんの姉樣が來るんでね、それでお取んなすツたんだよ。」

「あら、これ姉樣の御馳走？」

「何だよ此の娘は、其樣な大きな聲をしてさ。ま、お坐んなさいよ。」

「だツて、姉樣の御馳走なら、其樣なお金を費ける事なんか止して下されば可いに。」

「何故？可笑な事云ふ娘だよ。旦那の方ぢや、御馳走を爲たいからお呼びもしたらうし、また、お波ちやんの姉樣だツて、旦那の御馳走に成り度いから來るだらうぢや無いかね。」と云つて、老婢は唐突に笑出した。

「あら、姉樣は、御馳走に成り度くツて來るんぢや無いわ。」

「爾うかい、爾うかい」と老婢は笑ひながら點頭いて、「だがね、お波ちやん…、私は、昨日から問かう問かうと思つてたけれど、お前樣の姉樣、お郷里に居た時分、一度緣付いた事が無いのかい。」

「緣付くツて？」

「何家か、お嫁に行つた事が有るだらう？」

「其樣な事無いわ、姉樣は、學者に成る人ですもの、お嫁に行くなんて、其樣な…。」とお波は不平の顏色をする。

「學者も可いけれどね…、」と老婢は凝とお波を眺めて、「ぢや、お波ちやんのお郷里では、何處の娘も此うなんだね…男の家へ遊びに來たりなんぞして？」

「其樣な事無いわ。」

「ぢや、お前樣の姉樣許し、此う開化してるんだね、はゝゝゝ。」と笑つたが、「だがね、後刻にね、姉樣が來ても、必ず二階へ行く事ぢや無いよ。お邪魔になるからね、可いかい。おや、何うして泣くの、え、お波ちやん、何うしたのさ？」

「老婢さんは、餘りだから可い…。」とお波はしく／＼泣いて居る。

「餘りだツて、何が餘りなの？　え？」

「私の姉樣を、其樣な種々な事を云つて…、姉樣は、郷里に居る時から、大變に成績が良くツて、郡長樣からも賞與を貰つて…。」

「それ、旦那が降りて來らツしやるぢや無いかね、お波ちやん、泣くのは止してお呉れよ、それ、來らしツたよ、速く顏をお拭きなね、速くさ…。」

老婢が濡れた手拭を押遣ると、お波は云はる

る儘顔に當てた。丁度其處へ出て來たのは、バンドレンやら、コスメチックやら、香氣に鼻を穿つばかりの主人の恭一である。

「波ちやん、何うしたんだ？」と云ひながらも老婢を眺めて、「老婢、お前また、幼者に餘計な事なんぞ云ッちや可かんぞ。」

「いゝえ、何餘計な事を云ふもんですか、ねえお波ちやん、今、仕出屋から來た物を整理けて、一寸腰を下した處ですよ、ねえお波ちやん。」

而るとお波は點頭いた。

「仕出屋から…？　最う皆な來たのかい？」

「へい、皆な參りましたよ。」と老婢はつんとして居る。

恭一は臺所を見廻したが、

「波ちやん、一寸此方へお出で。」と頤で招いて、前に立つて梯子を登る。

二階の八疊の室は、塵一つ落ちて無い迄に整理き、座蒲團から茶道具の用意、キーラソーの壜、何やら菓物の罐詰など、客の來るのを今や遲しと待つて居る有樣。

「まア此處へお坐り。」と恭一はお波を近く呼んで、「何うしたんだ、泣いてるやうだツたぢや無いか？　何か、老婢から厭な話でも聞いたんだな？」

「いゝえ、何にも。」

「ぢや何うしたんだ？　何も、私に祕す事は無い、何うした、云つてお了ひ。」

「あのね、只だね…、」と云つて、お波は恭一を見上げて、「私、お願が有りますの。」

「何だ？　何だか云つて御覽な。」

「あのね、姉樣が來てもね、私、姉樣の傍に附いて居たいの。」

「姉樣の傍に？」恭一は解せぬ眼をして、「附いて居たきや附いて居るが可いぢやないか、何故其樣な事を云ふの？」

「だつてね、若し姉樣に間違でも有るとね、私…、大變ですもの…、郷里の兄樣なんか、女の書生なんざ、私生兒でも生んで歸つて來るのが落だなんて、始終惡口してますもの…。」

「私生兒…？　それで、波ちやんが傍に附いてて、姉樣の護衞をしようと云ふのか？　ぢや、私が、波ちやんの姉樣と關係すると可けないから、と此う云ふんだね？」と云つたが、急に怖い顏をして、「誰が其樣な事を云つた、老婢だらう？」

「いゝえ、誰も云はないけど。」

「波ちやんが爾う思つたのか、ぢや、お前は私を疑つてるんだな？」

「あら、爾うぢやないわ、」と赧くなツて、「爾うぢやありませんよ、本當に爾うぢやありませんよ、疑やしませんよ。」

「其樣ならそれで可いが、」と恭一は笑つて、「波ちやん、最う六時過ぎだよ、五時迄に來ると云つたぢやないか？」

「えゝ、何うしたんでせう？　お迎に行つて來ませうか？」

「確に來ると云つたんだね？」

「え、」とお波は點頭き、「私の事で、お禮も云はなきやならないんだし、今後の事も相談して置き度いからツて…。確かですよ。」

「それから、月末の拂にも困るし、病院の藥價も何うかしなきや可けないし、て云つてたぢやないか？」

「え、それは、私へ内密で云つたの…、あの、殿井樣に願つたら、貸して下さるだらうか何うだらうツて…。」

「波ちやんの姉樣の事だもの、談に依ッちや、それは無論貸して上げて可いさ。」

「本當でせう？　本當に貸して下さるでせう？」

「併し、これは姉樣に會つて、姉樣から直に聽いた上でなきや可けないんだよ。」

「ぢや、私呼んで來ませう。」と膝を立て掛けて、「可いでせう？」

「それは波ちやん次第さ。だが、千駄木までは容易ぢやない、行くなら腕車に乘つてお出でな。」

お波の辭するのを、强ひて腕車を呼んで出して遣つた。

第二十　寫眞

世にも賴母敷き恭一が言葉を、お波は小さき胸に繰返して、大切の姉の夏迄の學資、目前に差迫つてる療治の費用も、最早今日の今夜から心配の要らぬ身に成る事と、腕車を降りるや否や平常よりも元氣好く家に入れば、

「おや、お波ちやん、阿姉樣のお迎でございますね？」と顏を見るより早く主婦が云ふ。

「え、姉樣は？」

「阿姉樣はね、居らッしやいませんよ。」

「あら、行違になつて？」と驚いて身を反らすと、

「いゝえ、爾うぢやありませんよ。まあ此方へ來らッしやい。」

主婦の樣子を見ると、何うやら今迄、姉の事に係つてお饒舌でもして居たらしいので、幼な心に何事が起つたらうと氣遣はしく、招かるゝまゝ姉の室に入れば、

「お波ちやん、貴女の阿姉樣にも困つて了ひましたよ。」

「えッ、何うして？」と眼を圓くする。

「餘り、氣が變り易いんですもの、何うして如彼なんでせうねえ、」主婦は今更の如にお波を眺めて、「同じ御姉妹でも、貴女は此樣なに濶達して居らッしやるのにねえ。」

「姉樣は何處へ行つて？」

「阿姉樣はね、質屋へ行らッしやいましたよ……、御召物から何から、夥多抱へ込んで。」

「まア！」と顏色が變つた。

「御覽なさい、此の通り、」と主婦は押入を明けて、姉の着更入なる支那鞄を見せ、「ね、何にも無いでせう？」

「何うしたんだらう……、昨日まで彼樣なに、殿井樣に賴む外に仕方が無いッて、彼樣なに約束までして……。」

「ですから、また氣が變つたんですよ。つい先刻まではね、殿井樣へ行らッしやる心算でね、お召更までなすッて、最うお腕車の來るのを待つて居らしたんですよ、而ると、急にね……、ねえお兼、」主婦は勝手の方に聲を走らして、「お兼や、ま一寸お來でな。」

而ると下婢が襷のまゝで顏を出して、お波を見て一寸會釋する。主婦は、

「ねえお兼、今の話さ、お前は見たッてぢやないか、何だか、寫眞を御覽なすッてから、急に氣が變つたんだッて……、ま話して御覽よ、お波ちやんに話して御覽よ。」

「寫眞の故ですか何ですか、其處は存じませんけれど……、」とお波の前を、幾分か憚る樣に云ふ。

「でも、お前は見たッてぢや無いかね。」

「はい、それは、寫眞を凝然と視て居らッしやる處は見ましたけれど……。」

とお兼は話したが、先刻、呼びに遣つた腕車も來たので、其の由を初野に告げると、最う疾に準備が出來て居ながら、早速に出ようともしなかつた。それから、再同じ事を注意すると、机に凭れて、凝然と考へに沈んで、今回は返辭一つしなかッた。お兼は變な事に思つて、後で障子の穴から竊と覗くと、初野は片手に寫眞を眺めて、何を思ふのか、呼吸も絕えたと見ゆる許り、瞬き一つだにしないのである。

「その寫眞は、誰の寫眞なの？」と話の中途で

お波が尋ねた。

「確とは分りませんけれど、何うも、洋服を着た、角帽を冠つた……、大學生の樣でございましたよ。」とお兼は答へて、また、「夫から、暫く經つと、私をお呼びになりましてね、氣の毒だけれど、一寸質屋へ使に行つて呉れまいかツて、お服から何から、種々な物をお出しなすツてるぢやありませんか……。」

而ると、主婦は下婢の話を引取つて、

「お兼が其樣な事を云つて來ましたからね、私は、今日は忙しいんだから、其樣なお使はお斷り爲ろッてね、爾う云ひ付けたんですよ……。」

と主婦は何も言葉を繼いだが、其の斷づた仔細と云ふのは、賴む儘に使を出しては、折角思立つた殿井に行く事が止めに成ッて、間に立つたお波の困るのは云ふまでもなく、是から後の初野が身は、益々困難に陷る許りであると、それを氣の毒に思うての事である。

主婦の心では、斯うして斷つて了へば、差迫つた月末の拂、飯料から、車屋の勘定、牛乳、洗濯屋の書出まで、何うしても爰に十七八圓の金が無くては、明日の新しい月を迎へられぬ筈であるから、最う我を折つて殿井に賴込むに違ひ無いと思つた。ところが何う決心をしたものか、案外にも風呂敷包を提げて、殿井へ行く爲に呼んだ腕車を走らして、其の質屋へ自身で出掛けたのには、流石の主婦も、

「實に、私も呆れて了ひましたよ。」

「ぢや、殿井樣に賴むことは止したんかねえ？」

とお波も當惑した。

「ネ、迎に來らッしやる位ですから、殿井樣では、何樣なにか待つて居らッしやるでせう？」

「えゝ。仕出屋からね、お料理を取つたり何かしてねえ……。」

「まア、爾うですか。御親切に、其樣なにまでして下さるのにねえ。」

「だけれど、是から前途何うする心算なんだらう？　質を置くッて、最う何にも無いだらうし……？」

「爾うですとも、其點ですよ。」と主婦は強く點頭き、「お波ちやんだッて、此の通り氣が注いて居らッしやるのに、其點を考へないなんて、阿姉樣のやうでも無いぢやありませんかねえ。」

「私は、此樣な事で、旦那に怒られたら何う爲ようと思つて……。」

「爾うですともね、約束を變更されて、誰だッて好い心地の人はありませんからねえ……。これと云ふが、其の寫眞の故なんだけれど……。」

「確に男の寫眞だッたらうねえお兼？」と背後を顧れば、何時の間にか下婢は其處に居らぬので、「まア、何樣な寫眞だか、其の寫眞を一つ搜して見ようぢやありませんか。」

主婦はお波を促して、机の抽匣から文庫、それから書箱の抽匣など搔廻したが、其の寫眞らしい物は見當らなかッた。勿論、絹表裝の寫眞アルバムが一冊在るにはあるが、此れには學校の友達や、郷里の母、亡き父、お波と二人列んだのなどで、お兼の云ふ樣な大學生の寫眞は一枚も挾まれて無いのである。

「貴女は、其樣な寫眞御覽なすッた事有りまして？」

「いゝえ。」

「ぢや、其樣なものは何處へ藏つて置きませう？」

「何處だか……。」とお波は、搔探して居た文庫を蓋したが、偶と其傍の反故籠から、「おや、此處に此樣な物が……。」

「破いた寫眞ぢやありませんか……。」

二人で拾出したが、五つ六つに引裂いた寫眞で、之を繼合はして見ると、なる程角帽に制服を着けた大學生の半身である。

「あら、私何處で見た人よ。」とお波が云つた。

「夏太樣と云ふ方でせう？」

「あ、爾うだ、芳江様の阿兄様だ。」
さて主婦は解せなくなッた。殿井に行かうとして着物まで着更へた處が、此の寫眞を見て急に厭に成ッたとすれば、それで成程理由も通らない事はないが、それ程深く念ふ男の寫眞なら、何故此う引裂いてなんぞ棄てたものであらう？

第二十一　質屋の門

今日も日沒に近く、往來の足も急しい横町を、人目を避くる深張の洋傘に顔を埋めて、行くでも無く止まるでも無き優姿、服裝は着古した曙縞の絲織の袷、帶も性の脱けた博多とメリンスの腹合せと云ふ服袋であるが、其の洋傘を外るゝ白き項脚、ちらと洩れる顔の輪郭、急ぐ者も目を瞬り、惡戯にも態々摺違つて、洋傘の中を覗いて通る者もある。
「萩原様、萩原様。」
後から駈けて來た黑鴨仕立の車夫が、傍へ來ると小聲で呼止めた。而ると、同じく顔を隠しながら、
「何うでした、彼でも可けなくッて？」
「へ、矢張り可けません、精々、十五圓きや貸せない相でござえます。」
「何卒、もッと低聲に……。」車夫の聲を制して、體裁惡いのか足を速める。
車夫も後に從いて來たが、また、
「彼品を加れても、十五圓きや貸せないさうで……。」と耳近く口を寄せると、
「それは分りました、」と答へたが、思はず溜息を吐いて、「困つたわねえ……、是非とも二十圓無きや仕様が無いんだし……、ぢやアねえ、詮方が無いから、此れを持つてッてね、最う一回頼んで見て下さいな……。」
車夫は其の小さな風呂敷包を受取り、
「へ、此品を加れて二十圓でげすか？」
「爾うですよ。此品はね、拵へる時は、此許しでも二十圓から以上出てますからね、熟く其處を爾う云つてね。」
「へ。何でげす？」
「羽織ですよ、一樂の。まだ何とも無い物ですからね、熟く頼んで見て下さいな。」
「へ、ちやア……。」
「私は、彼方の小路の方へ行つてますから……。」
車夫は元來た道を駈戻る。初野は、同じ處のみを歩いても居られぬので、彼方の小路へと足を向けた。
「彼様なもの一枚、決して惜むんぢや無いけど……。」胸の中に繰返して、また溜息を吐いた。
惜むのでは無けれど、寒暖定まらぬ晩春の時候、外出の際など、見惡い此の袷の上を飾る便とも成らうのに、あゝ、彼品を手離せば、最う餘所行と云ふ物は一枚も無いのだ。勿論晩かれ早かれ、我が所持品の總ては他の有に成るに決つて居る、卒業試驗の時は、肌を隠す許りの寢衣一枚を着て、衆人の笑ひ聲の中で卒業證を貰ふものと覺悟して居る、假ひそれが羞かしくとも、若い男の助力を得て、何事も其の意見に從はねばならぬ身と成ッて、假しや心は亂さずとも、それが爲に有らぬ浮名を唄はるゝに較ぶれば、何の辛い事が有らうぞ！　大切の母と離れ、意地惡き兄の言に逆ひ、是まで辛苦を忍んで來て、如何に纖弱い女子でも、夏まで辛抱の爲切れぬ事があらうか！　病氣が重くなッて、中途に斃れるならそれまでの運命！　下宿から逐出され、學校から停學を命じられても、獨立して、遣る處まで遣つて、それで可けぬのならば快く斷念も付くと云ふもの、然うよ、考へれば何も惜む事は無い、何も悲しむ事は無いのだ……。

「あら、萩原様ぢや無くツて…？」

不意に聲を掛けられて、吃驚面を擡げた初野は、

「まア、三浦様！」

「萩原様だよ、好い處で逢つたわねえ、私、是から貴女の宿に行く處よ。」

「爾う？」と云ふや否や、我が服装に氣が付いたか、初野は忽ち赧くなツた。

「何處へ行らしツて？ 今歸る處ぢや無くツて？」

「え、最う歸る處ですけれど…。」

「ぢや、同伴に參りませう…。」と云つたが、速くも初野の進まぬ様子を見て、「何誰か、お連でも？」

「いゝえ、爾うぢや無いけれど…。」

「何うして、何か、此邊に御用が有つて…？ 私ね、」と三浦絹子は一層近く寄つて、「貴女の事でね、大事の使命を帶びて來たのよ。」

「大事の使命？」

「え、夏本様から…。」

初野は忽ち芳江の事が胸に浮んだ。必然、絹子を間に入れて、疎く成ツた間を調停せしめんとするのだと。

「大變、お待ちでせう？」と絹子は初野を覗く様にして、「大變よ、夏本様は…。それこそ夢中よ、私も、彼の方の熱誠には感動して了つたわ。」

此う云ふや否や急に潸然んだ。何事か知らぬが、學友間に快活と稱さるゝ絹子の此の態を見ると、初野も胸を締めらるゝ心地である。今更改めて聽くまでも無い、芳江の友情、優しい氣質は、數年來の交際で深く知り拔いて居る。芳江は自分を姉と呼ぶが、自分もまた親身の同胞の様に思うて居た。學校に出ても互に顏を合はせるのを樂とし、歸る時も連立つて同じ道を歸り、それでも飽足らず、休日には必ず一緒に遊び暮すのであッた。過般の入院中は、殆ど毎日の如く見舞に來て呉れた、退院した時も彼様なに多額の見舞料を贈つて呉れた、その他、細かな事までを擧げたならば、私は此の儘にも駈けて行つて、芳江様に謝罪らなきや濟まない様な氣がする。

けれども私は、最う芳江様とは顏を合はせまいと決めて居る。假し逢ふにしても、それは卒業の後、私も相當の地位を得て後、一年か、二年か、それとも五年十年の後かに會へば會ふ心算である。子爵に彼様な暴行に遭ひ、夫人に彼様な侮辱を受けた時は、口惜さに私は死んで了はうと迄思つた。元より彼事は芳江様の關係した事ではない、それは最う知れ切つた話である、また私は、親達が憎いからと云つて、其子にまで怒を轉す理由は無い、けれども、其様な理由は無いけれども、何うも舊のやうに彼の人と親しくする心は失くなツて了つた。彼時限りに會はぬので、幾回か書簡を寄來して、私の心を解かうとして呉れた、私は其の度に泣かされた、返事を認めようとして、筆を執つた事も幾回か知れぬ、けれども私は、只の一回も書簡を遣らなかツた、濟まぬと思ひながらも、一面には、情を殺して耐へ居る事を、何だか勝利を得たやうに思うて居た。芳江様は二人の間を調停して貰ふ爲に、房州から東吾様を呼ぶと云ふ、東吾様の云ふことなれば、私は何事でも聽くからと思うてであらう…、だが、此の事許りは、私は他の言で心を變へぬ心算だ、また東吾様の來るのを待つても居なかッた。幾ら許嫁の頼でも』、私の事で態々房州から歸る様な東吾様で無いのは知つて居る…、現に私の推測通り歸つて來ないでは無いか…、それとも、手紙では如彼云ふものの、東吾様には未だ何とも云つて遣らないのかも知れない。

いや、東吾様が何うであらうと、最う私の

關係した事では無かツた、先刻殿井樣に行かうとして、腕車を待つ間に偶と彼の人の寫眞が目に付いて、それから急に殿井樣に行くのが可厭になツて…、斃るゝ迄も獨立して、遣り遂げようと云ふ氣になツた…、彼樣な物が有つては、兎角心を鈍らせる原となるから、最う彼の人の事も悉り心裏から除る爲に…、また一切の依頼心から絶縁する爲に、彼の通り私は寫眞をも裂捨てて了つたではないか…。

「萩原樣、」と絹子は目を拭つて、「失禮ですが、貴女、一寸私の宿へ來らして下さらない。」

「芳江樣が居らツしやるでせう?」と初野は我と我が氣を勵まして、「私は、彼の方に會ひ度かありませんもの…。」

絹子は呆れて、久くは其の病氣と、續く苦勞とに憔悴れた蒼白い女人の顏を眺むるのみである。

絹子の觀察した所では、此の萩原初野と云ふ人は、他で評判のやうに只だ美しい、只だ温和しい許りで無く、心の奥の方には、男兒の樣な確乎した思慮を藏つて居る人とは思つて居た、けれども、此うまで情の強い、此うまで思切つた事を口にする人とは思はなかツた。熟は分らぬが、何でも餘程深く芳江を可厭に思うて居るに違ひ無い、如何なる事情が、あれ程に親しい二人が間を隔てたものであらう、私も芳江樣の情に厚き言に感激したとは云へ、何處までも舊の親しい間に復さんと誓つたのではあるし、又初野樣の此の樣子を見れば、容易ならぬ苦勞をして居るのは明白である、何うしたら平常の温和しい初野樣に復し、芳江樣の彼の有情い心を酌取らせる事が出來よう、と考へながらも、

「萩原樣、貴女、何うして爾う芳江樣がお嫌ひに成ツて? 彼樣なに貴女の事で心配して居らツしやるのに、夫ぢや、芳江樣が可哀想よ。」

「いゝえ、嫌ひの好きのツて云ふ事ぢやありませんの。」

「でも、芳江樣に會ひ度か無いなんて…?」

「然、それは…。」

「ぢや、お嫌になツたからでせう? 何故です、何か、其處には理由が有るでせう?」

「いゝえ、別段理由も何も…。」

「だツて、其樣な筈は無いぢやありませんか、彼樣なインチメートなものが、急に其樣な…。」

「矢張し、私は此樣な馬鹿なんですから…。」

と云つて、初野は急に潸然んだ。

絹子は目を睜つたが、

「萩原樣、貴女、私にまで其樣な事を仰有るのは酷いわ。私は、芳江樣に頼まれたと云つても、貴女とも親友の心算だわ、何方を贔屓するなんて、偏頗な考へなんぞ有つてませんわ…、それを其樣な、敵の片割か何ぞのやうに仰有るんだもの、餘りだわ。」

「いゝえ、貴女の厚意は、それは熟く解つてますけれど…。」

と謝罪るやうに云ふと、反對に、絹子の方が不機嫌な顏色を續けて、

「私は、貴女の御意見は御意見で、十分に伺ふ心算ですわ。今日は只だ、芳江樣の方を先に聽いたもんだから、非常に感動し了つて…、」と云つて言を切つたが、「だツて、芳江樣の話を聽けば、實際無理は無いんですもの…、幾ら謝罪つて上げても、返書一つ下さらないと云ふし、房州から兄樣に來て貰つて、種々謝罪つて貰はうとしても、貴女は避けて居らしツて、何うしても會ツちや下さらないと云ふぢやありませんか…。」

「…兄樣に來て貰つて…、東吾樣ですか?」

「え、東吾樣が訪ねて行つても、貴女は會は無いんだツてぢやありませんか?」

「東吾樣が…? 何日です…?」と云つた

が、何うしてか忽ち赧くなツて、「嘘でせう、其様な事有る筈はありませんもの。」
「東吾様の訪ねて行つた事？　何だッて貴女、芳江様が嘘云ふもんですか……、貴女は、芳江様を其様な方と思つて居らッしやるから可けない……。」
「いゝえ、爾うは思ひませんけど、」と敏捷く打消したが、「だツて、東吾様が訪ねて來らしッたなんて、其様な事はありませんよ。」
　乃で絹子は、芳江から聽いた一部始終、即ち東吾の訪ねて行つた事、書簡を出しても返辭無き故、怒つて房州に歸ると云つた事などを告げた。而ると初野は顏色を變へて、
「まア、何うした間違でせう、其様な、名刺の事も知らないし、お書簡だツて、實際參りやしませんもの……。」と呆れたが、「ぢや、東吾様は、本當に歸つて來らしッたんですか？」
「貴女は、未だ夫を疑つて居らッしやるんだもの……。」
「いゝえ、疑ふ譯ぢや無いけど……。」
「ですから、此うして、立つててお話も出來ないから、まア私の宿へ來らしッて下さいよ、未だ、お話しなきやならない事が色々有るんですもの。」
「爾うねえ。」
「可いぢやありませんか……。芳江様なら、最う居らッしやいませんよ、疾に歸りましたよ。」
「參つても可いんですけれど……、」
と云ふ時、背後の方から空腕車の音が近付いて、質屋へ使に遣つた車夫が來るので、初野は此方から歩を運んで、最後の羽織までを加れて辛と貸して呉れたと云ふ其の金を受取り、少し用事が出來て寄道をする、お前は歸つて呉れと車夫に別れ、さて餘り進まぬ風で、絹子と共に其の寄留し居る家へと出掛けた。

第二十二　をりあひ

(一)

　腹の裂ける許りに詰込まれた旅行鞄、毛の摩切れた白毛布、それに洋傘まで添へて、整然と玄關に揃へて在るが、六時の發船に乘込むと云ふ東吾は、七時が過ぎても未だ歸つて來ない。無論明朝に延したのだらうが、「何處へ行らしたんだらう？　何うなすツたんだらう？」と主婦は獨り氣を揉んで居た。
　東吾の此家に寄留してから最う三年にもなる、目下は某會社の支店長たる良人は、夏本子爵の登庸で今日の地位にも在るので、主婦は大切の主人の相續人を預つた心得で、表面のみならぬ親切をも盡し、また、惡い友達などに誘はれて、惡い遊など爲ぬ樣にと、及ばずながら監督をも勤めて居る心算である。
　良人は二箇月に一回、或は三箇月に一回歸る限りで、跡には自分と、未だ小學校に通ふ病身の男兒が一人、此れに下婢を加へて、東吾とも合せて四人であるが、今日は主婦の姪に當るお梅と云ふのが遊びに來て居る。
「叔母樣、孰せ明日だらうから、彼の鞄は二階へ上げて置きませうか？」と其のお梅が主婦に云つた。
「爾うねえ、だけれど、梅ちやんの力で持てるかい？」
「大丈夫よ叔母樣……。」
「おや、歸つて來らしッた樣だ……。」
と主婦は表の木戸の開く音に耳を澄まして、煙管を火鉢に叩くと、お梅は敏捷くも玄關へ出迎へたが、露路の植込に、夕陽の華かに消えて行く間を、繪の樣な美しい女學生が入つて來た。
「御免下さいまし、あの、伺ひますが、」と如何にも體裁惡氣に、「此方樣に、夏本樣て云ふ方が

居らッしやいますでせうか？」
「はい、居らッしやいますが、」とお梅は何故か赧くなッて、「只今は、あの御不在なんでございますの……。」
「左樣でございますか……、それでは、最う房州の方へお出立なすッたんでせうか？」
「い丶え……。」と目を睜つて、「まだ、お出立にはなりませんの……。」
「それでは、最うお歸りに成る頃ぢやござんすまいか？」
「如何でございますか……。失禮ですが、貴女は何誰樣で……。」
「私は、あの……、萩原と申しますもので。」
「萩原樣と……？」
「あの、芳江樣の學友でございます……。」
「あ丶、」とは云つたが、お梅は學友と云ふ語を聞違へたのか、「それでは、お待ちなすッて居らッしやいますか？」
「左樣でございますねえ……？」と考へて居る。
「最うお歸りでせうよ。」
「はア……。」矢張り決し兼ねて居る。
「何か、急な御用でも……？」
「え、少し……、」と云つたが、「では、再伺ひますから、お歸りなすッたら何卒。」

お梅が承知の旨を答へると、丁寧に會釋して出て行く。その背後姿を見送つて居たお梅は、頓て茶の室に戻つて、今の女學生の美しかッた事を述べて、さて何樣な用で訪ねて來たのだらう、東吾とは何う云ふ間だらう、樣子が餘程怪しかッた、などと想像を加へて、主婦が芳江の友達で、何か芳江から頼まれて來たのであらう、と云ふに係らず、今に東吾が歸つたら存分あぶらを取つて遣らうと思つて居る。

主婦は主婦で、如彼いふ堅い東吾であるから、女の問題で間違などの有らう筈は無いが、其樣な者の訪ねて來る事が已に知れては、私の不取締にも當る、假令在宿の處へ來ても、何らか會はせ度くないものだが、などと考へて居る。

ところへ、横町を入つて來た腕車の音が止つて、垣根の外に高い男の聲がする。
「おや、夏本樣のやうぢや無いか？」
「爾うよ、夏本樣よ。」
叔母と姪とが、一緒に玄關へ出ると、
「お危うございます。」
車夫が先になッて、東吾の足許に提灯を照しながら入つて來た。
「其樣なこと爲んでも分る……。」と云ふ東吾の聲は常に無く荒く聞える。
「叔母樣、醉つて來らしッてよ。」とお梅が呟くと、
「爾うなやうねえ。」
と云ふ中に、車夫より先に格子戸を開けようとした東吾は、敷居に躓いてよろ／＼と家に入つたが、其處に出迎へた主婦を見ると、
「やア、今日は到頭遲くなッ了ひましたよ。」と笑ひながら云ふ。
「何うなすッたんです、まア？」
「今日ね、彼時から買物に行くとね、途中で友達に逢つてね……。はゝゝ、到頭曳張り込まれッ了つてね。何うです、暢氣なもんでせう、はゝゝゝ。」と又笑つたが、「出立は明朝です、明朝の七時……。」と云ひながら、直ぐ梯子を登らうとする。
「あら、お危うございますよ。」と主婦は止めようとする。
「一寸待つてらッしやいよ、今洋燈を點けますからさ。」とお梅も止める。
「なアに、大丈夫でさア。」と他の手を拂つて、暗い梯子を駈ける樣に登つた。足許は確かのやうだが、跡には噎る許りの酒の香が漾ふ。
お梅は燐寸を持つて直ぐ二階へ行つたが、東

吾は雨戸を開けながら、

「暑くなツたねえ、此樣になツちや、もう東京には一日も御免だなア。」

「だッて、貴方が出立つと云つても、立たせない女が在つたら何うなさるの…?」とお梅は調戯ひ始めた。

「何だと?」

「ほゝゝゝ。」と高く笑つて、「先刻ね、大變な別嬪樣訪ねて來らしツてよ、是非ね、貴方に會ひ度いんですツて。」

「私に會ひ度い…?」と初めてお梅を見返つたが、「馬鹿なこと云へ。」

「あら、本當ですよ、本當の事ですよ。ぢや、其樣なに疑るなら默つてませう…、大變に美しい女學生さんよ、默つてませうよ…。」

「女學生?」

「知らないわ、執せ、私の云ふ事なんぞ譃なんだから…。」

「ぢや聽かん! 彼方へ行つてお居で、煩い。」

「そア、彼樣な事を…、本當に夏本樣は邪險だよ。可いから、今度御邸のお孃樣が來らしツたら、皆な告げて遣げるから…、あの、夏本樣には、萩原樣て云ふ美しい女學生が附いてますから、お氣を注けなさい…。」

「なに、萩原…?」

「知りませんよ。」

「ぢや、萩原て云ふ女が訪ねて來たんか?」

「如何ですかねえ…。」

と云ふ處へ、階下から主婦が登つて來て、

「何でございますかね、今の車夫が參りましてね、一寸お目に掛り度いッて申しますが。」

「僕ですか? 何だらう、酒代でも呉れッてんだね?」

「いゝえ、其樣な樣子でもありませんよ、是非、一寸お目に掛りたいんですツて…。」

東吾は顏を顰めたが、

「待つてるんですか?」と問いて、衝と立つて梯子を降り、玄關の障子を開けるや否や、「お前、今の車夫か、何だ?」

「へ、一寸今、其處で賴まれましたんで…。」

「何だ?」

「えゝ、萩原樣て仰有る方がね、一寸、お目に掛り度いから、一寸旦那に伺つて見てお呉れ、て仰有いましてね…。」

萩原と聞いて東吾もはツと思つたが、考へる暇もなく、

「お目に掛り度いから聞いて呉れ…? 何を問くんだ、居るか居らんかと云ふのか? それとも、會ふか會はんかと云ふのか…?」と詰責する如き語調。

「へ、如何でございますか、旦那にお目に掛つて、竊と爾う申上げて呉れ、て仰有いまして、へ。」

東吾は車夫の云ふ事など耳にも入れず、

「夫は何うでも可い、何の用が有るんだ? 其の用事に依つて會ひも爲よう、併し、僕は暇な人間ぢや無い、長い談ならお謝罪だ…、」と云ふ時、格子を透して薄月夜の露路に、來るでも無く去るでも無い女の姿が眼に入ると、「厭になりやお謝絕だ、先方に會ふ用が有つても、僕には其樣な用は無い、また義理も無い、會はうが會ふまいが僕の勝手だ…、爾う云つて呉れ!」

と云ひ捨てて障子をばたり、直ぐ中に引込むと、其處に起つて居るお梅に突當る。

「何です…?」とお梅は低聲に問く。

「お前なぞ關係した事ぢや無い。」と不愛想に云つて、跫音荒く梯子を登ると、

「何でございます?」と主婦も梯子の口から階下を視いて居る。常ならぬ東吾が聲を、喧嘩でもする處と思うたらしい。

「なアに、詰らん事てす、」と東吾は嘲る樣に答

へて、つか〳〵と机の前に坐つたが、またむくいゝり立上つて、「今夜は馬鹿に暑いぢやありませんか……僕許りか知ら？」

「御酒を召喫つたからでせう、」と東吾の椽側に出るを眺めて、「まア、制服をお脱ぎなすツたら何うです……？　階下からお鞄を持つて參りませうか？」

「いや、構ひません……、」と其處を歩いて居たが、急に上衣を脱いで室内へ抛込み、突然に話出した。「芳江の友達でね、麹町の邸へなぞも屢く遊に來るんだが、何か、養母と衝突したとかなんとか云ふんで、芳江は非常に心配してね、今日も、彼り通り出立つのを見合して呉れなんて、僕を無理に引留めに來たんですよ……。」

ところへお梅が登つて來て、

「夏本樣、來ましたよ、先刻の別嬪樣また來ましたよ。」

「なに、また來た？」

「ほゝゝ、體裁が惡いもんだから、彼樣なお顏色をなすツて……。」とお梅は笑ひながら睨める。

「何ですよ梅ちやん、」主婦は窘めて、「確り申上げなさいなね。」

「だから、夏本樣にお目に掛り度いッて……。叔母樣、それは本當に綺麗な女學生よ、服裝は少し何だけれど、色なんざ雪の樣でね……。」

「ま、其樣な餘計な事を、」と主婦はお梅の口を止めたが、東吾を見ると默つて衝立つて居るので、「階下に待つて居らッしやるのかい？」

「え、待つてらッしやるの。體裁が惡いか何だか、小さくなツてね……。」

「今時分何の用が有るんだ？　梅ちやん、爾う云つてお呉れ、其の用事の種類に依つては、面會をして遣つても可いけれど、僕には僕の都合と云ふものが有る、或は、直ぐ歸つて貰ふかも測られないから……。」

「其樣な理窟なんか、私には云へ無くッてよ。」とお梅は顏を顰めて、「何樣な用だか、會つてから聽いたら可いぢやありませんか？」

「面倒臭い、おや、一寸會つて遣らう。」

「ぢや、お上りなさいッて、爾う云ひますよ。」

お梅は階下に降りて行く。主婦も其邊を片付けて出て行つた。東吾は首を傾げて考へて居たが、また椽側を歩き出した。

（二）

徐に梯子を登る音がして、久くして初野が入つて來た。東吾はそれを、一概に自分に對して恥かしい爲とのみ解つた。

二人が顏を合はせるは、日外東吾の房州へ立つ前日、初野が恭一の家へ行く途中、人通多い黄昏時に、一寸言を交した以來初めてである。東吾は、敏捷くも脫いだ上衣に手を通し、洋燈の前に肩を聳らして、性來脊の高いのを反身に、頭から、初野を見下す如く構へて居たが、其の服裝から其の容貌から、僅の間に窶れて見えるのには、流石に一驚を喫したのである。

初野の方では、斜に射す燈火を便に、艶々くと紅味を帶びた東吾の半面、氣力の充満ちた眼の光、服裝などには相變らずの無頓着ながら、筋肉の發達著しく、何うやら又肥つた樣なのを見て、嬉しいとも付かず懷しいとも付かず、一種の感に胸は躍つて、眼は自然と淚ぐむのである。

「……何樣なにか御立腹でせうけれど、私は、先刻、三浦樣から聽きまして、初めて知つたものですから……。」と初野は、先づ謝罪る如き語調で云つた。

玄關を入る迄は、第一には久く御無沙汰の挨拶、夫から入院中に見舞はれた禮などを述べ、それから緒子に逢つて聽いた一部始終に移らう

と、胸の中に順序も立てて居たのであるが、東吾の前に出ると、最う其の順序も何も亂れて了ふのである。

「夫は何の事てす！」東吾の眼は鋭く光つたが其の語調は如何にも冷淡に聞えるのである。

「あの……、私の下宿へ訪ねて來らしッた事も、御書簡を下すッた事も、今迄些とも存じませんものですから……。」初野は變に氣が更まッて、何うも思ふ様に口が利けないのである。

「それが何うしたと云ふのです？」と詰責する如き語調。

「それで、お詫を致さなければ濟まないと存じまして……。」

「御用と云ふのは其事ですか？」

「は。」と東吾を視ながら、「お詫を致しまして、而して、あの、矢張り從來の如に……、萬事御助力を願ひ度いと存じまして……。」

「助力？　いや、其は御謝絶です。」と東吾は決然と云ひ放つた、「又、詫るとか何とか云ふけれど、何も詫びて貰ふ事は無い、其様な事は最う聞き度くも無い、最う過去に屬した事で、私の頭から消えた事で、最う私に無關係の事です……。貴女だッて爾うでせう、其の時の都合で、他が訪ねても面會を謝絶るでせう、手紙を遣つても返辭も出さんでせう……、詰りそれと同じ理窟でさ、僕には僕の都合がありまさア……、最う聞き度くも無い、貴女とは會ふのも厭だ……、最う歸つて貰ひませう？」

「はい……。」と許りで、初野は溢るゝ涙を袖に隱した。

二人は久く口を噤んだ。何時の間にか風が出て、洋燈の火光が頻と動いて居る。庭の木の葉が柔かに私語く……、途切途切に遠雷の音が聞える。それで居て、縁側には薄く月光が射して居る。で、久くして、

「爾うお解りなさるも御無理はありませんけれど、全く、お訪ね下すッた事なんぞ、少とも存じませんし、お手紙も達かないもんですから……。」と初野が辯解かうとすると、

「手紙が達かない？　貴女の下宿には、郵便が達かんですか？」と東吾は嘲つた。

「は。達きさへすれば、返事を上げないことは有りませんけれど……。」

「爾うですか、成程、郵便が達かんのですか！　や、立派な御辯解を聽きました。はゝゝゝ、」と突然笑つたが、「貴女には、總て郵便が達かんものと見える……、芳江の話では、三回とか手紙を出したけれど、一回も返書が無いと云ふが、ちや、それも郵便が達かんのでせう……、はゝ、あはゝゝ。」

初野は辯解く言も無く、片手を疊に顏を背向けて、落つる涙のはら〳〵と音するのみである。

「いや、其様な事は何うでも可いのです、」と東吾は元氣の充ちた聲で、「出した郵便が達くか達かないか、僕は其様な事を詮議してる暇は無い、其様な愚物でも無い心算だ……。まア、今に成ッて聽く事も無い、また云ふ事も有りません、失禮だが歸つて貰ひませう。」

「……芳江様に返書を上げないのは、それは、私が惡いんですけれど、實は、間違つた考へに支配されまして、□浦様から聞く迄は、迷が覺めなかッたんですもの……。ですけれど、貴方のお手紙だけは、全く私の手に達きませんでした……、實際の事です、貴方だッて、私の平生は御承知の筈ですが、私は、其様な虚言を吐く者か何うですか、少しお考へ下すッたら、直ぐお疑ひは解けることと存じますが……。」

「これは大變な辯駁を聞くもんですね……。」と嘲る。

「いゝえ、辯駁ぢやありませんが。」

「だが、疑ッちや惡いと云ふ様に仰有るけれど、

疑はうが疑ふまいが、貴女に損害の掛らない以上、僕の自由でせう‥‥？」と云つたが、更に傲然として、「僕の自由だ、貴女なんぞ關係した事ぢや無い！」

「は、それはもう、爾うですけれど‥‥、」と涙に妨げらるゝ聲を斷々に、「ですけれど、私の身に成れば、何處までもお疑ひを晴らして戴かなきや成りませんから‥‥。」

「何故です？ それは親しい友人間‥‥、で無くも、今後交際を續けようと云ふ間の事でせう？ 僕は、貴女とは友人ぢや無い、貴女に交らうなどと思はん。」と鋭く云つたが、忽ち又嘲る樣に、「そんなら可いでせう？ 疑はうが疑ふまいが、僕の自由でせう？」

初野は最う云ふ處を知らなかッた。久くして辛と面を擡げ、

「私は、芳江樣に謝罪りまして、從來の樣に御交際を願ふ心算ですけれど、それでは、最う芳江樣とも交ることが出來ないでせうか？」

「それは御勝手さ、芳江の事までは僕は干涉せん。たゞ、僕だけは絕交して貰ふのです‥‥、隨分貴女の爲には、是まで種々‥‥、」と云ひ出さうとして急に語調を更へ、「いや、今に成ッて何も云ふ事は無いが‥‥、最う、これで歸つて貰ひませう！」

今は取着く島も無いのである。初野も詮方なしに座を起つた。東吾は其の跡を眺めて居たが、頓て自分もむくりと起つて、室の中を步きながら、

「ふん、何も知らんと思つてるが、畫工との關係も知つてる、妹を賴んだ事も知つてる‥‥。」

と聞える樣に獨語したが、忽ち耳を驚かしたのは、梯子を滑り落ちたけたゝましい響である。

「あれ、叔母樣大變だよ、夏本樣、疾く來て下さいよ。」とお梅が叫ぶ。

東吾は夢中に梯子を駈下りた。其處には初野が橫に倒れて、氣絕をしたのか、手を掛けても身動きもせぬ。藥を出せ、醫師を呼べと騷ぐ人々を制して、東吾は初野を抱起した。

「おい、水を持つてお出で‥‥、それから彼の、香水は有りませんか？」

「有りますよ、梅ちやん‥‥。」と主婦は洋燈を持つて顫へて居る。

東吾はお梅に手傳はせて、初野の頭を冷させ、鼻に香水を當てなどしたが、間も無く美しい眼がぱッちり開いた。

「貴女、氣を確りなさいましよ。」と主婦は耳に口を寄せた。

「それ、水です、お呑みなさい。」と東吾はコップを脣に當てて遣つた。

その水よりも、差着けられた洋燈の下に、初野は凝然と東吾を視詰めて、

「東吾樣、貴方、堪忍して下さいな！」と手を握つて、はら〳〵と淚を零した。

第二十三　吟味

（一）

その明る日の午後のことで、切通坂下なる畫家の二階に、主人の恭一と、島井の主婦とが、其處に出て居る鮨を摘まうともせず、好きな煙草を喫むことも忘れて、互に澄まぬ顏色して對座つて居る。その中にも主人の恭一は、平生から、あれ程大切にする鏡にも未だ向はぬらしく、頭髮も亂れたまゝに任せて、着物はネルの寢衣の上にねんねこを亂次く被り、腕組を固く、時々溜息を吐くが、其の癖主婦を見る眼は常に無く鋭く光るのである。

「旦那、爾うお怒んなすッても困るぢやありませんか、早速お知らせ申さなかッたのは、夫ア私の手落でございましたけれど、何しろ餘り急

で、何が何うしたんだか、些とも譯が分らないんですもの……。」と主婦は鎭める如に云ふ。

「いや、怒るんぢや無いよ、怒ると思ふから間違つてるんだ。今に成ツて、怒つた處が何にも成らんぢやないか？」と恭一は苦笑して、「だから怒るのぢや無い、假し怒るにしても、お主婦に對して怒る理窟は無い、無いが……只だ何うも忌々敷い、お主婦だツて知ツてるだらう、僕は、如何程彼女の爲に神經を勞したか……、幾回彼女に欺かれたか……。」

「それは最う、今更仰有るまでも有りませんとも、私でさへ、忌々敷くツて忌々敷くツて、假し、旦那が此の儘で濟まさうと仰有つても、私が濟まさないと思つてる位ですもの……。」

「幾ら義理を知らない女でも、現に、妹が厄介に成ツてるぢや無いか……。」

「彼樣な肺病患者の家になぞ奉公して、全く、旦那が助けて下すツたも同じ事ですからねえ……。」と恭一の後に付いて云ひ繼ぐ。

「それに、只の一回禮にも來やしない。」

「その上、急に家を持つ事に爲ましたから、妹は私の方に返して下さい……、これぢや、恩も義理も知らない、宛然、犬畜生同樣ですからねえ！」

「僕の不快に感ふのも無理は無からう……。決して未練が有る譯ぢや無い、彼樣な女に愚弄されたと思ふと、只だそれが忌々敷くてならん。何うも、此の儘には濟まされん……。」

「ですから、此うなれば、最う構ふこた無いから、一つぎい〳〵云ふ目に遭はしてお遣んなさいましよ。」

「けれども、家を持つ位だから金は出來たらうし……、」と考へて、「迫めて、其の金を出した奴が分ると面白いんだが……。」

「波ちやんに訊いたら分るか知れませんよ…。」

「分らない、訊いたけれど知らなかツた。」

「ぢや、口止されてるんですよ、彼の娘だツて怜悧な娘ですもの、姉が家を持つと云つても、お金を何うするか位訊きもしないで、おいそれと同意するもんですかね。」

「爾うか知ら、」と首を捻つて、「ぢや僕は、彼の姉妹の爲に、好きな樣にされてるんだな。」

「何樣な事を云ふか、一つ吟味して見ようぢやありませんか？」

「それも宜からう。」

「階下に居るんでせう、何して居ます？」

「何してるか……。先刻歸つて來て、姉が家を持つから、姉と一緒に成り度いツて云ふからね、餘り唐突で、僕も吃驚したし、夫に、ぐいツと感つたもんだからね、散々叱付けて遣つたんだ……、多分泣いてるだらう、可哀想た思つたが、彼の時は耐らなく腹が立つたよ……。」

「爾うですとも、誰だツて貴方……。ぢや、爰へ呼んで參りませうか、何樣な事を云ひますか……。」と主婦は階下へ降りて行つた。

（二）

階下の梯子傍の長四疊で、我が机に小さく泣伏して居るのはお波である。

「お波ちやん、何して居らツしやるの？」と背後から優しく聲を掛けて主婦は入つて來たが、「泣いてらツしやるんですか？」

お波は坐住を正して主婦に向直つたが、口は利かずに、矢張り泣いて居るのである。

「お波ちやん、何うしたら可いでせう、旦那は大變な御腹立で、私ア今、散々お叱言を頂戴した所ですよ……。夫も、お波ちやんを可愛いと思つて居らツしやるからなんだけれど、」と困つた顏をして、「貴女は、何うしても阿姉樣と御同居に成るんですか？」

お波は顏を隱したまゝ點頭く。

「ぢや、最う、此處の旦那の御世話には成らな

いッて云ふんですね？」と顏を覗くと、返辭も無ければ頭も動かぬので、「ぢやア、阿姉樣が、學校に入れて下さるのですね？」

「其樣な事は、何うだか分らないけれど‥‥。」

「分らない‥‥？　だッて、其のお談が有つたでせう？」

「いゝえ、無いの。」

「それぢや、是から何う爲ようッて的も無く、阿姉樣が同居に成れと云ふから、それで只だ御同居に成るんですね？　まア、お怜悧な貴女にも似合はないねえ。」

「だッて、詮方が無いんだもの‥‥。　厭だッて云へば、最う今後は、姉妹でも何でも無いッて云ふし‥‥。」

「何故です？　なんぼ阿姉樣だッて、其樣な勝手な事が有るもんですかね。貴女もまた、何でも阿姉樣の云ふ通り成ッて、唯々してる事は無いぢやありませんか、何う云ふ譯でお家を持つか、お家を持つてからは何うして行くか、其點を聽きもしないで、御親切にして下さる此方の旦那から離れるなんて、餘り向う見ずぢやありませんか‥‥。」

「それは聽いたの‥‥、聽いたけれども‥‥。」

と言ひ澱む。

「ぢや、何う云ふ譯です？」

「お主婦、旦那樣には祕密よ、」と願つて、「あのね、私がね、旦那の樣な道樂者の家に居るとね、姉樣に惡い噂が立つて、最う姉樣の一生が棄つて了ふんだッて‥‥、だから、最う一時も斯うしちや置けないんだッて‥‥。」

「旦那が道樂者だから、惡い噂が立つんですッて、まア！」

「お主婦、旦那樣には祕密にして下さいよ、よ。」

「それは可いけれど‥‥。而して、お家を持つてから何う爲さるんです‥‥お金をさ？　誰か、お金を出して下さる人でも在るんですか？」

「私もね、それを聽いたのよ‥‥。」

「在るんですか？」

「いゝえ、無いの。無いけれどもね、今は最う、お金の事なぞ彼此云つてられ無いッて。」

「其樣な亂暴な事を‥‥、御自分はそれでも宜からうけれど、お波ちやん許し可い迷惑ぢやありませんか、」と云つて一段力を籠めて、「ねえ！」

「いゝえ、私ね、姉樣の云ふ事だからね、私、些とも迷惑た思はないの。」

「何樣なにお困んなすッても？」

「え、何樣なに困つても、私、姉樣と一緒なら辛抱するの、」とお波は涙ぐんで、「だッて、今度はね、何だか知らないけれど、姉樣にも、大變な譯が有る樣なの‥‥。」

「大變な譯ッて、何樣な譯？」

「私は知ら無いけど‥‥。」

主婦は考へる顏をして、

「昨夜、阿姉樣は何處へ行らしッたか、貴女お聽きでしたか？」

「姉樣？　姉樣は何處かへ出て？」

「え、何でも、遲うくね、一時頃にお歸りでしたよ。」

「まア、何處へ行ッたらう？」

「而して、今日になると、急に此樣な話でせう‥‥。ですから、何でも昨夜、其の行らしッた彼方に、何事か勃發ッたんですよ。」

「何うしたんだらう？　あゝ、私速く姉樣と一緒に成り度いわ。お主婦、何卒後生ですから、旦那樣へ願つて頂戴な、ね、後生ですから。」

とお波は、此う云ふ中も心の急く態である。

第二十四　自炊

（一）

駒込吉祥寺の裏手に、百姓家で植木職を兼

ねた仙右衞門と云ふのがある。廣い庭の内を、母屋からは話聲も達かぬ程に離れて、昔隱居所にでも建てたらしい古い藁屋根の座敷があつて、別段貸室の札を出して客を呼ぶでも無いが、獨身の巡査、工場の勤人、試驗の準備に閑靜を望む學生など、年中借人の絶えたことが無いのである。

初野姉妹は此の離室を夏までの我が住居と定めた。

通までは六七町、兩側は畑を圍ふ生垣が繁り、目に入る物は木立、竹藪、都の響と云つては、朝夕の豆腐屋も風次第で聞ゆること稀なのである。可弱き娘の身で、夜などは一寸も門を出らるべくもあらず、晝でも吹降りの日などは、物賣一人來さうも無い。初野とて好んで此家を借りた譯ではない。何を云ふにも夏までの籠城、有り物の總てを賣盡しても、中々それ迄待耐へさうも無ければ、便不便の擇好云うて居る處でなく、賃の安いを長處に、早速此家と決めた次第である。

家は六疊一室限りで、外に形ばかりの臺所、昔は何に用ゐたものか無用の土間長く、此處には筍がひよい〳〵と頭を出して居る。此の六疊に僅か許りの荷物を運んで、南の障子際に姉妹の札を列べたが、木立の枝檐に近く、空は薄く曇つて、掃除した後の家の臭が鼻を襲ふ。

「淋しいわねえ。」とお波は幾度か口に出す。

「此處で、何樣なに勉强が出來るんだらう。」と姉は元氣好く云つて見せる。

けれどもお波は、兎もすれば涙ぐんだり、悄然外を眺めたり、何うやら此處に住むことを嫌ふ如に見える。初野は、それを見ても氣の付かぬ態をして、元氣好ささうに荷物を片付けて居たが、到頭耐へ切れなくなツて、

「波ちやん、何うしたの？　何だツて其樣な厭な顏をしてるの？」と口を向けたのである。

「何うもしないけど、私、何だか……、」と涙が溢れる。

「また……、可けないよ波ちやんは、直ぐ泣くんだもの。彼程固く決めたことを、貴女最う忘れたの？」

「忘れやしないわ……。泣きやしないわ。」と眼を拭つて、「私、斯う云ふ處初めてだもんだから、何だか怖いやうで……。」

「何だねえ此の人は、十三にも成ツてさ……、」と云つたが、急に高く笑つて、「何が怖いの？　直ぐ其處に、前の家が在るぢやないの……、其樣な事を云ふと、人に笑はれますよ。」

初野は靜かに云つたが、その聲が止むと前より又一倍寂然となツた。お波は物を片付ける事もせずに、默つて姉の顏ばかりを視て居る。而ると初野も、最う妹を慰める力もなく、穴の中にでも沈んで行くやうな、心細い厭な氣が身體を締めるやうに迫つて來る。

(二)

淋しいのも、苦しいのも、それは元から覺悟の前であるのだ。泣いたり、怒つたり、種々な事をして妹を諭して、漸との事で納得させて、最う愚癡は云はぬ、泣言は言はぬ、渡る浮世の波は荒くとも、姉妹二人が手に手を提つて、假令中途で斃れるとも、二人此うして一緒に斃れるまでの事、それも、「幾ら辛いたツて、最う二月のことぢや無いか。」と姉が勵ませば、

「姉樣、私辛抱するわ、何樣なに辛いツて、死んだ氣になツて辛抱するわ。」と堅く誓ひ合つて、食ふ物が盡きれば、互に肉を削いでも食はす樣な心の中！

だが、愈よ此處に引移つて、最う此れからは此處が住居と決ると、言を謹んでも自然と出て

來る溜息、妹は姉に覺らせまいと力むると、姉はまた、然あらぬ顏色までそれと定めて、

「あゝ可哀想に、辛いと云つても鄕里の兄樣の傍に居たら、此樣な苦勞は爲ずに濟むのに……。兄樣より私を好きなのが、矢張り此の娘の因果と云ふんだらう？」

幾ら思ひ定めた事でも、妹の傷しさには胸も亂るゝ。此う云ふ事なら、矢張り妹のみは殿井樣に賴んで置けば宜かツたか知れぬ。主婦も彼程まで云つて吳れたし、お波も彼樣なに彼方に居たがツたものを……、それを、私は飽までも強情を通して、他の言を打消して、無理に此樣な事に決めて了つた。何が何でも、殿井樣と關係を絕つて、島井の家を引越さなければ、最う生きて居る事も出來ない樣に思つて、これに反對する者は、妹でも敵の樣な氣さへした。全く私は夢中だツた。

何故彼樣なに夢中になツたらう、殿井樣と關係を絕つて、島井の家を越すのが、何故それ程の大事件だツたらう？ 東吾樣は、妹を彼樣なにして置くのを、何か忌はしい關係が、私と殿井樣との間に在る故と疑つて居た。郵便の達かぬ事も、訪ねて下すツたのを知らずに居た事も、下宿の所業で無く、私が一時を遁るゝ爲の虛構事の如に疑つて居た。私はそれが悲しさに、そんなら明日にも轉宿致します、妹をも殿井から取返しますと東吾樣に誓つて見せた。私は、然うして東吾樣の疑を解かうとした、然うして疑を解かねばならぬと思詰めた。だが、東吾樣に疑はれるのが、何故それ程に悲しいのだらう？

その時の話で勘定すれば、東吾樣は最う房州へ行つて居るだらう……、私が斯うして引越を決行したのも、たゞ彼の人の疑を晴さう許りだのに、肝心の彼の人は、此樣な事とは知らずに居るのだ！

だが、此れを知らしたとて、東吾樣の方で何う爲る事も無からう！ 私だツて、別に斯うして下さいと願ふ事も無いのだ！ 疑を解いて貰ふまでの事だ！ 只だ夫限りの事だ！

と思ふと、初野の頰には淚が流れかゝツた。新に悲しい事の殖えたのでも無いが、沁々と悲しくなツた。最う何を片付けるのも厭になツた。

「私はまア、何うなるんだらう！」と覺えず口に出した。

急に我が身の末が案じられて來たのである。ところへ、遙か母屋の方から、此家の婆さんの聲がして、誰やらお客でも先導して來る樣子である。學校への轉居屆の事で、楠田先生の印を借りる約束だから、必然楠田先生が訪ねて來たのだらう、その他には知つた人が無いから、誰も來よう筈が無い、と思つて、初野は其邊を片付けて、さて入口に出迎へた。

兩側を植木鉢に狹められた庭の間を、雪かと擬ふ白足袋に、萌葱鼻緒の雪駄をちやら〳〵と、服裝は目の覺めるやうな矢羽小紋の風通の袷、黑繻子の美人傘を指輪の輝る纖細な手に把玩りながら、初野の姿を見ると懷しさうに駈寄つた芳江は、

「まア、姉樣！」

「あら芳江樣、何うして此處を……？」

「今ね、島井に行きましたらね、此處を敎へて吳れましたの……」と凝然と初野を見上げた眼は忽ち潤んで、「痩せたわねえ！」

二人は、彼の衝突後、卽ち初野が子爵夫人に罵られた後初めて顏を合はしたのである。その衝突も、間に立つた友人の盡力で悉皆解いて居る筈だが、さて顏を見ると、何と無しに氣が更まツて、舊の如な親しい言葉の出ないのが此る場合の例であるのを、芳江のみは、その言にも擧動にも、些も其樣な影が見えない……。影

が見えぬのみか、舊よりも反つて親しく、反つて隔がなくなツて居る。その上、初野をも自分と同じ意と信じ切つて居るらしく、兎もすれば更まりかゝる初野の言をすら、怪みも疑ひもせぬのである。

「神樣の如な心とは、本當に芳江樣の如な人を云ふんだらう!」と初野は沁々感じて、今迄の我が所爲を心から悔いるのであつた。

室に上ると、芳江は四邊を見廻して、

「大變だわねえ! 私は、此樣な事た思はなかツたのよ……、堪忍して頂戴な、皆な私が惡いんですから、ね。」

「其樣なことが有るもんですか、惡いのは私よ……。三浦樣から熟く聽いて下すツたでせう……?」

「え。だけれど、其のことは最う云ひツこなしよ……。その約束だツたぢやありませんか……。」と芳江は眼を拭つて、「それよりか、何うして此樣な處へお引越して?」

「矢張し、種々と都合が何だもんですから……。」と曖昧に云ふ。

「都合て、マネーの事?」

「え、それも有うだけれど……。」

「マネーの事でせう……? 姉樣、其樣に祕しちや厭よ。」

「祕しはしないけれど……。」

「爾うでせう、マネーの事でせう? ぢやアね、再下宿して下さいな、お願ひだから!」

「また下宿……?」

「え、可いでせう、お願ひだから……。だツて、姉樣が此樣な處に居ては、私は最う、氣に掛つて家に落着いて居られないわ。ね、何卒爾うして頂戴な、ね。」

「ですけれど、彼の家は實に不都合な事が有りますから……。」

「島井が可けなきや、ぢや他の家……。未だ、幾らも良い下宿があるぢやありませんか。ね、何卒爾うして頂戴よ、此樣な淋しい處、速く越して頂戴よ……。マネーなんぞ、最う、姉樣に心配を掛けること無いわ、私一人で出來なきや、また兄樣に歸つて貰つて、必然何うにか爲るわ。」

「もう、阿兄樣は房州へ行らツして?」

「え、過日の話だと、一昨日の晩か、昨日の朝出立つやうな話だツたから。だけれど、また來て貰ふ事造作ないわ。」

一昨日の晩と云へば、自分の訪ねた其の夜である。さては、芳江は未だ彼の夜の事を何も知らぬと見える!

（三）

初野は、東吾を訪ねた先夜の事を祕さうと云ふ氣は無かツた、否、芳江に會つたなら、先づ第一に此事を話さなければなるまい、とまで思つて居た……何も祕す程の事も無ければ、また、自分が祕した處で、東吾の方で芳江に默つて居る筈も無い、先方から云はれぬ前に、此方から云つて了ふに越した事が無いのだ。

けれども、今はそれを言出す機會を失つて、何だか言出し難くなツた、祕しては濟まぬと思ふが、然う思へば思ふ程變に氣が更まツて、口が重くなツて、益々云へなくなる。芳江の方では、其樣な屈託の有らうとは知らぬので、

「ね、越して下さるでせう、私の願だツて、叶へて下すツても可いでせう。」

その同情の深い、優しい言を聞けば聞く程、恐しい罪でも犯してる樣で、心苦しくなる許りである。實は先夜東吾樣の宿へ行つて……、とつい輕く云つて了へば濟むものを、何うしても喉に支へた如でそれが云へないのである。況して、東吾の疑を解き度い許りに引越をして居ながら、その許嫁の芳江から默つて金の助力を

受けると云ふ様な其様な罪に罪を重ぬる大膽な事が出來るものでない…。

「何を其様に考へて居らッしやるの、何も考へる事は無いぢやありませんか。それで可いでせう、ねえ、もう決めましたよ。」

「貴女の厚意は、もう十分に感謝しますけれど…。」

「…けれど？ けれど可けないの？ 叶へちや下さらないの…？ 姉様、それぢや餘りだわ…。」と口が利けなくなる。

「いゝえ、爾う、貴女を悲しませる様な事情ぢや無いの…。」

「矢張し、私なんか頼にしちや下さらないのねえ！」

「爾う云はれると、私ばかり困ッ了ふけれど…。」

「最う可いのよ、姉様が何う云つても關やしないのよ、私は…私の思ふ通り遣るわ…。」と芳江は頭を掉つたが、「而して、姉様の病氣は、此の頃は何様なの…、脚氣ですッて？」

「え、極く輕症なのよ。」

「だッて、顔色も惡いし…、蔭で案じた程ぢや無いけれど、餘程痩せたわ。お醫師は何と云ふの？」

「此の頃は行なかいでゐるけれど、最う逐次快いでせう…。」

「あら、お醫師に掛つて無いの？」と吃驚する。

「もう、病氣も分つてるから、薬だけ製へて貰つてね…。」

「まア！ それも、矢張し御都合が惡いからでせう…、其様なに困つて居ながら、姉様は…、それでも私のお願は聽いて下さら無いなんて…、餘りだわ、本當に餘りだわ、私は…私はね、お互の間はね、私は爾うしたものぢや無いと思ふわ。」

初野も、最う口も利き得なかつた。久くして芳江は額を上げ、

「それから、お波ちやんは何うして、御一緒ぢや無くッて？」

「波ですか…、波も居ますよ。」と云つて、鼻聲で、「波ちやんや。」

而ると、臺所の方から、小さく返答が聞える。

「あら、何處に居らッしやるの？」と芳江はむッくり起つ。

「可けません、其方は穢いから…、衣服が汚れるから。」と初野は止める。

薄暗い臺所に、鼻の下を黒くして雜巾を持つて居たお波は、芳江を見ると紅くなッて、慌てて其の紀州ネルの腰巻を隱すと、

「まア、お波ちやん！」と叫ぶや否や、行きなり其の頭を抱き締めて、「貴女まで此様な事を爲さるの！」

芳江は、最う此處に住まぬ事に相談を決めたから、掃除など爲ることは無い、とお波に雜巾を捨てさせ、其の襷まで脱させて、汚れた顔や手足を洗ひに井戸端に出して遣つたが、偶と、其の間初野の聲のせぬに氣が付いて、障子の中を覗き込んで、

「あら、何うなすッて？」と駈寄つた。

初野は其處に打伏して居るのである。

「姉様、氣分でもお不快いの？」と芳江は顔を附けて、「え？」

「いゝえ…。」と許り初野は、袖で押へたまゝ顔を上げる。

「まア！」

と芳江は眼を圓くしたが、それも無理のない事で、初野の顔を上げた疊の跡が、涙でびッしより濡れて居る。

「何うなすッたの？」

初野は辛と袖を離したが、又も手巾に目を押へて、

「芳江樣、貴女、それ程まで私を親しく思つて下さるんですか・・・？」と聲は涙に震へて居る。
「だッて・・・、爾うぢやありませんか・・・。」と芳江も目を瞬いて居る。
「私はね・・・、私はね、貴女の高潔なお心に對して、實に面目が無いの、實に愧入つたの・・・・！」
「何故、何故其樣な事を仰有るの？」
「私はね、これで、實に穢い心の人間なんですの・・・、貴女の如に清い、神樣の如な方にでも遇はなかッたら、私は最う、何樣なに墮落したんだか・・・！　芳江樣、貴女は私の恩人よ。」
「姉樣、其樣な事止して頂戴よ、私は、何處までも姉樣の妹ですから・・・。」
「ですけれど、私はね、貴女に謝罪らなきやならない事が有るんですから・・・。」と云ひ出さうとすれば、
「其樣なこたありませんよ、最う其樣な事は止して下さいよ・・・、過日の事なら、原は母から起つたことですもの、何も、姉樣が謝罪るなんて・・・。」
「いゝえ、私ね、先夜東吾樣に・・・阿兄樣にお目に掛つたんですよ。」
「爾う、何時？　一昨日の晩？」
「えゝ、一昨日の晩ですよ。」
「爾う？　夫は好かッたこと。兄樣、何樣なにか難かしい事云ひましたらう・・・。」
「爾うでも有りませんが・・・、種々と・・・。」
「でも好かッたわねえ、私もね、夫が氣に成ッてね、何卒兄樣の誤解を解いて上げ度いと思つてね、隨分種々云つたのよ。」
「私も三浦樣から聽いて、其樣なに御親切にして下すッたのに、默つてちや濟まないと思つてね、それで、謝罪りに行きましたの！」
「兄樣も了解つたでせう？　好かつたわねえ、それぢや、今回の事だッて、爾う云つて遣れば直ぐ歸つて來るわ。」
と悅ぶ顏を、初野は凝然と眺めて、
「芳江樣、貴女、それ程私を信用して下さるの・・・？」と芳江の手を握つて、「死んでも忘れませんよ、私一生、一生貴女には背きませんのよ。」
初野は、東吾の事に關しては、其の疑を晴さう許りに此處に引越したとは流石に口に出し難ねたが、心中では、最う東吾の事などは決して思はぬ、今日の今から、我が胸の中から東吾と云ふ名詞を綺麗に拭除つて了はう、と屹と心に誓を立てた。
で、卒業までの學資を得る事も、自分から更めて願ふのであつた。
「貴女だッて、其樣な、お金の事なぞ隨意になる方ぢや無いけれど、其點は、私も十分承知してますけれど、もう、貴方に補助けて戴かなきや、此のまゝ斃れる他は無いんですもの・・・。」
「可いわ、其樣なに仰有らないだッて・・・、此うなれば、私だッて一生懸命よ。」
「ですけれど、餘り無理な事をして・・・、それが爲にまた、貴女が叱られでもする樣でも困るから・・・。」
「いゝえ、大丈夫よ。姉樣に心配掛ける如な事は爲ない心算よ・・・。」と芳江は自ら頷む所あるものの如く、「可いから、私に任して置いて下さいよ。」
「有難う、ぢや何卒助けて下さいよ。眞のもう、家賃とか、月謝、それから、」と云ひ澱んで紅くなり、「米代だけも有れば、餘は、私何うにか間に合はせますから・・・。」
「あら、下宿する心算ぢや無くッて？」
「いゝえ、何うせ引越したんだから、矢張し此處に居ようと思つて。」
「何故？　此樣な淋しい處に・・・、」と云つて此處へ來たお波に、「ねえお波ちやん、厭でせ

わねえ、此様な陰氣臭い處なんか・・・。」
「え、私は、何だか怖くッて・・・。」とお波は、姉を見ながら云ふ。
「何ですよ波ちやん、其様な頑是の無い事を。」
「叱る事は無いわ、お姉様の方が無理なんだわ、ねえお波ちやん、」と芳江は、お波を我が傍に引寄せて、「姉様が何と仰有つても、貴女と二人でね、良い下宿を探してね、無理にも、其處へ姉様を曳張つて行きませう、ね。」
「いゝえ、芳江様爾うぢやありません・・・、」と初野は、此處に居る事の利益である箇條を話出した。
先づ第一は、閑靜で勉强が出來る、病氣ある身の保養にも成る、費用も二人で下宿するその半額で濟まさるゝ。學校の屆は、教師の楠田に頼んであるが、再下宿すると云はゞ、彼の氣難かし家の、今度は賴を肯いて吳れぬかも知れない。
「孰うせ此處と決めたんだから・・・貴女のアドバイスを斥ける樣で濟ま無いけれど、まア、此處に置いて下さいよ。」
「爾う・・・？」と芳江は久く考へたが、思出した樣に家の中を眺め渡して、「だッて、最う少し良い家が有るでせう・・・？」
「假し有つても、私は最う動き度か無いから・・・。試驗を目の前に控へて、其樣な事で、大切の時間を潰すのは惜いんですもの。まア、二月の事ですから、斯うして置いて下さいよ。」と優しく宥めて、此度は妹に、「波ちやん、貴女も、其樣な頑是無い事云はないで、辛抱しなきや不可ませんよ。」
「え、私なら何うでも・・・。」と澁々ながら承知する。
芳江も、今は初野の言に同意した。それから、先づ差當つて懷中に在るだけの小遣を無理に取らせ、種々と今後の事を豫議せなどして、遲くなツては家に都合が惡いから、と暇を告げた。都合の惡い處が、母の前を他の用に言作へて、竊に我が懷しい義姉に會ひに來たので、遲れた時間を詰問の結果は、何樣なに叱られるか知れぬのである。
「其處まで送りませう・・・。」
「可いのよ。お波ちやんが淋しいわ。」
それでも二人は、睦しく肩を列べて植木屋の門を出た。其處には、芳江の綺麗な腕車が待つて居るが、車夫の影も見えぬ。
「何處へ行つてるだらうねえ？」と芳江は顔を顰めたが、遠慮も無く聲を揚げて、「松や、松・・・。ちよツ、一人で歸つて遣らうか？」
「あれ、家の中で返辭しますよ・・・。其邊まで送りませう、」と垣に添うて廻つた。
「だけれど、眺望は佳いわねえ・・・、」と彼方へ目を放つたが、「おや、兄様のやうだわ。」
「似てますわねえ・・・背姿が。」
遙に見渡す野菜畑の間を、此方には背後を向けて、急歩に木立の中に消えたのは、確に制服を着けた東吾のやうであつた。

第二十五　義理

日暮には未だ間のある筈を、木立の深い故か、室の隅々は最う薄暗くなツて來た。掃除は粗方濟んで、買物に出たお波の歸り次第、愈よ今夜から初めての自炊の膳に對ふ心算で、初野は臺所で其支度をして居ると、思掛けずも、其處に東吾が訪ねて來た。
先刻、芳江の歸りを送つて出た時、離れては居たが目に留つた後姿、何うやら東吾の如である。房州へ行くと聞いたが、それでは未だ立たずに居たのか、此樣な處へ何の用で尋ねて來たのであらう、散歩の便次か、それとも態々私の引越先を訪ねて來たのであらうか・・・、入

口に見覺えの腕車の在るのを見て、芳江の居ることを覺つて、彼樣な方角に避けたのであるまいか……？　而て見れば、何か私に祕密の用事が無ければならぬ……！　併し、考へる迄も無く其樣な用事の有らう筈は無い、許嫁の芳江の目を忍んで、私に會ふ用事の有らう筈がない、斷じて無い、彼方にも無い、此方にも無い！　無い！　無い！　無い！

此樣なに思つた處へ、訪ねて來た東吾を見ると、先刻見掛けた後姿その儘の制服を着けて居るので、初野はハッと胸を轟かした。だが、「先刻の後姿は貴方でしたか？」とは流石に問かなかッた。東吾も、その事は何とも云はなかッた。

「最う、房州へお立ちなすッた事と存じましたが……？」と云ふと、

「少し用事が出來たもんだからね。」と東吾は平生よりも一倍平氣で答へる。

「もう少し先刻、芳江樣が來て下さいまして……。」

「爾うですか。」と許り。

「まだ御通知も致しませんでしたが、能く此處がお解りでした？」

「いや……」と言を濁らして、「閑靜で良い處だが、併し、濕けやしませんか？」

「何うでせう？　其樣なことは無いと思ひますが……。」と答へた初野は、さッと顏を赧くした。濕ける所では病氣に惡い、と云ふので、それを心配して下すッて、此樣な事を注意するのぢやあるまいかと思うたので。

「飯は何うするのです、自炊ですか？　餘り働いいて、身體に障りませんか？」

「いゝえ、働くと申して、二人限りの事ですから。それに、あの、御飯だけは前の家から炊いて貰ひますから。」

「爾うですか、それは好都合だ。ぢや、拵へると云つても、別段手數ぢや有りませんね……。」と云ふ時、初野が茶を煎れようとするので、「其樣な事はお止しなさい、僕は直ぐ歸るから。」

「はア。」と初野は、云はるゝ通り茶盆を其處に置いた。何うしたのか息が喘んで、膝に置いた手も顫へて居る。

「嘸不自由でせうが、卒業も近い事たから、暫く、此處で辛抱なすッた方が宜いでせう。」

「えゝ、何うか爾う致し度いと存じまして……。」と初野は、思はずも涙を零した。東吾の口から、此樣な有情いことを聞くのは今日が初めてである。

「失禮だが、これは、貴女の苦學に同情する僕の……、僕の寸志ですよ。」と云ひながら、東吾は一束の紙幣を初野の前に置いた。

その紙幣を一目見ると、初野は嬉しさに目も眩むかと思つた。

「お困りの際は、又お手傳を爲ませう。何卒、遠慮なく爾う云つて下さい。」と東吾は相變らず冷淡な語調で云ひ加した。

その聲を聞いて、是までの自分に對する所爲に較ぶれば、今迄の東吾は、別の人に變つたかと怪まるゝ程である。此樣な有情い人であッたのか、此樣なに私の事を懷つて居て下すッたのか？

「其樣な、大事に考へることも無いぢやありませんか、まア取つて下さい。」

「は……。御厚意の程は、言葉にも盡せませんけれど……。」

「何うしたんです？」

東吾は驚いた。單だ體裁惡さに躊躇するとのみ思うたものが、何を感じてか、初野は聲さへ震へて、涙は雨と落ちるのである。

「失禮ですけれど、此金は何卒、其方へお納めなすッて下さいまし……。」

「何故です……？　其樣な事は無いぢやありま

せんか…、何か、僕の言に…、何か失禮な事がありましたか？」

「いゝえ、其樣な貴方…。其樣なにお解り下すツては、私は最う何にも申上げる事は出來ません…。」

「では、何故取つて下さらんです？」

「實は、これを戴いては…。」初野は云ひ澱んだ。

此を戴いては芳江樣に濟まぬと云ふのであるが、何故芳江に濟まないのか、金を貰ふのが情を通ずるのでは無い、許嫁間の情愛を破るのでも、邪魔をするのでも無い、全く別の事であるのだ、それを、然う白地に云つたならば、反つて我が意の恥かしい處を見られて、東吾に驚かれるか知れぬ、蔑視まれるか知れぬ。と云つて、今此金を受けては、此の將來私は、ますます親しく成らう、ます〳〵意を牽かれるやうに成らう、それでは彼の清い芳江に濟まない、自ら誓つた我が心にも背く…。で、

「何卒お納ひなすツて！」と許り、最う此の外は云ふまいと決めたのである。

「爾うですか…。」東吾の聲は變つた。

「惡くお解り下すツては、私は最う…進退に窮して了ひますけれど。」

「爾うですか。」と今回は笑つたが、頰から目の端は紅くなツた。

「何卒、本當に惡からず！」

「厭と云ふ物を、無理に上げるのぢやありませんがね、併し…、」と云つて、東吾は凝然と考へたが、また語調を更へて、「初野樣、御承知の通り僕は書生の境遇です、それも、財産家に生れて、父兄から學資を貰つて居る者とは違ひます…、自分の親愛して…敬愛して居る…兎に角貴女の境遇に同情して居なければ、此樣な馬鹿な事を爲ませんです…。」

「それは最う、私だツて十分に承知して居ますけれど。」

「此樣な馬鹿な事は爲ません…。實に馬鹿らしい話さ。けれども僕は、貴女は取つて下さるだらうと思つて居た、全く爾う信じて居たんだ、己惚と笑はれようが、爾う信じて居たんです。夫ばかりぢや無い、此處へ引越したのも、半は僕の言葉に原因してるやうに誤解して居たんです。」

「東吾樣、何卒堪忍なすツて下さい…。」

「いや、堪忍も何も無い…、其樣な事はありません。それは、僕は非常に不快です、けれども…。」と云つて戰く脣を嚙んだ。

脣を嚙んだかと思つたら、手早く紙幣を藏つて、其の儘座を起つた。

「失敬しました。」とたゞ一言、跫音も確に門を出て行く。

初野は、續いて其跡を追蒐けようとしたが、忽ち思ひ飜した、而して痺れる脚を擦つて、獨りで其處に泣いて居た。

魔風戀風（後編）

自序

世の評家、女學生の戀愛譚を以て天外が得意とする唯一の詩材となす、されど天外詞壇に名を列して爰に十有餘年、その作する處長短百篇に餘れり、而も女學生界を描寫したるは、前後唯この魔風戀風一篇あるのみ。

詩材を現世間に採りたりと聞きて、作家の爲に想化を說かんとする評家あり、愚人の仲間に於ても蓋し錚々たる評家よ、一句、一線、藝術美の悉く作家の理想化に成る物なるを知らずや。

詩人の才を評せんと欲せば、須らく先づ其趣味の傾く處を觀るべし、其觀察の趨る處を觀るべし、而して其描寫の明蒙何若の點に檢すべきのみ。

明治三十七年二月　　如是庵天外

第二十六　指輪

「まア、爾うかい。では、未だ金を渡して呉れたんぢや無いね？」

「へい、他のお品と違ひまして、一通りその、奥樣に伺つた上と存じまして……、へい。」

「爾うかい、それは御親切に有難うよ、好く知らしてお呉れだッたこと。」

「何う仕りまして。では、矢張り、お拂ひ遊ばすんぢやございませんので……？」

「つい此の間購つた許しだもの、何だッてお前、其樣な馬鹿な事が有るもんかね。」

「へ、御意でございます。」

「だが、其者は、確に邸の婢だらうね？」

「へ、此の間、奥樣のお供で來らッしやいました、彼のお女中さんで、へい。」

「おや、矢張り政だよ……、午後から暇を貰つて出てッたんだもの……、政に違ひ無いよ。而して、まだ店に待つてるのかい？」

「へ、生憎と店主が一寸出まして、店主が戻らなければ、確とした事は申上げられませんので、其點を申上げますと、では、また後刻ほど來るからと仰有いまして……。」

「而して、此品を預けて去つたの？　まア、實に呆れるぢや無いかね。」

「では、如何致しませう、其品は、奥樣に差上げて參りませうか、それとも、拙者がまた頂戴して……。」

「置いてッてお呉れな。」

「へ。」

「可いだらう。」

「へい、夫はもう。」

「ぢや置いてッてお呉れ。再政が行つたらね、何とでも、其點は好い樣に云つと置いてお呉れな。」

「へ、畏まりました。ぢや歸つて爾う申します……。」

「何うも、態々御苦勞だッたねえ。旦那に爾う云つてお呉れよ、御親切に有難うてね……、此のお禮は、孰れまた、近い中に埋合せをするからッて……。」

幾度か敷居に頭を着けて、商家の手代と見える若い男は、緣側を表の方へと廻つて行く。

子爵夫人は、其の跡を見送るよりも、傍に置

いた黑革の小筥を開けて、ダイヤモンドか何か知らず、寳玉の光の燦爛たる黃金の指輪を取出し、皺は寄つても纖細な我が掌に、呢と眺入るのであッた。

此の指輪こそは、娘が結婚の盛式に、來賓の目を驚かさんものと、良人の子爵の不承知なのも關はず、少なからぬ金を投じて、銀座なる美術商から求めた品である。何を與へても毋の思ふ程悅ばぬ芳江も、此の指輪のみは流石に氣に適つたと見え、暇さへ有れば取出して眺むる程であッたが、今の手代の注進に聞けば、大膽にも親に祕して、此れを金に換へんとしたのだと云ふ。

「それとも、若しや政が‥‥？」と考へて居た夫人は獨語した。

芳江の知らぬ事で、仲働女の企圖んだ惡事かとも疑つて見た。けれども、幾ら疑つても、長い間使役つて、隨分氣心も知つて居る彼の婢に、何うも其樣な事の有らうとは思へぬ。

「何樣な事を云ふか、ま、兎も角一つ尋ねて遣らう！」頭を捻つて居たが、また獨語した。

夫人は訊問の順序などを考へながら、芳江の居間なる二階に登つて行つたが、行くと、其の室には芳江は見えなかッた。

二階は三室に仕切られ、孰も念を凝らした普請であるが、中にも一人娘の芳江が居室だけあッて、此の六疊の裝飾、床の掛軸から古銅の置物、違棚の金蒔繪の文庫、それから羽織の掛つてる衣桁、六歌仙の金屛風、何うやら同じ家から出た拂物らしき品々。東の壁際には桐の書棚、不釣合ながら硝子戶の洋本架。窓の下には汚點だらけの机掛を被けた唐机‥‥。

「何處へ行つたらう？」と子爵夫人は獨語しながら、其處の窓を開けた。

此處からは、日の下なる市ケ谷の濠を隔て、牛込から青山へかけて、美しい新綠に包まれた山の手の町々が一目に眺めらるゝが、夫人はそれに氣を轉すのでは無かッた。

「本當に何處へ行つてるだらう？」と見るとも無しにまた室の中を見廻した。何だか靜過ぎると思つたが、成程棚の上なる置時計が停つて居る。

「時計を捲忘れるやうな娘ぢや無いが‥‥。」と夫人は考への目を据ゑて、「矢張り、屈託が有るからなんだよ。」

斯う氣が付くと、幾分か怒氣も鎮つて、餘り叱り付けて、病氣にでも成られては困るけれど‥‥、無論此の儘ぢや濟まされないが‥‥、何う云ふ所存で此樣な大膽な事を爲たか、彼の娘だッて馬鹿ぢや無いもの、何か思慮があるに違ひ無い、篤りと其點を聽いた上で、叱るものなら叱つて遣らなきやなるまいし、懲すものなら懲しても遣らなきやなるまい、だッて、此樣な事を默つてちや、彼の娘の益に成らないもの‥‥、と此う思定めた。

けれども、時計を捲忘れた位で此う氣が弱くなる夫人に、芳江が机の上を仔細に視せたならば、蓋く指輪の一件などは、叱言一つ云はずに恕して遣つたかも知れぬ。芳江の机には、二三年前に、同級生間の流行に誘はれて購つた限り、其の後は餘り手に觸れる事も無かッた一冊の新約全書がある、而して、その讀みかけてある前の頁には、淚の痕さへ濡れて居る。それから、此の頃出た婦人雜誌、其の表紙には、心の影を、書くとも無しに鉛筆を走らしたらしい Sacrifice と云ふ字が、幾つも幾つも寫されてあるのだ。

だが子爵夫人は、出が出だけ、などと人に笑はれぬ程の讀書は出來るが、机の上の事には餘り興味を有つて居らぬ、從つて、娘が何を讀んで居たか、其處迄は氣を留めなかッた、況して此の英語の犧牲と云ふ語の讀めもしなけれ

ば、其中に含まれた恐しい意味を疑ふ餘裕も無いのだツた。

　さて、其處に意を留めなかツた夫人は、今度は緣側に出て、欄干から庭を見下したが、其處の築山の蔭を、ちら〳〵往來して居る芳江の姿が目に入つた。

「まア、彼處に居るんだよ。」聲を掛けようとしたが思返して、其の爲す態を凝と眺めた。

　何うも其の態を見ると、常の芳江の樣ではない。細い頸を俯向きになツて、同じ處を幾回も往きつ戻りつして居るが、偶と立止つたり、首を捻つたり、どうやら溜息を吐いたりなどする如である。夫人は、それ程心配の事があらば、何故此の母に打明けて相談を爲ぬのか、と悲しい樣な、また妬ましい樣な氣にもなるのであツた。

　久くすると、芳江は何を考へ付いたか、急に面を上げて、庭を隔てた彼方の室を眺めたが、頓てつか〳〵と步を移して、折しも其處の緣側を通る女中に、

「母樣は何處に居らツしやるの？」と尋ねる聲が聞えた。

　夫人は素知らぬ顏をして二階を降りたが、丁度我が室の前で芳江に出逢つた。

「あら、母樣……。」その聲は、知らぬ他國ででも逢つたやうな語調である。

「何うしたの、其樣な顏色をしてさ？」

　餘り娘の血色が惡いので、夫人は思はずも此う云つた。娘は、夢から覺めたやうに目を瞬いて、

「私、今母樣を探しててよ。」

「爾う？　ま此方へお入りなさいな。」と我が室に導いて、鬱陶しさうに其邊の障子を開け放したが、更めて芳江に向き直つた、「何うしたの……？」嚴然とした顏を見せる。

「母樣、あの……、」と口籠つたが、また、「あの何樣な善い事でも、親達に隱して爲ては惡いでせうか？」

　意外な問である。母には略その意が解つて居るけれど、一寸答辭に窮して、

「爾う決まツた事も無いけれど、だけれど、お前だけは、何樣な事でも母樣に隱して爲る事はなりません。」

「だツて……。」と考へて居る。

「何か、母樣に隱して爲た事が有るでせう？」

「然。」と芳江、意外にも點頭いた。

　母は、其の無邪氣な返辭に呆れたが、

「母樣は皆な知つてますよ。」

　芳江は、その涼しい眼を瞬つて、訝し氣に母を視詰めた。

「これ、此品の事でせう。」と母は、指輪の小筥を前に出した。

「あら、何うして？」

「何うしてぢやありません、」母は急に難かしい顏をして、「芳江樣、お前まア、此う云ふ事をして濟むと思ふんですか？　お前の購つて貰つた物だから、拂はうと捨てようと、お前の自由と思つてますか……？　爾うは行きませんよ。」

「私だつて、爾うは思は無いけれど……。」

「ぢや、何だツて此樣な大膽れた事を爲るの？　ま、その理由を仰有い。」

　芳江は流石に小さくなり、

「母樣に默つて爲たのは惡うございました、何卒、堪忍なすツて下さいまし。」と潸然んだ。

「では、眞實、惡い事をしたとお思ひですね？」

「え。何卒堪忍なすツて。」

「爾う云ふ事なら、今回だけは堪忍して上げませう。だが、再と此う云ふ事が有つたら、宥したくも宥せませんよ、可いんですか。」

「え。」と眼を拭つて居る。

　母も久く默つて居たが、

「ぢや、解つたら夫で可いから、涙を拭いて彼

方へお出でなさい……。政が歸つたら、母樣が熟く諭すから、お前は何にも云ふ事はなりませんよ。」

「え。」と俯向いて居る。

「ぢや、まア彼方へお出でなさい……。些と、お琴でも演習つたら何う？」

「え。」

「何うしたの、何を考へてるの？ 堪忍して上げると云つたら、それで可いぢや無いかね？」

「母樣、私、母樣にお願が有るんですの……。」

「お願？ 何の願……、また、彼の萩原の事ですね？」辛と機嫌の直つた母の顏は、また難かしい色に變つた。

「母樣、私、房州に行つて來たいから、遣つて下さい！」

母の目からは、體格は大きくとも未だ頑是無き少女が、突然房州に行き度いと云ひ出したので、

「何ですツて、房州へ……？」

芳江は落着き切つて、

「え。私ね、兄樣に相談したいことが有るんですの。」

「それで、房州に行き度い？ 房州は東京の内ぢやありませんよ、船で行く處ですよ……。」

「え、靈岸島から……。」

「まア。ぢや、行けと云へば本當に行く氣なの？ 半日餘りも費ると云ふが、お前、其樣な長ひ間船に乘れるの？」

「乘つて乘れ無い事はないわ。」

「お轉婆だよ此人は、」と夫人は笑つたが、「何樣な大事件か知らないけれど、問合はす事が有るなら、郵便で問合はしたら可いでせう……、馬鹿馬鹿敷い、房州まで行くなんて。」

「だツて、手紙も遣つたけれど、何うしたんですか、兄樣から返事が無いんですもの。」

「それで、態々會ひに行くの？」と夫人はまた笑つて、「何樣な事か知らないけれど、將に婚禮爲ようと云ふ人が、遙々、房州まで男を訪ねて行くなんて、何だか外聞が惡いぢや無いかね。」

而ると芳江は、火の樣に紅くなツて、

「だツて、兄樣の相談でも借りなきや、私、何うすれば可いんだか……？」

「何樣な事が有るの？ 其樣なにお困りなら、母樣に云ふが可いぢやないかね。」

「だツて。」

「兄樣の他には、誰にも云へ無いことですか？」

「爾うぢや無いけれど……。」とまた紅くなツたが、「母樣は、許して下さらないに決まつてますもの。」

而ると、夫人ははツと驚いた顏で、

「芳江樣、ぢや、其の相談する事と云ふのは、矢張し萩原の事ですね？」

「その通り、萩原樣の事と云ふと、最う直ぐ怒つて了ふんですもの……。」

「萩原の事でせう？ まア、怒るも怒らないも無いから、爾うなら爾うと仰有い。萩原の事でせう？」と急込んで云つた。

「彼樣なに、母樣に叱られたけれど、何うしても私は、萩原樣を救はなきや濟まないんですもの……。」

「では、東吾に何か、兄樣に爾う云はれたね、萩原を助けて遣らなきや、友達の義務に背くとかなんとか？ 爾うだらう？」

「いゝえ。」

「だツて、爾うでもなければ、房州まで相談に行くなんて……。必然それに違ひ無い、兄樣に云はれたんで、指輪を賣つても萩原を助けようとまでしたんだ、爾うだらう、何も祕す事はありません。爾うなら爾うとお云ひなさい、爾うでせう？」

「其樣な事は無いわ、兄樣の關係した事ぢや

無いわ。」
　夫人は此う云ふ芳江を凝然と視詰めて居たが、
「でも、判然萩原を助けて遣れと云はない迄も、何か遠廻しに、その……友達の情愛とか……、友誼とか……、孰れ其様な理窟を說いて聽かしたんだらう？」
「いゝえ。」芳江の方が解せぬ顏をした。
「芳江様、祕しちや爲にならないよ。他の事たア違ひますよ。」
「何も祕しはしませんよ。」
「全くだね？　ぢや、此の指輪を拂はうとしたのも、芳江様一人の所存から出た事ですね？」
「え。」頭點いて、「だツて、此の間彼様なに願つても、母様は承知して下さらないんだもの、私、何うしたら宜からうと思つて、惡い事たア思つたけれど……。」
「思つたけれど、指輪を遣つたの……？」と夫人は、まだ何處かに、疑の凝固でも引掛つて居る様な顏色で娘を瞰めて居る。

第二十七　疑念

　指輪一件の有つた日の夕方、東吾が下宿の倉岡の細君は、迎腕車を受けたので、身支度も匆卒に子爵家に駈付けたのである。
　先刻から待つて居たと云ふ樣子で、行くと直ぐ夫人の室に案內された。「お忙しい處をお呼立申して濟みませんでした、まア何卒此方へ、さアお敷きなすツて。」と此方に口も開かせぬ接待方。子爵夫人の機嫌質は元より承知の上ながら、倉岡の細君は久く煙に卷かれて居た。
　齡は十歲も違ふが、流石に柳橋で全盛を謳はれた色香が殘つて、小鬢の白髮、額の皺、それは齡の故で詮方が無いとして、二人列んだ處は、子爵夫人の方が若い位に見える。加之に一方は目上、一方は目下、一寸笑ふにしても前後を顧みて笑ふ程に愼んで居れば、子爵夫人はまた、言語も擧動も心の儘に、宛然春風緩く遶る花園の中を、孔雀の羽翼を擴げた如に一杯になツて居る。
「少しね、貴女に伺ひ度い事がありましてね、」と子爵夫人は、女中を退けるや否や低聲になツて、「他の事でも無いが、東吾の事ですがね！」
　と前提を置いて、東吾が平生の行爲、何樣な友達が有るか、就中女學生などと往來しては居なからうか、少し仔細があるから、何卒包まずに話して貰ひ度い、と云ふのである。
　倉岡の妻は、隨分長い事此の子爵家に出入をし、夫人の氣心も大概分つて居るが、此樣な不見識な內輪の事などは、幾ら困つても口に出す如な女で無いのに、何でも此れは、容易ならぬ事件が勃發つたに相違ない、と遠くも推測したが、恩の有る子爵家の爲に、何を包隱す可きでは無いが、然ればとて、自分の口を滑したのが原となツて、東吾の身に難儀の罹る樣では氣の毒である、と案じながら、東吾の平生の、唯もう勉强專一で有る事を首めとし、活潑で、運動好で、朋友は何誰も灑然した方許りで、婦人の事などは、遂ぞ話す處を聞いた事も無い、女學生などとは無論往來して居りませぬが、
「此の間……つい四五日前の事でございますが、此方のお孃樣の學友の方な相でして、一人訪ねて來らした方がございますがね、それが最う、後にも先にも只た一度でございます……。」
「芳江の學友？　それ〳〵、それですよ、萩原と云ふ女でせう？」と夫人は禁えず膝を進める。
「はい、確か爾う承はりました樣で。」
「色の白い、一寸綺麗な娘で？」
「はい。一寸……。」
「何樣な樣子でした、長く居りましたか？　何

か、二人の間に……、何か怪しな擧動でも有りはしませんでしたか？―
「いゝえ、別に……。」と其の夜の事を、梯子から落ちた事なぞは拔にして、夫人に怪ませぬ樣に物語り、「幾ら御發明で居らしッても、お若い方の事だから、と存じまして、私も其の後氣を付けて居りますが、其ッ限り、先方でも參りませんし、此方からも行らッしやる樣子はございませんし……。」
「おや、東吾は……、」子爵夫人は解せぬ顏色をして、「東吾は、未だ房州に行きませんか？」
「いゝえ、拙者許にお居でゞございますが……、では、お邸では、御存知ありませんでしたか？」
「いゝえ、知りませんよ。」
子爵夫人は、何か思當つた物の有る如く、獨で點頭くのであッた。

第二十八　親子

神田猿樂町の、臭い溫泉風呂の溝に沿いて唯ある小路を曲れば、屋根はコールターの剝げた鐵葉屋根ながら、兎も角も二階建で、入口には刀劍鑑定所の看板、標札は佐久間信元、同東一と、並べて出した家の前に、今しも宿腕車らしいのが二輛梶を卸して、「へい、お待遠さま。」と格子の中へ怒鳴つた。
而ると、丸髷の若い細君が外を覗いて、
「一寸待つて下さいよ。」と優しいと云ふよりは元氣無く云つて、直ぐ玄關脇の梯子を半ば昇り、「阿母樣、腕車が參りましたよ。」
「あい、待たしと置いと呉れよ。」と答へて、其處の障子から顏を出したのは、日外東吾の宿に訪ねて來た其の母で、「お時や、まだ東一は戻りませんかい？」と低聲で問く。
「はい、まだ戻りませんが。」と當惑な顏色。
「戻つたらね、阿父樣に知れるとまた面倒だから、お前から爾う云つてね、竊と出して遣つてお呉れよ。」
「はい、畏まりました。」
「それ、髱留が落ちるよ。」と母は氣を付けて、また障子の内に引込む。
此處は八疊の一室で、疊も古く、天井から壁に掛けて雨洩の跡、窓の硝子も縱横に紙で繕うてあるが、床には唐畫らしい山水の一軸、萌葱風呂敷に包んだ刀劍類、書箱も四つ五つ、何うやら此の家の客室とも云ふ可き體裁である。
此の室に對座つてる二人の男、一人は學校服を窮屈相に膝を崩した東吾で、一人は父の信元、此れはまた、黑紬の羽織に嘉平次平の袴、肩肱を怒らして、敷物から一尺も前に乘出して居る。六十の坂も越えたらしい年輩、頭髮も白く皺も深いが、未だしやッきりとした身の構へ、顏色にも眼の中にも、元氣の色が宿つてゐるのである。
「東吾、貴樣も男らしく無い奴ぢや、今になッて何を考へる？　最う露顯に及んだ以上は、何も彼も白狀して了へ、潔く謝罪つて了へ、生半虛構事して、口頭で免れようなんて、そんな卑怯な料簡は出すな、男らしく白狀しろ。」と信元は、怒の聲を高くじり〳〵と膝を進むるのである。
「何も、祕した事はありませんよ、白狀する事なんぞ何にも有りませんよ。」と東吾の聲も勃然とした樣に聞える。
「何だ、白狀する事が無いと？―
「有りませんとも。第一、幾ら養家でも、其樣な些細な事にまで干渉して、彼此云ふ權利は無いと思ひます……。」
「こら、生意氣な事を吐かすな……。」
「まア貴方、」と母は夫の聲を宥めて、「最ッと靜になさいよ、外聞の惡い。東吾だッて、最う二十五にも成ッて、前後の考も無く此樣

な……、此う云ふ事を爲もしないだらうぢやありませんか……。」

「此樣な事が有るとな、己は、夏本子爵に會はす顏が無いわい。」信元は又叫んだ。

「ですからさ、東吾の理窟も、篤と聽いて見なきやならないぢやありませんかね、貴方のやうに、さう一概に怒つて許し居らしツても仕樣がありませんよ。」

「可いわい。」と信元は投げる樣に、「東吾、ぢや此處では何にも云ふな、己も聽かんわ。同伴に子爵の前へ來い、子爵の前で辯解して見ろ、さ、何でも可い、同伴に來い。」

「まア、お待ちなさい。」と夫を制して、「東吾、阿母樣がね、少し聽き度い事が有るから、ま一寸階下へお來で。」

「此處だツて可いぢやありませんか、御用が有らば、此處で仰有つて下さい。」と東吾は立たうともせぬ。

「其樣なお前、阿母樣にまで……。」と母は涙ぐんで、「何でも可いから、お來でツたらまアお來でよ。」

力は無くも親の力、母は強ひて東吾を階下へ降して、箪笥の前、火鉢の傍、隣家の屋根に遮られて薄暗き障子を開けて、老の腰をやツこらと下した。東吾は澄まぬ顏の眼ばかり瞬いて、母には横向きに、柱に凭れて踵の切れた靴下の足を投出し、其處に在る土瓶敷を指頭でくる〳〵と廻し始めた。

「東吾、何うしてお前は、爾ういこぢにお成りだらうねえ、學者に成ると、爾う云ふものですかい？」と母は口を開つた。

東吾は答なく土瓶敷を廻して居る。

「……何故房州に行かないか、其の譯を分疏かなきや可け無いと云へば、此樣な事で分疏も何も要るもんか、僕だツて生きた人間だ、用が有れば滯在もするぢやありませんか……、何です彼言は、彼ぢやお前……。」

「だツて其の通りでせう？」

「何が？　何が其の通りなの？」

「一用事次第で、急に立つ事も有れば、また滯在する事も有りませう、僕だツて一個の男兒でさア、幾ら養子でも、此樣な事にまで世話を燒かれて耐るもんですか。」

「いゝえ、番町のお家で世話を燒くのぢやないよ……。お前も分らないねえ、番町のお家ではね、房州に行かないで爾うしてる位なら、此方へ來て勉强したら何うだ、と單爾う云ふだけなんだよ。」

「ぢや、何で滯在して居ようと、關は無いでせう。」

「いゝえ、關は無い事は有りません、假ひ、番町のお家で默つてても、阿父樣や私の顏が立ちません、其の譯を辯解かなきや……。」

「爾うですかなア……。」

「爾うですともね。」と母は、冷淡に云ふ東吾を睨め、「お前は爾うは思ひませんかい？」

「思ひませんねえ。」

「思ひませんですと……？」

「何ですよ阿母樣、其樣な馬鹿な聲を……。何樣な大事件で、其樣なに夢中に成るんです、少し物の輕重を……大小を考へて御覽なさい、高が、房州に行くのが二三日延びたとか、借財を何に費つたとか、それだけの事ぢやありませんか、下らない！　其樣な事で親子で喧嘩をして、それで世の中が渡れますか。」

「東吾、高慢な事をお云ひで無い……。」と母は涙を拭いて、「お前なんぞ、頭から足の先まで、皆な番町の恩を受けて生きて居るぢやないか……。」

東吾はじろり母を見返したが、何か云はうとして又口を閉ぢた。母は、

「それ程些細の事なら、何故有る可き通り、此々

云ふ次第ですと、打明けて話せないんだい？東吾、阿父様も私も此の通り、昨日から夢中に成ツて、物も手に着かないんだよ。其様な些細な事なら、お前だツて何も、隠し立てするには當るまい、何故その譯が話せないの……、え、何故話せないのさ、東吾や……？」

東吾は同じく口を噤んで居るのみ、母の方を見ようともせぬ。

「私は、阿父様に知れては惡いと思つて、それで今迄默つて居たけれど、私は、大概の事は知つてますぞ。」と母は急に嚴乎となツて、「借金だツて、東一の爲にした借金ぢやありませんか……。」

「誰が、兄様の爲と云ひました？」

「借金も爾うだし、房州に立たないでるのも、試驗の用意とか、學校の用とか、其様な勉強の用ではありません！」

「爾うですか。ぢや何の用でせう？」

「萩原とか云ふ、其の、田舍出の女學生に關係つてるからさ！」

東吾はびくりとした、顔色は紅く變つた。

昨日の朝、東吾の母は子爵家から迎を受けた。用談と云ふは、東吾が未だ房州に立たずに居るとの事、家も此の通り廣く、閑靜な室も幾室もある、遙々房州まで渡らずとも、今から此方で勉強しては何うであらうかと云ふ事、今一箇條は、昔氣質の阿母様の耳に入れるのは少し氣の毒なれど、何の必要有つてか、此の二月と、この五六日前と兩回に、外聞の惡い借財を東吾が爲たと云ふが、何處も若い者には有る習ひ、決して夫を彼此と咎むる次第でないが、今後金が要るならば、爾う云つて家から持つて行く様に、此様な不名譽な事を再と爲ぬ様に、熟く阿母様からも諭して貰ひ度い、と云ふのであツた。

餘り意外な事を聞かされて、母は暫くは言葉も出なかツた。東吾をば房州に居るものとのみ思うて居た、況して借財の事など、夢にも知らう筈が無い。昨年の暮も、兄の證書に印を捺したのが原で、養父に少なからぬ迷惑を掛けた事がある。今回の金は何に費つたか知らぬが、誰が目にも生家が貧故とよりは映らない事である、子爵も爾う思うて居よう、夫人も爾う思うて居よう、此様な事では……と行末から行末を考へて、或は、今の中に此の縁を斷つて仕舞つたならば、などと云ふ相談の、内輪に起つて居ないとも限らないのである。此う思ふと、母は最う居ても起ツてもゐられなかツた。

それで、子爵夫人の前をば白髮頭を疊に付けて、直謝りに謝つて、直ぐ其の足を駒込なる東吾の宿に向けたが、東吾は不在なので、主婦から聽いた我が子の近狀に、母はまた一倍の苦勞を此處で增したのである。と云ふのは、此の頃の東吾は、主婦の目にも少し變に見えない事もないと云ふのである。急に房州に立つと云ひ出したり、惘然考事をしたり、深夜に酒に醉うて歸つたりすると云ふのである。

まだ怪しいのは、過日萩原と云ふ女學生が二階から落ちた時の二人の様子、思へば房州行も彼事から延びた事になる、昨夜も東吾の不在に訪ねて來たが、若い同士の、萬一間違つた事でもあツては、と云ふ杞憂から、主婦は東吾に祕して居る程であると云ふ。

「なに、昨夜訪ねて來た……？」と東吾は母の話を遮つたが、其の聲にも其の顏にも、意外な悅の色が見えるのである。

「昨夜ぢや無い、一昨日の夜の事だが、」と云つたが、初めて東吾の様子に氣が付き、「東吾、お前夫程萩原の事が氣に懸るのかい？」

東吾は流石に紅くなつたが、忽ち度胸を据ゑたと云ふ風で、

「氣に懸るも懸らないも有りません、唯訊いて

見たのです。」
「訊いて何うするの、また會ひに行く氣かい？」
と母は詰寄つた。
「爾うですな、用が有れば行かないとも限りますまいな。」
「何ですと、用が有れば會ひに行く…？」
「爾うぢやありませんか、用が出來れば、何處へ行かうと勝手ぢやありませんか。全體阿母樣は、何を間違へて其樣な、些細な事まで世話を燒くんです、私だツて、何樣な用を抱へて居るか知れないぢや有りませんか…。」
「お前の…、其女學生に會ふ用かい？」
「爾うですとも。」と決然云つた。
「お前は、芳江樣から頼まれたとお云ひか知らないが、爾うは云はせませんよ。」
「芳江から…？」
「其樣な恍けてもね、房州から廻つて來た芳江樣の書簡も見たし、萩原から來た書簡も見ましたよ。」と云つて、母は嚴乎と我子を睨め、「雙方の文言も較べたし、日も較べて見ましたよ、お前の金を借りたのは、まだ芳江樣の書簡の着かない前です！　爾うでせう？　夫でもまだ、芳江樣から頼まれた事と云へますか？」
東吾は無言である。

「高利貸の金を借りたのも、房州に立つと云つて立たないのも、皆な彼の、女學生の爲なんだらう？　東吾、爾うぢやないか？」
「爾うです、阿母樣の云ふことは巧く當りました。」
「え、何です？　最う一度云つて御覽！」
「借金したのも、房州に行かないのも、萩原の爲ですとも。僕は、彼の女が好きです、芳江よりも好きです。それが何うしたんです？」と爭う如に云ひ放つたのである。

第二十九　まよひ

「何うしたんだね、孃ちやん、え、唯泣いてたツて分りませんよ。何うしたんかまア話して御覽なさいよ、え、姉さんが…、姉さんが何うしたんだツて？」
「姉さんがね、怒つてね、私にね、出て行けツて云ふの…。」
「何うしてね？　何だツてまた、其樣に怒んなすツたんだね？」
「今日ね、私ね、姉樣に隱れて、殿井樣にお金借りに行つたの…。だツて、最う姉樣の處には、最うお錢が無くなツ了つて、明日ツからは、洋燈も點ける事が出來ないんだもの…。」
とお波は再泣き出す。
「へえ…、石油買ふお錢もね？」と植木屋の婆さんは、しよぼ〳〵した老眼を瞠つた。
「え、」とお波は點頭き、「最うお藥なんか、一昨日から止して居るの。」
「はゝア、夫ぢやア、其の殿井て云ふな、お前の姉樣の情人だね？」其處の敷居に泥足をぶらりと、煙管を銜へて居る雇男が口を入れた。
「爾うぢや無いよ、其樣な者ぢや無いよ、私の姉樣に、其樣な者なんぞ有るもんか。」とお波は口惜し相に云つた。
「だツて、男ぢや無えか、男でお前、女に金出さうてなア其處にほら…、お前樣には解るめえが、底も有りや蓋も有らうて云ふもんだ、ねえ阿婆樣、彼樣な高慢ちきな面アして、女の學者は己許りだツて云ふ風してるけんど、なアに、如彼云ふのに限つて、存外男にア鈍えもんだ、はゝゝゝゝ。」
「何だい、私の姉樣を惡く云やがツて、何だい。」
と眞になツて突掛つた。
「なアに、惡く云ふもんかね、全くの事だよ。譃だら、此の又樣一つ、口說落して見せべえか…、あはゝゝゝゝ。」

「誰が、汝の樣な百姓なんか、誰が…、姉樣の傍にも寄せるもんか…。」

「何だと、百姓だと、此の小女郎、生意氣な…。」大人氣なくも眼を剝くと、

「又樣、何だよお前樣…？　此樣な幼少い者を捉まへてさ…。」と婆さんが叱つた。

「餘り生意氣吐かしアがるから…。」

「お前が調戯ふから惡いんだよ。彼方へお出でよ、ほら、親方が呼んでるぢや無いかよ。」と婆さんは男を彼方に逐遣り、「孃ちやん、彼男はね、馬鹿だからね、彼樣な者に關ふぢやありませんよ、ね。」

「だツてね、私を見るとね、何時でも彼樣な事を云ふの、私口惜くツて！」

「馬鹿ですからね、今後は、何を云つても知らない風して居らツしやい、其が一番に良いんだから、ね。」と婆さんはお波を宥めて、「それより、姉樣は何う爲すツたんだツてね？」

「阿婆樣、何卒、後生だからね、姉樣に謝罪つて頂戴よ、え、阿婆樣、何卒後生だから…。」

「それは承知だがね、何だツてまた、其樣な…石油買ふお錢まで無くなすツたんだね…？」

「それはね、阿婆樣此うなの…。」

と、お波は姉の窮して居ることから、試驗の間近くなツた爲め、晝夜殆ど机を離れずに居る事、病氣は只だ惡い一方に進む事、殿井から金を借りることを勸めたが、姉は芳江の約束を堅く信じて、お波の云ふことなど耳にも入れぬ事、けれども、今は、肝心の石油代にも差支へ、豆腐一つ買ふ錢も無くなツたので、お波一己の料簡で、祕に殿井へ賴みに行つた事を話した。

「爾うですかい、それでは、姉樣の方が無理でございますよねえ。」

「それをね、姉樣はね、私の心が鄙劣いからだツて云ふの…、それ程殿井樣が好きなら、殿井樣の家へ行つて居ろツて…。あら、阿婆樣、姉樣が此方へ來てよ。」

「逃げないだツて宜うございますよ、私がね、熟く謝罪つて上げますからね…。」

婆さんが濡れたお波の手を摑んだ時、

「波ちやん、何してるの？」初野は土間に近寄つて、「其樣なに、お婆さんのお邪魔を爲ちや不可ません、此方へ來らツしやい！」

洗晒したネルの寢衣にメリンスの半幅帶、何處とも無く自炊の垢に汚れたるに、病氣に窶れた肩から頸の邊細りと、顏は試驗の準備で家にのみ籠り居るので、日に射られぬ色蒼白く、頭髮も搆つてる暇が無いかして、油氣の脫けた鬢の毛を亂るゝに任せ、此女が此の春、學校の祝賀會で、陛下の御前に英語朗讀をなす可く選拔された其の一人と云つても、誰か眞と思ふ者が在らう！　彼の時、駒込から巢鴨までの御道筋、雲と群り、潮と波打つ幾萬の見物の間を、鈴の音強く、神か人かと驚く許りの扮裝して、矢を射るが如くに自轉車を飛ばした其の美人と云つても、誰か眞と思ふ者在らう！

「阿婆樣、ね、何卒ね…。」とお波は後に隱れて、切りと老婆の援を求むるのである。

「宜うございますよ、今願つて上げますからね。」とお波を慰めながら、初野の方に一步二步、「孃さん、私も、熟かア聽かないけれどね別段、惡い氣で爲た事で無いんだからね…。」と、老婆は其の柔和な顏に笑を含んで、お波の爲に口を利いて吳れるのだツた。

初野は、一時の怒に叱り過して、妹の跡を探しに出た處なので、婆さんから願はるゝ迄も無く、最う叱言は云はないから、とお波を家に伴れ歸つたが、

「波ちやん、まア此處へお來でな」と家へ入るや否や、妹を膝近く坐らせ、「今日の事は堪忍して上げるからね、今後は最う、決して自分の

一存で、此樣な事を爲るんぢやないんだよ、可いかい？」

「え、今後は……。」

「而して、彼のお金はね、彼のまゝ殿井樣に返してお來でなさい。」

「返すの……？」

「彌うぢや無いかね、理由も無く他の金を使ふなんて、其樣な卑い事は出來ないぢやないかね……。其樣な不名譽な事して、他日世間へ出てから何うするの？ 波ちやんは、現在の苦しい事計し思つて、卒業後の事は些とも考へて無いんだもの。だから不可いツてんだよ、忍耐力が無くツて……。幾ら苦しいツて、後最う一月の辛抱だよ、昔は、豆を咬んで苦學した學者も在る、一月許し、何だ私は、土を嚙つても辛抱するよ。」

「私だツて、辛抱する氣ぢや無いか。」

「ぢや、其樣な文句を云はないで、綺麗に返してお來でなさいな。加之に、後刻にも芳江樣から逆つて來るか知れ無いし……。」

「芳江樣なんぞ、信用になるもんか。」

「何ですツて、芳江樣が信用にならない……？」

と初野は屹然となツた。

「姉樣は、芳江樣の事を云ふと、直ぐ其樣なに怒るけれど、だけれど……。」

「お默りなさい、」と妹の聲を打消して、「芳江樣が信用にならないとは何の事です、失敬な、二度と其樣な事を云つたら恕しません！」

「だツて、姉樣は何にも知らないから其樣なに思つてるけれど、私は……、私は今日、聽いて來たんだもの。」

「何を？ 芳江樣の事を？ 誰から聽いたの？ 何樣な事を？」

「殿井樣から聽いたんだよ。」

今日この頃の初野が胸中、貧に迫られ、病に苦しめられて、鏡に寫る日毎の憔悴、それよりも目に立つのは妹の顏、色も惡く、艷も失せて、何うやら頰も瘦けて來たやうだ……、と思ふ時は、むら〳〵と只だ心細く、只だ哀しく、えゝ、最う卒業も獨立も要らぬ、辛くとも鄕里へ歸つて兄の厄介に成らうか、それとも、男に此の身を任してなりとも、此の苦境から救うて貰はうか、と途迷ふ。迷ふけれど、直ぐまた閃く希望の電光、試驗毎の我が成績、學校内の我が評判……。卒業さへすれば、世間にさへ出れば、立身！ 名譽！ 幸福！ 思ふ儘なる我が身では無いか、その卒業も、僅にあと一月の中では無いか！ なんぼ局弱い女でも、荒い浮世の波を此處まで漕ぎつけて居ながら直ぐ手の達く岸に上り得ずに、此のまゝ押流されて成るものか。苦しくとも、辛くとも、假や病が重らうとも、豈夫に試驗前に倒れる樣な此の身では無からう、否、土を嚙つても倒れることではない。

天には神も在ますであらう、道理の光、情の溫かさ、此の明るい世の中で、我が望はかりが、破れる事の有らう道理はない！

卒業も、獨立も、決して我が欲を充さう爲のみで無い、第一は不幸の母に、老後の孝養がして見たく、また二つには、不便の妹を立派に教育して、姉妹二人で理想の生活を創造し、家庭の模範とも成らなければならない！ 昔罵られた兄や嫂、母の素性まで洗立てて嘲つた近所の人達にも、慚死の感を與へて遣らう！ 姉妹歸省の折は、贅澤と云ふ程で無く〳〵も、美しく揃ひの物を着て、土產も鄕里には珍らしい物を持つて、亡父上の墓參、親類への見舞、彼が麥上りの後妻の娘かと、蔭口にも驚嘆させねば止まぬつもりである！

然うよ、何も嘆息する事は無い、煩悶する事も無い、自分には、芳江と云ふ世にも賴母しい親友が有つて、今にも此の境遇から救呉れる

のでは無いか！　彼の時の優しい慰め、誓の言葉、あれを忘れて何うなるものか！　今日來なければ明日、明日送らなければ明後日は送つて來る。彼程氣に懸けて居らるゝ人が、何日まで私を苦しめて置かう！　苦しいと云ふも僅の辛抱である、妹を不便と云ふも其の間だけの事である、今更何を迷うて、何を狼狽へる事が有らう！　假にも此樣な心を起しては、芳江樣の彼の清い心に對しても濟まないでは無いか。

樣々に動く心を、初野は毎も此う云ふ態に制して居る。その賴に思ふ芳江の事で、殿井から妹が聽いて來た事有りと云ふのだから、聽かぬ前から激しもし、また驚きもしたのであるが、妹は怖々ながら、

「芳江樣は、近日にあの、お婿樣を貰ふんだから、最う外へなんざ出ないんだッて云ふの。」

「お婿樣を？　お婿樣を貰ふから外へ出ないッて？　ぢやア、東吾樣と結婚する事だらう？」

「爾うぢや無いんだッて、東吾と云ふ人はね、他に女が有つてね、借金なんかして、それが知れ了つてね、あの、離緣に成ッたんだッて。」

「え！　東吾樣が……？」

「だから、芳江樣は、最う姉樣にお金を送る事など無いんだッて……、其樣な事を的にしてちや大變だッて、殿井樣爾う云つたよ。」

「ぢや、東吾樣の女と云ふのは……！」と初野は顏を紅くしたが、急に蔑視む樣な語調で、「なアに、彼の殿井が何を知つて。」

「だッて、殿井樣のお友達に、同級の人が在るんで、東吾樣と同級の人が在るんで、それで熟く知つてるんだッて云つてたよ。」

成程爾う云はれて見れば、眞實の事かも知れぬ、また殿井とて、利益にも成らない事を、虛構へて話す譯もない。

女の關係、借財、それが原で東吾が離緣になッたとは？　それに芳江は外出もせぬ、金も送らぬとは？

若や私から起つた事で無からうか、過日東吾樣の持つて來た彼の金の事では無からうか。爾うでも無ければ、芳江樣から今迄便の無い筈も無い。けれども、けれども、私と東吾樣と何の關係が有らう？

彼の後、一回謝罪の手紙は進げた、それから、何とも御返事が無いので、房州に立つたか何うかと思つて訪ねて行つた。訪ねたけれど會つたのでは無い、東吾樣との關係と云つた處が、只だそれだけの事である、只だそれだけの事で、離緣など云ふ大事件が起るだらうか、只だそれだけの事で、彼の情に厚い芳江樣が私を疑ふだらうか、第一、それで東吾樣が默つて離緣を承諾するだらうか！　馬鹿馬鹿しい、無論他の女との關係なのだ。

「而して、其の女ッて云ふのは……、東吾樣の關係したと云ふのは、何樣な人なの？」と初野は久くして云つた。

「何樣な人だか……。」

「何か、放蕩してるやうな話でも有つて？」

「何うだか、私、彼の人の事なんか熟か聽かなかッた。」

「では、芳江樣は、それで承知して居るんだね？」

「もう、お婿樣を取るッて云ふんだもの、爾うだらう。だから、芳江樣は外へなぞ出ないんだッて、決してお金なんぞ送りや爲ないッて、其樣な物を的にして居たら、姉樣も私も、干乾に成るより外は無いんだッて、殿井樣吃驚して居たよ。」

「お前は、芳江樣から金を送る心算だなんて、其樣な事を皆な殿井樣に話したんだね？」

「だッて、私は……、」とお波は顏色を變へて、「姉樣、御免よ。」

「いゝえ、今更夫を叱るんぢや無いけれど、」と姉は案外に叱りもせず、「殿井様は、何様なに私を怒つてたらう？」

「怒つてなぞ居ないよ。」

「だツて、過去の事も有るんだもの……。」

「本當に怒つてなぞ居ないよ。あの、お前の姉様はね、學問も出來るし、中々才女だツて……、他日社會へ出たら、何様なに名を揚げるか知れやしないんだツて……。」

「其様な事を云つてて？」

「え、」とお波は得意に點頭き、「何卒、首尾好く卒業させ度いものだツて、それには、先づ療治をしなきや不可ないんだツて……。」

と其の殿井の親切な次第を話すと、初野も深く感に打たれたらしく、

「まア、それ程まで私の事を……？」

「え、姉様の事はね、大變に心配して居らツしやるよ。姉様、だから私の云ふ通り、殿井様に借りた方が好いぢやないか？」

「爾うされえ。」

「だツて、最う仕様が無いぢや無いか。明日からは、もう、お米を買ふお錢だツて無いぢやないか。」

「爾うだねえ。」

「私なら何様なでも辛抱するけれど、姉様は、何にも食べないで、其様な勉強許して居るんだもの、此の頃は最う……。」と涙ぐんだ。

「だけれど、殿井様は何と仰有るんだか……。」

と深く溜息を吐いた。

「ぢや、殿井様に賴むの？　本當に爾うするの？」と初めて勇む顏色。

「まア、お前の樣に爾う輕々しく考へたツて……。」と頓と氣に額を顰める。

「いゝえ、殿井様はね、承知して下さるに違ひないの、私請合ふの……。」

と云ふ時、其處の障子が明いて、前の植木屋の婆さんがお波を手招し、

「嬢ちやん、一寸來らツしやい。」

「お婆さん、何？」

「ま、來らツしやいよ、」と意味有り氣な顏で招ぎ、「今ね、殿様に會ひ度いツて方が參りましたよ。ま、此方へ來らツしやい。」

「爾う、誰？　何様な人？」

お波は訝りながらも出て行つた。用が有つて訪ねて來た人なら、眞直に此處へ來さうなものを、と初野は、其の後を見送つて首を捻つた。

而ると久しくしてお波が家へ入つて來たから、

「何だい？　誰…？」と隙さず問く。

「あのね、あの……、」障子に捉まツて、上目遣ひに姉を見ながら、其處に逡巡して居る。

「何うしたの？　ま此方へお來でな。誰が來たの？」

「だツて、姉様が怒ると可けないんだもの……。」

「え。怒る……？」

「近い中に行つて、熟く、姉様に談して遣らうツて、爾う仰有つたけれど、私は、私はあの、今日の事ぢや無いと思つてたんだもの……。」

「私に談して遣る……？　近い中に行くツて、誰がさ……？」と云ふ中、一段と驚いた顏をして、「殿井様だね？」

「私は、今日の事で無いと思つてたんだけれど……。」

「殿井様だらう？　波ちやん、爾うなら爾うとお云ひな。殿井様でせう？　前の家に來て居るのかい？」

「あの、突然に入つて、また、私が叱られちや氣の毒だからツて……。」

「それで、前の家に待ツて居らツしやるの？」

「え、入つても可いか何うだか、様子を訊いてからにするんだツて……。」

「だツて、私は、何の顏色で殿井様に……。」

「何故？　今後の、私達の事を相談しようと思

つて、態々來て下すツたんだツて……。」

「それでは、尚更會へないぢや無いかね。」

「だツて、姉樣が居るかツて問くから、居ますツて云つたんだもの。」

「困つたねえ、」と初野は我が身を見廻し、「此樣な恥かしい服裝をしてお前……、迫めて頭髮許しも……。」

と云ふ時しも、此方に近づく靴音が聞える。

「おや、來らしツたよ。」と初野は慌てて、「波ちやん、不在だと云つてお吳れよ、不在だと云つてお吳れよ。」

「だツて、今居るツて云つたものを。」

「でも、此樣な服裝で體裁が惡いぢや無いかね……、それ、其處へ入らしツた。」と初野は速くも障子を開けて、徐と室を逃げた。

背後ではお波が、入つて來た恭一を立迎へた樣子で、

「閑靜で、思つたよりは佳い所だねえ、」と例の輕く冴えた聲が入つて來て、「姉樣は？」

「え、彼の……。」

「居るだらう？」

「え、彼の、一寸不在ですの。今一寸出まして。」と周章した聲。

「出た？　今？」

「え、一寸。」

「ぢや、直き歸るね、待つて居よう、入つても可いだらうね。」

「え、それは可いけれど。」

家に上つた樣子なので、初野は跫音を竊んで屋後に身を潛ばせ、窓の下に耳を澄まして居た。話聲は能くは聽えぬが、何やら手土產でも貰つたらしく、嬉し相な聲でお波の禮を述べるが聞えた。

壁板に身を寄せて、初野は種々と考へた。

芳江の事、差迫る目下の困難、日每に進みつつあるらしい我が病態……、何うしても今は、恭一にでも賴るより他に術は無いのだ。恭一が、彼樣な事をした自分を咎めもせず、尙も賴に成らう、力を貸さうとの厚き情は、實に感謝に餘る有難い話である。

一爾うだ、最う恥かしいたツて仕方が無い、お目に掛つて、謝罪る處は謝罪つて、而して……、而して……。」と久くしてから點頭いたが、聽て襟など正して、徐に表の方へ廻つた。

恭一に會はうと思へば、過ぎた記憶、今後の想像、急に胸の中に躍つて、顏は燃ゆる、足は竦む、また見窄らしい服裝が氣に成ツて來る。けれども、何時まで此うしても居られぬ、と自ら勵まして額を擡げると、直ぐ其處の檐下に、一人の男が佇んで家の樣子を立聞して居るのである。

「おや！」初野は吃驚した。

男の方でも、初野の跫音に面を上げたが、それが思懸けぬ東吾なのである。

二人は驚いた顏を見合したが、互に頭を動かして、雙方から步寄つた。而して口でも云はず、無論手を曳いたでも無けれど、其處から跫音を竊んで、檐下を通り拔け、木立の間を裏庭へと出た。

空は薄く曇つて居るが、傾き掛つた日光は照付く樣に射して、木の葉も草の葉も、宛然油を塗つた樣にねつとりと光り、物の影は朧月夜の如く薄く落ちて、水蒸氣の多い南風が絕えず緩く吹旋つて居る。

一先日は誠に失禮致しまして、」と先づ初野から口を切つた、「私は、最う房州へお立ちなすツた事と存じてましたが。」

東吾も同じく立止つたが、凝然と初野を視て、「何うしました、大變血色が惡いぢやありませんか？」

「え、矢張し、まだ平癒しないもんですから。」と云つたが、身窄しい我が姿を今更の樣に恥

かしく俯向いた。

「醫師は何う云ふんです？　其様なにして居て可いんですか？　苦しかありませんか？」

「は、有難う、」初野は點頭いた。その答よりも東吾の優しき言に胸を突かれたのである、「苦しいツて云ふ程でも有りませんが。」

「でも、非常に痩せましたね。過日も爾う感つたが、今日はまた一段痩せた様です、貴女は爾うは思ひませんか？」

「はい、私も……。」と許り默つて了つた、急に胸が一杯になツた。

東吾も默つた、而して、手近の木の葉を拗取つて、脂氣の多い掌に載せて擦つて居る。

「先日は、大變失禮致しまして……、」と良久く置いて初野がまた云ひ出した、「あの、此間進げた書状は御覧下すツて？」

「見ました。」

「實際彼の通りの事情ですから、何卒惡からず！」

「彼様な事で、感情を惡くする僕でもありませんよ……。併し、彼の後、芳江から逆つて來ましたか、來ないでせう？」

「えゝ、それは、未だ何ですけれど……。」

「來ないでせう、僕も爾う思つてました。」と獨で點頭く。

「では、何か芳江様に……？」

東吾は只だ笑つたのみで、

「今來て居る人は……、彼は何です？」

「え、彼の方が、日外お話しました彼の、殿井ツて云ふ方なんですの。」と云つたが、顏色を紅くした。

「ぢや、彼の男が補助すると云ふのですな？」

「何うですか？　私は會ひ度くもありませんから、彼様なに隱れて……、失禮か知りませんけれど。」

「でも、お姉さんに其様な事を云つてるぢやありませんか？」と東吾は詰問するやうに云ひ掛けたが、「併し、芳江から逆つて來なきや何うするんです？　お困りでせう？」

「えゝ、それは困りますけれど……。ですけれど、芳江様が彼様なに御親切に仰有ツて下すツたもんですから。」

「貴女は、家庭の内情を知らんから其様な事を云ふがね……。」

「それでは、芳江様は何か……。」

「お、其處へ來たのはお姉さんでせう。」と東吾は、初野の詞を止めた。

「後見ると不可ませんから、失禮ですが……。」

二人は、足早に木立の蔭に身を隱した。お濱は四邊を見廻しながら、畑の方へ通拔けて行く。

木立と云つても、土を柔かに實物の檜葉や、松など五六株ばかりで、前には廣々と彼方の垣根まで野菜畑である。主人の仙右衛門と雇男とが、働いて居るのが見える。

隱れようとしたが、前に出れば畑の人に見らるゝので、二人は其のまゝ、其處に立止つた。

東吾は珍らし相に木の葉を拗り、足許の草花を眺めて、互に出來るだけ身を離して居たが、それでも、風が吹いて通れば東吾の袴の裾も障る、初野の長い袖も靡く……。

「最う、彼方へ去つた様ですから。」と久くして初野が云つた。其の聲は喉に窮迫つた様にも聞える。

「彼方へ出ませうか？」

二人の交した言は是だけであツた。けれども木立の間を出ると、二人とも、前よりは一倍に親しさが増した様な氣がするのである。

「家へ入りませうか？」と東吾が云つた。

「え……。ですけれど、未だ殿井様が居るかも知れませんから……、」と云つたが、少し狼狽へて、「それは、居つても關ひませんけれど。」

「彼様なに探す位だから、何か秘密な、でなきや、何か急用が有るか知れませんねえ。」
「秘密なんて、私には其様な用は無いんですから。」
「併し、貴女を補助するとか何とか、爾う云ふのぢやありませんか、でなきや、彼アして遣つて來る筈も無いし…。」
「ですけれど、私は、彼の方に助けて貰ふ氣なんぞありませんもの。私、貴方に、爾う疑はれましては…。」と俯向く。
「疑ぶんぢや無いが、併し、彼の通り現に來て居るぢやありませんか。」
「私は、最う、何様な事有りましても、決して他の助なんか受けない心算ですの。」
「他の助は受けない…？」
「え。芳江様の外は何誰でも。」
「芳江の外は？　だが、芳江からは、未だ便も無いッてぢやありませんか。」
「え、夫は爾うですけれど…。」
「若し、芳江から來なかッたら？」
「私は爾うは思ひませんの…。」と東吾を見て、「何か、芳江様に變つた事でも有るんでせうか？」
東吾は答もせず、何事か重大な考の湧いた様に、目を据ゑて我が脚下を見て居る。
「芳江様の身に、何ぞ變つた事でも起つたのでせうか？」と初野は再問いた。
「初野様、」と聲と共に面を上げたが、色は火の様に紅く、燃ゆる如くに光つて、「初野様、貴女の一身上は、及ばずながら僕が助けませう…、助けると云ッちや失禮か知らんが、兎に角僕が引受けます、貴女は厭かも知れない、併し僕は厭とは云はさない心算だ、最う、何處までも承知して貰はなきや成らん…。」
此う云はれる中にも、初野は最う眞紅になッたが、
「其様な事はございませんけれど、たゞ、私は只だ、芳江様に何うも…。」と後は小聲で聽取れぬ程に云ふ。
「芳江なぞ構はん、ま此れを取つて下さい、其様な事をすると、僕は貴女を恨みます…、」と取出した紙入を袱紗のまゝ無理に渡して、「取つて置いて下さい、構はん、貴女に此様な事を爲るのは今始まッた事ぢや無い、外日の入院料だッて、秘しては居たけれど僕です。」
「あら、ぢや彼の入院料は…！」
「貴女も爾う思つてましたらう！　初野様、彼様な事を爲るのも…、詰り僕は、疾から僕は…、貴女を戀して居たからです！」と云ふや否や、東吾は逃ぐるやうに門の方へ出て去つた。

第三十　新しき望

（一）

臥床に入つてからも、萬感胸に躍つて久くは眠れなかッた初野は、翌朝、臺所の用事もお波が手一つに出來上つた時分に目を覺ました。
昨夜、殿井の補助を得よう、得まいと云ふ事で、姉妹長い間云ひ爭つたが、その故かして、甚だお波の機嫌が宜くない。姉はまた深く此れを氣に懸けて、百方と慰むる様にするが、何うしても常のお波の從順な心には返らぬ。初野は、「變な娘ぢや無いか。」と胸に繰返し、幾回か口にも出した程である。
けれども、妹の方でも、顔色はまた一倍惡いが、何處か嬉々して、常よりも餘計に口を利く姉を、「今朝は餘程何うかして居るよ。」と訝つて居た。
で、朝飯を濟ますと、臺所へ立たうとするお波を姉は呼止めて、
「波ちやん、後で私が片付けるからね、ま、一寸此處へお出でな。」と優しく云つて、「貴女

昨夜、殿井様は、今日も再來らッしやるとか云つたね、本當に爾う云ふお話？」

お波は膳を持つたまゝ、默つて其處の敷居の上に起つて居る。

「よ、波ちやん……、何ですねえ此の人は、返辭をお爲なさいよ。」

「だから、然ッて。」

「段々意地悪になるんだよ、何うして此うだらう！」と顔を顰めたが、「未だ、昨夜の事を怒つてるの？」

「だッて。」

「何がだい、何がだッてなの？ ま、此處へお出でなさい。」と我が前に坐らせ、「何だい、だッてなの？ 可笑いぢや無いか、其様な顏色をしてさ、何か、面白く無い事でも有るの？」

お波は上目使に姉を眺めて居たが、久くして、

「姉様、おやア、昨夜の事は何う決めるの？」と矢張り勃然とした調子で云ふ。

昨夜遲くまで種々云ひ爭つた末、夫では殿井の世話になるか、昨日お波に置いて去つた金を此のまゝ返して了ふか、臥てからも熟く考へて見て、其上に決めると仕よう、此う云ふ事で、姉妹は枕に就いたのだッた。

「それでね、私も種々考へて見たけれど、是迄辛抱して來て、今爰で彼の人の補助を受けては、實に殘念だからね……。」

と云ひ切らぬに、妹は、

「ぢや、昨日のお金は返しッ了ふの？」

「爾うさ。其の方が可いぢや無いか。貴女だッて爾うだらう、少一箇月や二箇月の事で、彼様な人の恩を被るなんて、實に口惜いぢや無いか……。」

「ぢや、返す事に決めたの？」と念を押す。

「だから、其の方が良いから、爾う決めようぢや無いか……、波ちやんだッて爾うでせう……？」と妹の顏を覗いて、「ね、爾う決めようぢや無いか……、而して、孰せ返すなら、また彼方から來ない中にね、速く持つてッた方が良いぢや無いの……、爾うでせう。だからお前、御苦勞だけれどね……。」

「だッて、返すたッて、最う餘程費つたよ。」

「え、費つた？ 何に費つたの？」

「だッて今朝、伊勢吉の來た時……。」とお波は通川から溜つて居る酒屋の借も拂つたし、前の婆さんの借も返した事を告げる。

通例だと、無暗に金を費ひなどしては、初野は決して默つて居るのではないが、如何したか今朝は叱言も云はず、

「爾うかい、ぢや、其の費つただけのお金は、私が足して上げようよ。」

妹は吃驚した顏をして、

「足して遣るッて？ 最う一圓から以上よ。」

「何だねえ、其様な仰山な顏をして。一圓許し、姉様にだッて有りますよ。」

「爾う……？」

「だから、御苦勞でも、お前さん、返して來てお呉れな、あの人の來ない中に。」

「だけれど、彼金を返して、而して、此から後何うするの？ 最う、今回返したら、何様な事有つても願ふ事は出來ないよ……。」

「私にだッて、當が有りますよ。」

「芳江様の方ならば、今迄何とも便が無いぢや無いか。」

「芳江様の方で無く、別に。」

「ぢや、學校の、楠田先生に賴むの？」と云つたが、心配さうに、「だッて、未だ賴んでも見ないものを、當にならないぢや無いの？」

「いゝえ、楠田先生でも無い。」

「ぢや誰？」と一杯に目を睜つて云つたが、「ぢや、彼の……東吾て云ふ人だらう？」

「えッ……」と初野は吃驚して、「お前、彼の紙入

を見たね？」
「紙入ツて…？」
「私の寢てる間に、机の抽匣を明けたんだらう？」
「いゝえ、抽匣なんざ、」と頭を掉つて、「私、其樣な事は知らないわ。」
「ぢや、何うして其樣な…、東吾樣の補助を受けるなんて、其樣な事を云ふの？ 紙入を見たからでせう？」と膝を進めて、「何故祕すの、見たら見たとお云ひなさいよ。」
「だツて見ないんだもの。紙入なんて、私知らないわ。」
「ぢや、東吾樣の事を何うして…？」
「だツて、昨夜彼樣なに、寢言を云つてたぢや無いか。」
「えツ、寢言…？」見る間に初野は火の樣に紅くなツた。
「芳江樣に祕して置くの…、東吾樣が力に成ツて下さるから、最う今後は、心配しようにも心配する事は無い…なんて。」
「まア、其樣な事を…？」と初野は、一度は袖で顏を隱したが、急に怒つたやうに、「お前は、それを默つて聽いてたの？ 本當に人が惡いよ。」
「だツて、私も、姉樣の聲で目が覺めたんだもの。」
「本當に人が惡いよ…。」と妹を睨めたが、「寢言だもの、何を云ふか分るもんかね、何も…心に在る事を云ふと極つたものぢやあるまいし、信になるもんですか。」
「ぢや…。」
「何ですよ、其樣なに私の顏許し見て、失禮な…。」と態と妹に面を背向けて、「現在、私の知らない事なんだもの…。」
「ぢや、今の紙入ツて？」
「それはね、」と初野も當惑したが、流石にそれ迄を僞る事も出來ず、「まア、それは悠り後で話しませう。」
「ぢやア、姉樣の、お金を借りる當ツて云ふのは、東吾樣ぢや無いの？」
初野は一寸考へて、
「それは、東吾樣の事は東吾樣だけれどね…。」と曖昧に云つた。
「東吾樣…？ ぢや、東吾樣の世話に成るの？」
「何だねえ、其樣な大きな聲をして。」
「本當に、東吾樣の世話に成ると決めて？」
「其點は、お前と相談の上に決めるのだけれどね…、何故？ 可いぢや無いか、東吾樣の補助を得ては惡いの？」
「私、彼樣な人嫌ひだわ。」
「何う云ふ譯で？」
「何だか、怖いもの…。而して、若し彼樣な人と關係すれば、姉樣は、墮落するに極つてるんだツて云ふよ。」
「え、墮落？ 誰が其樣な事を云ふの？ 殿井樣だらう？」
「殿井樣ばかしぢやない…。」
「それから誰？ 島井のお主婦？」
「然。だツて、彼の男は、女たらしだツて云ふもの。」
「女たらし…？ 殿井樣が其樣な事を…？ まア失敬な！ 東吾樣はお前、此の夏で大學を卒業なさる方ですよ。法學士の學位を得る方ですよ、失敬な…。」と初野は脣を咬んだが、「波ちやん、可いから、彼の金は返してお呉れ！」
「殿井樣へ返すの？」
「爾うさ。何だねえ、貴女まで其樣な顏色をして。疾く支度して、疾く返してお出でなさい、穢はしい！」
「だツて、私は返しに行くの厭だわ。」
「何ですツて…？ 波ちやん、貴女姉の言を背くのですね…？」初野の聲は常に無く荒くなツた。

(二一)

「……彼樣なに顏を掩へて行くよ、未だ泣いてるのか知ら？　外見無い、人が見たら變に思ふだらうに……。」と初野は門の外に立つて獨語した。

その見送る畑の間を、辻腕車にがた／＼と、お波の姿が搖れながら町の方へ行くのである。

「可哀想に、彼樣なに叱らなきや宜かツた、少女の事だもの、殿井樣を褒めると云つた處で、東吾樣を誹ると云つた處で、何も深い意味で云ふのぢや無いんだから……、私だツて、其處に氣の付かないぢや無いけど、ついむら／＼と成ツて、妹が殿井樣でもある樣に、彼樣なに食つてかゝつて、彼樣な慘酷な事を云つて……あゝ、可哀想な事をした……、おや、最う見えなくなツた、何卒私の云つた事を、餘り氣に懸けないで呉れれば可いが……。」

初野は此樣なに思ひながら家へ入つたが、取散した妹の出た跡を見ると、何と云ふ事も無しに涙ぐんだ。而して、

「波ちやん、激した餘りに如彼は云つたけれどね、私は決して、お前を鄕里へ歸すの、姉妹の縁を斷るのと、其樣な意は無いのだからね、先刻の言は何卒堪忍してお呉れよ。東吾樣が力に成ツて下すツても……、此の將來何樣な事に成ツても、お前とは斷つても斷れない同胞なんだもの、お前と別れて成るものかね。お前の爲には、私は何樣な事も忍ぶ心算ですよ、甘んじて犧牲にも成りますよ……。」と涙ながら獨語した。

取散した物を片付ける力もなく、久く妹の事を胸に繰返して居たが、風一つ無い靜な垣の外に、から／＼と腕車の音が響いて、門の方から人の聲がする。

「おや、波ちやんか知ら……。」と初野は面を上げ、耳を欹てた、途中から妹の戻つた事と感つた。

それで、入口の障子を明けて、木立の間を透して見ると、思ひ掛けぬ芳江が、何を考へるのか首を垂れて、木履の音も力なく入つて來るのである。

服裝も、頭髮も、無論外出の風はして居るが、顏色は蒼く、目は沈んで、言葉少なく、初野の其處に立つて居るを見ても、

「姉樣。」と只だ一言、それも常の冴えた語調では無く、嘆息するやうに云ふのであツた。

昨日までは、瞬時も胸を去らなかツた、待ちに待つた芳江であるから、初野は行きなり抱付きもする筈であるが、これも何處か常と異なる樣子で、

「おや、芳江樣。」と待ち焦れた友人を見た嬉しさよりは、意外の人に會つて狼狽したと云ふ語調である。

けれども、芳江の沈んで居るに反して、初野はそは／＼と言も多く、先づ友人を室に誘ひ入れたが、偶と机の上なる鰐革の紙入が目に着くと、慌てて抽匣に隱して、緘と芳江の顏色を覗つた時は、全く友誼の存在する間に使はぬ目遣ひをしたのであツた。

濡れて居る芳江の目には、此の常と異なる擧動などを怪しむ暇なく、机の上なる東吾の紙入になど元より氣も付かず、

「義姉さん、何卒ね……、此樣なにお約束を背いて、もう義姉さんに會はす顏色は無いんですけれどね、何卒、堪忍なすツて下さいよ、ね、何卒ね……。」と涙の溢るゝ目に、凝然と初野を視詰めたのである。

「何ですよ、お互の間に其樣な、」と初野は打消して、「堪忍するも爲ないも無いぢやありませんか。夫よりも、此の頃は何うなすツたの？　私心配してたわ。手紙を上げようと思つたけ

れど、過日のお話もあるんだし、其樣な事をしてまた、貴女に御迷惑の懸る事でも有つてはと思ひましてね…。本當に心配だツたわ、何うなすツたの？」

「義姉さんに爾う云はれると、私は、もう…、」と、面を掩うたが、「私こそれ、手紙を上げよう…、出られるなら、一寸でも會ひに來ようと思つてね、始終隙を狙つてましたけれど、何うしても、其樣な暇なんぞ無かつたんですもの…。」

「では、貴女の阿母樣は、私とは手紙の往復も可けないツて…？」

「矢張り、私の働が無いからなんだけれど、」と云つたが、初野の顏色を見て、「いゝえ、誰の故でも無いのよ、皆な私が悪いからなのよ、私の意志が弱いから、思慮が乏しいから…、道義の念が乏しいから、それで此樣な事にも成るんですわ。」と泣く。

「だツて、私は貴女を其樣な方とは思はないから。」

「いゝえ、私一人の罪よ、」と頭を掉つたが、久くして、「如樣、彼時から何うなすツて…大變でせう？御病氣の方は、少しは快い方？」

「快いと云ふ事も無いけれど、何だか、此の頃は病氣に熟れた樣でね。」

「ぢや、慢性に成つたか知ら？困つたわねえ！」と萎れたが、「而して、金の方は？」

「金…、金ですか…？」

「私、此樣な事問かれる義理ぢや無いけれど、始終それ許し氣に懸けて居ますのよ…。」芳江は如何にも云難さうに云つた。

「少しね…、何うか此うか遣つて行ける樣ですからね…。加之に、斯うして居た處で、幾何も費りやしないんですもの…。」と曖昧に云ふ。

「ぢや、何處からか…、お郷里から送る事にでも成ツて？」

「いゝえ、郷里からなんぞ最う…。」

「ぢや何うして…？私に祕して下さる事は無いわ。」

而ると初野は顏色を變へたが、

「祕するんぢや無いけれど、少しあの…、それに、未だ確定した事でも無いし…、」とまで云つたが、「その事はね、其樣なに心配して下さる程の事ぢや無いの。」

「爾う？本當の事？」

「然。何うか此うか、ま、遣つて行ける心算なの。」

「其樣なら可いけれど…。」と未だ合點の行かぬ顏で「私もね、最初から、孰せ自分の手ぢや難かしいと思つたもんでね、兄樣の力を借りようと思つてね、專ら兄樣を賴にして居たんですの、而るとね、力を借りる處か、最う兄樣は…。」

芳江が急に泣出したので、

「何うなすツたの、兄樣は何うかなすツて？」

「兄樣はね、兄樣は今…、離縁に成る處なの！」と許りで疊に泣伏した。

涙と共に芳江の語るには、何が原因で此うまで感情を惡くしたものか、近頃の東吾が擧動、房州に行かぬなら養家へ來て居よと云へば、僕には僕の都合有つて爾うは不可ぬと答へ、借財が有るさうな、一日も利息の掛る金を借りて居る事は無い、今日にも返して遣る程に、殘らず夫を調べて見せよと云へば、未だ期限の來ぬものを、返して貰ふ必要は無い、僕にも夫だけの日常が有つて借りた金だ、其樣な些細の事まで干渉されては迷惑であると云ふ返事で、離縁するなら速く爲て貰ひ度いと云はぬ許りの息込である。

兩親は非常の立腹で、爾う云ふ料簡ならば、今の中に斷然離縁して了ふが良い、との相談が突然勃起つた。芳江の思ふには、東吾の爲人、

中々其樣な亂暴な事を云ふ人では無い、其處には何かの行違が在つて、それで親達の言葉をも誤つて解つて居るのであらう。

芳江の爲にも、東吾の爲にも、今が一生の大事である。他の時と異ひ、此る場合に臨んで恥かしいの體裁が惡いのと云つて居るべきで無い、兄樣に會つて、その胸の中を聽いて、何處までも親達との間を舊に復さなければならないのだ。

芳江は漸と斯う思定めて、友人を訪ぬるからと母に外出の許を乞うた。ところが、初野の一件が有つて後は、外出も、郵便を出す事も禁じて居る母が、何う思うてか今日ばかりは快く承知して、服裝なども自ら世話を燒いて出して遣したのである……或は東吾に會ふ爲と察して出したのかも知れぬ。

芳江は、無論一文字に東吾の宿へと腕車を駈けたが、行つて見ると尋ねる人は居なかつた、その上に主婦も不在である。下婢から聞けば、東吾は此三四日前に出た限りで家へ歸らず、昨夜は車夫を使に、荷物を取りに寄來したと云ふのである。

「まア、お荷物を取りに寄來したんですツて？」

初野は芳江の談を遮つた、「何處へ行らしたんでせう？」

「無論、猿樂町の家でせうけれど……。」

「困つたわねえ！」初野も溜息を吐いて、「何うなさる心算でせう？ 豈夫、離縁を取るの、貴女に別れようの、其樣な心算ぢや無からうけれど……、無いには極つてるけれど。」

「私も爾うは思ふけれど……、」と云つて久く考へてから、「何卒して、兄樣に會ひ度いと思ふんだけれど、何だか、猿樂町へ行くのも體裁が惡いんですもの。」

此う云ふ處を聽いて居ると、何と云ふ譯は無しに、初野は前途に新しい望の光を認めた樣な氣がした。無論、東吾が子爵家を離縁に成れば私は……などと、自分の將來に勝手な想像を描いて見るのでは無い。また、昨日の東吾が言の前後と、芳江が今の話とを較べて、其の間から自分の嬉しい樣な判斷を得たと云ふのでも無い、芳江の話には十分に同情して、現在一緒に嘆息もし、一緒に涙も溢した程である、であるから、決して芳江の不幸が其の原因を成したのでは無いが、何となく新しい望の光を認めたやうな氣がする、自分にも分らぬが其樣な氣がする。雨の降續いた日に風が出ると、假しそれが一倍強い雨雲の流れて來る前觸であるとしても、何だか晴天に近付いた樣な氣がするものだ、それからまた、親に死なれた幼兒などが、其悲哀に目を泣腫しながらも、近所の人の群る賑かさに、常よりは面白氣に遊び戯るゝものである、初野の新しい望と云ふのも丁度其樣なものであるかも知れない。

「而して、東吾樣の御兩親は何ういふ御意見なんでせう？」と初野は久くして云つた、「豈夫、離縁になツた、爾うかい……で、それ切り放棄つて置きも爲さら無いでせう？」

「猿樂町の人達は最う……、阿父樣でも、阿母樣でも、大變御心配なすツてね……。」

と芳江は、東吾の兩親の交る交る謝罪りに來た事、けれども今は、我が母も父も、東吾の家の者には面會せぬ事を語り、

「だから、最う容易な事ぢや調停は出來無いんですの……。」

「困つたわねえ！　東吾樣も分らないわねえ！」

「餘り母樣の干渉が過ぎるもんだから、何か、其樣な事から不快に感つた事が有るんぢや無いかと思ひますの……。」

「東吾樣を離縁なすツて、而して……、別にまた、御養子をお貰ひなさるお談でも……？」

「然、それだから、私許し困ツ了ひますのよ。」

「お有んなすツて？　ぢや、最う爾う云ふ事に決つて…？」
「いゝえ、私が反對するもんだから、それは立消えに成ッ了つたけれど。」
「爾う？」と初野は點頭き、「貴女は、何處までもそれで通す心算でせう？」
「私は其の心算だけれど…、だけれど兄様は…。」とまた涙ぐんで、「姉様、私ね、一つ姉様にお願が有るんですの。」
「何を？」
「…此様な勝手な事はね、幾ら姉様にだツて、願はれた義理ぢや無いんですけれどね、私、姉様の外には、最う誰一人賴に爲る人が無いんですもの…。」
「其様な事、今更まツて仰有る事は無いわ。」
「私ね、姉様に救うて戴き度いのよ…。」と芳江は澱みながらも、其の苦しき胸の中を打明けた。
　それは、假ひ何様なに親達に强ひられても、東吾ならぬ他の男と結婚は決して爲ない、また東吾に如何なる不平が有らうとも、何處までもそれを宥めて、親達との間を舊の親しい態に復さずには措かない、と芳江は小さき胸に堅固く誓つて居た。今日東吾の宿を訪ねたのも夫故であるが、幾ら決心は固くとも、さすがに東吾の生家迄行く勇氣は出しかねた處から、初野の力を借りよう、と考へ付いたのである。初野は義姉とも賴む只だ一人の淑女である上、東吾とも親しくして、東吾の言ふ處は、何事に依らず固く遵奉つて居るし、東吾の方もまた、初野の品性を稱贊して、日夜などは、初野とは末長く交るやうにせよ、と自分に話した事さへ有る位だ。であるから、初野に賴んで、自分の意中を東吾に通じて貰つたなら、東吾の方でも一切打明けて吳れるかも知れ無い、と此う考へたのである。
「ですからね、何卒、餘り勝手なお願ひですけれど、何卒兄様に會つてね、兄様の意中を、熟く聽いて戴き度いんですの。」と親にも云へぬ胸の祕密を打明けたのである。
　初野は話の中途から何うしたか顏色を紅くして聽いて居たが、此時勃然とした樣な語調で、
「芳江様、それでは貴女、私を疑つて居らツしやるんですわねえ！」
「え？　疑ふツて…？」
「疑つて居らツしやるわ！」と固く口を結ぶ。
「何を？　私、何も姉様を疑つてなんそ…。」と曇の無い目を睜つたが、「ぢや、もツと疾く姉様に知らさないから…？」
　初野は默つて居る。
「だツて、知らし度いにも私、數日、外出を禁められてたんですもの…。」
　初野は紅くした顏に笑を作つて、
「爾う、ぢや解つてよ。私の誤解だツたわ…。貴女氣に掛けて下すツちや困るわ、全く私の誤解よ。」
「其様なら可いけれど、」と今度は訝し相な目をして、「何か、姉様を疑ふやうな事を云つて？」
「いゝえ、爾うぢや無いの、唯鳥渡ね…、」と初野は愈よ紅くなり、「何でも無い事よ、貴女、爾う追究しちや厭よ。」
「…追究なんて、其様な事は無いけれど…。ぢや…。」とまた何か云はうとすると、
「可いわ、最う何にも仰有る事無いわ。私、今日にも東吾様を訪問するわ。」と初野は快く引受けて、芳江を悅ばせたのである。

第三十一　わかれ

（一）

「何が怖いんですよ、私が附いてるぢやありませんかね…。」

「だツて、若し家に入れ無いツて云つたら？」
「その時は、直ぐ賤井様へ行けば可いぢやありませんか。」
「おや、小母さんも一緒に居てね。」
「えゝ、居ますとも。」
「おいてきぼりしちや厭よ。私、小母さんを捉まへてるわ。」
「なんだツておいてきぼりなんか爲るもんですかね。私だツて、云ふだけの事を云はなきや歸りませんよ。」
「私だツて爾うだわ。なんぼ姉様だツて、餘りだと思ふわ……。」
「爾うですとも、情夫が出來たから、最う妹も何も要らないと云ふんぢや、全く、義理も人情も知らないんですからね。」
「あら、爾うぢや無いのよ。唯ね、東吾様を惡く云つたり何かするなら、最うお郷里へ歸ツて了へツて云ふの……。」
「それが、矢張し貴女よりも、其の男を大切に思ふからぢやありませんか。情夫が有れば、最う同胞なんざ用が無いツて云ふんでさアね。」
「小母さん、餘りだわねえ。」
「いゝえ、其様なに泣くこたありません。先刻も云ふ通り、愛はね、貴女にも、貴女の阿姉様にも、もう一生の大切ですからね、氣を確乎持つて、彼の事を皆な云つてお遣んなさい、ね、お浪ちやん、貴女、先刻云はれた事を、覺えて居らツしやるでせう？」
「記憶えてるわ、皆な云ふわ。」
「云つてお遣んなさい、構ふこた無いんだから……、それで怒るんなら、勝手に怒るが可いぢやありませんか……。本當に、貴女許し可哀想にねえ、彼様な、御郷里の阿兄様の手許を離れて、是から安心だと思へば、その頼にする阿姉様が、また此事な事に成るなんてねえ、お可哀想なは貴女許しですよ……。」
「私ね、それを思ふとね、矢張し、郷里に居れば宜かツたと思ふの。だツて、なんぼ兄様が辛いツて、私、此様な悲しい難になんか遇つた事は無いわ。」
「爾うでせうともねえ、加之に、御郷里には、阿母様も居らツしやるんですものねえ。」
「私ね、此頃はね、毎夜阿母様の夢許し見るのよ。」
「まア、爾うですか……。阿母様も、嘸ぞお案じなすツて居らツしやるでせうよ。それを、阿姉様はまア、何て云ふ不料簡な方でせうね。」
「これはね、秘密のお話だけれどね、私、郷里を逃げて來る時はね、阿母様が承知で逃がして寄來したの。あの、家に居て、兄様や嫂様に叱られる處を見て居るとね、阿母様は、死ぬより辛いんだツて、だから、早く東京へ行つてね、姉様に一人前の人にしてお貰ひツて……、お前の力と頼む者は、世の中には姉様一人だツて……、兩して、お前達二人が立身して呉れれば、阿母様なんざ、此の儘干乾にされても構やしないんだツて……、だからね、阿母様、死ぬ時でも、最う歸つて來るには及ばないんだツて……。」
「まア、爾うですかい、貴女の阿母様は、男優りの御方ですわねえ。」
「だから、何様な事でも私、姉様の云ふ事は背かない心算だけれども……。」
「それだのに、情夫狂ひをするなんて、何て云ふ忌々敷い……。」
「情ないわねえ、小母さん。」
「魔が魅したんですよ、でなけや、彼様な御怜悧な方が……。おや、此邊ぢやありませんか、なんだか植木屋さんの様ですよ。」
「え、直ぐ其處なの、藪の蔭になツてるの。」
　暮れても長い初夏の黄昏時に、植木屋佃右衛門が庭口で、合乘の腕車を降りたのは、下宿鳥井の主婦とお浪の二人である。

二人が庭に入ると、直ぐ其處の、火影の赤くちら〱する戸が明いて、仙右衛門の婆さんが外を覗き、

「おゝ、孃ちやん、今お歸りですかい。姉樣はね、先刻まで待つて居らッしやいましたがね、何時までも貴女が歸らないからッてね…。」

「あら、姉樣は何處か行らしッて？」

「なんでも、神田まで行らッしやるとか云つてね、」と婆さんは同伴の主婦にも目を着け、「これは、お來でなさい。」

「今晩は、」と主婦は點頭き、「其では、此の孃ちやんをお迎に行らしッたんですか？」

「何ですかね、なんでも、大變心配して居らッしやる樣でしたッけが…、たゞ、成りッたけ速く歸るんだからッてね…。孃ちやん、燐寸上げますかね。」

「いゝえ、明るいから分るの。」

「何處へ行らしッたらう？」と訝りながら、主婦もお波に附いて木立の間を奧へ入つた。

入口の戸は手を入れるだけ開いてある。お波は早くも内に入つて、臺所から洋燈を點けて來た。其の燈火を便に、珍らし相に家を見廻した主婦は、夜の故か、これならば殿井樣の話した程でもない、などと思ふのだつた。

膳の上に茶碗を伏せて、煮豆、佃煮、澤庵などの小皿、火鉢には土瓶が危く傾いて、お波の夕飯の支度が、室の眞中に全部供へてあるのだッた。

「お波ちやん、何卒構つて下すッちや困りますよ、お客樣ぢや無いんですから…。だけれど、私何う爲ようか知ら、お歸りの分らない處を待つてても詰んないし…。」

膳を片付けて居たお波は、

「小母さん、歸るの…？　ぢや、私も同伴に行くわ。」

「いゝえ、貴女は今夜で無く…、熟く彼の事を阿姉樣に話してからになさいよ。」

「だッて、私一人ぢや云へないわ。」

「其樣な事を仰有つて貴女、それぢや、阿姉樣の一生が廢ッ了つても可いんですか…？　今が大切の時ですよ、緊乎しなきや可けませんよ。」

「それは爾うだけれど…、何樣なに叱られるかと思つて…。」

「叱られたッて可いぢやありませんか、その時は、直ぐ殿井樣に逃げて來らッしやいましな。彼の通り、貴女の一身だけは、必然僕が引受けて教育して遣る、如彼迄仰有つて下さるんですもの、何時でも逃げて來らッしやいましな。」

「爾うねえ。」

「何も怖いこた無いでせう？」

「姉樣の爲なんだものねえ。私云ふわ、一人だッて云ふわ。叱られたッて構やしない、一生懸命に成れば、何怖い事有るもんか…」

「爾うですとも、爰が、浮沈の迫戸際ですからね。」

「迫戸際ッて何？」

「肝心な場合ッて事です…。おや、誰か…。」

「姉樣歸つたか知ら？」

二人は戸の外に、次第に近付く跫音に耳を欹てた。風の絶えて靜な薄月夜で、庭には木の葉の私語も無く、何の花か、甘い樣な臭い花の香が、戸の隙から入つて來る。

「確か、人の跫音だッたが。」と主婦は目を瞬く。

「私も、爾う思つたの。」

「前の家の人か知ら？」

「變だわねえ。」

と云ふ時、突然また強い跫音がして、

「頼みます。」と高くは無けれど男の聲で入つて來た。

障子を開けると、春の高い、ネルの單物の間から胸の廣いシャツを出して、紅い顏の東吾

がいゝいゝツそり起つて居る。
「お波ちやんと云つたツけね？ 久し振だねえ。」と東吾は笑顏を作つたが、其の息は家中に溢るゝやうな酒の臭である。
「え……、貴方は彼の……。」とお波は意外なので狼狽したが、障子の內を見返ると主婦は頻に眼を動かして、確りしろと云ふ合圖をするのである。
「忘れたかい？」と東吾は尙も笑ひながら、「記憶えてるだらう？」
お波は、主婦から意を注けられて、姉を迷はせたのも、姉を墮落させるのも、私が此樣な難に遭はされるのも、悉皆な此の男の爲だ、此の男が在るから、姉樣は私を可愛がらなくなツたのだ、と思ふと、少女ながらも胸を据ゑて、
「あの、何か御用ですか……？」と出來るだけ暢氣に云つた。
東吾には更に其と感ぜぬ態で、
「姉樣はお不在？ 何處へ行つたの？」
「何處へ行つたか知らないの。」
「知らない？ おや／＼鳥渡出たんだね？ 最う、歸る頃ぢや無いのか？」
「私知らないわ、何か、姉樣に用が有るの？」
東吾はお波の擧動を見て、初めて障子の內の人に氣が付いたらしく、
「お客樣が在るね？」と低聲で云つた。
「お客樣が在つても、貴方の……。」と云つて云ひ澱んだ。お客が在つても貴方の世話にはならない、と云はうとしたが、流石に口に出し難ねたのである。
「ぢや再來よう、姉樣へ宜しくね。」
「あの、何の用だか、それを聽かして下さい。」
「用を聽かせろ？」東吾は、初めて其の近視眼を睜つた。
「え。でないと、姉樣が歸つてから、私叱られますから。」
「再來るから可いぢや無いか……、只だ爾う云つてお呉れ」
「だツて、私……。」
と云ふ中、東吾は出て行く。而ると主婦は、
「速く聽いて來らツしやい、追蒐けてツて聽いて來らツしやい。而してね、今後は、餘り來て下さらないやうにツて、姉樣が申しましたツて、爾う云つて來らツしやい、貴方の樣な方には、姉樣は最う用が無いんですツて、速く……。」
お波は點頭いたが、其の儘草履を突掛けて驅出した。主婦は戶外を透して、久々耳を澄まして居たが、頓て自分も庭へ出た。
月影朧に、夜氣は生暖かく、草も木も夢の如く浮いて、門の方から途切途切の人聲が波打つ。主婦は覺られぬ樣にと、徐に履物を曳摺つたが、忽ちお波が息を切つて驅けて來た。
「お波ちやん、何うでした？ 爾う云ひましたか？」
「え、爾う云つたの、構ふこた無いから爾う云つて遣つたの……。怒つてよ、私、ね、毆打つたらね、人殺ツて怒鳴らうと思つたの。」
「何て云ひました？」
「嘘ね、姉樣が爾う云つたかツて……。だから私、姉樣は貴方の樣な人には、最う用は有りませんて……。」
「爾う仰有いましたか、宜うござんしたねえ。」
「大變に怒つて行つたの……、怖いけれど、私一生懸命だツたの。可いわねえ、姉樣に知れたツて關はないわねえ。」
「知れるもんですかね。最う此れツ限りで、怒つて來やしませんよ。」
「爾うなれば可いわねえ。」
「爾うなると、また舊の、貴女に優しい阿姉樣に成りますよ。」
「小母樣、宜い事を爲たわねえ！」
二人は家へ入つた。

（二）

往來を避けて、松影の闇を投げた三崎町の堤下に、角燈の巡査が、片手に女を抱起して、
「如何したのです？　何處か惡いですか、腹痛でも爲るですか？」
「はい、最う、快うございます……。」と聲も細く、美しい顏を力なく俯垂れて、纖細な手を芝原に辛に身を起して居る。
「其樣なに我慢する事はない、何處か惡いのでせう……。兎も角、此うして夜氣に觸つては冷えて不可ん、私の肩に捉まんなさい。」
「いえ、最う本當に快うございますから。」と捉られた手を無理に引離した。
「全く何うも有りませんか？」
「え、有難うございます、最う爽然致しましたから……。」
「元來、何故此樣な處へ來て居るのですか？　見れば、教育を受け居る人の樣ぢやが、若い婦人たる者が、夜中此樣な處に來て居ると云ふは、不都合ぢや無いですか？」
「はい、眞に濟みません……。途中から、車夫を使に遣りまして……、待つて居ります中に、急に氣分が惡くなツたものですから、つい、前後の考へも無く入りまして……。」
「それでは、その車夫を待つとるですか……？　一體貴女は、何處の學生です？　姓名をお名告りなさい。」と巡査は嚴かに手帖を取出した。
「はい。」
「住所は何處です？　或は寄宿ですか？」
「はい……、何卒、その事は御勘辨を願ひます、私の名譽にも係りますし、學校の名も傷けますから……、何卒御容赦下さいまし……。」と聲も震へて、切に頭を垂げるのである。
「左程名譽が大切なら、何故此樣な處に隱れたです……、氣分が惡ければ惡い樣、人の店頭を借りても宜し、或はまた、交番へ保護を願つても可いです。然るに、前後を考ふる暇は無いか知らんが、此樣な暗い、草原に横臥し居つては、無宿の乞食か、左なくば、淫賣婦の類と認められても苦情は云へんでせう……。」
「はい……。」と角燈の光に、涙ははら〳〵と草の葉に輝いて、細い頸を半ば揚げたが、「憚りですが……、私は其樣な、其樣な賤い女ぢやございません。」
　巡査は其の態を見下して居たが、何う思返したか手帖を隱袋に納めて、
「然らば、今回は此の儘にして置きます、今後は、此樣な事の無いやうに注意なさい。」
「はい、承知致しました。」
「私の見て居る間、疾く此處をお出でなさい。」と巡査は其邊に角燈を輝して、「其處に、何か書册が落ちて居ますぞ。」
「はい、有難う……。」と書册を拾ひ上げたが、其の機に二三歩前に蹌踉いて、思はずも再ばツたり倒れた。
「如何しました。」と巡査は疾も扶起して、「まだ氣分が惡いですか？」
「はい、いゝえ、最う爽然致しましたけれど……。」
「併し、其の通り歩行も出來んではありませんか。」
「はい、あの、少し脚氣に罹つて居りまして……。」
「脚氣に罹つとる……？」と云ふ處へ、一人の車夫が提灯を振りながら駈けて來て、
「や、此處にお居ででしたか？　何う爲せえました？」と先づ女の手を捉つた。
「汝か、此の方の供をして來たのは？」と云つて、巡査は、へ、へ、と切にお叩頭する車夫を見下したが、頓て水の底で鳴る鐘のやうな聲

で、一酷氣な相ちやが、熟く氣を付けて挽かなきや不可ぞ。」

「へ、へ、畏まりました。」と車夫は一も二も無く巡査と離れて、其邊に取卷いてる黑い人の間を拔けると、「何う爲せえました、萩原樣、まア確りなせえまし‥‥。」

「何卒、名を呼ぶのは止して下さいな。」と俛首で云つた。

「へ、一體何う爲せえました？　氣分でもお惡いんですか？」

「え、最う少いんですの‥‥。」と女は車夫から手を離して、「あの、何處に居らツしやるか、致へて呉れましたか？」

「へ、それは分りませんでしたが、好い塩梅に、其處でお目に掛りましてね‥‥。」

「おや、東吾樣と‥‥？」

「へ、お目に掛つてね、それから御同伴に參りましたが‥‥、お、彼處に居らツしやいますよ。」と車夫は聲を潜けて、「旦那、旦那！」

「ま、何卒靜に‥‥」と女は四邊を見廻した。

最う暗い通に閉されてゐたので、樹木の繁る町中で、東吾は車夫に聲掛けられたのであツた。熟く見ると、日外初野の下宿を訪ねようとして、初野の樣子を途中で尋ねた彼の時の車夫である。その云ふ處を聞くと、萩原樣のお使で、先刻から二度も、旦那の家へ上つた處で、直ぐ其處に萩原樣に待つて居りますからと誘はれたのである。

初野はまた、澁貴婦と云ふ巡査の一言が、口惜く恥かしく、身體の顫も止まらぬ處へ、意外にも東吾に逢つたので、

「まア、本當に好い處でお目に掛りました、」と行きなり袂を捉へたが、また震して、「私、口惜い目に遭ひましたの‥‥。」

「何う爲たんです？」と云つて、更に車夫を見返り、「おい、何う爲たんだ！」

「何ですか、今お巡査さんがね‥‥。」

「えツ、ぢや亂暴者にでも‥‥？」

「いゝえ、其樣な事ぢや無いんですけれど‥‥。」と涙を拭いて居る。

「何うしたんです、え、ぢや巡査が何か‥‥？」

「いゝえ、最う何でも有りませんの‥‥。」と急に襟を正して、「貴方、是からお宅へお歸りで居らツしやいますか？」

「僕ですか、僕は一寸ね‥‥。」

「あの、是非お目に掛り度い事が出來まして、それで、此の車夫さんを上げた處なんですの。」

「何うですツてねえ、今聞いた處でした。家へ行つたツて、何處に居るか分るもんですか、僕は浪人だからねえ、最う、天下の宿無しですからねえ。はゝゝゝ。」

と笑つた時、初野は初めて其の酒臭いのに氣が付いた。

「あの、失禮ですけれど、種々‥‥芳江樣からも頼まれまして、種々‥‥。」と初野は、是非相談をし度い事が有る、同伴に自分の家まで來て貰ひ度き由を云ふと、

「芳江から頼まれて？　おや、芳江が行つたと見えるね、はゝゝゝ。」とまた高く笑つて、「いや、貴女が來いて云ふなら、夫は何處へでも行く事は行きますがね。」

「では、失禮ですけれど何卒。」

その間に、初野は東吾の腕車をも顧みに遣るのだツた。

「實はね、僕は先刻、貴女の家へ寄つて來た處ですよ‥‥。」と東吾は腕車に乘らうとして初野を振返つた。

「まア、私の家へ‥‥？」

「‥‥寄りましたらね、僕は、實に酷い事を聽かされて來ましたよ、最う、貴女とは會へまいと思つた位です。」と倒も笑ひながら云ふ。

「おや、誰です‥‥？」

「貴女の妹さんさ。」
「最う歸つて居りましたか？ 何樣な事を……、何か失禮な事でも？」
「なアに、少女の事たから、僕も別に氣には掛けんがね……。」
「でも何樣な事を、何かお氣に障るやうな事でも……？」
「まア可いさ。誰か、敎唆した奴が在るんだね、まア可いさ。」と云ふ時、腕車は丁度駈出した。
月明りに東吾の背姿を眺めながら、初野が車上の心の中……その妹の云つた酷い事とは何であらう？ 東吾樣は大變に醉つて居る樣だ、私は此樣な處を初めて見たが、矢張り不快の事が有るので、夫を紛らす爲の酒であらう。天下の宿無し、浪人……、彼樣な事を往來で高聲に云つて居た、生家でも何處に居るか知らないと云ふ事であッた。
「あゝ、此樣な身持の方ぢや無かッたんだが！」
と初野は涙ぐんだ。
それに就けても芳江の今朝の言、彼樣な悲哀に沈んで、彼では、本當に生命も捨てかねまい。東吾樣とても、彼を聽いたならば、蓋く心の動かぬ事はあるまい、けれども、昨日の私に向つて仰有つた事、入院料、紙入、疾から戀して居たんだと云ふあの言から……、あゝ、友人の義理も義理だが、東吾樣は何う云ふものやら、若し……强ひて……、怒られても困るし……、何一つ頼の無い私なんだもの……、結局は東吾樣次第だが……。
駈けて居た腕車は直と止つて、東吾はひらりと跳下り、
「初野樣、何うです、此邊から歩いて行かうぢやありませんか。」
何時の間にか、人通りの疎な千駄木の新開に來て居た。畑、生垣、月影に近道を辿れば、我が住む植木屋の木立は、直ぐ鼻の前に朧に浮いて眺めらるゝ。
腕車をば其處から返した。靜なる夜を二人は列んで行く。
月は背後に在れど、見交せば互に其の眼の動く迄も見交さるゝのである。
「……東吾樣、歩きながら失禮ですけれど、此物を何卒……。」と初野は先づ紙入を徐と出した。
「中の金は取つて呉れましたねえ？」と東吾は其のまゝ懷中に投れた。
「え、あの、頂戴いたしましたが……。」と言難さうに、殿井に返す爲に取つた額だけを云ふと、
「それ許し……？」と東吾は驚き、「何故皆な取らんです、何處か、金策が出來ましたか？」
「いゝえ、それは出來ませんけれど。」
「ぢや、僕の金なぞ使ひ度か無い……？」
「あら、決して爾う云ふ譯ぢやありませんわ。」
「でも、僕の遣つた物を突返すからには、僕の補助なんか受け度か無いと云ふんでせう？」
「爾らお解り下すッては、私許し困ッ了ひますわ……。決して、突返すの何のて云ふんぢや無いんですけれど、此の儘戴いては、あの……、何うも芳江樣に濟みませんから……。」
「何故芳江に濟まんです？ 芳江は、此の金の事を知つてますか？」
「それは知つて居らッしやいませんが……、」と云つてから、慌てたやうにまた言ひ加す、「此樣な事をお話しては、貴方の御迷惑と存じまして、夫で默つて居りましたけれど。」
「芳江に知れてですか？ なに、僕に迷惑な事が有りませう。」
「だッて、彼樣に貴方の事を懷つて居らッしやるんですもの。」
「僕の事を懷つてる？ はゝゝ、あはゝゝ。」
と態とらしく高く笑つた。
「貴方、其樣なにお笑ひなすッちや、餘り慘酷ですわ……」と初野は涙ぐんだ。

「慘酷？　慘酷でも詮方が無い。落果二たび枝に上らずさ。僕はね、一旦斷念めた事は、頭の外に放逐して了ふ主義ですよ。だッて、僕には其樣な事を繰返す時間なんか無いもの、餘裕が無いんだから詮方がない。はゝゝゝ。」

「斷念めたと仰有ると、芳江樣の事ですか？　夫ぢや貴方、餘り芳江樣がお可哀想でございますわ……。」と初野は涙を拭いて、「其樣な事をお聽きなすッたら、芳江樣は何樣な事に成るか知れませんわ。」

「可哀想でも詮方が無いねえ。貴女なんざ、內輪の事情を知らないから、其樣な慘酷とか何とか云ふけれどね……、」と、大に其の事情でも說き出し相な調子だッたが、再思返したらしく、「まア、其樣な事は何うでも可いんだ。乃で、芳江に何樣な事を賴まれたのです……、貴女に調停をして呉れとでも云ふんですね？」

「は。芳江樣の意もお話して、貴方の御意見も伺つて呉れと仰有いまして。」と初野は、今朝芳江から聽いた一部始終を話して、「芳江樣は、私、許しが賴だと仰有つて居ますの……。」

「夫は解つたが、」と東吾は初野の言を遮り、「それよりは、僕は、貴女の意見が聽き度いね。」

「私の意見と申しますと？」

「即ち、芳江の依頼を引受けた意見でさア。」と東吾は直と立止り、「芳江に同情して、飽までも、私を夏本に復籍爲せようと云ふのか、或はまた……？」

「あら、夫ぢや最う戸籍の方まで……？」

「其樣な事は何うでも可い。」と初野を制して、「私を復籍爲せようと云ふのか、或は、友人の義理として、詮方無しに依頼を引受けたと云ふのか、貴女の本意は何方です？」

「いゝえ、詮方なしだなんて、其樣なことは有りませんわ。私は何處までゝも、一身を抛つても、芳江樣の爲に盡さなきや成らないと存じまして……。」

「一身を抛つて？　ふーん。」と東吾は大息したが、「ぢや貴女は、僕の願は拒絕だと云ふんですね……。詰り、僕は嫌はれたんですね。貴女は、昨日の返答を、其の芳江の事で、即ち行爲で答へようと云ふんだ。ね、爾うでせう？」

初野は答に窮した。東吾の口から出た昨日の言を拒絕したのでは無い、然ればとて、芳江の賴も、無論義理一片の口頭でのみ引受けたのでは無い。

「行爲でお返答を爲るなんて、私は其樣な、其樣な巧んでなんか爲るのぢやありませんけれど……。」と辛に云つた。

東吾は初野の云ふことなど耳にも入らぬ樣子で、

「解つた、それで熟く解りました　先刻、貴女の家へ行つた處がね、貴女の妹さん、僕に此樣な事を云ひました……。」と其の言を其のまゝ述べると、

「まア、妹が其樣な事を……。」と初野は呆れた。

「僕は、何故彼樣な事を云ふんだらうと思つて、今まで解し難ねて居たがね、僕は愚でした。紙入の儘返したのも解りました、最う皆な解りました……。」と云ふ中に涙聲になる。

「東吾樣、貴方爾う思つて下すッちや困りますわ。妹へなんぞ、無論言付けた覺えも無いし、貴方の事を、一言だッて彼女に話したことなんか無いんですもの……。何卒、其の疑だけは除つて戴かなきや……。」

「貴女は才女だ、けれど僕は、」と、東吾は涙ながら、「婉曲に拒絕されるよりは、寧ろ露骨に云つて貰つた方が可いんです。孰せ死ぬなら、頭も胴も分らないやうな、重傷を負けて死に度いのです。僕は決して貴女を惡みはしない、怨みもしない……其樣な權利なんか有りませんか

られえ……。けれど、口には出さなかッたが、貴女を戀したのは昨日今日の事ぢや無い、數年前……蓋く初めて會つた時から戀して居たか知れない、その貴女に拒絕されて、僕だッて失望爲ない譯には行か無い、最う、僕の運命も爰に盡きた樣な氣がする、また、全く盡きたんだ、僕の希望も計畫もめちや〳〵にして了つたんだ、僕の生涯は、貴女の爲に變つて了つた……、けれども、僕は貴女を怨みも何うも爲ん、其樣な事は決して無いが……。」と迄云ふと、急に口を閉ぢた。

初野は、最う涙を止め難ねて居たが、此時、「爾う激して下すッては……、私の申上げやうも惡いんですけれど……私だッて、最う疾から貴方を……、貴方許しを賴にして、此の頃では、貴方の事許し思つてますわ……。と手巾を顏に當てて、「それを、貴方に爾う仰有られては、私は最う、……生きてる效はありませんわ！」

「生きてる效？」と驚いた中にも、何處か嘲る調子で。

「え〻。貴方だッて、其樣な事を仰有る暇に、では何うすれば良いんだか、其點を考へて下すッて、教へて下さるが可いぢや有りませんか。」

「考へる？ 芳江に對して何うすれば可いか？」

「え〻。私は、何うでも貴方の御意見通りに成るんですわ。」

「ぢやア……。」と東吾は呆氣に奪られた樣に初野を視詰めたが、急に聲を喘ませ、「ぢや、僕の望を叶へて吳れますね？」と柔かな手を握つた。

「それは、もう……。」と顫へて、口も碌に利き得ぬ。

「初野樣、本當ですか！」

「え。ま、何卒お離しなすッて、誰か見ると可けませんから。」

東吾は手を離したが、往來の前後を見廻して、初野の脣を我が物にした。

（三）

生れて爰に十九年、見る人每に心を惱ませた花の姿も、此の日此の夜、初めて男の脣を知つたのである。身體は顫へ、胸は躍つて、此の儘呼吸も止まるかと思ひながら、猶心は嬉しく、溫かな夢の國へ飛行くところかとも感はる。

聽て徐に男の胸を押除けて、襟を正しながら前後を見廻したが、目に入る人の姿は無けれど、雲間を脫る〻月影明るく、橫顏を照す羞かしさに思はずも身を背向くれば、またも男と列ぶ地上の影法師。

「初野樣、ぢやア、僕のデザイアは許諾られたのですねえ。」久くして東吾が云つた。禁じ難き悅びに、其の聲は喘んで聞えるのである。

初野は微に點頭いたが、口では何とも云ひ得ないのだッた。

「ね、爾うでせう？」と東吾は面を覗く樣にして、「初野樣、貴女怒つたんですか？」

「い〻え、其樣な貴方……。」と辛と聞えた。

「ぢやア何とか仰有つて下さい。お互の、終身の運命に關る事ぢやありませんか。僕に對して、今更何も、祕する事なんぞ無い筈ぢやありませんか、何が恥かしいんです……、ね、只だ一言聽かして下さい、僕は確と胸に彫付けて、夫を一生の寶にします。初野樣、默つてては分らないぢやありませんか、何とか云つて下すッても可いでせう……、ぢや、承知か不承知か、それだけ聽かして下さい、え、初野樣！」

「不承知なんて、元から私、其樣な事なんかございませんわ。」

「ぢや、承知ですな？」

「え〻。」

「僕の様な者でも、結婚して下さるのですね？ 夫にして下さるのですね？」と云つても默つて居るので、東吾は又も徐と手を握つて、「初野様、默つて居らしちや分らないぢやありませんか？」

「だツて、最う皆な知つて居らツしやるくせに……。」

「それでも、他の事た違ひます。斯う云ふ時に意志を明し合つて置かなきや、お互に、他日お互に、遺憾に思ふ事があッちや可けません。」

「私は、其様な、決して其様な事はございませんけれど……。」

「遺憾に思ふ事は無い？ 無いけれど……、無いけれど何うしたんです？」

「私は、唯芳江様の事が氣に掛りまして……。」

「また其様な事を。」

「だツて、實にお可哀想なんですもの。」

「離縁に成ツて了つたらそれで可いぢやありませんか。可哀想と云つた處が、なアに、それも或る時間を經過すれば……。」と東吾は、芳江の境遇は、長く憂に沈んで居らずとも濟む事から、現に他から養子を貰はうとしつゝある事、養父母と自分と氣質の相適はざる事、是迄幾回か衝突をして來た事などを語つて、「幾ら芳江が可哀想でも、手の違か無い處は詮方が無いでせう。ちや、初野様は何うすれば可いと云ふんです？」

「何うすれば可いんですか、私には分りませんけれど……。」

「お、最う貴女の家だ。」

「お入り遊ばしては？」

「止しませう。また妹さんが……。」と變に笑つて、「彼様な少女でも、僕には怖い叔母様の様だ。」

二人は垣の外に立止つたが、庭の木立の葉蔭を透して、ちら／＼と我が家の火影が見える。

初野は、先刻お波が云つたと云ふ其の惡口の、決して我が與り知つた事で無いのを見せる爲め、また妹にも謝罪らせる爲に、東吾に家へ入ることを誘めた。

「それに、あの、未だ種々伺ふ事もございますから。」

けれども東吾は、お波に云はれた事など最う何とも思うて居らぬ、互に相談するにしても、靜な夜景色の其邊を散歩しながら爲た方が可いから、と家に入らうとはせず、

「併し、貴女は脚は何うです？ 苦しか有りませんか？」

「いゝえ、何ともございませんの。」

「それぢや、最う少し歩いて見ませう……、徐々。」

二人は畑の間を、何處と指す的も無く歩を運んだ。東吾は、猶憂思に沈む初野を慰めんとして、子爵家の内情から、到底自分は夏本の姓を名告るに耐へぬ事、芳江に氣の毒と思はぬでも無いが、また是までの養父母の恩を思はぬでも無いが、去ればとて我が決心は最早動かし得られぬと云ふ事を説いて聽かせた。初野はほッと溜息を吐いて、

「ですけれども、芳江様の身に成ツたら何様なでせう……。」と久く顏を掩へたが、軈て濡れた眼に凝然と男を覗上げ、「東吾様、私一つお願……、あの、御相談が有るんですけれど……。」

「芳江の事に關して？」

「芳江様にも關してますけれど。あの……、私は此う思ふんですの、お互に、今後暫くの間、會はないで居る方が良いと思ひますの……。」

「暫く會はずに？ 何故、芳江に知れるから……？ 知れる筈は無いぢやありませんか。」

「それでも、私何うも、良心が容しませんもの。」

東吾は默つて考へて居る。

「惡く思召しては困るんですよ。孰せ、私は貴方の御意見通り成るんですから、ね、ね、貴方。」
「暫くと云つて、何日まで？　ぢや、離縁の手續が濟むまで……？」
「え。その中には、芳江樣の身も極るでせうし……。加之に、お互に卒業前の大切の時間ですもの、貴方だツて、御勉强爲さらなきや…。」
「勉强？　勉强も可いが、僕は最う退學するからね……。」
「えッ、退學？　退學なさるんですツて？」
「爾う氣に掛けて呉れちや困るけれど…、併し、學士に成らなきや生きてられないと云ふ譯も無いでせうな。」と嘲るやうに云ふ。
「夫は爾うですけれど、だツて、最う卒業試驗をお受けなさる許しになツて……。」
「初野樣、貴女まで其樣な事を云ッちや、僕は實に耐らなく不快に成りますよ、豈夫貴女も、學士でなきや對手にせんと云ふんぢや無いでせうねえ？」
「無論そんな事なんぞ……。」
「また、學士に成つたからツて、僕は矢張り僕だからねえ。學士になつたからツて、腋の下に羽翼が生える譯でも無いでせう。」と云つて態とらしく高く笑ふ。
初野は云ふ處を知らなかツた。退學の仔細を訊くと、男が激して來る樣なので、其のまゝ口を噤んだが、終には東吾の方から其の事情を語り出した。その譯と云ふのは、今回の軋轢で養家の方からも種々の苦情も出たが、その言の中に、今日大學を卒業する身に成ッたのも、申さば此方の養子だつたお蔭では無いか、と云ふ一言があッた。
無論至當の言で、誰に聞かしてもそれに相違ないのだが、此の時此の場合、東吾ばかりは胸に据ゑかねた。成程學資は續けられた、けれども金で學問が出來るものなら、數ある財産家の子弟の、孰か學士と成らぬ者が在らう！　一字を究むるも各自の理解力である、百般の科目、十年の勤學、毎に級中の首位を占め來つた我が頭腦の力までも、養家の賜物であるかの樣に、其樣なに恩に被せらるゝ事は無い、それ程學士が恩ならば、僕は此のまゝ退學する、斷じて退學する、學士に成れぬと云つて、憚りながら餓死するやうな東吾では無い。
兩親や兄の泣きつ叱りつ止むるのも肯かず、東吾は此る答を養家に云ひ送つたのである。
「夫はね、退學した處で、是までの恩を返すのぢや無いんだから、養家ぢや無論喜んで居やしませんさ、好い氣味だとも思やしません…、夫は熟く分つてます、分つてるけれど、其樣な事を云はれて、澄まして卒業する程、僕は意氣地無しぢや無いからねえ、死んでも其樣な事は出來ませんからねえ。」と東吾は語氣荒く云つたが、初野を顧みて、「貴女は何う思ひます、僕は其樣な人間でせうか？」
「夫はもう、御道理ですとも……。」と低聲で云ふ。
「爾うでせう、僕の境遇に在ッちや無理はないでせう。」と東吾は莞爾點頭き、「それにね、孰せ離縁に成るんだから、男らしく、綺麗に、最う一切の關係を斷つて了はうと思つてね……。實際其の方が將來の利益ですからねえ。」
「えゝ。」と云つたが、「而して、此の後は何うなさる思召？」
「此の後とは？」
「退學をなすツてから。」
「矢張り生きてまさア。退學したからツて、別に生命に係る事も無いでせう？」と嘲るやうに云つたが、「ぢや、貴女は何うすれば可いと云ふんです？」
「いゝえ、何うすれば可いと申すのぢや有りま

せんけれど、」と云ふ中に初野は涙ぐんで、「東吾様、貴方、爾う悪く解つて下すツちや困りますわ。此様な事を伺ふのも、詰り、私は一生……、あの……、何する貴方の事だから、それで此様なにも伺ふのぢやありませんか……。」

「いや、悪く解つた譯ぢや無い、貴女の意は、夫は熟く解つて居る、」と東吾は急に優しく云つた、「僕だツて、貴女に心配を掛けようと思つて此様な事を云ふのぢや無い……、併しね初野様、卒業すると爲ないとに依つて、人間の變る物で無い以上はです、ね、僕だツて、今後の方針に就いて、考へて無い事も無からうぢやありませんか。」

「え、無論爾うとは存じますけれど。」

「おやね、僕を信用して、暫く此様な事は氣に懸けずに居て下さい。孰れ、早晩貴女へ内相談する時機が有りますから、それ迄放棄つてて下さい、ね、それで可いでせう？ 而して、貴女はまア、此様な事に關はず勉強して下さい。」

「はい、熟く解りました。其のお言を聴いて、最う、何にも氣に掛る事はございませんの……。私、勉強しますわ。」

「而して、貴女の試験の終ふ迄は、決して僕の方から訪ねやしません。」

「私も辛抱しますわ。何卒、お身體をお自愛ひなすツてね、段々暑くなりますから。」

「僕は大丈夫だが、貴女は薬を缺かさ無いやうにね……、少しでも病氣が變つたら、直ぐ診て貰はなきや可けませんよ。」

「え。ですけれど、最う大丈夫ですわ。」

「でも、病氣と云ふ奴は怖いからね。時に、此を上げて置きませう。」と紙入から紙幣を出して渡す。

「此様なに戴いて可いんですか？ 貴方の方にもお有んなすツて？」

「僕の方は間に合ふから、其様な心配は入らない……。だけれど、それで卒業迄間に合ひますか？」

「間に合ひますとも、多い位ですわ。」

「多くも無からうが……、若し不足だツたらね、爾う云つて寄來して下さい。少額許しなら何時でも何うにかしますから。」

「有難う……。」と云つたが、氣の付いたやうに、「今、何方に居らしツて？」

「爾うだツた、悉皆忘れてました……。」と東吾は、田端なる某寺院に、友人と同宿して居る事を告げ、「何時まで祕して置くでも無いがね、今の處、初野様の外知つてる者は無いんだから、何卒其の心算でね。」

「え。」と點頭き、「田端と云ふと、此處からは直きですわね？」

「直きですとも、樹が無きや、此處から見えますさア。」

「ですけれど、何うしたら可いでせう？」と初野は夢から覺めた様に立止つた。

「何うしたんです？」東吾も驚いた。

「芳江様に、何と云つて返辭を上げたら可いでせう？」

「爾う！」と東吾も當惑したが、「放棄つて置きなさい。」

「だツて、何様なに待つて居らツしやるんですか……。」と云ふ中、芳江の事が胸に浮んで涙ぐんだ。

「此方から返辭を遣る約束ですか？ ぢや、何處に居るか居所分らない……、爾う云つて遣つたら可いでせう。」

「だツて、其様な事が……、彼の通り、私許しを頼にして居らツしやるんですもの……。あゝ、芳江様の事を思ふと、私は最う……。」と泣出した。

「貴女の様に氣が弱くちや困るねえ。」と慰ますやうに云つた、「愛が、お互の大事の場合ぢやな

りませんか？　夫だけの返辭が書けないんですか……。」
　それでも初野は默つて居る。
「今夜、僕に逢は無いと思つたら可いでせう、猿樂町に訪ねて、彼れ切りで歸つたとしたら……ね、それでも可けませんか？」
「ですけれど、私はね、私は、何うしても、芳江様を欺く事は出來ませんの。」
「欺く……？」
「えゝ。東吾様、是許しは堪忍して下さいね！」
と男の手を握つて泣くのである。
　東吾も久く言は無かツたが、
「ぢや詮方が無い、ぢや放棄つて置くさ。」
「だツて、何樣なに待つて居らツしやるかと思ふと……。」
「其樣な事まで氣に掛けて耐るもんですか、構はない、放棄つて置きなさい。その間には、戸籍は直して了ふから。ね、ね、何うしたんです、彌う氣が弱いんぢや困るねえ。」
　初野は泣く聲のみ、返辭をせぬのである。
「餘程深更くもなツたし、彌う云ふ事に決めて別れませう。ね、それで可いでせう。戸籍の方さへ直したら、最う、濟むも濟まんも無いぢやありませんか……、芳江だツて、可厭でも斷念するだらうし……。」
「いゝえ、芳江様は……。」
「斷念しない？」
「えゝ。」
「はゝゝ。」と東吾は唐突に笑つて、「彌う思ふから間違つてる、芳江には兩親が有ります、斷念しないと云つて、彼の兩親が默つて居ませうか？　また、萬一親の云ふ事を聽かないとしても、僕が動かなきや何うします……、詮方が無いでせう！」
「それは彌うですけれど……。」
「だから、まア、僕に任して放棄つて置きなさい……。」
　初野は、諾とも否とも答へなかツた。
　別れる時に、傾く月を樹蔭に避けて、
「何にも心配する事は無いんだから、何卒、身體を氣を付けてね。」と東吾は優しく云つて接吻をすると、初野は何とも云はなかツたが、接吻を返したのである。

第三十二　逃亡

　初野が家へ入つたのは、彼此もう十二時であつた。
「波ちやん、未だ起きて居たの、淋しかツたらう？」
　何と思うてか、姉は笑顏さへ作つて優しく云つた。お波は、油の減つた洋燈を片手に、訝しい眼を大きく光らし、言も無く迎へたのである。
「貴女は何時頃歸つて、明るい中？」
「え。」と澁々點頭く。
「お膳を出しといたツたが、御飯をお食べだらう？」と問くと、妹は頭を掉るので、「ぢや、また御馳走に成ツて？」
　問るとお波は、また同じ樣に頭を掉つて、
「私、御飯なんぞ……。」
「御飯なんぞ……、何うして？　何點か不快いの？」
「不快か無いけれど……、」と云つて、凝然と姉を視詰めて、「私、御飯なんぞ、咽喉を通りやしないわ。」
　姉は眼を瞬つたが、じろりお波を見遣つて、
「彌う？」と平氣な調子で、「だけれど、彼のお金は、殿様に返してお來でだらうね？」
「え。」と點頭いたが、また、「御飯なんぞ、咽喉を通りやしないわ。」
「彌う？　困つた事ねえ。寢て起きたら通るかも知れ無いことよ。」と姉は對手にもせず、「遲

くも成ッたんだし、最う寝ようぢや無いか。」
「私、寝たか無いの。」
「起きてるの？ 何故？」と云つて初野は笑ひながら、「一矢張し、咽喉を通らないの？」
　お波は黙つて姉を視て居たが、其の眼は忽ち涙ぐんだ。姉も直ぐ夫と気は付いたが、素知らぬ態で押入から寝具を出しに掛つた。
「姉様、私、姉様に聴き度い事あるの。」
「爾う？ 聴き度い事が有るなら、明日にして頂戴な。」
「明日まで待つてられないの。」
　初野は初めて勃然とした顔色を見せ、
「其様な我儘な事を・・・。明日と云つたら、明日にお為なさい。」
「だッて、今夜の中聴かなきや私・・・。」
「強情だよ波ちやんは。私は、貴女のやうな暇な人間ぢやありませんよ、試験前の大切の身体ですよ・・・。」
「其様なに大切なら、今時分まで、其様なに出歩かなきや可いぢや無いか。」
「何ですッて？ 波ちやん、何ですッて？」と妹が見下したが、軈て其処に對手と坐つて、「波ちやん、貴女は、また誰かに悪智慧を附けられて来たね？ 貴女は、血を分けた姉と、他人の云ふ事と何方を信用するの？ 何方が貴女に親切だと思ふの？」
「だッて・・・。」
「え、何方なの？ 姉様よりッて、殿井様よりッ、島井のお主婦なり、如彼いふ他人の方が頼に成ると思ふんですね？」
「だッて、姉様だッて・・・。」と、はら〳〵と涙は畳に音した。
「姉様は何うしました？」
「だッて、東吾様だッて他人ぢや無いか？」
「えッ。」と初野は紅くなッたが、見て居る間にその顔は蒼く変つた。
「姉様だッて、私よか、東吾様許し可愛がッてるぢや無いか？ だから、此の頃は邪魔に成つて、叱つて許し居て、私は、些とも面白か無いんだから・・・。」と聲に出して泣出した。
　初野は怖い顔をして、久く妹を睨据ゑて居たが、何と思つたか優しい聲で、
「誰に聴いたか知らないけれど、波ちやんよりか、東吾様を可愛がるッて、夫は何の事なの？ 私には、些とも分らないよ。」
「其様な事を云つたッて、私は皆な知つてるから。」と意地悪く頭を掉つて云ふ。
「ですから、何を知つてるの？ 何の事たか、夫を云つて御覧なさいな。」
「皆な知つてるから・・・。」と同じ事を云つたが、上目遣ひに姉を睨めて、「先刻も、姉様を尋ねて来たんぢやないか。」
「東吾様が尋ねて来たッて？ それが、波ちやんより、彼の人を可愛がるッて云ふ証拠なの？」
「爾うぢや無いけれども。」
「ぢや、何を捉まへて其様な、波ちやんより東吾様を何するなんて、其様な僻んだ事を云ふのよ。」と妹を覗いて、「皆な、殿井様に教はッた事でせう、爾うでせう？ 彼様な人の言ふ言を信じて、姉様を疑ふなんて、だから波ちやんは水臭いと云ふんだ。殿井様と云ふ人は、彼はお前、仕様のない放蕩者ですよ・・・。」
「放蕩者だッて何だッて、私達の事を親切に思つて下すッたら可いぢや無いか。姉様は、東吾様を好きなもんだから、東吾様の云ふ事だと、何でも良いと思つてるけれど、殿井様の方が何様なに親切だか知れアしない、お金だッて幾多有つてらッしやるし・・・。」
「波ちやん、少女て云ふものは其様な、お金の事なんぞ云ふもんぢやありません。」と姉は急しく口を止めた。
「だッて、世の中は、皆なお金次第ぢや無いか、

「姉様だツて、卒業してお金を…。」
「お止しツたら…。強情な人だねえ！」
「だツて、私だツて、姉様の爲に成るから云ふんぢや無いか…？」
「何の爲に成るの？　殿井様は財産家だから、殿井様の勸めるなりになつて、學資の補助を得た方が可いと云ふのかい？　私は、死んでも彼樣な人の世話に成るのは厭だよ。それ程好きな殿井樣なら、波ちやんだけ、補助なり何なりして貰ふが可いさ…。」
「ぢや姉様は、殿井様よりか、彼樣な貧乏書生の、彼樣な東吾様の世話に成る氣なの？」
初野は妹を睨めた許り、最う何にも云ふまいと口を結んだ。
「姉様、其樣な事をして、姉様は、芳江様に濟むと思ふの？」
「何ですと？」
「東吾様は、芳江様のお婿様に成る人ぢや無いか。」
「其樣な事は、貴女から聞かないだツて知つてますよ。」
「そんなら、東吾様と其樣な事したら、芳江様のお婿様を盜むで云ふもんぢや無いか。」
「盜む？　波ちやん、今一言云つて御覽！」
「だツて、爾うぢや無いか…。其樣な不品行な事をしたら、幾ら學者だツて、最う、誰も姉様を對手にする人なんざ無いんだ、最う、一生名譽の揚がりツこはないんだ…、而して、終には、私生兒でも産んで、一生日蔭者に成ツ了つて…。」
「これ、何です、失敬な！」と初野は顫へながら、妹の肩を強く押した、「幾ら姉妹でも、云ふ事と云はない事が有ります、私生兒とは何です、私生兒を産んで、一生日蔭者に成るた誰の事てす…？」
「だツて、彼樣な男と關係したら…。」
「えゝツ、其樣なつ、い、い、べこべと…。最う、お前の樣な者は姉妹でも何でも無い、最う一緒に居るのも厭だ、殿井なり何處なり、好きな處へ出て行つてお吳れ、さ、今の間出て行つてお吳れ。」
「行けツてなら行くけれど、私は…。」
「行けと云へば行く？　立派な口をお利きですねえ！　さ、ぢや速く出てお吳れ、さ、波ちやん…、何を愚圖愚圖してるのさ、速く出てお吳れよ。」
「私は、此樣な事を云ふのも、皆な姉様の大切の場合だから…。」
「えゝ、最う聽き度かありません…。」と叫び樣、お波の肩を捕へて土間に突下し、無理に外へ押出して戶を閉めて了つた。
久くの間上り口に泣伏して居たが、それでも未だ妹の事が氣に掛るか、時々耳を澄まして戶外の樣子を覗ふのであツた。けれども、戶外は寂然と夜深けて、斷々に雨蛙の聲の聞えるのみである。耐へ難ねて徐と戶を明けると、月は木立に沈んで、庭は闇に深く鎖され、何處にも妹の影も見えなかツた。
「波ちやん。」と小聲に呼んで見た。
返辭は無い。出て行つて見ると、門の扉は開いて居る。
「まア、本當に行つたか知ら！」と思ふと、其のまゝ氣を失ツて庭に倒れたのである。

第三十三　假病

昨日から塡更へた御簾障子を、怖い物に觸る樣に徐と閉めて、綺麗に片付いた夫人の室を出た仲働女のお政は、何うしたか額を眞紅にして、眼の中を潤ませて居る。
「一寸、何うしたの？」
縁側で出逢つた新參の婢が、眼を圓くして尋ねたのである。お政は聲が高いと云ふ樣に手を

据つて、後なる夫人の室を見返つたが、目授で客間の中に朋輩を誘ひ込んだ。

「何うしたの？　またお叱言？」

「お直さん、私、最うお暇を戴かうと思ふのよ。餘り口惜くツて。」

「まア。何故？」

「だツて、なんぼ奉公人だツて、死ん了へと云は無いばかりに惡く仰有るんだもの……。」

とお政は口惜さうに語出したが、何やら臺所の用事で、毎の如く夫人に伺ひに行つた處である。然るに夫人は甚を御機嫌惡く、其樣な事は嬢の芳江に聽けと云ふのである。けれども其の事柄は、書籍ばかりを把玩つて居る芳江などの知らぬ事でも有り、是れ迄毎度夫人の指圖を受けて爲る例であるから、お政は、此れは私の申上げた言を聞違へたのであらう、と推して、再び其の用事を繰返して伺つて見た。爾ると夫人は顏色まで變へて、「私は聾で無い、一度云へば分る、可い齡をして主人の言葉を何と聽いて居る、給料を貰つて、物を食べる許りが奉公で無い、」と咬付く樣に叱つたのである。主と奉公人、お政は直謝りに默つて其處を退いたが、何うも口惜くてならぬのである。

「なアに、私だツて、此方に御奉公爲なきや、食ふに困るて云ふんでもありませんからね。」と怨めし相に座敷を睨め遣した。

「夫人も隨分だわねえ。だけども、何だツて其樣な事を、阿嬢樣に伺へなんて仰有るだらう？　怪しいわねえ。」

「今回の御養子の一件でね、御前と阿嬢樣に拗ねて、今後は最う、家の事は大小とも、一切構はないツて云ふんだよ。先刻ほら、馬車で來らしツた御客樣……。」

「え。彼の方が、今回のお媒介人ですツて、本當？」

「然うよ。私も熟か聞か無いけど、何でも最う、疾にお返辭をする筈のが、今日までも延々に成ツてゐるんですツてさ、それで、御樣子を問きに來らしツたんですツてさ。」

「樣子ツて、何の樣子？　最う御見合でもなさるの？」

「いゝえさ、阿嬢樣が、何うしても此なもんだからね、」とお政は島田髷の頭を掉つて、「幾ら夫人許り貰ふ氣でも、確と極める譯には行か無いでせう……、だもんだから、中間に立つた人許り氣を揉んで、彼樣なに度々來らツしやるんだアね……。何でも、今回の御養子て云ふのは、阿嬢樣の御器量望みで來らツしやるとか云ふ話だからね。多分、先方からも、速く決めるやうにとか何とか、煩く催促でもするんだアね。」

「厭だわねえ。それでも、華族樣の御次男ですツて？」

「華族樣も華族樣、伯爵の御次男さ。」

「へえ。伯爵？」

「それだもんだから、夫人は最う、何うしても今回の御縁談を決めて、東吾樣に見せ付けて遣らうて云ふ腹なんでさアね……。」

「だツて、夫人許り其の心算でも、肝心の阿嬢樣がお厭ぢや仕方無いわねえ。」

「それに、御前だツて、幼小い時からお世話なすツた東吾樣だから、爾う容易く離縁も出來ないんでせう、人情としてさ。」

「全くだわねえ。だけれども、彼樣な優しい阿嬢樣が、終ひ迄それで通せるか知ら？」

「通せる處ぢや無いわ。此樣な事が有るのよ。」

とお政は四邊を見廻して低聲になツた。

それは一昨夜の事とか、最う座敷の燈火を消さうと思うて行くと、偶と夫人の室で泣聲が聞える。見れば障子には芳江の半身が大きく寫つて居る。母子が泣いて物を云合ふなどは此の頃で見も聞きもせぬ事なので、立聞するとも無

く立聞すると、何の談話の後か、夫人は泣きながら、一人娘の芳江であるから、母の力の及ぶ限を盡して是迄育てて來たのである、芳江を愛するの餘り、夫と言爭つた事も幾回あるか知れぬ、病の枕に就いた時などは、娘の代に此の生命をと、神に祈つた事もある、愛に溺るは母の習ひ、決して夫を恩に被せるでは無いが、天にも地にも便に思ふ唯一人の娘が、此程まで賴む母の賴を聽いて呉れぬと思へば、最う生きて居る樂みも無いのだ、その賴も、世間に例ある親の慾からの賴では更々無い、可愛い娘に添はす男だもの、吟味に吟味を重ねての上、是をこそと決める迄には、母の苦勞は何の位か知れない、世の味を嘗めない娘心にそんな事迄分らぬとしても、論より證據の對手の身分、教育、親の口から云ひ難けれど寫眞の綺麗さ、何點に非の打つ處があると迫るやうに訊く。而ると芳江は、其の慈悲を知らぬで無いが、此のこと許りは堪忍して戴かねばならぬ、未だ式こそ擧げないが、一旦心に誓つた夫を捨てて、私は知らぬ夫を有つやうな悲しい身には成り度く無い、と泣くのである。夫人は更に說聽かせた、東吾の如き恩も義理も知らぬ者は、決して家に復れられぬ事、對手が進んで離緣に成り度いと云ふのだから、到底纏まる緣で無い事、一日も疾く斷念めるが德である事を。けれども芳江は肯かない、私にも當にして居る事があッて、一兩日中には東吾の本當の心も分る、何卒暫く其樣な話は止して下され、とのみであッた。

「何でせう、その、阿孃樣の當にして居らッしやる事ッて？」

「夫人もね、それをお訊きなさるのよ……何の當が有るッて、若しや、東吾に騙されて居るんぢや無いかッて、だけれど、阿孃樣はね、何うしても夫を仰有らないのよ。」

「お手紙でも上げて、御返事の來るのを待つて居らッしやるのか知ら？」

「何だか知らないけれど、彼樣なお優しい樣にして居て、此處の處は、中々確乎して居らッしやるからね」とお政は我か胸を叩き、「だから、今日もまた、必然其の術で、夫人の云ふ通りに成らないんだらう、だから、夫人は最う、氣が揉めて氣が揉めて、一寸した事も癪に障るんだアね。」

「だッて、阿孃樣が云ふ事を聽かないッて、何も、お政さんの故ぢやあるまいしねえ。」

「全體、此家の夫人て云ふ人は、舊は彼樣な事を成すッたもんだから……。」

と新に惡口を云はうとする處へ、下働女がお政を探して來て、

「お政さん、榛原が御用を伺ひに來ましたから、夫人に伺う申上げて下さいな。最うね、お上で召上るお醬油は、最う一升と殘つてませんからね、それも申上げて下さいな。」と急がし相に驅けて去く。

「はい〳〵。」とお政は素知らぬ顏で座敷を出たが、「だッて、夫人に伺つたらまた……。」

「阿孃樣に伺つたら可いでせう。」と朋輩の婢が云つた。

「だッて、其樣な事を阿孃樣に。」

「それでも、夫人のお指圖なんだもの。」

「困るねえ。ぢやア伺つて見ようか。」

二人は笑つた。

聽てお政は襟を搔合せて、梯子を徐に芳江の室に昇つたが。

「阿孃樣。」と遙に敷居に手を突いた。

此方には背後を見せて、机に對つて居た芳江は、お政の聲を聞いてから久くして顏を向けたが、眼を眞紅に泣腫して居るのである。

仲働女ははッと思つたが、それでも、先づ夫人に命令かッた事から、醬油の御用、臺所の

都合を申上げると、
「政、何だツて？」と芳江は只だ呆れた。
「あの、榛原が参りましたから、お醤油を如何致し……。」と、政の云ひ切らぬに、
「其様な事私に聴いたツて、私の知つた事ぢやあるまいし。」
「左様でございますけれど、あの、夫人は、阿嬢様に何へと仰有いますから……。」
「母様が……？　お前、聞違ぢや無いの？」
「はい。あの、今後は……。」と、今迄夫人の執り來つた其様な類の用事は、總て芳江に指圖を受けよとの夫人の命令である趣を述べた。
芳江は凝然と考へたが、
「其様な事を仰有つて、私を困らさうて云ふんだわ！」とはら〳〵と涙を零したが、「母様も餘りだわねえ！」
「何う遊ばしたんですか、何ですか、大層お怒んなすつてお居で遊ばす様でございまして。」と仲働女は、芳江の口から其の内情を聞かうとした。
「爾う？」と云つたが、芳江は溜息を吐いて「あゝ、困つたわねえ！」
「何か、阿嬢様の事で、御機嫌に障るやうな事でも？」と心配な顔を作る。

「矢張し、私が此様な我儘な者だからね……、」と目を拭いて、「皆な、私が悪いのよ。」
「手前なんぞ、何にも存じませんで、此様な事を申上げては恐入りますけれど、誰だツて、阿嬢様をお悪いなどと思ふ者はございません……。」
「いゝえ、爾うぢや無いのよ。」と首を掉つたが、「これもね、此う云ふ不幸に生れたんだからなんだわ……、私の運命なんだらうよ……。」
芳江の哀な心を聴けば、何事も知らぬ態を粧ふお政も、忽ち胸が一杯になツて、
「阿嬢様、憚りながら、蔭ながらお察し申上げて居りますんでございますよ……。」と顔を掩へた。
「政、何もね、爾う泣いて呉れる程の事ぢや無いからね、誰にも、私が此様に泣いて居たなんて、決して話してお呉れでないよ。」
「はい。」
「ぢや、お前はまア彼方へ行つてお居でな。母様には、今私から申上げるからね……。母様は何處に居らしツて？」
「はい、矢張りお室に居らツしやいます。」
「爾う？　今、私行くからね……。」
芳江は婢を退け、扨て母の室に降りて行かうとしたが、思付いたやうに再戻つて来て鏡に對つた。
此様なに泣いた顔を見せたら、母は無氣を傷める事だらうと思つたのである。さて薄く化粧へて、衣紋を直し、帯も締め直して、優容に梯子を降りたが、母の室に入ると、
「あら、何うなすツて？」と思はずも叫んだ。
絹夏物の敷蒲團に白手布を被けて、投げ出た手も力無く、先刻まで何處も何とも無かツた母が、ぐツたりと臥て居るのである。
「母様、何點かお不快くツて？」
芳江が傍に寄ると、夫人は答も無く、ぐるりと背向に寝返をした。
芳江は涙ぐんだが、軈て母の顔の方に廻つて、
「母様、何うなすツたの？　また頭痛なすツて？　え、母様……？　何とか云つて下すツても可いわ。」
散々に氣を揉ませて置いて、夫人は閉ぢた眼を漸と開いたが、娘の顔を凝然と視て、太い溜息を聞かせた許り、其儘また眼も口も閉ぢて了つた。
「よ、母様……、何點かお不快いんなら、速く醫師に診せなきや可けないぢやありませんか……。」
「可いから、最う放棄ツといてお呉れな。」と夫人は初めて口を利いたのである。

「だッて、お薬を服まなきや、病氣は癒りやしないわ。」

「なアに、癒らない方が可いんだからね、最う、此の儘死んで了つた方が可いんだからね」と云つて、力無い聲を揚げて、「あゝ、早く死に度い死に度い！」

「其樣な……、其樣な悲しい事を仰有らないだッて……。」と芳江は眼を掩へた。

「生きて居た處で、何の樂みが有るんぢやなし……、あ！　あ！」と母は獨で嘆息する。

「母樣、それでは、何か私の事で、お氣に適らない事でも有るんでせう、ねえ、何ですの？」と涙ながら云ふ。

「杖とも柱とも、たッた一人きや無い娘が、些しも親の云ふ事なんざ聽いて吳れないんだもの、もう、生きてる效も力も無いぢや無いかね。」と母の眼も涙に潤んだ。

「それぢや、高松樣のお話の事ですか？」

高松とは、今回の緣談の媒介人の事である。

母は爾うとも爾うでないとも、默つて娘を見詰めて居る。

「母樣の云ふことを聽か無いッてぢや無いけれど……、私だッて母樣、他の事と違つて……。」

「高松樣にだッて、先樣にだッて、爾う際限無く返事を延す譯には行かないんだからね、此上は最う、私の責任で決める他は無いんだからね……。」

「あら、其樣なに決めて下すッちや……。」と濡れてる眼を睜つた。

「いゝえ、決めると云つても、お前に迷惑は掛けませんよ。私一人の責任なんだからね、」と一段聲を悲しく、「母樣は、死んで分疏をする心算なんですよ。」

「あら、死ぬなんて……。」

驚く娘に關はず、母は自分の云ふ事のみを云ひ續ける。

「最う今に成ッちや、此上待つて下さいとは云へず、謝絕る譯には何更行かず、最う、他に爲やうが無いんだからね、私は最う、疾から此うと覺悟を決めてるのだからね……。」

「ですから、私は先から、謝絕つて下さいッて云つたぢやありませんか……。母樣が謝絕れなきや、私がお謝絕しますて云つても、それも許しちや下さらないんですもの……。」

「爾うですとも、皆な母樣許し惡いんですからね。」

「爾うぢや無いけれど……、母樣の仰有る事を用ゐないのは、それは私が惡いけれど……。」

「なアに、母樣が惡いのですよ。孰せ、お前の心は動かないのだから、最う、母樣なんか、死んで頼んでも駄目なんだから……。」

爾ると芳江は、聲を出して泣出した。

「爾うでせう、ねえ。孰しても、東吾の事は斷念れないでせう、爾うでせう？」

「そ、爾うぢや無いけれど……。」

「では、高松樣の方を承知して吳れますか？　え？　矢張り厭でせう、孰しても夫は厭でせう……？」

「母樣、何卒堪忍なすッて……。」とのみで、芳江は他の答は口にしないのである。

此程に仕向けても、娘の意が更に動かぬのである。母は術も力も盡きて了つたが、平素から物優しい娘が、此程まで決心して居ると思へば、可哀想で無い事もない。加之に此の頃の顏色、何うやら頰も憔悴けて、艶も失せて、他の前は隱して居るが、始終思に沈んで、時にも無く溜息を吐いたり、潸然んだりするのである。それに就けても、速く斷念らせ度いものだ、一旦斷念りさへすれば、此位の年頃には、氣を紛らす事柄は每日の樣に起るもの、最う夢の樣に忘れて了ふのは見え透いて居る。

久くしてから、夫人は一倍がッかりした語調

で、
「芳江樣、夫ぢやア最う、何うなとお前樣の御勝手だがね…、お前樣は、何を目當に彼樣な、東吾の樣な、彼樣な薄情な者を懷ひ續けて居ます？　え、何か、母樣に祕して別に約束でもあるんですか？」
「其樣な事は無いけれど…。」
「ぢや何うしたの？　何處が好くて、彼樣な者が斷念れないの？」
芳江は紅くなツて俯向いた。
「いゝえ、何も、母樣に祕す事は有りません。何處が、其樣なに氣に適りました？」と云つても娘は默つて居るので、「過日から、二三日中には、確とした返答をするの、最う少し待つてお呉れのとお云ひだが、あれは何の事です？　何か待つてる事でも有りますか？　え、芳江樣、有るなら有ると、有る可き通り爰で仰有い…、よ、芳江樣。」
「私、何も母樣に…。」
「ぢやお云ひなさい。何の事です？」
「私、待つてる事が有りますもの。」
「ですから、何を待つてるの？」
「あの、兄樣の意中が分らないから、それで、あの、兄樣の意中を聽いて貰つてますもの。」
「意中を聽いて貰ふ…？　へい。誰に頼んで？」
「お友達に頼んでですわ。」
「お友達ツて誰？」
「あの…、萩原樣に頼んで。」
「えッ、萩原に？」
「えゝ。」
「萩原に、東吾の意中を聽いて貰ふツて？　まア、飛んでも無い…。」
「萩原樣の事と云ふと、母樣は直き惡く仰有るけれど…。」と云ひ切らぬに、
「まア、幾ら頑是が無いツて、お前の疎いにも呆れツ了ふ、東吾と萩原たア、疾から怪しな間に成ツてるぢや無いかね…。」
「兄樣と萩原樣と…？」芳江は顏色を變へたが、忽ち潸然んで、「母樣、餘りだわ、何ぼ私に斷念らせ度いたツて、其樣な、萩原樣まで惡く云つて下さらないだツて…。」
「いゝえ、惡く云ふんぢや無い、實際の事です。今迄はお前を泣かしてはと思つて默つてたけれど、彼等の怪しい事は最う…。」
　と夫人は、彼の倉岡の細君から聽いた一條を初め、婢共は疾から種々な噂をして居る事、東吾は芳江を騙して、初野の爲に金を持出させようとして居る事など、宛然見て來たやうに話すのだツた。
「だから、お前は、二人に可い樣に馬鹿にされて居るんですよ。それでお前は、口惜い思ひませんかい、え、芳江樣、それでも未だ萩原を信用するの？　未だ、東吾が斷念れ無いかい？」
　芳江は、話の中途から疊に泣伏して居たが、此の時辛に面を擡げて、
「私は、其樣な事は信じませんから！」
「信じ無い。では、母樣の云ふ事は譃だツて云ふの？」
「それは何うだか知らないけれど、だけど、母樣は邪推して居らツしやるから…。萩原樣は、其樣な方ぢや無いんですもの、私だツて、熟く知つてますもの。」
　夫人は嘆息した。而して久く口を噤んだが、
「それでは、母樣よりも、萩原の方が信用が出來るんだね…。」と云つてまた溜息を吐き、「そんな夫でも可いがね、だがね芳江樣、若し、彼等二人の間が、今云つたやうな間だツたら、貴女は何うします？」
「だツて、其樣な事は有りませんから。」と固く頭を掉つた。
「でも、若し有つたら…？　母樣は、近い中

その證據をお目に掛けるんだが、若し事實だつたら何うするの、それでも、東吾で無きや厭なの？」

「若し其樣な事が有つたら……。」

「其樣な事が有つたら？」

「その時は？」

「その時は……。」

「その時は私、一生獨身で暮すわ……。」と泣伏した。

夫人も聲を出して泣いた。

室の中は暫く靜になツたが、聽てまた、

「あゝ、疾く死に度い死に度い！」と力なく嘆息する聲が聞えた。

第三十四　珍事

（一）

本堂の檐下、濕ッぽい卵塔場の傍を拔ければ、厚く扇骨木の垣根、入口の木戸は脫れたまゝに腐つて、荒れてはゐるが内は庭も廣く、築山の楓、瀧壺の石、折しもの西日にくわッと照らされて、芝原からは水蒸氣が立つて居る。

「おや、お不在か知ら？」と高い緣側を伸上つて、其處の廣い一室を覗いたのは萩原初野である。

紡績矢絣の單物にカシミヤの袴、まだ眞新しい板草履、白羽二重の半襟、孰も近頃購めた物か、質屋から受出した物らしい。顏はまだ瘦せ、目も濁つて居るが、薄く化粧して、髮も綺麗に結んで、姿體に氣を配つて居る故か、舊の美しい初野に復り掛けたやうである。

室の中は、塗骨の大障子を明放して、壁際には書函を山と積累ね、夜具、柳行李などしだらも無きに、眞中に赤毛布を敷いて、貧乏徳利、竹の皮包の佃煮、能代の剝膳には香の物やら、醬油壺など置散して、今まで酒でも飲んで居たものと見える。

初野は、室の樣を一目覗くと顏を顰めて、我にも無く溜息を吐いたが、

「彼樣なに云つても、矢張し止められ無いと見える……。」と獨語を洩した。

而ると、背後の方から草履の音急しく、誰やら人が來るので、檐下を離れると、

「や、お出でなさい。」と吃驚したらしく、何やら提げて來た物を袂に隱したのは、髭の伸びた、額の禿げた、脊の高い學生である。

此の室の借主で、東吾が友人で、去年の卒業試驗を落第してから、何か著述に從事して居るとか云ふのだ。初野は體裁惡さうに、

「先日は失禮致しました」と低聲に挨拶する。

「ま、お上りなさい、夏本は居ります……。」と學生は急しく室に入つて、「何處へ行つたらう？」

此く云ひながら、酒も膳も慌てて次室に運ぶのである。

「何卒お構ひ無く、あの、一寸何でございますから、それで一寸……。」

「ま、お上んなさい、今呼んで來ます……、」と云つて、緣側を本堂の方に行掛けて聲を高く、「おい、夏本、夏本。」

と、遙か庫裡の方から東吾の聲がして、聽て荒い足音が此方に近づくのである。初野は徐と衣紋を正した。

「速かツたね。買つて來たのかい？」と障子を隔てて東吾の聲。

「其樣な事は何うでも……、」と學生は東吾の耳に、「何が、萩原樣が來たよ。」

「何……？」と何氣なく顏を出して東吾は、庭に立つてる初野を見て、「や、失敬。」

初野は近く步寄つて、

「あの、少し波の事で……、御相談を得たいと存じまして。」

「お波ちやん？　戻りましたか？」
「いゝえ、矢張し歸ると云ひませんで……、それで、私も困つて了ひまして。」
「爾うですか……。仕樣が有りませんねえ、」と東吾は當惑したが、「まあお上りなさい。」
「お邪魔ぢや無いんですか？」と優しく訊いて初野は室に入つた。
　お波は殿井恭一の家に居るのである。逃げられた時から初野は爾うと察して居たが、翌日島井の主婦が訪ねて來て愈よそれと明白に成ッた。主婦は、恭一と初野との間に立つて是迄種々と骨を折つた關係から、今に到つて東吾如きに身を委す樣な事をされては、何うも恭一に對して申譯が無い、何處迄も私の顏の立つ樣にして貰はねばならぬ、若し夫を承知して呉れぬに於ては、初野の不品行を發き、學校からも退學させ、世間にも顏出しの成らぬ樣にして見せる、それでも宜いかと云ふのであッた。其の顏を立てる方法とは、無論恭一の意に從ふのであるが、元より其樣な事が出來るものでは無い。初野は決然拒絶けた。自分は愧かるゝ樣な不品行を爲た覺えが無いから、其樣な難題に答へる必要もありません！
　主婦の難題は拒絶けたが、妹を呼戻す事は出來ぬのである。東吾とも相談して、手紙も送つた、人も遣つて見た、自身も近所まで出掛けて、使に出た處を押へようとしたが、お波は口も利かずに逃げて了つたのである。此上强ひて呼戻さうとするには、恭一に會つて賴まなければならぬ、けれども妹が懷しいと言つて、恭一には會ひ度く無いので、詮方が無いから、
　妹の事は時機の來るまで放棄つて置かう、と此う斷念めたが、併し東吾には別に良い考への有らうも知れぬ、と度々訪ぬるを羞かしく思ひながらも、此くは相談に來た處である。
「困つたもんですな、」と東吾は酒臭い溜息をして、「併し、貴女の氣に懸るのも無理はないが、其樣な事に關係つてちや、勉强が出來んでせう？」
「えゝ、机に對つてても、何うも氣が散りまして……。」
「けれど詮方が無いね。何うです、卒業まで放棄つて置いては？」
「えゝ、貴方にお考へが無ければ、爾うするより他に詮方がありませんけれど。」
「幾ら考へても、來ない者は詮方が無いでせう。」
「全く、何うして彼樣な强情なんですか！」と初野は涙ぐんだ。
「それも、他で智慧を付ける奴が在るからでさ……。」と忌々敷さうに云つたが、「併し、此樣な事を云つた處で仕樣が無い、何うです、爾う決めちや……、卒業まで放棄つて置く事に決めなさい。」
「え、爾う致しますわ。」
「淋しくとも、まア辛抱なすッたら可いでせう。」と笑ひながら云ふ。
「いゝえ、淋しいなんて……。」と初野も莞爾した。
　二人は久く默つたが、初野はもぢ〳〵して、軈て手巾を袂に納れて、
「では、爾う決めますから……。」と進まぬ告辭をする。
「まだ可いでせう、話して居らッしやい。」と東吾は次の間を一寸覗いて、「居りませんよ、もッと遊んで居らッしやい。」
　二人の話を次の室に遠慮した友人は、何時か其處にも見えぬのである。
「ですけれど、」と初野は躊躇して、「種々と何ですから……、今日はまア。」
「ぢや、其邊まで送りませうか？」
「えゝ、何卒……。」と美しい眼が輝く。

東吾は帽子だけ取つて、女人の脱いだ草履を突掛けて初野と列んだ。夕陽目映く、空は綺麗に晴れて、袂を弄る微風に歩を運べば、前の林からは蝉が聞える。

鐘の無い鐘樓の傍から、境内の杉林を横に抜けると、村の者の田畑に通ふ細道、楢だの榎だの、日影に鮮かな雑木の葉裏を眺めながら行つて、夫から深い鎮守の森に入るのである。迂路ではあるが、初野の歸る時は、毎度東吾は此の路を先立して、村の端まで送るを例として居る。

云ひ度き事は胸に餘れば、互に出來るだけ歩を緩めて、此の路の千里も伸びよと心に念じつつ、夢見る如く列んで行くのである。

「其様な事は氣に懸けないが可いでせう。」と東吾は、何やら初野の問を笑つて、「それより、病氣の方は何うです……？ 醫師には缺かさず通つてませうね？」

「え丶、此の二三日は休んでますけれど……。」

「何故、初野樣はそれだから可かん、若し惡く成ツたら何うします？」と容易ならぬ顔して立止る。

「大丈夫ですわ、最う、病氣の扱方には馴れましたもの。それに、醫師に通はないでも、お薬は毎日服んでますし、牛乳も十分に飲んでますし……」輝く目に東吾を視詰めて、「東吾樣、私はね、此頃初めて、人生の幸福と云ふ物を感じましたの……。」

初野が力を籠めて云ふと、男も笑顔で點頭き、

「僕だツて同じ事でさア。これで、若し貴女の病氣が癒つたら、僕の幸福は貴女に幾倍だか知れませんよ。ですから、醫師へは缺かさず通つて下さい。」と女の手を握つた。

「え、決して等閑にする譯ぢやないんですけれど、妹の事やなんか、種々な事が有るもんですから、それでつい……。」握られた手を其儘に、「可笑しかないでせうか……、此服は、此間の……」と體裁惡氣に、我が着て居る單物を見せる。

「似合ひましたよ、先刻から爾う思つてました。」

「私は、何とも仰有らないから、お氣に召さないんぢやないかと思つてましたわ……。」と莞爾して、「先刻出來て參りましたから、直ぐお目に掛けようと思ひまして……、ですけれど、彼の方、怪しく思つて居らッしやらないでせうか？」

「誰、あの男ですか？」

「何だか、じろ／＼見て居らッしやいますもの、私、體裁が惡くッて。」

「いや、彼の男は其様な男ぢやない、彼樣で、非常に同情に富んだ男で、眞率で……、實に良く出來た男ですよ。」

「ですけれど、何時參つても、お酒を飲ッて居らッしやいますのね。」

「なに、毎度と云ふ譯ぢやないが、丁度、飲つてる時に貴女が來るもんだから。」と笑つたが、「彼樣な處を見て、また不快に感つたでせう？」

「其様な事も有りませんけれど、」と初野は俯向いて、「何か御心配の事でも有つて、それを紛らす爲に飲るんぢや無いかと思ふと、何だかそれが氣に懸りまして……。」

「いや、決して其様な事は無い。過日、あんな禁酒する様な事を云つてながら、また如彼云ふ處を見られたんぢや最う辯疏の辭も無いけれど、併し、胸中に煩悶が在つて、それを紛らす爲に飲むなんて、其様な意味の有る酒ぢやないんですよ……、單だ、彼の男も好きだし、僕も好きなもんだからね、つい其様な談が提上がるんですよ。」

「爾う云ふ事なら何ですけれど、私は、何か私に祕して居らッしやる御心配でも有るんぢや

ないかと思ひまして…。」と初野は萎れて、「それに、芳江様の事を伺へば、氣に懸けるなと許しで、些とも經過を打明けて下さらないんですもの。」

「芳江の事かね、なに、秘するのなんのッて云ふ譯ぢや無いが、今初野様に知らした處で、徒らに氣を揉ませる許りだからね。」

「だッて、伺はないで居れば、反つて氣に懸りますわ。種々な夢を見たり、詰らない想像を起したり…。」と溜息を吐く。

「爾うですか、ぢや話しませうか…、貴女、決して氣に懸けちや可けませんよ。」と東吾は前後を見廻した。

前後に人影が無いと見ると、東吾は徐に話出した。友人の學士に辯護士を業として居る者があるので、此に離縁の件を依頼したのである。夫人にも會ひ、子爵にも會つて、今は區役所の届に雙方の印を捺す許りに運んだが、爰に東吾の困つた事は、生家の父兄が頑として之を許さぬ事である。けれども父兄が許さぬとて、此の儘止むべきで無いから、今は專ら此の方を說伏せる事に掛つて居るのだが、突然にも今朝、子爵家から其の辯護士に、一旦承諾した離縁談の取消を賴んで來た、それと同時に、兄の東一が東吾の今の宿所を聽きに來たと云ふのである。

「あら、今居らッしやる處は、未だ秘して居らしッて？」と話の間で初野が訝つた。

「此の事件の決まる迄は、兎角隱れて居た方が便利ですからね…。」と東吾は、それ故に父兄にも今の宿所を秘して置いたと云ふ。

「ですけれど、阿兄様には、何様な大事の御用が有るんですか？」

「それは、略分つてますよ。」と苦笑する。

「爾う…？」と初野は男の顔を眺めて、「而して、一旦承諾したものを取消すと云ふと、何う云ふ譯なんでせう？」

「養家でですか？」

「えゝ。怪しいぢやありませんか？」

「其樣な事を云つて、何かまた、此方を困らさうと云ふ魂膽でせう？」

「困らさうと云ふと？」

「是迄の學資を返せと…何とか、多分其樣な事でさア…。」とまた苦笑して、「勿論、まだ爾うまでは云はんさうですがね。」

「ぢや、何う云ふんでせう？」

「芳江が病氣だから、暫く待つて貰ひ度い、と云ふさうです。」

「えッ、芳江様が…？」と云ふ中、初野は顔色を變へた。

「嘘でさ、虛構事でさ、其樣な事を云つて、此方の氣を緩めて置いて、その間に何か、僕を困らす計畫をやらうと云ふんでさア…。」と獨語のやうに云ふ。

「だッて、芳江様が其樣な假病なんか…。」

「芳江ですか、芳江の病氣は、夫は事實かも知れません。何でも、醫師が出入して居る樣子だと云ふから…。けれども、芳江が病氣だからと云つて、離縁の承諾を取消すなんて…。」と云ひ終らぬに、

「では、芳江様の病氣は本當ですか…。」

東吾は忽ち不快の顔面となして、

「初野様は直ぐそれだ…だから、僕は默つて居るんだ。假し病氣な處が、風邪を感いたんだか胃を惡くしたんだか、分らないぢやありませんか。」

「いゝえ、必然貴方の事を懐つて、それで御病氣に成ッたんですわ、それに違ひありませんわ。だッて、過日來らした時の樣子でも熟く解つてますもの…。」と眼を掩つて、「何樣なにか、私の返辭を待つて居らッしやるんですか…？」

聲にまで出して泣くので、東吾に困つたもの

だ、と云ふ態に初野を見下して居たが、良久くして、

「初野樣、ぢやア、貴女は何う爲ようと云ふんです？　芳江に氣の毒だから、離縁の申込は取消すが可いと云ふんですか？」

「爾うぢや有りませんけれど。」

「貴女だッて、多少忍ぶ處を忍ばなきや、お互に希望を達する譯には行かない位、分つてる筈ぢやありませんか？　それ位の覺悟は付いて居るんでせう？」

「えゝ、それは、覺悟もしてますけれど。」

「ぢや、其樣な愚痴を云つても仕樣が無いぢやありませんか。」

「爾うですけれど、芳江樣の意を察しますと……、私は最う、寧そ……」と只だ泣きに泣くのである。

「寧そ……？　寧そ何う仕ようと云ふんです？」と東吾は嚴然となッた。

初野は早速に答も出なかッた。東吾は倍す氣を苛つて、

「ぢや、芳江に濟まんから、寧そ僕の約束は破らうと云ふんですね？　爾うですか？」

「貴方は、直き爾うお解りなさるんですもの……。」と泣きながら云ふ。

「僕には、最う貴女の意が解らん！」

「何故でせう……？　何う云ふ處が？」

「お互に希望を達するのには、何樣な辛苦をも忍ばう、マレーヂする迄は、互に訪問する事も愼まう……、貴女は此うまで云つた人だ。」

「え、夫に申しましたとも……、今だッて、其の心に變りは御座いませんわ。」

「あれを聽いた時は、僕は非常に貴女を頼母敷く思つた、實に確乎してると思つて、感心した……、けれども、今思へば、彼は單に口頭だけの事なんだ、貴女には決心も覺悟も附いてるんぢや無い。」

「では貴方は、口から出放題に、心にも無い事を云ふ者と思召して？」

「其樣な事ぢや、僕は到底駄目だと思ふ」と東吾は、自分の云ふ事のみを云ひ續ける、「希望も理想も有つたものぢや無い、お互の前途も察するに難からずだ、其樣な事では、寧ろ、今の中に關係を絶つた方が可い、其の方がお互の幸福かも知れない……。」

「まア貴方、」と初野は男の口を遮り、「其樣な、悲しい事を仰有るのは止して頂戴な……。私だッて、是で隨分覺悟もしてる心算ですけれど、ですけれど、芳江樣の事を思ひますと、餘り可哀想で……、それでつい……。」

「可哀想な處で何うするんです？　其點を忍ぶのが覺悟ぢや無いですか？」

「えゝ、それは爾うですけれど……」

「貴女は、始終兩立しない考へを持つて居るんだ、詰り好きで煩悶して居るんだ、僕との約束を維持するか、芳江の友誼に犠牲となるか、孰でも一方に決めなきや可かん……、それだのに貴女は……。」

「今更其樣な事を仰有らないでも、最う、分つてる事ぢやありませんか、」とまたも男の口を止めて、「私は、生命を拋つても、此の望は遂げる心算で居ますわ。」

「けれど、芳江の事が出るとまた……。」

「いゝえ、最う決して口にも出しませんわ、」と涙を拭いて、「それで可いでせう？」

「ぢや、芳江の事は今後口には出さん……？」

「えゝ、濟みませんけれど……。」と云つたが、「その代り、お互に、暫く會はずに居つて……。」

「また其樣な事を、何故です？　芳江に濟まないから？」

「芳江樣にも爾うですし、何だか、良心が咎める樣で。」

「何故、少しも良心を愧ぢる所は無いぢやあ

りませんか、お互に、劣情の奴隷と成ツてるのぢや無い、云はゞ清浄な交際だ、僕は、天地に恥ずる處はないと思ふ……。それに、其樣な事を云つても、到底行はれはせん、是迄の儚でも熟く分つて居る……」

「これまでは、始終私から破りましたけれど。」

「貴女許りぢやない、僕だツて幾度破つたか知れない……、[illegible]の前で引返した日を加れたら、それこそ數罪俱發だ、いや、百罪俱發かも知れ無い。」

二人は目を見合して笑つた。東吾はまた、

「ですから、其樣な窮屈な約束は止しませう、可いぢやありませんか、用の有る時には、公然と訪ひ合はうぢやありませんか。」

「えゝ。」と莞爾點頭く。

「や、最う此樣な處まで來て了つた……。」

「あら、最う日が暮れますわ。」と初野は立止り、「何卒お歸りなすツて。」

「おや、此處で別れませう。明朝、本郷まで行くから、其の時に寄ります。」

「えゝ、待つて居りますから。」

二人は別れた。隔つる夕靄、青田に風が渡つて、見送る顏も次第に小くなる。

初野は、男の言葉を胸に繰返して、病ある身の歩も徐に、植木屋の門を入つたのは、最う我が衣服の色も分らぬ黄昏であツたが、偶と見ると、人の居る筈の無き我が家から、火影が紅く射して居る。

「おや、波ちやん歸つたか知ら?」と訝しく、急いで家に入ると、慌てて逃込むやうな跫音がして、誰も人影が無い……

「波ちやん……、何誰……?」と呼んで、耳を澄ました。

爾ると、暗い縁側から、

「あら、義姉樣ですか……。」と、聲と共に驅けて來て、行きなり初野に抱付いたのは、思ひ掛けぬ芳江なのである。

不意を打たれた初野は、はツと息を呑んで、暫くは口も利き得ぬのである。

「義姉さん、私、會ひ度かツたわ!」芳江は抱付いたまゝ、顏を視詰めたその眼には、もう涙が溢れるのである。

「まア、貴女何うなすツて!」初野は初めて此う云つた。

「私ね、私……、家を逃げて來たのよ。」

「えツ、逃げて!」

「私大變なのよ、最う死ぬ處よ……。」と身を顫はして泣く。

「何故ですツて……?」

「義姉さん、私何う仕ませう……。」と許り、耐へかねて其處に泣伏した。

見覺えある不斷着の縮ネルの單物、繻子と友禪縮緬の晝夜帶、束髪も亂れたまゝで、皺の寄つたリボンと云ふ服裝、子爵家の一人娘が、外出の形で無いのは明かである。

「芳江樣、ま何うなすツたの?」と初野は久くしてから云つた、「たゞ泣いて居らしても分らないぢやありませんか。」

芳江は面を上げたが、悲しさに口も利き得ぬのである。

「逃げて來らしたツて、何故か、阿母樣に叱られでもして?」と顏を覗き、「えゝ? では、お家ぢや、何樣なにか搜してるでせう。」

「え、必然ね、此處へも搜しに來るに違ひ無いの。」と芳江は俄に容易ならぬ顏色をして、「義姉さん、何卒、私を、隱匿つて下さいよ。私もう、家へなんぞ歸りやしないわ、死んでも歸りやしないわ。」

「死んでもお家に……?」

「え、死んでも歸らないわ、最う私、覺悟してるのよ、」と初野の手を握つて、「私、義姉さんの傍で一生を送る心算よ、可いでせう? 置

いて下さるでせう？　その代り私、下婢でも何でもするわ。」

初野は眼を圓くして、如何にも覺悟したらしき芳江の顏色を視詰むるのみである。

「ね、可いでせう、置いて下さるでせう？」と芳江は握つた手を揮つて、「今になツて義姉さんに迄見放された日には、私は何う爲れば可いんだか！」

「見放すの何のツて、其樣なことぢや無いけれど…。」

「ぢや、置いて下すツて？　一生義姉さんの傍へ置いて下すツて？」

「其樣な事は何うでも可いけれど、まア…。」

「いゝえ、可かアないわ、私には生死の問題だわ。」

「お互の間ですもの、私だツて、貴女の爲なら何樣な事でもする心算ぢやありませんか。」と落着いた語調で云ふ。

「ぢや、置いて下さるでせう、ね、置いて下さるでせう？　私もう、義姉さんの傍を離れやしないんだから…。」

「それは可いけれども、何樣な事が出來たんだか、此樣なに私氣を揉んでるのに、まだ些とも話して聽かさないぢやありませんか。何うなすツたの？　何だツて逃げてなんぞ來らしツたの？　過日お話の、其の御養子の事を、無理に迫られでもして？」

芳江は急に悄然と俯向き、

「それも迫られますし…。」と微に云つた。

「それから、それから未だ何かあツて…？」

「私ね、」と顏を上げたが、呢と初野を見て、「私、兄樣に嫁はれたのよ！」

「え、兄樣に？　東吾樣に？　何うして？」と初野は覗いて、「ま、泣いたツて仕樣が無い。何だツて其樣な…お兄樣に嫁はれたなんて、何うしたの？　え、芳江樣、何樣な事が有るの？」

「何から前に云へば可いんだか、」と芳江は泣きながら袖を離して、「夫を思ふと、私は最う…。」

「何か、東吾樣の方から其樣な事を云つて來まして…？」

「義姉さん、ま一寸待つて下さいな、今皆なお話するから…。」と手巾を出して久く眼を拭いて居たが、軈て深く溜息を吐いた。

初野も急に胸が一杯になつたのである。二人は默つて額を見合したが、

「義姉さま…。」と詐り嘆息を洩したが、拭いた眼が直ぐ又涙ぐんで、「義姉さまも瘦せたわねえ！」

「貴女も瘦せたことよ。」

「僞う？　私病氣よ。」と力なく云ふ。

「何處かお惡くツて？」と急に涙が溢れた。

芳江はまたも初野の手を握つて、

「義姉さん、私達二人は、何うして此う薄命なんでせう！」

（三）

漸うの事で芳江は、その家を飛出すに到つた事情を話した。茱伯爵家から養子を貰ふ談は、東吾の事件が起ると與に間も無く出た。父は左程でも無いけれど母は中々な熱心で、毎日の如に娘に說勸めたのである。芳江は母の機嫌を損じながらも、種々な口實を設けて、何うやら此うやら是までは遁れても來たが、昨日の事、東吾から辯護士を以て、公然と離緣の請求の有ることが耳に入つた。一週間ばかり前から、神經衰弱と云ふ診察で醫師に掛つて居る芳江は、此の事を耳にすると、驚きの餘り氣を失つて倒れたのである。

親達は種々と氣を引立てるやうな事を云つて慰めて吳れるが、併し東吾から離緣を申込んで來た事だけは、何う云ひ拵へても確な事なのである。芳江自身にしても、此程まで東吾を慕

うて居る我が心とは知らずに居たが、捨てられた今になッては、最う生きて居る效は無いと、割然と胸の内が決つて了つたのである。

　死なうと迄思ふに就けて、何う云ふ心で離縁を申込まれたものやら、今一度東吾に會つてそれが聽きたい未練もあつた。日外下宿の二階で、初野と東吾との間を調停爲ようとして會つた以來、それッ限り東吾を見た事は無いのだ。何う云ふ心地で居たやら、何様な事を云ふやら、何うかして今一度會ひ度いものだ。それに此うして家に居ては、今迄より一倍烈しく緣談を強ひ付けらるゝに決つて居る、あゝ、それも悲しい。

　そこで芳江は、義姉と賴む初野の家へ逃げて來ようと決心をした。家に居て悲しい事を強ひらるゝよりは、心を知り合つた賴母敷い初野と與に、自炊生活でもして居る方が優つてゐるのである。幸ひ母に貰つた小遣錢もあるので、指輪や頭の物やを一緒に懷中にして、庭を散歩の體に見せて、裏門から竊と拔出して來たと云ふのである。

「だから、私は最う、死んでも家になんぞ歸らない心算よ。」と云ひ加して初野を覗き込み、「ねえ、義姉さんだッて、同情して下さるわねえ?」

　初野は先刻から口を噤んで居たが、此の時初めて、

「夫は同情もしますけれど、ですけれど貴女は……、」と一寸眼を据ゑて、「貴女は、私を疑つて居らッしやるでせう?」

「えッ。」

「疑つて居らッしやいますとも……、居らッしやるわ。」

「何を……。私は何も疑つてなんぞ……。」

「だッて、些とも、此の間の事は仰有らないぢやありませんか。」

「此の間の事ッて? 此の間の事ッて何?」と芳江に氣を揉ませて置いてから、

「貴女は、私からの返事を待つて居らッしやる筈ぢやありませんか……東吾樣に會つて、東吾樣の意を聽いて、而して、それを、私から知らして上げる約束だッたんでせう?」

「えゝ。」と點頭く。

「それを今迄、私から何とも云つて上げないでせう。」

「えゝ。」

「ぢや貴女は、先づ其の事から聽く筈ぢやありませんか、それを、先刻から種々な事を仰有るけれど、その事は一口も仰有らないんだもの、必然、私と東吾樣と……、何うかしてるやうに疑つて居らッしやるわ……。」

「あら、義姉さん、其樣な……、」と驚いた芳江は顏色を變へて、「私は、些とも其樣な事なんぞ……。」

　芳江の顏色を見ると、初野も彌よ夫と驚いたらしく、忽ち眞蒼になッて、

「疑つて居らッしやるんですとも、疑つて居らッしやるから、私と一緒に居て、而して樣子を探らうと云ふんだわ。爾うだわ、必然爾うだわ。」と聲は震へた。

「まア、樣子を探るんですッて……?」

「爾うですとも、でなければ彼の事を默つて居らッしやる筈は無いんですもの。夫とも、私に賴んだ事なぞ、孰せ信にはならないッて仰有るの?」

「其樣な無理許し……、義姉さんも餘りですわ……。」と泣きながら、「義姉さんに迄其樣な事を云はれちや、私は最う……、何うすれば可いんだか!」

　その態は如何にも悲し氣である。初野は猶も半信半疑の眼を離さず、

「其樣な事を仰有るけれど……、ぢや、何故彼の事は、何とも仰有らないの? 最うお忘れな

すッて？」

「然うぢや無いけれど……、だッて、兄樣の居る所が分らないんで、それで、今迄探して居らッしやると思つてましたわ……。」

「え、東吾樣の居らッしやる所が……？」初野には何の事やら解らぬのである。

「え、私だッて知つてますわ……。」

と芳江は、最初は成程初野からの通知のみを待つて居たが、其の中東吾は猿樂町の實家にも居らず、實家でも何處に居るか探してゐると聽いて、初野からの通知の後れるのも必然それ故である、自分を可愛く思つて呉れる初野であるから、東吾の住所が不明であると、有の儘を知らして自分を悲しませるよりは、其の暇に速く尋ね當てて、嬉しい通知を爲ようとして居るのに違ひ無い、と芳江は獨斷して居たのである、決して忘れたでは無いけれど、今は其の方になんぞ重きを置かない上に、久し振に顏を會はせて、云ひ度い事も多く、義姉の不快までを顧みる暇が無かッたのであると辯疏して、

「それを、義姉さんを疑つてるなんて、義姉さんも餘りですわ。」

夫を聽いて居た初野は、聽てほッと溜息を吐いて、

「然う云ふ事を聽くと、反つて私の方が恥かしいけれど……。」と眼を拭きながら、「一寸ね、變に感じた事があるもんですから……。」

「恥かしいなんて、お互の間に其樣な事は無いわ、私たッて、義姉さんに對しては……。」と芳江は、日外母から、東吾と初野の間に可厭な關係の有る談を聽いた時は、初野を怨めしくも思つた事を懺悔爲ようとしたが、併し夫を云ひ出せば、母や倉岡の主婦やをも惡く云はねばならぬので、半ば云ひ出して口を噤んだ。

初野は又も疑の眼を据ゑて、

「私に對して何か……？」

「いゝえ、何でも無いことよ、最う過去に屬した事よ……、」と云つたが、急に顏色を變へて、「あら、義姉さん！」と表の方に耳を澄ます。

「何うなすッたの……？」

駈けて來た腕車の音が門の外に停つたと思ふと、急に三四人の高話がして、どや〳〵と前の植木屋の戸を明ける音がした。

「私の家からだわ、探しに來たんだわ、」とむッくり起つて、「何う仕ませう？」

「前の家で、貴女の來らしたこと知つてて？」

「いゝえ、私知れ無いやうに、竊と入つたけど……。あれ、もう……。」と庭を近付く跫音に慌てゝ、芳江は其處の押入に忍込んだ。

初野も慌てて其邊を片付けたが、氣が付いて芳江の草履を隱した。而ると間もなく、夏本家定紋の提灯を高く、汗だらけの二人の車夫、續いて前家の老婆と子爵夫人とが入つて來たのである。

一室より無い家の中、初野の他には瀨戸笠の勉強洋燈、ぴか〳〵と硝子戸の書架、机、藥鑵の掛つた火鉢など許りで、動く影一つ無いのである。

「おーや、夫ではお歸りになりましたかね？」と婆さんは家を覗くと先づ此う云つた。

「お婆さん、何です？」と初野は、子爵夫人を見ると思はずも聲が震へた、芳江を隱匿ふ事よりも、此の春、口穢く罵られた其の夜の口惜さが思浮んだのである

「いえね、先刻日暮方にね……。」と婆さんは、家の者が綺麗な娘の此處に入る影を見かけたと云ふ事、今この方が搜索に來たから、御案内をしたのだと云ふ。

「まだ御挨拶もしませんでしたね。御免なさいよ。」とそれ迄初野を視つめて居た夫人は、急に笑顏を作つて疊に上つた。

初野は何とも云はずに、出來るだけ嚴然と構

へて居たが、流石に夫人を視詰めては居られなかツた。夫人は病人のやうに蒼く、きよろ〳〵と落着かぬ眼は潤んで見えたが、それでも音聲は明晰として、日外は失禮したと云ふ事を陳べ、芳江の逃亡した事、若しや此方に來はしなかツたかと尋ねるのである。

「いゝえ、お來でになりませんでした。」と只だ一言、簡短に、愛想氣なく答へた。世慣れたと云つても、身分が有ると云つても、我を子供の様な待遇方に、初野の胸が沸返る。

「何うですか？」と夫人は當惑の顔を婆さんに向けて、「何うしたんでせうねえ？」

「それでは、他の方でございましたかねえ。」と其處に腰を掛けて居る婆さんは、日暮方に來たと云ふその娘の事を初野に訊いた。

「私も、最う少し前に歸つた許しですけれど、何誰も居らッしやいませんでしたよ、」と婆さんには優しく答へる。

「ぢや、萩原様が居らッしやらないもんだから、また何處へ遁つたか知れませんねえ？」と夫人は婆さんに云ふ。

「はい、何うも、何うかも知れませんですねえ。」

「萩原様、此の通間に、他に、芳江の親しくして居るお友達は無いでせうか……、存じません。」

夫人は溜息を吐いて、

「何處へ行つたんだらう？」と涙ぐんだが、また一倍優しく、「あの、種々な事を伺ふ様ですが、貴女は、若しか東吾の宿所を御存じ有りますまいか？」

「いゝえ、存じません。」

夫人は、別に何とも云はなかツた。暫く寂然となツたが、忽ち門の外に人聲が喧がしく、また驅ける様な靴音が庭に入つて來た。

「奥様、此方にお居ででございましたか、」と呼びながら家に入つたが、初野には碌に會釋もしないで、「矢張り、此方にも居らッしやいませんですか？」

初野も時々顔を見覺えが有る、夏本家の執筆で、人手の足らぬ時は下男の手傳もする男である。最う四十位の年輩、立派な髭で、頂戴物らしい金縁の眼鏡、暑苦しく洋服を着込んで、額の汗を切と拭く。

夫人は呼捨に家扶の姓を呼んで、

「何うだッたい、お前の廻つた方は？」

「はい、何方にも居らッしやいませんので。」

「猿樂町へも寄つたの？」

「はい、佐久間様へ參つた所が、非常にお驚きになりまして……」

「矢張り。佐久間でも知らないんだね？」

「はい。ですが、其の事に就きまして、一寸奥様に申上げる事がございまして。」

「何だい？」

「恐入りますが、一寸何卒。」と幾回か腰を屈めて、戸外に出る事を願ふのである。

而ると夫人は、初野にも婆さんにも挨拶一つしないで戸外へ出て、何やら執事と低聲で話合つて居たが、軈てまた立戻つて、土間に起つたまゝ、

「これは何うも、甚だ失禮しました。」と口だけで暇乞して碌に頭も垂げず出て行つたが、出ると戸外から婆さんをも呼出すのである。

家扶などは其儘顔も出さずに歸つて了つた。

初野は非常な侮辱を受けたと感じた。先刻から、押入に聽いて居る芳江でもなかツたら、十分に云ふだけの事を云つて遣るものを、と焦躁しく思つたほどである。

婆さんが出てから、外の様子を窺はうとすると、窃と背後の押入が開いて、眼を泣腫した芳江が上り口に坐つて、

「母様、何卒堪忍なすッて下さいな！」と門の方

に向いて泣伏した。

第三十五　胸の中

（一）

「あら、義姉さん最うお歸り？」

「だッて、何時まで居た所で、孰せ今夜の中には、お談は盡きやしないんですもの……。それに、若し今の人が來て、待つてでも居るとお氣の毒ですから。」

「その、兄様の宿所を捜して居る方？」

「え。彌よ分れば、今夜の中にも知らして下さる約束ですの。」

「爾う？　だけれど、親切な方ねえ。後日で、私にも紹介して頂戴な。」

「え。それは……。」

「義姉さんが歸ると云つたら、私何だか、急に心細くなツたわ。最う少し居て頂戴な。義姉さんだッて、其様な事情で、お波ちやんも居ないんだし、歸つた所が矢張し淋しいでせう…？」

「え。それは淋しい事は淋しいけれど、だッて、最う其様な偎蹇つたことばかし云つてられませんもの。」

「私だッて、此様な弱い氣を出すんぢやないけれど、だけど……、義姉さんと同居なら、それは最う、何様な辛苦も忍ぶ心算だけれど、此うして別々に成ツてちや、何だか……。」

「それも、長い事ぢやないんですもの、一夜か二夜の事ですわ。」

「それは爾うですけれど……、家の人達は知らない人達だし……、此様な處に……、私は此様な處に泊つたことは初めてよ……。」と云ひながら、此の室を氣味惡さうに見廻すのは芳江であッた。

六疊の室で、疊も天井も、押入の紙門も、置床の掛軸も、古いことは古いが、燈火の下で見る故か、何處に破れた痕も見えない。それに、柱も器物も、如何にも艶々して、整然と片附いて、主人が始終此の室に注意を拂つて居るのが判る。

此家は根津權現の横手で、南の掃出窓を明けると、晝は山の樣な森の緑色、都ながら車の音も煩さからず、夏も、朝夕は團扇を忘れて濟まさるゝ住居であるが、夜は其處此處の街燈も、濃い闇には力なく、宵の中から人の往來も絶えて、梟の聲が度々聞える。

此の二階を貸間に、茶の湯の師匠をして居る家は、日外初野が、兄の吉兵衞に學資を絶たれた當時、急に自炊を始めようとして探し當てた家なのである。

子爵夫人、それから續いて家扶、孰も綱曳の腕車を飛ばして探し廻つて居るからは、二人が同居して居ては捜し當てらるゝに違ひ無い、それに植木屋の婆さんへも、何うやら内通でも頼んで去つたらしい、今夜の中に他に轉宿しなければ、忽ち邸に連歸らるゝであらう、と芳江を勸めて、其處か此處かと隱れ家を評議の末、此の貸二階の空いて居るを幸ひに、兎も角も今夜から泊めて貰ふことにしたのである。その初野の意は、無論芳江に味方して、邸には歸らせ度く無い、東吾に會はして遣り度い、と云ふのであらうが、それにしては、未だ一言も東吾の宿所をば口へ洩さぬのである。

今は初野のみを賴の芳江は、何事もその言ふ通りになツて居るのである。頓て、淋しい顏色を無理に引立てて、

「何時まで此様な事を云つてても仕様が無いわねえ」としやんと襟を正して、「義姉さん、私辛抱してよ、知らない家だッてなアに、死ぬと思へば、怖い事も淋しい事も有りやしないわ。」

「死ぬと思へばですッて？」と初野は笑つて見せた。

「え、私もう生命懸けよ、邸を出る時から覺悟を決めて居てよ。」と眞面目切つて云つたが、忽ち涙ぐんで、「孰せ、病氣で死ねば死ぬんですもの……。」

「貴女は、直に其樣な心細い事を仰有るんだもの。」

「だッて、此樣な不幸な者に成ッては、最う生きてる效も無いんですわ。」

「不幸な者ッて……、東吾樣の事でせう？」

「えゝ、」と涙ながら點頭き、「義姉さん、察して下さいな。」

「東吾樣の事なら、先刻から彼樣に云つてるぢやありませんか……。貴女は、矢張し私を信用して下さらないから困るわ。」

「あら、爾うぢや無いわ、義姉さんを信用しないなんて、私、決して其樣な譯ぢや無いわ。」と慌てて辯解をする。

「ぢや、東吾樣の事は私に任して、其樣な心細い事なんか忘れて了つたら可いでせう。」

「え、それは、忘れる事にするけれど、だけれど、他の事と違つて……、」と斷々に云つたが、「義姉さんの親切は解つてるけれど、義姉さん許し其樣なに思つて下すッても、肝心の……、兄樣がお厭だッて云へば、最う他に詮方が無いんですもの……？」

「厭だッて？　貴女と面會する事を？」

「面會する事も爾うだし……、」と芳江は久く顏を掩へて居たが、「孰せ、私は最う、兄樣に嫌はれて居るんですもの。」

「其樣な事が有るもんですか……。」

と初野は、東吾から離縁を申込んだのは、蓋く些細の行違から起つた事で、芳江を嫌ふ爲では決して無い、會つて心の中を明しさへすれば、最う直ぐ諒解するに決つて居る、私も有らん限の力を盡して、何處までも調停をするから、心配を爲ずに居て呉れ、と慰めて遣つた。

芳江も辛と涙を拭つて、

「え、もう此樣な愚癡は云はないのよ、幾ら愚癡を列べた處で、孰せ嫌はれた者は嫌はれたんだから……。」

「また其樣な……。」

「いゝえ、是は愚癡ぢや無いわ、私の覺悟だわ、リーデネスだわ。私はもう、決して多きを望まない心算よ、唯の一回で可いから、兄樣に會つてね、私の意を全部話して、それから兄樣の意を聽けば、最うそれだけで滿足よ……。」

「其樣なに悲觀する事は無いわ、兎も角、今に會へば解る事なんだから、」と初野は歸支度をして、「では、私はこれで失禮しますよ。」

「え。ぢや、また明朝來らして頂戴ね。」

「貴女は、まア成るたけ外に出ない樣にね。」

「え、それは解つてるわ。」

「送らないでも可いことよ、爾うして居らッしやいよ。」

「だッて、外に出なきや可いでせう。」と初野の後に跟いて梯子を降りようとしたが、急に其處に坐つて、「義姉さん、私此處で御免よ。」

「何うなすッて？」初野は吃驚した。

「いゝえ、何とも無いの、」と俯向きながら頭を掉つて、「可いから、義姉樣はまア歸つて頂戴よ。」

初野は、必然別を悲しむことと思つて、一つ二つ氣を引立てることを云つて梯子を降りた。けれど、その腕車の音が驅出すと、芳江は聲も苦しげに人を呼んで、

「何卒ね、何かお藥が在るなら服まして下さいな。」と賴むのであッた。種々な心配をした爲か、急に腦貧血を起したのである。

（二）

子爵家の一人娘として、樂しく暖かな家庭に一杯に成ッて育つた身で、知らぬ家の二階に

一夜を明すのは、全く命懸けの大事業であるに違ひなかッた。

それを可哀想と思はぬでは無いが、また聴き度い事も話し度い事も無いではないが、初野は今夜の中に東吾を訪ぬる心で、無理にも芳江と別れて出たのである。

先づ第一は今夜の珍事、芳江の逃げて來たこと、夫人と家扶と腕車を飛ばして捜し廻ること、を告げ、それから芳江が可哀想な心の中、一方は伯爵家の縁談を迫られ、一方は賴に思ふ許嫁の男に離縁を申込まれて、最早世に在る效なしと迄思ひ詰めて居る事を告げて、東吾の心を飜させねばなるまい、でなければ、友人としての私の義理が立たぬのだ。

「彼様なに云つて居らッしやる位だから、無論東吾様は承知しはしない、蓋く耳にも入れないか知れない……、夫は熟く解つて居るが、併し、それだからと云つて、私として此の儘默つて居る譯には行かない……。」と初野は車上でも幾回か獨語した。

許嫁と云ふばかりで、東吾様は元より芳江様を愛して居たのではない、況して自分から離縁を申込む今日となッては、最う芳江様の事など念頭に掛けては居ない、現に今日も、芳江様の病氣を可哀想と云つたら、其點を忍ぶ覺悟が無けりや駄目だ、と彼様なに私を叱つた程だもの！ けれど、離縁と聞いて氣絶した事や、死んでも邸へ歸らぬ決心で飛出した事などを熟く話したら、彼の大盤石の様な心も、少しは動いて呉れないだらうか？ 芳江様の云ふ通り、迫めては一度でも可いから會つて遣つては呉れないだらうか？

「だけれど、强ひて此様な事を願つて、また、私の意が解らないなどと、急に立腹しやしないだらうか？」初野は此う思うて嘆息した。

結局は、自分は男の意見に從ふより他に詮方が無い、芳江とても、幾ら懐ふ心が切であらうが、男が厭と云ふものを、別に方法も手段も盡し様があるものでない。けれども、事柄の經過が何うであらうと、終局は何う落着爲ようと、芳江に對する友誼として、私は私の盡すだけのことを盡さねば濟まないのだ。

「でないと、彼の男の居所を知らさないのも、惡意で祕して居た様に解られるし……、また彼の男にも、彼様な處へ芳江様を隱匿つて、二人を離隔する姦策だ…なんて疑はれても面白くない。」

例ひ何と疑はれても、私には十分の辯解が出來る、芳江様を引越さしたのは、東吾様と會ふ事を恐れてでは無い、私と同居しては、忽ち捜出されて、邸へ連歸らるゝ虞有るからである。また彼の男の宿所を祕して居るのは、子爵夫人にも彼様なに答へた上、爾うでもしなければ、長い間何の音信も爲ずに居た申譯が立たぬからである。またそれを祕さなかッたなら、芳江様は直ぐにも東吾様に會ひに行つたに違ひない、而して機嫌の惡い彼の男を愈よ怒らして、出來る談も破れて了ふに違ひないのだ。

私は第一にそれを恐れるのである。

此く自分で自分に分疏をして居る間に、腕車は我が家の前に來た。直ぐ是から田端まで行かうと思つたが、非常に疲れて、息苦しくなッて、眩暈さへして來た。

「今夜の中に行かなきやならないことでも無い……、それに、最う深更もなッたし……。」と誰に云ふとも無く云つて、車夫をば斷つて家に入つた。

第三十六　立聞

（一）

鷄の鳴く頃までは、疲勞し切つた身體を、動氣

の響に搖られながらうと〳〵して居たが、それでも何時の間にか眠つて、夢に東吾と二人で、何處か隧道のやうな暗い處を、際限も無く奧へ奧へと逃げて行くと、その道が次第に細くなッて、穴が狹くなッて、頭が支へる、袖が觸る、終には二人抱合つて、匍匐ふやうにして行く、すると、最うその穴は樽の如に細くなッて、身體が塡つたきりで、動くことも出來なくなる、それでも力を出して無理に逃げようとする、その苦しさ、呼吸が塞つて、脈々に流れる血が絞出されるかと思はれる。すると、遙か頭の上は明るい世界で、其處から救の綱が垂がッて來た、熟く見るとそれが芳江の垂げた綱で、東吾ばかりをする〳〵と救上げて了ふ。

「あれ、東吾樣、私を放棄つて置いて餘りですよ。」と聲を限りに呼んだ。

けれども、東吾も芳江も穴を覗いても吳れぬ。必然二人で駈落したに違ひない、餘りな人達だ、と身を悶躁いて居ると、また太い綱が垂がッて來たから、行きなりそれに摑まると、顏を出した者は殿井恭一と、鬚の白い夏本子爵と、眼鏡を掛けた楠田先生……、孰も是も厭らしい人達ばかりだが、今引上げて貰はねば死んで了ふ、一生懸命に摑まる、上の方でもうん〳〵云つて手繰る、けれども、何時まで經つても穴から出ない、その中に太い繩が段々細くなッて行く、見て居る間に細くなッて行く。

「切れちや大變ですよ、速く引張つて下さいよ。」と穴の中から叫ぶ。

上でも、汗を流して手繰つて居るが、手繰れば手繰る程繩が細く延びて、繩が針金の如に、針金が縫絲の如に、縫絲が髮の毛の如に延びて、いゝ、ぷつりと切れた……と思ふと、我が聲に目が覺めた。

總身に冷汗を發いて、動氣は烈しく身體を搖つて居る。

「あゝ、厭な夢だッた！」と薄明るい家の中を見廻した。

雨でも降つて居るか、庭の木の葉がさら〳〵と音がする、戸の隙からも日光一つ射して居らぬ、それで懷中時計を見ると、最う十時を過ぎて居る。

「爾うだッた、今朝は、彼の人がお寄んなさる筈だッた。」と思出して、吃驚して床を起きた。

起きて見ると、空は曇つて、冷たい風は袷でも欲しい樣である。戸を明けたり、室を片付けたり、それから身體の始末をして、東吾が來ても慌てぬやうにして、さて朝飯に掛らうとしたが、今朝も更に食慾が無い。

牛乳だけを幸に飲んで、勉強するのでも無く机に對つたが、昨夜の事が現然と胸に浮んで來た。高慢な子爵夫人の、何樣なに驚いたか顏色の蒼かッた事、眼の緣の紅かッた事、家扶のネクタイの曲つて居た事、それよりも、押入を出た時の芳江の顏が、宛然水を潛つたやうに濡れて居た事……

「芳江樣と云へば、今頃は何うしてるだらう……。」と口に出した。

知らない家に寢て、昨夜は眠られたか知ら？何樣なにか私の行くのを待つてるだらうに、速く彼の男が來て吳れれば可い、けれども、彼の男は何と云ふか知ら……？

最う芳江の事を云ひ出せば、機嫌を惡くするに決まッて居る、と云つて、それが恐さに默つて居ては、今か今かと樣子を待つて居る芳江に申譯がない。

「あゝ、私はかり困つて了ふわ……。」と幾回か嘆息したが、心の何處かでは、私の困るのは芳江樣と違つて餘り幸福だから困るのだ、と竊に呟く樣な氣もする。

さて其の待つて居る東吾は、何時まだ經つても來ない、必然、歸りに寄るのだらうと思つた

が、それが、午後に成ッても來ない。つひ約束を缺いたことの無い人なんだが、

「今日は何うしたのだらう！」

（二）

日も暮に近くなッたが、矢張り東吾は姿を見せなかッた。

氣に懸るはそれのみで無い、根津權現の杜の彼方には、蓋く昨夜から一睡もせずに、首を長くして此方の樣子を待つ芳江が居る。此の以前の、書狀で通知す可き約束を、忘れたやうに打棄つて置いたとは事情が違ふ、芳江は自分の指圖で身を隱して居る、殆ど自分の言を賴に生きて居るのだ。夫を思へば、最う一刻も此うして居られるのではない。

けれども初野は、日沒まで東吾を訪ねようともしなかッた。夫から夫と、種々な方面に思が走つて居る中に、偶と芳江の爲に盡す我が誠が見はれ、若し東吾の心が折れたなら、その結果は何うであらう、と考へたのである。東吾が再び夏本の姓を冒す事になッて、芳江と目出度く結婚したならば、其の時は、

「私はまア、その時は何うなるだらう？」と初野は獨で顏色を變へた。

一旦誓つた言も有れば、芳江の爲には飽までも盡さねばならぬが、我が身の將來を顧みると、それが急に氣が進まぬのである。芳江は、爵位も財產も有る家の一人娘に生れて、兩親に可愛がられて、何の不足を知らぬ幸福な人である。自分はと云へば、力にする父親には死別れ、異腹の邪險な兄、病身な憫な母、次第に意地惡に成る妹の間に挾つて、我が腕で我が身を養はねばならぬ不幸薄命の境遇である。東吾と別れても、芳江の世界は美しい暖かな世界であらうが、賴にする男に捨てられた我が身は、一體何を力に生きて居られよう！

「寧そのこと、死んだ氣に成ッて、彼の男に默つて居ようか……？」

芳江の隱れ家は私の外に知つた者が無い、東吾の隱れ家も、私が默つて居れば知れる筈は無い。雙方の祕密の鍵は私の手に握つて居る。私さへ默つて居れば、二人は會ふことも何う爲る事も出來ないのだ。

會はせなかッたら、彼の芳江は何となるであらう？　邸へは死んでも歸らぬと云ふ。豈夫に歸らずに居もしまい、彼程大騷をして尋ね廻る子爵家で、探當てずに居もしまい、けれども、邸へ歸つてから何となるであらう？

男を念ふの餘り病氣に成ッたこと、離緣の談を聞いて氣絕したことなど思合はすれば、其の時は、思詰めた一念の、何樣な事を仕出來さうも知れぬのである。爾うなれば、自然對手たる東吾の名、それに續く自分の名も世に謳はれて、不義不德の誹は、必然二人の身に降り掛るに相違ない。それでは、二人の緣も結ばうとして結ばれぬ事に成らうも知れない。强ひて緣を結んでも、世間に顏も出されぬ埋木に成ッて了ふか知れない！　爾うなッては、私としても生きて居る效が無いが、彼の男をも生きながら殺して了ふと同じことである。

「私故に其樣な人にしては、全く東吾樣には濟まないんだし……。」と初野は獨語したが、さて又東吾の意を考へると、是迄自分に誓つた言葉、その强い意志、中々芳江と會ふどころか、最う此樣な事に耳を假しもせぬ人の樣でもある。

「私はまア、何を心配するんだらう？」

見る人も無いのに初野は頰を染めた。私は矢張り嫉妬心を起したのか、あゝ、芳江樣に恥かしい！

此樣なに獨りで心を動かしたり、獨りで紅くなッたりしたが、漸と決斷が附いたと見えて、

初野は日沒方に我が家を出た。

（三）

息苦しいので、僅か田端までの間を小一時間も費つた。日は沒れて、木立の深い山門を入つた時は、長い本堂までの石疊を仄に透し見て、漸く足を進むことが出來た。夜中のこと、玄關から案内を頼まうかとも思つたが、其處に近付くと腕車が三輛も梶棒を並べて、がや〳〵と四五人の車夫の高聲が聞える。

寺には來客が有るさうな、忙しい處に取次を頼むのも氣の毒であるし、車夫等の惡口を聞くも厭である、矢張り庭口から窃と廻つて見ようか。

踵を反して、本堂に付いて卵塔場の傍を通り拔けたが、胸に思の在れば、濕ツぽい墓の間も左程に怖くも感じなかつた。

さて庭へ入つて、東吾が居る筈の彼方の座敷に眼を向けると、都合好くも雨戸は開いたまゝになツて、燈影は長く庭の闇に落ら、障子には人影が大きく動いて何やら話聲も聞える。

同室の學生が居るか、夫では外へ呼出して談さうか、と思ひながら跫音を竊んで、高い縁側に近寄れば、

「まア、貴方の樣に、一概に爾う仰有つても仕樣が有りませんよ。」と突然老けた女の聲が起つた。

「馬鹿を申せ、此の場に臨んで思案も考へも無いわ。」と續いて裂ける樣な男の聲がした。

「それでも、此者には此者の意嚮も有らうぢやありませんか……。」

「汝からして、其樣な甘いことを云ふから可かんのぢや……。」とまたも高聲に怒鳴り出した時、

「まア阿父樣、何卒、爾う叱らないで下さいな……。」と、何うやら涙聲で止めるのはまた別の女である。

此の聲を聞くと、初野はびツくりと頭を擡げた、今のは正しく夏本子爵の夫人、芳江の母、東吾が養母のその聲なのである。さては、東吾の此處に居ることを探し當てたものと見える、何の爲に來たのか、他の二人は誰であらうか、玄關の腕車は此の人達のに違ひないが、若しや東吾の親達ではあるまいか？　彌よ親達とすれば、無論芳江の事、結婚の事、東吾を詰責の爲に來たに違ひ無い！　さては男にも自分にも一大事の場合である、男は何と云ひ拔けるやら？　と初野は顫ふ足を竊と縁側に上つて、暗い次の室に身を潛ばせた。

「東吾や、今も云ふ通りの譯でね、決してお前を咎めるの、責めるのと云ふのぢや無いからね、何卒まア、私達を助けると思つて、心を飜へして歸つてお吳れな。」夫人の聲は優しいと云ふよりは力なく、「ね、東吾、此の通り……、私は此の通り、手を下げてお願しますよ……。」

「まア奧樣、其樣な勿體ない……。」と老女の聲も涙に震へて、「東吾、此程まで仰有つて下さるのに、お前は何とお聽きだい？　え？　お前は罰が當りますぞ。」

「こら、東吾、」と例の親父らしい聲で、「速く御安心なさる樣に……、速く返辭を申上げんか。こら、何を考へ居る、速く謝罪れ！　こら、汝、まだ強情を……。」

と叱咤の聲と共に、どしんと倒れた響がして、

「あれ、危險い！」と叫ぶは老女。

「此樣な刃物なんぞまア！」と夫人の爭ふ聲。

「夫人、離して下さい、何卒離して下さい。此樣な不孝な奴は、拙者の手に掛けて……、拙者も切腹致して、子爵殿へ申譯致す所存でござる。」

徒事ならぬ物音、初野は我を忘れて飛込まうとまでした。その中一室は靜になツて、老女か

夫人か、啜泣く音が切と聞える、だが氣に懸るのは、先刻から一度も東吾の聲のせぬのである。何うして居ることやら、此う手強く責められては、最早云ひ拔けるには言葉もあるまい、詮方なしに承知するのか、それとも決然斷るか‥‥、幾ら意志の強い東吾樣でも、豈夫に彌うは口には出し得まい。阿父樣らしい彼の劍幕では、「其樣な事は云はしても置くまい。あゝ、東吾樣の胸の中、聲無きは辭に窮してであらう、養家の義理は義理ながら、矢張り私を可愛いと思召すからであらう、あゝ有難い、そのお心と知つては、數ならぬ身も命も、私は此の儘捨てても惜くは無い‥‥。

「東吾や、」と夫人の聲が起つた、「男が一旦、離緣を取らうと迄決心した程なんだから、幾ら頼んだ所で、急に心を飜して吳れる事も出來まいし、また、お前許しその氣に成ツてお吳れでも、何か‥‥、他に約束した女でも在つて、その女に談した上で無きや、確とした返辭が出來ないと云ふ樣な、其樣な事情も無いとは限らないがね、私だツて東吾、此うして無理にもお前に賴む位だもの、若し彌うした事情でも有らば、何樣なにもお前の氣の澄む樣にして上げます‥‥、妾を置くと云ふ事も世間に無い例ぢやなし、芳江さへ見棄てて吳れなきや、其處は何うでもお前の心通りにする心算だからね‥‥。」

「まア夫人、其樣な貴女勿體ない事が‥‥。」と老女は泣聲で遮る。

「途方も無い事を‥‥、左樣な不埒な事が有つては、此信元が容赦しませんわ‥‥。」と老人は一段聲を高く、「こら、東吾、今の御慈悲深いお言葉に甘えて、萬一不埒な念を起したら、汝は人間ぢや無いぞ。」

「彌うですとも、若し其樣な事をして、芳江樣を泣かすやうなことが有つては、お前は實に濟みませんぞ、可いんですか、其樣な事は決して可けません‥‥。」

「いゝえ、其樣な事は何うでも、何卒東吾の隨意に爲せて遣つて下さい。」と又夫人の聲、「何處の世界に、只た一人きや無い娘に取つて遣る婿を、他に女が有つても構はないと云ふ、其樣な親も在りませんけれど、彼樣な病氣にまで成ツて、梯子一つ昇るにも眩暈する者が、此ら家を飛出すまで思ひ詰めたかと思ふと、私は私は實にそれが可哀想で‥‥。」

泣聲が聞える。久く言は絕えたが、急に東吾の聲として、

「今更謝すべき辭も有りません、何卒、お宥し下さい!」と常よりも明晰して居るが、淚を含んだ語調である。

「え、宥して? ぢや、私の賴を聽いて吳れるのですね‥‥?」と夫人の喜ぶ聲。

「たゞ宥して下さいでは分らないぢや無いかね。今、奧樣の仰有る通り、芳江樣と婚禮をして、皆樣に御安堵させると云ふのかい?」と云ふは老女。

「はい。何卒、此迄の罪は宥して、芳江樣と結婚さして戴き度いのです!」と東吾の聲は震へてゐる。

顏は見えぬが其聲は、正しく僞なき感激の聲である。初野ははツと思つた、身體中の血が頭に逆上つた樣で、目が眩くなツて、危く其處に倒れるところを、柱に捉まつて辛に支へた。

忽ちまた老人の聲で、

「善く云つた。確とそれに相違あるまいな? 苦し紛れに、一時を云ひ遁れては濟まんぞ、可いか?」

「はい、私も男兒です、心に無いことは申しません。」

「だがね東吾、お前今の‥‥、奧樣の今仰有つ

たお言葉を聴いて、それで急に其樣な事を云ふんぢや無からうね？」と母が云ふ。
「決して其樣な事は有りません。」
「全くですかい？ 例ひ奥樣が何と仰有つても、他に女を置くなんて、其樣な事は決して成りませんよ……、私が承知しませんよ。」
「爾うとも、一夫一婦は人倫の大道、其樣な不埒な事が有つては、決して容赦ならんぞ。」
「はい。」
「東吾、お前爾うは云ふけれども……、お前、本當に關係した女が無いのかい？」
「其樣な者はありません。」
「本當ですかい？ ぢや、彼の萩原とかいふ女學生は何うしたの……？ いゝえ、何も祕す事は有りませんよ、最う奥樣は、何も彼も御承知なんだから、祕さずに云つてお了ひ。何うしたの？ 本當に關係は無いのかい？」
「まア阿母さん、今そのことは仰有らないでも……。」
「いゝえ、貴女、便次に皆な極めて了ひませんでは……、」と云つて、今度は東吾に向き直つたらしく、「東吾、本當に關係は有りませんね？」
「關係と云つて……、實は、單に口約束をしたのみです。」と矢張り明断云つた。

「なに、口約束？ 何の口約束？」と父の聲は荒くなツた。
「まア貴方は、」と老女は夫の口を制して、「口約束ツて、矢張し夫婦に成る約束したんだね？ まア！」
「實に相濟みません！」
「だけれど、全く口約束許して、別に何うしたツて云ふんぢや無からうねえ？」
「口約束許しです。」
「それでは、此の後何うする心算なの？」
「何事をです？」
「その萩原のことをさ。」
「何うも致しません。破約する許りです。」
「お前許し破約すると云つても、彼方が承知しなかつたら？」
「承知爲ようが爲まいが、最う其樣な事は關ひません。」
「ぢや、何うあツても萩原とは關係を絶つて、芳江樣と結婚爲ようと云ふんだね？」
「爾うです、何樣な事が有つても、最う私の心は動きません！」
「あゝ、善く云つてお呉れだ！」と母は涙聲で、「奥樣、此の通り……、お聽きの通りでございますから、何卒、是迄のところは御勘辨下さるやうに……。」
一しきり啜泣く音のみである。久くして夫人の聲で、
「これで、私も漸と安心しました。芳江に聽かしたら、まア何樣なに悦びますか！」
「それに就けても、先刻の、阿孃樣の隱れて居らツしやる處を……。」と母が云ふと、
「爾うですね、」と夫人が受取り、「東吾や、それで、最う一つお前にお願が有るのだがね、芳江はお前、その萩原と云ふ女が隱して居るやうでね……。」
と夫人は、昨夜初野の家を訪ねた事、芳江は平生初野を賴に思うて居る事、前の植木屋で芳江の姿を見受けたと云ふ事抔を簡短に話して、
「警察にでも賴めば譯は無いけれどね、其樣な事をして、新聞に書かれても困るし、また、彼の女に惡い意を起さしても……、と思つてね。」
「それでね、お前が萩原に會つてさ、威嚇すなり何うなりして、ま、芳江樣を疾く出さして貰ひ度いのだがね、お前、引受けてお呉れだらうね？」
「はい、承知致しました。」
「東吾や、私は此通り、お願ひだからね。」と夫

人が云ふ。

「お邸では、昨夜から、何誰も寝みはなさらんのだ。」と父の聲。

「承知致しました、今夜中、必然連れて参ります。」と東吾の聲は固く請合ふのであツた。

第三十七　遺書

（一）

「…爾うとも、最う此うなれば義理も友誼も有りアしない……、嫉妬ると云はゞ云ふが可い、私だツて、他人の爲に生れたんぢやあるまいし、散々感情を玩弄れて、彼方の都合で抛出されて、それでも德義を守つて從順くして居るなんて、其樣な義務は有りアしない、無いとも、其樣な義務が有つて耐るもんか、機械ぢやあるまいし、奴隷ぢやあるまいし、私だツて一個の人間だわ、教育ある婦人だわ、彼の人達の戀を遂げさせる爲に生きて居やしないわ……、爾うとも、最う構ふもんか、何うなツても構ふもんか……。」

根津權現の社の後で、杉か檜か、夜日には分らぬ暗い大木の根方に身を靠れて、此う獨言するのは初野である。まだ宵の中ながら、往來に人の影も見えぬ。森の中は取分け淋しいのに、空には雲脚しきりと急しく、濕氣を含んだ風は、健康の人にも頭痛を起さすのである。

「だが、此樣な事に成行くのも、矢張り私の薄命からなんだわ！　爵位の有る家に生れないでも、迫めて、芳江樣のやうに雙親が揃つてでも居たら、此う云ふ時には何樣なに力に成ツて、例ひ男が何う云はうと私の希望を遂げさして吳れたらうに……、また爾うなれば、彼の男だツて、口約束だから破約しても構はないなんて、彼樣な無法な事は云へも爲なからうに、あゝ、それを思ふと實に芳江樣は羨ましいわ……、彼樣なに皆なで大騷をやツて、彼の男の親達まで彼樣なに熱心に成ツて……。おや、急に燈火が動く……、何うしたらう？　あれ、窓を明けて、彼樣なに外を……。」

往來を隔てて、彼方の家の二階から顔を出したのは芳江である。燈火を背にしたれば、顔は見えぬが、解れた頭髮、撫肩の姿黑く、袂の端が風で動く。

「あれ、彼樣なに前後を見廻して……、私の行くのを待つてるんだわ……、今朝來る約束だツたから、何樣なに待疲れて居るか……　私が如彼云つたから、外には出られず、家の人は知らない人、終日室に許し閉籠つて、嘸心細く思つて居たらう……、あゝ、芳江樣を見ればそれも可哀想だし……、寧そのこと、何も彼も打明けて、二人の間を調停して遣らうか……、爾うすれば芳江樣も悅ぶし、彼の男も幸福なんだし……、私だツて義理が立つと云ふものだから……、義を貫して……、友誼の犧牲に……、俯仰天地に愧ぢない……。」と斷々な想の胸を走る間に、芳江の姿は內へ引込んだ。

初野は閉めた後の窓を視詰めて、久く瞬もせずに想續けて居たが、聽て熱淚がはらはらと頰を傳はツた。

「えゝ馬鹿馬鹿敷い！　彼樣な人達の爲に、彼樣なことを云ふ人の爲に……、私許り勤める義理が有るものか……、なに、調停する義務も何も……、其樣な不公平な道理ツて有るものか……、無いんだとも、無いんだとも、出來るだけ妨害して、二人の間を裂いて遣つても構やしない……、私許し正直にして、此樣な詰らない事ツてあるものか！」と考へると共に、氣を勵まして歩き出さうとしたが、苦し氣に胸を押へて、「あゝ、此の動氣、今夜はまア何うしたんだらう！」

梢を渡る夜風に、倒れた身體を辛に起した初

野は、燈火の動く彼方の窓を眺めて溜息を吐いた。
　自分だッて、好んで此樣な事を爲ようと云ふのでは無い、東吾さへ如彼で無かッたら、最う少し自分のことを思うてお呉れだッたら、隨分犧牲に成ッて遣らぬことも無い、現に先刻田端へ行く時迄は、芳江が不便でならないから、二人の間を調停爲ようと思うて行つたのだ、それを、私の方では大體まで好意を有つて居るのを、
「口約束だから破約する許しだ、此方が何う云はうと、決して意を動かさない……なんて、餘りだわ、餘り酷いわ！　夫は、彼樣なに義理責にされたんだから、最う言遁れる道もあるまいけれど、執せ私の名まで出す位なら、一應私に打明けて、其上に確とした返辭をすると云つても、誰も無理と思ふ者はありやしないわ、爾うなれば……、爾う打明けて談して下されば、私だッて、私だッて快く……」
　東吾の言を想へば、口惜さに身も顫ふのである。他人の前で、殊に彼の高慢な子爵夫人の前で、彼の樣に輕く云ひ賤されては、最早明るい處に顏も出せぬ私なのだ。其上、彼の東吾の母らしい人の、

「私を威嚇すなり何うなりして、隱した芳江樣を出させろ……、まア、何と云ふ無法な言葉だらう！　揃ひも揃つて實に呆れて了ふぢや無いか……！　それをまた彼の男は、是非今夜の中に連れて行くなんて、彼樣なに綺麗に請合つて……、私を、何うでも勝手に成ると思つてるんだわ。ふん、連れて行くなら連れてッて見るが可い、捜せるなら捜して見るが可い、なアに、幾ら大騷したッて、隱さうと思へば、なアに……。」と初野は獨で冷笑した。
　今頃は、東吾は自分の不在を訪ねて、前の植木屋から樣子でも聽いて居るであらうが、此の儘私が歸らずに居て遣れば、芳江を搜る手懸りも無く、綺麗に請合つた言葉の手前としても、菱家に申譯ない事となるのだ。
「あゝ、本當に快い氣味だ！」とまた嘲笑つたが、偶と見ると、彼方の家の玄關に燈火が射して、格子戸をから〳〵と人影が黑く外へ出た。
　初野は眼を瞬つた。出て來た姿は、正しく芳江なのである。
「あら、彼樣な方に……、必然私の家へ行く處なんだよ。まア、此の暗いのに燈火も點けないで……、彼樣な柔和い顏して居る癖に、中々膽が据つてるんだよ……、矢張し、彼の男の事で一生懸命に成ッてるんだよ。」
　初野は此う思ひながらも森を出て、芳江の氣付かぬ程に離れて、竊に跡に附いて行つた。芳江は時々歩を止めては道の前後を見廻すのであるが、闇深ければ、街燈の影にも初野を知らずに行く。
　初野は幾度か呼止めようとしたが、呼止めてから何と云つたものか、其の考へが極まらぬので、其の儘默つて五六町も附いて來た。先刻東吾等の談話を立聞して、家へも寄らずに此處まで來たのは、實に芳江の姿を彼等の目に觸れさせぬ計略を運らす爲に他ならなかッた。然るに今、芳江の行くまゝに我が家へ遣つて、若し其處に待つて居る東吾にでも出逢はせては、夫こそ萬謀爰に破壞さるゝのだ。
　その中に道は次第に街路に近く、芳江の歩は速くなッた。病ある初野は、急いでも急いでも、其間が遠くなるのみである。

（二）

「夏本樣、夏本樣ぢや無いッて？」と初野は、駒込の通に出ようとする處で聲を掛けた。
　俥車を頼む心算か、淋しさに表通を迂廻りする心算か、今しも横町を出ようとした芳江

は、吃驚して背後を振返り、街燈の光を透して近付く人影を視詰めた。

「芳江様。」

「あら、義姉さん！　まア！」と駈寄る。

「私、辛と追着いたのよ。」

「爾う？　私些とも知らなかツたの……。　私の許へ來らしッて？」

「え、今ね……、貴女の許へ伺はうと思つてね……、其處まで來ると、何うも貴女の様でしたからね……。」

「爾う、私些とも氣が付かなかツてよ。」と芳江は初野の顏を透し見て、「何うなすツて？　大變な息遣ぢやありませんか？　何點か苦しか無くツて？」

「今ね、少し駈けたもんですからね……。」

「でも大變に……。」と初野の手を握つて、「まア、此様なに顫へてよ。腕車を頼みませうか？」

「なアに、可いのよ。其邊で少し息みませう。」

「だッて、此樣なに……。」

（見廻しても其邊に息むやうな家も無い。芳江は、腕車を頼んで、徐に家へ歸つた方が宜いと勸めた。けれども初野は、何でも無いから、と却つて根津の方面へ跡戻りをして、私立中學の裏手、往來を離れた運動場の柵の傍に、手巾を敷いて腰を卸した。

「此樣な處で休むよりは……、ぢや、私の居る家へ入らしッたら？」と芳江も同じく其處に佇んだ。

「いゝえ、其樣なことして居ちや、遲くなるから……。」と云つて初野は疲れたやうに息を吐いて、「私ね、少し貴女にね……。」

それ限りで口を噤んだので、

「私に、何を……？」と心配さうに問く。

「貴女は、私の家へ入らッしやる處でせう？」

「えゝ。義姉さんが來らしッて下さらないから何樣な樣子かと思つて……、それで鳥渡と……。」

「私の行くのを待つてましたらう？」

「えゝ、何樣なに待つたでせう。」

「終日家に許し居らしッて？」

「えゝ。義姉さんが、若し他に發見ると可けないッて云ふから。」

「爾う……。」と初野は溜息を吐く。

「私ね、義姉さんが來らッしやらないもんですから、此の將來何うなる事かと思つて、最う心細くッてね、終日泣いてたのよ。」と息の排る程に顏を近付け、「而して、何樣な樣子？　矢張し、居所が知れないこと？」

暗ければ顏色は見えぬが、初野は何とも答が無い。

「ね？　知れないんでせう？」と問いても、それでも默つて居るので、「其樣なに隱して下さらないでも可いわ、私だッて、孰せ其樣な事と思つてますもの、義姉さんから聞いたッて、決して落膽も何うも爲やしませんわ……。ねえ、爾うでせう？　矢張し分らないでせう？　それとも、何處か旅行でもしてるの？」

「え。」と只だ一言。

「旅行をしてるの？」と驚く。

「え。東吾樣はね、房州へ行らしッたんですッて……、二三日前に。」

天には流れ雲次第に濃く、運動場を渡る風の唸が、二人の話聲を掠つて吹く。

「それでは、最う熟々決心して居るんだわねえ」と淚ながら漸と云つた。

「東吾樣ですか、決心て何う？」

「だッて、東京に居つては、調停だとか何だとか、種々煩いもんだから、それで房州へ避けたんでせう？　必然さうだわ、兄樣の意は熟く解つてるわ。」

「いゝえ、其樣な事はありませんよ。熟くも分らないけれど、何でも、勉強に行らしッた樣ですからね……。それに、貴女の逃げる前の事た

し…、調停が煩くて逃げたの、決心が何うのッて、其様な譯ぢやないでせうよ。」
「爾うでせうか……？」
「ですから、若し貴女の逃げたことを聞いたら、何様なに驚くんだか……。私は必然、心を飜すに違ひないと思つてよ……。」
「豈夫其様な事が……。」
「いゝえ、阿母様と衝突した事か何かで、斯うは成ッたものゝ、貴女に對しては、元來十分に愛情を有つてらッしやるんですもの……、必然、我を折るに違ひ無いと思ふわ……。」と云つて暫し芳江の言を待つたが、「ですからね、愛は、貴女の決心一つだと思ふのよ。」
「私の決心て云ふと……？　房州に行くこと？」
「え。私強ひて勸めるんぢや無いけれど、其方が一番良かないかと思つて。」
「私もね、今偶然と爾う思つてよ、だけれど……。」
「何うして？　良人が怖くッて？」
「いゝえ、良人なんざ幾ら怖いッて……。私、此うたれば最う生命も要らないわ。」
「ぢや、一つ斷行なすッたら……？　強ひてお勸めすることでも無いけれど、此うして東京に居らした處で、御家では彼様なに探して居らッしやるし、執せ、私と一緒に居る譯には行かないんだし……。」
「爾うしませうか？」
「私なら、其の方が一番良策と思ふけれど……。だッて、何日までも彼様な家に隱れてても仕様が無いぢやありませんか？」
「それは全く爾うよ、」と勇んで云つたが、急にまた萎れて、「だけれど、折角房州迄行つたところで、兄様が何う云ふんだか？」
「何う云ふもんですか、爾うして、一人で行らッしやらうもんなら、必然貴女の熱情に感動して、最う、意を飜すに決つてるぢやありませんか。」
「夫は、會つて下さりや爾うかも知らないけれど……、若し、房州でも隱れて了はれればそれ限りだわ。」
「突然訪ねて行くんですもの、隱れる暇なんか無いぢやありませんか？　また、萬一隱れでもしたら、上り込んで、何時までも待つてらッしやりや可いぢやありませんか？」
「だッて、其様な事がまさか……。」
「そんな、意志の弱いことを云ッちや仕様が無い……、貴女の一生の運命に關る事ぢやありませんか！」と初野は勵ました、「若し、隱れて會はない様だッたら、其時は私も行つて上げるわ。」
「本當？」
「行きますとも、貴女の生涯の一大事ですもの、必然行くわ。」
「ぢや、私爾う決めるわ……。おや、雨が。」
「大降に成る樣ですよ。」と初野も起上つて、「ですけれど、今のことは、熟くお考へなすッてね……。」
「あら、是で別れるの？」
「え、大降に成らない中にと思つて……、加之に、藥を服むのを忘れてましたから。」
「一寸、私の處へ來らしッて下さると可いわねえ……、房州に行くにしても、種々御相談したい事も有るし……。」
「ですけれど、今夜はまア、熟くお考へなすッたら可いでせう。」
「最う考へる事なんぞ無いわ、執せ行くなら私、今夜にも行きますわ。」
「今夜ですッて、だッて、夜は滅多に出ませんよ。」
「ぢや、矢張し明朝の八時……。」
その中雨は次第に大降に成ッて來た。二人は仕方なしに左右に別れたが、
「義姉さん、義姉さん、」と芳江はばた〱駈戻

つて、「矢張し、房州の北條でせう？」
「え、先の宿とか云ふ事ですよ…。ですけれど、私決してお勸めするんぢやないことよ。」
「え、可いのよ。」と風雨の中で決然と云つた、
「私、最う決めッ了つてよ。」
「其樣な事してないで、貴女も速く歸つたら可いでせう。」
芳江は駈出さうとして再立止り、
「義姉さん、これで久くお別れですよ。」
「私、また明朝…。」
と云ふ中、芳江の姿は見えなくなッた。雨の降る中を、初野は其跡を眺めて凝然と起つた。

（三）

夫から通に出たが、急の大雨で辻待の腕車も見えぬ。駈けたとて駈通さるゝ道では無い、殊に病ある身の、もう濡れるのを覺悟で、初野は徐に歩を運んだ。

頭を滴る雫、襟から吹込む雨、着物も帶も忽ち水を潜つた樣に濡れて、冷たく身體にぴいッたりと吸着くのである。けれども初野は、其不快な事などに關つてる暇も無い。芳江を欺いた今の虚構事、彼樣に信用さして、彼樣に煽動てゝ、房州に逃して遣つた後で、さて、東吾に對して何う爲たものであらう？

「孰せ終には知れる事なんだから！」と初野は雨の中に立止つて、額を滴る雫を拭つた。

彼程に瞞したからは、男が居らぬとしても直ぐに歸つて來る筈は無い、歸るにしても、其前に自分へ問合して寄來すに違ひない、その時にまた事情を作へて、彼地に隱して置かうと思へば、十日と半月は二人を會はさずに置くのは易々たることだ。

爾うなれば彼の男は何う爲るだらう？　今夜にも芳江樣を連れて行くなどと綺麗に請合つて如何して養家に申譯をするだらう？

「ふゝん、幾ら困つても知るものか、誰が出して遣るものか、皆な自業自得ぢやないか、ふゝん、本當に好い氣味だ！」

必然、煩く私に願ふに違ひない、教育の有る男だから、私との約束を破つて、芳江樣と結婚するに至つた理窟を、何樣にか立派に、御自分の都合の宜い樣に、而して私に否と云はさぬ樣に、嘸巧に仕組んで云ふ事であらう、ふゝん、お氣の毒さま、私は最う、彼の男の口頭に迷はされる私でない。

彼樣に騷ぐ處から推測すれば、彼の男よりも子爵家で默つて居まい、十日も芳江樣が出なかッたら、而して其の隱れ場所は私の外に知る者が無いとなッたら、定めし私の機嫌を執るやうな事を申込んで、何處までも出して貰ひ度いと賴むだらう、此うして金に窮して居るから、或は金を補助すると云ふも知れぬ。

「けれど、幾ら窮したッて、誰が金と男と交換へるなんて……！」

費へば盡きて了ふ金を幾ら積まれても、此の恥辱、此の不名譽、此の失戀の悲哀は、我が胸に深く刻付けられて、身の在らん限は消えぬのである。それを、金を補助する故に芳江樣を出せとか、金で男との約束を斷念めて呉れよとか云つたら、私は屹度承知しない、況して彼の男の口から其樣な事でも出ようものなら、私も生命懸けだ、なんぼ男でも容赦はしない！

だが、私が金で動かなかつたら何うするだらう？　或は、私をば妾にするからと云ひはしまいか？

「先刻も、彼樣な談が出た位だから！」と初野はまた立止つた。

妾！　厭なことだ、名を聞いた許りでも慄然とする。併し、事情が此うした事情であるから、彼の男の心次第で、其點は强つて拒絕されぬかも知れぬ。たゞ、難かしく出る私を宥め

る一時の方便として、芳江樣を出さする方便として、詮方なしに其樣な者に致ようと云ふなら夫は私とて默つて居ない、屹度腹の癒えるだけの復讐を仕て遣らねばならぬ。

孰せ終には露見する詭謀である、最う破れ被れである！ 芳江を隱して置く間に、男にこれ迄の約束を履行させねばならぬ、それが遂げられなければ、二人の間に邪魔を入れて、何處までも二人を苦しめて遣るまでなんだ！

「鬼でも可い！ 惡魔でも可い！ 何とでも好きな樣に云ふが可い！ 私だツて此うなれば…。」と初野は雨に打たれながら、屹と黑き空を睨めた。

何時の間にか、最う家の門近く來て居る。初めて我に復つて、さて植木屋の門を入らうとしたが、偶と、若しや東吾が待つて居はしまいか、と想浮んで、立止つた。

「此樣な態で歸つては…」と我と我が濡れた身體を撫でた。

幾ら心を鬼にしても、男に此の姿が恥かしいのである。

跫音を竊んで、戸の隙から我が家の樣子を窺つた。燈火の影は細く射してゐるが、雨風の音に取られてか、人の居る氣勢もない。それでも初野は内に入ることを躊躇つた。音は無くとも東吾の待つて居らぬとは限らぬのである。

久く決しかねて居たが、軈て前の植木屋の戸を開けて、

「今晩は、」と顏だけを内に入れて、「只今歸りました…。」

而ると燈火の下で繼物をして居た婆さんが、

「おや〳〵、此の風雨にまア、何處へお出でしたい？」と眼鏡の上から暗い外を眺めて、「お召物も何も、皆な濡れましたらうに…。」

「あの、お婆さん、私の不在に、何誰か訪ねて來た人は有りませんでしたか？」

「え、何ですね…？」と婆さんは、風雨の音で聽取れぬかして、上り口まで立つて來る。

「誰か、私の不在に訪ねて來た方が…？」

「はい、お來でになりましたよ、あの、ほら、屢くお來でなさる、あの書生さんの方がね…、最う少し前までね、最うお歸りだらうツてね…。」

「何か、云ひ置いてツた事でも…？」

「いゝえ、只だ、また來るんだからツてね。」

「一人でしたか？」

「はい、お一人でしたよ。」

「爾うでしたか、是は何うも。」

「あの、お召物が濡れましたら、此方にお出しなさいよ…、それに、まだ御飯前でせう？ お湯も沸いてますからね…、火種がございますかね？」

「はい、有難う。」と婆さんの親切を背後に聞いて、初野は直ぐと我が家に入つた。

先づ洋燈を明るくして見ると、成程此處に上つて待つて居たらしく、火鉢には卷煙草の吸殼、それから氣を付けて見廻せば、疊に墨の滴れた痕が入染んで、机上には卷紙が出て居る。

「おや、それぢや、若しや置手紙でも…。」と初野は、濡れた衣服を脫ぎ掛けて、行きなり机の抽匣を抽いて見た。

別に夫らしい物も無い。ヂクショナリーの間、書箱の抽匣、其處か此處かと搔捜したが、何處にも見當らなかツた。けれども、此の卷紙は正しく机に入れてあツた筈を此通り出してある、それに過日買つた許しの物が、最う三分一も細くなツて居るのだ。

「書いたけれども、持つて歸つたか知ら？ それとも、破いて了つたか知ら？」と初野は首を捻つた。

手早く着物を着更へて、其の反故や落ちてあると、燈火を持つて土間の隅まで吟味したが、何處にも其樣な紙片も落ちてない。豈夫に爰で

認めた物を、態々郵便に出したでもあるまい、それとも、其の手紙と云ふのは、他へ遣る手紙だッたのか？　併し今夜の事情から察すれば、幾ら東吾でも、中々其樣な事を爲る餘裕が有らうとは思へぬ。

此樣な事を考へて居る中、急に東吾の事が慕はしくなッて來た。

「不在の處へ一人で上り込んで、此樣なに、物を引出したり何かする處を見れば、矢張し、此迄と同じやうな、變らぬ親しみを持つて居るんだわ。而て見ると、或は私の怨むやうな其樣な輕薄な考へぢや無いのかも知れない……、彼の通り思慮の確乎した方なんだもの……、情も厚いし……、義侠心も強いし……、現に、御自分は彼樣な粗末な服裝をして居らッしやる癖に、私の事と云へば、藥價だの……、着物だの……。」初野の胸には、東吾の是迄の親切が泉の如く湧くのである。「あゝ、私はまア、何だッて此樣な間違つた料簡を起したらう！　あゝ、東吾樣、濟みませんでした、何卒堪忍なすッて下さいまし！」

（四）

雨風が次第に烈しく、夜は凄く更けて行く。再來ると云ふ言葉を當に、初野は一時近くまで起きて居たが、待疲れて臥床に入つた。

「この風雨だもの、乾度、明朝來らッしやる心算だらうよ。」と此う思うた。

けれども、善惡孰にも解釋さるゝ男の心が氣に懸つて、枕に就いても何うも眠ることが出來ぬ、それに、雨の降る中を濡れて歸つた故か、少し熱が出たやうで、頭痛がして、動悸はまた一倍亢つて、時々身體が彈出さるゝかと思ふ程である。とろりとも爲ずに夜を明した。

風は少し凪いだが、雨は未だ盛に降つて居る。枕を上げて見たが中々起きられさうも無い、けれど、若し男が早く訪ねて來ようも知れぬ、斯樣な臥て居る態を見らるゝのも恥かしい、と思うて徐に床を出た。

まだ薄暗いが、前の家では最う起きて居る。痲痺の烈しくなつた身體を息み息み朝の支度に掛つたが、昨日の朝も此樣なにして東吾の立寄るのを待つた事を思合はすと、何うしてか急に、試驗を日前に控へながら、毎日此樣な事をして居て何うなるだらうか、と我と我が心を驚かして、回復の付かぬ失敗でもしたやうに顏色を變へた。

「私はまア、本當に何うする氣なんだらう！」と口にまで出した。

故鄕の母の卒業を待つて居る事、殿井に逃げて行つた妹の事を首めとして、邪險な兄の手前、それから子爵夫人に罵られた口惜さなど、三方四方を思ひ廻せば、一日も速く獨立自活の身に成るより他生きて行く途は無いのだ、今度の卒業試驗こそ、我が一生の浮沈榮辱の岐路ではないか！　それだのに、近頃のこの我が處爲は何うしたと云ふんだらう！

其試驗も、最う十日と間が無い、同級の學友は、皆な夜の目も寢ずに勉強して居るのだ、それを自分ばかりが、

「あゝ戀に目が眩むとは此樣な事だらう……！」

と涙を落した。

けれども、幾ら試驗が大切と云つて、今更此の戀を棄てるのは口惜い。また戀を棄てた所で試驗が良く出來るのでもない。是程まで苦しんで、是程まで計畫んで、今に到つて手を退いてなるものか！　それも、最う時間の費る事では無い、今にも東吾が來れば……、芳江を房州に立たして了へば……、必ず其處に何等かの結果が生ずるのだ。決まるものが決まッてから勉強に掛つても遲くは無いではないか！　初野は莞爾と點頭いた。

「だけれど、芳江様は何う決めたらう？ 昨夜は彼如云つたものの、一人では何うだか？ 發てるか知ら、それに、彼様な風雨だし……。」と考へた。

何うかして巧く發たす工夫は有るまいか、今頃は何をして居るだらう、旅行の支度してか、或は孰とも決しかねて、私の行くのを待つてでも居やしないか……？ 若しや相談に來はしないだらうか、來るも可いが、其樣な處へ偶と彼の男が來合しでもしては……。

「大變だ！ 其樣な事があッては、最う何も彼も……。」と初野は顏色を變へた。

時計を見れば七時を過ぎて居る、大抵の家は朝飯が濟んで、來れば東吾も最う來る頃である、芳江樣も來れば來る頃である。

初野に慌てて衣服を着更へて、而して、未だ雨の歇らぬのを幸ひ、昨夜の生乾きの袴を着けて出た。前の植木屋には、

「あの、鳥渡其處まで出て參りますから、若し何誰か來らしたら、何卒、待つてて戴くやうに云つて下さいな。」と頼んだ。

而ると、泥濘の路を垣に添うて曲らうとする時、合羽を着た車夫體の男が驅けて來て、初野とは摺違ひに植木屋に入つたが、忽ち引返して來て、背後から、

「もしもし、一寸お待ちなすツて……。」と呼止める。

「私ですか？」

「貴女ですか、蕪原樣と仰有るな……。」と息をせいせいと近寄り、「此をね、受取證を戴いて來いッてね……。」

と云ひながら、鳥子紙の封狀と、堅く封じた小筥とを大切さうに出した。

「何方から……？」と訊く迄も無く、手に取上げると、封狀の裏面には、夏本芳江と紛れなき其人の走り書、「何うしたんだらう？」

手翰の封は切つたが、雨の降る中で讀むこともならないので、

「私も、今丁度參上る處でしたけれど……。」

と云ひながら、再び我が家に引返した。

「それぢや、少し急きますんで、憚り樣ですが、何卒鳥渡一筆を……。」と使の男は腰も掛けず、其の受取證を急ぐのである。

「はい、今直ぐ上げますから……。」と初野は机の前に坐つたが、筆を執り掛けて小筥の封を破つた。

中より轉げ落ちたる一品は思も寄らぬ寶玉の燦爛たる指輪である。初野は一目見ると、是で旅費を手配へて呉れとの依頼だらうと思つた。

急いで手翰を開くと、讀難い程の走書で、

昨夜は風雨の中をお歸り遊ばされ、病中の御身に御障り無かりしかと御案じ申上居り候、扨私こと、あれより宿に歸り、種々亂るゝ心を押鎮め考へ候ところ、今回の事こそ誠に私一生の一大事、生死の境まよふ處にて、徒に悲みに沈み居る場合にあらずと存ぜられ候まゝ、姉上樣の御意見に恭き、彌今朝彼の地に向け出發いたし申候、俄に東京を立退かれ候にても、兄の決心の程は最早十分に推察いたし候へども、未練ながら此の儘に別れ候こと如何とも諦めかね、恥かしながら知らぬ旅路をたゞ一人旅立候心の中、何卒不便と御推察を賜はり度願上參らせ候。此く存立候からは、如何ほど困難の事情に遭ひ候とも、身の在らん限は飽までも耐忍び、一度は面會を得ねば止まぬつもりに御座候へども、さて兄の方にては、如何なる手段もて夫を避けらるゝも計り難く、たとひ又首尾よく面會を遂げられ候とも、左程に堅き決心の容易に動き候とも思はれず

候へば、彌望の綱も斷れ候曉は、生きて甲斐無き命、再び東京の地は踏むまじと深く覺悟を極めて出發致すことに御座候、御存じ遊ばされ候通り、子と云ふも私一人の事に候へば、跡にて雙親の嘆き如何許りにやと、其不孝の罪を思はぬにはあらねど、さりとて兄ならぬ男を夫に持たさるゝ悲しさには換へ難く、淺猿しくも此くは覺悟いたしたるにて御座候。定めし此末も、兄とは親しく御交際下され候ことと存上げ候へば、私の胸の中、何卒姉上樣よりも備に御傳へ遊ばされ度偏に願上參らせ候、姉上樣の御執成にて、兄の心傅け、私を不便の者に思ひ下され候はゞ、死しても如何ばかりか嬉しかる可く、彼の世此の世と聲は隔り候とも、此の御禮は必ず申上ぐ可く候、斯くと覺悟極め候へば、今更心に懸る雲も無く、一人の舟路も淋しとは露思はず候へども、軈て此事世上に知れ渡り、卑しき勤めせし者の腹に生れたる娘なればなどと、母の身の上まで新聞に書立てられ、浮きたる心に命を棄て候やう噂立てられ候事のみ如何にも心外にて、之のみは諦めかね…。

とまで讀來つたが、初野は聲を揚げて泣出した。

使の男は内を覗いたが、此態を見て只だ目を瞬つた許りである。軈て初野は屹と面を揚げ、

「それでは、最う芳江樣は…最う此方は、出立つて了つたんですか？」

「へい、何うでげすか…、拙者は、彼家の御新造に賴まれましたんで、へい…。」と呆氣に奪られて居る。

「おやア、あの若い、女學生の樣な方が居ませんでしたか…？」と云ひながらも、猶ほ見殘した手紙に目を轉した。

後には初野との別を悲しみ、彌これが永き別ともならば、此の指輪は私の遺物とも思したまひて、健かに幸多き姉上の手に塡め給はれ、と云ふやうな事が書いてあるのだ。

手翰を讀了るや否や、初野はいゝ、むくりと許り起上つたが、痲痺れる脚に力無く、いゝよろ〳〵と上り口から轉げ落ちる處を、辛に使の男の手に支へて貰つた。

「貴方、濟まないけれどね、何卒大急ぎで、腕車を賴んで來て下さいな、何卒濟まないけれど。」

「へ。ど、何う成すッたんでげす？」

「ま、何卒大急ぎで…、此う云ふ中にも…。」と初野は下駄に足を掛けたが、また柱に掴まッて泣いた。

何の事か解らぬが、使の男も狼狽へて、直と腕車を雇ふべく驅出した。

初野も續いて外に出ようとしたが、思出して室に歸り、其處に置いた指輪を懷中に藏め、家の中を見廻しながら袴の紐を强く結び直した。時計を見ると最う八時である。

「最う出たんぢやなからうか？　出て了つたら何う爲よう？」と口に出したが、心では、房州までも跡を追蒐けようと思つた。

紙入を改めて見て、机の上などを取片付けて、それから殘つてる水藥を一口に吞んだ。

丁度腕車が門の前に來た。前の植木屋に後を賴む暇も無く、行きなりそれに飛乘つたが、

「急いで下さいよ、急いで下さいよ。」とのみ聲を掛けるのである。

第三十八　執持

（一）

京橋靈岸島の、房州行汽船問屋の乘客控

所には、思ひ思ひの腰掛に陣取つた二十人足らずの客が、欠伸交りに出帆の時刻を待つて居る。

昨夜の風雨で、今朝の六時の汽船が漸と此の八時半に出ると云ふので、客の中には最う三時間も待たされたとぶつ〳〵呟くのも聞える。未だ避暑の季節でも無ければ、何れも能々の用事を抱へた人許りである。東京見物の歸りと見える夫婦連の百姓、足袋跣に荷物を持つた小商人、傘一本限の土方、風呂敷包を抱へた筒袖の小僧、夫から懐中で錢勘定でもするのか、懐をもぢや〳〵して居る丸髷の中婆さん、茶を飲むやら固麺麭を噛るやら、元氣好く饒舌る職人の一組……と云ふ樣な徒で、身分の有るらしい客は見えないが、唯一人、此の煙草臭い土間に背後を向けて、帳場に續く店の窓から顔を出して、潮風に鬢の毛を吹かれて居る娘がある。

其の姿のすらりとして、頸脚の白いのに、着物も帶も際立つて目に着く服裝をして居るので、若い者は退屈凌ぎに、態々其方まで立つて行くのもあるが、娘は更に顔を見せぬ。云ふ迄も無く此が芳江なのである。

芳江は、八時の船に乘る心算で驅付けたのであッた。昨夜は徹夜考へて、執せ東吾の意は解けまい、十の物が殆ど十まで難かしい、とは思ひながらも彼地に渡るのだから、小さき胸も今は全く据つて居る。顔は血の氣も失せて、口は固く結ばれて、始終窓の外のみを睨む眼も、何を見るとも無く同じ處のみを見詰めて、瞬きする事さへ稀である。

雨は何時の間にか收つて、雲の切目切目から暑い日光が射す。沖は最う快然晴れて居るが、波は未だ高く、其邊に繋いでる船は、舫の如に揚つたり沈んだりして居る。何地へ發るのやら四五艘の小汽船は、盛に黑煙を吐いて、交る交る汽笛を鳴らす。

川を隔てて對岸は往來で、其處の石垣には、船蟲が群を成して背中を乾して居るが、波に搖られる塵芥は、蟲の集まつた所まで揚り掛けては引返す……、と思ふと、忽ち大きいのがざぶ〳〵寄せて來て、石垣に衝當る、飛沫が往來まで飛ぶ、船蟲は最う流れたかと見れば、何時かまた元の所でうぢや〳〵群つて居る。

往來には種々の人が通る。風雨の後なので、誰も孰も元氣好く、日の射る中を明るい顔して、聲高に話しながら行く。魚屋の盤臺、泥の被つた赤い臀、きら〳〵する腕車の輪、傘の下から緋メリンスの腰卷……。

偶と芳江の目に入つたのは、十五六と十二三位の二人の娘である。姉妹と見えて顔も似て居る、何か稽古にでも通ふ處らしく、二人とも小風呂敷を抱へ、睦じく手を提合つて、岸を覗きながら話して行く。芳江は久くそれを見送つて居たが、忽ち涙ぐんだ。

「何卒、お待しなすツて。」と帳場の方から印半纏の手代が芳江の傍に來た。

「最う出るんですか？」と芳江は起上つて襟を搔合はせた。

「御荷物はございませんでしたな、お洋傘は？」

「いゝえ、何にも……。」

而ると主婦の樣なのが出て來て、「何卒お氣を注け遊ばして。」「お忘れ物の無いやうに。」などと、茶代の禮に背後に廻つて帶まで直して吳れる。

芳江は土間に降りて、手代の導くまゝ棧橋の方へ出ようとしたが、此の時、直ぐ我が目の前に、がら〳〵と威勢の好い腕車が止つて、「おツ、危い。」と車夫の叫び、轅げる樣に降りた女は義姉の初野である。

芳江は吃驚して、

「あら、義姉さん！」と驅寄つた。

「あッ、芳江さん、ま、未だ…。」と許り抱付いたが、聲を揚げて泣き出した。

「義姉さん、まア何うなすッて、え、何うなすッて？」

芳江は膽を潰した。初野の身體はがた〱と顫へて、呼吸が喘んで、唇の色までが變つて居る。

「芳江さん、宥して、何卒宥して、芳江さん…。」と口も利き得ぬ。

「何ぅなすッたの、え、義姉さん、何うなすッて？」

「譃なの、皆な譃なの、此方に居らッしやるの、東吾様は東京に居らッしやるの！」

「えッ、兄様が此方に…？」と叫んだが、不意に初野が土間へ倒れ掛けたので、「あれ、義姉さん！」

「あゝ、苦しい、少し息まして、あゝ、あゝ。」と唸つて、「お冷水を、お冷水を何卒。」

「あれ、何卒手を貸して下さいな。」と芳江は人を呼んだ。

店の者が手傳つて、兎も角も初野を上に抱込んだ。

「それ、義姉さん、お冷水ですよ。」と芳江は耳に寄つて、「氣を確り持つて下さいよ、義姉さん、義姉さんや…。」

初野は頭を上げて、芳江の手から水を呑んだが、目を据ゑて其の顏を見詰め、

「最うね、房州に行く事は無いの、東京に居らッしやるの、田端に…、皆な譃なの、私の虚構事なの、堪忍してね、芳江様、堪忍してね…。」と泣きながら云つたが、忽ち苦し氣に拳を握つて、今飲んだ水と與に、汚い物をしたゝか吐出した。

警官も駈付けて、醫師が呼ばれた、汽船問屋の店は久くごた〱した。

（二）

越前堀の唯ある私立病院、窓の下には滿潮の大川の水が緩く流れて、石垣に耳語く波の音の靜な一室に、芳江に抱へられて居るのは初野である。

先刻此處に舁込まれてから、丁度三回目の注射をしたところで、醫師は次の手當を看護婦に命じて出て去つた。脚氣衝心で、全く危篤に陷つて居る、如何なる手當を施しても、此上三時間とは保ち得まいと云ふのである。

「少とはお樂におなりでせう。」と看護婦は、今まで氷嚢を當てた胸部に辛子を貼つて遣る。

患者は微に點頭いたが、其のせい〱する呼吸の間で、

「少し、横にして下さい…。」と喉で云ふ。

「横になると又不可いから、矢張し此うして居らしッたら？」と抱へて居る芳江は、宥める樣に云つた。

「お窮屈ですか？ ぢや斯うしませう。」と看護婦は、蒲團を高く、半ば起きてる樣に枕をさせて、「今度は宜うござんせう？ まア凝然として居らッしやいまし。」

「義姉さん、身體を動かしちや惡いから、此うして辛抱して居らッしやいよ、ね、義姉さん。」

患者はまた點頭いたが、

「まだ東吾様は…、まだ來ませんか？」

「え。最う來るでせうけど。」

「餘り遲いぢやありませんか？ 間違ひませんか？ お寺が分りまして？ 田端ですよ、分りまして？」一言毎に、息は今にも絶える樣である。

「分りましてよ。まア可いから、其樣に氣を揉まないで居らッしやいよ。」

「でも、餘り手間取るから…。また遣つて下さいな、私の家へも遣つて下さいな。」

「遣りましたよ、最う三人も遣りましたから、其

樣な事なんぞ氣に懸けないで居らツしやいよ。」と袂で顏を隱した。

「爾うですか、あゝ、濟みませんねえ！　芳江樣、芳江樣…。」

「え、え、何です？」と芳江は涙を拭きながら耳を寄せる。

「貴女、何卒、手を何卒…。」

と云ふから、芳江が手を遣ると夫を凝と握つた許りで、物は云へずに只だ涙ばかり流れた。脈は先刻から絕々で、爪の色は黑く成り掛け、手も足も冷たくなツて居た。

「宥して下さいよ、芳江さん、宥して下さいよ！」と芳江の顏を視詰めた目には、泉の如く涙が溢れるのである。

「義姉さん、もう、其樣な事は止して頂戴よ。」

「濟みません、實に濟みません…。」と云つたが、急にまた身を悶えて、「起して下さい、あゝ、起して下さい。あゝ苦しい！　あゝ苦しい！」

「まア、此うして居らツしやいよ。」

と芳江は止めようとしたが、ぐいと獨で起上つて、

「氷を、何卒氷を。あゝ苦しい、此處が苦しい！」と胸を叩いたり擦つたりして、今飲んだ水を直ぐに吐噴すのである。

看護婦は最う孰れて居るので、制止しながらも患者の動く儘に任して居るが、芳江は抱止めようと切と氣を苛つて居る。

「貴女、何卒、最う一回醫師を呼んで下さいな。」と芳江は、患者の苦しむを見かねて看護婦に賴むのである。

「はい、最う少し經つと再來らツしやいますから。」

「でも此樣に…。」と芳江は背中を擦つて遣りながら、「義姉さん、義姉さん、お波ちやんの居る處は、切通の何處ですツて？　え、何町？」

「波ちやんですか、呼ぶんですか？」

「えゝ、呼んだ方が可いと思つて。」

「おやア、私は最う…、私は、最う死ぬ處ですか？」

「いゝえ、爾うぢや無いけれど…。」と芳江は泣いた。

其處へ扉が開いて、學校の制服を着けた東吾が、顏色を變へて入つて來た。

病室に入るや否や、東吾は只だ愕然と立止つた。待設けた事とは云へ、芳江は流石に面を染めたが、悲喜の一時に激する情は、空しく涙と化つて落つるのみである。初野は切に身を悶えて、吐く物の無きに吐からとするやら、際限も無く凍氷を望むやら、看護婦と芳江の手では中々抑へ切れぬ程踠き廻る。

「何うしたんです？」と東吾は初めて口を開いた。

斯ると芳江は涙ながらに、

「餘り腕車を駈けさしたんで、脚氣が衝心したんです…。」と低聲を震はして、「これも、皆な私の爲なんですの…。」

「醫師は何う云ふんです？」

看護婦は低聲で、其二三時間より保たぬ重態である事を告げた。

「最う此樣なんですもの…。」と芳江は、初野の手を握つて見せた。

東吾も初野の身體に觸つて見たが、

「妹を呼びに遣りましたか？　故鄕へ知らして遣りましたか？」

「いゝえ、未だ…。私一人で、何うすれば可いんですか…。」と芳江は謝罪る樣に云ふ。

それでは、と云ふので、お波に迎の車夫を走らせ、佐原なる兄へ急報をさせた。間も無く、醫師は再カンフルの注射を施した。

患者は少しく苦痛の薄らいだらしく、胸に當てて居た手を投出して、

「芳江樣、私は、何時まで此樣な處に…、此

様な處に入つてなきや可けないんでせう？」

「何ですよ義姉さん、今其様な事を……。」

「ですけれど…、ですけれど、」と欠く呼吸許り急しくして、「病院に許し入つてちや…、それに、それに、私最う試驗ですもの…、あゝ、あゝ苦しい！」

「まア、試驗なんぞ何うでも可いぢやありませんか。」

「いゝえ、卒業試驗ですから、卒業…。あゝ苦しい、また苦しい。東吾樣は未だ來ませんか。東吾樣は…？」

「兄樣は、先刻から此處に來てますよ。」

初野は眼を据ゑて枕頭を視た。

「僕は此處に居ますよ。分りませんか？」

「分るんでせう？」と芳江も云つた。

「あゝ、東吾樣、東吾樣…。」と初野の目にはまた新しく涙が溢れた。

「初野樣、何にもね、貴女の氣に懸ける事はありませんよ。」と東吾は力を籠めて云ひ聽かした。

「義姉さん、私はね、何處までも義姉さんの妹ですよ、ね、宜らござんすか。」と芳江は初野の手を握つた。

「濟みません、宥して下さい！」と初野は東吾の手を探し捉へたが、靜に我が胸の上に持つて來て、其手と芳江の手とを握合はせて、「お二人ともね、何卒ね、お二人とも何卒…。」

と迄は云つたが、其後は聽取れなかツた。それが最後の言なのであツた。次第に息遣が穩かに成ツたと思ふと、最う其のまゝはたと絕えて了つたのである。お波も駈付けたけれど、姉の臨終には間に合はなかつた。

＊　＊　＊　＊

葬儀は郷里から兄が上京して濟ました。お波は、兄の勸むるも肯かず、東吾と芳江の親切をも無にして、恭一の世話で學校に通うて居る。解せないのは恭一で、何の爲にお波を世話して居るやら？　初野との關係を知つた者は、死んだ戀人に情を盡すのだなどと噂みするが、島井の主婦のみは、串談ぢや無いよと笑つて居る。

芳江は、人に扶けられて會葬したが、燒香の場で氣絕して、それから大學病院に舁込まれた。併し、一箇月許りで全治退院した。此の十月には、新法學士たる東吾との婚禮の式を擧げるのだと云ふ。

年譜

略傳

英米佛三國の軍艦が隊を成して、堂々と攝海に投錨して居た。佛蘭西公使ロセスは、幕府が何時までも長州を討つことを遷延するならば、代つて我等の手で討伐して遣らねばならぬと云ふ詰責狀を突付けて迫つた。將軍も老中も、京師に集る諸國の志士も、すつかり慌惑と衝激に拘はれた日であつた。その日(慶應元年九月十九日)の曉方である。京師からは二百六十餘里も東北に隔たる出羽の僻地(秋田縣仙北郡六鄕町)に在る一女性(小杉園子)が、何に感じたものやら、俄に産氣が催して、空氣の流通の惡い、薄暗い古土藏の内で、恐らく發育の不良であつたらしい一個の胎兒を、この世に提出したのである。將來は、小杉の家督を繼がすべき長男であるところから、擇りに擇り拔いて命じたことであらうが、やがて此の孩兒は、爲藏と云ふ意味の不可解な名を、生涯の我が名に呼ぶことに運命づけられたのであつた。

父(小杉豊治)は絞油と、醬油釀造と、呉服物や古着の商店を經營して居た。戊辰の戰亂には、鄕黨の青年數十人を驅り集めて有志隊を組織し、勤王軍に盡したところから、畏くも明治大帝の御前に召されたと云ふのが、彼の唯一の誇であつた。此うした父の訓育指導の下に成育した爲藏であるが、流れ流れて、否、躓き亦躓いて、小說家仲間の一人に加へられる天外となつたのである。

少年時代は鄕里の漢學者岩谷順太郎に就いて教を受けた。大曲に在る岡田好成の塾では、英語ABCから、普通學を學んだ。明治十九年に東京へ出て、英吉利法律學校と、イーストレーキの國民英學會に通學した。學科は一つとして滿足に修め得ない癖に、神田や本鄕邊の貸本屋が藏する、明治から德川時代に溯つて、軟文學に屬する殆ど有らゆる書冊を涉獵したのであつた。

著作年表

明治二十五年　狂菩薩(二十四年作。國會新聞)。醉骨錄。五つ紋。哲學者(齋藤緑雨の『賣花翁』と合册し『反古袋』と題して春陽堂より出版)。改良若旦那(十二月、國會新聞)。孕辨天(未完)(明治新聞?)

明治二十七年　奇病(二六新報)。どろ／＼姫(小日本)。喇叭卒(二六新報)。不具者(『はつ雁』と題した博文館出版の合作集に入る)。改良若殿(讀賣新聞)。

明治二十八年　村の名物(二六新報)。夏野(近江新報?)。玉の輿(未完)(やまと新聞)。三國物語(國民之友)。蝶ちやん(讀賣新聞)。先生(未完)(時論日報)。改良奥様(家庭雜誌)。流行病。卒塔婆記(『五調子』と云ふ春陽堂出版の合作單行本に入る)。

明治二十九年　白桔梗(文藝倶樂部)。ひとり者(國民之友)。無絃琴(早稻田文學)。

明治三十年　眩まくら(新小說)。珈琲店(新著月刊)。かけ皿日記(新小說)。輕業師(文藝倶樂部)。回想記(國民之友?)。ばけ柳(文藝倶樂部)。離合(新著月刊)。かこひ者(新小說)。ひな歌(新小說)。

明治三十一年　おぼろ染（太陽）。はれ小袖（新小說）。麒麟兒（太陽）。

明治三十二年　蛇いちご（單行）。三枚かさね（新小說）。みだれ髮（文藝倶樂部）。霜夜（新小說）。娘こゝろ（大阪每日新聞。『ひだり繩』と改題して春陽堂より單行出版）。

明治三十三年　はつ姿（前年十一月起稿、三十三年四月脫稿、春陽堂より單行出版）。顏かぶり（三月脫稿、新小說）。揚弓場の一時間（新小說）。女夫星（八月脫稿、春陽堂より單行出版）。新學士（起稿八月、大阪每日新聞）。花こゝろ（三月脫稿、小天地）。戀と戀（十一月起稿、春陽堂より單行出版）。

明治三十四年　横しぐれ（三月脫稿、新小說）。輕業の樂屋（新小說）。親子（新小說）。高等銘酒屋（明星）。薄化粧（新著月刊）。はやり唄（八月脫稿、春陽堂より單行出版）。はなれ駒（九月脫稿、小天地）。二人孤兒（十月、二六新報）。

明治三十五年　つとめ人（前年歲末脫稿、文藝倶樂部）。うつり氣（新小說）。仇なさけ（文藝界）。新夫人（大阪每日新聞）。おとし種（十二月脫稿、文藝界）。

明治三十六年　魔風戀風（二月—九月、讀賣新聞）。

明治三十七年　遺言狀（新小說）。大伴家（六月脫稿、文藝倶樂部）。相續人（八月脫稿、新小說十月號）。にせ紫（八月末より二六新報）。

明治三十八年　緣不緣（九月より報知新聞）。

明治三十九年　コブシ（三月—四十一年一月、讀賣新聞）。

明治四十一年　校長の二子（三月起稿、中央公論）。長者星（九月より讀賣新聞）。

明治四十三年　闇を行く人（九月—十二月、東京每日新聞）。脚本 無人島（新小說）。墮落（新小說）。借用證（新小說）。

明治四十四年　伊豆乃賴朝（一月より報知新聞）。入洛記（五月、報知新聞）。

大正元年　伊豆乃賴朝後編（報知新聞）。春の水（文藝倶樂部）。

大正二年　落花帖（二月—十二月、報知新聞）。

大正三年　銀笛（二月—四年十二月、婦人世界）。

大正五年　初舞臺（八月—四年五月、報知新聞）。

大正五年　小唄供養（四月—六年、日本一）。振袖系圖（六月より東京夕刊）。

大正六年　春雨日記（四月、東京朝日新聞）。七色珊瑚（六月より東京日々新聞、大阪每日新聞）。

大正七年　二人傘（一月—八月、讀賣新聞）。靈鐘（一月—八年十二月、婦人世界）。雛暦（八月—八年五月、國民新聞）。

大正八年　紅機悔 未完（十月より報知新聞）。

大正九年　三代地獄（一月—十年十二月、婦人世界）。

大正十一年　二つの太陽（一月—十二月、國民新聞）。

大正十二年　片假名祭（一月—十三年六月、婦人世界）。

大正十三年　狼烟（一月—十二月、太陽）。

大正十四年　毒脣（一月—八月、東京夕刊新聞）。眞空鈴（四月—昭和二年九月、講談倶樂部）。

昭和元年　藤娘（一月—十二月、キング）。脚本 腰越狀（三月、中央公論）。弱蟲（五月、文藝春秋）。

昭和二年　母の再婚（三月—四月、婦人倶樂部）。

昭和四年　史劇 筑前守義興（三月、中央公論）。戯曲 ちんば念佛（七月、改造）。

昭和六年　赤館（一月より婦人世界）。

山田美妙集

序

二十歳前後には忽然東洋のシェークスピヤといふ羨望的綽名を得た、二十四五ではそろそろ忘られかけた、三十前後輕薄文士、放蕩漢の名をうたはれた、その後は日蔭者だ、死ぬときには、大事にしてゐた見舞物のシュークリイムの食べ殘しにカビの生えたのが形見だ。評判は當にならぬと誰でもいふ。明治以來世間の評判に苦い杯を嘗めさせられた文人詩人は幾人あるか知れない、山田美妙の如き、正にこの苦杯を滿喫した點で斷然代表的人物だ。彼程花やかにもち揚げられて彼程みじめな捨て方ですてられた人はない。美妙はその小說にも詩にも多くは悲劇的情緒の勝つたものを描かうとつとめた。だが彼自身は知るや知らずや、自分の一生が一番描き榮えのある悲劇だつたのだ。

先驅者の生涯には悲劇が伴ふ。美妙は先驅者だ。だが不朽の事業は天才でなければ出來ない。美妙は天才ある先驅者であつた。彼は天才を持ち續ける氣力と忍耐と環境を缺いてゐた。自分は何も美妙の生涯を天才者の一生だと強辯するのではない。だが先驅者として立つた二十歲前後の美妙の胸には、天才の火が宿つてゐた。彼はこれで二三年の間に、凡クラ文士が百年かゝつても出來ない大きな仕事をした。例へば言文一致の創唱の如き、中でも大きなものだ。これは從來の文學史家の考へてゐるやうなお手輕なものではない、新興文學の life and death を決する重大な技術的革命だつたのだ。その證據には、この後の明治の文學史は、一面からいつて言文一致と雅俗混合、その他の文章との戰鬪の記錄であり、やがては前者の勝利を語るものに外ならぬではないか。

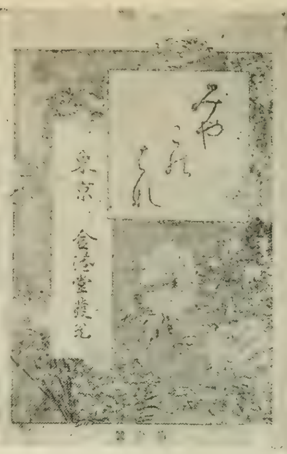
小說に悲劇的情緒を紹介したのも美妙だ、歷史小說に主情的心理的分子を入れて復活させたのも美妙だ、新體詩の振興には音韻研究から始めなければならぬと論じたのも美妙だ、辭典編纂の形式に新機軸を出したのも美妙だ。口語詩、少年文學、女性文化、ともに美妙の息がかゝつてゐる。大風呂敷と笑ふなかれ、先驅者は完成の義務を負はない。その口火をつけたものが立派に生長して人間生活を豐富にし便利にし光明あらせるに役立てば、それは先驅者として立派に義務を果したのだ。

美妙個人は幾多の缺點をもつた人間であつたらう。或る人は、人好きが惡かつたといふ、或る人は、社交性がなかつたといふ、又或る人は、大家ぶつたといふ、又或る人は、淺薄で氣障なお先走りだつたといふ。數へたてると、もつともつと多くの個人的缺點をもつてゐたと思ふ。だが個人的缺點は個人的缺點だ。これだけ缺點があるから、それだけ仕事の方で差引をつけるといふ論法が、今迄の美妙論に多い。

實際美妙に對する反動的批評は長過ぎた。たまに幾分の功績を認めてやつても、恩惠的に認めてやるといふ口吻があつた。自分の考へだと美妙に對する反動的批評は、明治文壇に於ける硯友社閥勝利の空氣が強すぎたのが原因になつてゐると思ふ。硯友社に對して所謂不義理をした美妙が、硯友社閥の空氣が隅から隅まで通つた文壇では頭をあげられる道理がない。而も、その空氣も亂れて頭をあげられさうになつたときには、彼自身がすでに天才のミイラとなつてゐた。これは氣の毒なことだつた。だが然し、反動は反動として淸算してしまふべきだ。もう個人的好惡を離れて美妙の天才的先驅者としての功績を正しく認めてやつていゝころではないか。自分は輓近少數の人々によつてかゝる正しい見地から美妙研究がなされつゝあるのを喜ぶものだ。

昭和六年十月　柳田泉

花ぐるま



(原本「都の花」第壹號表紙)

第一輛　曳出す客待の話

夜はや丶九時に近い頃で、途端の瓦斯の光は川霧に搔消されて薄晴いだけ淋しさも一入加はり、影に吠える犬は霜を吐いて聲にも寒氣を含んで居ます。二三日このかた曇ッたり、晴れたりして今猶雨にならうか、雪にならうかと相談最中ででもありさうな空合、此頃は一體缺かさずに出る星も前に薄綿の幕を引かれて仕舞ッて下界に目瞬をすることも出來ず、その恨を分ッてか、月は雲の高低の角々へ妬ましさうな光を噴掛けて朧銀の襞や滅金の條をつくッて居ます。けれど、風…この風ならと見込んで天氣をトッて居た賴の風もたゞ寒氣を吹寄せるばかり、空の雲をば攘ふといふ體も無く、弊垣を意地めて泣かせたり、溢れた水を快く凍らせるのみです。夏の頃はこゝろよく思はれた川水の音、今は岸と語るそのやさしい囁きも人をあざけるかのやうです。

川に沿ッて五六輛の人力車がある有りさま、其處に例の營業人力車停車場の榜示杭が立ッて居るのでせう。まだ酷く更けもしず、それで人通りの少ないのは冬が固有の町の景色で、やがて一時間ほど經たぬ間に次第に車の數は減り…客を得て減ッたのではなく…あとにはやうやく二三輛しか殘りません。骨身をゑぐる寒さ！まだ重くならぬ財布！財布のためのこの寒さ、そして寒さのためのこの財布。妬ましい川向の家、晝よりも明るい燈光に絃歌の聲を湧かせて居ます。物數奇の紳士の住處か、たゞしは料理屋か、いづれにしても九尺二間の火奴箱は西洋主義の木樓と共に新陳交代させて夢にも思はぬ一構…御覽なさい川一條、こちらの岸の車夫どもを。假に公平な空を別莊の天井と見、また月をわがための燈火と考へ、蝸牛の角目立つ荒くれ男と身を落して、また蝸牛の天賦の家、車を自身の家と見立てて殼めかして曳いて歩くのがその境界です。

聞える靴音にすはや好い鳥と手ぐすね引いて待掛ければそれは案外な巡査であッたり、これは乘るとすゝめかければ聞えぬ振で行過ぎられたり、いくたびも客を逃して仕舞ッた口惜しさのその處へ丁度また川向から風に乘ッて傳はる見せつけ貌の歌の聲。

耳をしばらく傾けて聞いて居てやがて澁紙のやうな顏をしかめながら車夫の中の一人、

「ちよッ…いめエましい奴們だ。いゝ氣ンなッてうぬ許りッ」。

「何さ？」一人が笑ッて問懸けました、相手の意味はわかッて居ながら猶問ふといふ體で。

「あれよ、人じらしな…くそッ、それでも直をきめる時にやア五錢ぢやア高エの何のと吐すだらう」。

「そりやア御前、客人の權：いや、さ、勝手だ」。
今一人の若い車夫が吻を入れました。
「なに勝手？　だから其奴們ア勝手な奴們だ。ひと面白くもねエ」。
藪に眞鍬の逆論法、牛は牛連れ、前の一人、
「勝手：客人ほど勝手なもなアねエぜ。な、おイ昨日だ、上野から目鏡まで馬車の値で行けッてエぢやねエか。な、おイ最う一錢と御決り文句を言ッたンだ。けれど剛情だ、肯かねエて。『上野から目鏡まで馬車の値は通相場だ』なンかンと、ヘン人力車夫さんぶッて諛詑ウ吐きやアがるから小憎らしいや。そこで己も斯うやッたのよ、な、おイ阿兄、氣味がよかッた。」
「ふウ」、微笑んで身を入込ませ、「どう？」
「あッはゝゝ：『ふウ：どう』ッ：御緣があらア。『人力車夫さんは馬ぢやアねエよ、馬車の値ぢやア行かねエからなア。けだものめエ』。かう遣付けてやッたのよ」。
「そンな奴も有るぜ、己が一度載せたなア妙齢の馬の糞だッたが、そのくせに、いや最うそのフータキー(利いた風)なことッてッたら、聞きねエ、道がわりイから增してやッて吳れろッてッてもふンと鼻：低ウい鼻であしらッて居やがッて：それもいゝが、わらかしちまふぜ、いゝ御抱車かなンぞのやうに見せかけやがッて西洋紙い何か紙屋へ寄ッて買やがッて、およそ一時間も間を取らせて：それで斯うだぜ、下りる時に己の手へ錢ヨウ渡すのを往來の人が見でもすると辻乘りと分解ると思やがッて、ふて〳〵しいッ、錢ヨウ車の上へ一寸置いて、其處にあると隠で知らせ、すウイと澄まして行くぢやアねエか。慈悲ぶけエ己樣だけれどこれにやア憎くなッて來て堪エられねエや。だから一番此方も惡に出て『もし〳〵姉さん、一錢足りやせんぜ』と大聲で決付けてやッたンだ。是には阿魔も閉口よ。ぼかりと顔を紅く爲やがッて：ふゝゝ：聞きねエ、震慄聲で：けれどもウ仕方が無エだらう：慌てて巾着から一錢出して四邊を見イ〳〵己へわたしてやッと歩き出しやアがッた。あはゝゝは」。
天地はわがために出來た物、宇宙は自分のために作られたものといふやうな大見識、他といふことは全く別物にして只自我をのみ胸にわだかまらせる一種の哲學者、はて車夫といへば卑しいでせう、貧民といへば下卑て聞えませう。けれど之を以て利己主義の哲理を履行ふものと言へば：しッ止めませうよ、不道德者から攻擊が來るかも知れませんから。
夥作二人の物語をば最前から、一寸口を出したばかりで後は默然として聞いて居る一番年の弱い車夫は此處でやうやく口を開きました。
「けれど御前、酒代を增させるといふなア一體不法な事ぢやア無いか」。
「御前―：はて比較上丁寧な言葉、「一體不法：不審：車夫に似合はぬ口前：
「なン：なッぜイ」。聲に力が入ッて居ます。
「なぜッて」、蹴込へ腰を礎と据ゑ、月を後にして居ますから顔は見えませんが、笑を帶びたといふやうな聲で、「制規外の：ッ：規定の外の賃錢を取るのが道理ぢや無からう。比へば、ねエ、此處から何處かまで五錢なら五錢で」：
「何だな、五錢：拳固と言ひねエ」。
「符帳でか？　符帳は元來暗號で、人に知られて嫌なことがあるから用ゐるンだ。何も商人の符帳ぢやア無し、車夫の直段を人に隠す理由があるまい。そンな物なら使はなくッてもいゝや」。
それでも素直な性質と見え、後二人の車夫どもも理を聞入れて一同に笑出しました。そこで若いのは更に語を繼ぎ、
「符帳の事はどうでも宜いとして、ま、何處かまで五錢で行くだらう、客と挽手と熟談の上、

さて直を決めて行くだらう。いゝか、そンならその途筋は、たとひ長いにも爲ろ、短いにも爲ろ、その客と挽手とには眞實五錢の價値のあるものだらう」。
「だッて遠いけりやア」‥
「まア、御待ち」、勢を入れて手眞似を加へ、「たとへばその途が一里あッて八錢の遠さは有るにもしろ、客と挽手とが兩方で承諾して五錢なら五錢、三錢なら三錢で行くと談判が付いたからにやアその途は其時だけ五錢なり三錢なりの價値があるわけだ」。
氣を更へて聲の調子を下げ、
「それを更に增を望むといふのはつまり詐欺すなはち虛僞を用ゐるわけだ。虛僞を用ゐて得た餘分の金錢を眺めたッて全體嬉しくは有るまいが。よし、何うでもそれぢやア心に恥かしい、良心に恥かしい。此許りの金錢で良心に恥づるよりは寧左樣で無い方が‥え、私やア左樣思ふが」。
鷄の群から抜出る鶴の毛並‥まだ若さうですのに。若いゆゑ「むかし床しい」とも言へません。が、何か子細がありさうです。
聞きは聞きましたが大聲は俚耳に入りません。
「そッ‥そりやア御前‥そンな人柄のいゝ事ッて‥酒代は儲物なんぢやア無エか。儲物」‥
「それだから惡い、酒代が儲物さ。けれど正當の」‥
「だッて客人の方から異れりやア」‥
「そりやア例外さ」。
一言するどい刀鋒には盲打の太刀筋も鈍りました。「うゝッウ‥だが」、はや相手から出る挨拶はまご〳〵し出して、この位の外は出て來ません。
「川風さむく千鳥啼く」‥それは歌の文句です。千鳥は眞逆啼きませんが、風は次第に力を加へて岸の枯葭をさわがせていとゞ其響で寒氣を餘處へ傳へます。つまらなくても話に紛れて居るうちは流石その響も耳に入りませんでしたが、さて今俄に話を止めてしまふと冬の夜の哀は骨身に浸徹ります。身の薄命、それを察してか、蠟燭も滴る蠟の涙に目瞬いて、提灯もそれを頭痛に病んでか、鉢卷をして薄暗く、否、浮立ッても見えません。人通りはいよ〳〵絕えて今は立明かす望も無ささうです。「あゝ寒ウいッ‥夜啼饂飩は來ないかなア」。欠伸しながら前の二人は問答して居ましたが、遂に思切ッたと見えて支度してそろ〳〵歸出しました。
歸掛けて二人は猶止まッて居る若いのに向ひ、「御前全體何處なんだ。なに本郷? え、本郷?」
聲に「駭いた」といふ意味が見えて居て、やがて売々曳出しながら、
「ぢやア好い鳥を引掛けて歸られねエぢやア‥なア」。
この言葉を聞いたか聞かなかッたか、若いのは返答も爲ません。その內に夥伴は既に遠ざかッて仕舞ひました。茫然‥何か思案がありさうです、今は早絃歌も絕えて燈光も消えた向河岸の家を心ありげに眺めて‥無論わづかに餘命に喘ぐ月影ですから正確には見えませんが‥しかし思入は十分にあらはれて居ます。
「功名利達ッ」、竊につぶやく聲が洩れて來ました、「薄命落魄‥功名利達‥此方は薄命の極度で對方はまた利達の最上‥利達、利達が羨ましくは無い。たゞ利達を得た‥兎に角利達を得た‥その功勞が羨ましい、な。と言ッて落魄もまた」‥
思ふに微笑したでせう、兩手を展々と上げて高く嘯き、
「己の落魄は利達を得るための落魄だから、つまり利達を孕んで居る落魄だから恥づるには當

らないて。あゝ、利達、その利達を得た功勞」…思籠んで物の香も耳には入らぬその處へいつか通行の人がありました。

「おイ、車夫」。

「はゝはイ」、さすがに駭いて返辭をたじ〳〵させ、「御やすく…御伴いたしませう。」

「本郷までやッて見れ…本郷元町まで」。

見れば客は…胸にきらつく金鎖…安くても、それ、百圓の收入…發失、好い客…ねだる心は無いにもしろ…

夜ゆゑ顏は分解りません。客が飛乘るや否や、蠟燭をつぎなほし、身づくろひして勇ましさらに駈出したその迅さ、いくたびも他の車を追越していつか萬世橋を渡ッて本郷元町の客の家へ着きましたのはほンの目瞬きをするほどの間で、客もその足の達者なのには感心した樣子です。なぜ？ 下りる時に斯う言ひました、「あゝ大層早かッた」…褒めた言葉は是だけですが、聲に何處やら餘情があります。

第二輛　曳出す素生の話

客は車を下りてやゝ門へ入らうとする途端、なよやかな笑聲を先に立てて丁度門を出て來たのは…月にすかして之を視れば…十七八の東髮二人です。

「阿梅か？」透し視て客は聲を掛けました。

「おや兄さん…御歸りなさッて」。その聲のやさしさ、うるはしさ、思はず車夫の眸子をして強くその本人の方へ向けさせます。

夜目でよくは分解らず、瞬く間でよくは見えませんが、この麗しい聲の持主は色白の圓顏です、さうらしく見えます。猶もよく見たらムいます。賃錢をまだ受取らぬを好い機會にして汗などを故意と隙取ッて拭ひながら偸むやうにしてその顏を觀察して居ると、先方では流石心注きません、たゞわづか夜を賴にして。けれど車夫のためには、惡らしい、それでも月を後に負ひ、兄の方へ近寄ッてさも昵しむといふ調子で、

「妾は、兄さん、このまゝ御暇いたしますよ」。

「いゝぢや無いか。御土産があるよ」。

「ほゝゝ」、頽れた聲で、「御土産？ 明日まゐッて、いたゞきませう。」

「宵越のものは、はゝゝ胃腑に…御前健全學をやらなかッたか？」

「いやなあ…兄さん、けれど遲くなりますから」。

應答はこの二人の間にあるばかりで今一人の束髮は些し後へ退ッてだまッて聞いて居る工合、是は下女に違ひありますまい。實に左樣、これは下女で、その證據は別れる際にこの挨拶がありました。

「明日また御出でよ、御前も、え、雪」。

「雪」と名の呼捨、「ありが」と腰を屈めての返答、これが下女でなくて何でせう。

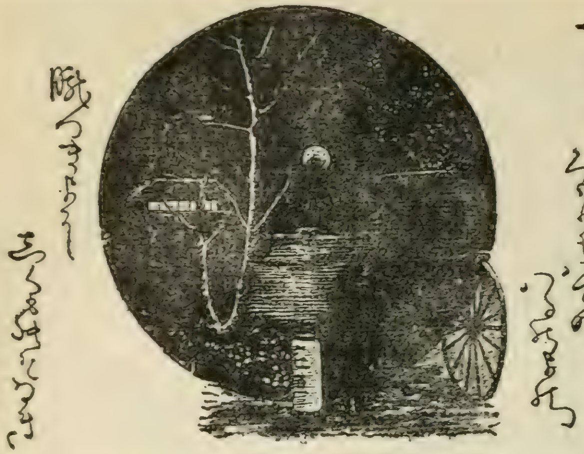
「左樣なら、兄さん」といふ滑な聲、「あした、また」と返す人造の山彥。束髮は車夫に目も掛けず、二人揃ッて…はて何處か行先が知りたい…歸ッて行きます。やがて客は家へ入ッて、しばらくして下女に吩附け勞力賃として些多過ぎた賃錢を渡させました。が、今は、ことに今は、どうしたことか、車夫の心は一層金錢の方には薄くなッて居ます。と言ッて多過ぎると言ッて辭退するのでもありません。全體の氣象に從へば此處では辭退しさうな質です。が、今日ばかりは左樣でありません。茫然として錢を受取り數へもせずに懷中へ收めました。

不審、なほ用事でもあるやうです、錢を受取ッても容易に車を曳いて立去りません。あるひはそのやさしい聲に撲たれて…いや、元來考深い質です。

十時を撞出す上野の鐘、いつか月になりゆく

雪氣の空。「たしか阿梅とか言ッた」‥その梅の梅の芳香、前の朧夜の名殘を止めた空の片端もなか〳〵に千里の「てりもせず」の歌をさへ思出させる種です。

一てりもせず、くもりも果てぬ春の夜の」、いやさ、冬の夜でも搆はない‥何處か中庸を得たところがやッぱり美しいものだなア」。



（原本插畫）

さて何が中庸を得て居るか、朧月夜ですか、梅ですか、いやさ、その阿梅ですか‥

＊　＊　＊　＊　＊

この車夫となッて居る若者はなか〳〵變な人間で、その口調を聞けば車夫とは見えず、それで境界を言へば紛れも無い車夫で、而も力もあり、また熟練もあります。熟練、それを言易へれば氣轉が加はッた久しい歲月です。他の車を恐れて片隅を小さくなッて行ッたり、鐵道馬車の軌道に輪を挾んで當惑したり、車重を急にして乘客の臍を天に向かせたり、その手を放して客に大道輕業をさせたり、または四通八達の處へ掛ると急に遲く步いたりするやうな不出來のないのは無論の事、道の高低は手先一つ腕一つでどうやら斯うやら目立たないほどに曳くほどです。して見ると久しいあひだ此職業をして居てそして學問をしたのでせうか？　どうも左樣とも思はれません。が、やはり見當は大抵その邊です（これが小說家の胡麻化し手段）。素生を聞けば何も論は無いのです。

この若者はやはり名も車と似通ッて居る來間力造といふ者で、この時年齡は二十四とか、東山道の出生です。東北の製造かも知れません、はじめは聲も鼻へ拔けたらしちムいます。今は拔ける體は更にありませんが、東京邊で「は」と用ゐる處へ「が」と用ゐ、また「が」とつかふ處へ「は」とつかふ語癖があッて、すなはち「義經は賴朝の弟だ」といふのをわざ〳〵「義經が賴朝の弟だ」と言ひます。言語の調子のわるいのは早く直るものですが、語法の違ッて居るのは中々なほらぬものですから、自然この力造が猶この變體をもッて居るのも仕方ありません。が、とにかく、それ一つでその身が東北うまれだと知れます。

その外に鮭が好き、大口魚が好き、胡桃が好き、騎馬が好き、そしてまた寒氣には恐れぬ工合、要するに氷すべりの遊戲に筋骨を鍛えさせたやうです。

顏はいはゆる瘦形で、色が淺黑い中に桃色を帶びて居る有樣、健康の度を測る尺度があらはれて居ます。どのやうな活計をして居たのか、兎に角骨の關節も松の瘤のやうに固まッて、そのくせ一體の發育もかよわくは有りません。是と言ッて事々しく述立てるほどの顏形でもありませんが、しかし一言「するどい」と形容すれば不完全ながらまづ形容が出來て居ます。

性質、それがこの力造には固有の一派卒なものになッて居ます。第一、冒險といふほどでも

ありませんか、兎角人の出來ぬ事は爲て成功に誇りたいと思ツて居る性質です。時に、それゆゑ奇を好むといふ體裁の事を爲ることもあります。また、それゆゑ、一つは少年の血氣に驅られて名を貪ることもあります。これはその性質が惡く轉じた方の側ですが、またその好く向いた方の側には非常に貴い、すなはちいはゆる「敢爲」などといふやうな趣があります。

人の出來ぬことは爲るといふ性質ですから、自然人と違ツた説のみを立てることも有ツて、交際は元來下手でも無いものが時には相手の心を損ずることも有ります。それで多くは本人も得意です。間得意でもないこともありますが、しかし本人の血氣はむしろ其處へ吻を容れて多く得意に爲せて居ます。

前回他の車夫どもと會話して居る處を聞けば不十分ながら普通の學問はした體です。普通の學問は有り、それで何故人力車を曳いて居るのですか。其處です、其處に一派かはツたところが有るのです。

親は富むといふほどでもありませんが、また其の日暮の貧乏でもありません。ちとばかりは公債證書もあツて下女も一人ほどは使ツて居るさうです。それでこの力造はその實子です、繼子でもありません。その癖になぜ車など曳くのでせう。あるひは放蕩でも爲たのですか。否、決してそンな事もありません。

力造が小さいときは惡戯をして親たちも持餘したことは毎度で、特に親たちが困ツたのは力造が非理の恐嚇を肯かぬことです。幽靈や、狸、乃至巡査ぐらゐのことで威しても平氣です。「そンな事を言ふと幽靈が出るよ」。「幽靈なんざア有るもンぢや無い」。一句で相手を潰して仕舞ひます。「そンなに泣くと狸にやるよ」。「狸は高が毛獸だ」。挨拶はこれです。「ぢやア巡査さんへ渡すよ」。「巡査さんは説諭するだけだ」。十二三頃から氣象は全でこれです。「はて圖太い‥どうせ好いものにやア爲れまい」と近所では爪彈きして居ました。が、それでも親の身になれば運命を却ツて太閤のをさない時に思寄せて、持餘すと同時にまた心竊によろこんで居ます。自然、それゆゑ力造も磊落に、活潑に世を送り、束縛といふものや、壓制といふものは夢の夢にも知らぬやうに爲り、その極つひに前言ふやうな人間と爲ツたのです。が、感心なのは容易に腹を立たないことです。「怒る者は常の情。笑ふ者は測るべからず」とは支那の誰やらの言葉です。力造の度量の大きさ、決して一度も腹を立ツた體を見せません。英國の牛董はつひぞ怒ツたことが無いとて朋友中にも賞美されましたが、それは牛董の常の性質が言はゞまづやさしい方で怒るといふ方には向き易くない處からいくらかその邊も有ツたのです。が、牛董とは全で違ツて、すこし荒い方に近い性質のものが何うしてまた怒ることが無かツたのでせうか。否、無くもありませんが、怒ツた體を見せなかツたのでせうか。それを思へば力造の量の廣さは中々馬鹿には出來ません。

どうかして東京へ留學したいと、故郷に居るとき力造は二親に願ひますと、二親もあツぱれ行末望のある我子のことゆゑ、無論承知はしましたが、しかしまた困ツたのは力造が親の金錢を當にせぬことです。學資はいくら贈らうかと親の方から相談をしかけても更に取合ふ體もありません。東京へ留學するといふ事が決まツてから以來、毎日親子が押問答して居るばかりです。

「御前、そりやア分解らないぢや無いか、どうしてたゞ東京へ出たばかりで稼いだり學んだりすることが出來るものか」。

「いや、それは中々やりにくうございませう。やりにくいには相違ありますまい。が、しかし

親の學資をあてにして、しかも不手際にそれを使ふのが今の書生の大抵な有りさまでせう。それ、それゆゑ」‥

「だからそれを不手際に役ひさへしなけりやア論は無からう」。

「いや、しかし、己に克つといふことが容易な事ではありません。さう思ッて居ても、其處が人間、なか／＼容易に」‥

「おやアどうして御前は東京で身を過ぐす氣か」。

「人のもツとも爲難いことを爲て」。

「學僕か」。

「いゝえ」。

「安教師か」。

「そンな物なンぞ」‥

「そンなら何だ、外にもウ無いちや無いか」。

「あります」。

「何が」。

「人力車夫が」。

如何なことでも人力車夫とは‥親が駭いたのも尤です。暫時は呆れて言葉もありません。

あまりのことに父親さへ眼をうるませたほどで、無論母親も涙は瀧のやうで、それで、あゝ何と言ッたら宜うムいませう、その親の慈悲を思へば力造も身が千切れるやうで、左樣かとて俠の一癖はまだ肱を張ッて居て‥是もおなじ涙をわかッて雙の袂を絞りながらさて言出した事を引くことも爲ません。

「左樣仰やられると當惑しますが」、おど／＼して僅に腕を撫で、「一つ苦辛を爲ないでは‥このとほり筋骨も丈夫で‥太閤だッて貴親‥そのかはり」‥

後は口端がぴく／＼して涙が目です。

「末にやア」‥

この一句は鼻を啜る親たちの聲に搔消されて仕舞ひました。

あゝ、親を頼とせぬ子に限ッてまた親と親昵の薄いのは一體の世の常ですのに、この力造ばかりは、恒は中々氣象があッてそれで親の涙の露を受ければさながら花のやうに孱弱い處女のごとく、極したしく、極愛らしく、そして極あどけなくなる有りさま、兎に角羨はしい人物です。

どうか斯うか、それから遂に心を押徹して遂に上京して夜は人力車を曳いて居るのです。ことし二十四。美い體です。直を厭はず曳きますから、それ屋の木も實の一粒、毎夜得るところの賃錢は平均五六十錢ださうです。が、前回見えた乘客、これが是から此力造と妙な關係になッて來るのです。畢竟その後‥はて今の處、平生は厚く禮を述べて賃錢を受取るものが茫然として居たその仔細は。言はずと大抵御察しでせうが、猶其處にまた一寸意外なことがあります。

附言。親子應答の處は地方語と爲るのが至當ですが、大した關係のことでもありませんゆゑ、すべて東京語を用ゐさせました。

第三編　曳出す漏聞の話

わるく言へば封建の名殘で官途へ足を入れるのを榮譽とする卑屈の世の中、よく言へば古學の筋を引いて政治思想の發達して居る日本國、府下にある私立の五大法律學校はいづれも校堂の築増をいそぐばかり、之によッて之を思へば地方の學術研究會その學術といふ言語の中には政治法律の二科目より外は含まぬのも至當な譯、誰やらの唱道で折角芽を出しかゝッた理學さへ既に名儀を處生利學とか、書生利學とかあらためて仕舞ひました。いや、も、これが‥否、歎かはしくは有りません、實に帝國議會も一寸先です。それでなければいけますまい。あゝ能くも政治思想が是ほどに發達したものです。

これも或る私立法律學校の一間で、遲刻の敎師を待ツて居る五六人の書生が居ます。いづれもオースチンを從者につれてピットに靴を磨かせようといふ人物でせう、今はこの敎場でも職務をわすれず、しきりに辯論して居ますが、しかし經驗のため書物の外の題、すなはち美人の事を種として討論をして居ます。

イ「横町の、なア若貴婦人さ、學校でも評判の才女ぢやといふ事ぢや」。

ロ「また始まツた。そンなに君が贔屓したツて公事を頼みには來ンからまア安心して居たまへッ」。

イ「來ンけりやア安心出來んぢや無いか」。

ハ「はゝゝ、眞面目になるから愈々妙だ」。

第三の「ハ」は考へて居ましたが時計を眺め、

ハ「おや、もウ二十分だ。杉田め(敎師の名)、いつでも／＼懶惰るなア。遲刻するくらゐなら寧休んで仕舞ふがいゝ」。

ロ「どうも杉田の面を見ると講義聞かん內から嫌になるな。變てこに澄まして、な：洋行がへりはあれだからいかん、唾の爲様まで西洋人の眞似して」。

イ「シスター(妹)が有るさうぢやの」。

ロ「ある、一人。そのシスターが妙なンだ」。

ハ「なにか、ビウテイ(美人)か」。

ロ「まア聞け、斯うだ」。

語掛けて不圖思注いたやうで身の前後をふりかへる、その眼は暫時の間何處へ向けようかと白癡が吹矢でも吹くやうに彷徨いて居ましたが、遂に身の側で一心に是からの課目の私犯法を讀んで居る一人の書生へと集まりました。直に「ロ」の口は微笑を帶び、またその手はその書生の肩へたちまちどんと當り、

ロ「いや、聖人、なぜ君も聞かんのか。僕が話す：さア宜いか」。

鐵砲でも放つやうな無駄口、邪魔だといふ體でその書生は髪を右の手で掻上げて眉を顰め、

「何だ」。

一言言ツたばかり決然と爲ツて相手の答を睨むやうにして居る有様、巢雛を狙ふ大蛇のやうです。

ロ「左様まじめだから困る。杉田のシスターさ」。

「シスターが何う爲た」。

ロ「まア聞け。面白い」。

「必要な事なら聞くが」、冷笑を眼へ浮ばせ、「大方やッぱり詰るまい」。

磐石のやうに屹として動かぬ鹽梅、言はずと是が前回にも見えた車夫(夜ばかりの)の來間力造です。夜と違ツて晝間は純粋の書生風、凄いほど剛毅な體を現はして、而も例の癖の「人に殊なる」といふ處をば一寸した言葉にでもしめして居ます。餘の書生等は呆れた風です。

ロ「はじまツた、また例の偏屈が。そンな事を言ツたとて今に吾儕の話の方へ君の鼓膜は忠義を盡くして、はゝゝ讀んだとて字が見えるものか」。

イ「話さう、聞からの契約が全で成立たんから仕様が無いわイ」。

ハ「が、自然にその契約が今に出來るに違無い」。

大鵬の傍で囀る燕雀の諸聲、耳には些しも入れぬ體です、殆ど動じぬありさまです。他の書生等は均しく言葉を開き、

イ「さア、シスターがどうしたか」。

ロ「つまらぬ障碍で辯論が中止されたわ」。

催促に應じる「ロ」は請に應じて演壇に登る辯士のやうです、脣を舐めて、ふンと鼻が塞ツて居るか居ぬかを試み、

ロ「妙な婦人も有るもンだ、杉田のシスターは、なア、十七か十八だらう、色は白い、が、どうも美くない、な」。

イ「さうか、兄には似ぬ、な」。

ロ「似て居る。が、白いばかりだ。たゞ目と眉は非常に好い。其他は皆いかん。ことに口などは‥いや大きイぞ」。

ハ「はゝア目と眉だけは好いか」。

イ「それ許り好くッても仕方は無いわ。目と眉ばかり食へは爲ん」。

ロ「しかし、才女ださうだ。他に負けるのが嫌ださうだ」。

不思議です、「才女」といふ言語の下から「他に負けるのが嫌だ」といふ句が出るや否や、力造の注意はつひに遠方へ引取られました。餘の三人はそれとも知りません。

ロ「だが、どうも己には左樣見えん、な。非常に大人しく見えるが‥他に負けるのが嫌だといふのは譃かも知れん」。

イ「ならば何う判決を與へるか」。

ハ「擬律の錯誤は閉口だて」。

語遊むのを傍で聞いて居る來間力造、案外に最初の擯斥は見事根を奪はれて仕舞ひました。「他に負けるのが嫌だ」といふ形容が強く力造の心には感じます。今は注意は書物の方にありません。亦、無情にも餘の書生たちは更に話の方角をあらためて今度は他の事を話して居ます。

聞糺す譯にも行かず、そこで眼をば書物の上に注ぎながらそろ〳〵物思をはじめ掛けました。

「他に負けるのが嫌？ 感心だなア。杉田の妹‥名は何と言ふか知らん。杉田の妹‥あンまり美くは無いとか。美しいのを好むのが世間の常、美しくないのを行末妻にするのも隨分かはッて妙だなア」。

婦人の事を一度考へ出せば直に先夜本郷元町まで乘ッて行ッた客の妹の阿梅の事にも思想は聯絡して行きます。

「あの阿梅とか言ッた處女、あれは只うつくしい許りでありさうに見えたンだが、まづ杉田と杉田の妹とはざッと、まア、あンな樣な關係なのだらう」。

見ぬものを推測するには必ず腦へまづ一度見たことのある似寄の物を呼起して想像をつくる物です。

「いくら婦人だッて柔弱でばかり有ッてはいけない。杉田の妹は負けるのが嫌で、そしてまた大人しく見えるとか、‥どうも美い氣象の婦人らしいなア」。

美い婦人だらうと推測すると同時に兄の方へも考を寄せて來ます。

「杉田は私犯法を斯うして毎日教へて居るが、一體蟲の好かぬ男だ、變に輕噪で、柔弱で、それであの妹にそンな淑徳のある者が居るか知らん。そりやア居るかも知れない。が、假に行末その婦人を妻に爲る事が有ッたら‥いや杉田が蟲の好かぬ男のやうに見えるのは此眼の間違か知らん」。

まづ愛するもので標準をつければ、それにつながる者までが憎くなくなッて來るのは吾人の心のかよわさです。坊主につらなる袈裟、例は反對ですが、理は同じです。

力造のやうな磊落なものが、斯う妙な生めいた考を起すのは宛然冬草の中に牡丹が咲いたやうで、ちと反映はわるさうですが、しかし氣象といふ敵には武者も心を燥かします。力造は磊落な性質です。淺はかな色艷の美しさは更に勢力がありません。たゞ、しかし氣象といふ一種無形、すなはち理想に近いものの美しさ、それは却ッて力を有ッて居ます。なる程力造も人間です。人の美は力造にも美です。先夜阿梅を見て恍惚としたのは朧の美に撲たれたのです。が、肉體の美ですから深い痕をば心に留めませんでした。たゞその時から暫時は「あゝ美しい」と思ッてやがてその左樣思ッた熱は時間と共に

いつか消失せて仕舞ひましたが、根が考深い性質、今更に不平自分の理想にある「負けるのが嫌」といふことを仄めかされては終に思はずには居られなくなツて來ました。

左樣爲ると傍の書生たちからその話の續を聞きたく爲ります。どうかしてその話が再始まるやうにと望みましたが、さて改まツて聞出す譯には行きません。やうやくに一策を案じ出してそれと無くまづ杉田の宿處を尋出しました。

「此間の試驗が」、遠攻に兵を繰寄せ、「僕がちといけなかツた、此間の杉田の試驗が」。

まづ意中を見られぬため故さらに杉田をこなし、

「彼奴元來六かしい事を出していけないが、今度の僕の點が惡さうだから往ツて賴んで殖やして貰はないぢやア」・・

「いや、是は」、「ロ」が振返り、「勉强家がやりそこなツた程だもの・・全體杉田の題がわるい」。

「僕もやりそこなうたが」、「イ」が口を挾み、「無理は無いのぢやな。しかし杉田は何うしてもいかんなア。この前の月瀨は平生難くして試驗に易くしたから宜かツたが」。

無情にも會話は橫の方へ外れて仕舞ひました。が、そのまゝでは居られません。

「おイ、杉田の家は何處か」。決然と言ひます。

「なに、家？ 往ツて賴んでも無駄だ」。

「無駄でもいゝ。 家は何處だ」。 はや熱心はあらはれて居ます。

新に峯の果實を認めた猿、はかない一枝をでも手便と思ひます。が、目的にした宿は多く無いもので、待望んだ人は必しも來ないものです。殊に手便と思込んだ一枝も、索めようと思へば思ふほど折れてしまツて滿足は得られません。今は力造もいまいましく爲ツて來ました。忍難ねてほとんど陽に意中を話の題に出します。

「杉田は何歲かな」。

火は御倉に近付きます。

「左樣さ、二十七八ぢやらう。細君は若いぞ」。

細君！ 有難い、婦人が話に出て來ました。けれど出て來たといふだけです。それからその「細君」を一轉して杉田の妹の方へ向ける事はまだ何うしても出來ません。

「細君？ 若い？ 才女か」。

「才女か、どうかそれは知らん。が、美人ぢや。杉田は幸福ぢやて」。

「なに、幸福？ なぜ」。例の癖は出て來ました。

「幸福ぢやないか、美人を細君にして」。

「美人を細君にすればなぜ幸福だ」。

「はゝ、また始まツた、君の癖が。 君は幸福ぢや無いと思ふか」。

「無いと思ふ、な。また左樣ぢや無いか、才女でも無ければ」。

「だれが、」相手の聲は調子が高くなり、「才女で無いと言うた。それは君の推測ぢや。よし、兎に角、君は美人を好まんか」。

平常から力造が一派かはツて居るのを憎らしく思ツて居た矢先ゆゑ、言語尻を押へて嚴しく爲ツて掛ります。今は力造も何うして一歩でも退けませう。張合になツて來ました。

「好まんとも、」心では强ち左樣とのみは思ツて居ぬながら猶その體をあらはさず、「むしろ醜婦の方が宜い」。

「むしろとは曖昧ぢや。斷然と言へ」。

「斷然と言はう。醜婦の方が實に宜い」。

「はゝ、剛情だなア君も。君のやうな男は、そンなら、杉田のシスター（妹）を細君にするがいゝ」。

この一言は待望んだ正鵠です。意外に意中の事を聞いては胸も烈しく鳴出します。敢て出ません、返答も。シスターといふ言語ばかりが腦

で競馬をして居ます。

辯論は是で終りましたが、さていよ〳〵今に爲ると、(妙な張合です)力造も見ぬ戀にあこがれて來て、それと一途に今迄よくも思はなかッた杉田をさへ好く思ふやうに爲ッて來ました。私犯法、それは杉田が敎へるのですが、この一條から力造も私犯法をば尙一層力を籠めて修めるやうになりました。それにその杉田の妹は法律家の兄を有ッて居るからには自然法律をも幾分か知ッて居るだらう、左樣すればまた法律家をも好むだらう、左樣なら假に行末萬一の幸でその婦人を妻にする曉にも尙々自身も法律に通じて居ないではいけないとまで思込みます。むしろ、今の處世にいはゆる愛の心は力造の進取の氣をはげましました。を柔弱にしませんでした。

第四輛　曳出す子供の話

前の學校に出て居る力造を夜車を曳く力造と比較して御覽なさい、いはゆるその性質の特別なところを除くの外、何處に類似がありませう。ですから同級の書生どもでも力造の夜のありさまを知るものは一人も有りません。時としてその諸生どもも力造の居る下宿へ尋ねて行くことも有りますが、夜は毎でも不在ですから、次日學校でその由を言ふと力造は笑ッて居るばかりですから自然また終には朋友も音信れぬやうに爲ります。

力造が車を曳くのを薄々知ッて居るのはたゞ下宿屋の主人ばかりです。が、力造は之にさへ十分その事を隱して居るつもりで、主人が知ッて居ようとは夢の夢にも知りません。いつも夜になると夜學に行くと言ッて下宿をば立出で(書物か雜誌をもッて)ますから最初の内は主人も實に夜學だと思ッて居ましたが、不圖何處からか力造が車を曳くといふ事を聞きましたので非常に驚きました。平生の力造の品行の良さ、下宿料の支拂の綺麗さ、その邊では力造が車を曳くなどとは迚も思ひませんが、しかし幾分か推察が固まッたのは力造が夜十時に歸る事もあり、あるひは一時二時ごろにさへ歸ることも有るのです。また時に外泊することもあります。けれど尋常のものならその外泊は花柳の巷か何かだらうかとも思ひますが、力造の平常の品行上そンな形迹は決して見えませんから實はそれらこれら主人も妙に思ッて居たその矢先、力造は車を曳くと聞きましたゆゑ可なりその說を信ずると同時にいよ〳〵力造を尊く思ッて來て次第に取扱ひ丁寧になッて行きます。これには力造も譯がわかりません。主人も流石に力造に向ッて車を曳くかとも尋ねられません(たとひ心には下宿料を安くしてやりたいと思ッて居ても)。

この下宿屋は本鄕弓町にあッて力造はいつでも夜宿を立出でる時には書生風で、それから人に悟られぬため芝邊八丁堀邊などへ出掛け、そこにある馴染の車宿で服をあらため、さて車夫となるのです。が、雜誌や書物は始終携へて間があれば讀むことが多くあります。その志の殊勝さには車宿の親方さへ感服して齒代を安くさせたほどです。

前回學校で朋友と一寸言合ッたのち五六日です、やはり其日も晝間學校へ行ッて、それから夜車を曳きに牛込邊の車宿へ出掛け、暫時其處で持ッて來た法律雜誌を讀んで居る内に直傍の近處の家から賴まれました。丁度其處には力造の外たれも居ませんでしたから直に身支度をし、見掛けた本をば何心なく車の隅へ置いて直に賴まれた家へ車を持ッて行きました。

月は今夜は有りませんが、まだ暮れたばかりですから人顏も朧ながら見えます。風は例のとほり身を瞼にするやうです。大地は灰色に凝

固まツてさば〳〵と乾燥果て、今凍る支度を急いで居る霜解がわづかに水氣を見せて居ます。兩側は町家で四五軒は夜店を張ツて居ますが大抵は戸を下して居ます。二間間口の一間は揚戸で仕切り、その揚戸の上を一面障子にして其處へ筆太に「油」と書き、猶大きな黒い蠟燭が「正銘いとじん」といふ六字の銘を胸にして居る油屋の看板の工合も何處やら凄味を帶びて居るやうで。また牛乳入見たやうな鐵葉製の手ランプに殺風景な絲眞を入れて風に吹かせながら店の蜜柑や乾栗を隱現出沒させて居る水菓子屋の樣も何となく「あれさびた」と名唱掛けるやうです。鮪の廢肉か、鱈の切落しか、ぽた〳〵と水の垂れる竹皮包を熊鷹のやうな右の手へ掴み、我樂多道具屋の糶賣にも落第したらしい古肩掛に首を潛らせながら縮んで家へ歸る日雇取りの老爺のありさま。あるひは又樫齒の下駄をかち〳〵と彈かせながら、鉦太鼓で尋ねるほど些〳〵ばかりのアサリの剝身を孤城落日の目籠の中へ入れ、右の手をば水鼻を手繰捨てる役につかツて行く老母の體、すべて見るものとして「淋しさ」の固まりで無いものはありません。無論自然の景、言ふだけ氣が利きません。自然の景のあれさびて居る處にあれさびぬ人造の景は少いものです。

賴まれて行ツて見ると賴んだ家は格子戸づくりの二階家で、先代には御神燈でも釣下げたらしい花車な家です。「へイ車がまゐりました」。音信れて待ツて居る内に出て來たのは十七前後の女生徒風の處女です。この處女が乘ツて歸ることゝ見えて、それを送ツて出て來た主婦と見える女が力造に向ひ本鄕眞砂町までやツてくれろと命じました。

本鄕眞砂町…どうも本鄕にのみ緣が多くあります。歸車に爲ツて都合は宜さゝうですが、時はまだ宵の程、猶稼がなくてはならぬものを…けれど客は逃がせません。承知しましたと挨拶してその處女が乘移るまで待ツて居て不圖顏を見ると…

顏を見ると前夜見た阿梅に似て居たか。などと此處では看客も御たづねなさいませう。が、決して左樣でもありません。前夜見た時にも顏形まではわかりませんものを。

顏を見て力造が不審を抱いたのはその處女が憂顏をして居る事です。そればかりか送ツて出て來た主婦の顏にも同樣な雲がたなびいて居ます。そればかりか二人の間にも應答が活潑ではありません。「はて、不審、何か子細がありさうだ」。考深い力造の心はいゝ餌を得て頭を揚げます。

が、そのまゝで曳出しました。折々風の工合でぷンと來る香水のかをり…(決して白粉のではありません)、何か處女の身の動くたびに快く鳴く衣服の聲…察するに美人らしうございます。

曳出してやゝ薄淋しい矢來町の邊へさしかゝると早日はたツぷり暮切ツて提燈の光のみ目立つやうになり、遠近の杜や立木が傘のやうに見えたり、化物のやうに見えたり、殊に領元へは冷たい風がその生木をも裂く手を差入れて次第に夜の凄味を增して來ました。車の上でも無言です。車の下でも無言です。が、無言だけに兩方には各々かくれた物思が頻に枝葉を張ツて居ます。處女の方の物思、それは詳しく言ふと天機が洩れます。たゞ「この車は宿ぐるまだから」…これでいくらか安心して居ます。力造の方の物思、それは種々雜多です。たゞ「今に己もこンな細君を持ツて斯う車へ乘らせて」…これで我身で我身を嘲ツて一人で微笑して居ます。

處へ何か小兒の泣聲がします。泣聲も泣聲、火の付いたやうな泣聲です。車夫も耳をそばだ

てる、處女も心を其處へ向ける：「いや何か：お〻寒い」。
何だか凄うムいます。凄いと思へば思ふほどいよ〳〵心持が妙になります。物も見えぬ暗闇へ無心で立ッて御覽なさい、次第に精神は身體を脱けて身は無何有の郷へ轉居したとも思はれるものです、この世界といふ考が何うか變に消えて行くやうになるものです。車夫も處女もそれゆゑ凄いやうで其樣でも無いやうで、また何か可哀想のやうで可哀想でないやうで：その極はいつかその聲のする方へ一先行ッて見ることとなりました。
見ると如何にも小兒です。年齡は六七歳ぐらゐ：いや左樣思ふと同時に車夫は吃驚、聲を出しました。――
「おや、喜代ちやん」。
言ッて駈寄れば、さア變です、處女の方も同樣で、
「まッ、喜代ちやん：まア御前は」。
子供は一際調子を張上げて泣出した、その聲も耳に入らぬほどです、力造と處女との驚愕は。
「御前、この兒を知ッてるの？」不審貌で處女は尋ねます。
「はイ、貴娘も御存じなンですか」。
「あ〻妾も：御存じどころか極したしい」：

第五輌　曳出す痛心の話

「喜代ちやん、どうして、まア、御前はこンな處へ：夜：さみしい」。
言ッて處女は女の子の側へ寄り、手早くハンケチを出してその涙を拭ッてやれは、力造もすかさず提灯をさしつけて居ます。
「え、喜代ちやん、一人？誰かと一途に來たのかえ」。
處女が問尋ねても女の子はうれしさに撲たれて中々容易に返事が出ませんでしたが、その内に吸泣と噏交ぜて一言一言。
「家へ歸るンだよウ。太ちやんは何處かへ行ッちまッて」：
薄々察すれば友だちとでもつれだッて來たまま迷兒に爲ッて仕舞ッたやうです。兎に角處女は自分の知人の家の子と思へば直につれかへる事と決心しましたが、さて意外なのは力造がまたその女の子を知ッて居ることです。
「この子の家、御前知ッてるの？」
尋ねられては力造も猶豫しません。
「はイ」。
とは言掛けましたが困ッたことにはその女の子は力造の下宿して居る家の子なのです。「知ッて居る」と答へれば勢直にその子を下宿屋へ届けずには居られず、さうなれば自分が人力車をひくことが直に下宿屋の主人に知れる譯です。これには力造も吐胸をつきました。「知ッて居ると言はうか知らん。すると是非送届けろと言はれるだらう。知らないと言はうか知らん。でも、何だか前の言葉を食むやうだ。よし、さうして知らないと言切ッたにもしろ、やッぱり序だからと言ッて誰かその車へ女の子と一途に乗ッて下宿屋へ行かうと言ふだらう。はて言はないのがい〻か知らん、言ふのがい〻か知らん」。
當惑して思はず返辭をさしひかへて居ると處女は屹と怪しみます。
「え、御前、家を知」：、直に略して女の子をふりむき、「喜代ちやんや、もう宜いよ泣かないでも、姉さんが是から直つれて行ッてあげるから。い〻よ。さアこの車へ：い〻ッてば泣かないでも」。
言ッてや〻助けて車へ阿喜代を乘せましたが、また考へればはじめ女の子を認めて第一に「喜代ちやん」と呼掛けたのは力造でした。處女

も其處を考出せばさすがに力造が譃を言ッたのでもあるまいと思直し、更にまた車へ乘移りながら阿喜代に向ひ、この車夫をば知ッて居るかと尋ねました。が、この問は力造には霹靂のやうです。困りました、呼吸もつけぬほどです。さすがに阿喜代も平常の力造に似て居るやうな車夫だとも思ひましたが、さてまた案外な身粧ですから今猶誰かと察しかねて居ました。察しかねたのでも有りません、察しは察してもたしかに來間力造とは思ひません。更に見定めようと凝らす眸目、その眸目は力造には砲發の晃きのやうです。

「家の、ねエ」、遂に阿喜代も訝りながら、「來間さんに似て居るよ」。

あら無情‥言はずともの事を。力造の胸のとゞろき‥當惑して、急に搔消さうと聲に力を入れ、

「む‥まさご町でございましたッけね」。酷く大きな聲でしたが、しかし今の處他にほどこす手段はありません。

—あら、ま、何だ、ね、びッくりしたわ」。處女もいま〳〵しく一聲たかく言ひましたが、しかし跡は「をかしな人力車夫だ」と言ふ言葉をひとり口で嚙殺して居ます。

直に車を曳出しましたが、如何にも今の始末が力造にはまた心配に爲ッて來てたまりません。すこし耳に入る風の音、それさへ車の上の囁きかと疑はれて思はず心を後につけます。

曳いて行くのもほとんど夢中のやうで、聞けば車の上でも何かひそ〳〵話して居る樣子、あるひは我身をあやしんで左樣言ッて居るのかとも思はれて些しも心がやすまりません。—何、うたがはれたとて構はない、どうせ通掛りの客だものを」。一度は斯う思ッてもまた色々氣に掛ける、考深い性質の男ゆゑ、更に何處かいさぎよく無くも思はれます。どう思ッて居るだらう、斯う思ッて居るだらう、あゝ思ッて居るだらう、左樣思ッて居るだらう、これだけの思案がしば〳〵往復して居るばかりです。

牛込の矢來町から本郷眞砂町へ行くには近道は弓町をとほる事です。が、それです、さうして弓町を通ッてしまへば、そら、直にその阿喜代の下宿屋へ送届けるやうに爲ります。それ故、今は奮發しました。遠道をまはッてまづ本郷眞砂町へかゝり、その跡は病氣だとか言立てて御免をかうむらうと決心しました。それほどに決心したものなら、今でも病氣と言立てて濟むわけです。が、客の方ではどう思ッて居るだらうと恐ろしく心配しますゆゑ、さすがまた今斷然振捨てるわけにも行きません。

遠道をまはッて薄淋しい處を通ればまた一層の心配が涌いて來ました。「先刻から怪しんで居たやうで、それで斯う淋しい處を掛るのを見れば嘸乾度」‥思はず知らずふりかへる（何の用にも立ちませんのに）、その姿を見れば處女もまた案に違はず、何だか疑はしくなッて來て、娘氣に、氣味わるさに、恐さに、さみしさに胸はすこしづつ動悸をはじめて來ました。間違ふときには不思議に間違ッて來るものです。

が、もとより力造には何の野心もありませんから竟に心配が心配を載せて曳いて居るうちにいつか眞砂町へは來ました。「あイ其處だ‥其處、其處の家だよ」。はげしく言ふのでもわかります、處女がもはや車夫を疎んじて居ることは。それでも一體力造は困ります。どこやら身をうしろめたく他に思はせたのですから。が、しかし此分なら阿喜代をおくりとゞけろと言ひは爲ますまい。何方かと言へばそれだけまづ有難いです。

處女と阿喜代とは直に車から下りました。その途端‥此處が人情の變なところで‥うしろめたく思ひながら、また左樣思へば思ふほど〳〵見る

氣は無くて）提灯の火影ながらも屹と目を處女の顔にとめると、頭巾に半分つゝまれては居ますが、しかしその溢れるばかりの情を含んだ目元のうるはしさ！

賃錢をば受取ツてやゝ支度して歸りは歸りましたが、兎角心持が變です。我知らずよくその家に氣を注け、何の思慮は有りませんが、あした晝間其處の前をとほツて標札でも見ようと思ツて居ます。何のためにその氣が出たか、それは力造にもわかりません。まだ作者も言ひますまい。

第六輛　曳出す雜誌の話

およそ八疊敷の一間、そこが此家の家族の常の居間です。床柱はありふれた雌松で、何かわからぬ、たゞし値も無ささうな違棚を霞にして、地震の痕を見せる壁のヒヾが連山の形を見せて居る工合、新築の家とは如何な素人でも思ひますまい。地袋は塗箱で何か書いてありますが、手擦の處はまるで擦剝けて按摩膏でも貼りたいやうで、その下にすゑてある長火鉢は素人家の物とは思はれぬほど大きくて、立派な如輪のふき込です。これでは錢も落しだらうとは時々來て道具屋が横目で睨んだ推察で、わるく勘へれば藝妓屋か、船宿から出た賣物を入札して得た類でせう。その火鉢にかゝツて居る鐵瓶は俗にいふ火事提灯形で、模樣に落花がついて居る處を見れば、實に見覺もある、いつぞやの工藝共進會に出て居た代物だとは飛んだ記憶のいゝ人の蔭言です。火鉢の黑柿を保護するためか、杉の內框を二重に嵌めてあるのは用意至れり盡せりですが、そゝツかしい者は其處で刺でも刺しはしませんか知らん、烟管で敲いた痕がすこし乾破れて居ますから。何か拭いてそのまゝ其處等に置いてある模樣手拭はつい近處の吳服屋の開店の景物に違無いとはやはりその吳服屋で當日物を買ツた人が推察しませう。

惡口を色々に言へばまづ前のとほりですが、しかし全體から之を推せば其處に居る人の身裝といひ、まづ中等です、決して下等ではありません。例の火鉢をひかへて上座に居るのは六十近い天窓の滑な老人で、またその此方に居るのはその妻と見える五十すこし上の老女で、そのまた此方の洋灯にむかツて毛絲を編んで居るのは十七八歲の娘です。

何か前から語續けた事を二人は進ませて居ます。

「それにしても阿久米だ」、老人が言ひました、「遲いでは無いか、大層歸りが」。

「左樣ですよ」、返したのは老女です、「何かごたごた言ツて居るのでせうが」。

「こまるでは無いか、あの子の氣儘なのにも。女に學問はそれだからいけないて」。

挨拶は爲ずに老女は後をふりかへり、毛絲をあんで居る娘をながめ、

「雪、もウ何時？」

「まだ：只今七時をうちましたばツかりで」。

また老人は眉を寄せ、

「どうも今時の女の子は氣がつよくツて：：夜歩行くのも全で平氣だ」。

「まさか。用が手間取れたのでせう」。老女はおだやかにあしらツて居ます。

その內に戶外に車が留まる音がして、やがて「たゞ今」といふ聲を先へ立てて入ツて來たのは例の力造の車へ乘ツて來た處女です。

「おや御歸りなさいませ」。阿雪は丁寧に挨拶します。

老人夫婦は首をめぐらして、今歸ツて來た處女をみかへれば、意外、阿喜代といふ者をつれて居ます。

「おや阿久米かえ。喜代ちやんをどうして？」

二人そろツて問掛けると、その阿久米とか言

ふ處女は「今」と言ツたばかり。頭巾を手早く外して下にすわり、

「他のことは後で申しませうが、この喜代ちやんを早く家へ屆けようぢやございませんか。嘸心配して居ませうから」。

「なぜ、迷兒にでも」。老女が目を圓くしました。

「はア。爲ツて。あの、何ですよ、矢來町で泣いて居ましたの」。

阿雪を見て聲を更へ、

「雪、一途に行ツて御呉れで無いか、妾と、弓町まで、この子を送屆けに」。

直に立上ツて阿雪に提灯をつけさせ、支度もそこ／＼深切に阿喜代の手を取ツて出て行かうとして、見れば阿喜代が手に一部の雜誌を迂濶として持ツて居ますので一寸おどろきました。

「おや何、それは」。

「走の上にあツたの」。

「車の上に？ 御見せ、どれ」。

見ればこれは法律雜誌で、其處に來間力造と書いてあツて、猶中を見れば中の論文に色々な面白い評が鉛筆で加へてあります。

が、別に阿久米は何とも思ひません。「わるいことを爲るよ、喜代ちやんも。大方あの車へ妾たちの前に乘ツた人が置忘れたものだらうに」。

しかし、また不圖考附いたのは阿喜代が前に例の車夫を「來間さんに似て居る」と言ツたことです。「もしやそンなら此雜誌は」。

左樣考へれば吃驚しました。

「さツきの車夫さんの名は、喜代ちやん、御前何とか言ツたツけね」。

「あゝ來間さんかえ。」

「おゝ來間。それなら名は？」

「名は知らない」。

不審です、意外です。更に色々な疑問がこみあげて來ます。

「御前の家に下宿して居る人？」

「あゝ來間さんてエのは」。

「何だえ、人品は？」

「何」。

「書生かえ、車夫かえ」。

「うゝん、書生」。

はて、不思議。車夫が實か書生がまことか。さア分解らなく爲ツて來ました。何か深く考へて居るやうでしたが、その內に、あゝ又意外と、へたゞ讀者と作者とばかりに斯う老女が聲を掛けました。

「阿梅、否さ、阿久米、早く喜代ちやんを…どうしたのだねエ」。

第七輛　曳出す淑女の話

「それにしても、ねエ、阿久米さん、ほんとに喜代は仕合なンでしたよ、いゝ鹽梅に貴娘に御目に掛ツて」。

盡きぬ禮を述べて居るのは阿喜代の家、すなはち下宿屋の主人夫婦です。

「實に妾も思掛けませんで、ねエ、貴下、…それが喜代ちやんなンですもの、吃驚しましたわ」

「何ね」、主婦は煙管をぽんとはたき、「角兵衛獅子か何か見るツて太ちやんてエ子と一處に出て行ツたンですが、こまり切りますよ、いつでもあンなで、面白さに歸る方角もわ れて獅子の尾を跟いて行ツて」。

「御小兒衆といふ者はみンな左樣でございますよ」。御定まりの挨拶を爲て、更にあらたまり、

「あの喜代ちやん、御前さん、先刻の雜誌は？」

阿喜代は更に頓着なく、

「雜誌？ 置いて來ちまツたの」。

「置いて？ あら、何處へ」。

「姉ちやん處へ」。

「おや、ま、左樣?」
困ッた顏付に次第々々微笑の浪を寄起し、主婦に向ッて更に阿喜代をみかへり、
「實は、ね、貴婦、‥あの變なことを御尋申すンですが、此方に來間さんといふ人は入らッしやいまして?」
「はイ、あの書生さんで」。
「え、左樣でせう、書生さんで」。
これは疑問でもあるやうで、また左樣でも無いやうです。
「あの來間さんて方は大層勉強家で、本當にい人ですよ、今また出て行ッて居ますけれど」。
「へエ、何處へ」。
わかッて居る事を更に問ふといふ氣込です。
「夜學校か、何かへ」。
とは言ッても能辯家、まだ基礎はさだまらぬ推察をもさも確かなやうに述立てます(建築家になればいゝ)。
すこし聲を低くして、
「なに、ね、貴嬢、何でも夜は人力車を曳くとか言ふことで、その曳いて取ッたお金で身の裝飾でも何でも爲るンださうですよ。感心でせう」。
「へエ? 何故ですね」。
「なぜだか知りませんけれども‥ですから下宿料ぐらゐ廉くしてあげてもいゝと思ッて居りをすわ」。
「何處の學校へ御通ひなさるのです」。
「えゝと、あの何とか言ッた、さう〱、あの代言人になる稽古をする‥神田の」。
「なるほど、左樣でございますかねエ」。
何氣ない體で言ッたつもりですが、しかし顏色もほとんど凡でありません、胡麻化さうと手など擦ッて居ますが、それだけに又跡を繼ぐ言葉も容易くは出て來ません。
暇告別して阿雪と共に家へ歸着けば待構へて居た老人夫婦は均しく言葉をそろへ、
「まだ聞かなかッたが、喜代ちやんは一體どうしたの、迷兒になッて居たのかえ」。
「えゝ、矢來町で」。
始末をば説了りましたが、しかし車夫について疑を抱いたことなどは胸に祕めて決して言出しません。
老女は更に膝をすゝめ、
「牛込へ行ッたら何うだッたえ」。
「それが肝腎だ。御前、何と言ッたえ。さア御話し」。老人も身を入り込ませました。
さて爰でこの處女の身上を言はなくては爲りませんが、この處女が卽ち例の阿梅といふものです。前夜力造が本郷まで載せて行ッた客の妹の。それで何故老人夫婦はそれを阿梅とは呼ばないで、阿久米などと言ふのでせう。これは世によくあること、今迄住ッて居た處の隣に阿梅とか言ふ下女が有ッたため、たゞそれと同じなのを避けるため、假に阿久米と呼んで居るので何も別に子細の有るのでも有りません。
阿梅の阿久米は靜に脣をうるほして牛込へ行ッたことの子細を話出しました。
「牛込へまゐりましたら、ね、伯母さん(後でわかります)も待ッて居らッしやいまして、それから例の話に爲りましたの」。
「例の話に爲ッて、伯母さんは何と御言ひだッたえ」。これは老女の問です。
「伯母さんが仰やるには『御久米、御前も最う年頃だし、もウ學校をも卒業して仕舞ッたし、是からは相應な處を見附けて』‥
微な聲です。――
「『御嫁に‥何に行かなくては爲らないからッて呉々御前の御祖父さんや御祖母さんから御傳言も有ッたから、それで今日御前を呼んだのだが、ね、‥就ては此間も一寸妾から御祖父さんたちに左樣言ッて置いた、家の美佐雄さ、あれも彼是年頃だからッて』‥

言ツたばかりです、いつか語は絶えて居ます。
「うん、そりやア最う私たちも、御前知ツてのとほり、承知の上の事さ。それで御前何と言ツた」。祖父が熱心に尋ねました。
しかしながら返辭は堰で留まツて居ます。
「御前は何と言ツたかえ」。これは祖母です。傍で相變らず毛絲を編んで居る小間使の阿雪は折々不審さうに眼を横に向けて阿梅の風情を偸見て居るばかり。ても「靜かさ」…たゞ耳に附きます、隣家の犬が夜半の寒さに唸く聲。
「をかしい、ね」。言ツて祖父は阿梅の顔をさしのぞけば、あゝ強面い世の中！　くやしさうな阿梅の下向の顔！
「だから矢張り」、祖父は苦蟲の申し子、「乃公が言はない事では無い。今時の…うんにや、婆さん、湯で呑め、茶で呑めと言ツたからツて迚もいけないさ。勝手に爲せる方がいゝのさ」。
聞えぬやうに口の裡。——
「情夫でも…生意氣は言ツて居たツて…こしらへたかも知れや爲ない」。
前に牛込の家を出る時の物思はしさうな顔付、それも無理ではありますまい、薄々聞けばこのとほりの事實ですものを。

無言…そればかりです。色々な思に鎖されて居る阿梅の眼はいつか其處に阿喜代が捨てて行ツた雜誌にとまりました。「來間…力造！　法律？　妙な」…あり〳〵と牛込矢來町の景色も暗のまゝ愁の闇の眼に泛べば、直に阿雪に吩咐けて雜誌を下宿屋へ送返させましたが、たゞ種々の思に封ぜられて、いつか耳も役目を怠ツて音信れた波動を逃がします。
「あれ、あのとほりだ。人の言ふ事を聞いちや居ないツ」。
上目できらりと爲せる祖父の威光！　面白くない鬱憂の天地！　夜も痛々しい薄膜の狹霧を引亘して辛じて寺の鐘をば通はせます。

第八輛　曳出す試みの話

「どなた？　おや來間さん、御歸りなさいませ」。斯う挨拶をしたのは力造の居る下宿屋の下女です。
「今日は大層御早うございました、ね。もウ學校が御仕舞になりましたの？」
熟したと見せる柿には多く澁汁が有るもの。すでに「學校が」と斷定した下女の底意、何處やら裏がありさうです。
「あゝ」。素氣ない返辭！　それもその筈。

階子を傳はツて廊下を過ぎ、力造もやゝ自分の部屋に入りました。どんな部屋？　まさか、圓くも飯櫃でも無く。やはり六疊（と言ふ處ですが）、しかし疊數が六疊敷ける六疊では無くて押入を二疊取ツて仕舞ツた跡の六疊…否、じれツえい…たゞの四疊です。
晝間なら日の照がつよくて、それへ向ツては白茄子も黒覆盆子と熟しかはツて仕舞ひさうな南向の窓、その窓の下へ押据ゑた一脚の机はもし時代で値さへつくものなら天晴美術協會の折紙を頂戴しさうな代物で、木目の處だけは歳暮の松柏といふ見得でたゞ獨り活殘ツて居て、その机の周圍には鉛筆を削ツた小刀の痕が過ぎた足跡を殘して居ます。ペン入に代用されて居る木燧の故函。楊枝まで入れてある硝酸竹の筆筒。座蒲團にも寢道具にも通用される毛氈。枕にも腰掛にもなる烟草盆。灰吹は吐月の焼印が節を守ツてまだ殘ツて居るだけでサ、ラに爲ツた口吻がわづかに威光を保ち、火入は相馬の痩馬が影を薄くして居るところでやうやく縁のヒゞに時代をつけます。日本風の本箱に假ずまひをして居る洋書許りが目立ツて金字を晃かせ、また新刊の法律雜誌が何くれとなく澤山に座敷中に積重ねてあるありさま、部屋の持

主が殊に心を注ぐ處がおのづからあらはれて居ます。

やゝ炭火を持運ぶ下女を尻目に掛けたばかり、例の通用のいゝ毛氈に座を占めて、言はゞベッたりとした體に爲ッてはゝアと念の入ッた欠伸を押出した鹽梅、いかにも勞働をした跡の體とは知れます。

「御免下さいまし」。言ひながらこの處へ入ッて來たのは下宿屋の主人です。

「おや御亭主、日増に寒くなりますな」。

「左樣にございます、めッきり御寒くなりました」。・

力造がさし出す火鉢に會釋して膝をすゝめ、

「毎日御勉强で御大體ではございませんな。家内なども感心して毎日人さまに御浮評ばかり申して居ります」。

何か絲が引出せさうな繰言、實に綿屋が目を着けさうです。

「いゝや、何うして」、揉合ッた手の温味を一寸額へ塗り、「毎晩御邪魔な事ばかりして」。

「なに、貴君、それは決して」…

すこし跡を言難ねて居ました。——

「まだ何ひませんでしたが御出での學校はどちらで」、あゝ下手な言方、これでは目的はやがて誤ッてしまふに相違ありません。

「學校ですか」。

「はイ」。

「あの私が行く?」

「はイ」。

「斯う毎晩?」

妙…よほど匿して居るものを…

「神田の、あの何です、英吉利法律學校です」。

「へエ錦町の?」

「さうですとも」。

「とも」…實に力造の例の癖。

主人も手が附がなく爲りました。今日言出して斷然力造から力造が人力車を曳く挨拶を聞き、それから下宿料や何か及ぶだけは力造の篤志に加擔しようと思ッたまゝその話を引出さうと彼是苦心しては居ましたが、しかし獅子に向ふ羊もどき、兎角取ッて掛る隙が見付かりません。

「今日宅へまゐッた人も話しましたが」、工夫して他事に持ッて行き「世の中には中々放蕩無頼な書生が多く有るところを、また近頃は感心ですね、晝間は學校へ通學してそして夜は」…

力造の胸は人知れず浪をうッて居ます。

「夜は新聞紙の賣子となッたり、または人力車などを曳きまして、ねエ、貴君…勉强する人も有りまして」。

ぢッと力造の顏を瞶詰める主人、胡麻化すのに胸をいためる力造。わざと聞損ッた體をつくり、

「へエ?」

「夜、あなた、人力車を曳いて學資をこしろへる」・

今度は「賣子」の事をば略して單に「車」とのみ言ッた底意…あゝ力造、推察しましたか知らん。

「はア左樣ですかね」。

兎角脛に疵を持てば十分な挨拶は出て來ません。それを見れば見るほど猶主人も心を固めて來ました。

「そンな心掛のいゝ書生さんに一日でも御宿をして、もし下宿なさるやうなら相應な御手助はいたして上げたいものでございます。まさか、左樣何處にもあるといふ事でもございますまいが。もし貴君の學校にでもそンな方がもし居らッしやッたなら、どうか宅へ入らッしやるやうに願ひたいもンです」。

力造の心の中の混雜、それは實に浮寢の水鳥、見えぬところに隙がありません。我知らず

血は上へのぼるやうで、そして身は總毛立つやうで、かねて聞く冷汗、それを今はじめて力造も知りました。何やら收まりの付かぬ力造の體たらく、「あゝ是程に言ッても默ッて居るか」と思へば主人も何處と無く有無の威光に撲たれるやうで、これさへも前の事を言ひは言ひましたが胸はどき〱するのみです。

が、更に掛けて見ました、圈套、實に今度のは前より繩の強い圈套を。

「今夜、あなたは萬一牛込邊へ」‥

けれど直には言ひ切れません、また容易くは聞取れません。

「入らッしやりは爲ませんか」。

「なぜ‥です」。

「この雜誌が」。

言ひながら力造の目の前にさしだしたのは例の法律雜誌です！

「道に落ちて居りましたさうで‥阿喜代が今日あの邊へ迷子になッて行きまして」‥

けれど挨拶は堰留められて居ます。たゞこれも前の阿梅の家と同じやうに言葉は折朽ちて、窓の隙間で歌ふ風の聲ばかりが凄い息を引いて居ます。

「既に主人は曉ッて居るやうだ。かくすのも大人氣無いが‥言ッて仕舞はうか知らん、打明けた方がいゝだらうか。ま、困ッた」。

今の力造にはこれだけの考があるばかりで、その間には折々牛込の凄まじい夜の景色が朧の形をちらつかせます。

第九輛　曳出す闚窺の話

今は年の暮です。淺草觀音の年の市はすでは二三日のまへに橙、乾栗、神馬藻の賣聲を走らかし、繪雙紙屋ではそろ〱雜誌のビラと交代させて新板雙六を掛けつらね出せば、今は市中のありさまも何處やら火に焙ッた早附木、勢が活潑になッて來ます。年齡を着物と共にあらためる嬉しさ、そのためには小兒もまだ回らぬ舌ながら「御暮が過ぎたら」の小歌をしやぶッて紙鳶や羽子の稽古にヒゞを切らし、また日和を逃がすまいと天氣豫報に十分の責任を着せ掛ける後ればせの家、思切ッてばた〱煤はらひを始め出せば、早くも出入の蕎麥屋が夜の註文を豫察します。溜めた胸繰（臍繰は老女、乳繰は不潔、そこで處女のは變ッて胸くり）をば海防費の獻金もどきに拋ッて新形知盛の羽子板を身請したまゝいそ〱抱いて歸るのは問はずとも三桝に心をはかり取られて居る愛敬者で。また新年に貰ふ小使錢をば自轉車の外何につかはうかと亡くなすのに氣骨を折るのはかならずしも龜の甲に灸をすゑるまでも無く、學校では毎でも體操にばかり滿點を取る未來の博士です。

おのづから物事がそは〱として落付かぬありさま、下手にたとへれば市中が殘らず空中に浮島となッて居るのです。やゝ冷めた洋服熱には活返ッた鼈甲屋の槌の音、ます〱多くなる新年宴會の貸席の用意には障子や襖をつくろふために待合や料理屋へ通勤をはじめる經師屋の師弟。切地がまだ染まらぬかとの矢の催促には紺屋も明後日の卸賣をはじめ、今日頼む、あした直にこしらへろとの名刺の註文には活版屋も挨拶に當惑して活字と共に腕を組んで居ます。赤大根を引拔いて居る植木屋、黑豆を仕入れて居る煮豆屋、景物の略暦を刷らせて居る貸本屋、門松の仲買で頭を張る際物師、額を合はせさへすれば酒席で春衣を披露し合ッて居る藝者ども、やうやくトランプの俄修業が卒業にならうとして居る令嬢たち、すべて何處やら浮立ッて居ます。其處へ至ッてはたゞ書生、なるほど春の支度も多少は有りませう。しかし、學校も早休暇に近くなッて教師も次第になまけて來ますから既に十分の課業はほとんど無いく

らゐで、そのためには教はる生徒の方もよほど閑暇になッて、之を他の腮に齷齪して居る連中に比べて見れば忙がしさの度は決して比較には爲りません。

本郷眞砂町の往還をぶら／＼歩行いて來たのは例の來間力造です。晝間ですから相もかはらず済まし切ッた書生風です。けれど袖腕に至るの恐らしさをば持たず、時代後れの釜形の皂：いや、既に霜降となッて居る：鍔廣帽子にほとんど眉の邊まで知行を與へてある工合、それで色でも生白くて衣服でもべら／＼し、そして下駄でもにやけて居るならば、その目深といふ一點からその人物を俳優とは誰でも推察しませう。が、衣物は手織の藍木綿で言はゞ椋鳥の同行らしく、羽織は吳絽の二度の務めで天地かへした縫目の跡が無情にも殘ッて居ますが、しかし感心なことには酷く垢染みたものでも無く、品はわるいながら、清潔とした方で、一言でその全體の形態を言へば「罪の無さそうな」とでも言ふのでせう。

何を思ッてこの往還をあるいて居るのでせう。それは言はずとも知れて居ます。いよ／＼想像がたくましくなる前夜の顚末、あるきながらも心は可なり混雜して居ます。

前夜夜店を張ッて居た家は此處だッたと一先目的を注けて置いて、それから記憶のまゝ一軒二軒と家を數へて居ると、やうやくにして見付かッたのは冠木門と生垣とを帶留にした一構で、それを見れば潛んで居た見覺もやうやくむく／＼起ッて來ました。

「ふむ、此處だ」。

ひとり心で見留を付けて、さてそれと通行の人に悟られぬやうに門の側へ近く寄り、門の標札に目を注けると、さア何と書いてありました、「杉田別宅」と書いてありました。

しかしまだ力造はこの家に前夜弓町の客の妹が居るといふことは知りません。「杉田」、その名はいくらか力造の胸にも新參でありません。「はて杉田？學校の教師のと同じやうな名前だな。杉田何といふ人の別宅か知らん」。これだけしか考へませんが、しかし一度教師杉田の事については考をその妹へ及ぼしたこともある、その孱弱い經驗が今でも（悟られずに）活殘ッて居るかして、兎角「もしや」といふ心が起ッて來なくも有りません。「もしや・杉田」。その後の言葉は何ですか知らん。

何處と無く鳩尾の邊が輕くゑぐられるやうな胸の騷ぎ、何故でと聞かれたら云々だと答へる子細は有りませんが、しかし手放しにして置けば際限も無くごたつき出すやうで、たゞ何だか變です――もし、變ですといふ言葉に此時の景色を描盡くさせたものとすれば。

茫然：まるで身體を半分に別けて半分は麻醉藥を齅がせ、半分は珈琲を呑ませたといふやうな茫然、なぜなら、神經は俄に鋭くなッたやうでもあり、また酷く鈍くなッたやうでもありますから。多少片呼吸に爲ッて末期の水を望んで居るらしい廉恥の心、それがやうやく喙を容れたと見えて、人にをかしく思はれてはいけないと足はやがて吸付けられた糊を離れて、構の前を通過ぎようとすると、更にまた奇を好む眼は忽ち垣根越に庭の中へ注込みました。

注込む。同時に見えたのは庭の中に居る二九に些し足らぬ美人です。

無論通り過ぎがての觀察、また野暮な力造の眼、それ故に委しくは見盡くしもしませんが、しかし作者が力造に代ッて之を通辯すれば、その後力造の眼の奥に中々消えて仕舞はなかッたのはその美人の襟元とすこし後がかッた頬の邊です。さしぬけた薄色の襟元に肉の緊括をゆたかに取合はせた頬の加減は直な處に得も言はれぬ曲線を括寄せた自然の配劑で、そして黃薔

薇の簪がさも臆病らしく顫くありさま、脚の張金までが多情の恨の種になります。形は新らしくは有りませんが、しかし流行は流行、薄唐松の小紋の上着に古代更紗をうつした白勝の下着をあしらツたその澁さ、その高尙さ！ それで庭の早咲の梅を折ツて居ます。つれない枝の剛情！ 足に力を催せば、緋の絞纈の長襦袢は空色の裾まはりを見せ貌にやゝ影を洩らし、また意氣地無ささらな風織ちりめんの帶上は濃鳩羽繻珍の帶の地面にわびずまひをして居る、その偶然の亂れ工合のおもしろさ！ あゝ美人、それでこそ美人。「なぜ折れぬか」と呟いたらしい有樣で些し手荒く枝を動かせばいつか袖は捲れて白玉の雙手は腕の邊まで露になツて――おのれ惱殺！ 枝から纔落ちる塵にやゝ顏を背けて居て、しかも目を細くして：

「是だな、これが此間の夜の婦人なンだな」。さすがに心で期して居る物を見付ければ、顏は見合はせぬながらも、何となく胸はとゞろき出すやうで、思付いて心で評したのは只「中々の美人だな。道理で此間の晩頭巾の間から洩れた目付が美かツた」。これら二つだけの着目ぐらゐな物です。

愚圖々々して佇んで居るわけにも行かず：あゝ足だけ殘して腰から上は掻消してしまひたいやうな。「見るか知らん、此方を」。見られては困ると知りつゝもそれで更に横から横目を忍ばせる埒の無い素振。がツかりとして居る處へがら／＼驅けて來た人力車、これに辛うじて氣を附けられました。

踵、重い踵、それを強ひて擧げて歩出す間も無く、いよ／＼浮かんで來るのは杉田別宅といふ事です。

「杉田別宅？ 此間の晩あの客を乘せて弓町へ行ツた時、門で出遇ツた婦人、あれが行ツた先は、や、左樣だ、この眞砂町の方へ向ツて來たらしかツた。眞砂町！ 杉田！」

をかしく刻出して考出せば我知らず足は〈何のため〉或る處の方へ向いて行きました。何處の方。弓町の客の家の方です。

さてその弓町の客の家の前へ心覺のまゝ尋ねて行ツて見れば、實に吃驚しました、その家に打ツてあるのは「杉田素清」といふ標札で、その杉田素清といふのは別人でも無く力造の學校の教師の杉田です――私犯法を敎へて居る。

「おや杉田素清！ や、此處に居るのか。すぐ傍だ、己の下宿の。どうしてそれを己は知らなかツたか。して見れば此間の晩載せたのは：あツ、胸の金時計：なるほど左樣言へば杉田も金時計。こりや意外な。はてな、杉田はあの時己が車を曳くと知ツたか知らん、杉田が：己を：車を曳くと」。

非常に氣が揉めては來るものゝ、しかし思へば又梅を折ツた美人の領元と頰付が更に目へ浮かんで來ました。

「妙だぞ、あの女：えゝと、杉田：杉田別宅：あの女が、いや此間の夜見たが眼と眉とは非常に好かツた、杉田の妹かも知れない、近いもの、家が。其前夜兄さん左樣なら」と下女らしい女と一途に言ツて立去ツたのは夜の九時過ぎ、いや殆ど十時、その深更に婦人二人か步行いて歸ツて行ツたのだもの、あるひはあの女は杉田の妹かも知れない」。

やゝ推察を正鵠に近づけましたが、また思出したのは朋輩の書生どもの言ツたことです。

「杉田は美男子だが、妹は美人でも無いとか。が、己が今日見たのは美人らしかツた。あれが、美人では無いのか知らん」。

世は數寄なもの。力造の今の心はたゞ彷徨ふばかりです。意味の無い足を移して意味も無く御茶の水へ立出でて西を見れば夕霧に鎖されて芙蓉も冴えない紫を凝らすばかり、これも言

はゞ五里霧中の物です。

第十輛　曳出す粋人の話

早咲の梅の折枝を二三本手に携へ、本郷弓町の杉田素淸の家へ入ッて行くのは前回梅を折ッて居た婦人で即ち例の阿梅です。阿梅? それが美人? いえ美人でも無いのです。庭に居た有樣を見て力造が美人と考へたのは色の白い後向を見たからです。


(原本挿畫)

親しい間柄と、横玄關から上りながら出迎の下女と顏を見合はせて「ほゝッ」とばかり挨拶の愛嬌笑。

「兄さん居らしッて?」小首を傾けて聞く可愛らしさ。

「はイ、御奥に。」是は風樹によッた蒹葭のざわつきです。

「御差支は何にも無いのッ」言ッたのは文飾といふだけで、直に兄の書齋へ辷れば、兄は口輕に——

「いや名詮自稱だね」。眼はこれと同時に阿梅と梅との間を往復して居ます。

「へエ?」

「梅が梅を持ッてさア」。

失望の顏色です。がッくりとした語聲。——

「あらア、なアんの、何かと思ッたら」。

言ッて、さすが御坊ちやん、折角の梅の蕾を何の氣なしに一つ二つ捲りながら、

「もウ咲きましたよ、こンなに。ですから阿母さんが一枝二枝兄さんへ上げろと言ッて、これ好い香が最う爲ますよ」。

年は年でも骨肉の間柄とて禮も少なくなッた愛度氣無さ、兄も喜んで受けました。が、見れば何か言ひたさうにして控へて居るやうな阿梅の體裁、はてなと兄も不審を抱きました。

「何だえ、默ッて。用かえ」。

「え? えゝ、まア」。

同時におのづから搔垂れた眉の半月。——

「妙なことがムいますの」。

「妙ッて何」。

「何ね、此間の晩例のあの事で牛込へ行ッたその歸りに乘ッた人力車の挽子は貴君あの御存じではムいませんか、英吉利法律學校とかの書生で」。

「私は英吉利法律學校へ出やしないぢや無いか」。

「あら左樣ですけれども、ね、…そりやア貴君のは東洋法律學校ですけれども、もし御存じかと思ッて…あの來間力造」…

「何を」、兄はすこし耳を引立て、「四度路な言方を爲て居るンだねエ。わからないよ、ちッとも」。

「ですが、兄さん、來間力造といふ人御存じ?」

素淸は些しも疑議しません。

「來間、あゝ東洋法律學校に居るさ」。

「あの本當に… 誰でせう」。

「何、誰なものかね、本當さ。私犯法を今私が

教へて居るさ」。

「なンでも鋭い顏のやうな？」

「左樣々々そンなだ」。

十分に正鵠はつきましたが、しかしそれからそれが車を曳く顛末を語ッても、何故だか兄妹二人とも子細がわかりません。「一派かはッた人間だから或はそンな事をも爲るか知らんが、併し何うも」：目的す遠山は雲か陸かほとんど曖昧です。

が、一つ曖昧で無いといふことは阿梅の心が何處と無く力造を奇とした事實で、輕卒ながらも多分今の處「珍らしい人だ」とは思ッて來ました。雜誌へ書入れてあッた文句が可なり見識を持ッて居たこと、それです、それが阿梅の心を廣く領して居ます。

けれど是は阿梅の胸の内だけです。兄はそれ・とも知りませんから、來間力造のことは大して心にも注めず、この頃の阿梅の身に付いて居る一大事に話を移し掛けました。

「牛込へ行ッた事の事は昨日阿母さんから聞いたけれど、無理だねェ年寄も、いくら美佐雄が自分たちによく見えたッて仕樣が無いぢやア無いか、肝心の本人の氣に入らんければ」。

挨拶を求める體で暫時言葉を中絶させましたが、しかし相手は口無しの山吹、實も否もありません。

「御前が異論を言ふのも至當な話さ、それだから。わるゝ智慧を附けるのぢや無いけれど、そもそも是は一生の固めだから能く注意して輕卒なことを爲ない方がいゝよ。就ては此間柳橋であッた宴會の時ね、あの時美佐雄について聞込んだことも有るのだ」。

「あの美佐雄さんの？」蘇ッた樣な調子です。

「けれどまだ確かで無いなら口外は出來ない。が、蛇の道は蛇、そンな事に掛けては是でも新聞記者をして居る甲斐には直に探れるさ」。

新聞記者？ それで教師。なるほど當世流行の其一つ。それで洋行がへりで御化粧が上手で：想像られます、その蛇の路の道中記が。柳橋の宴會とはそも〳〵どんな子細でせう。時節は最早歲暮、なか〳〵そンな事は言ッて居られません、いづれ一夜でも明けましたら：ねェ諸君：來る明治二十二年の一月六日。まづは年内の御告 別よろしく：また明年御目にかゝりませう。

第十一輛　曳出す野暮の話

題が花ぐるまですから假に梅本とでも名をつけませう。その梅本といふ待合の奥二階に封込まッて差向になッて居るのは男女二人のものです。

男は教師の杉田、すなはち新聞記者の素淸です。麥酒でも塗付けたが、やはらかく縮れた髪の毛を左勝に面白く梳分け、肉色の襯衣を着て、黄玉石の指環をはめた工合、なるほど紳士です——無骨でも無い。上着は濃瑠璃の羽二重で、その下には澁く、おとなしく南部が顏を出して居ます。夜は既に十一時過ぎ、三絃も拔に爲ッて居る始末、それゆゑ無論うちくつろいで羽織をも脱いで居ます。脱いだその羽織、はて誰が疊みました。

この人です。と言ッて鼻の頭でもつッつきたいやうなのは差向になッて居る婦人：では未だ不十分：左棲です。年は十八九、言葉を更へて之を言へば「今の内御客をつかまへるのが肝要な年頃」です。誰にこしらへて貰ッたか、それとも簞笥に宿食となッて居たのか、大小あられの小紋の上着に唐繻子の帶、更紗の下着：いかにも更けたこしらへです。これなら履物も恐らく東下駄でせう。變に澁い婦人だと誰にでも見える子細はたゞこの衣物のためでは有りません。毛は澤々と多くある癖に、年もまだ長けて

も居ぬくせに島田を絞ツて中を絞らせ、そして大抵は葛引の丈長を掛けて居ますものを。扨もとは他の疝氣を頭痛に病む質の人で。この女を一目見るや否や「毛が啼出すわ」と言ツたのは赤い蹴出しの紅梅餅、こツてり造りが大好な髯の朝臣の評言です。名に因んだと見たは僻眼か、「かをる」といふその縁でせう、帯留の金物はプラチナと純金と紫銅とを取合せたこぼれ梅…實に目立ツて價値のある物…して見ると嘸かし愛顧の御客も…そもそも雲の上人でせうか。


（貢太郎畫）

何か無理なことでも男が言ツたらしい、有りさま、頽れたまゝの膝を直しもせず、横に身體を倒し掛けて袖をくはへてさしうつむいて居る顏を覗込めばやはり婦人は婦人、男子の愛を買出せさうな處も何處やら見えて居るやうで、それを後モの德分にするのも無駄、七つ道具の底蔭はあります。

草籠形の鯨の巻烟草入の中からシガレットを一本取出してパイプへさしこみながら男はまづ聲を開きました。――

「あゝゝ付けてくれる人も無いのか」。言葉の後は微笑です。

また受けるのも微笑です。――

「あの子に付けて御貰ひなさいましよ」。

「さうさ、この子に、ねエ」。

言ツてパイプをさしつければ――發矢、物馴れた奴、粹人を取扱ふのに物馴れた奴――わざと女郎花はすねました。

「おや宜かツた。御澤山めしあがれ」。

「はアイゝゝ、そンなに否なら付けて貰ふまいさ」。

敵し難ねて杉田も獨りで吸付けましたが、取ツてかゝる處が有りませんので仕方なく陣腐な手段。烟をふッと薫に吹付けました。

「邪見ですねエ」、言ツて見上げたその笑顏…

「はイ邪見ですとも。けれど此人よりは邪見ぢや無いからね」。

膝頭を突かれても平氣です。――

「おや何故あたしが。宜うムいますよ。たんと御いぢめなさい」。

「邪見ぢや無いか、肝心の話になると挨拶をしないでさ。え、薫、ぢやア無かツた阿華、阿華さん、いゝや何うして阿華さま」…

「おほゝゝゝ」。

たちまちに男の氣はあらたまりました。――

「これは打明けた噺だがね、何もあンな美佐雄ばかりを左樣贔屓して居たツて始まらないぢゃ無いか。ちツとは私の心をも…今まで隨分御前に目を掛けた…否さ、恩を恩にかけるンぢやないが、ちツとは、ねエ」…

あら、恩を鼻にする粹人！　いや御手際は御上手です。

「御前がはじめて左褄で推出した時わたしは新聞に何と出してやツたえ。忘れは爲まい。やれ孝行な藝妓だの、やれ神妙な女だのと針ほど

の事を棒ほどにして書立てて、また御前の言ふなり次第、發句でも、都々逸でも、替唄でも作ツてやツて、それで御前を段々世の中へ出してやツたンぢや無いか。いつかだツて御覽、御前が行きたいツてエから鹿鳴館の演藝矯風會へつれて行ツて、さアあのとほり面皮を缺いてしまツたぢや無いか」。

まことに御手柄至極のはなしです。しかし、さすがに商賣がら。——

「あの時は小千代さんも行ツて居ましたねエ」。

「いゝや、どッこい。横道へ話を持ツては行かせないよ。もし何の角のと言ふなら、是から洗ひざらひ御前の内事を書立てる：まさかそれが好ましくもあるまい。大體の藝者を見たがいゝ。みンな私の處へなンざア包んで挨拶を持ツて來るぢやア無いか。また左樣だね、一文にもならないで何ぼ相手が婦人だからツてその助けを爲て居る馬鹿があるものかね。そりやア外に望が有るからさ」。

假初にも身分を考へたなら：あゝ杉田も餘程の性惡です。さながら小說家か詩人同樣、生殺與奪の權はこと〴〵く自分の一手にあるといふやうな面色、これでも社說の筆を取るとは！

＊　＊　＊　＊　＊

舞臺が變れば梅本の帳場のところで、入口の腰障子を開けて今一人の若い男が入ツて來たまゝ帳場へ坐りました。これが卽ち美佐雄です。姓は三浪。小作りな、やさ形な若者で。

「おや三浪さん」といふ梅本の女主人の聲を聞いても別に挨拶も爲ず、直にすりよツて小聲になり、

「御客は誰」。

「例のですよ」。

「地まはりさんかエ」。

「はア、杉の字」。

「さうか。薫は？」

「そンなに急くもンぢやありませんよ」。

「今出て居るのかエ」。

「まア、あなた、何ですねエ、せい〴〵言ツて。薫さんなら今御座敷ですよ」。

「ふむ」、落付きたくは無いが落付くといふ工合で火鉢の中をかきまはし、「今行ツたンだ薫の家へ。そしたら此處へ來て居るといふから」：

「おや〳〵猫の戀ですねエ」。

笑出されてもむしろ嬉しく、

「猫の戀ぢやアいけないかね。『似合ふ〳〵』と言合ツて末には『夫婦』となる奴かね」。

「これは、ま、御挨拶ッ。受賃は二割增ですよ」。

「はゝ、强氣に現金だね」。

「その代りやがて御赤飯をも現金にいたゞきますよ」。

「なアんだ、自分の勝手ばかり」。

御赤飯と言はれても嬉しいやうです。圖に乘ツて聲を潛め、

「あの杉田とか言ふのは此間も若吉に賴んで小露を手に入れようとした奴だといふ事だね」。

「あゝ左樣ですよ」。

「押が强いよ、新聞屋だといふのを笠に着て。實はありやア私の緣につながる者なンだ。それだのに人の藝妓と差向とは：ヘン知ツて爲るか、知らないで爲るか知らないが、ねエ御神さん、忌々しいぢや無いか」。

額をさしよせていよ〳〵聲を潛め、

「一件ぢやア無いか」。

口說いて居るのかといふ趣を手眞似でして見せれば主人もそれ者、

「どうだか知れませんわ」。

さすがに胸は煮立ツて來ます。奥二階、ぺんともつんともせぬだけに心配の種になる奥二階、一人の大事の女を：おのれ地廻り」。考出せば默ツては居られません。罪だとは知りなが

ら…思へば梅本の內儀にも氣の毒では有るものの…身をふるはせて徐々と階子を傳はッて戸袋の影にさしそひ、耳をそばだてゝ熟聞けば…

あゝら意外な、よもやと思ッたのに。——內には女、實に聞覺のまざ〳〵と確にある女の聲として斯の胸わるさが聞えます。——

「そりやア罪でさアね、あなた、何ぼ妾が御坊ちやんだッて、あんな御平の長芋には…そんな事を新聞に出しちやア困りますよ」。

「御平の長芋」、その言葉はつね〴〵三浪美佐雄が他から評された自身の面相です。「こいつは己を惡く言ふ」。赫となれば男の聲も更に聞く身には攻鼓です。

「口では旨く言ッたッてその長芋を好きぢやア無いか。本望だらう、さう新聞に出されりやア」。

氣が取込んだ矢先にはすべて人の言葉の意味を自身の意で迎へます。身はふるへるばかり、中へ飛込みたいやうです。が、優柔な性質、さすがにそれもならず、けれど、また慧くもない人物、それだけに妙な思案を考付いて忽ち急に二階を下り、あわたゞしく梅本の內儀に斯う問ひました。

「杉の字の車はあるのかね」。

「いゝえ、今夜は」。

「そンなら旨いぞ」。

けれど內儀は元より不審の顔色です。

「なぜ」。

「なアに、何でも無いのさ」。

第十二輛　曳出す謀略の話



やしむ梅本の女主人を尻目に掛けたまゝひとり得意の顔色で美佐雄は急に梅本を立出で、すぐ傍の角に人力車夫が二三人客待をして居る、その處まで行ッて「おイ車夫」と一聲呼掛けました。早く心得て「どちらさま」と問掛けるのを耳にも入れず、その內から一人をえらんで小蔭に招ぎ、

「ひとつ折入ッて願ひが有るンだが、どうだ、うまく遣ッてくれるか」。

訝しな客です。車夫も心得難い體です。

「御召しなさるンですか」。

「あゝ、賴みたいンだ。が、それに付いて話が有るンだ」。

前後をふりかへッて小聲になり、

「いま、杉田といふ客が彼處の梅本に居るンで、直に是から歸るンだ。が、あるいては行くまいて、きッと車を吩咐けるだらう。賴みといふのは是だ、その時默ッてりやア梅本から賴付の宿へ吩咐けるからいけない。處で御前にあの家の前の邊をうろついて居てもらひたいンだ。さうすれば丁度いゝから御前の車を呼ぶに違無い。それで呼ばれて御前がその客を載せたら…おイ、もッと此方へ…耳を御貸し」。

何かさゝやく體。車夫は點頭くありさま。やや少時にして話も終りました

「どうだ、やッて呉れるか、思切ッて」。

「おもひ切ッて」…察するに何か六かしい註文でせう。その六かしい爲か、それとも他に子細があるためか、車夫はまだ容易に承諾した體でもありません。

「その杉田といふ人は何者です」。

「何さ、學校の敎師だから安心だよ。學者だよ」。

「年頃は？」

「まだ三十にはならないよ」。

承諾の返辭を渴望して居る語氣で いよ〳〵聲を潛ませ、

「賴むよ、どうか遣ッて御呉れ。崗があぶないと言へば譯はあるまい」。

「崗があぶない！」傍聽しても意味はわかりません。

美佐雄は紙入から鼻藥を取出して、
「これは些しばかりだが、ね、骨折賃さ。取ッておくれ。どうせ車賃は出ないに決ッてゐるから：さア五圓」。
五圓：たゞの車夫に五圓の骨折賃！ 思へば註文の六かしさも推測られます。
けれど車夫は受取りません。——
「いえ、それは入りません」。
「なぜ。ぢやア頼みを聞入れないのか？」
「そりやア遣付けませう」。
金も取らずに命令を聞くとは意外の事です。美佐雄の不審は濃くなるばかり、
「なぜ、金を取らないンだ」。
「いや、宜しうございます」。
「御取りな。取らないけりやア己も安心が出來ない」。
「爲る事は爲ます。けれど、どう仰ヤッても金は」…
どう勸めても受取らぬ車夫の强情、美佐雄も困切りました。が、次第に時刻は移ッて行きます。たゞ押問答して居る内「杉田がもし歸ッてしまッたら」…さう思附けば仕方なくあきらめて仕舞ひました。
…いつか美佐雄と車夫とは左右へ立別れて、やがて吩咐けられたとほり車夫は車を曳いて梅本の前をうろついて居ると案の如くその内に梅本から呼止められました。
呼ばれても妙な車夫です、入口に一寸身をあらはして見たばかり、光の影に身を置いて註文を聞くありさま、梅本でも不審とは思ッたものの心にも注めず、本郷元町まで載せて行けと命じました。
やがて藝者に送出されて立出て來たのは美佐雄が言ッたとほり、紛も無い杉田素淸です。直に素淸は車へ乘りましたが、どうしたか、あらあらしい體です。藝者にも梅本の女主人にも碌に告別の挨拶もせぬ程です。乘る：その途端：車夫はさも何か思巧んで居る樣子でさッぱり目を杉田の方へ向けません。
「元町までだぜ」。杉田は言ひました。
が、返辭は「ヘイ」と言ッただけです。「ヘイ」だか、「はイ」だが、それもよく區別は出來ないほどです。
世辭の無い車夫だと思ッたばかり、客は車へ乘移る。乘移るや否や、躊躇せずに曳出しました。あゝ杉田！ 兎に角、美佐雄の計畫は此處でまづ行はれて望みどほり杉田は美佐雄が賴んだ車へ乘りました。さてその美佐雄が車夫に賴んだ子細は？ 極めて陋しむべき手段です。車夫に吩咐けて杉田を究厄に陷さうと思ッたのです。はや杉田は、それゆゑ今は釜の魚です。本鄕元町まで行く途：あら：その途には人とほりの罕ない處もありますのに：

第十三輛　曳出す圈套の話

「めづらしいな來間君」。
言ッたのは前々回力造と學校で美人の事について論辯した書生で、此處はその下宿して居る一間です。
「めづらしいな來間君」、更にその書生は言葉を累ねました、「めづらしいな、君が：君が斯う來るとは：君が」。
如何にも意外といふ風情、「めづらしいな」と「君が」との卸賣をはじめて居ます。儉の癖です、かはッた力造。——
「なぜ友人の家へ來て何故めづらしいか」。
「だッて、君はつひぞまだ一度も僕等の下宿を訪うた事が無いぢや無いか。それだのに今日に限ッて：何たら風の吹回しか」。
「つい機會が無かッたからだ」。
それでも毎には似ず脆く、やさしく出た底意、Mの無心か、いや／＼眞逆。

實は今日此處へ力造が來たのは晴れぬ疑惑を解からと思ツたからです。何の疑？　阿梅のことです。

また今日も此間のやうに先づ阿梅を話の題に入れてくるその準備に半時間ほどは費してしまひました。が、どうか角うか、その内にいつか本文に入ツたと見えます。

「君がそのシスター(妹)を美人ぢや無いと言ツたな？」

「ふむ」、何やら解しかねた體、「なぜか」。

「なぜでも」。

「君、見たか」。

おのれ意地のわるい問！　放たうとした矢先、銃の火繩を打消した礫。

「しかし、なア」…

何が「しかし、なア」です。友禪の長襦袢に男靴は多く「ぶる」の醜體です。連絡の無い無理な調子は轟く胸の兆候です。「見た」といふ趣は言葉の外に醜婦として居る工合、悟ツたか、相手の書生の顔には微笑の雲。

「目と眉とは宜いがやはり口が如何にも見苦いな。けれど後から見れば…

思はず赧くなる力造の鼓膜。

一まア…色も白いから…美人とは見えるだらう。が、匿すには及ばんて。見たンだな、君も。」

「でも」。透かし出したといふ樣な挨拶。

「見たンだ、見たンだ。挨拶が鈍い、勢が無い」。

やゝ根城は陷ちさうに窺りました。今の處、羨ましいのは米で馬を洗ツた昔の智慧です。

第十四齣　曳出す奇遇の話

偏屈は意地の徽です。情を制すといふ意地がわるく向くと卽ち偏屈が出て來ます。之を褒めて言へば、それゆゑ、豪傑の度量です。が、之を貶して言へば負惜の骨頂です。よく向けば桓溫の器量ともなります。しかし、わるく向けば清盛の癖ともなります。今の力造、たゞ情を控へるだけの好みが終に高じて折々はわるく傾きました。美しくないものを强ひて好むと出掛けたからには今は阿梅が些と好ましくなりました、內心はどうにもしろ。

前回おとづれた書生の下宿から歸りがけも胸はその思にのみ蝕はれて居ます。

一案外な…美人で…しかし、すでに美人であるからには前公言した言葉に背いてしまふやうで…そら見ろとわらはれるのも口惜しいて」。

まだ夫婦になると決りも付かぬうち…おそろしい想像です。

「醜婦だとばかり思ツて居たが…醜婦なら面白いのに…あゝ醜婦でもなくて殘念だなア。淺利與市、あの風が中々愉快なのだ。それを學ばうと思ツたに…美人…阿梅…なぜ醜婦では無いのだなア」。

ありがたくもない、醜婦であれとの御註文！しかし、また捻出せば自身の眼も疑はしくなツて來ます。いや、自身のみで無い、友人たちの眼さへまた違ツては居ぬかと思はれて來ます。

「變だな、あの後向…領元の…束髪…花かんざし…あれで…左樣だ、醜婦では決して無い。なぜ、前に島田や何かが(友人の名)醜婦を好むなら杉田の妹を好むがいゝと言ツたらう。杉田、まちがひか知らん、あの杉田別宅といふのは素清の家では無いのか知らん」。

途を行けば出逢ふものすべて、考の種になります。出逢ツた何處かの下女、卽ち譯して醜婦の見本、それを見れば「もし阿梅が」。出逢ツた何處かの紳士、言變へれば兎も角も御手車、それを見れば「もし杉田は」。素清、阿梅、わからない！　美か、醜か、醜ならいゝ！

しかし、不運な內心！　その內心はやはり美を好んで居るかして、後ればこの考も折々顏

を出して前の意地の中へ薬味を添へなくもありません。

「けれど美人…何も美人を娶ツたからツて…それりやア笑ふ奴が馬鹿なンだ。非理の嘲罵、それは至人には朝日の雪…いツそ…賢いもの…娶ツても」。

また力のおとろへぬ意地、

「待てよ、が、笑はれるのも否だなア」。

更にいきほひの燃える意地、

「しかし、また、美人を好むのは世の常で…だから俗を抽くのも愉快だ。俗を抽く。人の出來ぬことを爲る。美を好まずに醜を好む…あゝ、その方が面白い」。

かたまりさうで無くて固まツたやう、定まツたやうで定まらぬやう。浮いたやうな、また沈んだやうな。それでいつか、下宿に歸ればはや冬の日は名殘なく暮れさうに爲りました。

今夜もまた車を曳きに出るとの事です。支度してそろ〳〵出掛けて居るうちに日も十分暮切ツて、もはや(力造の言葉を假りて言へば)安心です、他に見られる掛念もありません。只有る榜示杭の處に車を休ませて、其處に居た二三人の車夫どもと會話をすこしばかりして居る內に——力造は跡から來てその端の方に居ましたから——早速目に注まツて呼ばれました。が、その呼んだ人といふのは卽ち前の美佐雄です。此夜は、それゆゑ、杉田が梅本に居たその時です。

それで美佐雄に小蔭に招かれ、依囑の筋を聞けば…實に案外…杉田、わが胸に折々はさまよふ教師の杉田を…どうするのか、手段は作者もまだ言ひますまいが、しかし、酷い目に逢はせろといふ事です。

そして金を五圓くれるといふ、それを取ツていゝか、取らないでいゝか、實にまたその時は分別が一寸つかなくなりました。元より力造の平生の性質として、美佐雄が賴んだやうな、そンな後暗いことをば何うして出來ませう。出來ないのでは有りません。爲るに忍びないのです。「これは、ま、好い機會に投じたものだ、もし己が賴まれなければ杉田はあぶなく爲る處だ。しかし承諾しなければ更に他の車夫に賴むだらう。これは假に承諾する方がいゝ」。

假に承諾すること、つら〳〵考へればそれさへも一寸人をあざむく事と思はれて心持よくも無いほどですが、しかし無法な狼の齒は羊のため拔いてやツてもいゝものです。あざむくといふ事、屑くはありませんが、一先力造も假に用ゐました。さうすれば金を五圓くれるといふ、その金を受けて吩咐どほりに爲ないのはいよ〳〵罪の上塗です。「これは受けない方がいゝ」。潔白な雪は假初の塵のかゝるのを物の數ともしません。

受けないので美佐雄は怪しむ體。しかし此方は何氣も無い體。それから美佐雄にわかれて暫時あツて、見事、梅本から呼駐められましたが、また今更苦勞になツて來たのは杉田に顏を見られる事です。

前夜はじめて杉田を載せたときには如何なる僥倖か、終に杉田にも顏を見られず、また自身さへ意でも迎へなかツたため、何とも思ひませんでしたが、諺にもいふ疑心の暗鬼、小さいと思へば富士も箱庭の土塊と均しく、又大きいと思へば針も朝比奈の鐵棒です。今載せる客は杉田、杉田しかも教師の杉田とあらかじめ之を氣に持てば身を氣づかふばかり、いまはむしろ臆病とも言ふべき體。それで、命令を聞く時にもよく身體を光明に向けず、梅本の內儀にも一寸妙だと思はせました。

やがて曳出しました。載せる時にもたしかに見た、主は紛れも無い素淸です。今まで力造の胸に色々の思案が帝座をあらそツて居た其內、

しかも絶えず消えずに皇家の代々を萬世不易と極めて居たのは「杉田が藝者買を爲るか！」と強く心から驚いた考です。

曳出せばまた胸は更に一層の絲をもつれさせるばかり、大風の火事同様、火は遠近に移ります。それで無くて晝間さかりであッた阿梅の事、それが今は平方立方を作るほどです。

が、それよりも、何よりも、更に力造の心に一層の重量を置いたのは美佐雄の事を告げようか、告げまいか、告げれば自分が車を曳くのがわかるし、告げなければ（それでも！）自分が折角の功績をしたのが分解らずにしまふし、さて何うしたら宜いだらう。およそ、これほどに考を回すこと、これが車を曳きながらも考深い觸を湧かせた薪です。

第十五輛　曳出す面會の話



ツかりとなるばかり、心は全で物思の巢になッて居る内にいつか人力車は本鄕元町まで來ましたが、もとより力造は杉田の家を知ッて居ます、心で命令するでも無くておのづから足もかねて心覺の方へ向き、やゝ杉田の家の前まで來て、はツと氣が注き、それと知らせぬため、わざと足を急にして今やその家の前を通過ぎさうにするその途端客の杉田も聲を掛けました。

車を留めて杉田は蝦蟇口を取出し、錢を數へようと思ひましたが、暗くてわかりません。そこで提灯を見せろと言ひました。

これには力造も困りました。今こそは下手にまごつくと顏を見られます。無論今日の美佐雄の始末は此處では打明かさず、翌日無名の郵便で知らせようと思案は決めて居たのです。それ故、今の處、どうかして杉田に顏を見られまいと思ふばかり、仕方なく提灯をば差出しましたが、顏は横に背けて居ます。

しかし提灯を差出す時、どこやら躊躇して居た車夫の訝しな素振、それには杉田も氣が注ぎました。錢を數へながら車夫の顏を見れば、もぢ／＼して顏を背けて居ます。が、頰被りの間にほのめく横顏のけはひ、それが何處やら自分の記憶にある人の顏らしく思はれます――誰とはまだ考もつきませんが。

「十錢か」。杉田は問ひました。

「はイ」。

きはめて簡畧な應答があッたばかりですが、しかし杉田がいよ／＼不審と目を注けたことは「はイ」とこたへた車夫の返辭、それを言ふのに車夫は顏を此方に向けません。

心理にも背いて居るをかしな素振、どうしても子細が有りさうです。おもひやれば此時の力造の胸の噪ぎ、さぞ混雜して居ませう。

處へ、實に間のわるい時には間のわるい物です、氣が附かぬ間に提灯の蠟燭がたふれました。と知ッた時には既に早提灯は燃出しました。如何に樣子を窶ッて居た孔雀でも横嵐では狼て騒きます。意外な事の攻擊にはつい力造も顏を此方へ向けました。しかし、四邊は數倍の明らかさ。暫時杉田も目をば提灯に注ぎましたが、しかしその心の不審は忽にその目の方向を變へさせました。

見ました、實にこの時こそ初めて杉田も本當に力造を見ました。ぢッと見詰めたのでも有りません、力造の顏は猶今でも下と横とを兎角向いて居るのみですから。たゞ、しかし臥起は狗もよく蹈回り、堰かれた水は岩をも流します。見たいと控へて居た目ですもの、この時の一つのきらめきは平常の倍にも當ります。若い人の婚禮の見合の時にもこの見きが必ず出るとか、これは經驗のある人から作者が承ッたのです。大方さうでも有りませう。

力造の消防で提灯の火は消えました。しか

し、杉田の不審は消えません、燃立つばかりです。今さら前に阿梅が話した雜誌の事も思出さなくも有りませんが、しかし餘りの意外には暫時その舌の根も封込まツて居ました。力造の方の心痛は言ふまでも有りません。狡猾な目は既に(見合はせるのは惡いくせに)杉田の顏を見ました。その杉田の顏を見た時は只杉田が自分の顏を見たか見ぬかそれを知らうと思ツたからです。そして見れば杉田は此方を見て居たのですもの、急に驚いて此方は眼を横へ挒げました――しかし、何の益も無く。

「君は」、杉田が叫んだこの聲――發矢――もはや胡麻化せません、「君は、あの來間君では」・・

言ツてずツと側へ寄ツて來ました。

「え、來間君・でせう?」

「へエ?」どう答へていゝかほと〳〵分別も付かず、仕方なさに只「へエ?」とばかりよわい楔子を入れました。

「わたしは杉田です、素清です」。

力造をば早十分認めて仕舞ツた杉田のこの言葉、今更匿す譯には行かなくなりました。匿すわけには行かなく爲ツた七分三分の際です、さすがに力造も胸を決めて仕舞ひました。實にこの力造が車を曳くのは困ツて曳くのでも無く、その內心をあからさまに言へば、たゞ人に磊落な男だと思はれたいと考へたばかり、つい如此奇を好んで妙な事を爲て居たのです。そして、當座は何の原因も無く、たゞ何と無くその子細を隱したく思ツた、その心がいつか重量を有たせられてやがて一時力造をして心痛の人、一寸見ると磊落の身にも似合はぬ小心翼々の者と爲せたのです。が、その隱立も既に無くなりました。たとひ隱さうと思ツても最う無駄です。今の處、胸を落付けて仕舞ふより外好い手段も有りません。諺にも「雨が降れば地が堅まる」、から事がやぶれて來れば、それ故斷然と肝をさだめました(たゞし、この「斷然」には「餘儀なく」といふ意味が有ツて)。

「はツ、先生ですか」。しかし、やはり是だけしか言へません。

「あなたが來間君・・あなたが車を・・あなたが矢張り斯う夜」・・

杉田も言葉を前後させるばかりです。が、屹度心注きました。

「奇緣ですな、私が貴君の車に乘つて・・ま、一寸御寄んなさい、私の處へ」。

はや先へ立つて門を入りさうにする杉田。しかし、中々承知せぬ力造。

「いえ、先生」。

「なんです」。

「また」。

「いゝでさア、寄ツておいでなさいよ」。

「しかし、夜更です。深夜に人の家を訪ふのは非禮です」。

「非禮でも分數でもいゝでさア。そンな事言ツたツて・・何か用が有るンですか」。

「いや別に」。

「そンなら宜いでせう。ちツと御聞申したいことも有ります」。

平常なら是くらゐでは中々肯かぬ氣象です。が、しかし今日に限り、早く承服して仕舞ひました。なぜでせう。あの阿梅の・・

今はもウ破れかぶれ、車を曳くといふ類の無いこと、それを杉田に見せてもやりたくなれば、まだ部屋にも入らぬ前から早くも想像は湧いて來ます。「杉田も嘸おどろくだらう」。「更に子細を語れば猶おどろいたらう」。何處やら、錯雜した人情は妙なものです、力造も心嬉しいやうです。筒袖と股引、それが却ツて錦繡のやうに思はれます。

部屋に導入れられては杉田の出て來るのを

待ッて居る間もその妙な身形のまゝ平氣で絨氈の上に坐ッて居る體、茶を持ッて來た下女も大きに愕きました。不思議さうに力造の身を目で測量したばかり。半分爲掛けた御辭儀を中絶させて仕舞ひました。

やがて杉田は出て來ました。蒲團を勸めれば力造は憚はずに坐ります。神色も自若として居ます。

「貴下が人力車を曳かうとは些とも思ひませんでしたが、全體どういふ譯なのです」。

恥ぢる體も更に無く、たゞ微笑して居る力造の體には杉田も意はず首をかたむけました。

「夜は新聞を賣ッて辛く金錢を得てをるものが書生の中に有ることは聞きましたが、君が、あなたが、まッ、車を曳くとは…やはり學資のためですか」。

「はイ」、何處やら引立ッた樣子です、「學資を得るためです」。

「御兩親は無いのですか」。

「有ります」。

「有ります?」ほと〳〵意外の體です。

「はイ」。

「扨は貧苦の身だ」と杉田も心得ました。それから又その心持で問ふとまた左樣でもありません。つまり、段々との會話の末たしかに分解ッたのは力造がむしろ奇を好んで車を曳いて居たといふ事で、さう知れば杉田も一際おどろきました。が、その驚も最初の内はいッそ疑の方に近く爲ッて居ました。「あゝは言ッて體裁はつくろふものゝ、まさか實は左樣でも有るまい」。一旦は信じずに居たものの、しかし力造の平生の樣子から推し、また今日の力造の辯明の工合から考へれば全く跡方の無い譃とも思はれず、終に十分信じて來ました。

「それは洵に近ごろ意外な事を爲さいましたな。しかし」…

すこし笑を目元に帶びました。

「奇を好み過ぎた事では有りませんかね、故さらに人力車を曳くと言ふのは」。

「なぜですか」。

「外に手段も有りませうが」。

「有ります」、いままで自分で秘めて居たのが飛んだ益に立ちました、「けれど、わざ〳〵人力車を擇びました。が、奇を好まんければこそ非常に人に祕して居ました」。

「しかし、それで何時まで車を曳く氣です」。

「それは分解りません」。

言ふ事がすべて意外です。杉田も心そゞろに面白く思ひました。が、それより何より今こゝで力造には胸に大變の思案が湧いて居るのです。

風琴の音を聞けば教會が想出され、また碇を見れば航海の事が心に浮ぶ、それと同じ譯で今力造が斯うして杉田の家へ立寄り、杉田とかれこれ會話をして居ればおのづからかねて胸を領した阿梅のことが思出せなくも有りません。

「此處は阿梅の兄の家」。「それゆゑに阿梅も度々此處へ來る」。「だから床の間にある山水の幅、それも阿梅が曾て見たらう」。「また床の間の松の柱、それも阿梅が曾て見たらう」。「松の柱、床ばしら、俗に飾女房の比喩——女房、細君、阿梅がもし人の細君になッたら」…

鏈を引くまゝに心は色々の形になります。

「今夜もし此處へ來て居るかなア」。さう思へば目は襖の方にも向きます。「この襖を開ければ次の間、その次の間の次の間あたりに」…

しかし、この家の者はまだ起きて居る體です、もはや夜更ですのに。それで、氣に掛ることが一つ有ります。をり〳〵何かみし〳〵といふ音が襖の向うで聞えます。また襖へざらりと着物がさはる氣はひも有ります。「下女が己を怪し

んで覗くのか。それとも、もし阿梅孃が」‥

これをはげしい意馬と嗤ふのは野暮です。大した野心の無いときに馬猿は隨分さわぐものです。

しばら〱の間は杉田と力造との間に色々な話もありましたが、結局杉田は力造に人力車を曳くのをやめてわが家に來て居たら何うだとまで心を傾けて來ました。が、まだ力造はそれに承諾をも言ひません――心では否でなくも思ッて居ながら。

やがて暇を告げて歸りさうに爲ました。やゝ立上ッて襖を開くと同時に奧の間から‥聞けば‥意外な‥人の忍泣する聲がします。子供か大人か女か男か、それも分解らぬ中です、それを力造に聞かせまいと胡麻化すやうな杉田の高調子。

「寒くなりますな、夜更になると」。

第十六輛　曳出す深夜の話

はや祕密の蓋も取れて人力車を曳く顚末が杉田にも知れたからにはそれが磊落な氣質ゆゑだと更に他に思はせたく爲ッて來れば自然力造もその後は際立ッて磊落をよそほふやうに爲りました。

人力車を曳くのを廢めて我家に來て居ろと杉田に言はれても直に諾しては面白くも見えぬため、ことさらに返辭をはか〲しくも爲ませんでしたが、しかしそれから空車を宿へ歸したのち、わが下宿に歸着いた後、また強く心に浮んで來たのは杉田の家を立出でるとき洩聞いた忍泣の聲です。

忍泣の聲、はや耳の邊をばさまよッて居ぬ聲！　しかし、心で心に呼起して假に有るとして考へて居る聲！　さすがに敏かッた記憶を無上に信じてその聲の評を後ればせながら爲て見れば――

どうも男とは思はれぬ方です。搖ぶれてそして鋭く響いて居た樣子、とても太棹の咽喉では無ささうです。さうかとて年に曝されて艶も消えた老人のやうでも無い、すなはち若い方の類で、引括めて之を決めれば若い婦人の聲らしいです。

「あるひは阿梅孃が」。

しかし同時に、

「何故だらう」。

何故だらうと考を凝らしたにもしろ、その疑が晴れる譯はありません、そのまゝで居て。それとは知らぬのでも無くて、それでまた無駄に考へ入ッて居ます。泣聲の主は阿梅か、または餘人か、それさへもよく分解らぬ始末、それで心の重量はわが望む方へ物を近づけます。まだ根は生えぬ阿梅かとの推察、それが言はゞ化學作用で出來た銀樹、假の姿を眞と見せます。

これからは猶々磊落をよそほはうと思ふ下から流石に今になッては何處となく阿梅がゆかしく思はれて來るやうで、左樣また思込んで行く内には、凡夫は凡夫、杉田の家に引移ッてそれからは最早人力車を曳くのを止めようとも考始めて來ました。

しかし、左樣と假に心を決めて見れば、また何と無く良心が蔭で小言を言ッて居るやうでも有ります。「杉田の家へ引移る‥折々阿梅も來ようから」。これがやうやく熟して來た心。「杉田の家へ引移る‥法律がよく學べるから、實に學問のため」。これが良心の小言に口對する別の心です。みづから組み立ててみづから惧れ、みづから驚いてみづから辯護する埓の無さ、意地のわるい戀はまことに強面いもの。意味こそ違へ、「情が仇」との「しがない」文句、それも此場へ用ゐられます。

それで杉田の家へ引移るからには、何か磊落

の事をして一つ人をおどろかせてもやりたいです。「どうしたら杉田がます／＼おどろくか」。今は磊落が性質の地とならず、むしろ假の色彩となりました。

　これらの考を繰出して居る時は丁度いま寝床に入ツて居る間です。杉田の家に居たときでさへ早よほど夜は更けて居ました。ですもの、今は既に午前三時の前後です。犬の遠吠は夜中の付物、その犬の遠吠もあまり多くも聞えず、天地は此處に「寂寞」に所領を讓ツて明鴉の恢復、朝雀の義兵を待ツて居るのみです。下宿屋！　殊に儉約な力造の部屋！　夜明の燈も有りません。部屋には殘る隈なく闇黑が充滿して居る工合、横町の米屋もこの位に量を廉く爲てくれたら宜いとこれがために恐ろしく飛んだ感を起しさうなのは日錢を一升買の釜に食はせる山の神でせうか。眞闇、いはゆる黑白もわかぬ處！　其處をまじ／＼と寐床から見て居る心持、いゝか惡いか、何だか、角だか、まづよほど妙です。聞耳を立てれば廊下へ歩行けばみし／＼と音樂を奏してくれる安普請の板。越の隣の部屋から洩れる「夢」の言葉。夢も中々口を利くものです。猶更耳に付くのは鼾の合奏。哲學者を氣取ツて妙だと心を注めれば注めるほど不思議です。鼻の加減や咽喉の工合で、これも人の面、人の心と同じく何れも互の相違が有ツて、ぐず／＼と聞えるのもあり、また滑に辷るのも有ります。力造が此方の寐床で一つ咳を爲れば、その咳の響が耳に入ツたか、中には一寸止まるのも有ツて、またそれも姑くして居る内に低い音から段々せり上げて果は又元の木阿彌、大蛇を冬でもこしらへ出します。

　寂寞の中、闇黑の處、そこでさへ心は、醒めて居る間は物に捉へられるものです。阿梅と考へ、杉田と思へば更に寐付かれず。しかし折々は睡魔も萌しては來ますが、妙なもので、むしろ寐ずに考に鎖されて居るのが何やら心嬉しいやうで、折角駕を枉げた睡魔をさへ一寸叱り斥けてまた目を皿にし始めます。が、見れば四邊は眞の闇。見ても更に面白くも無い、そこでまた目を閉ぢます。閉ぢて心だけは覺めて居るばかり。否、覺まして居るばかり。眠入ツて居れば左程とも思はれぬ片臥の痛さ、今は中々度を強くします。詩經にも有る「輾轉反側」。あちこちへの寐がへり盡し。胸に手を載せると幻されるといふ小兒の時の話も思出されては、譃と知りつゝも側へ手をやツて、後で氣が付いて我ながら哂出すばかり。寐がへりをして居るうちにいつか下の部屋から聞えるのは二三ケ月前、何でも直してもらツたと言ふぼん／＼時計。「だから間違ツては居まい。それで四つ打ツて：なるほど四時か」。寐床は次第に熱まツて足の凍瘡が時を得貌にむづ／＼して來れば物事がまた何と無く焦躁ツたくなるやうで「ああ最う寐よう」とわれから宣下はするものの、しかしまた想像といふ情のこはい物がいまだに眩を張ツて動きません。「あゝ人は皆寐て居る」。物思（否では無くてむしろ樂しみな物思）、それを嘗めて見たさにわざ／＼睡魔を追退けて居た時を次第に埒も無く怨んで來れば、更にむしやくしやと夜具のぬくまりゝ氣に爲ツて來て、また人の寐息も邪魔に爲ツて來ます。

　が、その内に、それで世は持ツたもの、いつか寐入ツたと見えて不圖目を醒ませば下宿屋の下女が雨戸を繰明けて居ます。

「おや明けたか。うンにや寐たか」。

　寐たかも無いものです。證據の欠伸が三つ四つ出て來る風情、「わたしが此ゝとにり出るものを」と言ひさうです。

　けれどまだ朝は朦朧といふ處です。日の光もまだ若いか、薄青く見えます。風が吹く時には負けずに謠出す窓の戸の隙間、および文盲の

目と親類の節穴、そればかりが恐ろしくきらめいて居ます。「起きようかなア」。けれど何だか溫柔の鄉の離れにくさ。夜具の中の溫まりは口に言はれぬほどの快さ、蠟燭の心といふ身の恰好、王公から裏店まで此處の眞の味は更にかはりません、こゝの眞の美は卽ち何方も同じです。まんじりと目を開けて仰向になッて天井の棧を勘定し、五本、六本、七本、と數へ了ッてはまた元へ戻ッて更に一本、二本、三本。麁末な天井板の節穴、およびまだ拔けて穴とならぬ節、それらを何か類似のある物に見立てて見て、或は自分が曾て見聞したものに比へ出せばそれから緒は湧いて出て來てぐづ／＼また色々な考が――兎角阿梅などの方へ移りながら――出て來ます。

頻に考へて居ます。大抵は目が覺めるや否や忽に起きる力造ですが、今朝ばかりは中々起きません。「起きようかなア」とも考へれば何となく起惡く、たゞ未練が殘ります。「起きる。起きれば斯うまづ腕が動いて、そして斯う夜具が持上がッて：瞬く間：このありさまが全でかはッて」。

たゞ怠ッて起きずに居たのでもありません。外に深くまた考込んで居るからです。どう考へて居ました。どうか、それはまだ祕密です。たゞしかし、やがての內に「うン左樣だ」――この一言ばかり。跡は莞爾と笑ひました。

第十七輛　曳出す當惑の話

池のほとりの石に腰を掛けて茫然として居る心の底はどんなものでせう――阿梅の。

ねたましい鴛鴦は淸い水の胸に身を託しておもむろに文字を曳いてあるいて居るそのやさしさ、詩人を惱殺するところです。打續いた日和のうらゝかさ、刃の風も刃を鈍らせて日色と共に春をもよほして居るこの頃、花もよほど咲いて居ます。さゞ／＼として水際に波の痕を見せて居る捨石。水の面を撫でて來る風にわなゝく早咲の菫菜。見る物として面白さが無くも有りません。しかし、物を思ふ身にはみなそれ／＼に感慨の本で。鴛鴦を偕老の比喩に思寄せれば、菫菜はまた手を引いて春野遊をする睦ましさ、その邊を心に喚出す根となります。

「どう爲たら宜いだらうかな。阿父さんも阿母さんも如此ばかり言ッて居るから仕方が無い。兄さんは、まア妾を贔屓して居てくれるけれども、老人といふものは我慢をば何處までも推透さうといふから：あンな美佐雄なンぞを：で、兄さんの言ふ事をも肯かずに居る。人を美佐雄の嫁に爲れッて：あんな美佐雄、男らしくも無い、柔弱なものの。誰に賴んでも仕方が無ささうだ。たゞあの來間といふ人、兄さんも大層褒めて居るが、今時には珍らしい心掛。此間の晩はじめて兄さんが家へ呼込んでそれでやうやうその人力車を曳く子細がわかッて：人物は何うだか分解らないが、しかし氣象はあの人なンぞが一番」：

思進んで來る內にも苦しいのは胸につかへて居る一條。――

「しかし、もウ：壓制婚姻：人を、人を美佐雄の處へ片付けるといふことに爲ッて：しかし、兄さんから聞けば美佐雄は薰とかいふ藝妓と馴染んで居るとか言ふことだが、またそれで親たちに勸められたにもしろ、妾と婚禮する事を直に承諾したといふのも可笑しい話。いゝやいゝや、可笑しくは無い。どうせ藝妓ぐるひなど爲て婦人を玩弄物にして居る人間だもの、婚禮を一生の大事とも思はず、人を猫か鼠でも貰ふやうに貰はうと承諾することも有らう。それ、そンな不德の、それで柔弱な、そンな男の處へ妾をやらうと言ッて：いやだと言へば阿父さんのあの頑固、愚癡ッぽいのが老人と


(原本插畫)

は言ひながら直に親子の縁を切るの何のと分解らない事を言出して、それは分解らない事だとすこし理窟がかツた事を言へば直に今時の婦人はそれだから生意氣だ、口ばかり達者だと一口に言消して仕舞ふとは、ま、勿體無い言葉だけれどもあンまり分解らないといふものだ。肉親の親子でさへ斯うだもの。わからない姑でもある處へ行ツた人は嘸くるしいだらう。苑田さんなぞもあゝして妾と一途に卒業して直に御嫁に行ツたけれども人の浮評で聞けば大層姑ににくまれて居るとか。その後逢ツても妾などには一分一厘もそんな事は言はないけれども…あの苑田さんの姑だツて以前は卑しいつとめをして居たものだと言ふから分解らないにも違ひは有るまい。」

しんみりと考へ凝ツて來れば溜息ばかりが時を得貌です。つれない浮世の浪風！ 人に擇出される身の薄命！

「あゝ〳〵、なりあがりの多い世の中だから仕方も無いが、今の中等以上の人の處には案外また昔の因循な分子が殘ツて居るとは…それは家でも知れて居る。いまでも下宿屋や待合と心安いだけ有ツて家の阿母さんたちの移り氣な、たゞ左團扇をばかり娘からの恩がへしと思ツて居て…他人の處へ妾が御嫁に行けばどうしても其處へ行ツて勝手が出來ないからそれで親類の美佐雄の處へやらうと思ツて御居でなさるとは何ぼ何でもあンまりな。本當に兄さんが言ツたとほりさ、「誰のための婚禮だらう」。だれのための利益を計る婚禮だらう。娘を嫁にやツて、その先まで搔回さうとはいくら昔氣質だツて論外のはなし。嫁にやるからには妾の身の末始終の利益を計ツてくれるのが親の義務だらうのに、夫をば何とも…いや、思はないのでも有るまいが、兎に角思ひ付かないで。美佐雄は放蕩だと言ツても、妾の一人ぐらゐ置くのは男の働きだと言ツて居る阿父さんたちだもの仕樣か有りや爲ない。困るなア。美佐雄に何の行末の見當が有らう。どうか、この緣談をやぶる工夫は無いか知らん。しかし、妾だツて無教育の婦人でも無いもの。淺はかな事をして親たちを威すのも否だし。それで無ければ…あゝ、もウ今日結納を取替せると言ツて居るとは…

「御孃さま、え、もし、御孃さま」。

いつか後へ來て呼んだのは下女です。おどろいて振返る阿梅。さらに言葉を繼ぐ下女。——

「御兄イさまが」…

「えゝ？」

「御孃さまにちよいと」…

第十八輛　曳了る團圓の話

狙仙の横物を懸けた杉田素清の書斎に素清と阿梅とは何か話をして居ましたが、その筋はわかりません。たゞ阿梅の憂顏ばかり、それがいくらか話の意味をほのめかして居るやうです。

ところへ、下女が取次に來ました。襖を開けて敷居越に名刺を一枚出しました。

阿梅がさらに取次いでその名刺を取上げて見れば西洋紙の切端の手製でそして署名は來間力造です。

「あら來間ッ」。

言ッたばかり。兄へ渡せば兄も見て、

「人力車夫さんが來たンだな」。

笑ひながら阿梅の顏をじろりと見てまた下女に向ひ、別の間へ通せと命じました。

阿梅はいまさら胸をとゞろかせて居ます。杉田と來間とは師弟の間柄。敎へてもらふ人の處へ敎へられる人が來るのは何も怪しくは有りません。怪しくないとは知ッて居ます。それで、一つは胸のどきつきを隱さうとての故さらの怪訝。――

「來間…あのやッぱりいつかの？」

「あゝ。御前が あの 婚禮の一條で泣いて居た晩、來た一件さ」。

あらましを說示して杉田は待たせて置いた部屋へ行ッて力造に逢ひました。時候の挨拶も濟みました。

「先生」。

笑ひながら淋しさうに力造が出した この 一言・際立ッた言方ですから杉田も烟草を吸付けようとする手を一先控へました。

「御さしつかへは御座いますまいか」。

「はア？」

「今日から直」。

「何です」。杉田には分解りません。

「此方でわたくしが書生となる事が」。

ても意外な。だしぬけに。杉田は力造を見詰めて居ます。

「先達て御勸ゆゑ荷物をまとめて下宿屋を引拂ッて來ました、先生」。

「なんですと、荷物を…まとめて？」

「はイ」。

「いや、どうもそれは」。

「御不都合ですか」。

「不都合でもありませんが、しかし唐突でしたな」。

「御すゝめでしたからです」。

言へば理窟は言へるものゝ、もと／＼力造をば奇として居る杉田ですから今すこし阿梅の婚禮一件の紛紜があッて此他人を置くのは不都合ですが、思切ッて竟に承知しました。

直に荷を運込んで一々家内のものに挨拶をして居る力造の姿のおもしろさ！ そしてその最後阿梅とはじめて姓名を告げて挨拶をしました――阿梅と――醜婦だと言はれた阿梅と――目と眉だけは非常に好い阿梅と。

＊　＊　＊　＊　＊

結納も濟んで阿梅と美佐雄とはいよ／＼その内に婚禮する事と定まりました。それを眼前に見聞して居るのが力造です。阿梅の性質のかしこさうな處はいよ／＼あり／＼と力造には見えます。また阿梅は(氣の故か知らん)よく力造を敬します。兄が居ぬ時はよく書物の質問を力造に爲ます。それで阿梅の書物についての不審は兄の居ぬ時に多く有るやうです。

こゝで力造が先夜の美佐雄の事をのこらず打明けて仕舞ッたなら…

しかし、儘にならぬが浮世！ にくらしい呉服屋は嫁入着物を持ッて來ます。氣障な近處の人は顏を見るともはや御愛度を言ひます。

その内に美佐雄が杉田の家に來ました、今日は杉田兄弟の兩親は眞砂町に居ず、此弓町の方に居るといふ事ゆゑ。それで力造は取次をしました。取次をしてその人の顏を見れば自分に馬鹿なことを頼んだ人です。

「あれから直に御歸りになりましたか、先夜梅本から貴君は」。

人が揃ツて居る處での力造のこの打明——たじろぐ美佐華の返答。かはる美佐華の面色！　何か子細は知らぬながらも小氣味よささうな杉田素清のぢツとの見詰。ならびに阿梅の横向の微笑！

＊　＊　＊　＊　＊

これから幾日經ツても婚禮は有りません。阿梅はやはり處女で居ます。素清は力造を褒めて居ます。老人夫婦もいつか力造の勉強好なのに感心して來ました。阿梅は？　やはり質問を力造に爲るのをたのしみにして居ます。

代言人試驗が有ツて、それを受けたら力造は見事に及第しました。素清はじめ老人夫婦さへ骨肉のもののやうに喜んで、ことに阿梅は手製の綵花を力造に與へて之を喜びました。

阿梅は何處へ片付きましたらう。力造は誰を妻としましたらう。あながち區役所の帳面を見に行くにも及びません。たゞ注意すべき事は老人夫婦も力造を氣に入ッたことです。跡は慧眼の讀者の御推察に御任せ申します。

（明治二十一——二年作）

この子

この號から外題のとほりの物を出します。金扣鈕の中絶につき、色々讀者諸君から御催促もありますが、いさゝか思ふ事が有ッて燒けた金屎をも取上げません。これはその御埋合はせです。丁度時も桃の節句、「この子こゝに歸ぐ」の古詩に據ッて婚禮の前後を書いて試たのです。さも經驗でも有るやうに見せる大膽は主人のいつもの盲蛇と御推察の上、この小説を書いて居る間はどうか主人を乳臭の少年で無いと假に御覽を願ひます。でも無理な。

文體は言文一致の中流ですが、出來るだけ敬語と助動詞の數を減らしました。時(過去、現在、および未來)の用ゐ方も今度は成るたけ律で推せるやうにと勉めました。「爲ず」の昔ぶりは悉く「爲ず」の今ぶりに改めようと一時考へて居ましたが、今思ひ直す事が有ッて更に古ぶりにしました。

美妙齋主人

第一 寝起き



たしは醫者で、何でも物を丁寧に見たり考へたりするのが私の性質です。それゆゑ職業を行ふにも考へが綿密に行き亙るためか、敏捷なことをば爲ませんが、また非常な失策をしたことも無く、そして婦人科と小兒科には性質が適當して居ますので終にこの二つを專門としました。それを見て、眼科や外科を修める私の友だちは私をあざけりました。しかし、これは公言が出來ます、わたしの品行(ことに道德上の)は却ッてこれらより優ッて居るといふことは。ある文學者も言ッたとほり、「源氏の不道德に紫式部の貞操」です。わたしが婦人科を專門とするのを事々しく嘲るのは不道德の源氏を書いたからとて紫式部をも不道德の婦人だと推測するのと同じこと。そンな攻撃は受けても聞く耳は有りません。自分で恥づるところが無ければ何が苦に爲りませう。むかし、ある繪工が人に見せるために己は繪を書かぬと言ッたのは感心な志で、わたしも始終その眞似をして居ました。

とは言へ、わたしは耶蘇信者でもありません。その信者だけの「信」はみづから持ッて居るつもりです。しかし教會へ出掛けたり何かして際立たせるのは嫌ひです。酒も煙草も飮めば飮めます。が、飮まずとも不自由では有りません。

毎朝牛乳屋が來ると同時に臥床をはなれて戸外を散歩し、散歩して來てから後、空腹へ牛乳を一合飮むのが私の習慣で、ある日もまだ夜の明けたばかりの頃外へ出掛け、高處から段々町の方へ歩いて行きました。

第一に高處で目に着いたのは下町の隙間無い屋根の引き續きで、眼はその屋根の上をまづ簡略に辷ッて、はるか果の空の根方へ奔ッて行きました。見れば、うッとりとした白茶の日色が横雲のやぶれ目に縁を取ッて居ると、すこし紫がかッた、薄睡さうな空がその間から覗いて居る鹽梅、まづい例ですけれど、丁度淺黄頭巾を被ッた令嬢の額は平常より白く見えるのと同じ譯で、その美しさ、漆で塗り上げた名人の細工かと怪しまれるばかり。横雲の形は夏の夕暮に出る雲の山とはまるで違ッて、言はゞ引釣ッてこびりついて居るといふ風情、秋の夕霞が

風に揉まれながら些し厚くなッたかとも言ひたい様子、顯微鏡で虹彩の出來の細かいのを見て造化の腕におどろいたのはまだしもの事、この壯で、そして美しい姿を見てどうして嘆美せずに居られませう。はや もう職業に取りかゝッたと見えて、有無どちらとも付かぬ薄霧を掻き分けて眞黒な、山のくづれるやうな石炭の烟を吐いて居るのは汽車の停車場で、焚火の色はまだ玻璃窓に映ッて居ます。一面に屋根は何處でも露にうるほッて活々とした色になッて、ことに鐵葉葺などは衞生に害の有る無いは兎に角、飛び過ぎる鴉の影をうつすほど滑になッて居ます。何かむかしの書物にも見えたとほり、一日に一時間づつ早く起きればそれだけ長生をして居るのだとさへいふのを、世間の朝寐好き、それゆゑ身體もおのづから虛弱になる譯です。瓦斯の光は感心にもはや消えて居ますが、街燈はまだ夜中のまゝです。街燈の光のわるさ、退場の鐘を待つ學校生徒の顏付き宜しくといふ工合——ぼんやりと僅に薄紅い色を保ッて、仕方なささう、否々さうに眞面々々として居るばかり。それも拔目なく凝る場處を見付けたといふ意氣込みで蓋ひの玻璃にむらがり集まッた露に遮られては只尸位素餐、縁も無く一滴いくらの油を費して居るのみです。さわやかな朝風！しかし、臥床にもぞ／＼して居る人には冷たい朝風！ それが摺足で忍んで來ればうれしさうに身ぶるひをして點頭き、また何か囁くものは庭の植木ばかり。植木、主には似ぬ家來。おそらくはこの風の不公平の無さ、やはり襖の隙をも穿ッて、空炷のかをりに絃歌の夢を護らせて居る、その寐顏の頰をも撫でて、紫檀縁の枕屛風に小言をも背負はせませう。實に活潑なのは鳥や獸です。さへづる雀は臍帶のつかれを思はぬのか。走り狂ふ狗は足のくたびれを考へぬのか。とばかり。その餘はすべて珍らしい寂寞——寂寞で無いところに有る寂寞。

が、朝は一分が一分と景色を變へるものです。いま靜であッて、たちまちに引窓のがら／＼いふ音も聞え始めます。そのがら／＼にも色々有ッて、勢よくがらりとひゞくのは正に丈夫な繩を下男が引いたらしく、また、が：が：らりと意氣地なく眠さうに聞えるのは左の指で目脂をつまむ下女の片手業かと思はれます。次第に立ち昇る諸方の烟——烟、それを出すためには人をも突き倒し、袖の下をも行ッたらしい履歷付きの烟！ 引きくるめて聞けば下界の聲や音は一つに混和して——自然の「はアもにい」——形の見えぬ蛇をうならせます。が、更に足を移して町へ出て見れば、朝の御祝儀に下駄屋が齒と齒とを打ち向はせるかち／＼、煎豆屋が一日賣るだけの豆をはかるざら／＼、紙屋が紙俵を土間へおろすぼく／＼、酒屋が水を酌み込むざア／＼、欠伸と練り交ぜた「お早う」、俄明りに寐床から出して居る「はツくさめ」、朝餉をねだる狗の甘たれた唸り、いづれも蛇の徒黨です。でも、まだ戶を開かぬ家、それは鴨居と擦れて出來た揚戶の擦れ目を自慢する氣か。綺麗に入口の花崗石に水を打ッた料理屋、それは錢ばなれを辛くしろとの鹽花ふりか。今掃いたばかり、まだ踏亂されぬ往來には箒の痕が波を織り出し、猶手をつけぬ路の上には昨夜買食の小僧が捨てた竹の皮が落ちて居ます。そろそろ射して來る朝日！ 土藏の白壁もどんよりとした薄色になッて四つ角にはまだ曲らぬ先から横から來る人の長い影がまづあらはれます。既に、見れば製造所へかよふ職工——古手の洋服に下駄を穿いた商標付き。急いで通りかゝる新聞配達——門から玄關まで遠い家を惡んで居る心の内。朝湯へ出掛ける俠の人——男で御神燈を吊り下げる花車な肌合。

つい迂濶々々と見惚れて、思はず時間を過ぐ

し、やがて氣が付いて私もそろ／＼家の方へ歸り掛けた途端、ばッたり出逢ッたのは私の家の下女です。

「おや、御前、使ひに行くのか」。

私は斯うまづ問ひ掛けたのを下女は打ち消しました。

「いゝえ、あの御迎へに」。

「誰を、わたしを？」

「はい」。

朝早くから家からの俄の出迎へ、大方急病のものでも呼びに來たためだらうとやゝ考を熟させるのを料らず下女はまた碎きました。

「あの八重子さんの方から」、

八重子！ あら、しばらく私の胸を去ッて居た名の八重子！ なぜ。その子細は斯うです。

あら、八重子、その八重子と私は實は婚姻することに爲ッて居るのです。

八重子と私とが交際をはじめた原因などは言はずとも構ひません。たゞ、一月ほど前に八重子と私と婚禮してもいゝとの許諾が八重子の兩親から出ましたが、それから些し都合が有ッてまだ約束だけであッたのです――私の方に都合が有るのでは無く、八重子の方に。

八重子、その八重子は私が望みに望んだ淑女です。非常に品行のいゝ人で、顏は此頃すぱアの温泉場で一等賞をもらッたそうかれい孃に似て居ます――日本人の目には事に因ると美く思はれぬか知れませんが。その八重子と正當に――すこしも良心に恥づることなく――婚禮することが出來ると決ッた時の嬉しさ！ その以後思ひ出さない日は無かッたほどです。

しかし、待たぬ時に待つ人は來て、待つ時に待たぬ人が來る、それが世の中の數奇です。どうしたことか、今日に限ッて八重子の事には――今朝見た處に八重咲の花もありましたらうに、温泉もありましたらうに――毛頭も思ひ及ぼさなかッた處へ、意外です、から八重子のたよりを聞かうとは。たよりを聞かせるために考が胸を去ッたものならば、なつかしく思ふ時には兎に角考へを無くなして置きたいと、馬鹿なやうですが、思ふばかり。八重子の名を聞くやいなや、其處が私の商賣柄、或は八重子が急病でも起ッたのでは有るまいかと――(あら、つれなさ！ また今度も考へは婚禮のことに少しもかたむかず――つい苦勞がまづ出るもので)――思へば急に急ぎ出す足と口。――

「なんに‥何だッて、八重子さんの方から」。

しかし、考へれば可哀想、私の急ぎ足に下女は忙しい呼吸――でも益に立たぬ答へ。

「なん‥で‥ござッ‥ますか」、

急いで家の方へと歸つて行けば道はもとの儘ながら舊見た物はことごとく目に入りません。

第二　取り急ぎ

歸ッて玄關へ來て見れば、白なめしの疊み付きが脫いであります。あッ、その前――門口にも人力車が有りました――車、見覺のある八重子の家の。

白なめし！ いづれ來た人は男！ 多分は八重子の父親！

急に茶の間へとほッて牛乳を飲んでも味はよくもわかりません。いそがしく身づくろひして座敷へ出て見ればやはり案のとほり八重子の父親が來て居たのです。「では八重子の急病でも無いのだらう」。やうやく胸を休めたばかり、時候の挨拶も了れば八重子の父親はまづ口を開きました。

「唐突に斯う御早く上りましたのは外でもございません、御婚禮の一條で」‥

人に知られぬ波をうつ私の心臟。

「つい彼是都合もございましたので今日まで延ばして置きましたが、もはやその邊の掛念も無

くなりましたから若し此方に御不都合さへ御座いませんものなら」…

言掛けて、てもこの人、時鳥、思はせぶりな！はやく話して仕舞へばいゝのに一寸言葉を止めて烟草を吸ひ付けました。これだけ聞けば最う如何な馬鹿でも話の意味はわかる譯。「その後はこれ〳〵でせう」と言ひたいのは山々。口がむづ〳〵して唾腺はすでに津々と催します。

やがて八重子の父親は烟管をはたきました―烟管のはたき、實、わたしには罪人の大赦。

「いつでも御近い内」…あとの言葉は愛想も無い、たゞ是だけです。

「はイ」。ても影辨慶な、わたしが此時まづ言ッたのは、否、言得たのはたゞ是だけです。

下ばかり向いて居ては羞ぢたと思はれるだらう、それも否だと妙な意地が出て來て、おのづから首は故意と持ち上がッて無心な目は先方の羽織の紐の邊に注いで居ますが、しかし、その目の落ち付きのわるさ！　一つところを見詰めて居てもまた何と無く極りがわるく、强ひて更に目を―まづ注ぐ目的を探しながら―移して居る内に、實不運！　やゝもすれば八重子の父親の目とぴッたり向ひます。不隨意筋！　解剖學を修めた頃、不隨意筋の事をば何とも思はなかッたものを。

この時の私の呼吸、それもまた奇妙です。一と口に言へば急いで出るといふ風です。が、變に意地わるく、酸く苦いとでも言ッたら宜さそうに、丁度アンモニアを嗅いだ時のやうに、咽せッたいやうな出方です。

何と答へたら場面がうまく塞がるだらうと迷付くのも初心の至り、前八重子と婚禮する約束が成ッたときは媒妁が來て私に言ッたのでしたからそれほど手持無沙汰にも思はれませんでした。が、今日に限ッては何うも妙です。なぜか譯はわかりません。しかし、臆測で言へば、八重子の父親の顔を見ると同時、「あら此人が產んだ子と私が婚禮するのか」との考へがたちまち强くもとほして來るためかと思はれます。

しかし、默ッて居てはます〳〵をかしい道理。わたしも此不思議な勇氣―實は現れたがッて居ながらそれで現れるのに躊躇して居る―氣の知れぬ勇氣をやうやくに押し出しました―丁度彈いて褒められたいは山々でも猶人に勸めさせて琴に向はずに居る令孃と同樣の。

「はイ、御尤」。

あら「御尤」、無殘、やうやく出た言葉のいくぢなさ！

「もとより私の方には大して別に不都合も」…

思へば〳〵人間は譯のわからぬもの。無論一日も早く婚禮を爲たいとは望んで居る、それだのにまた左樣思はれては何だか變だと思ふかして、すぐに同意を表して見せるといふ事が出來ません。「大して別に」とは何の言葉。そのやうに言ふと何か些しは不都合が有るらしくも聞えませう。が、それを左樣聞えさせたく思ふとは―內心は先方へ此方の好意を示したい〳〵と始終つとめて居る癖に。

そして何か思案でも爲る體で、出鱈目に首を傾けて見たり、指を折ッて物を數へる眞似をして見たり、それで聞かせたいと思ふ體で「あの何は斯うだッけと」。空虛な言葉で埋ッた臺詞…やゝ、しばらく！　もう宜い時分とやがて本文に取りかゝるとは扨々冒頭の長さ！

「しかし、かれこれ支度もいたしたうございます」。

言切りました、やうやく。それと同時、何だか眼緣が―空前絶後の私の經驗―ちよッと熱して居るやうです。また咽喉も―これは左樣ありさうな譯―乾いたやうに思はれます。

「なるほど、左樣でございませう。では成るたけ御急ぎくださいまして何うか近い内に」…

氣を變へました。

「いつ頃が宜しうございませうか。御支度は大抵？」

「なに、それは何時ごろでも…支度は大して」…とは後前の合はぬ！　可哀さうに老人へ餘計の氣の揉ませ！　あゝ、せつない胸は妙な罪もつくるものです。

第三　無名手紙

みづから人間の心のかよわさを嘲ッて、またみづから辯護をつくり設ける、その極端だけで考へれば、しるれるに叱られるか知れませんが、私が兎に角ある「信」をたしかに持つか持たぬか、それさへも疑はしくなる程です。前にも言ッたとほり、私の性質は綿密で、つねに觀察を細かにする、それが一つの原因とも爲ッたのでせう、いつでも私には世の物がことごとく美と醜と相伴ッてあらはれて、それゆゑ、およそ人のいふ「完全」または「圓滿」などの言葉は私にはよく分からず、詩人が人間を宇宙の粹と解釋しても、私は左樣思ふと同時、「けれど」の考を必ずおこすばかり。世の中に「圓滿」といふものは只私の理想のみ、その外には決して無いとつい些し前まで思ッて居ました。

が、いかにも不思議です、その私が、その宇宙をすべて「不完全の精靈」と考へた私がほとんど固有の性質を無くならせたやうに爲ッたとは――無くなし盡くしたのでは無く、只村雲を帶びた月同樣、しばらく眞如の影を隱したのかも知れませんが。八重子といよいよ婚禮するとなッては初めて「完全」といふ事が私にわかッて來ました。

八重子、どうしてそれを完全の粹、圓滿の體と思はずに居られませう――目が膽を欺いたにしろ。

八重子が完全に見える土臺は即ち八重子の容貌と氣象と品行との三つです。この内、評しやすい物の第一は外にあらはれて居る容貌で、その次は折々見える氣象、およびその次は品行です。

容貌に於ては私が自身の目で見て直に判斷が出來ますが、どう見ても美の粹です。美がもし花なら八重子の容貌は美から立つ香です。

次に氣象、これは八重子のはちと活潑にも見えました。が、過ぎぬ活潑は充ちぬ因循にも優りませう。と思はれました。しかし、それへ攻擊を向ける人も有りました。けれど現在私の目で――迷はぬ目で公平に――見た容貌をさへ人に因ッては惡評しました。それほどです、まして見易くない氣象、それにはまた惡評の有るのも至當です。「盲千人、目明千人」。と思ッて居ました。

次に品行、これは猶さらです。氣象はまだしも見てわかります。しかし、品行は左樣行きません。墨の痕を拭へば白玉はやはり白玉です。拭ッた跡で手拭の痕跡を見るのは出來ない事です。八重子の品行はもと惡かッたにしろ、今見る處ではわかりません。が、墨を落さなくても白玉は白玉であるのかも又知れません。此處で賴むところの證據は當時の八重子の品行です。

が、一點の汚れも見えません。

あゝ、「喬木は風に」の比喩もあります。神經を細微な、うつくしい物と褒めるのを嫌へば、その纖維がどうだとか角だとか言へば惡評は直に付きます。完全は人が完全と思ひにくいもの。

もし此時に心を虛しくして私の心を評したら何うでせう。まづ思はれます、「公明な(?)辯護を借りて眞理と非理とを同樣に保護する」と。實にこの評は虛心に限ッて出るものです。私の口から出たものとすれば此時は「公明な辯護を

借りて眞理を保護するのが心」と言ッたに決ッて居ます。

私の父母は故郷に居ます。前に八重子を生涯の朋友にする約束が出來た時その事を手紙で知らせてやりました。やがていよ〳〵婚禮となッて、ふたゝび委細を知らせる手紙を書出しました。

半切を取り出して墨を磨ればその墨に浮く綺羅の綾もそゞろに八重子の嫁入着物の花模樣を思ひ出させます。花模樣！　と見て居る間もありません、心は何處やらそは〳〵して居るやうで、それで物臭く落ち付くといふ樣子、すでに半切をば展べて墨を筆に含ませても、さて躊躇して茫然としばらくはその墨に浮いた綾を見詰めて居ると、やがて八重子のに似た眉の形もあらはれ、八重子のに似た鼻の形も出て來ます。

から爲れば最早身は全く想像の八重子に縛られたやうです。そのわづかに現れた眉や鼻の似寄を心へ映して、それから更に八重子の顔付全體をとかく組み立てて來るものの、しかし精神の混雜の埒の無さ！　早く組み立ててそれを眺めくらしたいのは山々。しかし、また意地わるくも別の想像が邪魔に出て來ます。わづかに八重子の顔が目の前へちらつくと同時、直に私が八重子との間にやがて產む赤子の笑顔を見て居るところが容赦なくあらはれて來て、さうすれば又心は子供の衣物の方へ方向をかたむけるやら、その子が成長して學校に通ふところに思ひおよぼすやら、變化のすさまじいものを人間の身體といふのはまだ〳〵。

けれど不圖氣が付きます。はツと思ツて時計を見れば早半切を展べた時から十分ぐらゐは過ぎて居ます。「おや、もう是だけ過ぎたか」。時間を空しく過ぐすのはわたしは元來好まぬ質。それゆゑか、あゝ空想、馬鹿々々しかツたとみづから呆れて、さてやゝ墨に筆を染めると決心して見ても、實につれなき！　前思ツた眉も鼻も兎角これみよがしに出るやうです。

半分その考を胸にこだはらせ、半分その考を打消しながらやうやくに筆を紙へ落せば——發矢——拜啓と書くところを——その代りにあらはれた文字は？　何。無殘、「眉」。

馬鹿なことと我ながら笑ひ出すばかり、書き損ひを切り捨てようと稍小刀を取り出す、その小刀、それも——・緣——切る？　切る？

切り捨てる紙を何氣無しに口に抛げ込み、唾でうるほして無心に噛んで居る内に、氣がつけば、また二三分は既に過ぎました。

更に再度！　氣をつけただけあッて今度はあやまたず、まづ「拜啓」と書きました、いや、書けました。「が、あとは何と書いたら宜からう」。ぐづ〳〵して居る内に、「拜啓」の二字の形が次第に目に深く浸みて來ると、いつかその形も御辭儀をして居るやう、うなづく樣、わらふやう、高足で步行くやうに見えて來ます。やがて一二行は尸位素餐の椅子の文句。「今般八重子と」。書いたばかりです、何を相手とする事もありませんが、胸には最早血が輕く、婉しく、さうかとて力弱くも無く、丁度水の泡を吹きまくる嫩風のやうに、うごめいて居ます。「此處を讀んだらさぞ御兩親も‥大よろこ‥」「‥び」とまでは言ひ切らぬ間、はやくも兩親のよろこんで居る笑顔が現れて——笑顔、父親のはうるほッた目、母親のはふるへる脣！

書き了ツて繰り返して終には諳誦するほどに讀み過ぐす工合、まるで私がはじめて外姬娠に付ての論文を飜譯してある雜誌に載せた時、めづらしさにその雜誌を造次顚沛も見て居ない事の無かッた、それと似て居ます。

狀袋を出して見れば、薄墨の唐松模樣です。薄墨！　その方は些。しかし、唐松‥いや、松‥常盤！

丁寧に手紙を疊んで狀袋へ入れたものの、しかし容易に封が出來ません、どこやら離れぎたなくて。袋へ宛名をば旣に書いた始末、袋へ切手をさへすでに張ツた始末、切手も丁度耳のついて居るのであツて、それ故、わざ〳〵隙を取ツてその耳を去ツて、そして張ツた始末、出させようかと下女を呼ぶ鈴をほとんど鳴らしかかツた始末、それで、あゝこの心の未練――でも敢て思ひ切ツて出すことも出來ません。「なぜだらう」、われと我を疑ふのもそも〳〵本の良心への言譯だけ。さらにまた手紙をくりかへして讀んで、そして兩親がさぞ喜ぶだらうとの想像が運らせたいばかり。

しかし、やうやくの事で封じました。さらにまた未練が口を容れぬ間にといそがしく下女を呼び、手渡してやれば直に立上る敏捷な下女――敏捷、今日だけ、實にこの手紙を持ツて行く時だけ有難いとも思はれぬ敏捷。

手紙を出してやツた後は何か卵巢嚢腫を切開くやうな六かしい療治でも爲たやうに殆ど身も落膽した工合で、どツかりと机の前に坐ツたまま、更に下女が手紙を郵便函に投入れに行くその樣子を心に泛べても來ます――何の益も無い考ですが。

つら〳〵空想のまゝに心を勝手次第に勞へば、やがて婚禮した後のことも强く胸に蔓延して來ます。「八重子は眞面目な婦人。いやしくも僞りは言はぬ質の人。それで私は――我ながら心の弱い――病人に氣休めを言ふのが第二の天性となツて兎角人前のいゝ事を言ふ質」。八重子のを評すると同時、私のをも評すれば、やがて婚禮した後はその私の癖を矯直して、八重子の輕蔑をも防がうと思ひ凝るばかりです。私の癖としてまた食事の時間が長過ぎる、それも或は八重子に笑はれは爲まいかと思へば、今から氣を附けてなるたけ早くするやうにとも勉めます。八重子は元來小說の好きな人。和漢洋の小說に中々ひろく目を透したらしい婦人。それで私が自身をかへりみれば、やはり今日一般の日本紳士と同じく文學の思想には乏しい私。いづれその點では八重子に劣る。それも厭に思はれます。劣るのが厭では有りません、劣ると思はれさうなのが厭なばかりで。私の手文庫の中には又人に見られて面白くも無い物もある、それもやがて八重子の目に注まツては快くないと考へれば、たちまちに思ひ注いたやうに、文庫の掃除をば始めますが、しかし又さうなれば中にある物もとかく想像の基ともなるとは!

八重子と婚禮すれば朋友にもあらためて披露を爲なければ爲らず、その時には朋友はどんな感情を持つだらうか。この考はまた何と無く微笑をみづから催させます。婚禮した翌日は――日曜? では無くて火曜日――つねに私が通勤する病院の診察日。して見れば是非とも出なければならず。出て――さて何うでせうか――同僚が私に對する感情は。みだりに斯う考へれば際限もありません。花瓶の桃に目を移せば――卽ち桃夭々――幸先は好いにもしろ、花もこちらを笑ふやうに見えます。

「何……何と言ツたら同僚にうまく見えるかなア、同僚に――御愛でたうと言ふ同僚に。たゞ落ち付いて碌に細かな挨拶を爲す、いゝ加減にして、早く話を外へ紛らせて、病院の用事に直に取り掛る方が……あツ、それだ、その方がいい」。

これですもの、人間!「信」は有る氣でも中々さうばかりは行きません(わたしには)。

「あゝ、わからない。腦に何うして精神が有るかを硏究するより猶わからない。腦にどうして精神が有るかと硏究するのは全く分からぬと知れて居てそれでまた分からぬといふ話だ。分か

ツたやうで分からぬこの人間の分からぬ處と同列には僞らない。八重子が僞りを外へあらはさぬ、それが慕はしい氣象だと今が今思ツて、そのやうに、眞率に心を練らうと決心して、その直下から、時刻も立たぬ間、また心を掩ふ工夫をするとは、同僚の手前をつくろふ手段をめぐらすとは」。



(鈴木華畫)

が、風が吹き變れば月も雲の間を漏れます。

「しかし、あゝ『信』、『信』さへ確に有るものなら、本當に左樣だ、宇宙はわがための宇宙だ。婚禮は天理！　すこしも良心に恥づる事なく、社會の道德にも背くことなく、そして天理を履んで行くものを——あゝ虛心になりたいものだ」。

虛心と信とを合併して居た迷想、あとで考へれば笑ふべきことでしたが、しかし決心のところだけでは此時には是れでもいさゝか心には效驗も有りました。

が、これらの思案の中、やがて氣がつけば書生がいつか置いて行ツたと見えて、私の傍に一封の郵便が有りました。

取り上げて見ると、上書は私の名宛で、差出人の名は有りません。「だれだらう」。

實に見たい物は珍らしい物と封のまゝの手紙とです。私も封を切ツて見ました。が、中は獨逸文で、譯せば、このとほりの意味です。

「もはや御忘れでは有りませうが、私は先生に一度御療治を受けて命拾をいたした者です。因ツては聞捨てられぬ事が有るため私の心の儘を先生に申上げます。御取捨は御心次第です。この寫眞を御存じですか」。

まづ斯うあツて、それから氣が注けば成程中に一枚の寫眞が有ツて、それは……あら……疑も無い寫眞です、八重子の。そしてまた文面を讀み下せば斯う有りました。——

「否御存じ處か、是こそ先生が二三日の內に御婚禮なさる八重子さんのです。が、裏を御覽なさい」。

そして裏には英字でかうありました。——

"To my dearest Mr. A——

From Yaye."

即ち譯せば、この意味です。——

「極したしい——氏へ　八重より」。

實、不思議な寫眞。「氏」とあるからには相手はいづれ男子！　男子、それも通常の交際の人ならば、何も寫眞を贈るからとてこんな妙な文句は書かずとも濟む譯。更に手紙を讀みつゞければ、

「これで荒增は御推察になりませう。八重子さんの平生の擧動にも御心はつきませんか。曾て染まツては洗ひ落してもいくらか色の痕は絲に殘るものです。私はこんな事を言ツて折角の御婚禮の御邪魔をする心では有りません。只折角の御

名譽が落ちてはと思ふばかりです。よく御氣を付けて御覽なさい。よく八重子を御試みに爲ッて御覽なさい。是は私の友人――中々の好男子――が所持して居ッた寫眞で、その人は卽ち八重子から前に貰ッたといふ事です。其事に付いても八重子を御試しに成ッて御覽なさい。もし昔日の品行が全く改まッて居たものならそれは結構です。無論八重子を御娶りなさい。が、しかし、婚禮は一生の固め。なるたけ御用心を願ひます。疎漏にえらめば金の爐の中へも銅は交ります。以上。

某拜」

第四　寫眞屋

づかに心を落ち付ける氣。しかしいつしか勝手に騷ぎ出す胸。どうも受け取れません、無名の手紙の趣意が。

すでに婚禮は三四日の內です。そして今日に迫ッた大事の密告！　八重子は實に手紙のとほりであるか、どうか、其處を探るには――頼む人も無い所――よし探れるにしろ、一日や二日では迚も。

迚も！　探り得られぬこととして構はずに婚禮しようとも一時は思ひながら、しかしまた氣になるのは「不道德」の一語です。多婦ならまだしも、輕噪ならまだしも、虛弱ならまだしも、乃至醜婦でもまだ、まだしも。が、不道德では！　いかに何とて不道德では！

夜は暗黑の魔力をひろげてそろ〳〵黑幕を張り亙します。夜、昨日までは婚禮の日を思ひ出させた第一の愉快な物。が、今日は早凄まじい、毒々しい、むせッたい、にくらしい物。月も抱かぬ空！　月すなはち嫦娥。空すなはち男子の胸――淸さ、廣さ、さわやかさ。空も今夜は月とわかれて居ます。昨日までは嫦娥と伴ッて合體の美を爲して居たものを――離（…婚か知らん、…別か知らん）――それも、あら、空にも在るとは。今は私の身體が卽ち宇宙です――淸くないところだけ似て居る處の。

が、いつも私が好む沈思、それは今よくは行へません。何日は婚禮との披露によッて知人も手傳に來て居たり、人の來訪も繁くなりました。しかしそれが心を紛らす物とは爲らず、意地わろくも却ッて胸をいらだてます。註文どほりの花を見事に活けて來ながらも花屋は快い挨拶もされず、賴まれた料理屋が折角祝儀のしるしを持ッて來ても更に愉快な顏も見られません。世辭を言はれれば言はれるほど…怒りを移す氣は無くて、それで怒りを裾分けするとは。

家に居てもわづらはしくて爲らぬまゝ、散步でもしようと心を決めて無言で立ち出さうに爲ると、傭ひの老女は不審顏です。

「あのどちらへ、御病家へ？」言ひながら、それにしても身粧が不斷着で變だと言ふ風情で私の身體を目で測ッて居ます。

「いゝや」。

「へエ？」

「すぐ歸るよッ」。

罪も無いものを口早にきめつけて、さて急に門を出掛ける足のじれッたさ。飛石を下駄でゑぐッてそして引戶をがらり。出ればその邊に人力車夫も居る、その車夫も樂しいほオむを持つかと羨まれ、また日は暮れても町家ゆゑ子供も立ち噪いで居る、その子供も琴瑟和樂の結果とばかり思はれます。

重い足、けれど宙を浮くかとも思はれる足！　そろ〳〵と移す內、目に付いたのは只ある寫眞屋です。寫眞…と見るばかりです、たちまちに胸には例の…言はずとも誰も知る。

何氣無く立ち寄ッて、懸け聯ねてある寫眞をぼんやりと眺めて居るものの、しかし私の平生

の性質として道徳に篤いとはみづからも自慢する方、わざと目をば其處に列んで居る不潔な動物の方から外して景色や俳優やまた現存の紳士の物をのみ澄まして眺めて居る内に――

目に止まツたのは貴顯の令夫人や令嬢の、數多くの中に際立ツて私の目を捉へた一つの面影、すなはち八重子のに似たとはおろか瓜二つの顏です。

おやと驚いて身で身の目をうたがふほど。同じく立ツて寫眞を見て居る人をほと〳〵推し分けぬばかり、目をそれへ近づけてつら〳〵見れば、紛ふ方も無い、八重子の寫眞です――寫眞、わたしの處へ封ぜられて來た寫眞と寸分も違はぬ。

が、不審が有ります。寫眞の人は現在八重子で、それで其處の札紙には東子爵令嬢と書いてあります。東子爵とは誰でも知る華族の名です。あるひは令嬢ゝ有りませう。が、それにしても眞逆八重子と瓜を二つの人が有らう譯は無い、して見れば間違でせうか。

「おイ此寫眞いくらだ」。こらへかねて私も店の者に聞ひました。

「はイ張ツて一錢五厘です」。

「一つ御呉れ」。

取り外させて買ひ取りましたが、それだけでは詰りません。婦人の寫眞を買ふ心わるさ、しかし今は忍ぶばかりです。

「畫の種に」、われながら旨く胡麻化しました、「この寫眞を爲るんだが、實に寫し方がいゝて」。

「へイ」。海とも川ともつかぬ寫眞屋の返辭。

「これで是は寫し馴れないでは斯う行かない。あの何か御前の處へ寫しに來るのか」。そろそろと矢筈を掛ける伏勢!

「いゝえ」。

いさゝかの落膽、しかしまだ挫けぬ勇氣。

「何處か外で、そンなら?」

あたりまへの事。イんで見て居る人の中に笑ツて居るものも有ツたやうです。

「さやうでげざいせう、大方。手前では仕入れましたンでげざいす。」

「仕入先は知らないか」。

我ながら立ち入り過ぎた尋問。しかし、それも只實に八重子が寫したのか、それとも他の令嬢を寫したのか、それを明らかに知りたいばかりです。

聞きは聞きましたが、寫眞屋は面倒なといふ體で空耳をつぶして居るばかり。外の客の方を向いて何か世辭を賣ツて居ます。

「え、仕入先は、おイ」。ふたゝび強ひつけたきまりわるさ!

「仕入先でげざいすか」。さも嘲るといふ風、說得するといふ體、「仕入先は」‥

「この近處の寫眞屋か」。

「いえ、あなたさま」。

じれッたい、また外の客に何か一言二言挨拶して、さて返答をしようとしましたが、また思ひ付いた事の有る體で反對の問を先方から掛けました。

「何か御用で」。

「うん、ちッと」。

馬を借りた禮に餽る牛。此方からの答へばかりは敏捷でも先方のは更に埒が明きません。人も見て居ます――立列んで寫眞を見て居る人も私の顏を。それは否。しかし、否ながら矢張り忍んで、また盛り返して問はうとすると、嗚呼一刻も千時ですのに、寫眞屋は客から代價を受け取ツて釣錢を勘定して居る最中です――多く出すまい、少なく受け取るまい、贋金を交らせまいの三「まい」の律を諳誦しながら。

さすがに之を押し切ツて問ふ譯にも行かず、さうかとて其儘立ち去るにも忍びず、仕方なく猶も其邊の寫眞へ目――見ても益には立たぬ

目――を注いで――その癖横目だけは活き返らせて。なぜ。寫眞に向ける目だけは徭をしません。しかし、例の客は最う歸るかと客の擧動に偸んで忍ぶ横目ばかりは不思議に常よりするどく爲ッて居ます。「あら釣錢を取ッたな。なんの改めずとも‥改めれば隙がかゝるに、ええ、馬鹿、あらためて居る。よし紙入へ――入れる、もう好いぞ、ぢき歸るて。あらまた煙草入を出して。畜生、手卷のりちもんど！　卷く時間が」‥

急がせようと思へば馬もつまづき、急に肥立たせようと思へば母の身體は損じます。早く歸れとのぞめば却ツて遲いです。遲いやうですと思はれるのでせう。その間手持無沙汰にたたずんで居る始末のわるさ！　見ずともいゝ景色の寫眞など不思議さうにつら／＼見は見るものの、しかし目の力よわさを償ふだけに耳はさとくて――私がもし獸類なら丁度この時こそ耳を後部へ折りましたらう。

客は歸りました――にくらしい(？)客が。まづ安心と胸を撫で下すその途端――あら運といふものと「わるい」といふ言葉とは同じ意味ですか知らん。からです。――

「桃井君」。私を呼びかけた人が有りました。

見るとその人は私の病院朋友の西何某といふものです。

「妙な物を」、意外、冷笑、また不思議、これら三個の言葉を溢れるやうに孕んで居る調子、「御覧ですね」。

「え？　はア」。苦笑ひ――安辨當ではありませんが折がわるいと言ひたいばかり。

「何か、御買物？」

で無ければ何處へか同行しようと裏に含んで居さうな言ひ方。しかしまさかに買ふとも言へません。

「いゝえ、たゞ」‥

「なら入らッしゃい、御同伴しませう。すこし散歩を」‥

言ッて先へ立ちました。今日の間のわるさ！　寫眞屋に是から聞かうと思ッた處を邪魔されたのは心よくもありませんが、さて出直す氣にも爲りました。まづ呼ばれたのをいゝ機會に（立ち去るのみ否ながら）その西とつれだッてそろそろ散歩をして居る内、また終に西の發議で只有る咖啡店に入りました。

が、しばらくの間も心を去らぬのは寫眞といふ言葉です。西が一寸便所へ行ッて跡しばらく側に誰も居なくなる、その隙でもいつか手は例の買ッた寫眞を取り出して目に突き付けて押し賣りに眺めさせます。ばたり！　二つ三つの足音！　同時にすぐとその寫眞を懷中へねぢこむ素早い手！　知らぬ體で濟ます、動かぬ顏！

「本當に何か御買ひなさッたンですか、あの寫眞屋で」。顏にこそ出ませんが、裏には笑顏がありありと籠ッて居ます。

「なんです」。

「寫眞屋で」。早わらひがほは些あらはれて。「御買ひなさらンのですか」、呑み込んだ體、「何も」。

「はア」。

「しかし、御覧でしたらう、あれは」。

「何です」。

「知らんふり爲さらんでもいゝです」。

他人には何ともわかりにくさうな問答。しかし覺えのある私にはぐツと胸に來ました。たゞ紛らすばかりの決心。――

「知らん振りツて、あなた、何です」。

先方はます／＼乗地。――

「御婚禮なさるでは有りませんか」。言ツて私を瞻詰めました。

「なに」、やうやくです、「八重子ですか。それが、なぜ」。

「なぜだッて、寫眞さ」。あとは全くの笑ひがほ。

　飛んだ人が知ッて居ます。と一寸は思ッた、それも實は判斷ちがひで、あとは又から出て來ました。

「似て居るの何のッて、他日の貴下の細君と東の令孃とのよく肖て居る事は！　あの寫眞だけならまるで八重子を見るやうです。あれについた奇談御聞きぢやありませんか」。

「奇談？　へエ？　いゝえ」。

「妙です、よッぽど。しかし、まア東の令孃も自惚めエとるで測れますなア」。

「とは又どうして」。

「御自慢なんですとさ、御自身の肉美的が。それで此間何處かで偶然にうつした寫眞が非常によく出來たので、あの家へたのんで賣らせるンですッて」。

　言ふもおろか、わたしの內心。咖啡碗を口へ運ぶ手もいつか休んでしまひました。

「そしたらよく賣れるさうです。そりやア御自身の御面を御自身で御賣りなさるンだから他の構ッた事ぢや有りませんけれども」…

　大層な論がはじまりました。しかしこのやうな場合には他の評論の言葉に注意は心を注けぬものです。

「それぢや全く東令孃のですな、あれは」。

「さうです。しかし、そら、だから矢張り御覽なんでせう」。

　問はずがたりの圈套には落ちました。が、圈套にかゝッても獅子は目ざしただけの餌を食べます。落ちたとみづから悟ッて更に火にあッた蛋白質、かたまッた考へ。——

「へゝへ！」名刺がはりの笑ひ、卽ち交際的の笑ひ、「しかし旨く工夫しましたな」。

＊　＊　＊　＊

　西とわかれては「分解らなさ」はます〳〵枝葉をわかれさせます。「ではこの寫眞は八重子のではないのか知らん。どうもよく肖…どうして同じだけれども」。念のため手紙で屆いた寫眞を引合はせて見れば寸分も違はず——

　思案のつく處が有りませんとは！　よく病を醫者に打ち明けぬ婦人病者の病源を探るよりまだ知れにくい！

　書齋に坐ッて力の無い目で座敷を見回せば諸處から來た祝儀の品がまづ瞳子を穿つ、その瞳子も品物と共に我をあざけるかと怪しまれるほど。八つあたり——「おのれ裏切りした瞳子！」右を見ても左を見ても委ねて相談する人は皆無です。此處にもし親でも居たなら：

考へるほど世の中は數奇なもの。尋ね正さうと思ッた寫眞屋からは答へを得ず、その答へを得させなかッた人から意外の內事を聞き出すとは！

　やはり「完全」はわれ〳〵の稀れな目に無いのでせうか。宇宙の淸さ、造化のたふとさ、いづれ何處かに手にも取られぬ「圓滿具足」が有るでせう。が、遇へば遇ふほどこのとほりの數奇！　して見れば八重子の完全に見えるのも？

　噫迷！

第五　舞踏會



れへる許り、つら〳〵起す考へはことごとくみな八重子の身の上です。「實にそのとほりの不道德の婦人か知らん、浮評が一寸有ッたけれど」。疑ひの縺の行くところは唯こゝらです。

　わたしは病院でも可なりな位地にありますので、また貴顯への交際も多く、そのため舞踏會にいくたびも誘はれました。が、私には妙な癖が有ッて、公平に言へばわたしが綿密なのは女らしくもあるのですが、しかし舞踏をめめと敎師などに就て修めるのは何處やら好まし

くなく、そのため誘はれても因循して、一度も出席したことが有りませんでした。

人間と言ふものは意地の卑劣なもので、食はず嫌ひの偏頗をば故さにら保護するものです。診察の度、よく見る小兒の「はにかみ」、それです、その情が成長しても私に有ります。一度舞踏を理窟で謝絶したその以後はむしろ私も舞踏の攻撃者となりました。たゞ諄々人と辯論するのは私が嫌ひであるために其の攻撃を事々しく人にも露はしませんでしたが、しかし、内心は（實の内心は何らかわからず、舞踏を悪んで、舞踏好きの人々の失策を聞くのが何だか嬉しいやうでした。一つ八重子が私の氣に入ツたのも此の點で、卽ち八重子の舞踏ぎらひ、それが大きに私の心に叶ひました。

八重子が何故舞踏を好まなかツたか、それは不必要ゆゑ言ひません。たゞ最初わたしが八重子の氣象に感じたのはこの舞踏嫌ひの一條です。今から思へば癡の至り、その頃私は斯う考へました。——

「舞踏熱に浮かされないで‥女生徒には感心な。可なりの家の令孃だもの、好めば出席も出來るのに、それでも出席しないのだもの。小櫻男爵の令妹はあのとほりの美人、それで舞踏が嫌ひで出席しなければ皆わるく言ふ世の中。舞踏に出ないからとて八重子に惡評を負はせようとする意地わるの有るのも當然だ」。

これで折々聞えた世の惡評はみづから勝手に消して居ました。

が、今さら無名手紙の事實の支保になりさうなのは八重子が一寸した男女交際會に出た事のある一條です——わたしもそれから八重子と懇意になツたくせに。

誰とその頃八重子は親しくしたらうか、これを思へば的は漠として居ながら猶心當りは無くもない、その相手の假の形を八重子ともろとも想像の壁に描いて見れば、また過去の事がことごとく眠りを寤まして相應へて現れます。

繁雜になるゆゑ言ひませんが、此頃八重子が奇妙な策略で或る事（人に聞かれても恥かしくない）をした、その顚末がまた思ひ起されて、而もその時「あゝ賢女だ」と思ツた子細が八重子に私が感じた第二の事實として出現します。

横途を逐ふ心。——

「あの時は奇妙な策略をしたものだ。だが賢女だ」。

歸納しても、演繹しても、定まツた律のわからぬのは聊か贔屓目を持つ鑑定で、言はゞ兎角かんがへ迷ふといふのがその性質とも言へませうか。こゝに私が舞踏の事を前に置いて横途にいつか入るのも——感情は薄くなツたものの——猶はかない其面影です。

で、舞踏と變に中をわるくして居たこの私が此時に限り、喜んで舞踏に出ようと考へて來ました。その子細は何かと言ふと、外でも無く、東子爵の令孃を見たいばかりで——舞踏にはよく出ると豫て聞く貴婦人の。

それも尋常ならば左程に思ひ立たなかツたのですが、大典の祝に朝野打ち簇れて舞踏するといふ、その周旋人の中に東子爵令孃が居て、晩餐饗應（裏には舞踏を含んで）の招待を他の手から私の處へも送ツて來たからです。

いつも私が舞踏を好まねとてわたしを嘲る友だちの大醫が有る、その大醫も屹度この日には出席して——人の生皮を剝ぐのを構はぬ人——多人數の前でまた舞踏ぎらひだとてわたしを笑ふかも知れぬ、それも殆んど構はないと思ひ込んだほどです。

たちまちに目前に反魂の姿を見せるのは和粧の東子爵令孃——いや、舞踏服の令孃——發矢、また和服の八重子！

しばらくはその幻を追ツて居て、やがて——

初めての筆──書き了ツた臨會承諾の四字──めづらしい、舞踏に。「さぞ驚くだらう、私が當日出席したら。しかし、目的は只あの東の令孃、八重子と似て居るかどうだか見極めさへすれば」。

お懸眞目、──

「しかし、それは似て、いや、ほとんど同じやうだかも知れない、陽虎と孔子の例もあるもの。どうも八重子がそンな：受取れにくいが、不道徳とは、あるひは、もし東の令孃がたしかに八重子と似て居たなら、全くあの手紙は詐僞のものに違ひは無い。似て居さうなものだなア」。

どうしても奥底はなほこのとほり八重子に傾いて居ます。自分ながら常に信は薄くも無いと考へる身、それが眞逆に見損ひをして──いや、どうも不道德と八重子をまだ、まだ、（未練でせうが）取れません。

しかし、いさゝか都合の好いのは既に決めた婚禮の日の前夜に舞踏會が有るのです。これが若し婚禮の當日あるひは後に有るものなら困りますが──して見れば未だも吾を捨てないのでせうか。

いよ〳〵舞踏會の夜となりました、東令孃の現らしい面影に胸を顫はせて居る内に。買ツた寫眞、それを持ツて行くにも及びません、既に目には寫眞の姿が張り付いて居ますから。けれど、妙！ はや時刻に近くなツて家を立ち出さうにしてその間際更に書齋へ驅け戻ツて例の寫眞を一寸一目！ われながら何のため譯はわからずに。

いつも物の景色に綿密な考へを注ぐわたしが今日は取捨して景色を見ます。と言ツて一概に見ないのでもありませんが、只わが感情にあてはまりさうな種類をのみ（意は無くて）撰び舉げて。車の軋りに囁き出す砂利の音、それは耳をいたづらに通り拔けて相應な感じを殘さず、その反動で一方では「ヒガ」と一寸聞える人聲にもおのづから鼓膜がするどく働きます。

階段に上れば既に舞踏は始まツて居る最中で、來賓の過半はたゞ休息のみして居る體、まづ演習の方に近づいてつら〳〵見ても八重子に似た顏の貴婦人は有りません。

その内に五六知己にも呼び掛けられた、その人たちが「よくまア貴下が此席へ・」と言ふのも耳にほと〳〵入らず、たゞ心は東の令孃で占められて居ました。出逢ふたび每、貴婦人令孃に目を注けましたが、しかし、まだ、不運、目注す君は見當りません。當惑の餘、無駄な目頭を散財して知己の華族のある令孃に尋ね掛けました。

「何も、あのゥ東令孃も御出でございますか」。

「はア、御出でございましたツけ」、首をふりむけて前後を見かへり、「おや今こゝに御出でゞしたツけ」。

この一言は私には限り無い恐れを與へました。現在今しがた私が此處へ來て尋ねる前に一先づわたしは其處に居た貴婦人たちを見渡しましたが、そこに八重子のやうな令孃も居ないやうにしか思はれませんでしたから。が、是は只目の誤りでした。

「へエ？ どんな御服の」。ふたゝび尋ねました。

「そら、あなた、あの桃紅色綸子に七段襞の牛乳れエすの付いたのを召した──留が金の單ざくらの」。

挨拶は出ぬ私、笑ひ出す令孃、「・・・」──

「あら、おとぼけあそばしてよッ。人・御存じのくせに」。

「なんの、そりやア：誰で」。

言ツてわれとわが言葉つきの工合わろさに氣が注きました。眞面目な私の顏が可笑しかツた

でせう、令嬢の側に居た二三の貴婦人はじめ紳士たちまでが一同に吹き出しました。

きまりわるさ！ が、それも厭はれません。ふるへさうな、精氣の拔けた聲を無理に力づけて鐵面に、

「御紹介願ひませうか。」同時に餘所へ抛つ私の目。

しかし、相手の姫の意地わるさ。——

「いやですよ」。上目で睨んで、そして背ねた笑顔。

「なぜ、あなた」。

どきつく胸。からくして出た二言葉。「ふウん」とばかり、下を向いて笑ふ姿、如何にも可憐でした。が、——似ては居ませんでしたか知らん、線香の火に命を賴む乃至賴んだ貴婦人に些——かりそめにも華族の令嬢であッて。

ところへ一人の軍人が來て銅鑼のやうな大聲で何か話しに來た、それに私の問ひも中止されました。まるで寫眞を買ッた時と同じやう。じれッたさ、いま〳〵しさ！ このまゝで空しく過ぐした時間はかれこれ十分。

と、盲龜の浮木、やがて來ました桃紅色が。

が、その顔は、意外！ 八重子と似て居ません。よりはちと幼顔の殘ッて居るやらです。

その顔を見てから前の令嬢の方に立ち寄るわたしの目。むかうからもまた同様です。あだめいた笑顔。やさしい聲。——

「東さん」。

「はアい」。こたへたのは桃紅色です。

「あの貴娘を御待ちの方がございましてよ」。

「おや何方が」。

「申しませうか。御否なら廢しますわ」。

「ほゝゝ、いやアな、誰が否と申しました」。

「ぢや貴娘も御待ちでしたの。おや左樣、まア、これは失禮」。

おそろしい口の達者。どこで詰んだ研究か。聞けば侍女にも多辯は無かッたとの趣、〇〇女學校よりは行ッたことの無いといふ淑‥貴婦人。では研究の場所も——知る人は既に御承知。

「何ですかねエ、ちッとも分解らしませんわ。何、あなた」。

「ほゝゝ、まだ御わかりが無いの。この方ですわ」。

言ッて私を指した快活（むしろ過ぎた？）、冒頭が事々しかッたため、わたしも手持無沙汰。東令嬢もまた紅潮。

「え、東さん、この方は桃井さんといッて慈愛病院の」‥快活な令嬢は堰を切り、更にわたしに向ッて、「この方が東さんで」。

「は、左樣で、今は私も猶豫が爲らず、「わたくしは」、名刺をわたし、「爾來御心やすく何分」。

初對面の口詮はまづ通常に述べました。が、前の令孃は兎角人を手遊物にします。たちまち突と座を立ッて其處へ東令嬢を招き、わたしの傍へ寄せました。が、それぱかり、早足で壁の姿見鏡の方へ後ずさりしたまゝ扇で半面を匿しながら仰山らしい高笑——しかし、意味のわからぬ。東令嬢の不思議さうな貌。氣の毒なやうな私の心。

しかし、この令嬢の性質は常に斯うなので、決して惡意が有るのでも無く、こんな事を爲るのが交際の極祕と心得て居るからで、交際社會での評判ものです。から、わたしも大して心にも注めませんでした。が、東令嬢だけは温和の性質であるだけ餘程それを氣に掛けたやうでした。

東令嬢に會ッて篤とその顏を見、それがもし八重子に似て居たならそれと無く寫眞の一條を聞きたゞし、また初めから似て居なかッたならそれにも及ばず、別に思案を爲よう、から考へ

て私もこれまで運んだものです。ところを、前の令孃の快活、何か妙な、ひやゝかなやうな邪魔を入れました――紹介だけは爲ても。

そのやうな人に紹介を頼んだものが氣が利かぬと言ふ人も有りませう。しかし、これは私が心得て頼んで却ッて失策したのです。女性に男子が女性の紹介を頼んで、その女性の内心に嫉妬を起させぬことは少ない、これを私が知ッて居たため、わざと嫉妬の少なさうな人に頼んで、そしてまた別の弊に逢ッたのです。

實に、禁ぜられた食物を病人は食べたがるもの。この障碍に逢ッて、東令孃と自由に、したしく話を爲ることさへ出來がたくなりました。したしくすればいよ／＼前の令孃に妙な顏をされませう。ならば、樣子を知らぬものは一犬の虚を實に傳へて暗鬼を疑心で組み立てませう。では潔くありません。今までに婦人の寫眞を買ひ、また婦人への紹介を頼み、可なり忍びがたい心を忍ばせた、その上にまた東令孃との間に、もし、ひよッと、萬一、あられぬ噂でも立てられたならば――と考へれば困り切りました。

けれど、氣にかゝるのは東令孃の顏が一寸八重子に似て居ることです。

「つらからば只ひとすぢにつらかれで」。なまじひ顏さへ似て居なかッたなら、かにかくの辛苦もありますまいに。顏が似て居たらと思ひはかり、似て居るだらうと心に望み、そして人違なら有難いがと内心にはみづから心を欺いて考へて居た、その身が今さら今のやうに思ひます。

「あるひは寫し方によッて同じやうになるかも知れない。もし左樣ならうれしいが：して見れば聞き糺さなくては、東令孃に。聞き糺したい。辭を設けて聞き糺すのは譯も無いが、困るなア、人の口のうるさいのには。いッそ聞かずに廢さうかしらん」。

沈思の重量にはいつか垂れた首。快活な令孃は覗き込みました。

「桃井さん」。言ひ放して答へを待ッて居ます。

「は：イ」。

「東さんが御さみしくッて。桃井さん、何を思し召してゐらッしやるの。こんばせエしよんいず　ぜ　きい　おう　そしある　いんたアこオるす（會話は交際の鍵）」。

＊　＊　＊　＊　＊

附けつ、まはしつ、東令孃に注意しても、とかく邪魔が有ッて思ふやうには爲りません。令孃の側に誰も居なくなッた時には私の側に誰か居、令孃に差支へが無さうな時には私の方に有る――あら、夜は更けて既に十二時を超えました。けれど今また蝶舞の最中。

仕方無さ、何か食べようと食堂へ入ッて見ると、其處には只二人居ました、一人は東子爵令孃、また一人は誰か名は知れぬ、是も令孃「うまい」と思ッて禮をすると、二人は一樣に答禮しました――が、東令孃の禮の氣味わるさうな事。

すこし私から言葉を交へて試ましたが、兎角東令孃のは艶氣が薄いです。案のとほり快活な令孃の樣子を疑つて私を怪しんで居るのです。しかし、まさか左樣とも言はず、暫時無言で居る内に二人は食堂を出ようとしました。

「どちら、ほオるへ？」私が問ひました。

「え？　はイ」。これだけの答へです。

見て居ると一人見知らぬ方の令孃は左すなはちほオるの方へ行きましたが、東令孃は右へ行きました。いぶかしさにわたしも食堂を出て跡を見送れば、便所へ行ッたのです。

「時うしなふべからず」。

これが意中。表向は只無言の直立。待ッて居る内に令孃は出て來ました。晝よりも明るい瓦斯の光に彳むわたしを認めていとゞ不審の顏

色です。それも無理ではありません。が、忍ばれません。
「東さん」。思ひ、思ひ切ッて言ひました。
たちどまる令孃、無殘、壁際によりそひました。
「一寸、はなはだ失禮ですが、うけたまはりたい事がございますが」。
しかし、直には答へが聞えません。
「何でございます」。
「立ち話では些」‥が、これを言ふ胸ぐるしさ。
「別室へ一寸。如何でございませうか」。自分ながら胸は躍るばかりです。さぞ令孃も。
令孃は沈吟して居るのみです。
「暫時でございます。どうぞ是非」。
一心に眞心を籠めて望みました。否々さう。
しかし、令孃も辭みかねました。
うちつれて西の十疊ほどの小座敷に入れば、小使は頻りに見て居ました。疑はれるのが否さに、ことさらに戸を開けて置くと、何の氣か、小使は閉ぢてしまひました。閉ぢるその途端、令孃が私を偸み見る上目。あゝ否々さうな――あゝ氣の毒。鷹の巣にあッて慄へて居る駒鳥の臆病。
言ひ出さうとすれば中々かたく舌は動かず、わづかに洩れて來る音樂の響に無駄な耳をつかッて居ると、先方もまた無言で、仕方なさ、横の大花瓶の薔薇を一つ摘んで鼻と脣との間でぶらッしユのやうな眞似をさせて居ます。

編中快活な令孃はあまり華族らしくも有りますまいが、いさゝか考へが有ッて書いた事です。これは眞を寫し損ッたと世評が有ッても決して怨みません。　美妙齋　識

第六　不遇

うか口を切ッたなら中の正味が形をあらはして、わからぬところが明白になりませうか。口を切らうにも鋏の中て處が無く、默然として佇めば――さすがにおなじ椅子に坐られもせず――たゞ目に早く、深く、濃く、久しく付くのはその下向の顏ばかり。下向の美人の顏、まだ詩人や小說家も詳しく言ッたことの無ささうな、私が眞似して書いて試ませうか、見ただけの、左樣、目に注いただけのその風情を。
たゞ際立ッて居るのは眉と鼻とです。常は風を孕んだ柳葉。しかし、今は一筋に引かれた「一」。常は聳えぬ小鼻に猜情を見せたところ。しかし、今は峯をあらはした鼻筋。匂やかな肉の浪が思ひのまゝに起伏して程よく婉曲の裏をくゝりよせた處、そこに含まれたのは夕日の紅で無くて「愛」の精、「情」の髓と――詩人なら言ふ――血色の薄紅。汗が辛うじて吸ひ寄せた後れ‥では無い愛嬌毛、それが末終に「年」が溝を開く場所とする白玉の額に地圖の川といふ見得を作れば、すなはち玉屋に形容させて筋入大理石との答へも得られませう。いづれ白い物の保護は有ること。しかし、切下げの端が仄に風に顫いて柔らかさうな、滑ッこさうな、そして食べたらしこ〳〵しさうな耳朶を掠める工合、耳朶は紅三分胡粉七分の合はせ色をして、あッさりとした、卽ち薄墨を刷子で拂ッたやうな親讓りの毛流蘇をあしらッた樣子、取り合はせのおのづから美しくなッて居ることは名譽の板前も庖丁を投げさうです。勿論、全體から言へば傑れてうるはしい貌でも無い、で、見馴れぬ一局部の眺めは――物めづらしさ――實に可憐です。
それも只で無くて羞と疑とをさへ含んで居ます。釣船とでも比へたい口の形、折々に上へはたらく目、いづれも――只處女らしさ！
いたづらに斯う視詰めて居るのみでは――それ、時刻さへ移ッて――或は人さへこの部屋


(鏑木清畫)

へ這入ツても來ませう。他人禁止の鼻ぐすりを小使にやりませうか知らん。見られては困ること――たとひ互の心中は壁の色と共に淸くて汚れぬにもしろ。早く打出したいです。

「ほかの事でもムいませんが、あなた、東さん、實は御聞き申したいことがムいまして」…

たゞ是ればかり、遲滯なく出たと思へばその文句は本文に深く關係せぬこと。やゝ本文に近づけば我から言葉は臆病風に吹き散らされます。

「付かぬことを御聞き申すやうでムいますが」、少くも半分は過ぎてからの補足、「あなたは」…「寫眞」と口まで言ひ掛けましたが、妙なもので、不意に言葉は方向を更へました。――「八重子さんとは御存じでゐらッしやいますか」。

はじめて確かに令孃は私を見ました――その一目で私の目を横へ押し走らせて。

「八重子？ あの○○女學校の？ ですなら妾」…くたびれた、迂濶とした聲柄。

「はイ。で、御存じ？」はや確かめて。

「いゝえ」。

「おや」。

十分知ッて居る譯、しかし、意外な。私には今どき〳〵が胸です。

「御存じぢやゐらッしやいま」…

「えゝえ、妾が何で」、勢付いた風、「あの方なら彼の方が御存じでムいませう、例の越谷さんが、あの畫博士の」。言ッて笑を含みました。

越谷とはある令孃の姓で、卽ちその人は私を東令孃に紹介した例の快活な令孃で、學校では畫に上手なため、畫博士の綽號が有るとか。

しかし、この答へでは何となく胸がおだやかで無くなりました。此ばかりは八重子に似たところの有るやうな東令孃、それ故そろ〳〵聞かうとすれば目的は外れてむしろ紹介してもらッた――紹介を賴まなくても宜かッた……令孃が目注す處とならうとは！

「あの方が御存じですか、あの越谷の令孃が」。

「はア、隨分親密に」。

色々にためらッた甲斐も無く、埒――目的を外れて目的を遂げて居る――が手早く明きました。何も是ならわざ〳〵苦勞して別室まで伴はなくても宜かッたものを、それを知らぬ身の前の意氣地なさ、どうしても人間の眼界は狹いものです――吾を標準としたより外、わづかの雙方の同距離より外見えぬ。

何やら決りが惡くて、まさかに用事はそれだけだと（言ッても宜い譯ですが、私にはあへて言へません。別に話を聞かうとする途端、忽ちに戶の外で東令孃を尋ねる人の聲。――

「何方へ御出で遊ばしましたか知らん」。

耳をそばだてました、中でわれ〳〵二人も。更に聞けばその聲は例の快活な人、卽ち越谷

令娘ので、非常に用が有りさうでした。しかし、越谷令娘は生憎とわれ〳〵の戸際に居ました。鐵面に東令娘も出て行かれません。

「がちり」。戸の手に觸れた音。同時、われわれの胸の無駄な躍り。

あゝら戸が明いたなら！　越谷令孃に見られたなら！　痛くない腹を探られませう。しかし、忍の何某を氣取ッて窓から逃げる譯にも行かず――と言ッて、發矢、また――

「がちり」。

今度こそ！　が、不思議、明きません。

「おや錠が下りて居るわ」。

呟いた聲。一入おどろいた吾儕の心。空錠で下りたのか。乃至人が――或は小使が――下したのか。その内に越谷の令孃の小使を呼ぶ聲。――

「此部屋には鏡が有ッたねェ。有る？　明けて御呉れ、此處を」。

あゝ、部屋へ入らうと切りに勉めた子細はこれでよく分かりました。聞けば小使も承知した樣子、矢も楯もなく私は其處に居られません。出口！　仕方はありません。たゞ、窓！

「御引止め申しまして誠にどうも。しかし、私が貴孃と只二人で此處に居りましては人の疑…ですから只今までの事は祕密にどうぞ。私はこの窓から」。勝手に言ひましたが先方も今更無論引止められません。

「はイ、そンなら是で」。と言ッたばかりでした。

第七　思案

越谷令孃が部屋へ入ッて後は何うなッたか、私は窓から――あまり聞き好くもない――逃げて仕舞ひましたから分かりませんが、しかし、一事今日まで記憶に殘ッて居るのはそれから越谷令娘を見た時の心持です。

意で迎へるためか、越谷令孃の體が何となく變です。恐らくは東令娘から――根の緩い推測ですが――何か聞いたのでせう。快時刻も一時を過ぎた頃、皆々退散しさうになッた刻限、越谷令孃が廊下で私に逢ひましたが、しかし、毎に似ぬ落ち付いた體で私の傍へ近く寄りました。

「桃井さん」。粘るといふ調子で聲低く。

「はイ」。

返答は、しかし、有りません、直には。

「あなた、何か御用で」…

言ひ掛けて笑を含み、

「越權か存じませんが、何か東さんに御用が」…

出ぬやうにと待ち設けた先方の問ひ、聞くだけが早胸に釘です。

「はイ？」空耳を走らせて、その間に言譯を工夫する氣です。しかし、令孃は隙間をつくりません。

「東さんにでムいますよッ」。

口早に言ッて、私の燕服の縁を手で手遊物にし、その儘何だか氣の毒らしいとでも言ひさうな顏して下を覗いて居て、それで、私の答へが出るのをも待たず、思ひ切ッた體で顏を横にし、

「明日の御婚禮には是非まゐりますよ、私も。そして踊りますよ、宜しうございますか。え、屹度」。

どうしても呪む體、あどけない風情、わたしにはつや〳〵合點が得られませんでした。

この言葉付きで見ると東令孃と私と一室で話して居たのを見たやうでもあり、また見ぬやうでもあり、そのため相應な挨拶も出せず、苦笑を言葉の代表として居るばかり。目をば別にはたらかせて側を通る人を意味無しに送ッて居ました。

これから銘々思ひ〳〵に散會しましたが、折角わたしが思ひ込んだ規模は見事わかるとも無

く、わからぬとも無く、手を空しくして歸りました。思ひ出せば明日は婚禮！　明日の晩になれば雨が降らうが、風が吹かうが、八重子は與入になる事！　しかし、不道德とも何ともまだ分解らず――今までに此時ほど當惑したことは有りませんでした。

どうして眠られませう、その夜。嬉しさに眠られぬのでは無く、心ぐるしさに。暗黑の天地！　闇を穿ッて微ながらも潔白のしるしを見せる月さへも掛からず――たゞ何か妬ましさうに啼く狗の聲が爲ます。見馴れぬ物は多く感慨の基、晝よりも珍らしい夜はいとゞ物思を産む母です。はや呼吸の絶えた夜風。胸ぐるしさを刻み出す枕時計。括り枕も次第に温まッて首筋を蒸すやうにもたれば、自暴にも爲ッて肝癪さへ起ります。

「いま／＼しい、本當に。こんな苦勞を：あゝ世の中のことは自由に爲らないものだ。どうして斯う爲ることが齟齬――まア齟齬だ――齟齬して行くだらう。實に人間は情慾の奴隷で、それで失望の巢の世に住ッて居るのだ。情慾！　考へて見れば己が八重子に對する情慾はいはゆる下等の情慾かも知れない――われながら『信』の無いのが知れるものを。『信』が有る氣で居たのも全く井蛙の見だッた」。

しかし其所が利己、吾は吾のための大忠臣、さらに綠を付けて「信」を呼び出すとは！

「けれど、あゝ左樣だ、迷ふまい。八重子の氣象に感じ、品行に感じたのだものを、根から――これで八重子に對するだけの信は」：

不安心。しかし、强ひた論斷。――

「得：て居るやうだ、まづ。その信が有りながら――無いなら格別――それで押せない譯は無い。どうも、最屓目でも何でも、あの寫眞の出所が――手紙さ――その出所が些うたがはしい。一概に信ずるのも智慧の無い話だが：それにしてもあの寫眞屋に八重子の寫眞が：多分何かの間違から東令孃と名が付いたかも知れないて」。

辯護するやうな、攻撃するやうな、組み立てるやうな、破るやうな。何と之を形容して宜いか分からず、たゞ迷といふものは殆んど同時にこも／＼前後左右の働きを爲るものと、もし言へるなら、悟りました。

夜が明ければ、高く澄ます自然が新らしい笑顏で生れました。俗に近づいて居て俗に遠く、塵にあッて塵に染まず、たゞ一つ滿足する處が有ッて年々と靜に怡しんで居るその氣色、見るにさへ身のはかなさが思はれて、やはり平常の癖の物を不完全と見る私の情がいとゞ薪を添へられたかのやうです。いよ／＼婚禮は今日――今の朝六時から時計の針が一周する刻限には新らしい人も來て――いや、今早さぞ彼是の支度に急がしくて。などと思へば何處やら胸は――噪ぐと云ふよりむしろ――熱くなります。手傳にも來る人！　色々の御祝儀口上！が、變に思はれます。わたしには。

さうかとて――あゝ私の性質の綿密、すなはち女らしさ――勇氣！　八重子について色々疑のあッた事を打明かし得ません、一つ鍋で生煮の牛肉をつッついた故人にも。ひとり胸に秘めて、臆病(？)の錠を下したばかり、それを開からとする、また開かせようとする慰めの鍵も、えらめばいよ／＼有りません。

別に支度もしたくない、それで手足だけは他に言はれてわづかにその用意を爲て。婚禮は一生の固め、一生の固めの日に色々の――あゝ跡を言へませうか。浦山しいのは餘處の琴瑟和樂。新調の禮服！　おのれ、物思ふ人に着られるため仕立てられたか。

＊　＊　＊　＊　＊

午後第五時――これも世の數奇か、長くと望

めば時は早く過ぎ、短くと願へば遲く爲るもの、輿入の時刻に一分でも一秒でも猶豫——想像、妄想の猶豫があるやうにと心で思へば、今鳴ツた五時の時計も忠義な耳が四時に聞かせて、それで又日暮を見て怖いもの見たさの目が時計の面（西洋では女に比へる——あの八重子のやうな！）に光を射れば、はじめてたしかに五時と知れました。既にいそがしさ！ 私も兎に角人を指揮もして居ます。が、式場は橋際の桃夭館、六時に皆々寄ることゆゑ私は早く行ツて居なくては爲らず、それでまだ出掛ける勇氣が催しません。たゞ今のところ分別が付かずに空しく時を移して居るのみです。いろ〳〵に考へて見ても八重子が不道德とは、之を私の前から抱いて居る「信」に照らしても、思はれず、ことに無名の手紙など考へればます〳〵怪しくなります。「信」を私が持ツて居たと考へ、次で「信」を持ツて居るからにはと說を推せば、むしろ今更その「信」が釋迦の阿彌陀と爲ツて、すべて理窟はそれを演繹する方に傾いて來て自然疑ひの心を打消して〳〵來ました。さう爲ると、力を恢復するのは先入の考へで、おのづからまた私が曾て八重子に感じた一局部の事實が更に私を壓制しようとてあらはれました——くるしくない壓制、しかし温かく、緩いやうな心よわいもの！ 早みづから邪說に迷はされなかツたとみづから德を「信」に歸して取りあへず勝手に評して來れば自然「不足」を「滿足」と考へて滿足するやうにもなりました——「滿足」を「滿足」と思ふのでは無く、また「不足」を「不足」と。

時刻は最早六時を十分ほどしか隔てず——多分來賓もかれこれ臨會の用意を：いや既に八重子などは。自家保護が根を固くしなかツた內は時間を長くと望んだ心。しかし、保護の出來た上は、あゝ勝手なもの——反對の感じが起ツて來ました。でも、まだ夜ともならぬところ。想像を冬の日短に移して「今頃は冬なら燈火が付くだらう」。更に方向を更へる意馬、「燈火に映ツた八重子の姿は？」雨降ツて地は固まツたやう、風枯れて花の香はうるほツたやう——發矢！ 人にも見えるなら見せてもやりたい姿、八重子のそれが早くも其處へあらはれて——左樣、新調の洋服、天女の面影！

不偶は望むところに在ツて、照對は意外のところに在るのでせうか、ほとんど社會學者にも聞きたいです。今この切迫した時、そこに又意外な第二の無名手紙に接しました。

郵便で來たのです、その手紙も。で、殊に私を駭かせたのはその表書の手跡がやはり前の無名手紙と似て居たことです。

封とく〳〵——あら、中もまた獨逸文でした。そしてその趣意は、思ひ出しても筆がつまづく程です、そのあまりの子細に。

「先日あげた私の手紙に付いて大層御心配の御樣子、今さら益も無い罪作りと私は後悔しました。そのやうな、子供らしい、淺はかな惡戯を爲たいのが私の癖で、つい根無し事を構へて、後には天恐ろしく爲りました。けれど、さすがに私が貴下の御面前へ名唱ツて出て謝罪する事も出來ませんのは私の心が天性かよわいためで、どうぞ、嘸御腹も立ちましたらうが、御勘辨を願ひます。あの寫眞はあまりよく寫ツて居ましたので、私が前に八重子さんから是非と言ツて乞ひ受けたばかりの物で、決してその外に彼是の子細が有るのでも有りません。實につまらぬ惡戯を爲ました。たゞ貴下が「信」に篤いとつねに仰やりもし、また評せられもする、そこを試みようとの好奇心から起ツた所爲で、その以後

貴下が貴下一個の胸に秘して決して他言せず、しかし胸中につゝみきれぬ心配は貴下の御顏に髣髴として居た、その度量の兎に角御廣いのを見ては、巫山戯るのを好きな私もほと〳〵感じ入りました。巫山戯と言ッて濟むくらゐの事でも有りませんが、惡意の有ッたので無いといふだけの點で御容赦を願ひます。名を匿したところは流石に私にも良心が有るためです。しかし、この後蔭になッて、贖罪の心得で、貴下方御夫婦のためには保援をいたす心得です。私は今日御婚禮の席に列る一人、やがて御顏もあはせて、冥々の裡に謝罪を口にする事を望みます。偕老の御慶よろしく申上げて、且御うらやましい配偶を御祝ひ申します。

なにがし拜」

いかに何とてあまりな手紙、これを讀んで心を奪はれぬ者が何處にありませう。前の時の手紙は比較して後のより愕くべきものだと、他目には、思へませう。が、みづから其處に立つ身に爲ッては反對です。前の手紙の時には「よもや」の分子が多少私の心にもありました。が、後のには「實に」とたしかに信ずる處があります。比較して言へば、「案じるより産むが易い」譯——自身からの贊成が付くだけに驚愕は非常です。

しかし、無論疑ひません、今度の手紙をば、すこしも。けれど、直に式場へ出掛けるのもまた敢て出來ません。しばらくは沈思！　胸は何かであッさりとゐぐられるやうです。

• 第八　婚禮

式場の樣子や來賓の數などを言ふことも出來ません、擾亂された胸の渦が猶しづまりませんから。たゞ八重子！　あゝ、見たところ、實に天女です。その行き亙ッた罪の無さゝうなこと！　洋々と湧く絲竹のしらべ——いづれ愛でたい曲でしたらう。來賓にすゝめる料理——多分うまい物でしたらう。絲竹は私の耳を通り拔けて、そして料理の香は私の鼻にも一二度立ち寄ッただけでした。

たゞ後までも記憶に殘ッて居るのは越谷令孃がよく席を周旋して——今日に限ッては麁雜な冗談もいはず——一意わたしのために盡くして呉れたことです。そして斯う言ッた言葉、それは今でも覺えて居ます。——「御近い內、妾は八重子さんの御肖像を精一杯に書いてそして獨文で贊をして上げますつもり」。及び其處へ口を出した東令孃の言葉。——「あゝ越谷さんは寫眞から御描きあそばすのが御得意でゐらッしやいますから屹度御美しいのが出來ませう。」

婚禮の式は滯りなく濟みました。宋人が此日を、四喜の中に數へたのも、いはれある事でした。何が無し、私の心には「あゝ私も眞正の社會の一人となッた」、この考が有るのみです。「八重子は何を好むだらうか、その好きなものは私の好きなのと違ふか知らん」。これらも折々出沒します。あゝ人には言へませんが・・

人の口はうるさいもの、後に東令孃と私とに就てつまらぬ惡評を立てる人も有ッたやうでした。が、その度ごと毎でも越谷令孃がその惡評を消すのに勉めてくれました、自分がはじめ紹介したからと言ッて證人になッて。考へれば、越谷令孃も憎い人では有りませんでした。あゝ、朝早く起きた時、今でも私は散歩の日を思ひ出します。

(明治二十二年)

蝴蝶



（原本表紙）

國民の友の附錄にするとて御望みが有つたため歴史的小說のみじかい物を書きました。が、實の處これこそ主人が精一杯に作つた作で決していつもの甘酒では有りません。匆忙の中の作だの何だのと遁辭をば言ひません、只是が今の主人の實の腕で、善惡に關せず世間の批評をば十分に頂戴します。猶この後には春のや、思軒の雨「しんらち」が控へて居ります。それ「比較は物の價値を定める」。大牢の前の食散らしは或は舌鼓の養生にも爲りませうか。一座早く出た無禮の寓意（も凄まじい）は實にここに在るのです。

脚色は壇浦沒落の後日です。安德帝は實に御入水にならなかつたといふのがまづ多數の說で、文化十四年三月、攝津國能勢郡出野村の百姓辻勘兵衞が幕府へ一つの古文書を持出した事が有つて、そして其古文書は經房卿と言つて幼帝に供奉して逃げた人の自筆で書いてあります。是等は白川少將も望んで一覽し、また京都で日野大納言も懇望して見た事さへあつた程で、中々容易ならぬ箇條なのです。今この小說は脚色をその經房の古文書から拔いて一毛一厘も事實を枉げず、ありの儘を書いた物で、その他日向に御逃れなつたの、又は阿波に御逃げに爲つたのといふ方の說は爰で更に取用ゐませんでした。

中の人物の言葉は矢張り武藏野と同樣つとめてその時代の口氣を寫しました。時代物に必ずその時代の言葉を用ゐるといふことは全體たしかに是と言つて褒めるほどの事でも有りません。たゞ目先を變へただけです。

明治二十一年十月　美妙齋主人

其一

勇む源氏、いさむ濱風、無情、何のうらみ、嗚呼今まで白旗と數を競つてゐた赤旗もいつか過半は吹折られたり、斫折られたり、はやその色をば血に讓つて仕舞つて、たゞ御座船の近處の邊に僅に命脈を繫いで居るありさま、氣の故か、既に靡いて居るやうです。海は一面軍船を床として、遠見の果てが浪に搖られて高低さへ爲なければ水が有るとは思はれません。雨のやうに箭が降注いだのは戰爭がやゝ熾に爲つた頃（まだ運命がいくらか賴もしかつた內）だけで、今はその雨も敵の凱歌と共にあがり掛つて、ただ手近な太刀討と組討と薙倒しがあちこちに始まるばかり。折れて水に陷つた箭の死骸、それも討死した士卒の軀と共に幾百となくむらがつて、浪に弄ばれて居る體たらく、さながら

堰か水門に塵芥が集まつたやうです。今少し前でした、能登守(教經)が血眼に爲つて源氏の旗下へ飛込んだのは。蹴散らし、拂ひ倒して見る見る敵の中へ割つて入つたうしろ姿のいさましさ、かなぐり捨てた、鎧の袖の切れ目の絲は微かな涙を空中に打つて、亂髪に勢を添へて居て、そして之が亂入するや否や、敵はにはかに噪ぎ立つて、主人九郎(義經)が危いと思つたか、やゝ進んだ兵の内でも、旗下へ引返したものさへありましたが、いつかそれも靜まつて更に立直る反動の力のすさまじさ、瞬く間に敵は早御座船ちかく近寄ります。「能登守だに死にたるよ」。たれ言ふとなく傳へる此聲、こゝろ細さは增すばかりです。新中納言(知盛)の顏を見るさへ涙です。泣立てて譯もなく主上(安德帝)に取縋る女房どもの有樣には萬夫不當、平家の柱石と聞えた新中納言の脣もわなゝいて、着馴れた鎧の威毛にやゝ止る露の雫、それを飛沫と言ふだけ哀れ、だれが永別の涙で無いと言ひませう。知盛の今日のむねぐるしさ、わざと從容として無理に笑顏を賣るものの、その笑顏は冬野の寒菊、無情の風を待つのみです。主上に對する眼、女房どもに向ける目眦、いづれ優劣なく無念の露を宿して、否帶びて、むしろ色は、今まで蒼ざめて居たのが次第に紅く爲つて行き、いつの程にか髪の毛も針を植ゑて居るやうです。

かなはぬまでもと思ふ心は今でも知盛の胸には充ちて居ますから一寸歸つて主上に拜謁するや否や更にまた引返しては敵に近付いて士卒をはげまして居ます。

敵は次第に御座船に近づく。……また矢が雨のやうに爲る。……前後には呻り苦しむ聲。見る目も暮れ、心も消えます。はや其處此處とも亂れ果てました。最前から幾度も心元なさに舷頭へ立出ては戰爭の樣子を見て居た二位尼もこゝで心を決したと云ふ體で竊に御座船の奥の間へ源典侍、侍從經房、原田大輔判官種長、因幡郡司景家、及び右大將基方、大納言典侍、勾當内侍、阿波内侍の八人を呼びました。

それから何を話して居るか元より祕密にしたことと見えて次の間へ行つて聞いてもよくは聞えませんが、たゞ非常に嘆きかなしむ聲がします。蝴蝶と言つてことし甫めて十七になつた宮女、これは京都から此處までも常に源典侍に從つて居る美人ですが、しきりに怪しく思ふのあまり近寄つて心を靜め、よく聞けば其内に門院(建禮門院)の御聲として涙にうるんだ氣はひが洩れて來ます。

「さればとて、喃、二位」、紛れも無い門院の御聲です、「御門(安德帝)のむづがらせ給はんを……如何に、是のみにては。」

「御心細くも侍らん。然はあれども源氏あざむかんには二位こそ此上なきものなるを」。

是はたしかに二位の聲で、跡は鼻をすゝる音が聞えるばかりです。聞けば表の方で女ばらも立噪ぐやうです。「すはや源氏」といふ聲に蝴蝶も立聞しては居られません。足を抽いて立歸つて外を見れば、なるほど源氏は既に間近く寄りました。が、賴母しい、それでも猶名を惜しむ士卒どもは防戰して寄付けまいとして居ます。

「かくては爭でか逃れ果つべき。早く心をするこそ好けれ」。一度蝴蝶も心をば斯う決しましたが、さて又主上や門院の御身の上が氣に爲つて氣に爲つて堪りません。暫時舟の端にたゝずんで(今は矢を恐れもしません)、四方を見回して居ましたが、思付いてまた奥の方へと立歸つて行く出合がしら見れば二位尼は主上の御手を引いて其處に立つて居ます。

「蝴蝶、いくさは如何にぞや」。

問はれては墓々しくも言へません。
「口惜しうこそ。みそなはせ、御船ちかきに源氏も來ぬる」。
「つなぎ止めしも甲斐無かりき。いざさらば我もなどてやたゆたふべき。いでや人々もろともに」・・・
言掛けてはら／＼と涙を落して蝴蝶をぢつと見詰めたまゝやゝ身繕ひをする體たらく、如何にも合點が行きません。
「人々もろともに、そも如何に爲せたまふ」。
「もろともに水にこそ」。
「今はや入らせたまはんとや。そは勿體無し玉體を」。
「玉體と和女も思へるよ、これは如何に」。
言つて尼が主上の被衣を取退ければ是は主上と思ひの外、知盛の子息です。蝴蝶も之には駭きました。
「こは、そも。そも／＼主上は」。
「今はや落ちさせ給ひけり。かくてぞ敵を欺くべき」。
「はや落ちさせ給ひけり」。あまりの意外に息もせはしく、「女院の君も諸共に」。
「然なり。供奉しまゐらしゝは先き程呼びぬる八人になん。和女もいざ疾く・・・はや事迫りぬ・・・ためらひ給ひぞ。落延びんほどは落延びて御門を助けまゐらせてよ。爰に心な殘し給ひぞ」。
言ふ內人の叫ぶ聲は既に間近く聞えて來ます。
「源氏入來る、間もあらじ、刃にかゝるはうたてきを・・・蝴蝶、疾く／＼・・・いざ疾く疾く」。
二位は切りに急立て跡の蝴蝶の返事を耳にも入れず、何か錦の嚢に入つた御劔めいた物を捧げながら、右に主上(假の)の御手を引き、早足に船端にさしかゝれば・・・威しのためか・・・敵から來る箭は隙間もなく降注ぎます。
「噫、しばし待たせたまへ」。蝴蝶は跡から追つて來ました。が、無殘、及びません。蝴蝶が船端まで來た頃には既にはや水烟が・・・
「すはや入らせたまひしよ」。呟いたのは是ばかり。流石に生死を構はぬ身にも又何處やら箭玉の雨は恐ろしく、急にまた踵を返して橫の船端から屹と見れば、主上の影は見えませんが、源典侍たちが小舟に乘つてはるか向うへ漕いで行きます。死ぬ氣は蝴蝶も有りません。
追付いて供奉が爲たう厶います。
片手は涙、片手は周章、急に一人の雜兵を呼掛けて手を合はさぬばかり、
「逃れん。噫、漕ぎてたべ、小舟にて」。
命ぜられて雜兵も再議に及ばず直に小舟を引寄せて蝴蝶を乘せて漕出しました。櫂は折れてありません。仕方なく薙刀で一心不亂に漕ぎました。
前後左右は皆源氏です。が、わづかの仕合せ、皆御座船を目掛けますから落人も案外平易に逃れます。けれど肝を冷したのは幾度ですか、浪も荒ければ四方に船も多く。思ふやうには進めません。それのみか、わるくすると典侍の居る船を見失ひます。折々は僅の目を偸んで懐かしい今までの御座船を見返れば、その今日まで皇居とした御座船には雜人ばらが早亂入して・・・きらめく劍戟の影のするどさ。
典侍の方の船に心を注けると同時に身の周圍に敵が來るかと氣を配る混雜の間、ことにあちこちに簇がつて居る敵の眼を掠めることですから自然船も典侍の船のすぐ跡に跟く事が出來ません。或は右へ驅隔てられたり、あるひは左へ迂回させられたり、終に、あゝ、やゝ敵の眼の遠く爲つた處へ來て、やれ安心と思ふと一途に典侍の方の船の影は・・・折角の骨折も水の泡・・・どこへ行つたか見えません。弱りました、これ

には蝴蝶も。船はやゝ見れば苫屋の二三軒ある磯の邊の近くへ來て居ます。傍に漂泊して居る、主の無い兵船も一二艘あります。

「噫、辛く命は助かりつ。されど是より如何に爲ん」。話掛けるといふ風でも無くて蝴蝶は呟きました。

「如何に爲ん。何をか宣ふ。濟もて來ぬる骨折の賃、いざおのれに賜はずや」。

頰髯を撫でながら宛も傲慢な體で而も冷笑といふやうな氣色をあらはして言ひます。

蝴蝶は流石に眞面目です。

「何を」。

「何をなンどと」、傍へすりより、「骨折の賃にこそ。されど玉にも黄金にもあらず、たゞわが妻になりたまへ。こやなどて駭きたまふ、あたりに人の見る目も無きを」。

思ひの外の無禮な言葉。婦人ながらも軍馬の間を經て來た蝴蝶、これには[illegible]となりました。物をも言はず睨付けるを雜兵は更にかまひません、袿衣の袖を取らふとする。今は蝴蝶もこらへかねて、振拂ふや否や、身を躍らせて近い處の船に飛込まうとは爲ましたが、運わるく足が滑りました。滑りました、眞逆さま……跡は水煙と呆れた雜兵の顔ばかりです。

其二

清くて、優美で、そして愛らしいものは六七歳の少女と浦の春景色ででも有りませう。その眉のまだ纖くて薄く、その顏のまだ肥えて固まらず、薄絹の頰に笑靨の泉をたゝへて、こぼさうとは思はずに愛嬌の露をこぼす有様を見ては誰が一片きはめて高尚な愛情を起さずに居られませう。夕日の紅を解かして揉碎いて居る波の色、その餘光を味ふといふ有様で反射の綾模様を浮織にしてゐる苫屋の板びさし、しかも昨夜過ぎた春雨の足跡をば銀象嵌とも見立てられる蝸牛のぬめりに見せて居ながら、それで倘水際立つて見える工合の美しさ、餘情は以心傳心です。

壇の浦つゞきの磯づたひ、白砂の晃きを鏡として翠色の色上げをば生溫い浦風にさせながら思ふまゝに悠然と腹這して居る黒松の根方に裸體のまゝ腰を掛けて居るのは、前回に見えた蝴蝶といふ少女です。實に西の嵐に東の日和、花をたしなめる風雨を見ては誰が實を結ばせる末を思ひませう。わづか離れた處の修羅の巷はこゝに蜃樓の影も留めず、一網の魚に露命を恃む、いはゆる質朴の靜かさばかりが苫屋の春を鎖して居ます。波にもてあそばれて居る鷗、可愛らしい銀色の足でちよろ〳〵と磯へ這上がつて來るさゞ浪。血腥いといふ言葉は爰では只魚の料理で僅に悟るといふばかり。すべて景色が、言ふもおろか。さて空氣を汚すべき非理の福原の別莊も、否、別殿も、有難いこと、まだ有りません。

濡果てた衣服を半ば身に纏つて、四方には人一人も居ぬながら猶何處やら吾と吾身へ對するとでも言ふべき羞を帶びて、風の囁きにも、鳥の羽音にも耳を側てる蝴蝶の姿の奧床しさ、うつくしさ、五尺の黒髮は舐め亂した浪の手柄を見せ顏に同じく浪打つて多情にも朝櫻の肌を掠め、眉は目蓋と共に重く垂れて其處に薄命の怨みを宿して居ます。水と土とをば「自然」が巧に取合はせた一幅の活きた畫の中にまた美術の神髓とも言ふべき曲線でうまく組立てられた裸體の美人が居るのですものを。あゝ高尚。眞の「美」は卽ち眞の「高尚」です。

見亙せば浦つゞきは潮曇りに捲落れて、その懷かしい元の御座船の影さへ見えず、幾百かの親しい人の魂をば夕暮のモヤが祕め鎖して居るかと思はれるばかり、すべて目の觸るゝその先の方は茫漠として慘ましく見える鹽梅、いと

ど心痛の源です、否、「源」といふのも殘念な。

「そも如何にすべき。如何に爲らせ給ひしやらん、事無う御幸まし〳〵つるか。覺束無。さるを猶この身だに斯く御ン跡をも失ひつ。いづくに頼りて便りを得ん。苫屋の外は無きものを、もしは敵に見認められなば、逃れ來し心盡しも泡なれや。人目を避けて山路より御幸ますとや聞きぬるに……されば伯者や過ぎさせ給はん。よし、さらば、如何にもして御跡を慕ひまゐらせん。久しく時を移すは甲斐なし。命めでたうてかく蘇りつ。疲れは有るとも何ならん。いでや苫屋に衰れを請ひて蜑の衣だに乞ひ受けてん。」

雄々しくも屹と思案を定めましたが、さて其處が少女のあどけなさ。まだ裸體を人に見られる恥かしさに、何の思慮もなく、更にやゝ暫くは松の根に腰を掛けて居るその處へ聞えるのは豫て幾度も聞馴れた鎧の袖の嚙合ふ聲です。驚いて見返つて更に一入、さて穴へも入りたい程になりました。鎧の音は一人の武者で、武者、しかも其人は豫て蝴蝶が陣中で名を知つて見覺えて居る同じ平家の旗下の二郎春風といふ人で、また而もその人は蝴蝶が常から……おゝ、つれない命……人知れずその爲に戀衣を縫つて居た者です。

駭きましたが逃げられません。逃げたくは有りますが身は縮みます。俄に顏は……はてどうでも宜いのに……潮路の紅を借りて來て……見れば、今日を晴と粧つたその武者ぶりの奥床しさ、村濃の鎧に白の鉢卷、目は涼しく、口は潤つて……

「思掛けぬ……蝴蝶ぬし、御身のみにてましますか」。あゝ身が慄へます、近寄らずに二郎は尋ねます。

返辭は有りませんので二郎は重ねて、

「見たまへや、此身も落ちて來ぬるを。主上は如何に爲らせたまひし」。

「御幸ますとて爲りしが」、聲は微かに蝴蝶の口を忍び、「恙無う在せしならん」。

「御幸。いづくへ」。

「人無き里、伯者わたりや過ぎ給はん」。

二郎は勇立ちました。

「さらば、蝴蝶ぬし、やよ心な爲たまひそ。如何に御跡を尋ねまゐらすべきに、打連れて、君もろともに」。

下を向いて慄へて居る蝴蝶の横顏、さしのぞけば愛と情と嬉しさとに掻亂されて涙は湧返るばかりです。

「あな、いみじき御姿」。思はず出した二郎の聲、さて其聲を見送るのか、怨めしげに光を凝らす蝴蝶の眼、手弱くも横へ向く二郎の眼。

其三

西山を銜む二十三夜の殘月、今些し前まで降續いた五月雨に洗はれた顏の清さ、まだ化粧は止めずに雲の布巾を携へて折々はみづから拭つて居ます。夜半、それが此時の「美」の原素で。山里、それがこの處の「美」の源です。消迷ふといふ樣に淡泊な朦朧な光を受けては沐浴したまゝまだ露を滴らせて居る新樹の影も咽ぶやうで。そして僅にかよわい呼吸を吐く風に戯れられては辛く浮世の宿を求めた梢の雫も落ちてまた雨と作ります。形容すれば、秋冬の淋しさは「嘆いて居る淋しさ」で、そして春夏の淋しさは「笑つて居る淋しさ」、その「笑つて居る」夜半の淋しさに忍んで色彩を添へる四邊の寂寞、

此處にある貧しい草の屋は手製と思しく、掘立の柱に椿の丸木の棟木を持たせ、そして貧家の常として、籾糠を厚く布いた上に更にまだ乾果てもせぬ蒲の席を不作法に舒べて有ります。

今の眼から之を想像して御覧なさい、北海道の土人の家か何かとか思はれませう。それでもまだ感心なのは明るいといふよりは寧ろ暖いといふ方が適當して居るらしく見える殘燈が哀れな浪を打つて居ることです。「裏もかへさぬ」と馬琴なら言ふ荒壁に矢根が幾本も打付けてあつてそれに衣服調度のたぐひが吊されて有るさへも釘の用方がまだ自由で無いと思はれて生計の度の低いのが見えます。時は夜更です。それで何か容易ならぬ事が有ると見えて此家の夫妻は臥しても居ません。男は胡坐、女は片膝立て。二人とも思入つた體です。

男も女も別人では有りません。二郎春風と蝴蝶です。濱邊で二郎と蝴蝶とが遇つた後は作者が述べるにも及びません、是からの二人の會話で知れます。

身の運命と共に薄い光の燈火を見詰めて居るばかり、返答もせぬ蝴蝶の體に二郎は更に語氣に力を入れたやうです。

「君を思ふ志は左もあらん。されど暫時は身をも思ひたまへ。埋木の花咲かで朽つるも一期、時めいで暮すも一期。あたらしや一期を落人と共に墓なく過ぐさんは」。

膝を進めて聲を潛め、

「宿世いかなる縁なりけん、君と假初の濱邊の物語りは斯くも三年がほどまでの契りを持來つ。君の情のこまやかなる、吾もなどて仇にせん。かく言ふも君を溺れみ思へばなり。如何に末長う吾を憐みたまはずや。末長うあはれみ給ひなば……喃、答へたまへ、など泣いたまふ」。

やさしく言はれるだけ胸ぐるしく、

「しか宣はすから猶ぞもの憂き。君のやさしき御ンなさけの程は言ふまでも非ず、たゞ前知らせ給はずや、如何にせん、稍知れぬる御門のおンありかを源氏に告げんとは……喃、思ひまゐらするだに慘ましきを。扨も養はれつる平家の恵を思したまはゞ……いかで左る正無き事は思ひ止まり給ひてよ、喃。霜に臥し、薪に宿り、憂きを經てこゝに住むはそも何のため。御門に盡す眞心ぞ。喃、願ふは涙のみ。思ひ止まりて給へかし」。

して見れば御門の所在が知れたので二郎は心變りしてそれと源氏に訴へようといふので



(原本插畫)

せう。あゝ人の心の頼み難いこと……二郎は何か得意顔ですこし身を反らせました。

「いまだ知らねば左のたまふ。永く祕むべきにもあらねば打出でん、聞きたまへ、喃、吾は。」

改まつた言葉に蝴蝶は重い目を上げました。二郎は些し笑を寄せ、

「まこと吾は平家の譜代にあらじ。源氏より忍入りし者なるを」。

「源氏より忍入りし者」、……忍び……忍びの者! 今はじめて知つて、あゝ殘念、無二の人と頼んだ者は淺ましい敵。

蝴蝶には答が出ません。

「ことわりなり、駭きたまふも。さばれ、早、かく爲らば」、……言掛けて二郎は有無の挨拶を待つて居ます。

胸は噪いで顔は逆上せ、それで身は烈しく顫へて蝴蝶の歯の根は合ひません。わが良人ながら睨付けるばかりです。

「扨は、御身は……あゝ二郎ぬしッ」。

如何にも無念らしく見えます。二郎も(夫婦の愛情はまだ消えません)無念らしく顔色まで變へる妻の體を眺めては居られません。妻の方もまた左樣です。愛情の點に於てはまだ度は減らぬいとしい二郎、しかし怨みの點に於ては流石忍兼ねるおのれ二郎。

* * * *

はや時も曙ちかく爲ると覺しく闇が暫時濃く爲つて星も光を隱して居ます。殘酷な羽音を響かせて血に乾いた咽喉を鳴らす梟。人を嘲るか、冷淡に戸の隙間をすりぬけて肌膚を薄淋しく嘗める山風。其處へ立つて居る蝴蝶、實に花をはづかしめた美人の蝴蝶は殺氣を含んだ目元を屹と見張つたまゝ闇にも晃く短刀を拔離してぢつと眺めて息を一吹。寢入つて居る良人二郎の顔をのぞき込みました、極めて冷かに。

しかし目も露を含んで居ます。兎角急いで出る呼吸を無理に弱く出して居ます。

がさつく蒲の筵をば憎いながら竊と踏んで居ます。

佇んで居る身は吾か人かのやうです。

「口惜しや、あざむかれて。はじめより敵とだに知りつらば、如何に淺ましい煩惱は哮るとも……さりと知らねばこの憂目よ。敵、源氏、さてぞゆゝしき。今日も今日、三年ごしの今日しも初めて御門のいます方の得知れし喜び、言ふ間もあらで、如何にぞや、源……源氏の方に告げうとは。なつかしい、いたいけの君、その君をあはれ氣も無う、その君に憂き思ひ爲せたてまつらんず、おのれ二郎ッ、にツくき春風ッ。そこを頼み來しゝはそも何の爲ぞ。たゞ女子の甲斐なきを助けられて諸共に安らけき君を見參らせ、この眞心のせめての一筋聞上げてんとせしばかりなる……うたてくも爲りしよ、喃。猶豫せば御門の御大事。女なりとて武家の片はし。男なりとて御門の怨敵、夫なりとて君の仇。とても斯くても……悲し……あゝ二郎ぬし……否、二郎……君の心の招くなり、そこの心の爲すことよ。時はこよひを限るべき。つま殺す罪、後世のほどだに恐ろしけれども……念ぜよ、是も君のおンため」。

殺さうと心は決めても猶何とは無しに今すこし物思ひに胸を惱ませたくて更にまた持つた刀を敷き隱して筵にすわり、

「殺されうとも知ろし召さでいぎたなう……宿世あやしき緣かな。緣かなッ! 源氏より忍來し人。さしも吾がその時に床しとも思はずもあらば妹脊の契は結ぶまじきに。あなや、をさな心の女子の淺ましさよ」。

けれど平常からやさしい二郎の情愛を思出せば腸は實に猶切れるやうです。

「ねんごろに情こまやかなる人、その人を殺さ

うとや、その人のためには袖捲きし、この懐かしき手をもて。なつかしき手、昨日まではぬしの病を撫でし手も、あはれ、今こそはぬしを切る、ぬしの身を裂く手になん。淺ましき妹脊かな。友白髪まで契るべきを……浮世の道こそつれなけれ」。

今は叫ぶばかりです。が、悟られまいと歯をくひしばり、

一夫を殺せし妻ありきと後の人にも歌はれん。罪の程など知らざるべき。知りつゝも爲す心根、喃、ねぶらせ給ふ二郎ぬし、汲知らせて……汲知らせて……喃、二郎ぬしイ」。

首を傾けて考へ沈み、

「たゞ此身には怨も無き人を甚無くも殺さんは、思へばいとをし。さりとも吾も心をひるがへして……さらば妹脊の契も破れず……夫の心のまゝにせうか。夫の心の儘にして……されどいたいけなる御門の御上、それも扨おン慘まし。境の浦の舷にても御言葉と宣はせし事さへありき。その御恵の程し思へば……あら、げによ、我ながら空……空恐ろしき、などてさる正なき心」と

面と降る涙をあら〳〵しく拂ひながら乾と戸の外を睨むれば、吾を促し顏です、はや闇は次第に影を潛め始めて居て。

一夜明けなば……こよひは再び得難かり。あゝ心、などて手弱き。あな、手まで、など震ふ」。

たしかに思案を定めて刀を拔持ち、片唾を呑んで近寄る夫の枕もと。はツし、空蟬の命、知らぬが佛の寐顏のやさしさ。―この優しき顏なるを、このやさしき人なるを……せめて此身を愛づるそのやさしき心を御門にまゐらせたらんには」。

立掛つてはいよ〳〵ます〳〵瀧を落す無情の涙。それが滴つて二郎の顏を撲たぬやうにと氣を配つて片手は目を掩はぬばかり。やゝ刃を下しかけましたが、しかし肉と骨とは溶けて離れるやうです。

「そこの首級を携へて御門にこの身の眞心を切めて一言なりと聞え參らせ、さてしも後は同じ刃、同じ刀に死ぬばかりよ。妹脊の中はかはらじな。浮世の道は扨いと憂き」

今にその首から血も出ませうか。今に男の命も絶えませうか。あゝ斯う活きて居るものを。暫時刃は仇にさまよつて晃いて居ます。

その内に、無殘、勇氣！ にはかに始まる泣聲、物音。

「た……た……たれ……二郎を斬く」。跡はもろともに唸る聲。

また暫時、物音も絶えました。物音の絶えるや否や慌しく戸際へ驅出して人でも居るかと見回した蝴蝶の顏のその凄さへあゝ殺した、忍寄る曉の青い朦朧に映つては。顏色は全く土と見紛ふばかり、たゞその代りこツてりとした鮮血の紅を縱横に塗つて居て……御覽なさい、噛まれて居る亂髮の末一二本。既に仕留めて仕舞ひました。今更無念なやうでもあり、悲しいやうでもあり、くやしいやうでもあり、また情無いやうでもあり、氣は逆上してほとんど知覺も無くなつて只茫然……ですが、猶思詰めた一つの念力、火のやうに熱する身と切れて續かぬ忙しい息を辛うじて奬まして終に首をば斬放して仕舞ひました。

が、はや身はほとんど打たれたやうです。何を見ても目は目の役を爲ず、何を聞いても耳は耳のつとめを仕遂げず、それで、妙です、猶何處か神經が銳敏に過ぎるやうな處もあります。

首を取りましたが抱締めたばかり、聲を惜まず泣出したそのいぢらしさ、實に意地ほど恐ろしいものは有りません。

やゝ昇つて來る旭日も昨日までは勇ましさう

に見えましたのに今日はそれも幽鬱であるやうです。やゝ啼出す鳥も昨日までは猶比翼の情に咽喉を鳴らして夫婦つれだつてゐましたに：：哀れと薄命といふ言葉はつまり蝴蝶の又の名です。

人の話し聲、發矢、家の外に聞える人の話し聲。風の音にも忙がはしく耳をそばたてる今日の蝴蝶。蝴蝶も之をよく聞けば（亂れたながらも本性違はず）、これは主上の行宮のある邊の作男どもの話です。それで何と言つて居ました。斯う言つて居ました。「おンいたはしさよ、若宮の。定業にても在しけん、あへなく爲らせたまひつゝ」。

若宮が：：ま、どうです、御崩れなさいましたとか。恥を忘れて蝴蝶も表へ飛出しました。

「物問ひてん、方ざまたち。いな〳〵必ずうろたへ給ひぞ、たとひ斯く淺ましき姿せるとて。さて若宮はッ」：：

言へません、あとは些しも。里人たちは素氣も無く、

「昨日の朝の程なりき、崩れさせたまひてき」。

其四

さても〳〵無情な世の中。花が散つた跡で風を怨ませるとは何事です。月が入つた後に匿した雲を惡ませるとは、ても、無殘な。風は空の根方と共に冴亙ツてやゝ紅葉に爲つた山の崖に錦繍の波を打たせて居る秋の頃、薄い衣を身に纏つて其邊を托鉢して居る尼の樣、面影はやつれても變りません、前の哀れな蝴蝶です。

羽を伸した事も無くて世にはその名に緣ある夢の間に過ぐしました。實に蝴蝶、それも平家の紋處です。壽永四年の彌生の春風に翼も切れて：：そも〳〵之が浮世ですか。思遣れば須摩浦の昔の歌、「搔曇る雪氣の空を吹變へて月になり行く須磨の浦風」。その吹變へる風は寧ろ小笹を噪がせたばかりです。

（明治二十一年作）

いのり首

《一》

出羽の國最上の片山里、人足稀れな山奥にただ一軒の庵を結んで行ひ澄ます尼があッた。年の頃はやうやく四十二三、素枯れの花にもいくらか匂ひも殘るものを、さりとは又高妙な心がけ、此世からの化け物ではあるまいかなどと、いッて人にも薄氣味わるがられて、却ッて馬鹿ものも寄り付かず、心しづかに月日を送ッた。

土地の風とて家不相應の大きな爐に根株や枯れ枝などを折りくべて、夕飯の支度に餘念無い門の戸をほとほとと叩くものが有ッた。

聞けば婉しい婦女の聲で、『もし一寸御たのみ申します。旅のものでございますが、女一人でもございますし、日ももう暮れますし、どうぞ一晩御厄介になりたうございますが』と土地にはめづらしい都言葉。

尼はもとより一議におよばず、はいと答へて身を起し、やがて門の戸を明けながら、

『それはそれは御困りでございませう。むさいところでは厶いますが、何もう御遠慮あそばさず、さア。』『ありがたう厶います。それではどうぞ御願ひ申します。』會釋して中に入ッた。

「さぞ何でございましたらう、あのさぞ御寒うございましたらう、どうか今度は雪になりさうで、しかし何と申しましてゝ最う十一月の末でございますから――さア此御湯で御足を御あらひなさいまし。』『どうも飛んだ恐れいります。』『でも峯の方には唯今ちらちら降り出しました。』『ですか。それですもの、道理でこんな。さアさアこちらへ御あがんなさいまし。何もう御遠慮無く。御覧のとほりわたくし一人の住まひで、男ッきれなぞは藥にしたくもございませんから、決してもう御遠慮無く、御自由に。』『ありがたうございます。』風呂敷きづつみを持ッたまま爐の側に座を占めた。

見ればぞッとするほどの美人で、女が見てさへ惚れ惚れとする。年頃は二十三四、一寸見は二十ぐらゐにしか見えず、淺黑いが肌理こまかな質で、毛と云ひはえ際と云ひ、顏の道具と云ひ、何一つとして難の入れ處も無い有りさま、無理に言ひ立てれば美し過ぎて凄味を含み、險が有るといふくらゐのところで、しばらくは尼もただ見つめた。何しろ變な泊り客、いづれ子細の有ることとは思ッたが、然り氣無い體。

「夜の御飯はめしあがりましたか。』『いえ、まだでございます。どうか何でもよろしうございますから。』『さやうでございますか、何でもと仰やいましても御覧のとほり庵室の事でございますから誠にどうも。』『いえ、何でもよろしうございます。飛んだ御厄介になりますので澤山でございます。』『とても御口には合ひますまいが、丁度わたくしも是から食べませうと思ひまして、鍋を掛けたところでございますから御一所にいただくことに致しませう。さぞびッくりなさいませうけれど、どうせ山家の食べ物でございますからね。』「何のあなた、どう致しまして。』

まめまめしく盛ッて出した野菜の味噌汁、高の知れた味には相違無いが、空腹の舌には中中うまく、遠慮無しに二杯までも換ッた。どうか其内に食事も了ると、尼はまた咄の口を切る。

『今も申し上げますとほり、たッた一人でかうして居ります事ゆゑ隨分不自由だらけでござい

ますが、又氣樂は氣樂でございます。』
女はすこし笑ひながら、『けれど嘸御さみしうございませうね。』『さみしいと思ひ出したら迚も居られません。慣れでも何でもございません、氣一つでございます。くだらなく、うッとしい人間とつきあふより、此所に一人で斯うして居りますればどんなに安氣だか知れません。もッとも妾が是までに爲りますには隨分色色な事もございまして、その擧句いよいよと云ふ結局に此所へ落ち込んでしまひましたのでございます。御わかい方は何と思しめすか存じませんが、どうも何たるくだらないものか世の中は、そのくだらなさの數が知れませんよ。』何と無く、同意の色が女の顏つきにもあらはれたので、尼は一入乘り氣になる。
『どうも妾にはくだらないとしか思はれませんよ。ざッとまア女が十五か十六に爲る、どうやら平ッたい咄があなたまだ丸ッきりの子供でございませう、何の世の中の込み入ッた事を知るもんでせう、それであッて扨どうだと云ふと、早いはなしが、もう年頃だとか何だとかッて人にも云はれれば又自分からも何と無く其、ねえ、あなた、御嫁に行くとか何とか云ふ生意氣な氣が出てまゐりませう。男といふものは何んなもんだか、何のために爲るものだか、なぜ女は男と一所にくらすものか、なぜ又他人同士が夫婦とか云ふものに爲ッて泣いたり笑ッたりするくらゐの情愛になるものだか、それから又夫婦といふものに爲ッて、寐て、起きて、食べて、被ッて、子が出來て、さうからする内死んでしまふ、それが何うした譯あひなのだか、そんな事は一向頓着無しで、ただ何と無く小洒落小洒落とした了簡方に爲ると、まるで生き血を啜るやうな世の中の男どもがそろそろ當りを付け出しませう。十五や十六、分別や思案も無い年頃だといふのに、この一生の大事といふ事を全く輕輕しく覺えてしまッて、やッとまかせ運まかせ天道まかせに清淨な身體を曝してしまふといふのがをかしいぢやございませんか。分別思案がまとまらない内にそんな事を覺えないやうになぜ自然に爲らないものでございませう。蟲けらでも草木でも種を殘して世を續ぐのがどうも自然の役目かと思はれる、それほど大切な事をなぜ思慮も分別も付かない内に覺える事にしてあるものだか、とんと是ばかりはくだらない、まづい事ではございませんか。つくづく妾はそんな事で思ひしみました事がございましたので、たうとうこんな處へ來るやうな氣に爲りましたのでございます。』
女はきびしく胸をゑぐられたと云ふ樣子で、いくらか眼をうるませた。ぢッとしばらく考へ込んで、『本當に、うかゞッて見ますれば、それにちがひございませんとも。世間にそんな事が多くございまして、まだ子供同樣の綺麗な身體をむざむざと。』にはかに我知らず身ぶるひして、『ええ、も、おッしやるとほりでございます』と溜息を吐く。
『御咄しいたしたッて長い事ゆゑ、どうしてわたくしが此處へまゐりましたかなぞと云ふ事は詳く御咄し申しませんが、何しろそんな了簡で、世を離れました譯でございますから別に今どうから云ッて、否にも爲りません。跳ね馬は臆病馬といふとほり、鼻ッ張りばかり強い男は却ッて臆病なものでして、わたくしが斯うして居りますれば、何か薄氣味わるがッて、どうしてちッとも寄り付かず、結句むかうから逃げてくれるやうなもので、なまなか苦勞がございません」と笑ひ出す。
女も笑ッて、『かへッて妙でございますことね。何へばさやうか知らんと思ひますが、ただ御見受け申しましただけでは嘸まアとばッかり思はれます。』『ですから安氣でございます。を

かしな事をうかがふやうでムいますが、御樣子といひ、御言葉といひ、どうでも東京の方と御見受け申しましたが、それにしては又御一人で此夕方に此山道を、どんなに御否でございましたらう。』『はい東京でございますが、つい昨年の暮からして此邊へまゐッて居りますから、まアどうかいくらか慣れました。』『おや、おや、左樣で。この邊にはあのどこらで。』『酒田でございます。』『はアあの酒田港。』『さやうでムいます。』『それぢや東京から御嫁付きにでもなりましたので。』女は口籠ッて、『はい。』『まアそりや御惡いのに大變でございますね。東京から御出でぢや嘸御居にくうございませうが。わたくしも是で生一本の東京でムいます。』『その事。どうも左樣とは御言葉で存じて居りました。あの、どこらで。』『東京でございますか。東京は生まれが深川でございましたが、もう九歳の時から、その……。』にはかに是も口ごもッたが、思ひ切つて、『その芳原に居りました。』『おやおや、まア。』『はじめは豆でしたが、三味線が好きでございましたので、藝者に爲りまして、それからもう捨て鉢でそれこそばらがきに爲ッちまひました。申し上げては失禮でございますが、あの遊びましたら御免あそばせ、どうも斯うして御見受け申すところ、あなたも元は御素人筋とも思はれませんが。』圖星をさされて逃げ端も無い。

　ほとんど胸をひやりとさせて、『どうもさすがは、恐れ入りました。おッしやるとほりでございます。やッぱり妾も……』『左褄で居らしッたンでムいませうね。』『いかにも夫でございます。』『そウら、ちッともちがひますまい。是でもその中の御膳は食べて居ましたから何ぼ何でもねえあなた。何でございますか、やッぱり廓で、それとも。』『いえ、廓でございます。』もう匿しても駄目の皮。『廓で此八と申しまして、ただもう何でございますか、ういつらい思ひばかり致しました。早く身を定めたいとも存じましたけれど、つい長しみじかしでムいましたし、又二十一二あたりは藝者ざかりだなぞと云はれまして、何だか振り切りも付きにくく、うッかり月日も經ちましたが、やうやう昨年の暮に爲ッてどうか、斯うか廢業いたしました。』『ぢや其引かせて下すッた旦那といふのが酒田の方なので。』『さやうでムいます。』『旦那といふのは御年を召した方でムいますか。奥さんはそれで。』『まだ若うございますし、是までに一人家内を入れたことがございましたさうでムいますが、治まりませんで出しましたさうでございます。』『それぢや差しあたりあなたが奥さんに、それならば最う申し分はございません、結構でございます。』『なアにあなたつまりません』と沈んで云ふ。『そりや東京から急に田舍へ御出でに爲りましては萬端が不自由がちですから、色色に思しめしませうけれど。』『いえ、不自由の何のと、そんな事ぢやございませんが、唯……。』『不足は誰でも有りがちでございますけれど、其處が此前にも申しましたとほりやッぱり娑婆のくだらない所でございませうよ。』『大きにさやうでございます』と調子いよいよ沈み行く。

『しかし御一人旅とは大變でございますねえ。御わるいのに、わたくしは感心いたしました。』『中中出來ない藝でございますからねえ』とつまり子細を聞き出す口を切ッた。

『なに、その用でもございませんでしたが、不圖途中で聞き込んだ事がございまして、それから伴の男をさきへ立たせて遣りましたのでございます。』言ひながら何と思ッてか、風呂敷包みを尻目にかける。

　その目を手繰ッて尼の目も風呂敷づつみに及

び着く。大抵鐵瓶ぐらゐの物を容れたらしい大きさで、障ッてはまだ見ないが、最前女が持ち込んだ樣子がどうも何だか重たいらしい。が、中の物はと聞かれもしない。

『伴さへ居りますれば夜道を步きましたッて何でもございませんけれども、女一人でございましては何うも意氣地がございませんでつい御厄介に爲りました。御かげさまで大きに助かりまして、御禮の申し樣もございません。その内にも先ほど仰やッた御咄、考へて見ますれば見ますほど一々御もッともで、飛んだ身のためを伺ひました。何、人間が、あなた、いつまで生きるものぢやございませんわねえ。』

突然として意外な咄に今度は尼の方が驚いた。へえと生返事して居ると、女は重ねて、『百で死にますのも三で死にますのも――どちらかと云へば氣樂な内に死にます方が同じ死にます事ならねえ、あなた。壽命は定まッて居りますものやら居りませんものやら、さッぱり譯は分かりませんけれども、つまり其場次第といふものらしいのでムいますね。あたくしは先さう思ひます。さうかと云ッて何でもかまはない、惡い事でも何でも勝手にしろではございませんけれども、唯――つまり氣を廣く、運まかせにすれば夫で良からうと思ひますが。』『さう言ッちまへば先そんな物でございますけれども……。』『ですが、今からつくづく考へて見ますと、やッぱり是までが苦勞だ苦勞だと言ふ内にも何所ッて氣を廣く落ち付いて居たのでございましたね。はい、今さう思ひますね。淺ましいもので、どんな氣樂な事が有ッても、其時は後で思ふほど氣樂に思はず、あべこべに又苦勞な事は後で思ッて何でも無いのを其時は無法に大變に思ひましたり何かして。ほんとに今つくづく思ひあたりました。そりや妾も不仕合はせでございましたが、何もう言ッたッて始まる事ぢやございません。』『御兩親は御有りなので ございますか。』

不然として切り込まれて、多少思案にかたむく樣子に爲ッたが、思ひかへして下を向きながら、『本當のはございません』と言ひかけて涙ぐんだ。

『やッぱりねえ。ですからねえ。それぢや又猶の事、さうして引かせて下すッた旦那を一生懸命大事に爲すッて、よく末末の見込みの立つやうに爲さいませんぢや、ね、さうぢやございませんか知らん。』

あッぱれ忠告のつもりで言ッた言葉を此方はとッくり聞く氣も無い。それしきの事、分かり切ッて居る、人には言へぬ胸の祕密は風呂敷づつみに祕めてあると言はぬばかりの眼の中。はかばかしい返辭も無い。

『さぞ御くたびれでございませうね。御遠慮無く御やすみ遊ばせと申したうございますが、どうもその……。』幾分かきまりわるさうに、『このとほりの一人住みで、夜具蒲團も一組しか外……。』『いえ、それは何うぞ御心配無く。あのあたくしは此儘でよろしうございますからあなた。』『でもあなた御風邪でも。』『いいえ、このとほり火で御あッたかうございますから決してどうぞ御かまひ無く。』『さやうでございますか。ほんに』と氣の毒さうに言ふ。

かれ是夜も更けたらしいといふので、尼も寐ようと言ひ出した。便所は何處かと尼に尋ね、敎へられたとほり一寸その方へ行つた女の道、兎角氣にある例の包み、そもそも中に何があるかとあわてて駈けいだして手でさぐッて、びッくり、中は男の生首。

（二）

あの聲で蜥蜴くらふか郭公。ても扨もとそれこそ開いた口がふさがらない。何心無く立

ちもどツて來た女もさすがに氣ぶりを見て取ツて、きツと包みに目をかけて、『あなた、この包み御覽なさいましたか』とあべこべに手きびしく急に聞いた。

　却ツてこちらでうろたへて、へ、あの、そのと空を言つて居るところを、女は一層たたみかけて、『もし、御覽なさいましたかツ。』

　見れば面色すこし變つて、眼中何處やら凄味を含み。やうやくに瞻を落ちつけて、『その包みなら、中は見ませんけれど、どうも些し。』『いえ、御覽なら御覽とおッしやれば夫で宜しいのでございます。』『ですから中はまだ見ません。』『きツと御覽なさいませんね』とつめ寄ツた。

　氣丈な尼ではあるが、度膽を拔かれたので聲まで顫へて、『きツとでございます。きツと…きツとに相違ムいません。ですが、さはツては見ましたよ。』『さはツて、そんなら中に何があるか御存じで。』『分かりましたとも。人の…男の…。』

　たちまちべたりと投げるやうに女は身を其處へ落ち着けた。

『もう何とも仕方ございません。御うたがひの晴れますやうに一切御話を致しますから、その御つもりで御聞き下さいまし。さぞびツくり爲さいましたでせう、そりや御もツともでございます。是には譯のございますことで、決して御口外下さいますな。もし、あなた、御口外くださいますな。』『何の口外なぞ。わたくしは唯あんまりなので。』『それでびツくり爲さいましたか。やれやれ夫は』と冷かすやうに、しかも淋しさうに笑ツて言ふ。

『びツくりも致さうぢやございませんか、あんまり大變な物でございますもの。一體どう爲すツたのでございます。』『きツと御口外遊ばしませんね。あ、ありがたうございます。』

　言ひかけて風呂敷づつみをするすると解き出す。見るのも否だが、また我慢して、いよいよ中から出たのを見れば、いかさま生生とした男の首。

　不思議に尼はつくづく見た。一目で否と云ふかと思ひのほか、是はまた何たる意外、一目見るよりつくづくと見て、しばらくは茫然として、又つくづく見ると思ふ內、たちまち意外に叫び出した、『あら、ま、どうしたンだらう、この首はツ。』

　あわてて首を搔き寄せたが、今度はまた女の方で呆氣に取られて、それ妨げる方角も無い。女も唯まじりまじり。

尼は最早泣き聲で、『逢ひたかツた御前禮三さん。御前は、御前は、一體どうして…どうしてこんな姿にさア。ちえ、なぜ死んでしまツたのツ。』

　いよいよ女は呆れる、たまげる。尼は人目もいとはない。首抱きしめて身をふるはせて、『さツ、もし、あなたツ。』はツたとばかり女を睨めつけ、『この首は、これ、何う爲すツたので、さツ、あなた。』

　寐耳に水でただ呆れて、『どうツて、どうも不思議で、どうも。』『何が不思議でございます。』『でも、どうも不思議ですもの。』『おとぼけなすツちや——さ、さ、これは、このあなたが御持ちになツた首は、な、な、なんでムいますよゥ。』『それは首。』『首はあたり前。だ、だれの首だとあなたは…。』『それあたくしが知るもンでムいますか。ま、しかし、あなた、もしあなた、さう御泣きでは、もしあなた。』『いやだ、いやだ、否だ、否だいッ。』『否でも何でも、ま、あなた、よく御聞…泣いちや分かりませんからよゥ。もし此首はあなたの何か御知りあひで、え、もしあなた。』『知りあひどころぢや——ちツ、二、二世の約束まで爲た人でございます。ちツ、ま、こんな淺ましいすがたに何時の間にか。

ええ、どうしたら好いか知らッ。ほんとにどうも、あなたほまア、やさしい御顏に似合はない、大それたことをどうもまア。」「そ、その譯は今言ひます。」「譯も何もありやしません。」『ところが譯が……。』「ありやしませんッ。』「無か無いンですからさ。ま、どうも、此方があなたの、そんなら御亭主で。」「亭主ぢやありま……。』「おや、そんなら、御亭主で無くッてあの。」「言ひかはした人でございますよッ。此人ならと身を任せ、心を任せ、不圖別れたッきり音づれ無し、今見ればこのすがた、ま、あなたが怨めしいッ。」飛んだところでのろけはじめた。

「そりやあたくしが女らしくも無く、こんな物を持ッてなぞ歩いて居りますから、大方此方をあたくしが殺しでも爲たことだと御うたがひなさるンでございませうけれど、そりや大變にちがひます。よく落ち付いて御聞き下さいまし、よ、あなた。さういふ御間がらなれば、その御なげきも御尤でございます、そりや御察し申しますが、何とも最う仕方ございません。それには又あたくしが此方を殺したなどと言ふ事では無し……。』『御ころしなすッたればこそ首まで持ッて御あるきで。』『いえ、それは違ひます。それほどに仰やるなら證據を御目にかけませう。殺してすぐ切ッた首か、それとも死んで幾日か經ッた首か、その御見わけは付きませんか、第一この切り口の血の工合でも。」一本やられてただ默ッた。

『御わかりが無いとならばもッと詳しくも申しませうけれど、まア左樣ぢやございませんか。そんなら何うして、何のために首なんぞ持ッて歩くと仰やいませう。さ、そこが、ですから唯今も御口どめいたして置いて御はなし申さうと存じました所でございました。とツくりと御聞き下さいますか。』

言はれて見れば何さまそれも一理なり、尼も何うやら拍子が拔けて、言はれる儘になづいた。女は中中度胸のすわッたもので、

『もう今でムいますから何も角もぶちまけますが、實は今あたくしが引かされて參ッて居る旦那はどうでも妾の蟲が好かないのでムいます。』

『へえ?』と尼もさすがに咄に釣り込まれた。

『へえ、どこか御氣に入らない件がございますので。』『いづれ何所か有るのでせうが、まア何しろ總體否なのでございます。』「御家はいづれ宜しいので。』『それは最う土地でも指折りの。』『へえ。それぢや、旦那の御器量でも。』『それもまづ人並より些。』『なるほど。御若い内は誰でも是で面くひで。」「いえ、さやうぢやございません。人並よりちと下らしい方だとか言ひまして。』『おや、まア、それは。それぢや金面でも鼻に掛けますので。』『いいえ、中中。』『それでも無い。はてね、是は。ぢや貴女に御やさしくムいませんので。』「ところが婉しくし過ぎまして、いッそ妾の身に取ッてはしつッこく、まア何よりそれが一番どうしても。』

尼はたちまち目を睜ッて、「あの、御氣に入らないのですとえッ。』「まアそんなものでございませう』とすこし笑ッた。

『そりや、あなた、罪でございますよ』といよいよ隅に捲き込まれる。

『そりや罪と言へば罪か知れません。けれど、ただどうも否で否で、まッたく壽命がちぢまります。わが儘からの事と自分ながら思はなくはございませんけれど、どうしても蟲が好きませんのでねえ。』『それで、何うなんだと仰やるンでございます。』『その氣に入らない、蟲が好かないがそもそもの元で、どうかうまい都合が行かないものか知らんと考へますに付けて、やッぱり凡夫の事でございますから、たがひに思ひ思はれる相手の人をつい懷ひ出すやうにも爲りまして。』生首を目前へ置いて のろけの比べッ

こ見たやうな事を言ひ出す。
『分かりました、此首を御持ちなさる子細が。』
にはかに腰を折られて女もどうやらたじらッた。
『わかりました。さツきも御咄いたしたとほりあの廓の御まんまも食べて居ますから、そりや斯うなんでございませう、待ち人來れの祈りなので。』
女はほとんど顔色まで變ッて、『何らも實に、なるほど是は御存じの筈も筈。ああ左樣でございましたッけねえ。まッたく仰やるとほり寸分たがはず…。』『でございませう。ね、あなた、圖星それで。』肩ゆすぶッて眉をひそめて、『けれど大變な罪でございますッて。本當にあなた爲さる御氣。』身ぶるひしながら力を入れる。
『本當ですとも、あなた』ときッとなッて、『冗談で誰がいやな生首なんぞ。あたくしは最う罪も何もいとひませんから。毎日毎日いやアな思ひして居るよりかいッそ罪なら罪で死んだッてかまやしないと思ッてるくらゐでございますもの、あなた。一日でも氣樂な思ひ。いい思ひして死ねば極樂ですわ。』
折わるく、物あはれな、薄くらい孤燈に油が盡きかけて、見る間見る間にぼんやりして、呼吸やらやら殘る片あかりを女の横顔へ浴びせかけた。蒼白く見えて來る顔、眼からは異樣のきらめきを放ッて、妄執の本體ここにあらはれる。凄みに悲歎も飲まれてしまッて、尼は唯息のみ迫り、言葉もほとほと前後したが。夜寒の所爲もあらうけれど、襟元のがくつく氣味わるさと云ッたら。怖いもの見たさで、『やッぱり火箸でなさいますの。』『さやうださうでございます。けれど燒け火箸でございます。』尼また一つひやりとした。
『わたくしは委しい事をまだ聞きませんが本當はどういたすのでムいます。』思はず膝を進ませる。『あたくしも何只聞いたばかりでムいますが、何でもきッと利くさうで、そのかはり罪のむくいも怖ろしいさうでムいます。何でも男の生首を斬ッて取ッて、それへ向ッて祈願を籠め、わが待つ人に早く逢へるやうにと散散祈ッて置きました末…。』意地わるく山おろしがさッと吹き起ッて、燈火さへ幾度か消えかかる。
『燒け火箸をねえ、あなたっ』尼の膝はますます進んだ。『その生首の耳の穴へ。』『ええ否だ、どうもまア。それで。』『一思ひにぐッと突ッ込んで、ぐッと抉る。いづれ血が煮えくり立つ。どうかすると其生首の眼の球が…。』『ええもう、あなた、どうぞ、もう…。』『いいえ、眼の球がどうかすると動き出して、それからも血が走ッて、さア其辛抱が肝心で、どうでも堪へるのでございます。』言ひ切ッてほッと溜息。尼は手に汗握るばかり。
ややしばらくして、『どうもまア何とも角とも。ですもの、その罪のむくいはどんなでございませう。』それだのに犯す氣かとむしろ呆れ氣味で女の顔をぢッと見つめた。
女は一念燃えるやうで、『もちろん覺悟の上で無ければ。ただ思ひつめた念力はそれまでに身を投げ出しましたにしろ、其處は性根の据ゑ次第。』また溜息を長く引いた。
『大きに其段はよく分かりました。分かりましたが、そんならあなたは一體何處で何うして其首を――そしてさう爲さる御つもりで、あの只今でも。』『殘念でございます。折角得がたい物が手にこそは入りましたが、どうも貴女のそれ程の方とうかがひましては第一あなたへ對しましても。』
尼は急に泣き出して、『ちッ、ありがたうございます。どうか只それだけは。』『ですから實に殘念ながら。いえ、きッと最ういたしません。實に此方へまゐる途中、不圖峠の茶屋に休みま

して谿の方を見ましたところ、枯れ枝のしげみの間からはるかに見える人の死骸、ぢッと目をすゑて、もしや目の迷ひかと二度三度見直しましたが、やッぱり死骸に相違無く、しかも男でございます。むらむらと御まじなひの事を思ひ出しまして、のぼせるやうに爲りましたから、そこで思案の肝を据ゑ、伴には體よく言ひ付けて先へ還ることにいたさせ、一念と二人で一生懸命、崖から墮ちて死ぬなら死ねと、どうか縋り着きまして、知らぬ事とてただ嬉しく……。』

さめざめと尼に泣き出されて、いッそさすがに言句も詰まッた。

『たうとうあなた此首を。』堪へかねて共なみだ。『わるい事をいたしました。が、手つづきは夫だけでございます。別に何の咎も怨みも。考へて見ますれば、あたくしが此方へ御寄り申しませんければ、斯ういふ事も知れませず、やッぱり因縁づくでございます。』

氣の毒さに萎れて云ふ。今更腹の立てようも無い。また愚癡ばかりも溢せない。

『まッたく因縁づくでございませうよ。と思ッてあきらめずに居りましたところが何とも仕方はムいません。ムいませんおそれながら――ああ愚癡を言ッたッて始まりませんけれど。』又首を掻き揚げてつくづく見て、『ええ何たる姿か知ら。もしあなた、一旦は取りのぼせましたけれど、おッしやるとほり貴女が此處へ御立ち寄りくださいましたればこそ此首の人にも逢へました。そこを思へば致し方無いとあきらめるより外どういたす事も出來ません。から、別に愚癡ッぽく御うらみ申すのではムいませんが。』ややしばらく無言で泣き入ッて、『なまなか忘れて居たものが、こんな姿になッて又斯うして逢はれて見ると、あなた御察し下さいまし、ちッ、何の因果の腐れ縁かッ。よくよく深い縁なればこそ首になッてまで逢ふ、なぜそれほどの深い縁の生きてるうちに、よ、あなた、わたくしだッて人なみの人間、何が物を醉興に唯世の中を捨てませうよウ。捨てるまでの辛氣艱難、隱れる月は猶見たいで、言ひかはしたばかり別れた後でただ戀しく、さても添はれぬならばと無理やりにあきらめて、心がらでねぢけてしまひ、やうやく何うかまア忘れてゆッくりとして居るところへ、何、何だッて人じらしな、こんな情無い風になッて……。』

何と取り做しの言葉も無く、さりとて氣の毒だ氣の毒だと千遍ならべたところが甲斐も無い。御望なりを言ッてだまッて其愁嘆を聞くだけに止まッたが、しかし又女の腹に爲ッて見ればやはり失望といふだけの殘念は有ッた。

『長いみじかい言ッて居ッても何にも爲りませんからねあなた、折角その首の速く回向でも。それが一番でございませう。え、あなた、泣いたッて。そりや御無理ぢやございませんけれども。』

また尼の身に取ッてはそのくらゐの事素より知らぬでも無い。が、回向と云ふのも愚癡の滓、言はぬ愁嘆の絞り殼に止まるからにはおいそれと人情聖人めかす事も出來ぬ。女からたびたび迫られる。迫るものも御無理は無いで持ち切ッて迫れば、迫られるものも御尤で立て切ッて受ける、それで一向に應へ切れない。

尼がそれほどに悲しむまでの閱歷をとッくりと聞いたらばそれだけの價うちは有るに決まッて居る。が、女とて中中そんな人事を聞いて居られる場合で無い。

實に飛んでも無いところへ寄ッて、嫌よろこびに爲ッてしまッた。平ッたいところが、尼さへ許してくれるなら、誰の生首だらうがもとよりかまはぬ。兎も角も祈りを籠めて、執着の妄念は誰も一つ、どうか一日でも愉快にありつきたい念は山山。が、それが爲らぬといふ大失望。

おさへそこなッた鳥は猶惜しい。『よし、隙を見て。』

ひそかに火箸を爐に插し入れてをさをさ用意をととのへた。

『功德のためには嘆いて居らッしやらないで、早く御回向なさいまし。あたくしも御一所に』と何氣無く言へば、猶泣いて『ありがたうございます』と無邪氣に云ふ。

『さ、それぢや御水でも、あたくしが酌んでまゐりませう。』起ちかけると引きとめて、『あ、もし、それはわたくしが。』『何、あたくしだッて。』『いえ却ッてそれぢや。今わたくしが致します。』『さやうでございますか』とやうやく止めて、『井戸から新らしいのが宜しうございませう。』『さやうでございますね。』尼はたうとう手に乘ッた。細工は此一刹那。火箸はすでに烈火もあざむく。罪もかぶれ、怨も來い。おのれ、因果な生首め。

手ばやく火箸を耳の中。じりじりッとばかり血の湧く音に、行ふ心もほとんど狂ふ。岩も透れと突きゑぐれば、はたして眼の球がくわッと爲ッて白眼あらはに血を噴いた。

はやくも尼は水酌んで來た。こちらはそれと悟られまいと故意と氣だけでは落ち着いたが、高浪とうつ胸の動悸や手足のふるへは流石にどうも隱せなかッた。が、夢中の尼また氣も付かない。

心はかりの表顏の回向、木魚敲く音の羅刹の攻めつづみかと怪しまれて、ただのぼせて人事不省のありさま。夜も明けた。

事を濟まさば最早用無し、溪の何處此處と死骸の在處を大方敎へていよいよ出立のいとまごひしたが、送り出すものと送られるものと、心の中は打ッて變ッて、一人は唯歎く、一人は稍勇み立つ。情無い浮き世に人情もこの一刻にあらはれた。

《三》

最上の川ぞひ、古口の宿のほとりに繫いで居る川船に、親子とも思はれる船頭二人が立ちかかッてやッやと苫を葺いて居た。親とも見える五十ばかりのが、『どうでも是からえらく降るな。すッかり催し切ッてる。この分ぢやことしは大雪だ』と言ふと、子と見えるのが、『毎年の事だが、いやだな又。』『もうぢき川も凍るてや。川船の衆は上がッたりだ。』『こちとらは隙間からでも綱さへ曳いてりやそれで濟むけれど、運送は斯うなると一切どうも御陀佛だ。』『だけれども此頃さッぱり捕れねえの。』『この分ぢや大きに堪らねえ。』『苫アもうそッくれえで澤山だよ。』『好いか。』『どりや漁船だ。それにや又まだ降ッても來ねえもの。』『受け合ッて今夜はどッしり遣ッて來るぜ、このだし（西風の方言）ぢや。』『そこがたのしみだ。』『ちげえねえ、魚（鮭）がのぼるからな。』

むつましく咄して更に心注かなかつた川岸にいつか一人の美人が來た。『もし、船頭さん、ちよいと、もし。』

若いのが、『とッさん、大變だ。』『何がよ。』『見ねえ、あれ』と指さして、『あんな奴がいつの間にか來て、もしとよ。』『もしもし船頭さん。』『そらとッさん、此度アもしもしだとよ。』『好いぢやねえか。何とか返事をしねえ、折角呼んでるンなら。』『おら否だ、薄氣味わるい。こんな夕方に、あんな美い女。めんどくせえ。』『もしもしもしちよいと。』『そウれ、只だと思やがッて段段もしもしを澤山出しやがる。何とか言ひねえ、とッさん。』『御前言ひねえ。おら、めんどくせえ。』『おらだッて否だな、よウとッさん。あれ、手なぞ叩き出した。人を綱曳だと思やがるッ。』一調子張りあげて、『この船は客船ぢやねえよ。いけねえ、乘れねえよ。』

岸の美人は手を揚げながら、『是非乘ッて何處へ往かうと言ふのぢやありませんよ。』聲が船頭にはよく聞えない。
『便船たのむンぢやありませんよ、もし。』『とッさん、何だかよく聞えねえが、何か言ッてるぜ。めんどくせえ。何……何だッて。』『ちよいと御話したいので。』『否だぜ、とッさん、咄をしてえとよ。ふざけやがら。咄なんぞそんなもの無いよウ。何だ、無くはねえと。そッちに無くは無くッても、こッちにねえンだよ。』
老爺やうやく見かねて、『待て。何か譯があるだらうが。』『あたりめえな事を言ふぜ。譯は何にだッて有るにちげえねえ。』『だけれど、其譯にも寄るからよ。待て、おれが聞いて見る。』
向きなほッて大聲に、『この船に乘らうと言ふのかい。だが、便船ぢやねえよ。なるほど咄が有るからだと。あの、この己にかえ。うそらしいね。何うそぢやねえと。ぢや、何の咄かね。』
岸ではほとんど聲嗄れて、『それは船へ行ッて爲ますからさ。』『大きな聲なら聞えるぜ。』『その聲が出ませんから。』『聲が出ねえと。何て安物の聲だらう。めんどくせえな、向う岸まで仕方ねえ遣るのかな。』『とッさん、あいつ、泳げめえか。』
やうやく此方の岸へ附けると喜んで直に乘り移ッた。何ものと言ふまでも無し、是れすなはち前回に出た女であッた。
更に前もやッて居た方へ漕ぎもどす内も、無邪氣な息子は用も無いのに親父の傍に立ちかかッて、『いやに薄ッ氣味わるいぢやねえか、とッさん。あんまり女が美過ぎるぜ。今時分、あんな奴がこんな所へ。』『シッ、聞えらアな。』『だッて變だ。化け物で無けりや御たづねものだ。』『どッちだッて宜いや。よく咄を聞いてから。』『ことわッて置くよ。おら否だよ。おら艫の役まはりだ。化け物だッたら承知するもんか。』
傍へ來られて見ると、ぞんざいな口も利けなくなッて親父が、『ええ、さぞ御寒うごわしたらう。火有りますて、その爐に。』
女は輕く會釋して、『どうもありがたう。事に因ッたら頼んで見たいと思ふことが有るのでねえ。』にこりと笑ふ。その顏を息子は向うから睨めて居た。
『咄たア何でがすね。』『どうも妙なんで。ちよいと頼みにくい事で。』『そられ、とッさん、しッかりしなよ。』『まア何でがす。』『とッさん、此處へ置くぜ。此棒なら毆り好い。』『だまッてろ。』『御女中、まア何でがす。』『妙な事をうかがふやうでムいますが、此頃は鮭が捕れますか。』
意外な問ひに親父は呆れた。女は重ねて、『もし、此頃は鮭がよく捕れますか。』
親父ただまじまじして、『鮭……まアどうも……何でごわすな、その、捕れる時は捕れますな。』『ほほほ。今澤山捕れますか。』『御前さん、鮭をどうするンだね。』『いえさ、どうするぢやありませんが、唯それから先へ聞いて見たいので。』『ふうむ。今あんまり澤山も、な。』『どういふ時に一番澤山捕れますかね。』『どういふ時にッて、唯その何でがすな、たんと登る時にやたんと、なア。』『その、たんと登る時は何か譯でもあッてか知らん。』『わたし、鮭でねえから知りましねえ。』
女はすこしじれ込んで、『あたし聞いたには何でも死骸なぞがあると澤山むらがるとか言ふ咄で、本當ですか。』『うゥん、何だ、そんな事か。』『そんな事かッて本當でせうか。』『そりや本當でごわす。』
急に女はいきほひ付いて、『本當ならどうも嬉しい。船頭さん見かけて御たのみ申したい事が有る。いづれその死骸なぞが流れて來る事も有りませうね。』『それなら度度でごわすて。犬

猫にかぎらず、兎、鹿、どうかすると人間も。本當はね、是ッきりの噺でごわすけれど、その中でも人間が一番好い。」「へえッ」と女は身を入り込ませた。

「犬猫や何かはあんまり小さ過ぎていけましねえ、實がごわせん。人間だと見ると、御前さん、漁師ども一同が承知で、とッつかめえて、石か何か錘をくくしつけて沈めます。沈めても流れて行かねえ。その臭ひを嗅ぎつけて魚の奴等うツぢやうツぢや。」さもむらがると云ふ意味で顏までもしかめた。

「さう、さう、さうだッて。何でもあたしもさう聞いたの。それ聞いて安心した。見かけて御前さんに賴みが有る。」「ふむ、どういふ事で。」「とッあん、しッかりだぜ。」息子が又口を出した。「大丈夫だよ。安心しな。」「なぐり好い棒は此所にあるぜ。」「分かッたッて事よ。」「とッさん、犢鼻褌は緊りか。」「わかッたよウ。ところで、どういふ御たのみで。」

女はしばらく言ひかねた。「何だかあんまり妙なので、どうも。」「ふウむ。」「賴むものに事を缺いて妙なので。」「ふウむ。」「もし人間の死骸が來たならばね。」「ふウむ。」「ヤッはり左樣して沈めもしようね。」「ふウむ。」「え、もしッ。」

たなかに氣が付いて、「何だッて。うん、つい、是は爲たり、御前さんの帶の模樣にある唐草が辣韮見たやうでをかしいと思ッてたよ。」「ほほほ、否だねえ、くだらない。ねえ、人間が流れて來たら。」「えッ、來たとえ。」「あれさ、今にもし流れて來たらばねえ、やッぱりさうするの。」『沈めちまふ。』『そこで賴む事が有るの。』「早く爲なせえ。さッきから御とと揃ひばかりで。」『改まッて賴むのも變だが、そんな時もあッたら何うか御前さんの働きで其死骸の首だけ斷ッて、あたしに賣ッてくれまいか。」「あの、首をえッ」と仰天した。

「さ、びッくりもしようが、心願のため、助けると思ッてね。そのかはり惡いやうには爲ない。」『首たア、やッぱりあの肩から生えてるあの、あれかね。あれを、あの生首をえ。ま、大變な事言ひ出すぜ。己……わたしや否だ、そりや。」「何、いやだとえ」ときッと睨んだ。

「それ見ねえ、と……とッさん。」「むウ、あわてるない。おら、大丈夫、しッかりだ。」『とッさん、御前、何をもぢもぢ、懷中へ手を入れて。」「好いやい、中から犢鼻褌をきつくするんだいッ。」

社にかまへ込んで、『これ御女中、御前さん、本當に女かね。女でねえなら女でねえと、正體言ッてくんなせえ。うんにや、並一とほりの女が、物にも寄る、土左衛門の首なんぞを。」と半ば聞かず打ち消して、『さう思ふのも尤もだよ。だけれども心願のためだから。女であるも無いも無い。」『だッて、首なんぞを。」「それが是非要るので。」『舐めるのか。」「馬鹿御言ひ。そんな事ぢや無い。功德のために祈りをあげるだけの事さ。見かけて斯うと言ッたからには承知されないからッて默ッては引ッ込まない。」

『とッさん、すこし離れて居なせえ』と又息子が口を出す。「承知だ。貴樣、こッちへ來いや。」「いやだ、己。」「來いや、不孝爲ずに。よウ、こいよ。ええい、暗くさへなりをッた。」

『船頭さん、わるく疑るも無理は無いが、何もあやしいものぢや無い。正直と見かけて賴むのさ。賴んだしるしだけにまづ是だけは先に上げる。」五圓札一枚つき出した。

「いよいよ首を取ッてくれた時は此上にもう十圓、好いかえ、もう十圓。」「もう十圓、あの此上にかね。」「あいよ。」「此上にだね。〆めては十五圓だと云ふンだ……ごわすね。」「とッさん、だまされちやいけねえよ。」「御女中、譃ぢや無いかね。」「うたぐり深い人だね。何、うそを吐

くものか。』『とッさん、金だと思ッて木の葉つかむめえよ。』『御女中、大丈夫十五圓出しなさるンだね。きッと、ほんと、まちがひ無く？ふウむ、妙なものを仕入れる人も有るもんだ。きッとでごわすね。もし、そんなら二つなら三十圓出しなさるかね。』『ぷッ、そんなに有りやしまい。』『らんにゃ、心中でもあれば。』『だが、男のにかぎるよ。』『男同士の心中だッて有りさうなものだ。早く聞いてりや家の野郎の死んだ時もうけるンだッけ。』『二つでも三つでも買ッて好いから。』『二月ほど待てめえか、受け合ッて十も十五も買ッてやらうが。』『どうして。』『豚尾の國から持ッて來まさ。』『ほほほ、否だよ。ま、差しあたり一つで好いから早く。』『早く？　けれど、これ、流れて來るのを待つンだからな。さうかと言ッて生きてる者を抛り込めねえから。だが、きッと貰ふんでごわすね。あゝ、十五圓の金は欲しいが、斬るのは何だか否だなア。前錢で貰はれめえか。』『それはいけない。』『この五圓は手附だと言ひなすッたね。是だけ貰ッて、後は流れて來ねえ振りにするか。』『ふざけるンぢや無いよ。』『どうしような、おい』と心動いて息子に相談。『その札大丈夫か。』『大丈夫だ。來て見なよ。』『こッちへ抛らッせえ。』『來ばアな、風に。怖かねえから來いや。己言はねえ事ぢやねえ、だからぐづぐづ云はずに早く此御女中を船に御乘せ申した方が好いと。』

十五圓の掛聲に目が暮れて、たうとう心を動かした。いつ流れて來るか來ないか分からないものを氣を長くその夜は其儘にヤッて居る事にした。女ももとより船に泊る。

五日か六日の夕月がやうやう山の眉からかじりつくといふ體で差しのぞいて水明りもうッすり霞む。雨か風かと怪しまれる瀨の音がなまじひ無音だけに凄みを加へて、寒さ一入はげしく爲ッたが、慾であたゝまッた身には一向に感じない。

『とッさん、もし今にも流れて來たからッて、何だな、斬るなア何で斬る。』『庖丁で澤山だ。』『切れるか。』『磨がうか。』『その方が間ちげえ無えだな。』『あいにくだ。有りあはせの庖丁は小せえが、切れるか知らん。鉈にしようか。鉈なら丁度大きいのが有るけれども。』『駄目言ひなさんな。材木ぢやあるめえし。鉈よく磨いで置くさ。』『おッと來た。』

しきりにごしごし磨ぎながら、『一體、御女中、何の心願にするンでごわすね。此年になるがまだ聞いた事が無え。何でもよッぽど大變な祈りでがせうね。』『何ね、實に親の病氣を治すためで。』

正直者は眞に受けて、『はてね、親の病氣をえ。ふウむ、御前さんも若えに似合はねえ、恐ろしい孝行だな。こら野郎、よく聞け、この御女中の孝行をよ。親の病氣に首を何うしなさるね。煎じてでもかね。』『まアそんなものさ。』『教へて下せえな人助けだ。』『今に教へてあげるよ、よッぽど混み入ッて六かしいからね。』『でごわすか。それなら猶の事、はやく流れて來りや好いにな。御女中の孝行も通る、己たちも十五圓になる。』『一樣に有り附けるといふもんだ。』

實に空な事を待ッて居たさうであッたが、自然の事はかへッて當て嵌めたやうになる事も有るもので、不思議と云ふも實に不思議、川上から實際死骸が流れて來た

慾で一生懸命ゆゑ、親父が目ざとくきッと認めた。『おや、あの黒えもの。しめたぞ。らしいて。』息子もつくづくすかし見て、『なる……なアるほど。だけれども、まだ分からねえ。材木かも知れねえ。』『材木か。さうかな。材木であッて見ろ、承知しねえ。』『待てよ、人間らしいがの。さうだ、たしかに人間だ。』思はず大きく

聲を放ッた。

二人の騒ぎはやかましいほどで、ほとんど唯こをどりする。『〆めたな。神さまの御助けだ。どうだえ、どぶりどぶりと遣ッて來るわ、いやさ御出でなさりますわい。五圓もらッてあるから後は十圓、えへへ、殘金が流れて來るンだ。さッさと早く御出でなせえ。道草食ふぢやねえ、道水呑まずと早く御出でなせえよ。なんぼ瀬が早いからッてぐるぐる回らずとも。』

死骸は手近に流れて來た。

「それ、そッちから、うんとこしよ。網をよウ、作《息子の名》そッちから向うへ――投げるンだ、さッと。これよ、向うッてば分からねえ。さうだ、それ、よしか。うん、〆め、〆め、男だ、ざんぎりだ。どうしても十圓だ。そ、そ、早く網で縛るンだ。」「足だから押さへにくくッて辷ッていけねえ。」「だから早く縛るンだ。」「手がつべたくッてたまらねえ。あれッ。」『どうした。』『大丈夫だ。いやに辷る。重てえ。强情な死人だ。』「縛れたか。」『もうちッとだ。待て、待て。しッかり縛るンだから。それ、よしと。」「あ痛。そりや己の足だ。」「うんとこな。」『いてえッてば、己の足を。』　そんなら土左なア何處へ往ッた。うぬ、駈け出しやがッたか。』何しろ引ッくり返るやうな騒ぎで漸く船に取り上げた。

『やれやれ、土左衛門さま、あなたの御蔭さまで助かります。あなたも御死になさッて十五圓に賣れるとは本當に死に花といふもので、鮪より上値でごわすから。わたしらに取ッちや神さまだ。あなた樣の首だけいただけば宜しいのでごわす。ならば、首が二つも有ッて下さると猶宜しいのでごわすが、何一つだッて無いよりは增しでごわす。もし御女中。たうとう物に爲りましたよ。』

勇み立たれて女も大いに力を得、やうやく近寄ッて死骸を見た。何しろ男には相違無いが、暗くて面體などは見えない。

「とッさん、早く斬るなら斬るさ。誰でもさすと事だから。」「おッと、そりや言はずともだ。やッぱり庖丁お研からうな。研いで置いたから安心だ。どれ、ちよッくり遣ッつけべい。土左衛門さま、御免なせえよ。」

いざとばかりに立ち寄りは立ち寄ッたが、さて何うもたとばかり。困ッたな。

『とッさん、何してるだ、ぐづぐづと。』『貴樣今何處に居る。ここへ來て手傳へやい。』『おら今用が有る。』『何の用だ。』『何でも好いや。早くさッさと斬らねえのかよ。』『今斬らアな。』

「さッさと斬りねえ。おッかねえのか。」「馬鹿言へ。早過ぎるのも樂しみが無えからよ。今斬らア。斬る分にや何譯が有るもんか。庖丁あてがッて、ぷつりときればそれで好いンだ。」『へん、負けをしみ言ッてるぜ。鰻や泥鰌たアちがふぜ。」「だまッてろ。何も分りもしねえで。ええ、濟みませんが土左衛門さま、勘忍しなせえ。ようごわすか。斬ッたッて痛みア爲りませんから。」『あんな事言ッてら。死人に何で痛えもンか。』「だまッてろ。是が禮儀だ。ええ土左衛門さま、どうせ貴君も死んだ後の事でごわすから、首の一つやそこら有ッたッて仕方ごわすめえ、まづ物の道理がね。その不用な物を頂戴すると靈魂そこに浮かび上がるものが、まづ此親孝行な御女中と、斯う申すわたしらとの二組ごわさ。功徳でごわせう。經も讀んだり、花を上げたりするばかりが功徳ぢやごわせんからな。」『とッさん、御前、どッちの事を言ッてるンだ。』「死人に口無しだから向うのも些しは手傳ッて言ッて遣るンだい。ところで、土左衛門さま、今言ふとほりの次第で、どうか何分氣前よく願ひやす。庖丁もよく磨いで置きましたからね。待てよ、是で餘計な心配だけれど、この方は是で極樂へ行くだらうか地獄へ行くだらうか、な

ら作。」「どッちだッて宜いぢやねえか。」「首が無かッたら道の口當が付くめえて。」「かまふもンかな。」「だけれども、ちよいと左樣も思ふてや。もし、かめえますめえな、あなた、其處はあなたの事でごわすから。今だッて斯う死んでせえ間ちげえ無く、川ア降ンなさるくれえだもの。」「とッさん、好い加減にしねえな。氣味がわりいやな。」「氣味がわるいからよく申し上げるのだ。好からうもう。遣ッけよう。」

更に心を決定して立ちかかッて又ふと考へた。「待てよ。暗えな。まちげえて己の手でも切ると大事だ。作、提灯だ。」

女は急に氣が付いて、「あれ、ま、提灯が有るの。さッきから肝心の時に點けないから無いと思ッた。」「いえ、有りますて。點けたら、來て、待ッてろ。何、否も應もあるもンか。さッさと來い。」

否々ながら作も立ち寄る。女も共に差し寄ッて、差し出した提灯の火影で不圖その死人を見てびッくり、「おやッ」とばかり。

聲に船頭も同じくびッくり。言句も無くて女を見ると、女は人目もはばからず、ひしと死人に抱き付く體、見る二人の氣味わるさ。途方に暮れた。

女は死人に顔寄せて、「ても、ま、お前さんだッたかねえ。ま、不思議な事も有れば有る。思ひがけ無い、どうしてまア。」あわてて船頭をふりかへッて、「どうか賴むよ、もし活かして。もしッてえば、何をぼかんと。どうかさ、活かしてさ。」泣き聲で言ふ。

船頭いよいよ途方に暮れて、「分からねえ事言ふ人だな。」「ちッ、何が分からない。活かしてと賴むのに。」「だからよ。首斬りや迚も活きねえぜ。」「首斬るンぢや無いッてば。」「あれさ、こりや妙てこだ。今が今首斬れと云ひながら、うらむ、聞えた、御前、己だまかしたな。」「仕樣が無いぢや無いか、分けもなくッて。此死骸だけは首斬ッちや大變だよ。知ッてる人だ。とてもそんな事。だから活かしてと言ふのにさ。とぼけずによく聞くが好いッ。」噛み付くやうにじれ込んだ。

やうやく船頭も飲み込んだが、何分寒空の潮死と言ふので蘇生の成否は覺束無い。念を押した。

「ぢややッちや見るが、何しろ此つめてえ川水に漬かッてたことだから、たしかにや受け合はれましねえ、なら作。」「ところを何うでも首を斬ッてね、今度こそは猶の賴みだよ。」「待ちなせえ。遣ッて見る。」「いいかえ、きッと。」「だから受け合へねえといふだけで。」

力無い言ひ草だが何うにも仕方が無く、船頭の爲るままに唯當惑してまごまごした。何ぞ思はん、此死骸といふのが生首まで持ち出して逢ひたがッた相手の男で、さすが一目見るや否や、例の庵室での祈りが利いたのかと女も胸にぎッくり答へて、且は嬉しく、且は怖ろしく、さてまた悲しくて堪らない。船頭親子は言ひ付けどほり又大騒ぎで、しきりと死骸を裸になどして居る。

「じれッてえ、何してるンだ。己脱がせるから、作、火焚け。」「襯衣の紐釦が取れねえで。」「出しッたッて好いのによ。」「股引の紐が小間結びだ。」「好いからそれや己が爲ると。はアやれやれ、飛んでも無え目に逢ふ晩だ。やれ首を斬れ、やれ活かせ。己だッてその氣で死骸に引導令めたに、なんぼ亡者の前だって極まりがわりいや。恐ろしくたんと着てるぢやねえか。死ぬのにこんな無駄してる。それ、是で眞裸だ。何て毛むくじやらな足だらう。だが、何しろ好い男だ。作やい。ちよいと手貸せ。傷でもあるか身體見るンだ。」「いやだ、己。」「また言ふ事聞かねえか。己一人ぢや動かねえ。」「おら今火焚いて

る。」「傷有りや火焚いたッて駄目だによ。」「傷無くとよ。」「無くと誰言ッた。」「だれも言はねえ。」「馬鹿扱くな。」身體をあらためたが更に何の傷も無かッた。が、水のやうに冷えては居る。

身勝手なもので女も今は一心不亂、心に神佛を念じ切ッて、船頭どもを命と賴んだ。田舍ものの質朴さ、何う扱きつかはれても腹を立てず、言ふなり次第氣の毒なほど自由に爲ッてはたらいた。何分冷え切ッて容易に蘇生の模樣も見えず、とても駄目だと大抵匕を擲げかけたが、また怒り立てられるがつらさに船頭どもも一心籠めた、その甲斐が遂にあッた、命がまるで拾ひもので。

蘇生したばかり、うッとりは爲て居たが、實に男も女を見て膽をつぶして、ただ呆れ果てた。船頭親子是また夢に夢を見る鹽梅。

「ああ命づよかッた。何しろ有りがたい。何からさきへ御噺して好いか、とても此處ぢや噺し切れないから兎も角も宿屋をゆッくり取る事にしよう。船頭さん、ね。そのつもりで、誠にどうも御氣の毒だが、何と是から古口まで着けて貰はれまいか。」「宜うごわす。どうせ夜明かしの仕事だから何うでも宜うごわすが、一件はどうなさるね」と首を叩いて見せる。

「そりやもう見合はせに爲るつもり。」「何、見合はせにするとえ。」「心配しないでも可いよ。喜びのしるしに存分費やして、殘りを十分御禮あげるから。」「そりやもッてえねえ、だが、親の病氣だ」「えのに、無くッて濟みやすがえ」と正直に聞かれて、ふき出すほど可笑しく、「好い工夫が別に付いたからさ。」「はてね、それぢやあ。それにしても心がけて置きやせう、そんならば。流れて來次第取ッて置くことにして。」「ああ何でも好い。」

兎も角もと急がせられたので船頭まるで烟に卷かれて、すぐに古口へと漕ぎのぼる。男は疲れてがッたりして、船の中にへたばッたぎり。女ばかりは勇み立つ。

古口の貝足屋とかいふ旅籠屋、成るべく奧まッた座敷をと好んで、自由自儘に押し込んだ。船頭には約束どほりの賃を取らせて、しッかりと口を止め、念のために名を聞くと、つい近村で作藏と呼び做すおもむき、その子は作太郎といふとの事であッた。一夜に二十圓の金を手に入れた船頭の笑ひ顏は書くだけが無駄であッた。

忍び忍びに藥をととのへて女の介抱一心となッて、其日晝頃には男も大きに元氣を加へた。さしもの女もそれで却ッて涙含む。

（四）

女その本名は阿大とて實親はまるで知れぬ身の上とやら、藥の上から湯島天神町のある經師屋にあはれて、その經師屋のために身を沈め、妻が利き出してから親許と音信不通になッてしまッた。

男は杉谷剛三郎とて可なりの資産ある家に生まれたが、才氣餘り過ぎて失敗多く、搗てて加へて阿大に打ち込んで、尾羽打ちからし果ててしまッたが、妙に一見識をかまへて居て、それほどに打ち込んだ女を、さう爲ッては見もかへらず、却ッて女に焦れさせた。

それぎりで丸二年、止むを得ず阿大も酒田の大黒屋塚卯吉に引かされてしまッた、その擧句は生首沙汰などといふ氣ちがひみた事になッて、どうした途端か、まるでその祈りが利いたとしか思はれぬほど不思議に再會となッた。寢て居る間も剛三郎の枕許に附きッきりで、俄御新造唯たわい無い。

「何からさきへ噺して宜いか、まるで當惑しちまひますが、本當にあなたといふ方は薄情な、

ひどい方ですわ。何ッて御とぼけなさるな、人がなんぼそりや商賣して居たから譃や手管だと思ひなすッたか知れないけれども餘りと言へば人の心も知らな過ぎるといふもンです。』『だから何しろ、あやまッたと云ふぢや無いか。私だッて派手な土地へきたない眞似は爲たくないさ。つまり、さうすりや御前の恥にも爲ることと……。』半分言はせず、『譃、譃、うウそ。なら、内證で斯う斯うだとあたしにだけ打ち明けて、夫から足を拔くなり何なりして下すッたッて宜いぢやありませんか。』未練を殘させまいと思ッてさ。わたしのやうな者に關りあッて居て・もしか御前の一生をあやまらせる事が有ッてはと思ひも爲たし。』『どうも口巧者に爲ッたのね。にくらしい。二年の間方方で仕込まれたので。』『さうさ、酒田の大盡さまに……あ痛。病人だと思ッてたんと意地めるさ。どうせ、あなた樣から御あづかり申した命ですから。』『あたしの要る時はいつでも返して頂戴よ』とにッこり笑ふ。

急にまた眞面目になッて、『ですが、それぢや追ひ剝ぎに逢ッて川へ御落ちなすッたンですとえ。飛んでも無いまア。よくよく運がつよいのねえ。』『實に斯う助からうとは思はなかッた。是でも自分から、たとひどんなに困ッても、身なぞ投げる馬鹿は爲ないからな。』『身を投げる所がちがひませう』と上目で睨む。『そりや違ふさ。そこらの笑窪の中が願はくばだ。別に酒田に用は無いが、近所まで來たついで、又と言ッても來られないから、切めて餘所ながら御奧樣の……あ痛、またつめる、御樣子を伺ッて行きたいと、是がいはゆる未練だね。ところがこんな大しくじり。いやはや今年は厄年だ。』『たんと御冷かしなさいよ、人の氣も知らないで。さッきもあれ程に言ッたのを全ッきり右から左へ聞き拔かして、女の方で、あなた、眞實そんな怖らしい事が何うして唯で出來ますか。』『まッくらな内、早く首にしちまひたかッたらう。』『どうも何うしたらあなたは。ようムんすよ。』『何が好いの。え、何が。』『つんぼですよ。』『はは、調法な聾だな。そんな事言はないで、然るべき返辭をしたまへさ。』『どッちが、人が本氣で言ふのを冷かすッばかりでッ。』『だから冷かさないよ。』『たんと御ひやかしなさいよ。』『否だよ。澤山だよ。さんざんもう川で身體ひやかした。だが、阿大……』と首をすぼめて小聲になッて、『罰があたるか知ら、呼び捨てにして。』『勝手に御しなさい。』なら大びらだ。おい、阿大。と言ふと何だか變てこだな。何でも好い、肝心の啖だ。それぢや御前は何うしても酒田の錢塚を出る氣かね。大丈夫間ちがひ無しといふ所だね。』

阿大はきりりと相好凄く、『きッと……きッとですよッ。』

明二郎は暫時だまッて居た。『きッと其氣が變らないなら、さ、きッとなら。』腕をしごいて、『私も男だ。』二人ともまた暫時無言になッた。

『どうせ是からあたしが歸れば、家をなぜだまッて明けたと怒られるには決まッてる、さう來れば手ッ取り早いわ。』『逆ねぢを食はせるか。好からう、それも。』『前から考へてたッて駄目。何しろぶつかり次第に爲ませうわ。あなたは成るたけ場へ出ないで、近所でまづ見て居らッしやい。』『承知した。』

錢塚こそ好い面の皮、二人がこんな相談して居るとは夢にも知らず、崇めたてまつる祕藏の細君なぜ遲いかとひとりくよくよ。一間どころへ立てこもッて、考へ込んで居るところへ、離れ屋に居る母の許から迎へが來た。『あの、御茶に入らッしやいましッて。』

きッと阿大の事だらうと行かぬさきから胸ど

ツきり。何食はぬ顔で行ッたが、扨やツぱり、短兵急に斫り込まれた。
『阿大は一體どうしたの。』
『まだ歸りません。』是非無く言ふ。
『ふウむ』と母は考へて、『まるツきりの斷り無しかえ。』その見幕が凄ましい。
『まるツきりでもムいませんが、さア、どうも……どうしたンですかな。』『御前の円木棒にも呆れるよ。』『へえ……』『へえぢや無い。大概に捲かれるさ。まだ阿大は嫁ぢや無いよ。』立腹の聲の次第にするどく、『ただの召しつかひ、奉公人だよ。御前の馬鹿も大概に御爲。』『御もツともでございます。出たツきりとは不埒な奴で。』『不埒な奴は可愛いだらう。どうせ、さうさ、あたしなんぞの言ふ事は歯も立たない。年寄りは邪魔に極まツてる。』變な否味は辣であッた。
この變な否味の子細は諄々言はずとも可し、唯此卯吉は養子で、母に兎角、若づくりで、卯吉に嫁なり妾なり來ると兎角皮肉に此母が扱きおろすといふ平日の事實から思ひ合はせれば分かる。
『ねえ、御前も二十円ぢや無いか。うツそりにも切りが有りさうなものだ。阿大をにくんで、やきもちらしく言ふのでは無いけれど、錢塚の家風を何と思ふのか知ら。』
一應實に道理なので返すべき言葉は無い。
『重重恐れ入りました。相濟みません。』『あたしの言ふのが無理ぢやあるまいね。』『何のあなた。』『ならば今日といふ今日あたし御前に頼みが有る。』どうせ碌な事では無いとうんざりした。
『ねえ、頼みと云ふのは外でも無い。阿大を見切ッてもらひたい。斷ッて置くけれど、よくよく妾も家のためと考へ拔いたところで言ひにくい所を言ふのだから、御前がたが何う言ッても是ばかりは聞かないよ。』頭から返す言葉を封じてしまッた。
畢竟これも嫉妬からとわるく邪推するだけ返辭も澁ると、母親はぐツとじれ込んで、『須らく分からなけりや分かるやうに見せるものも有るが、さうすりやあんまり御前の円木棒を繰り出すやうな譯あひだから。それとも達て見たいのなら』と變に奥歯に物がはさまる。
『何の事でせうな。』『御前、それ見て恥をかきたいかえ。』『何も別に恥をかくことも無からうかと思ひます。』『それだから円木棒だと云ふンだよ。どうしたらそんなに盲になるだらう。ちッ、いまいましい。』
『ただ今』と言ッて障子を開けて、おや、阿大が歸ッて來た。
母はぎらりと見たばかり。卯吉が、
『どうしたンだ、馬鹿に遲い。何處どうして歩いてたのだ。』怒りを移しにするどく遣ッた。
『御だまり、卯吉。阿大が歸ッたからには仕方無い。事に困ると證據を聞かせるから。これ、阿大、どうも御前は腕者だね。家の内房は知らないのさ。』
さすがの阿大も氣を拔かれて、目ばかりぱちくりして、『どうも遲くなりまして。』
『いゝよ、言ひ譯も何も要らない。感心した凄い腕だ。』『あたくしが何か。』『御前にも似合はず野暮にとぼけるね。』
氣色を阿大見て取ッて、ぎよツとしたが、落ち着いて、これさいはひと膽を据ゑ、『はア、其事でございますか。それぢや頭巾を脱ぎませうよ。』『あゝ、はツきりした、好い膽だ。それぢやつべこべ言ふまいよ。具足屋は唯御たのしみさ。ね、斯う出られると幾分か氣の毒にも爲るだらうが、どうせ卯吉がわるいのさ、御前に元よりだますお積意、あたしやそんな事をぐづぐづ言はない。そのかはり手切れも上げないから、其處だけは不承して御くれ。』

『おツかさん私にはさツぱり』と卯吉がすこしむツとした氣味。

睨みつけて、「一商がゆいぢやないか、御前もまア。その後さきが讀めないかい。ね、阿大、自慢ぢや無いが此取りさばきは男にも一寸出來まいが。此婆がただ喧しいばかりだと思ふか、それとも食へないと思ふか、御前の事た、如才あるまい。何かえ、明二郎さんの今居る宿はやツぱり旭屋かえ。』

呆れてしまツて、「どうも、ま、あなた。是ばかりはあたくしも。』『ちツとはびツくりしたらうね。文句言ふところは有るまい。御前だけの物は持ツて出て御出で。』

明二郎と打ち合はせてすこしはゆする計畫が裏を行かれてがらりと外れ、大きに氣量をわるくしたが、さて男でも及ばない母親の取りさばきには流石にさからふ工夫も無い。

何しろ、出て行けるといふ、目的だけはちやんと達した大滿足、好い加減に慾は切り上げろと、それしやだけに見切りが早く、どうも長長御世話さまでと惡びれず暇を告げた、すぐ其場で。卯吉は唯氣が拔けた。

勇むやうな、勇まぬやうな變妙な體裁でぼんやり宿へ歸ツた阿大を見て、明二郎また合點が行かない。これこれだとの譯を聞いて、おやおやとばかり同じく呆れた。

「一商ごたへの有る親芋だて。ちと目的は外れたが、見切りは好い加減が花だらう。」「それにちがひ有りませんともさ。慾を言ひ出せば際限が無いンですもの。」「變てこな事ばかり在るものさ。こなひだから全で噺見たやうだ。やツぱり運が何處か知らん守ツて居てくれると見える。どうしよう、是から何處へ往かう。御前にも言ツたとほり懷中は川の中へ落しちまツて、着の身着の儘、是ツきりだから。」「だツて東京へどうかして、行けない事はありませんよ。」『何も賣りもしないでか。』『さうですとも。』『大きいな。いよいよもツて命の親だ。』「ほほほ、是から親になりませうか。」「否だぜ錢塚の二代目は。』

ところへ宿屋の下女が來て、「錢塚さんの御神さんが。」「なに、錢塚さんの……誰に逢ふツて。」又意外におどろいた。

『こちらさまに。』「あたしにかえ。この阿大にかえ。』「阿大さまとかに。」「よし、御とほし申せ。』

『どうしたンだらう阿大。』「どうも何だかね。」

「あたし何うしよう。」「御逢ひなさいよ。」「困ツたな、この形で。そ……そら、羽織を。それや胴着だな。その、こツちの。じれツたい、そりや風呂敷だ。」

あわてる内に入ツて來た。中中どうも極まりが惡い。初對面の挨拶はぐづぐづに遣ツて退けた。

どうして母親しツかりしたもので、「阿大、さぞびツくり爲たらうが、決してわるく思はないでおくれ。それや是やの噺に一寸あたし出て來たの。」

今更こちらも氣の毒で、『どういたしてあなた、あたしが重重心得ちがひでございました。御腹立ちの無いばかりか、そんなに御丁寧に、それぢや何と申して宜いか、どうも困り切ツてしまひます。」「御前を別に憎みもしない。御前が此方と出會ひしたのを咎めも爲ない。ところで聞いてもらふ賴みが有る。これは、あなた、明二郎さんと仰やいますか、あなたにも阿大同樣、御一所に聞いていただきたうございます。」

さて何を難題言ひ出されるかと馬鹿に氣味はわるかツたが、臆病らしく否とも言へず、『はい、はい』と米搗螽を極めた。

「別に無理でも無いと思ふンですが、私どものあの馬鹿野郎、あれが又どんな未練でも阿大に

残して、あなた方の行くさきへでも尾いて歩くか知れませんが、どうか貴君にも宜しく御寄せ付け下さいませんやうにね、その事でございます。』

わづかに心落ち着いて、『それ式の事、何のあなた。承知いたしましたとも。』『あれでも後つぎと定めた人間でございますから何うかくだらなく致したくムいませんでねえ。』『御もッともでムいますとも。』『全體凝り性なのですから。』『なるほど。』『もしも惡く夢中にでもなられると困ッてしまひますから。御如才もムいますまいと存じましたけれど、又さうでも無いなぞと考へまして、つい御邪魔に上がりました。』懐中から何か出す。見れば案外、百圓束。『失禮ではございますが』と言ひ出されただけで二人とも目と目を見合はせた。『それはほんの志でございます。あんまり指圖がましいか知れませんが、どうか此土地をば一日も遠く立ちはなれて頂きたうございますから、せめて路銀の足しになりともと存じまして。ね、阿大、この方によく御取り做しを言ふが宜いよ。』聞いた口がそれこそ塞がらない。何と挨拶して好いものやら。これまた困ッた次第。欲しいにはちがひ無いが、おいそれと手も出せない。二人とも顔見合はせるばかりで、まづく、只辭退した。が、素よりそのつもりで出した金、いはれ無くは引ッ込ませず、どうにか斯うにも押し付けた。貰ふにも其氣の毒さ。

『どうして、見上げた齒ごたへだ。』

（五）

下谷池の端、不忍池を掃き出し二階から見晴らす小意氣な歌舞伎門の有る、氣の利いた家にいつか杉谷明二郎といふ陶器の標札まで掛ッて、可なりな生計を營み家族が移り住んで、家には明二郎阿大の夫婦ばかり、下女一人に車夫一人の外にはすぱにえる種だとか言ふ小狗が唯一疋。

すこし氣候もぽかついて來て、梅見も宜からうと云ふので、明二郎夫婦わざと人力車は辻乘にして、鴛鴦を極めながら向島あたりを散歩した擧句、いくらか故郷へ歸といふ氣組で、更に轉じて火ともし頃から芳原へはまり金子から昔馴染みの藝者どもへ口を掛けると、可なりな大盡を極めて見た。

いつか夜も更けて十一時近くなッたので、すぐに人力車で立ち歸り、不圖わが家の門の横を見ると、黒塀にぴッたりと添ッて怪しい姿がたゝずんで居た。夫婦ともに鋭、性質、目ばやく佶と見つけたが、曲者またずッと行き過ぎたので別段に咎めもせず、その儘中へ入ッてしまッた。

『御留守に妙な人がまゐりましたよ』と下女のお初が御山に言ひ出した。

『妙な人？』と阿大がすぐに問ひ返すと、『ほんとに妙な人でムいました。あの奥さんに御目にかかりたうムいますッて。』『あたしにかえ。』『一體どんな風の人？』『どんなッて、ちよいと何うも。さうですね。』『一目には大きいのかえ。』『さやうですね。』『小さいのかえ。』『さやうですね。』『どッちだえ。』『あんまり小さくも、と言ッて大きくも。あたくしのより些しは大きい……。』『否だよ。御前のやうなら鯨だわ。いくつぐらゐ。』『二十四五でムいませうね。』『何だッてえの。』『ですから奥さんに何うか御目にかかりたうムいますッて。それから何處へ入らしッたかと聞きましたから、あの今日は旦那さまと御一所で梅見とかに入らッしやいましたと申しましたらばね、奥さん、どんなに可笑しうムいましたらう。けれど怖うムいましたよ。』『どうして。』『だッて、さう申しましたらね、どうも其否な眼をしましてね……。』初は噺に力を入れて、思は

ず手を休めて聞く明二郎の方をも見た。
「ぐッと、あなた、睨めまして、そして、あなた、變に笑ッて、畜生めッて。」「をかしな奴だね。うむ、分かッた。ね、あなた、酒田の一件、あの御傳ちやありますまいか。」『どうもさうらしいて。初、何か、中肉中身長の、そんな醜い男でも無かッたらう。』「あ、さやうでムいます。」「それにちがひ無い、ね阿大。」「否ですね、氣ちがひ。澤井の言ッたとほりたうとう飛び出したのでせうか。』『だらうよ。その外にまだ何とか云ッたか、初。』『何かぐづぐづ一人言言ッてましたけれど、よく分かりませんかッたが、何でもまた來ると申しました。」

がらりと門の音がする。おや誰か來たよと言ふ間も無く、玄關前の格子が又明く。あわてて初が取次に出て、あわてて又歸ッて來た。『來ましたよ、又」と慌し…。

『何、來たと。困るな、此夜更けに。もう十二時だ。』『あなた、追ひかへしたら宜いでせう。』『まさか、さうも行くまいが。斯う云ふさ、疲れて居りますから、どうぞ明日入らしッてと。』

意外、卯吉は案内待たず、すかりと其處へ入ッて來た。目つきからして唯で無い。阿大をはッたと睨みつけて、むムとばかりに齒がみした。

「何御用か知りませんが、一體あなたは此處を何と御思ひなさる。是でも手前どもの一城廓、誰にことわッてづかづか御出でなさいました。』が、一向相手に感じない。

「畜生、阿大ッ。ええ、うぬれは、なア。」飛びかかりさうな見脈なので、明二郎もつとずり出して、『何ですと。何とおッしやる。阿大とはそりや餘り。主ある女でムいますぞ。」

「何、主も無いもんだ。ぬすッと。」

あたまから疊みかけての雜言、なるほど些し醉ッても居た。

宥めるのが一の手と、明二郎も面を和らげて、「あなたは酒田の錢塚とんで御居でですな。大層好い御機嫌で。しかし、今晩は夜中の事ですから、御用ならまた明日。」

言はせも果てず、どッかり坐ッて、「ふざける。な。これ、君はな、人の大事にしてるものを横奪して、そ、それで世間の義理が濟…濟…。」『こりや怪しからん。人前もありますぞ。横どりとは何の言ひ草、公然とその手續きをして…。』

『公然も無いもンだ。古口の具足屋で打ち合はせなどして置いて、わしや實、じッつに殘…、殘念だ。これ。』『御待ちなさい。』『どろ坊。』

「失禮な事をッ…何ぬかすッ。」

卯吉は誰も何も無茶苦茶でいきなり明二郎へ飛び付いたから、明二郎も致し仕方無い、いくらか柔術の心得もあるので、手輕く引ッぱづして空を打たせ、のめらせて一旦押さへ付けると、いふ騷ぎに爲ッた。下女はびッくりして逃げ出す、阿大は唯仰天する、茶碗は踏まかさしたやらに轉がりまはる、犬はひとり強いふりか何かできやんきやん吠える、いやはや馬鹿馬鹿しい修羅場に爲ッた。一方は醉ッて居るので思ふほどには身がこなせず、譯無く押さへ付けられたが、何しろ無茶に暴れるといふだけなので、食ひ付くやら、引ッかくやら、あいにく明二郎の家は今夜限り車夫は餘處へ泊りに行ッたといふので、巡査呼んで來る度も拔けた。

そのうちに何うしたか、卯吉は明二郎を撥ね返して飛び起きた。はッと思ふ間、煙草盆取るより早く明二郎目がけて叩き付けたが、外すまでも無く横へ外れる、その隙を見て何と思ッたか、外へ逃げ出した。で、明二郎も追ふのは止めた。

面倒くさい、氣ちがひの飛び出したのは巡査呼ぶ世話も無いから結句好都合、すぐ戸じまりを爲ろといふので、下女の初ががたがたぶるひ

で〆め、其夜はしばらく卯吉の噂で持ち切ッて、やがて皆寐てしまッたが、偖あくる朝になッてはッとばかりに仰天したといふのは卯吉が何處から忍び込んだか、いつの間にか庭の中へ入ッて、松の樹で首を縊ッたことであッた。

驚きと騒ぎとこれ、それの檢視などとの混雜は言ふまでも無いことで、もとより明二郎夫婦に何の惡い處も無いゆゑ、一時世間の評判に爲ッただけで無事に濟んだ。が、さすがに住みにくい處もあり、一月ほど經ッて、丁度好い家が本郷の龍岡町に在ッたのでそれへ移轉した。

明二郎は池の端に居た時と同じく、やはり或る會社へ通勤して、その方では受けが好く、收入は何うか斯うか月八十圓ぐらゐには爲るので、大した贅澤も出來ないが、別段困るといふ事も無く、しかも夫婦仲はむつましく、〆まる時はよく〆まッて明二郎も更に道樂らしい事も無くなッた。斯うなると小金も出來、人からの信用もまた厚く、自然金錢の融通も好くなッて天晴れ紳士樣の前頭ぐらゐな處まで到着して一切が好都合で持ち切るやうに爲ッたが、苦勞は絶えぬもので、何か知らん順順に其影種が生いても來る。

世帯持ッてから丸三年、商賣あがりのせゐか、阿大に子が出來ない。才氣の走いものは得て子などはあまり騒がないものであるが、明二郎は一圖子愛ッて、若いに似合はずしきりに何うも子を欲しがる。阿大に取ッてはすこぶる苦しい。男のためには馬鹿になるもので、もしも斯うして長く子が出來なかッた曉には餘所へでも移り氣になられや爲ないかなどとそんな詰まらぬ事までも考へると、自然それが苦勞に爲る。

子が欲しいと唯いたづらに欲しがるあまりの自棄でもあるまいが、また左樣かとも思はれる、どうも近頃明二郎酒量が加はッて、その上すこし醉ひが良くないやうな樣子も見えるやうな、このさきもッと惡くならなければ好いがなどと、そんな事もまた苦勞に爲る。

仲の好いのと、頭の押し手が無いのとで自然二人ともに我儘――ほんの人じらしにすねて見せるだけの我儘――も出すので、犬も食はない痴話喧嘩なども時時有る、そんな事もまた苦勞に爲る。

惚れるくらゐゆゑ素より惡いとは思はないがかと言ッて何處がどう好いと言ふのでも無いのが本心の實際であるところで、そんなら何うでもかまはぬかと言ふに中中もッてさうで無く、向ふの家に乙力な派手派手しいつくりした、まるで地獄見たやうな女が引ッ越して來て、明二郎にをかしく世辭など言ッた時、明二郎もをかしく變に挨拶した、是が大火事になる事は無からうかなどと、そんな事も苦勞になる。

數へ出して見ると、目録は何頁有ッても足りないやうなもので、いづれもまづ冠らせれば差しつかへ無く苦勞の名稱をかぶるやうな種類、さう考へては馬鹿馬鹿しく、阿大只ひとりの時心の中で笑ひもした。

明二郎會社から歸るのは毎も午後四時頃なのが今日は何か用でも多いと見えて六時になッても歸ッて來ず、今か今かと御出むかへの空ッぽを荷厄介にして、果ては欠伸の賣り出しに掛りかけた所へ、がらがらとの人力車、歸ッて來た。

御出むかへは毎日おなじ事ではあるが、すべて此時の阿大の身ぶりに大いに意味を籠めてあッた。なるたけ手弱に見せようとの心がけ、つまり歸ッて來た日に直とその樣子の好い己が嚊が一段樣子よく見える――ああ吾家は好いもんだなと、それと無く魔力で利かせる魂膽をいふ。

その傳で御出むかへ申すと、いつでも御見惚

れ遊ばしてくれる。今日もまた同じ傳、同じ御見惚れ――其例首尾よく相濟んだ。此時からが夫婦相互ひにもッともッとも得意な時で、もしえなどと氣取ッて鶯を鳴かせると、むう何だなどとひねッて狸を極める。ここに於いてか壽命が爺のやうに延びる。

明二郎得意氣に火鉢の正面に坐れば、阿大得意氣にまた火鉢のこちらに坐ッて、「大層御手間が取れましたね。」「うむ、重役の相談で。なる、もう七時だな。ぢや、酒、すぐ。」すぐと食盤、すぐと下物二三品。『今日はめづらしい御下物ですよ。當てて御覧なさいまし。』『どれだ』と皿の蓋を取りにかかる。「あれさ、見ちや。見ないでさ。」

傍から見れば、何だくだらない、さッさと言ふなら言ふ、食ふたら食ふとしろと言ひたいところ、その當人同士に取ッては此内が兎角おもしろい。大きな坊ちやんたち、いかにも仲よく御遊びなさる。

『何だな、私の好きなものか。』『大きらひなの』ととぼける。『何だな。珍らしいものか。泳ぐものか、飛ぶものか、歩くものか、それとも匍ふものか。』『おほッ、そんなに言ッちまッちや。』『で無くッて分かるもンか。』『それぢやあなた誰だッて。きッと中りやしませんよ。鯨の洗ひ。』「それだ、さう言はうと思ッてた。」まことに睦ましいもので、是から酒に爲ッた。

阿大もいくらか飲むので、酒にも張り合ひ好く、銚子もやがて三度目に爲ッて、明二郎眼もすこしとろんこに爲ッた。が、さう爲るとまた愚痴も出た。

「今日社で淺野の噺だッけ、又あの上に一人出來るッて。だから、子がさ又。」「おやおや大層ですねえ、あの上にまたとは。それぢや今度で五人目ですか。』言ふだけではあッたが腹には十分淒みて居た。明二郎ただ溜息を洩す體、阿大さすがに苦しい。

『ほんとに人がうらやましいわ、そんなに五人目だなんて。』と夜言のやうに言ッて、「一體あたし何うしたンでせうかね、とても行けませんか知らん、ね、あなた。』『だけれど醫者がああ言ふンだからな。』『だから伊香保へも行ッたンでさね。何だッて出來ないンだらうかねッ、ほんとに』と自暴に釵で頭をごしごし。

明二郎はしばらく默ッて、しきりに鯨を攻めて居たが、不圖急に思ひついた體で、『どうだらう、一人もらはうか知らん。』

あんまり好い心もちでも無いが、さうとも言へず、「さうですね」と生返辭。

『ね、貰ッて一つ手遊にして見る氣は無いか。面白からうぜ。』『でも、ね、どうせ與れるやうな子なら素性がねえ。』『かまふものか。氏より育ちだ。』「どッか心あたりが有ッて？」『矢島がさう言ッた事が有ッたと思ッた。』「何です、男ですか、それとも女。」「貰ひ子なら女さ。やうやう誕生前ださうだ。」「ぢや一歲ですね。」埓も無い返答、明きらかに胸中の錯亂を表した。

「いやか、貰ふのは。何だか進まないやうだな。』『進まないでも無いンですけれど、でもあたし餘り意氣地が無さ過ぎると思ッて』とふさぎ込む

『あはは、意氣地の有るも無いも無い。どうも授かり物なら仕方が無いさ。又さうかと言ッて、もらッた後で出來るか知れない。其時やまた何うでも爲る。ね、物のためしに其子見たらどうだ。いけないか』とすこぶる機嫌取りながら言ふ。

『それもさうですけれど、まだ是で遲いといふのでは無しねえ、是からさきゆッくりしたッて。今でこそ子供が無いから落ち着いても居られますけれど、有ッた日にやそれこそ何うしてあなた、うッとしくッて。』『ふむ、そのうッとしい

のが可いぢや無いか。御前は子供のためにうッとしいのを嫌ふのかえ。』『それも、あなた、我儘腹をいためた子なら格別ですけれど。』『そりや御前隨分身勝手といふものだ。』明二郎の聲すこし鋭くなッた。

むッとしたといふ顔付で一二杯また立てつづけに煽り着けると、徳利の中は空になッた。阿大は後をどうしようと聞きもせず、『初、御銚子だよ。』といきなり命ずる、それも明二郎差し止めも爲ない。

阿初が付くか付かぬかに、外の物には手を出さず、酒ばかり又四五杯。平然として、『おい、床取ッておくれ。寝たくなッた。』

『まだ早いぢやありませんか。初、何時だえ。』『八時すこし過ぎました。』『ぢや、あなたまだ早いぢやありませんか。』『早くッたッて好い。わるいのか。』と逆に出る。

『またあなたはをかアしく。誰もわるいとは言やしませんやね。酔ふといつでもだ、無理ばッかり。』『何。』『酔ふといつでもですよ。』『いつでも何だと言ふンだ。あべこべ言ッてら、誰もこちらからぐづぐづ言ふんぢやありやしない。何ぞと言ふと酒のせゐだ。』『だッて又さうぢやありませんか。人が子供もらふのを氣が進まないと思や僻わざと。さうかと思へば又だしぬけに、寝るなんて。だから宜うムいますよ、御もらひなさいともさ。止めも何もしませんよ。』『またさうさ。人の子ならうッとしいなんて、そんな無慈悲な了簡が有るもンか。』『どうせ無慈悲でせうとも。どうせ妾なんぞ御氣に入らないのは知れてます。』『腹の中で、移り氣にでも爲ッたのか知らん。それに子でも出來たので、それと無く前置きするのぢやあるまいか。そんなら猶の事、口くされ貰はうといふものか。』

男の方でも酒がまた惡く意地を付けるのでつい言葉に角が立つ。『何、どうせ氣に入らないのが知れてると、うぬぼれ切ッてら。』あッ言ひ過ぎたと思ッたが、もう口を抓ッても取りかへせない。果して阿大は泣き出した。

『氣の強いくせに泣くのか。人馬鹿にしてら。最上川で夜あかしした時の度胸はありや誰だッけ。』悪口手ばやく言ひ放ッて、『初、下駄御出し。』初は勿怪な顔。『下駄御出し。私是から一寸其處へ行ッて來る。』初は困ッて、阿大と明二郎とを見くらべて居ると叱られた、『出せッてば。』『ようございますか奥さん、あの旦那さまが……』『あの出して御あげ。』『早くしないかッ。』初はやうやう下駄を直した。

今まで我慢し切ッたが、さすがにやはり堪へかねて、『是から何處へ入らッしやるの。』と泣き顔その儘でいふ。『何處だッて好い。』『好かありませんよ。』『行きたいとこへ行くンだ。』『だから何處ですよ。何もあなたが勝手で入らッしやるのを止めやしませんけれど、聞くだけは聞いときますよ。』『大きに御世話だ。家にばかりこびり付いてたッて詰まるもンか。』『さうでせうとも。子供のよく出來る處へ入らッしやいよ。』聞きながして明二郎出てしまッた。

さア苦勞になッて來た。よせば好かッた、あんまり言ひ過ぎたかと後悔もしたが、それだけでは氣が休まらない。商賣あがりの癖とて夜道もいとはず、すぐ後を尾いて見る氣にもなッた。

初が氣の毒さうな顔つきして、『旦那さまは何う遊ばしましたンですか。』『なアに、いつもの御株さ。ほんとに人ばかり意地めて、かまふもんか、もう何うなッたッて。惡性、薄情男ッ。』『そんなに御怒りなすッちや……』『好いよ、御前は引ッ込んで御出で。』可愛さうに初までおびたりときられる、

『ほんとに人、くやしくツてなりやしない。一杯飲んでゆツくり好い機嫌にならうとは爲ないで、何でもこりや、てツきりさうだ。又藝者か何か、かかりあひが付いて、それで無くツてあんなに邪見に。もう何うなツたツて構ふもンか。』

その下から後尾ける支度で忙がしい。『初、下駄御出し』と烈しく命ずる。下駄の御かはりかと初も呆れる。人が善いだけに悟りが鈍く、『どなたのでございます。』『ちッ、外に出る人が有るかいツ。』『へえ。』『へえぢや無い。あたしのさ。』『へえ。』

しばらく考へて、『御下駄は、あの、ぼツくりに。』『否だよ、ぼツくりなんぞ有るかね。わるい方の肩掛どこへ遣ツたえ。此足袋三足の下の戸棚へ。』『それぢやぼツくり見たやうな。』『じれッたい、まだ下駄かえ。吾妻下駄だよ。』『へえへえ。吾妻下駄、好いのは夜道にもツたいなうムいますね。悪い方がいツそ、鼻緒は切れさうですけれど。』『鼻緒が切れてどうなるかい。』『今すげなほしましたら……。』『氣の長いことを。それどこぢや無い。旦那の後をつけるンだよ。』『かしこまりました。』『何だいツ。』『後の御酒をつけろと仰やるので。』『御酒ぢや無いツてば。旦那が何處へか入らしツたから是から捜しに出るンだよ。だから留守をよく。何てえ顏するの。』『いえ、そんならあの旦那が駈け落ちでも。』

じれ切ツて續いて出る。すぐ角の車夫に聞くと、あツちへ行ツたと所を指す。

『それまた芳原にちがひ無い。いまいましい。困ツたな。どうしたら斯う苦勞が絶えず……ああ弱ツた。何處へ行かうが、見のがすもンか。ふむ、あの向うに行くあの影……大丈夫もう。何しろ、どうも只ぢや無い。何か相手が何處か知らに、やツぱり芳原ぢや無いか知らん。口に出しちや言へないけれど、男の好いのも苦勞なもの。いツそ人には悪く見えろ。と言ツてそれぢや自慢にならず……』自分で自分にのろけて居た。

明二郎も人力車に乘ツたので、すぐに阿大も飛び乘ツた。『そら、あの人力車を見のがさずツ。』察しのとほり、果して芳原で、大門口をば入ツたが、おや變だ、行き拔いて、扨何處へ下りるかと思へば、佐淵何某といふ醫者の門、いきなり中へ入ツてしまツた。何さま是は明二郎がいつか世話になツたとか言ふ家で、今更疑念も晴れた、力も拔ける。飜然として悟るも早く、すぐに引ツかへさうと思ツたが、『待てしばし。ついでに小次奈さんとこへちよいと寄らう。』と[illegible]人力車を、自分も下りた。

小次奈といふのは前からの極の仲よしで梅見の時にも呼んで遣ツた。馴染みと思へば氣も勇んで、一寸した手土産などをととのへて、おとづれて見ると折りよく居た。

『おや、ま、姉……』と言ひかけてはツと爲ツて、『おほツ、御免なさいよ、ついまだ先の口ぐせが。』

わざととぼけて改まツて、『これは是は奥さま。』『否だよ、人。それでもよく御家だツたのねえ。今時分の時間だのに、めづらしいのね。』『なアに、御茶も何千斤碾き溜めたか。今御客と一寸濱田へ行ツて歸ツて來たところ。』『ぢや御約束が有るの。』『いゝえ。だからまア遊んで御出でなさいよ。』『本當なの。』『本當言ツて頂戴。で無いとあたし御氣の毒だから。』『好いのよ、そのかはり御祝儀は出す事ねえ。ほほほ。』『去年の大晦日まではまちがひ無く上げるよ』と傍から聞いても何さま仲よしと羨まれるほどな打ち解け方。

一家の細君でありながら此夜中に一人で來たのは變なことだと小次奈はすこぶる合點が行かず、『今日は御一人なの。どツかへ行ツたの』と

言へば、すこし考へて、『ああ、一人なの』と輕く對へた。
『けれど羨ましいのねえ、あたしも早くそんなに爲りたいわ。いつまで人の機嫌取ッてたッて詰まりや爲ない。それに姉さん――あッ堪忍してよ段段に直すから――なぞは前から如此いふ御安くない方と一所になッたンだもの。みんなが大變らやましがッてよ。』『御咄だけぢや大層御手がらだけれども、あんまり何うも。』『だッて迚も亭主に持つならば、人にも彼是言はれるやうなンで無くッちやア。さぞ仲が好からうと思ふわ。』『ところが始終喧嘩づくめ。』『うそッ。』『いゝえ、ほんとなの。』『ぢや癡話喧嘩だね。御馳走さま、早速御披露で。』『否だよ。須ちやん。氣樂言ッてるよ。』
阿達を一目じろりと見て、『何も御さしあひは無いの、御前が里に遣ッたあの子の咄をしてもよ。』『ああ好いとも。』
小次奈にはことし二ッに爲る女の子が有ッて、里に遣ッてあるとの事を此前阿大も聞いて居た。その目的で序に實は尋ねて來たので。
『あの子今達者なの。』『はア、大變丈夫に育つッて。』『何と物も相談だがね、あの子をあたしに御くれで無いか。さ、藪から棒ぢや分かるまいが、實は子供が無いので、いやアな思ひばかりして居るから。』
是から今夜のつまらぬ喧嘩の咄をすると、小次奈もしきりに身を入れて、さういふ譯なら、こちらでも外へ遣るでは無し、願ふところと一議に及ばず、却ッて言ひ出した方がびッくりするほど、譯も無く同意した。
『御前がさう早く分かッて御くれとは思はなかッた。あたしも餘處の子をもらふのぢや無し、どんなに、ま、樂しみだか。好いわ、今夜歸ッて、内の人を思ふさまびッくらさせて遣るから。』『あたしも實に嬉しいよ。是だから仲の好い同士はねえ。』
急に話をあらためて、『それぢや杉谷さんは今夜あの佐淵さんへ入らッしやッたの。今でも居るの。』『どうだか。何處かへしけ込んだかも知れない。』『此土地に御なじみでも又こさへたのかえ』と笑へば、『さうでも無ささうだが、何可なり尻ッぱやだから』と同じく笑ふ。
『何しろ、咄が付いて嬉しい。あたしあんまり遲くなるから歸らう。』『現金だね。そんなに家が苦勞になるの。』『是でも世帶持ちですよ。』『おやおや左樣でございましたかよッ、ほほほ。佐淵さんへ寄ッて行くの。』『いいえ、あんどくさいから。』『さう。』『ぢやね、あたし御いとまするよ。』
起ちかけてにはかにぷッと噴き出して、『あたい否だ、自分にかまけてさ。おッかさんは今日何處かへ行ッたの。』『東橋へ例の義太夫をさ。』『さう。よろしく、どうぞ。』『ぢやア、旦那へも宜しくね。』阿大は勇んで立ち歸ッた。
阿大が立ち去ッてやうやう二十分ほどしか過ぎぬ頃、拔き足で小次奈の門口にたちまち一人の男がたたずむ。ややしばらく、今はと心を決した體、格子戶がらり中へ入ッた。
『どなた』と内で小次奈の聲。答へず男はわが脫いだ下駄を直に手に持ッて中へ入ッて障子をぴしやり。
『おや』といふ小次奈の聲。『しッ』と云ふ男の聲。引きつづいて又小次奈の聲で、『早く二階へ入らッしやいよ。何、そーや。あら否だ、下駄をまア大事さうに。ええッ、穢、否よ、おッつけちや。』

《六》

十が九までは藝者屋の客間は隨分をかしな、俗くさい、しみッたれなもので、勿論それにしろ客間でもあるのには先結構な分だとか。小次

奈の二階すなはち特別の客間もやはり此流儀で、掛物はいつも一年おツとほしの山水に、蠟石の富士山の何かの置物で、花のかはりに舞玉を挿し、一圓五十錢ぐらゐの置時計が、螺旋を姉さんが無性で巻いてくれませんから此とほり御休みでございますと言ひさうな顔して澄まして居る。

栗側の火鉢を前にひかへて烟草吸ひながら一人でぼんやり洋燈と睨めくらして居たのが今來た客で、よくよく其顔を見ると、おや呆れた、やツぱり杉谷明二郎。

間も無く、小次奈が茶道具持ちながら上がツて來る。明二郎も顔見合はせて、唯まづ、にツこり。

『大變よ、あなた。あたしびツくらして。』『だから私も驚いたね。さツき何心無く、來て入らうと思ふと、阿大の下駄が有るぢや無いか。はてなと立ちどまツて聞くと、やツぱりそれだ。氣が付かずに飛び込まうものなら、そりや何うか切り抜けるけれども、何しろ面倒くさいからな。』『子供の事言ひ出された時あたし本當にどツきりしましたわ、てツきり是は勘づいて來た事だけれど、しツかりした人ゆゑ氣ぶりにも見せないンだらうと思ひましてね。けれどこツちも必死と我慢して澄まして居ましたの。大丈夫、氣が注きや爲ますまい。』『何大丈夫だ。當人が中中隅に置けないだけ又斯し好い。』『どうも憚りさま。どうしても奥さまですからね。』『だがさ。』『はアいはい。』『何だ、函根山め。』『何、この、最上川め。』『ははは。しかし全く。馬鹿が一番だましにくい。』『どうか御しづかに願ひます。』『おや御前に聞えたか。やれやれ。はて何時の間に耳を受けもどしたえ。利子はいくら溜まツたえ。』『みづからのやうな上つ方はそんな下様は知らないの。』

兎角するうち、酒の道具が來た、またここに獻酬がはじまツたが、實際二人とも話の方に自然かたむく。

『聞いたらう、大體今夜あツた話を。』『はア聞きましたよ。』『矢島といふものの世話で貰はうかと遣ツたが、一寸原案が通過しなかツたのさ。まさか、しかし、駈け抜けて御前の所へ來ようとは思はない。うまく自然に一杯食ツたて。御前と仲が好いといふので、好い氣ンなツてこツちの口的どほりあの子を家へ連れ込むとは何しろ乙ないたりさね。』ああ神ならぬ阿大の身、この祕密を知らぬとは。

『ですが、あたし、どうも本當は奥さんに濟まないのよ。後で知れるより最初いツその腐れ明かしちまツた方が、その方が好いでせう。』『そりやさうさ。ところが、奴、さう打ち明かして直よく分かツてくれると好いけれど、一體どうも勝氣過ぎるからね、そこの所がよツぽど考へ物なのさ。何、かくして置きたか無いけれどね。』『勝氣過ぎるのはあたしも知らなかありませんけれど、又それだけに俠氣のやうな處も有りますからね。どうせ、しまひには知れる事ですもの。ね、どうかさうして頂戴よ。あたしもまだ何と言ツて宜いか、あんまりだしぬけで考へても置かなかツたもんですから、先刻も如此いふ風に胡麻化しは胡麻化しましたものの、實は罪だと思ひましたわ。』『御前の言ふのは素より尤もだ。だが、まだ私は何ともたしかな分別が付かないよ。明かさなか無い。が、すこし樣子を見て居たい。わるいやうには爲ないから。』

まだ可なり押問答も有ツたが、歸する所明二郎は不思議に決斷が鈍くて小次奈の言葉どほりにする勇氣も無かツた。

一つは酒のいきほひから一旦腹も立ツたが、結句わが望みどほりの事實が殆ど成功した譯なので、明二郎の一旦膽も次第に熱が冷めて來たところへ、素直な小次奈が更に傍から口を添

へ、何にせよ今夜は歸ッた方が宜しいと勸めたので、如何にもと其氣に爲り、前後凡そ一時間、十時すこし過ぎた頃、出た時とは雲泥の上機嫌になッて立ちもどッた。阿大、是また知らぬが佛で、心に滿足が有るので機嫌が好い。さッき喧嘩したのは誰だッけと言ひさうな二人の體裁、初めはただ不思議に思ふ。その夜は其儘みな寢てしまッた。

あくる朝阿大から貰ひ子の事を切り出すと、素より待ち設けて居た事ゆゑ、明二郎も宜しく甘く跋を合せ、阿大に十分安心させたので、すぐに貰ひ受ける事に爲り、阿大みづから貰ひに出かけた。

はじめて其子を見た時、阿大も實は多少おどろいたと、言ふ譯は外でも無く、阿大から考へると、奇妙にも不思議にも顏だちが何處か明二郎に肖て居た。まことに可愛らしい女の子。こんな可愛らしいものを、なぜよく思ひ切ッてくれたらうと一寸變にも思ッたが、もと／＼夢にも疑はぬ事とて更に深く考へも爲ない。何しろ杉谷の家は天下泰平。

《七》

開きそこなッた花火の玉、なまじひ後れぱせに觸ッて怪我でもあッてはと所謂人間の臆病心から明二郎は勿論果ては小次奈までも例の曰くある子の素性をたうとう言ひ出しかねて仕舞ッて折りもあらばと唯待つばかりなのを、阿大は一向心つかず、又明二郎も濟まして上手に口を拭いて居るので小次奈との關係もさすがの阿大にすこしも知れない。

そのかはり小次奈も落籍けば化けの皮が剝げると云ふ隨分面倒くさい掛念が有るので、どうする事も爲らず、是非無く方向を立て直して姐樣で、抱へでも置いて暮らす事に明二郎とも相談極めた。今は唯卑怯にも二人が二人とも何と無くただ互ひの關係を阿大に分からぬやうとのみ勉める。一朝事が破裂すれば甚だまづい結果と爲る、その種をしきりに散く事のみを力める。

すると爰に突然案外な珍事を聞いたといふので、小次奈が人力車を阿大の家に飛ばせた。明二郎は社に出て阿大ばかりの處、『姉さん不思議な事が有るッて』と頭からまづびッくりさせた。

『あたしも本當に餘り妙でびッくりしたこと何とも角とも。斯うなのよ。』『へえ。一體の咄はまア何ういふの。心配事かえ。』『ぢや無い。それどころか、喜び事さ。』

心すこしくまづ安堵して、『そんなら聞くにも張り合ひが可い。早く御咄しよ。』『あいよ。今。後生だから、も一服』と宛も旨さうに一吸ひ吸ッてぽんとはたき、『ま、順々に咄すから。四五日前目見えして、それから家へ住み込んだ年よりの女の御婆さんの、じれッたい、奉公人が有るの。あら笑ひッこ無しよ、あわてたンだから。ことし四十八だッて。まだ年は大してぢや無いが、割りに老けて見えるの、もちろん白髮が早く生えたのを、うッとしがッて拔き拔きして、仕舞ひには毛がすッかり減ッちまッたンだッて。もう、だから白髮染めも駄目だわね。よく聞いて置く事さ。あたしなぞ、是で早く白髮になる質だから。』『好いぢや無いか、白髮の話なぞ。それより肝心なのが有るのだらう。』

じれて促せば、はッと氣が付き、『あッ、さうだ、わるかッた。あんまり咄が妙なので、何處から言ッて好いか知れやしない。何だッけ、その御婆さんの名。うんさうさう、あの阿幾ッてえの。知ッてて？』『知らないのね、そんな人は。へえ。何、それ。』『なんて勿體無いわ。ほんとに知らないの。』『知らないの、ちッとも。何、それ。』『勿體無いわ。』『だから、なぜさ。』

じれ込めば、却ッておどおどして、『困るね、ぢき怒ッて。あたしだッてついまごつかアね。』「知らないとなぜ勿體無いの。」「それがさ、本當に不思議なの。御前、姉さんのおッかさんだッて、それが、その御婆さんが。」

しばらく阿大も呆れて居たが、さすがに屹と心を靜めて、「そりや須ちやん違ッてる。」「何、ちがッてるとえ」と些と拍子拔けが一旦爲て、又盛りかへして、「そりや御前猶の事もッたい無いよ。」「だッて」と言ひかけるを、差しおさへて『全く何うもさうらしいンだもの。』『でもあたし知ッてるもの。おッかさんは經師屋の女房で、阿爲と言ッて、あたしよく覺えてるもの。』『あれさ、その御母さんぢや無い。』

いよいよ分からなくなッて、『その阿母さんで無いとえ。ぢや、どれなの。』「經師屋のおッかさんの其前の阿母さん。姉さんを經師屋へくれた、そのもとの阿母さん、ね、本當のさ」と聲するどく言ひ放した。

『本當のだッて?』急に阿大も身を入り込ませて、『あたしを產んだ本當の?』「だから、其本當のよ。」『本當に。』しばらくは無茶に本當の比べッこをした。

何も聞かぬさきから阿大の目は早涙一杯に爲ッて、『どうして其おッかさんが知れたらうか知らん。」「だから其御咄を御聞きなさいましよ。今いふ其阿幾といふ御婆さんが其人で、何も別にあたしン處だッて心あッてそんな事聞き出した譯ぢや無いンだけれど、不圖何の咄からか姉さんの咄が出て、何でも經師屋、湯島の是是いふところの經師屋とかへ貰はれた子ださうだとの咄を爲たら、其御婆さんがおやまアと言つただけで泣き出したの。」

言ふ身もさすが涙に爲ッて、紛らすためか又三四服立てつづけに烟草をくゆらせる。

『それから何うなの」と待ちかねて聞けば、切りに承知して點頭いて、『それから只事ぢや無いと思ッたから御婆さんに其泣く譯を聞いたところが、本當に思ひがけ無いぢや無いか、實はその女の實母でございますッてさ。經師屋を尋ねるまでにはいろいろ様様の事が有ッたので、たうとう經師屋の居る湯島へ往ッたところ、行き方知れずださうで、全くがッかりしちまッたンだと。もう是は此世で逢へる事は無いものとあきらめて、それには又不仕合はせで、人の竈を廻るやうな身の上だから、何でも天道まかせに爲ろといふ氣であちこちへ奉公に出て居るンだッて。』

阿大は答へるにさへ忍びかねて、情に迫られて其儘涙もろくうなづくばかり。同じ涙ながらも小次奈は話に實が入ッて、

「そこで大變な咄が有るの。あたしが御前を一とほりの仲で無いと言ッたので、明かしたンだけれど、あたしも全く驚いた。姉さん、御前ほんとにそんな事したの。』

阿大は何が無し、ぎよッとして、「どんな事をさ。」「どんなッて大變な、もし本當ならばさ。」一段聲を低くして、「生首をさ。」

驚いたの驚かないのと阿大の仰天比べやうも無い。見る間に色さへ蒼ざめて、脣と共に身を顫はせて、「ま、どうしてねえ、そんな事を御前が。ぢや其おッかさんだッたか知らん」とさア大變、最上の山の中が生首のまざまざした姿と共に眼前にあらはれた。

阿大の汗をぢッと見て、『咄すからよく御聞きよ。隱したッて駄目だから。あの最上とかいふ山路を夕方御前一人で庵室へ泊ッたッてねえ。その尼といふのがね、御前の實の阿父さんの情婦だッて。」「何、おとッさんの、え、ちよいと情婦だッて、おとッさんかえ。あたしの實のおとッさんかえ。そりや、ま、どうしたら宜からうか知ら。」凄いほどに蒼ざめた。

『ちえッ、知らなかツた、知らなかツた。それぢや、あたしが斬ツたあの首はツ。』『さうよ。姉さんの實のおとツさん。』『あの、あたしのおとツさん。まア、どうしたら。』『ね、こはい物ぢや無いか、段々知れて。その尼といふのがね、惚れた人もいよいよ首になツちまツたといふので、それから廻國修行する氣になり、あちこちと巡ツた末、この東京へ出て來たのは而も去年の夏だとさ。もともと御前のおツかさんとは知り合ツた仲だとかいふ事で、何處かでどう逢ツた事か、何でも久しぶりで逢ツて、是是との端を爲たンで、おツかさんも初めて御亭主の成り行きを知ツたンださうなのよ。』『どうして妾だツて事が分かツたの。』『姉さん夢中に爲ツちやいけないよ。人體からいくさきからで、阿母さんに打ち合はせて見ればどうしたツて思ひあたるわれ、しかも酒田へ東京から引かされて往ツたといふ事までもその尼てえのが知ツてるもの。ね、さうぢや無いか。』

阿大ただうなづく。

『ね、どうしたの。しツかり御爲な。え、ちよいと姉さんや、又また御前の身に爲ツちやさぞツくゝも爲だるらうさ。現在の親を、よしんば死んで居たにしろ……。』

阿大は俄に胴ぶるひ裂しく、くわッと目を見開いて、われとわが兩手をしばらく、力一杯に組みしめて、歯がみした。

『否だよ、ねえさん、しツかり御しな。よウ姉さん。さう逆上せたツて仕方が無い。知らないで爲たことなら、どうも是非が無いぢや無いか。』

溜息吐いて、『さうかねえ。』『さうかねえぢや無い。それしきの事、分からない御前でも無いと思へばこそ包まずあたしも言ふのにさ。御前にも似合はない、のぼせるのも大抵に御爲。よ、ねえさん。』

力を付けると案外やさしく、『あい』と答へて、さめざめと泣き出した。『須ちやん、誰にも言ツて御くれで無いよ。』『何だねつまらない事を。誰が御前言ふもンかね。』『さうかえ。ああ嬉しい』と常とはちがツて頗る埒無い。

語りつづけるのも好ましく無いが、言はずにしまふも却ツて筋が付かぬと考へて、小次奈は端の後をつづける。

『混み入ツた事は何しろおツかさんに逢ツてから聞くとして、其尼といふのね、姉さん、それからしばらく青山の方の寺とかに居たが、その内に病氣で御愛でたくなツたとさ。唯もうおツかさんは御前に一日逢ひさへすりや今すぐに死んでも好いなんて言ふくらゐだから、早く逢ツた方が、せめてもの罪ほろぼし、ね、孝行の言ひ譯と云ふものだわ。よ、しツかりしてさう御爲よ、わるい事は言はないから。』『須ちやん本當に深切にありがたうよ。まツたく御前の言ふとほり、もう斯う爲ツちや何うも仕方が無い。ただ惡かツたなら惡かツたで、後悔と本當に爲るばかりさ。それには又おツかさんをだツて、知らない内なら兎も角も、さうと知ツて一日だツて奉公なぞ爲せても置けないからね。』

さすがは阿大、案外分別も早く附いたと小次奈も腹から感心して、『さうさう、その氣に爲ツてくれないぢや。何しろそんなら阿母さんに早く逢ふのさね。早い方が好いよ、向うだツて待ち焦がれ切ツてるもの。』『ただあたし極まりが惡いとも何とも角ともね。』『それ厭ツてりや猶不孝だわ。逢へば却ツて罪も亡びる。弱い事御言ひで無いよ。』すこぶる手づよく奬めました。

『それぢや、いつ姉さん逢ふえ。可哀さうだからさ。成らば今日にも逢ツて貰ひたいけれどもね、それだけは些と待ツて御くれ。何、逢はないぢや無い、きッと逢ふにはちがひ無いが、

どうも一旦内の人にさう言はないではねえ。決して、わるいとは言やしないが、氣まづくさせるのも嫌だから。』『なるほど、それもさうさねえ。今日御かへりに爲ッたら御咄しな。』『咄すとも。』『きッとねえ。』

小次奈もとより眞實わが身の上の事のやうに飽くまでも深切に說きすゝめたので、言ひ甲斐も有ッたと喜んだ。明二郎の歸るまで待ッても居たいが、是非臨まなければ爲らぬ座敷の約束が有るからとて、咄が終ッて程も無く、いとまごひして立ちかへッた。後へ一人しよんぼり坐ッてつくづく考へればどうも堪らぬ。床展べさせて寢てしまッた。

ただごちやごちやの千思萬感、ことごとく針の穂さきを揃へて言ひあはせて抉りに來るやうで――ちッ、それこそ胸でも搔きむしッたら治るか知ら。ありありと目の底に浮ぶ首の相好。ああ知らぬとは言ひながら不孝慘忍の子が、物も有ッたもので、ただ色の戀のといふ果敢無い事から、見るも恐ろしい燒け火箸で抉ッたその耳の穴も、扨は一度はわが産聲をも聞かれたところ。血ばしッて見開いた憤怒の眼も、扨一度は慈愛を籠めてわが身を見たもの。と思ふと、身がまた總毛立つ。

覺めて思へば何さま色だの戀だのと、そのためにこそこんな大罪。身に受ける苛責は擦りむきぐらゐ、心に受ける苛責は骨もひしげる大苦惱。それを自分で自分が招いた。

山の中で尼が言ッた浮世ばなしを早くそれと深く感じたならばと今更くやしく、更に此ねぢくれた境界に陷ッたところで、いとど尼のねぢくれたやうな言葉も道理らしく聞えて來る。本當に娑婆はくだらない。と思ふと又胸がめりめりする。搔きむしりたい。つまり死にたい。

死にたい。が、殘る煩惱といふ天の邪鬼。いッそ同じ死ぬにしても、人に取られて否なものをむざむざ殘すのも殘念だ、成らば、もし迚も死ぬならば、命から二番目の――しかもそれから事も起ッた、明二郎をも連れて行きたい。

明二郎はまだ歸らず、十疊の寢室、その寢室までも眠るやうで、枕時計の音のみ冴えてきちきちと罪惡を數へるやうな。不圖見れば床の間ににたりと笑ッて何處から來たか一人の男。おやと熟く視る、死んだと思ッた卯吉の顏。あら、まッと思はず呼んで身をもがけば夜具までがのしかゝッて、身動きさせぬと押さへ付ける。しばらく其儘ぢッとしてわれに返ッてよく見れば、何の人、さうであッた、床は寒山拾得の幅。

いつかとろとろしたと見え、不圖目を覺ませば枕許に此度は間ちがひの無い明二郎がしよんぼりと坐ッて居た。ま、ちッとも存じませんでと起きなほりさうにする所を、まア好いからと差し止めて、『大層顏色がわるいな。氣分でもわるいのか。』

やさしく言はれて九腸千切れ、ただうつむいてさめざめと泣く。

『變だな。どうしたのだ。これさ、どうしたンだよ。』やさしく肩を叩かれる、その手が怨み、命を削る。『留守に何が有ッたのかえ。そんなに泣くほど、こりや只ぢや無い。』

顏見れば、よし自分が死ぬにしろ、冥途の連れには何でもむざむざ。張りつめた氣も弛んで、一心にいとしい可愛いと思ふだけ、わが身の愉快は無駄にしても、その人には樂しく暮らさせたい。

むらむらと湧く決斷、われながら夢で口を利く心もちで、小次奈に聞いただけを咄すと明二郎も顏色かはッた。

思はず身體を入り込ませて、『何しろそれは弱ッたな。阿母さんに逢へるといふのは實に願ッても無い事だから、引き取ッて世話すると爲ようが、さア其處だて、首の一件で變に氣まづ

くは無いか知らん。』『そりや自分だッて、どんなに嬉しいか知れませんから氣まづいなんて事別に。』『無けりや宜い。明日にも引き取るさ。』死ぬの活きるのといふ決心のいた腹を据ゑたやうではあッたが、扨顔を見れば又迷ッて、どう決斷の爲ようも無い。夫の顔をぢッと見て、口に言ふだけが涙に爲る。

『泣くのも無理は無いさ、現在の親をひどい事に爲たンだから。けれどそりや知らないンだからね。そんな事思ひつめると、それこそ神經に感じるよ。え、馬鹿な。その氣になッて阿母さんに泣くだけの孝行すりや取ッて返しが付かなか無い。くだらない事思はないで兎も角も明日阿母さんを呼んで來るさ。さ、寐よう。くよくよ思ッてたッて馬鹿馬鹿しいよ。さうさ、只ぢや寢られまいな。』

つと起ッて行ッて、何を持ッて來るかと思へば、一本の白葡萄酒。自分が一杯引ッかけて、さア御前も――ああこの深切。どうしても死ねないわ。

いつか朝と爲ッて、目が覺めて昨日からの事を思ふと、たちまち精神は中有をさまよひ歩く鹽梅で、食事も咽喉へ通らない。實母といふのに逢ふ嬉しさは朝に爲ッて妙に一入加はッたやうで、後で成るべく早く行ッて直にと御連れ申して來いと、胸廣く明二郎に言はれる時は梅雨晴れて朝日を見る氣持であッた。今日は手づから水をも汲み、心ばかりを假りに佛壇に供へて合掌する手にぼたりと滴る因果の一滴、板しばりにされたやうな胸の有邪無邪。

明二郎を機嫌よく送り出して、すぐに小次奈の家へと出掛けたが、今日は昨夜とは打ッて變り、初に向ッてじれもせず、ふさぎ切ッて出て行ッた。逢うたらば何う言はう斯く言はうと思案を纏めるとも無く、毀すとも無く、道に何が有ッてもほとほと見えず、唯氣が拔けて馳せる内にいつか人力車は行きついた。氣のせゐか、小次奈の家に敷居が高くてならぬ。

我慢して兎も角入る。一刹那、非常に力を含めた目で家中を見まはしたが、その人らしい姿も無い。昨夜の挨拶そこそこにして、『その阿母さんてえのは』といきなり直に問ひかけると、『居るよ、ちやんと待ッて。』『さう何處に。』『二階にさ。もうちやんと御客さまにしてあるよ。』もうはや是で泣かせられた。

小次奈に附いて夢を辿ッて、二階へ上がッた一瞬間、母も、阿大もたがひに一目見合ッたばかり、寒氣がするまでの胴ぶるひ。小次奈さへ、『さア姉さん、もしおッかさん』と埒無く言ッたのが關の山。二人は咽び入ッてしまッた。

感謝あまる手わなわな、母は小次奈の方に向ッて、『死……死んでもこのッ』と言ッたぎり、もはや泣き聲飲み切れない。小次奈も無言で共に泣く。

阿大はたちまち突と寄ッて、右に小次奈の手を抱ると思ふ間、左に母の手を抱ッて、ひしげるほどに握りしめて、ただわが顏へ押し當てた。

『おッかさん、鬼見たやうな子で……さぞま憎いと……どうぞ其處だけは……ちッ、どうぞ。』又ひしげるほど握りしめた。

『何の何の、にくいなぞとッ……さうして下すッたればこそ……親子名のりあふ手蔓も出來……まッたくおとッさんの引き合はせッ。うれしくッて泣かずにはッ。ええも、こんな立派な子。子と云ふのもあたしや勿體無い。』

何さま母子名のりの手蔓もそれ故にこそ出來た譯、阿大の胸も鎖した雲霧この一言で全く晴れ、そのまま引き取ッて立ち歸る兩人の氣の浮き方。

(明治二十九年)

年譜

略傳

明治元年七月八日、神田區柳町に生る。本名は武太郎、美妙又は美妙齋のほか、初め樵耕蛙船・飛影等と號せしことあり。父は吉雄、南部藩士にして維新後鳥取長野等の警察部長に歷任し、後武德會に關係して京都に住み、明治四十四年に歿す。母はよし、江戸醫海老名玄澤の女にして商、海保家に養はれ、山田家に嫁して武太郎を舉げ、後故ありて別居、武太郎を伴なひて養母海保ますと居る。

明治七年、私立烏森學校入學、此頃芝區神明町に在住、尾崎德太郎(紅葉)と相知る。八年公立巴學校轉校、十二年秋修了、十三年一月府立第二中學校入學、十二歲頃より幼年便覽に便つて詩を學び、明治十六年頃より小倉磯涯等と小田源藏に添削を乞ひ、傍ら漢文を石川鴻齋に學ぶ。和歌は家藏の和書及び伯父山田吉就(神職)に學ぶ。

明治十七年豫備門入學、十八年二月紅葉、思案、九華と硯友社結社、機關雜誌「我樂多文庫」發刊、但し最初は廻覽雜誌。明治十九年豫備門退學、二十年七月成美社に入り「以良都女」を編輯す。二十一年秋雜誌「都の花」主筆となり二十三年四月、退く。これより前二十三年二月より改進新聞社に入社、二十四、二十五年は「國民新聞」紙上に、小說、詩等を發表、二十六年迄に日本大辭書、新式節用辭典、人名辭典等を著す。二十七年頃は「文藝俱樂部」に、又「世界の日本」等に諸作を發表す。二十八年現未亡人と婚す。三十二年やまと新聞社に數ケ月在社、當時本鄉區東片町より王子村に移り、名主の瀧の邊に王子義塾を開きしことあり、三十四五年頃は、フィリッピン獨立運動の援助として、「アギナルド」「桃色絹」等三四の著作あり。三十四年九月、大酒の爲腦充血にて卒倒、後絕對禁酒す。當時飛鳥山下に住居。三十六年頃より「やまと新聞」に時々作品を發表し、歷史小說等は主として、石橋思案氏主筆の「文藝俱樂部」、及び嵩山堂書肆より發表す。四十年より大辭典刊行に着手し、途中一時書肆の都合にて中止の厄にあひしも、村上浪六氏の調停にて續行、發行は四十四年。其間、歷史小說、諷刺文學にも先鞭をつけ、「妙な水」「妙な依賴」等の著作あり。四十二年、本鄉區上富士前町に移轉、四十三年六月頸部に腫物を生じ後耳下腺癌腫と決定、秋十月二十四日歿す。府下西巢鴨染井に葬る、享年四十三歲。

著作年表

明治十八年 竪琴草紙(我樂多文庫)。

明治十九年 新體詞華少年姿。嘲戒小說天狗(我樂多文庫)。

明治二十年 質屋の庫開き(我樂多文庫)。麗金剛石。風琴調一節 未完(以良都女)。ふくさ包み(同)。武藏野(讀賣新聞)。花の茨茨の花(我樂多文庫)。

明治二十一年 仇を思(以良都女)。言文一致論概略(學海指針)。情詩人 未完(我樂多文庫)。正本はむれッと 未完(以良都女)。さすがに雙紙(少年雜誌)。夏木立(篇「籠の鶯」「嫁入」、柿山伏、玉の花、仇を思、武藏野」)。はな車(都の花)。ぬれごろも(同篇)。

明治二十二年 金扣鈕一粒 未完(都の花)。胡蝶(國民之友)。枕草子解釋(以良都女)。國の花(都の花)。源氏物語桐壺の一部解釋(以良都女)。この子(都の花)。長久菖蒲草(同)。ゑるのん物語(少年雜誌)。わいるどむゥあ

ほオる(都の花)。いちご姫(同)。鏡花影(國のとも)。
日本俗語文法論(國民之友)。

明治二十三年　明治文壇叢話(國民新聞)。人よし男(同)。日本韻文に對する放任主義。日本韻文論(國民之友)。嫁入仕度教師三昧(新作十二番)。葛の裏葉(歌舞伎新報)。賤だあし(都の花)。

明治二十四年　大恥辱(未完)(都の花)。やたら縞(他に、[illegible])。裏面冠者(文學[illegible])。南の日くらし(少年文學)。雪折竹、金の日記(國民新聞)。みゝずばれ(同)。千里駿馬之助(同)。白玉蘭。丸二ツ引新太平記。盗賊秘事。兜菊(都の花)。園の二葉。

明治二十五年　椰門續興(國民新聞)。日本家室内装飾法。無名姫(都の花)。

明治二十六年　村上義光錦旗風(他に、[illegible])。

明治二十七年　みゝずばれ(他に、[illegible])。梨園の内幕(早稲田文學)。光源氏寢覺睦言(春陽文庫)。

明治二十八年　阿千代(文藝倶樂部)。夜帯曲(同)。[illegible]。夢幻日記([illegible])。鏡山[illegible](文藝倶樂部)。俳樂師園源助([illegible])。

明治二十九年　峯の殘月(文藝倶樂部)。若白髪(同)。古根([illegible])。しつかり持て(文藝倶樂部)。後道殘月(同)。しじみうり(太陽)。負傷兵(世界の日本)。里見元勝(文藝倶樂部)。いのち首(同)。元老排斥(世界の日本)。武者魂(他に、[illegible])。

明治三十年　閻魔地藏(國民之友)。魔鬼天女(やまと新聞)。たかせ川(文藝倶樂部)。白日鬼([illegible])。俠男兒(他に、天野屋利兵衛、[illegible])。好義人(新小説)。惡の善(文藝倶樂部)。可憐狂([illegible])。孫右衛門(文藝倶樂部)。馬丁仙吉(太陽)。小松直茂([illegible])。鳴呼廣内號(新小説)。辭虎([illegible])。ばけぐすり(新小説)。若葉の露(文藝倶樂部)。絶絃琴(國民之友)。日本淨瑠璃叢書。夕紅葉(やまと新聞)。仁不仁(世界の日本)。

明治三十一年　遂耶悟乎(太陽)。できごゝろ(文藝倶樂部)。磯千鳥(同)。妻琴(太陽)。

明治三十二年　をさなき昔(中學世界)。帝國海軍(太陽)。英文活法。美人詞襲衣香扇影。道南顛風([illegible])。毒筆新聞([illegible])。

明治三十三年　斷腸錄。恩か仇([illegible])。三千號の配達夫(國民新聞)。御笑ひ草([illegible])。第二道南顛風([illegible])。義氣の義二(少年世界)。決闘(太陽)。臣民の情([illegible])。陛下は神(同)。子だから(同)。刺客(同)。無聊無頼(同)。城内の公使(同)。排外熱出(同)。仇か情([illegible])。王光南下(同)。死刑囚の懺悔(太陽)。

明治三十四年　わか妻子(國民新聞)。闇の岩むろ(未完)(同)。蜘蛛の巣(同)。書文・致文例([illegible])。

明治三十五年　女裝の探偵(下)。淺色絹。あぎなるど(後篇)。人鬼。新體詩歌作法。新博多小女郎浪枕。一刹那(文藝界)。旗か命か、ゐねむり、竹の音、露人の夜(日出國新聞)。

明治三十六年　兎(日出國新聞)。漁隊の遠征。色か香か、いづれの樂か(日出國新聞)。令忠精(同)。羽ぬけ鳥(同)。血の涙。さびかたな(未完)(同)。

明治三十七年　性空上人(文藝倶樂部)。濱松城(日出國新聞)。熊谷直實(同)。露の命(文藝界)。犬博士(文藝倶樂部)。劍彈餘響(やまと新聞)。

明治三十八年　勢至丸(文藝倶樂部)。破壞主義(同)。

明治三十九年　四郎高綱(文藝倶樂部)。

明治四十年　姫百合(文藝倶樂部)。

明治四十一年　三郎經高(文藝倶樂部)。

明治四十二年　三郎盛綱(文藝倶樂部)。實盛の一生面([illegible])。小室相局(新小説)。六郎景澄(文藝倶樂部)。滑稽妙な術。

明治四十三年　妙な水。へそくり(文藝倶樂部)。一滴露(同)。平重衡(同)。二人女。妙な夫婦。妙な依頼。染小袖(文藝倶樂部)。平清盛。

明治四十四年　太郎定綱([illegible])。

發行年月未詳のもの　猿と鷺鳥、血染の手帛。
編纂辭書　帝國以呂波實用大全、佛教格言集、熟語大辭典、世界名著辭典、大辭典、新式實用辭典、日本十辭典、人名辭典、地名全辭書、世界歷史年表

昭和六年十月十六日印刷
昭和六年十月二十日發行

現代日本文學全集 第五十三篇

著者 小杉天外
山田美妙

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

株式會社秀英舎印刷

改造社